

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

4月号



4 - APRIL • 1967

奇譚クラブ

昭和四十二年四月号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



4月号 ¥ 350

緊縛美態代表作品一二〇葉

アルバム△美しき縛しめ▽第十一集 完成！

一部一〇〇〇円（千共）

略号〔美11〕

子。山路梨花悠紀子。熱海容子。田中芳代。若原明子。春丘リル。益田屋
 出演モノ。伊吹真佐子。前妙子。加茂良子。川辺砂登り。櫻井葉子。東浦ひ
 かる。梨花悠紀子。須川令子。田原美佐。四方清美。川辺砂登り。櫻井葉子。東浦ひ
 花坂道子。村田那美子。荻千恵子。田原美佐。四方清美。川辺砂登り。櫻井葉子。東浦ひ
 竹野ひろ子。関谷富佐子。新井マリ子。五月井紀子。木村洋子。愛川悦子。山端
 多奈子。美木乃々子。館典子。長野良子。五月井紀子。木村洋子。愛川悦子。山端
 清子。厚狭春江。雲井久子。津川路子。大井小夜子。柳初子。杉美美

○美しき縛しめ第十一集「縛られた美女」一二〇態内容

2120191817161514131211109 8 7 6 5 4 3 2 1

上神高首縛布筆全引麗股拷狼後口展黒威初な立
半妙々校ら団窠裸身間問ぐ手し示縄大々が樹
身なとめれにの猪回さ痛く縛柱つ縛づはなきしにに
五縛負裸く理に吊れるを見を端し強た素乳髪は縛り
つし身程過に兩り女入浴げま身調縛縛り縛り縛り
にくの後さを首で悶レ股間イ奴れ奴れ奴れ奴れ奴れ
びる身縛する吊ゆイ縛縛縛縛縛縛縛縛縛縛縛縛縛縛
木長水山竹須伊川前花川伊四関愛津松桜加梨
村野本路野川吹端坂坂端吹方谷川川川井井井井井

424140393837363534333231302928272625242322

哀愁の女囚前手縛の美(柳) 汚瀧を繋ぎ美体を誇る(桜井) 豊満な肌を切る依を縛る(益田) 柔肌をくびける体束る(楠浦) 柔かき美肌にかかると縋る(益田) 柔毛の間美肌陽の光を纏る(絹川) 荒毛の間に美肌陽の光を纏る(絹川) 魚甲縛り美肌を強熱縛る(梨谷) 両手吊り片足挙げ縛る(桜井) 両手吊り片足挙げ縛る(川端) 双丘に喰入る股間縛る(梨花) 背後の刺青股交縛る(須川) 背裸の刺青股交縛る(須川) 遊園地に身をゆだねる(須川) 黒縄に身をゆだねる(須川) 美投げだした縛る(加茂) 技投げだした縛る(加茂) 猿ぐつみに映えたる菱縄脚(竹原) 高々と挙げた後手縛る(田中) 水に濡れた後手縛る(田中) 可憐な目つきで後手縛る(花本)

8180797877767574737271706968 6766656463 6261605958 5756555453 5251504948 4746454443

雨ガジガラメの女体
豊中の庭で両手吊り
繩目に差す猿轡の目
麗身索ク責めの緊縛
長身の立姿は美肌の上
黒皮猿のつうめく縋
荒縄の全裸股間縛情
首身荷造り石抱きで晒
前手縛ルグリ巻きて喘
美肌に菱網が美体を晒
刺目柱痛にもかく足指
剥けた乳服後手縛り強調
破らぬ口もむせかえる
猿轡の口もむせかえる
淫女の裸身に差ける細
泥子の荒縄強烈縛る細
椅子開股悶悦する女体
端麗な股間縛り白厳し
黒縄に股間縛りと白厳し
樹間に晒さる緊縛裸身
フルッ縛る全身縛り
真白な肌膚をなめる巻縛
全裸を肌をくびる巻縛
縛りマニアの羞らしい

川端 水本 厚狹 大塚 若原 山村 水田 絹川 絹川 萩 関谷 大塚 熱海 木村 長野 須川 梨花 絹川 玉田 熱海 田原 絹川 梨花 山村 花坂 新井 大塚 須川 長野 東浦 竹野 (愛川) 川辺

120119118117116115114113112111110109108107106105104103102101100999897969594939291908988878685848382

腎部もち上げても出なく
 美しき脚線を投げ出す
 破れれたシミに縛り
 樹間に全裸身を縮める
 逆エビ責めていたぶる
 瘦身に痛ましく黒縄縛
 組目の肌をボイした指
 片足に吊るに反る足指
 拷問に責めぬかれた末
 恋人との緊縛のプレイ
 緊縛折りの縛の痛さ
 木馬責めにの撮影風景
 カニ縛りにうめく青雲
 豊かな縛りにまわ若原
 陽手降り裸身を誇る
 後腸器の痛く屋上へ
 浣腸器の痛く屋上へ
 美しき顔の全裸女体
 赤い腰巻の似合う縛り
 Sマニシ目は男を悩殺
 ナマシニア服縛り情
 セーラー服縛り情
 マゾ女股間縛り情
 全裸みで縛られる女
 泥手雨の中で吊る女
 両手つわをさる美女
 猿ぐつわをさる美女
 白越中にて裸身しり
 股学生服で全裸身しり
 女々縛り緊縛身しり
 初々縛り緊縛身しり
 強烈縛り緊縛身しり
 エビ縛り緊縛身しり
 始はめ縛り緊縛身しり
 絶妙の乙女を美し鼻責
 春花長閑美西花梨大
 丘本原谷木方坂花塚
 海館川花田浦

アルバム「美しき縛しめ」第十集完成

責められる美女百態

一部 一〇〇〇円(下共) 略号△美10▽

特アート紙 グラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

【出演三三】○一宮百合子○東浦ひかる○美木乃々子
○増田みゆき○木村洋子○大塚啓子○絹川文代○山原清子
○長野良子○玉田美佐子の十名の美女。

ピチピチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に厳しく掛った細目。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり。百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて、十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くのです。特製アート紙に対する極鮮明なグラビア印刷の女体緊縛のフオトを、心よりお楽しみ下さい。

◎美しき縛しめ「第十集」責められる美女百態内容◎

全身緊縛首攻めの場面	(東浦)	縄でくびる豊麗な女身	(東浦)	足首で引回される女	(東浦)	ムチ打ちに悶えぬく少女羞らひの緊縛裸像	(一宮)	剥がされたパンティ	(一宮)	豊臀を無理に晒される	(美木)	Pタイルに転がされる	(美木)	逆さ吊りの緊縛女体	(増田)	インナーベルト縛り	(増田)	M女性の陶酔の表情	(木村)	瘦身は縄にくびれる	(木村)	脚線美も露わな女体	(美木)	松樹に晒された奴隷	(木村)	立木の枝から逆さ吊り	(木村)
------------	------	------------	------	-----------	------	---------------------	------	-----------	------	------------	------	------------	------	-----------	------	-----------	------	-----------	------	-----------	------	-----------	------	-----------	------	------------	------

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

色づいた乳首を晒す（大塚全裸後手縛り豊満女体（玉田二の腕に喰い込む紐（木村鏡に写す縛られた裸身（大塚縄目と猿轡にあえぐ（東浦全裸後手足首連繋縛り（玉田長髪をアップにして（長野華麗な刺青裸身強縛り（山原後手縛りに空ろな表情（木村柔肌に喰い込む縄目（山原後手網縛りの美女裸体（絹川諦観の若々しい裸身（一宮片足吊りにあう女体（大塚後手吊りに喘ぐ全裸身（東浦緑の柱に晒された女（玉田

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女ドレイの品定め（大塚）
強烈股間縛りに泣く女（東浦）
初めての縛りに恥じる（一宮）
隣室に見た驚異の縛り（大塚）
乳房の巨大なる縛り（山原）
真紅の腰巻をモデル嬢（玉田）
驚つかみにされた黒髪（東浦）
麻縄縛りにのびた女体（大塚）
開孔器による鼻責め（大塚）
エビ責めに耐えぬく女（東浦）
豊胸を黒帯に托して（長野）
雪白の柔肌を晒す縄目（大塚）
人身御供の緊縛全裸像（大塚）
股間縛りに投げ出す脚（一宮）
エビ縛りに苦悶の表情（大塚）
伸びやかな二本の脚線（一宮）
滑車後手吊りの準備（大塚）
ゆゆきの素顔と緊縛像（増田）
竹に拘束された洋子嬢（木村）
離家の縁に縛られる（大塚）
輝く白肌を晒す全裸身（絹川）
身動きできぬ後手縛り（大塚）
腰巻を剥ぎとられる（木村）
大の字逆さ吊り女体（増田）
美しい裸身からむ縄（美木）
若肌のすてを晒して（一宮）
浴室股間足首縛り（東浦）
後室の荒縄縛りにあう（山原）
股間縛りと腰縄縛り（木村）
緑蔭の庭を背景にして（大塚）
立木で両手吊りにあう（大塚）
縄の反応とその表情（一宮）
強烈縛りでなる弓反り（大塚）
麻縄は豊かな肌を抉る（東浦）

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

恍惚境のMの表情 (山原)
胡坐縛りでもたえる (絹川)
股間縛り正面で立つ (大塚)
ムチ打ちを願うポーズ (木村)
伸びやかな女体の細目 (一宮)
責めぬかれた股間縛り (一宮)
責め手滑車吊りにあう女 (大塚)
縛られて歩かされる (大塚)
亀甲縛りと股間縛り (美木)
正坐で放置する縛体 (木村)
夫から鼻責めを受ける (増田)
可愛い小悪魔の表情 (一宮)
徐々に吊られる片足 (大塚)
強烈縛りで受ける鼻責 (美木)
均斉のとれた美麗縛体 (大塚)
室の隅に逃げた女奴隷 (美木)
首繩股間縛猿轡の表情 (美木)
可愛い裸身の鑑賞 (木村)
セーラー服の後手縛り (大塚)
後手股間縛りで引回し (一宮)
海老責めで耐え忍ぶ (木村)
縄でくびった柔肌地獄 (一宮)
エビ縛りの苦悶と戦う (大塚)
台上に晒す緊縛裸身 (山原)
火あぶりにあう女囚 (大塚)
アグラ縛りで頑張る女 (大塚)
がっちりした後手縛りで (東浦)
柱縛りでもがく清子 (山原)
石橋の上に放置される (玉田)
ムチ打ちに悶える女体 (大塚)
猿轡を三面鏡に映す (大塚)
庭園を引き回される (山原)
首繩にあえぐ哀婉表情 (大塚)
太繩が柔肌をくびる (大塚)
大の字荒縄ハリツケ (山原)

サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊 花と蛇

小説・絵画

特集号

直接お申込みをう 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」 テーマ画集 十六葉

1、2、3、4、5、6、7、8、
逆エビ縛りて弄ばれる女体
水を顔面に浴びせかける男
汚水と薬品の洗禮を受ける女
いぢく洗腸を施される女
洗腸とオシメカバの羞恥器
ガラス製一〇〇Cの洗腸器
強烈なイルリガートルの洗腸器

9、10、11、12、13、14、15、16、
尻打ちの痛さに泣き喚く女体
片足滑車に狂いまわる女体
女体滑車に汗を流す女体
お灸責めに汗を流す女体
トイレで排泄の強要される女体
後手縛りで宙ぶらりんの女体
美女の背の中を黒い女体
グリンセリンの洗腸液を注ぐ女体

団鬼六作 長篇小説 花と蛇 内容見出し一覧

第一章 密室の秘密ショー

狼の批評会

第二章 脱走の失敗

望み破れて

第三章 悪魔と鬼女の饗宴

悪魔の二次会

第四章 鬼女の計画 地獄屋敷へ新顔

美津子のいいわけ

第五章 美少年と美少女

折檻部屋

毒牙は迫る

第六章 正気ついた小夜子

眼の保養

第七章 小夜子の受難

女体の悲しさ
美しいニューフェイス

第八章 美女と木馬

毒婦の恋

第九章 嵐に立つ小夜子

悪魔の相談
恐ろしい計画

第十章 静子夫人の慟哭

第十一章 鬼女の嬌声

地獄の花嫁

第十二章 美しき敗北者

第十三章 白い指

第十四章 恐ろしい仕事

第十五章 全身美容

第十六章 悪魔の寝室

第十七章 猫とねずみ

第十八章 侵入者

第十九章 風前の灯

再教育

京子の号泣

勝利に酔う悪魔

第十六章 落花無残の修羅場

白いコンビ

第十七章 開幕準備

嵐のあと

第十八章 二人の花形

美女合戦

第十九章 変身と唇談

流血の檻

第二十章 猿舞台の衣裳

第二十一章 酔い難去って

身体検査

第二十二章 嵐に立つ令嬢

美女対峙

悲しき説得

第二十三章 調教開始

修羅図

失心する小夜子

悪魔の部屋

第二十四章 復讐の生贄

汚辱に泣く令嬢

小夜子の屈服



昭和四十二年四月号

〈第21巻第4号・通刊第226号〉

奇譚クラブ 4月号 目次

◆奇クサロン

ストリップショー「拷問」……おもだかしの(9) ○サロンの我記(第三十回) 花原電子月ギメ奴隷募集……特選M画集「フルネルソン」(11) ○マニヤのメモ(11) なたわごと「ハ3月号感想」……花原電子A号ドレイ(11) ○マニヤの表情(11) 画集「銅育」……室井重砂の「晩秋のフット」(12) ○妊娠八カ月の表情(11) 新田英雄「編集部」……S画「モロタ」(15) ○夫のフット(12) ○妊娠八カ月の表情(11) より「綾研二」(17) ○S画「モロタ」(15) ○夫のフット(12) ○妊娠八カ月の表情(11) と「オムツ」の味……海原良三「20」○僕と恵子(16) ○雪中生(16) ○刺青(16) 亜砂路「21」○涙はらはら……西川緑「19」○僕と恵子(16) ○雪中生(16) ○刺青(16) 拷問「23」○サロンの展望台「垂涎のM場面」……目出鯛三(24) ○新東宝配給「情炎の私刑」……春風春太郎(24)

△本文△

カメラ・ルポ △魔子の巻△

「この女(ひと)」……山本 一章……(26)

煉獄……黒井 珍平……(32)

小説「秘密パティ」……津治 良一……(34)

「孤独の緊縛」……牧 洋子……(44)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品

「あき子」登場……井風呂秋於……(46)

△告白△ マン年代記……姫島 痴人……(58)

浣腸実験要員誕生……立川 令子……(62)

△フォト・ストーリー△ 私の「SM日記」……小竹 一浩……(68)

縄のある蜜月「初夜」……千草 忠夫……(73)

稿談 性風俗資料入門……斎藤 夜居……(80)

特殊雑誌、書誌・書目おぼえ書 ○文芸市場と梅原北明

○変態資料の人々

△女相撲物語△

「花の女斗美たち」(12)……奮斗士好太……(102)

連載サディズム小説 △第二十八章女囚ミシュリーヌ(八)△

心傷たむ遍歴……西条 操……(112)

妖霊城「最終回」……黒淵賀集子……(124)

国際秘密結社「ISSSL」(後篇)……河津 安春……(138)

SMカメラ・ハント……△水野弘・香代夫妻の巻△

「燃ゆる想いにあけぬるを」……辻村 隆……(160)

浣腸随想 狭き門……秋根登志雄……(178)

△告白△ 美しき足を求めて……比左良 守……(188)

連載小説 花と蛇 △続篇第二十九回△

痴人の糧 △雪国への旅(1)△

その声かなし「切腹研究夜話」……山本 一章……(194)

△告白△ 初縛られの記……中康 弘通……(216)

臨月腹を裂く……中河 恵子……(220)

サジスチック・ストーリー……高野 原美……(227)

秘め事……町 陽一……(231)

奇譚雑談 夜の徒然草……中宮 栄……(246)

読者通信……編集部選……(252)

天然色写真最近作

双胎臨月蛙腹写真
大手札六枚一組 略号「れや」 二〇〇〇円

双胎臨月腹強烈縛
大手札六枚一組 略号「れゆ」 二〇〇〇円

臨月腹裸身の媚態
大手札六枚一組 略号「れえ」 二〇〇〇円

股間縛り開股姿態
大手札三枚一組 略号「れよ」 一〇〇〇円

羞らしいの股間縛り
大手札三枚一組 略号「れに」 一〇〇〇円

黒縄縦縛りの媚態
大手札三枚一組 略号「れぬ」 一〇〇〇円

立縛りにあう裸女
大手札三枚一組 略号「れね」 一〇〇〇円

開股された股間縛
大手札三枚一組 略号「れの」 一〇〇〇円

豆絞りの猿ぐつわ
大手札三枚一組 略号「れむ」 一〇〇〇円

木村 洋子

〔新人モデル新版分譲品〕

黒髪をいたぶる手
大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇〇円

菱縄縛りにあえぐ
大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇〇円

縄目にもだえる女
大手札四枚一組 略号「そあ」 五〇〇〇円

強烈後手縛の狂態
大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇〇円

牝犬と奴隷の醜態
大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇〇円

全裸二つ折り縛り
大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇〇円

菱縄しばりの表情
大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇〇円

八の字開股羞恥責
大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇〇円

菱縄の全裸を晒す
大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇〇円

中河 恵子

〔今月の新版分譲品案内〕

開股竹棒羞恥責め
大手札三枚一組 略号「ねる」 四〇〇〇円

逆エビ責手足縛り
大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇〇円

竹棒開股強烈縛り
大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇〇円

鼻責めと鼻孔大写
大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇〇円

首縄後手強烈縛り
大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇〇円

逆エビに痛める手
大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇〇円

全裸開股膝頭縛り
大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇〇円

菱縄縛り竹棒責め
大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇〇円

柔肌に喰込む縄目
大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇〇円

豊満な全裸を弄る
大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇〇円

いやが上にも両手首は挙がる。
中河 恵子 略号「ねさ」 四〇〇〇円

いきり八の字に開けた後手の縄を思
高橋 小春 略号「ねさ」 四〇〇〇円

頭に通り縛り上げ仰向けに脚の膝
せば両足ははっくりと開く。 中河 恵子 略号「ねさ」 四〇〇〇円

縛り身動きも出来ない位、きつ
胸から胴へかけ規則正しい菱
ちりと締めつけられた柔肌と縄
の間に竹の棒が突っ込まれる。 中河 恵子 略号「ねき」 四〇〇〇円

柔肌に喰込む縄目
中河 恵子 略号「ねく」 四〇〇〇円

とぼけてりと肉のついた柔肌にぐ
よじらせる全裸の被虐ポーズ。 大島 照代 略号「ねす」 四〇〇〇円

豊満な全裸を弄る
大島 照代 略号「ねせ」 四〇〇〇円

逆エビに痛める手
大島 照代 略号「ねそ」 四〇〇〇円

全裸開股膝頭縛り
大島 照代 略号「ねさ」 四〇〇〇円

菱縄縛り竹棒責め
大島 照代 略号「ねし」 四〇〇〇円

た縄尻で首縄を掛けて締めれば、
後手高小手に厳しく縛り上げ
中河 恵子 略号「ねこ」 四〇〇〇円



東京のド真中、東京駅から僅か数百米の所にあるカジバシ座で、
「拷問」という題のストリップシ
ョーが一月十日から二十四日まで
行われましたので、早速見物にい
ってまいりました。

脚本作家や出演者は知らない人ばかりでしたが名和弓雄監修と書
いてありました。しかし、いずれ
にしても、お色気ショーの事です
から、私が期待する様なものでな
いことだけは確かなので、始めか
らそのつもりで見物しました。

お話は吉利支丹物で、四、五人
の女囚に宣教師をからませ、与力
と名乗る役人や牢番などが出てき
ます。この与力という役人の服装
は、すっかり定法通りの同心の衣
裳で、一本差しに巻羽織で十手を
左腰に差しております。

囚人たちの服装は、これも定法
の水浅葱色の仕着でしたが、広袖

のと筒袖のと二通りあり、いずれ
も対丈で袖付も八ツ口の無い男物
仕立て、主役の者が筒袖のを着て
おりました。これは鯉口のような
細い袖を長目にしてあるので、旧
軍隊の白衣のような変な感じの着
物でワキ役たちの広袖仕立の方が
囚衣らしく見えました。

帯は男帯ぐらいな巾の白い紐を
しどけなくしめ、髪は自髪を後に
束ねて下げておりました。

「拷問」は木馬からで、幕が上っ
て明るくなると、腰巻一つの女が
型の如く木馬に跨がせられており
ストリップショーだというのに、
木綿の布でなった火縄のような縄
で小森流乳首隠し縄に縛ってあり
ます。これに何んのかのといつて

足に石を結いつけたり、お茶に使
う羽簞であちこちを、擦ったりし
ます。

続いて宣教師とのやりとりが色
々あった後、場面が変わると牢屋の
場となり、牢内で女囚がごろごろ
している所へ牢屋下男が一斗樽を
持って入ってきます。その樽を正
面へ置き、今後はこの樽で用を足
せと命じ、恥かしがって騒ぐ女た
ちに、更に当分の間着物の着用を
禁ぜられたから、着物を脱げとい
って囚衣をはぎとりに掛ります。

なにしろ、お色気ショーのこと
ですから、大変な騒ぎで、牢番は
品の悪い洒落をとばしながら、次
々と囚衣をとり上げてゆきます。
ところが、囚衣を脱がされた囚人
たちが、水色の肌襦袢に二布のお
腰をしめているので、びっくりし
ました。

こういうショーのことですから
どうせ出来合いの長いお腰か、ひ
よっとすると、真空包装のような
肌着が出てくるのではないかと、
思っていたのですが、二人は白、
三人は水浅葱色のちゃんと二布に

仕立てた腰巻をしておりました。
肌襦袢は、女物にしては、大分
長目ですが、お腰は二月号で私が
書いた通りになっておりましたの
で、すっかり、うれしくなってし
まいりました。

この後、笞打ちや梯子を使った
責め、それから石抱きが出て、こ
の「拷問」と題したストリップシ
ョーは終わります。

責めは肌襦袢を脱がせ、お腰一
つの半裸にして、木馬と石抱きの
責めは、一応後手に縛られますが
縛り方は、普通のお芝居と同様、
本人が背後で縄尻を持っています
といった方法です。この点、私たち
には大いに物足りませんが、本格
的な責演劇ではなく、あくまでお
色気本位のストリップショーなの
ですから仕方ないと思います。

場末や地方ならば別ですが、東
京の都心部で、こういう出し物が
見られるということは、大変珍ら
しいことで、場内は平日だという
のに、立見の人が大分いる程の盛
況でした。

これからも、こういったSMシ
ョーが、全国各地で続々と催され
読者の手によって、誌上を賑わす
ことになれば、大変たのしいこと
だと思えます。

ストリップショー「拷問」おもだか・しの



(第三十四回)

辻村 隆

かねて、会いたいと思っていた『痴人の糧』の山本章氏と、慌ただしい師走の夜、始めて相会う機会に接した。お互いにサジスト同志、忽ちにして肝胆相照して、十年の知己の如く歓談できるところを知らず。同好の知友を得たことは又となき喜びである。

彼のカメラ・ルポ、木村洋子の巻の文体なり調子が、まるで私のカメラ・ハントそっくりで読んでいるうち、何か私自身書いているような奇妙な錯覚にとらわれる。私も過去木村洋子さんを数回撮ったが、そのうちカメラ・ハントに書こうと思いつつも、分譲フォトで先を越されて、いつしかその機会を失ってしまった。私にとっ

ては木村洋子はもはや目新しい女性ではなかったが、山本氏にしては、それこそ最初のカメラ・ハントの女性であったのだ。彼女に対するイメージが私と山本氏とまるでピッタリで、若し私が木村洋子のハントを書いたとしても、あしたのものになるに違いなかった。私なら出会いまでの少々の遊びはあったにしても――。

山本氏はまるで堰をきったように、矢継早やに大塚啓子さん、大島照代さんと撮りまくり、私のカメラ・ハントのお株を、すっかり奪わん意気込みで張切っておられる。大判から小型誌に変わって以来の奇クの読者の氏が、今迄全然ペンをとらなかつたのも不思議だ

が、その十数年のキャリアがものをいって、休火山が突如として爆発したように、過去の沈黙を一気に破って、華々しく活動されたのには、唯あれよあれよという許りで忽ちにして奇クの重要なポイントを占めて来られた。S同志の同好の士として欣快の至りである。

彼の激しい情熱に負けて、先日京都の魔子を紹介し、私もその前日彼女に山本氏の人柄を説明しがてら少し彼女を撮ったが、もともとSの女王振る魔子を、口説き落して、見事魔子の緊縛フォトをもしたのでから、彼の手腕たるや大したものである。大分魔子のじゃじゃ馬に手こずられはしたらしい模様であるが――。

増田みゆき夫人が予定通り、無事双生児を安産された。心よりお芽出とうを申し上げたが、二人とも女の赤ちゃんで、どちらも七二〇匁、合計一貫五百匁近くあったのだから、あの小柄な体ではさぞかし大変だったろうとつくづくお察しする。母子共至って健全で、増田喜代司も一挙に二女の父になってマゴつき通し、ケンケンゴウゴウ、さして広くもない二DKの部屋はごったがえしているとのこ

と、さこそと思いやられる。ここ当分はプレイどころではないらしいが、かなり禁欲生活長かりし彼のSMの想念は、いやが上にも激しく増強して、不可能に近いSMプレイの極致を胸に描いての長電話に私もタジタジ。それが嵩じて、みゆき夫人オンリーだった彼が、カメラ・ハントの女性の誰かを紹介してほしいと懇願されるに至っては、私も辛い立場である。紹介はしてあげたいが、さりとてあの貞淑なみゆき夫人に悪いような気もして、ここしばらくは何とか口を濁すのみである。

正月の屠蘇気分もぬけかけた一月上旬、激しい寒波襲来と共に積雪二〇センチ。かねての念願の雪責めのフォトをものにし得たことは、まさに積年の想いが一気に叶えられ、私にとっては、寒波さまさまといったところである。雪国ならばさして珍らしくもない積雪も、この地に霧々と舞い狂う粉雪の降り積むことは実に何年振りかのことである。家内に因果を含めると、かねてからの私の念願を知っている妻は快よく協力してくれていることになった。長女は勤務、他の三人は何れも学校で、家の中は

特選M画集

「フルネルソン」

春川ナミオ画



遅ましく真白な太股で両腕をネ
ルソンに捉えられた男の顔面は、
ポリウムのある臀部の下敷きにな
って氣息えんえんの有様である。

夫婦二人きり。実に久方の夫婦プ
レーである。すぐさま意を決し、
石炭をジャンジャンくべて、急拠
風呂を立て、裏庭で決行。万一の
失敗を慮んばかりの、カラーと
モノクロのカメラ二台立ての慎重
さで、構図をまめる。妻は前後五
回、熱い湯を出たり入ったりし

て、風呂場と銀世界の裏庭を往復
してくれた。全裸なので五分とも
たないのだ。咄嗟のことでフィル
ターの準備なく、或いはハレーシ
ョンをおこなっているかも知れない
が荒縄や真紅のしごきでカラー効
果も狙い、立木に吊し、雪上に転
がし、スコップで雪をかぶせ、震

える妻を叱咤鞭撻、懇願礼拝、ど
うやら五〇枚近く撮ることに成功
した。自分でも伊藤晴雨師にひけ
をとらぬものを撮ったつもりでい
るが成果や如何。カラーフィルム
のDPEは直ちに須磨松男氏に依
頼、この稿では未だプリントが戻
ってこないが、うまく撮れておれ

花原竜子

月ギメ奴隷募集

花原竜子A号ドレイ

私達ドレイの女王様として君臨
されていられる花原竜子さまが、
今度、今までのお仕事を退ぞかれ
恐らくは日本では始めての女王道
に専念あそばすことになります。

女王としての美と権威を確立し
ホモサピエンスとしての雌が雄を
どうすれば完全に屈伏することが
出来るかという研究をなさるため
に実験を重ねる必要を認められた
のです。

いつも何か新しい方法をお用い
になります。最近では愈々凄味
と洗練を加えられ、私達ドレイは
文字通り完全征服される法悦境に
浸たされております。女王様は美

は、次号楽我記で御紹介したいと
思っている、新幹線もハイウェー
も不通、遅延のこの豪雪も、私に
とっては得がたい収穫をもたらせ
てくれた。妻なればこそ、よくぞ
協力してくれたと、感謝の念しき
りである。

人でありグラマーであるばかりで
はなく、詩人でもあり哲学者でも
あります。やさしさをつよさの中
に昇華し、きたなさを美しさの中
へ昇華することが女王道だとおっ
しゃっていられます。

左記により月ギメ奴隷を募集い
たします。同好の紳士諸君の応募
をお待ちします。ちなみに女王様
のお部屋に付属するものは、バス
だけでございます。

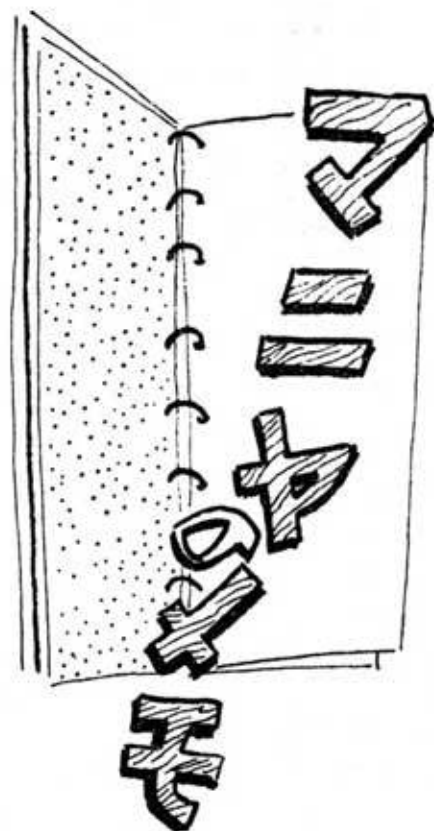
月ギメ奴隷規約

○毎月一回、花原竜子さまに飼
育していただきます。

○会費月一万円、飲物としてビ
ール二本の代金。但しドレイは
一時間後に飲用のこと。

○時間は約三時間。但しスタミ
ナにより長短あり。

○出張に必ず。交通費実費。



真面目な たわごと

(3月号感想)

須 渾 一 朔

3月号拝見し、投稿マニアの末席に連なるようなぼくは、よせばいいのに、又ぞろたわごとを書きたくてうずうずしちまった。というのも本号は最近では好感のもとた号だからでもある。印象的だった「創刊号第二号について」「サーカス……」「足拭き」etc.

さて、S派ならざるべくだから、又同じだろうとは思いつつも、やっぱり一番先に眼が行っちゃう「鬼六談義」それと云うのもその巧妙な話術と気どりのないお人柄に自然魅せられるからか。ともあれ奇クに於ける貴重な団先生のご健在ぶりを知り得て心強い。そう云えば、この所、一人で何となくいきがっておられるような(決して悪くはなさそうだが)記事が余りなくなったらしいのはいい傾向だ。

ぼくなど創刊当時を知らず、せめて当時の表紙位はと思っていたので、その写真は嬉しかった。度々聞く事だけれど、列記された数多輩出の読物誌中唯一つ我が奇クのみ現存する事実は今更の如く驚かされる。「サーカス……」曲馬団好の「昔ばなし」となり、そのうち誰も思い出さなくなってしまうのだろう」誠にその通りと思われ、その意味でも、この種の写真と労作は文献誌の価値を高める。奇クを愛する諸士は決して回懷趣味だなんては思わぬだろうから、今後この種の記事が登場されることを祈る者です。

さて先月号で作品なく、淋しかった三原寛氏作品は嬉しい。一寸前やや低調気味のM分野に活を入された氏のエネルギーな活躍は貴重である。昔真砂氏作品で



妊娠腹八カ月の表情

愛知 葉子

三月号の奇クサロンで『編集部だより』によりますと、増田みゆき様には、無事御出産とのこと、何よりも先ず「御安産お目出とうございます」と心からお祝い申し上げます。

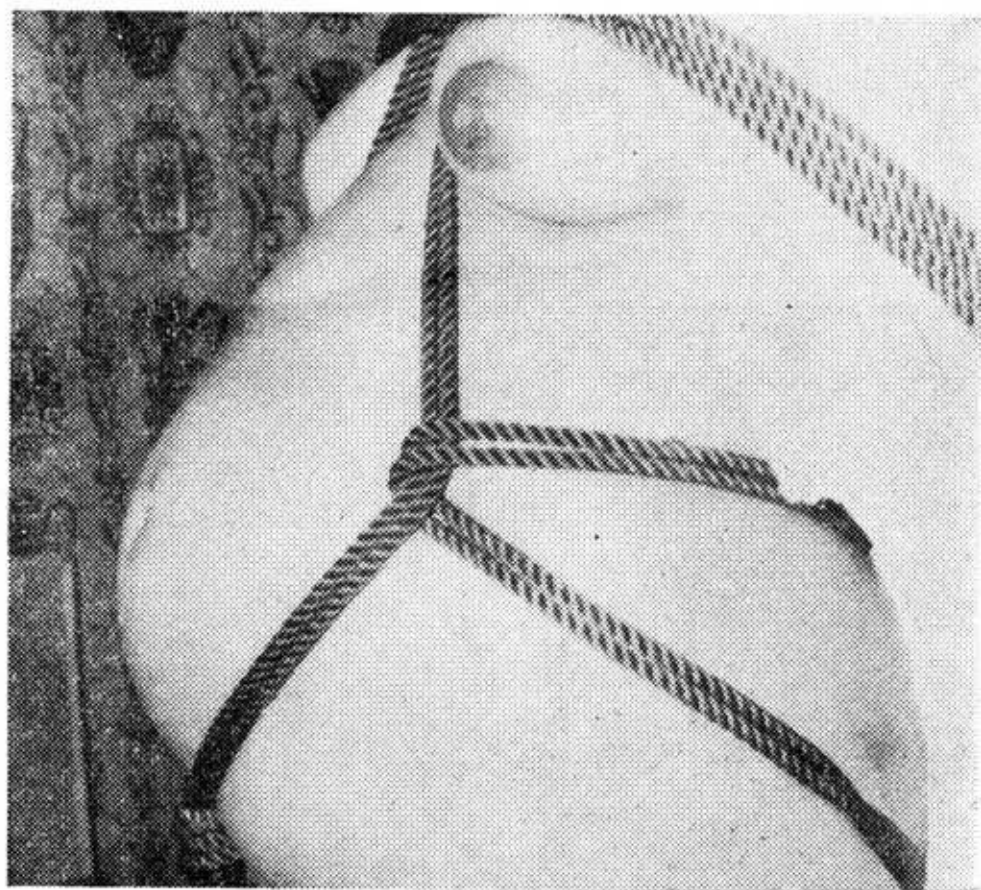
お二人の赤ちゃんの養育は、さぞ大変だろうと思いますが、手が離せるようになりましたならば以前にも増したお色気のある責め写真を、お見せ下さいますよう、今からお願ひ致します。

先に投稿致しました、私の妊婦写真、御採用下さいまして三月号の二頁に掲載されましたことは大変嬉しく存じます。みゆき様のようない見事なお腹にはなりません。妊婦ファンの方々が、あの程度のもので見て下さるのなら、と思ひ、今月も投稿致しました。先月にも申し上げた通り、素人写真で迫力というものがありませんが、どうか御許し下さい。過去の奇クを取り出して、見よう見真

代表された三者関係的正統Mの流れがうけつがれ、発展されている感があり、真似し得ぬ、その道での貴重な体験という大きな強味もあり、全く奇クM派の旗手たるにふさわしい。昔、沼氏、原氏両先生を始め、鬼山、馬族、真砂、真木氏等と乱れ咲くMの花園は豪華版だった。その後やや低調のMを感じぬでもなかった奇クも、氏を得て面目を保ったと云ってもよからう。

誰方かH・B調M小説と云われたが、けだし云い得て妙と感心した次第。スピーディなストーリー・テリングなど昔には一寸なく、又考えられもしなかったものだ。元来M小説と云うと得てしてアフオリズムのお説教調で閉口させられるが(作者好みのデリケートなムードや、少数派を意識しての説明口調等にもよると思われる)その意味でも、この乾いたタッチは瞳目に価する。特に「しもべ」はぼくには最もシゲキ的で、逆転趣味、三者願望的Mを表現したんとうさせられた。今号の高校バレー選手の話や有名な女傑の話など何ともショックである。願わくは、余りに(ぼくの如き頭の古い人間には)簡潔すぎ、図式的なその傑

作に幾分かふくらみを持たせてくれたら(と慾の深い話だが...)余りべたばめを続けてはかえって氏に失礼かも知れぬので切り上げて、それから、慾深い願望ついでに書いてしまうと、シリアスなMもいいが、一方はんわか調のナセンス・マゾ作品も出現して貰いたいのだ。例えばTVの「三ばか大将」とか漫才の、ぼくの好きな京唄子、鳳啓助。ワカサ、ヒロシ。春代、捨丸。あんな感じのもの。(但し上述はぼくが彼等から勝手に感じ、潤色してしまっているM的感興にすぎぬ)正統M派からはシゲキが乏しいと叱られるかも知れぬが、ナセンス(あえてユーモアとは云わぬ)な楽しいM作品の出現も奇クM分野に一層の幅を加えることだろう。又昔M派の俊英群中でどちかと云えば地味で昨今名を挙げられることも殆んどないが、才昭吾氏なるM作家がおられた。その体験小説の題材でぼそぼそした語り口に何となく味もあり好感を抱いたものだ。体験の持つよさもあつたらうけれど、印象に残っている。近頃あしたのような作品が少いようで淋しくもある。春川氏の画は毎号孤独なぼくをなぐさめてくれて有難い。



この写真は、八カ月に少し前のものです。

これから妊婦ファンの方々が、この程度のものでと許してやると言って下さるのなら、これから臨月まで二カ月程ありますので出産直前まで、撮ってゆきたいと思っております。本誌上でも、もう少しこういう風に工夫したら御指導下されば幸せに存じます。

△愛知葉子▽

△編集部より▽

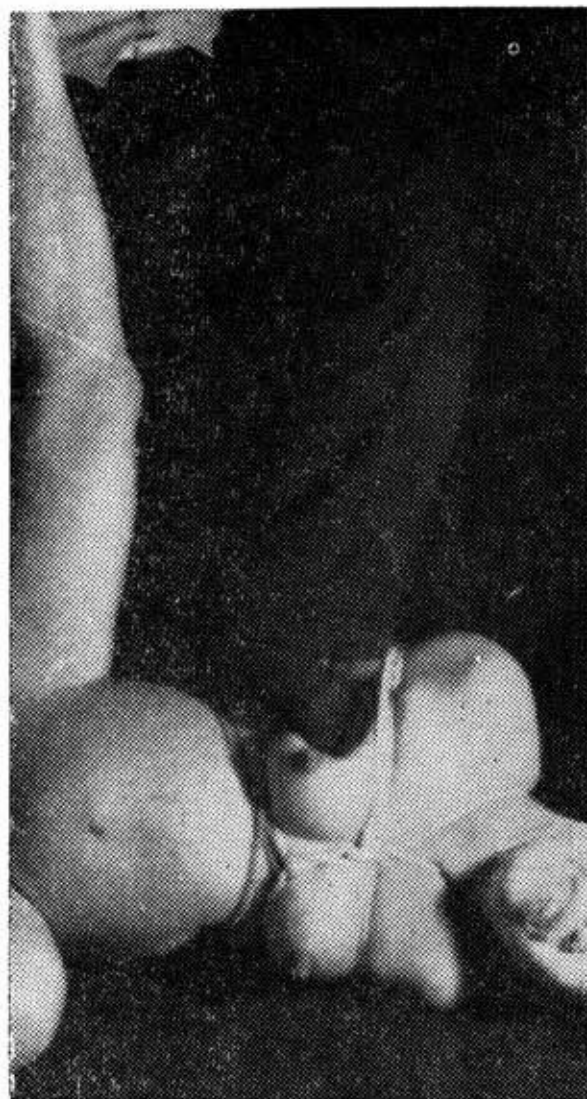
お送り下さいました妊婦フォトは、いずれも結構なものだと思います。是非、臨月までお撮り下さい。発表に支障のあるものは編集部にてカットいたしますから御心配なく。

似て種々のポーズを写してみたのですが、出来上った写真を見ると案外つまらないものばかりで、ガツカリしています。たまたま、これは良いと思うのが出来ても誌上に発表するのは、まずいというようなものとなり、誌上に発表して迫力のあるものというのは、素人には、なかなか無理のようです。

妊婦写真撮影の記

晩秋のフォト

綾 研 二



暗幕をたれ、ライトを用意し、カメラを位置付ける男の顔が上気している。心臓が高鳴り喜びの昂奮で、手も足も震えているのが、よくわかる。

「もう、六カ月も過ぎたんですから、我慢して下さらない……」

祈るように、男の意図を翻えそうと幾度も訴えてきたが、とうとう聴いて貰えず、今日がきてしまった。

眼を閉じて、不安に怯えながらうずくまる淑子は妊娠六カ月の身重であった。

必要な準備が終ると男は背後から、優しく淑子を抱いた。ストーブが二人の顔を紅く染めた。

不安と寒さに慄える淑子の躰が、男の胸にもたれてゆく。

のけぞる白い喉、接吻。

左右の腋下から伸びた男の手が、両の乳房をきつくおさえた。

「小さくて、ご免なさい」詫び続けてきた乳房だったが、今は、美事にこぼれ、はずんでずっしりした量感が、男のプレーへの欲望をかきたて、血を沸きたたせる。

男は淑子の着衣に手をかけた。

「さむいわ」

小さく訴える淑子。男は黙って紐を解く。

「ねえ、さむい」

きこえない、いや、きこえないふりの男は白い細引をたぐった。

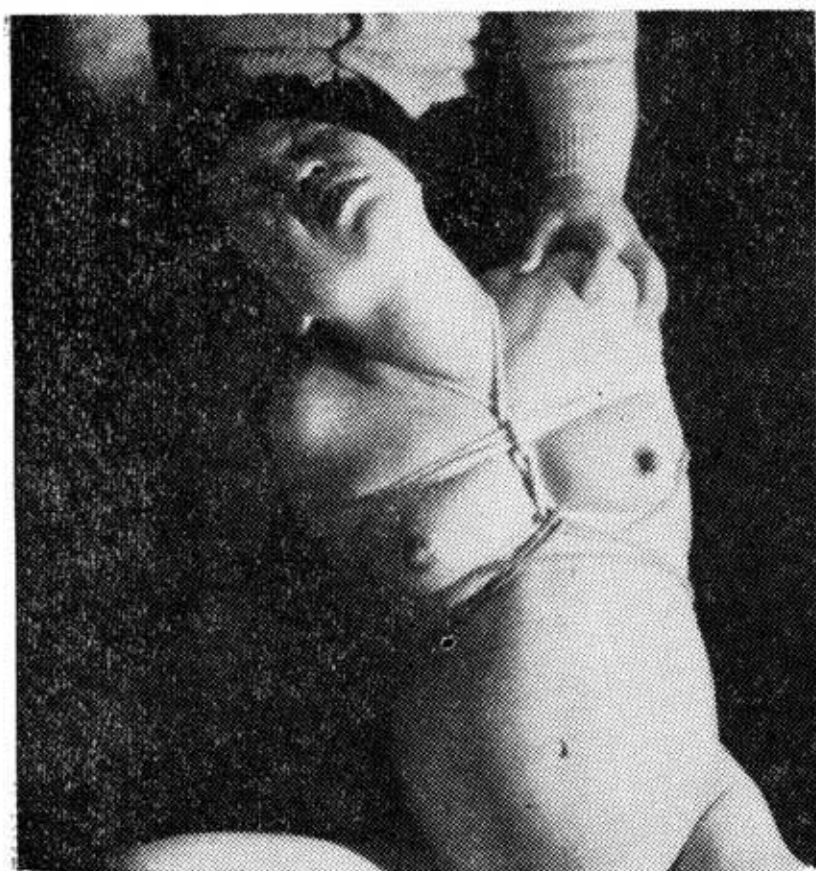
北国の晩秋。寒さは夜になって一層きびしく身に泌みる。

淑子は、両の乳房をかかえるようにして、ストープに身をかざす。だが、後手に縛られ、強く引き上げられると、立ち上らない訳にはゆかなかった。

胸に、腕に、そして首にも冷たい縄が、からみつく。

「うう、くッ」

肉がくびれて喰い込む縄に淑



子は呻く。吐息が白く残る。

プツンと、音をたてて、今にも破れそうに脹んだ腹部が、ストーブの火に映えて、月の写真を見るような美しさである。

「さあ、あるけ」

生れたままの、全身裸像は痛々しく縛しめられて処刑の座へ追われる。

小腰をかがめるに、脹らみきった淑子の腹は、それさえも許さなかった。

坐れ。
立て。

横に倒し、仰向かせ、男は夢中でシャッターを切る。

びったり閉じ合わせる太腿が疼攀する。苦痛が増す。覚悟したプレーではあったが、時間の経過は容赦なく淑子を苛む。苦痛と寒さに淑子は限度を感じた。

「やめて」

男は無言、荒々しく淑子の後手に縄を通すと吊り責めにしようとする。

淑子は悶えた。

「もう、いや」

僕のイメージ画集「飼育」

「やめてッ、いや、いや」淑子の、女の、母の本能が男に反抗した。しかし『へ』の字の曲線を描いて吊り下げられた淑子は呻く。

片足を吊り上げられた素裸の妊婦は、恐怖と羞恥に身をよじり、はち切れそうな腹部が、妖しくのたうつ。

「ウウッ、ああ」

（もう、プレーではない。痛い。男は生れ出る生命を感じないのか）涙があふれ、キラキラと頬を流

室井亜砂路画



れた。

男は汗でくもる。ファインダーに、しがみつき、シャッターを切る。

吊りが終る。だが淑子の苦悶は続いた。乳房を揉みひねられ、足で踏みつけ揉まれ乍ら、股ざきさされる痛さと哀れさに髪をふり乱して泣いた。

男は、流れる汗を拭おうともせず、しっかりと淑子を抱きしめていた。

滲みでた汗は淑子の肌を皓く、

ぬめぬめと濡らして、かがやき。緊縛のままの手は冷たく血の気を失っていた。

淑子は顔を涙で、ぐしゃぐしゃにして、男の胸で吸りあげる。

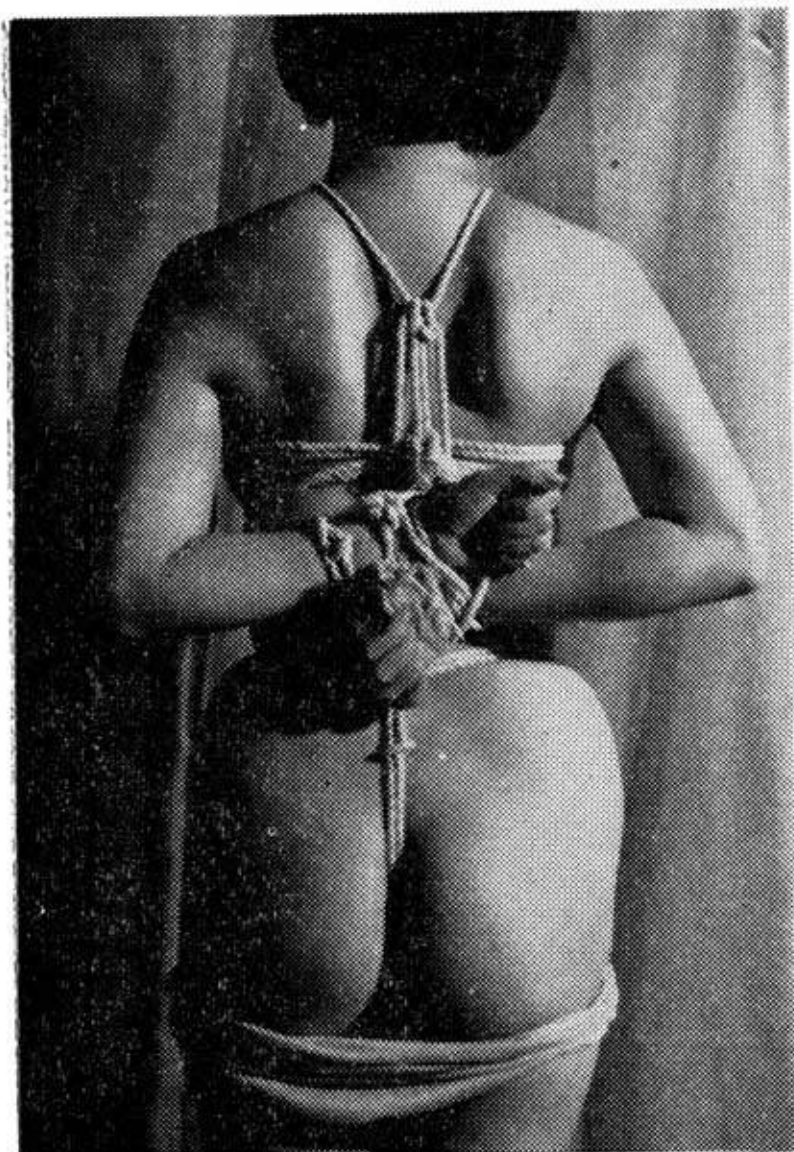
男は淑子をかき抱き、謔言のようにつぶやいていた。

△済まなかった、淑子。許してくれ▽

幾度も幾度も、愛する妻に、ささやいていた。

夫婦プレイフォト「ゆう子の股間縛」

新田英雄



三月号を読んで

福田 久文

○粗忽なわたしは「続・濃緑の谷」の終りの方にその一点に全編を集中する筈であった箇所を浄書の際失念してしまいました——（尊敬しているわ。孝一さんを好きよ。どうしてこんなにいじめたくなるのか分らない。分った。わたしには分った。あなたは正しいのだ。鬼面の天使なのだ。業深いあなた

は知らずにいるが、この感慨があなたに分ったら……。あなたはただいたずらに呵責と凌辱に浸っているのではない）
○SM願望と性衝動の関係を明瞭に見通すことは、単にSMの世界の謎を解くものでなく、わたしたちの生存そのものの根拠を見通すことになるでしょうから至難であ

モーター付女体屈伸器

千葉 青鬼



るばかりでなく、まだ充分に娯楽気のあるうちは恐しいことです。といひますのは、こういうことをしてしまいますと、生存理由が完遂されたことになってその人の生命が奇禍または急病によって失われることが多いからです。

○この点についておもだかさんが昨年九月号で「私に関するかぎりあくまでSMが主であり、普段は実現できないSMの代用というようにもSMの自慰の役をセックスがつとめて居る」と書かれたことはわたしには一つの示唆として貴重でした。ちなみに、黒淵氏がおもだかさんを紳士だろうといわれたのが原因で拝見することのできたそのポートレートには、年令を超えた婦人の美しさが漂っていました。それを見つめておりますと、被虐願望が変態とか異常とかいうものではなく感受性の鋭さの所産であり、わたしたちを高めかつ清めてセックス以上に満ち足りることのできる光明の世界へ導く媒体となるのではないか、というわたしの少年時代からの思想がまた新しく懐い出されました。

○昨年九月号といえは、わたしの青臭い論稿の載った号でしたが、「花と蛇」には辟易するところが

編集部だより

○読者の方からの通信によると一月下旬から末日まで、青木順子シヨウが大坂天六の「ナニワミュージックホール」にて続演された由、観劇された方もあると思う。

○増田みゆき夫人の全く稀有ともいふべき素晴らしい双生児腹が読者の眼前に提供されて以来、綾研二氏、愛知葉子氏と続々と妊婦フォトの提供を申し出られて、まことに心強き限りである。

○妊婦フォトといえは、最初児玉昌子さんのネガの提供を受けたのがきっかけであったが、これは見事な九カ月腹であったにも拘らずネガの保存が適当でなかったためキズが多く残念であった。

○久方ぶりに夜乃探郎氏の通信によれば、「舟田コンサルタント事件簿2」秘東京情報」と題した力作を完成されたとのこと。これには従来の観念的なSM小説ではない。勿論、サジストもマゾヒストも登場しない。ありきたりの人間が異常な空間と時間の中で、どのような反応を示すか、ばくばくに書いてみた。だから、現実であり

雪中刺青女の緊縛

綾 研 二



今年は雪が大変多いのでマニアにとって△雪責め▽の絶好のチャンスでした。乳房を中心に蜘蛛の刺青を彫った女を裏庭の雪中に縛り上げてシャッターを切った苦心の作です。御高覧願います。

多くても、「鬼六談義」にはただの一度も反撓を覚えたことがありません。S・Mの違いを超えて、文体ににじみ出る氏のお人柄に敬意を表しています。氏の奇巧におけるお仕事は「花と蛇」よりも、この随筆だと思います。

○「国際秘密結社ISSSL」の素材の絢爛豪華、構成の雄大緻密さはその魅惑の文体のなかに生きて、どんな傾向のM男性にも愛読されることでしょう。Une belle gloire d'artiste et de conteur / 山本一章氏のルポは辻村隆氏の

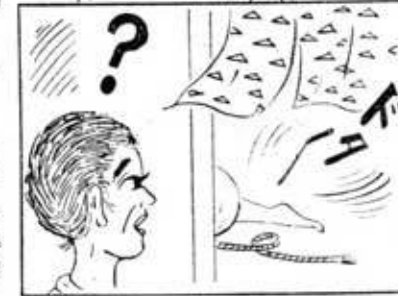
それよりも強烈なSを発散してなお辻村隆氏のハントと変らぬ善意をにじませておられる。同じような優れた中年のS女性が現れてM七〇氏のルポ記事を書いていただきたいものである。

得ないような拷問部屋や責め道具などは一切登場しない。その点ではマニアの方には申しわけないと思う。これは映画の宣伝文句ではないが、スリルとサスペンスに、ちよっぴりSM的な場面をサービースしたアクションドラマであるという野心作なので、是非御期待を乞う。

○カメラ・ルポで新境地を示された山本一章はベテラン大塚啓子を素材にして麗筆を揮ってくれた。写真も氏一流のリアルに徹したもので、必ずや読者の目を楽ませてくれることと思う。大島照代、魔子の巻によって高められたカメラ技術は大塚啓子を被写体として決定打を放ったといってもよい。○今月号のカメラ・ハントにも掲載している通り、水野弘御夫妻が辻村隆氏宅を訪問された。締切間際に、水野弘氏が撮影されたフォトと共に手記を送付してこられたが、残念ながら既にスペースに余裕がなくて掲載できなかった。○近頃、夫婦プレイ・フォトの提供者、並にプレイを御希望の方々からの便りが増えてきた。御希望通り運べるかどうか、わからないが、一応編集部宛お便りを寄せられれば幸いである。

ナンセンス
10

こんにち・和



“連続女性殺害事件”に思う

恵 須 冬 一 郎

最近の新聞紙上を賑わしている愛知、千葉、山梨県下で起った連続女性殺害事件の記事を読み、胸を突かれる思いで、この事件について、私は私なりに、その犯人の陰影を推理し奇く愛読者として、貴誌に一筆苦言を提したく筆をと

りました。先ずこの事件について、警察当局でも、三件の事件の手口から考えて、同一犯人であるとの確信をもち捜査に当たっているとの事。私も同感であるが、私がこの事件に関心を持ち、最も懸念するのは、

その犯行の手口にあります。この三件の被害者は共に若い女性で、その犯行の手口はご承知の通り、非常に陰惨きわまりなく被害者の手足を細紐等で縛り、サルグツワをかませ自由を奪った上で暴行し、更に犯行を晦ましたために首を絞めて殺し、その上無惨にも、その一人は浴槽に頭から投げ込まれ、又他の一人は鴨居に電気コードで吊り下げられていたとのこと。その犯行手口は、正に殺人鬼の様相を呈している。

私の恐れる事は、その性癖が、どこに起因しているかという事で、私の推理する点も、実はこの犯人の性癖の起源に有り、最も恐れることは、本誌等の諸雑誌に依って、そのうわべだけを面白半分に拾い読みして、その内容を深く理解せずして、ただ本能の赴くままに実行に移したのではないかと思うのです。もし仮に私の推測が当たっていたなれば、当然当局としても手放しで、これら諸雑誌を放置しているとは思えません。その内容については、今迄以上に厳しい監視の目を光らせることでしょう。

そうなった時、貴誌にとってもなんらかの規制を受け、しいては今後の続刊に支障をきたし、最悪の場合には、続刊不可能に陥ることも予測されます。それ故に私が申すまでもなく、貴誌に於てはすでにグラビアの廃止、挿絵の減少と十分の配慮が行われているようです。この件については、本当のところ、少々淋しい限りで、もっともっと沢山のグラビアを、挿絵を本誌におり込んでもらいたいと思っはいます。こうした軽薄な行動を起す人が本誌を手にとった時、その恐ろしさを思い、又一方、本誌の続刊を願う私としては尚一層の配慮が必要かと思ひ進言いたします。

こうした少数の軽薄な人の言動によって、我々のささやかな楽しみが、少し宛奪われてゆくことが残念でもあり、又淋しい限りで早く大勢の人達が、こうした諸雑誌を何の偏見もなく受け入れ、自由にその内容が表現出来るような世の中になれば、どんなに楽しい奇クになることか、多くの真面目な愛読者の諸君も、きっと同じ思いであらうと思われまふ。しかし、今こうした事件が起るにつけても、その願ひも昨今の時世が許しそうにもありません。そこで私の



提案したいことは、書店販売の本誌には挑発的な挿絵は出来るだけ控え三カ月或は半年に一回、挿絵画集の様なものを発行していただき、書店販売をしない様な方法をとられては如何でしょう。

私の浅知恵で色々と、この事件を思うにつけ八つれづれなるままにV(どこかで聞いた様な文句)勝手な愚行を書きたててしまいました。尚、この連続女性殺害事件は、その後の新聞にて、有力容疑者として、十六才の混血児の少年

が捕まり、その後の自供で、その動機が「混血のために皆、特に女性に笑われた」その劣等感から女性に惨虐な行動をとったとのことで、私の迷推理は見事に外れたわけですが、私の心は推測の外れたことに、よかったと胸をなでおろしているのではありません。

被害に合われた三人の女性の方には、まことにお気毒なことで、心から哀悼の意を表したいと思ひます。

「浣腸」と「オムツ」の虜……海原良三

「浣腸」「オムツ」につかれて幾とせか、ここに僅かにぼくの淋しい心を慰めてくれる奇くに、せめてもの心の憂さを晴らすと共にお題を書いてみます。

「オシメカバー」フोटでも次のような連続的なものが楽しいものです。私がいつも心の中に描いている空想の一つでもあります。

一、敷かれた布団のシーツの上に雪花模様の真新しいオムツがT字形に重ねられています。

二、若くて美しい女性が四つ這いで浣腸を施されています。

三、おムツの上に可愛いくて真白なお尻を置き仰臥します。

四、両脚を揃えて高々と掲げられてオムツが股に通ります。

五、脚は開いておろされ、横にひろげられたオムツで腰を巻き、下半身をくるんでしまします。

六、オムツカバーをお尻の下へ敷き、開いた股の間からタレでくするみ両脇のホックを止めます。

七、腰のところで紐をちゃんと結ぶ頃には、さき程の浣腸がきいてきて、若くて可愛い女性は便

意に耐えられなくなります。

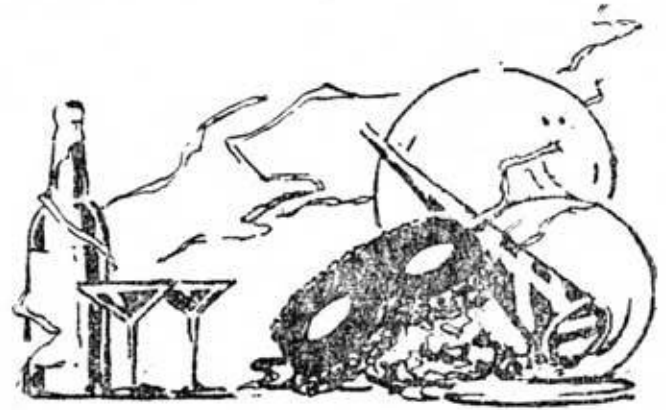
八、激しい発作に思わず腹這いになり、顔を枕にうずめて真赤にほてらし排泄をします。

以上のような場面を実際に見たものだと、いつも空想しますがそれは仲々果たせない夢に過ぎないという事はよくわかっております。せめて、リアルな写真によって、この充たされぬ思いの何分の一かでも満足させて頂きたいものだと思ひます。

それともう一つ、今迄二十何年間にわたって発行された本誌の中で、浣腸やオムツ、オムツカバーに関する記事ばかりを集めて特集号を一冊にまとめて作成してほしいものです。過去のそんな記事をとまとめると、何にしろ二百何十冊の中からですから一冊で無理でしたら好みによって分けて、五、六冊になってもよいです。

実を申せば古い奇くは古本屋へ行っても高くて千円、千五百円。しかも中には包んで内容を見せないようになっていたので、困っております。

麻生保氏の生活と意見



麻生保

オール読物新春特大号（一九六七年二月号）にのった瀬戸内晴美さんの中編「火の蛇」は近來の白眉である。

「いきなり目を叩かれたような衝撃を受けたほど、きびしい美しさを持った娘」美樹の乗馬姿の描写は実に清々しい。麻生がこれまでに読んだ古今東西の文芸作品の中で、最も美しいアマゾンの一入といつていいだろう。また、この美少女を溺愛し、弓と乗馬を習わせ、馬具や乗馬服や、はては馬ま

でも買い与えて、美樹の乗馬姿に老の春をもとめる老ドンファン大乃木容造の異常な心境も、やや舌足らずながら巧みに書かれている。特に老人が美樹のきげんを甚だしく損ねた後、外で乗馬姿の美樹に出会うくだり

「……駆けてきた美樹は馬上から儼をみとめたくせに、冷然として、一鞭したまま儼には目もくれず芙蓉（馬の名）を駆け去らせてしまった。儼は額に美樹の鞭をたたかかったような痛みを感じながら、じっと立ちつくす。美樹からどんな仕打をされようと、今の儼はひたすら、美樹の意を迎えることしか考えられない……」

ああ、なんと心憎いこと。

とに角、一読されるようおすすめする。大乃木老人ならずとも美樹をアイドルにしたいと思わない人はないだろう。

ただ、馬が、「サラブレッドの三才駒」となっているが、そんな代物をお嬢さん馬術で乗りこなせるわけがない。「硝子細工のようなきしゃやで痛々しい、そしてむしろさと冷さを包みこんでいる」美樹の乗馬にはそぐわない。美樹をセミプロ級の馬術家にでもないかぎりこの設定はいささか無理と



「ストレートの味」

西川 緑

「何がそんなに不満なんだ。誕生日なんて、幼稚園の子供じゃあるまいし、男にはつきあいというものがあんだ。自分の都合どおりにはゆかん。いつまで、ぐずぐず言うな、兎に角明日はゴルフだ。まだわからないのか。じゃあ、仕方がない、いつものお仕置だ。これで少しは頭が冷えるだろう。どうだ、ストレートの味は？」

私の誕生日だから家で一緒に祝ってほしいという。今日は土曜日の晩である。一週間の中で最も落着ける時間である。夫は明日の日曜日は、朋輩とゴルフにどうしても行くと行ってきかない。そして、それを口実にして、例の、秘やかな望みの、浣腸プレイをもってゆこうというのである。明日のゴルフも果して、どうなるかわからない。

新婚ホヤホヤの新妻は、明日は



僕のイメージ画集「弓的」

室井亜砂路画

いうもの。美樹の服装などに関し
てはなかなか注意が行きとどいて
いるだけにこれは一寸残念。
ところで、乗馬の美樹が赤松の
林の中から突然姿を現すくだり
は、本誌一九六三年五月号で読ん
だ田島直士氏の「回想から」の中
で、幼き日の氏がはじめてアマゾ
ンに出会うシーンを連想した。

アサヒ芸能一月二十二日号のグ
ラビアページにイギリスの女性ジ

ヨッキーによる競馬がのつてい
る。また、同誌に「現代上流女性
の行動」というルポの中に乗馬女
性の写真があるが、あまり出来の
いいものではなく問題にすること
はないだろう。

○ ミノルタのPRパンフレットの
「ミノルタ・ヤングエリート四」
に乗馬女性が登場する。鮮明なカ
ラーの美しい写真である。ただし
男性とペア。いささか目ざわり。

涙はらはら、我慢がならぬ

黒井珍平

三月号、18頁、究哲人氏の「我
がアブノーマル論」あなたはもっ
と素直に言うべきでした。誰にた
のまれたのか、それともあなた自
身が悪書追放運動の創始者なのか
知らないが、もって回った皮肉だ
が、無神経の様な事は言わないで
「奇くは廃刊せよ」もしくは「平
凡クラブ」とでも名を変えよ、そ
してあなたの言うSMぬきの、ア
ブノーマルぬきの（変質者の温床
視されかねないから）雑誌になれ
とおっしゃる。終りに紀元節大賛
成（何の事です、これは）こんな
事は本文に関係ないでしょう。

（何故あなたがここで紀元節をも
ち出したか判ってはいませんが）
二百号をこえた奇くが、今日ま
でかくあらしめた箕田編集長御自
身よくお判りと思いますが、清濁
併せ呑む、両論をのせていられる
太っ腹の編集長に大敬服。

■ 今までのどんな激しい議論、反

対論も私は不愉快になった事はあ
りません。

○ グラビア全廃せよ。

○ いや復活せよ。

○ SMはエロはである。いやエロ
一切抜け。

○ 文献誌のみになれ、いや娯楽性
を持て。

いずれも奇くを愛すればこそ
真面目な論争。だから不愉快では
ない。しかし私自身は、後手しば
りの女の子趣味だけ。存続してく
ればよいのです。

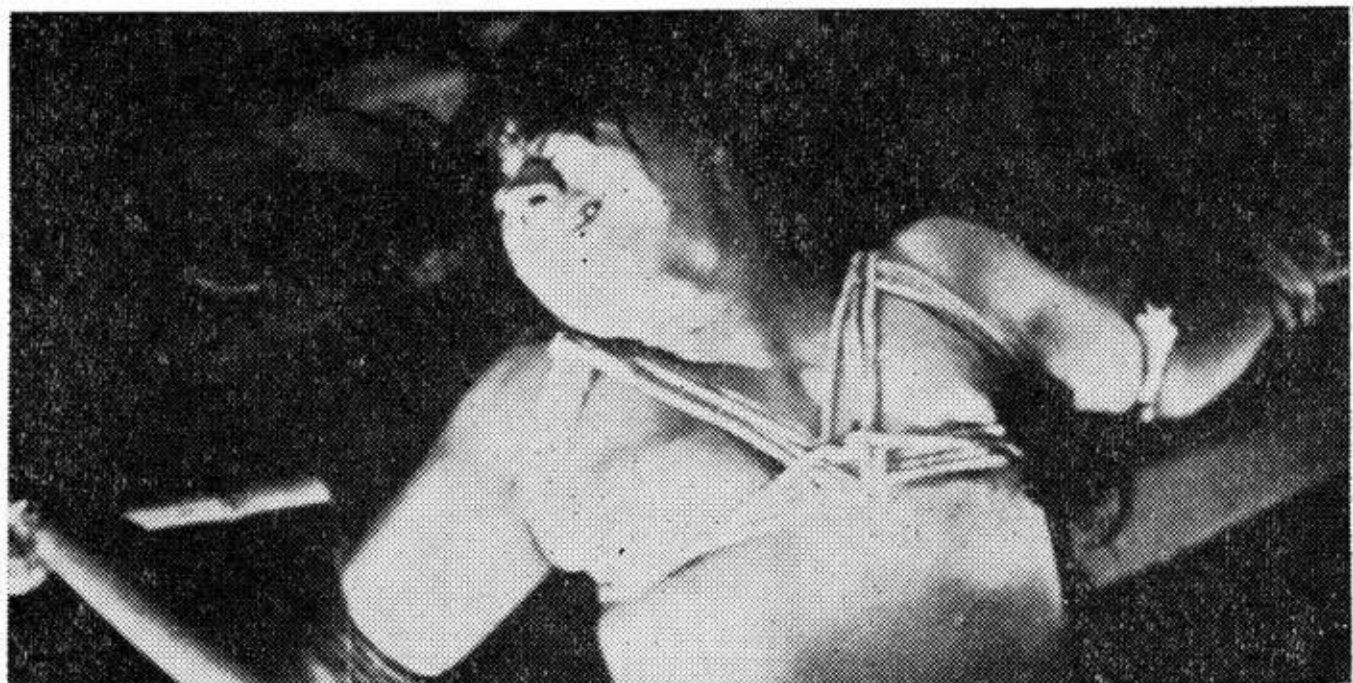
しかし究哲人氏の要求は、煙草
は毒だから煙草屋を止して洋菓子
屋になれ。うんと金でもやるから
フランス人を止めてイギリス人
になれという程のむごい要求であり
殺さないから自分で死ねと刀を渡
す様な無神経な要求である。奇く
からアブノーマルをぬいたら一体
どうなるか、愛読者一人一人が知
っているから書きません。



〔映画通信〕橘

雅 美

『拷問』の観賞と撮影



一年前の「映画通信」(四十一年五月号)で皆様のお仲間入りをさせて頂きました橘雅美です。

さて、三月号で春風春太郎氏が『日本拷問刑罰史』のスチールを提供されておりましたが、ほんの

挨拶代りに『拷問』のスナップ写真と(春風氏の市場を荒して申しわけないのですが新たな観点で)

観劇模様とを一寸書いてみます。小生が見たのは、そろそろ木枯しが吹き始めた初冬の夕でした。丁度内へ入った時は、休けい時間で、場内は明るく空席を見つけるのも楽でした。

二流館特有のタバコのけむりとムンムンとした熱気が場内に充満しています。ぐるっと見廻したところ、割に女性客が多いのに気がつく。普通エロダクの映画では、男オンリーの場合が多いようですが、SMに限っては例外のようです。サラリーマン風の人が多いしチンピラ風の人種や派手な服装の人もない。至っておとなしい人達ばかりのようで、がなり立てるようなレコードの音が変わに場違いに聞える。ムード音楽でもかければいいのに。

小生の坐った隣は、ぐっと渋い黒メガネの紳士と、これまたうつとりするような若いお嬢さんのアベック。二人ともじっと前を向いたまま、スタンドバイを待っている。地味な和服がピッタリの女の人、小生の視線を感じたらしく顔をこちらに向けた。あわてて知らんふりをする、運よく上映のベルが鳴って大助かり。内容は、もう皆さん御存知の通



り。最後までオムニバス風の三題を楽しく見せてくれた。が、一つだけどうしても気になった事があった。拷問の場面毎、この映画館ステレオの様になるんです。女優さんのうめき声とは別に、やっとな

きとれる位の声が耳に入ってきてビックリ。きぬずれの音と椅子に伝わる動きで、やっとな隣のアベックが震源地とわかって、又ビククリ。

映画が終ってから、一寸いたずら心がわいてきて、うっかり隣の紳士に「お宅、奇クのアンですか？」とい口をすべらせてしまいました。ムツとした顔の紳士とは対照的に天井からの淡い明かりの下で、真赤になつてうつむくお嬢さんの様子をたしかめてからゆくと席を離れました。お隣のアベックさん、ゴメンナサイネお詫びに写真を差し上げたいのですが……

丁度、持ち合せていた撮りかけのフィルムが入ったカメラで、何枚か画面に向けてシャッターを切りました。自家現像ですので一本のフイ

ルムを途中から増感する技術もなく、従って写り具合は余りよくないのですが、同封いたしました。

それでは全国の皆さん、またお便りします。さようなら。

労作を發表続ける

齊藤夜居氏に期待

久我庄一

またも本誌三月号では『奇譚クラブの創刊号、第二号について』を發表された。創刊号及び第二号の表紙をカットとして提供されたのを見るだけでも興味があつたのに氏の手になると、たくみに時代色まで取り入れられて立派に生きた文献となつてゐるのは、さすがである。しかも

降る雪や明治は遠くなりけりどころか、昭和の初期も、いまでは夢の彼方のように、かすんできた。そして北明の名も、その業績も知る者の数は減りつつある。

「編集部だより」によると四月号には『稿談性風俗資料入門』が掲載されるとの由。大いに期待できよう。編集子の予告によると、かの「エログロナンセンス文化の時代」を背景とした大正末期から昭和十年までに活躍した梅原北明も登場するようなので特にうれしい。

「——性風俗資料入門」は、単なる懐古だけにとどまらず、おそらく齊藤夜居氏のことであるから、風俗出版界の異端児、梅原北明を現在に生かし、制約下に孤軍奮闘するわが奇譚クラブの現状に、力強い叛骨精神を投影させることであらうか——。重量級、齊藤夜居氏の御健筆を多くの読者と共に切望したい。

サロンの展望台

垂涎のM場面 目出 鯛三

漫画読本陽春特別号に耳よりな記事が載っておりましてので御紹介します。梶山季之といえば、多くの読者が既に御存知の異色作家であり、特異な系列の作品を世に送り出している売れっ子。その彼が漫読に寄稿した一文に、△匂いある轟沈△が面白い、M派にとっては、まことに垂涎の読物で、うらやましき限りのお話である。

彼(梶山氏)がT氏に伴われて或る宴席でビールを傾けていたところ、頃は良しと同席の女性三人が見事なチームワークを以て先生をその場に押し倒し、呆気なく体固めを決めてしまった。というクライマックスのシーンを、原文によって少しばかり紹介しよう。

——私はT氏とビールを飲み乍ら怪訝そうな顔つきをしていたらしい。そのうち一人の肥った女が、「そろそろいいわね」と言った。「ああ、ええやろ」とT氏。その途端、三人の女が、わあーッと喊声を上げたかと思うと、矢庭に私に飛びついて来た。畳の上だから私はひっくり返った。途端にメガ

ネを取られ私の顔の上に、生暖かく、なんとも言えない匂いのあるものが、ぴったりと吸い付いた。吸い付いた……と言うのは、的確ではないようである。ぴたりと乗った。と言う方が正しい。私の顔面は、先刻の肥った女の下半身に征服されていた。女はこれでもか、これでもかと言うように、私の顔にこすりつける。刎ね返そうと思っても、彼女は上手に両膝で私の腕の付根を押えて居るからまるっきり自由が効かない。

「おい、何をする、放せ！」私は叫んだ。しかし、私自身に、異変が起きていた。

というわけで、彼はメガネを取られた顔面に深々と豊満な尻をすえられ、いやという程強烈な薫香をかかされ乍ら、もう一人の別の女性によってズボンをはぎ取られ「あら、いい感じだこと」と口走りざま、悠々と彼の部品の上に坐り込まれ、ゆっくりとエンジンを開始された、ということである。さて、M派の諸君、なんとも羨ましい限りと申すほかないではな

いか。御推察通り鯛三もMであるので一生に一度でよいから、梶山先生にあやかりたいものだ、再度読み返しつつ、充たされぬ欲望のタギリを打ち静めんと、あらぬ空想に耽りながらペンを持った次第である。

ここで興味のあふれることは、彼の作品の随所にSM趣味の場面がとび出してくるといふことである。言いかえるならば、梶山先生も恐らく、K誌の愛読者の一人ではなからうかと思われることである。

とまれ、梶山先生の御健筆を祈ってペンをおく。



新東宝配給「情炎の私刑」

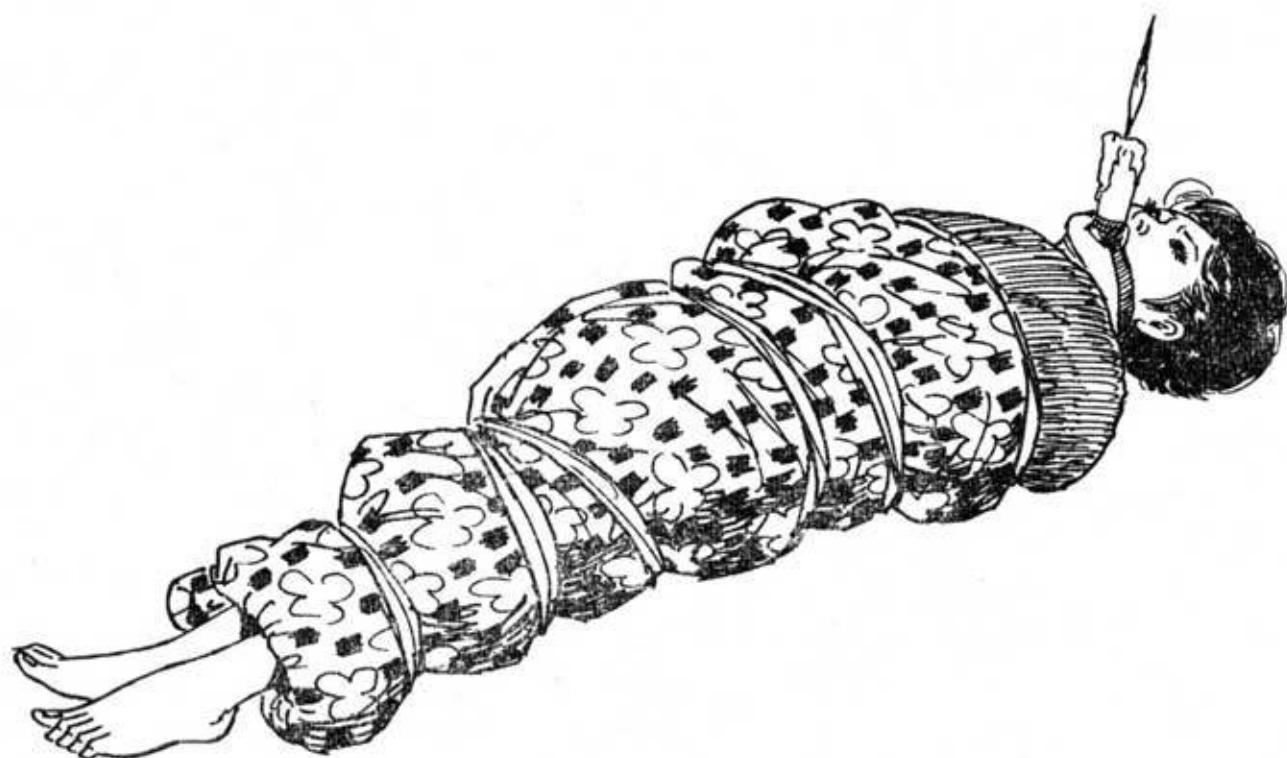
監督……小森白(大滝翠)
女優……矢車新子

「日本拷問刑罰史」にも出演していた彼女、矢車新子はポリウムがあつて中々よろしい。奇クに最もふさわしいスタイルを、提供してみまして。△春風春太郎・提供△

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 42 年 4 月 号

(1967年・4月号<第21巻第4号・通刊第226号>)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

「カメラ・ルポ」

山本一章

「この女と」

魔子の巻

年も押し詰った慌しい夕暮れ時、私は一人喫茶店でコーヒーを啜っていた。客は私だけ、カウンターの向うでは若い女が鼻をすすりながら片づけをしている。ガスストーブも余りきいていないのか寒い。佗しい限りである。木村さんや大塚さんと初めて会ったのもこの喫茶店だが、それが遠い夢のようにさえ思えてくる。

私は何故か惨じめな気持ちになっていた。時計はもう六時を過ぎていた。ドアの方を向いて坐っているのだが、人の立つ気はいもない。彼は来ないのだろうか？私が奇ク誌で最も魅力を感じている執筆者の一人、辻村隆氏

を待っているのである。勿論初対面、電話の連絡だけで、ここでの待合せを約束したもの、果して彼が来るかどうか、自信がなかった。二月号のサロン楽我記での彼の呼び掛けを額面通り取って、強引に箕田編集長から連絡をつけてもらったのだが。

カップの底からコーヒーが消えて十分程経った。寒さと淋しさで私の感傷は強まってきた。若い頃、こうして何人かの女性を待ちわびた記憶が益々私の心をやり切れなくする。音楽も流れて来ない。片づけを終った女店員が新聞を拡げている。

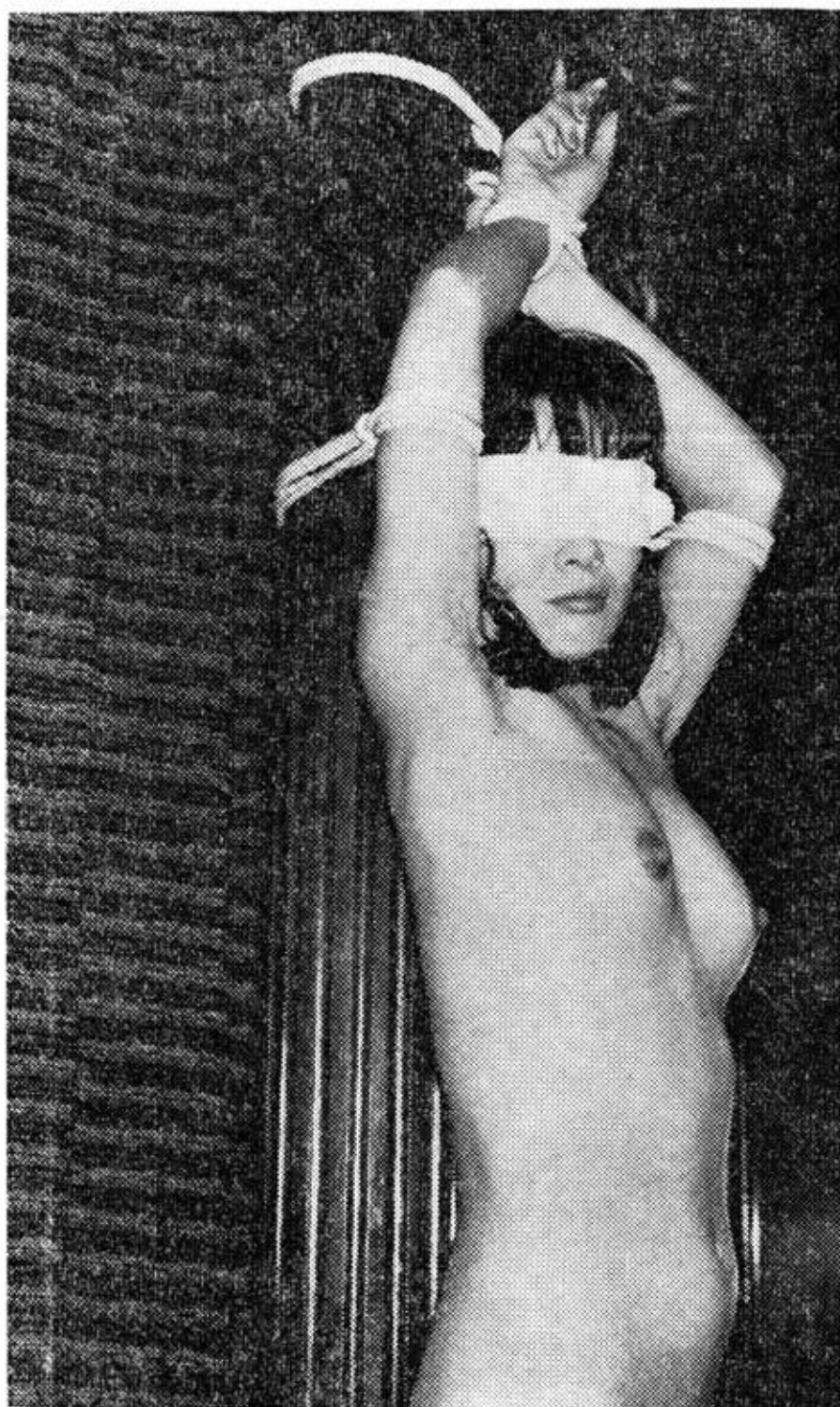
私はいたたまれず喫茶店を出た。車の中で

ラジオでも聞いている方が気が紛れるように思えたからだ。車のドアを開けようとした時、黒い影が数メートル前に立った。背の高い黒い鞆を下げたその紳士の姿は、咄嗟には私の辻村氏へのイメージと重ならなかった。しかし、尋ねなければならぬ。私はその紳士に近づこうとする。すると彼も私の方へ歩み寄った。

「山本さんですね」

彼の微笑は一瞬に、私のこわばった気持ちを吹き飛ばしてしまった。私は辻村隆氏と会うことができたのである。

それから二人は雑踏した街で食事を共にし



写真(1)

たのだが、彼との対話の内容や感想を書くことは本文とは関係がないし、興味も少ないと思われるので省略する。とに角、十数分の会話は、私達を十数年来の知己の如くにしたことだけを報告しよう。考え方も趣好も、私は彼の中に私を見る思いだった。

「どうです。これから私の家に来ませんか」

辻村氏も、私を信用されたようだった。勿論彼の家を訪ねることを拒む理由は何もない

し、寧ろ私の望むところである。

助手席に辻村氏を乗せた私の車は、国道二号線を突っ走った。住宅街の夜は早い。しかし、私達の会話は尽きるところを知らなかった。彼のコレクションの豊富さに驚嘆し、そのフォートの強烈さに目を見張っている内に、師走の夜は非情な早さで更けて行った。

私が見せて貰ったアルバムの一頁に、清楚な若い女のヌードが数葉あった。その他のも

のは、いつか誌上で見たことのある女性のものでただだけに、私の目はその知らない女性に釘づけになった。

「このひとは？」

「うーん、目が早いなあ」

辻村氏は顎をぼんと叩きながら唸った。

「綺麗な人だなあ」

「魔子ですよ」

◎今度は私の唸る番である。私はS女性として誌上に載った、その名を記憶していたし、辻村氏と芳野眉美氏との対談にも、凄い美人という形容で話題にされていたことを覚えていた。

「彼女、全くのSなんですか？」

「そうですね、大体Mの男性ばかりを相手にしているようですね」

私はこの美しい女性に特に自らSと称している魔子の裸身に縄をまわらせてみたくなかった。

「紹介して下さいよ」

「うーん、山本さんの押しには参ったなあ」

辻村氏はニヤニヤ笑いながら、思案しているようだった。この場合、押せ押せで行くに限る。

「連絡はつくんでしょう？正月明けにでも」

緒にやりませんか？」

「そうですね。彼女、どういうかわかりませんが一度連絡してみましよう。しかし山本さんがMにされても知りませんよ」

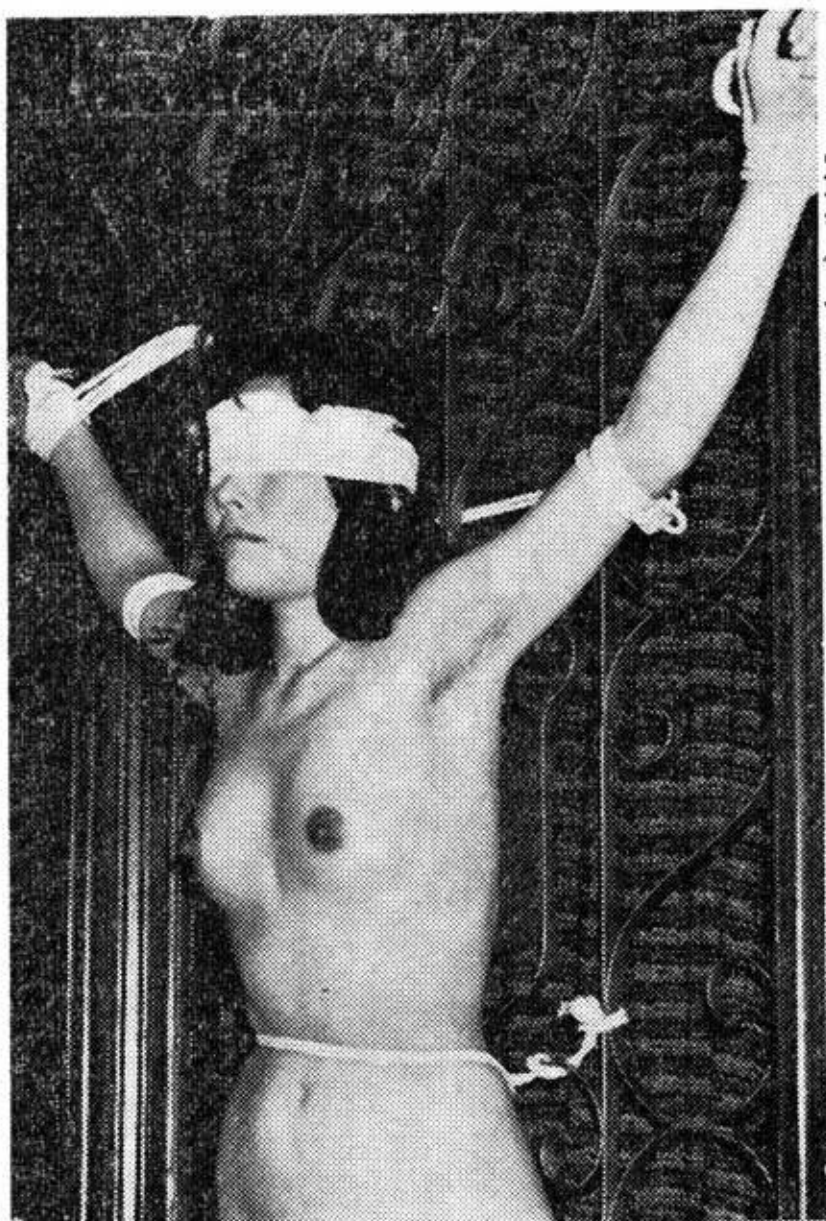
さすがの辻村氏も短兵急な私の申出に、たじたじの様子だった。それに彼自身も食指が動いたのかもしれない。年が明けてから、もう一度辻村氏に連絡することにして、私は辻村宅を辞した。

時計は十二時を過ぎて、行き交う車も少なかったが、再び国道二号線を東へ車を走らした私の気持ははずんでいた。畏敬していた辻村氏と胸襟をひらいて話し合えた喜びと、魔子と会えるかもしれないという期待とが、私の心から孤独のかげを一掃してしまっていたのである。

○

松飾りがとれて数日経った一日、私は神戸に赴いた。その日は、今冬最低の気温だとかで、時折り白い粉雪が鉛色の空から舞い落ちて来た。私は約束の午後一時に指定されたレストランの階段を上った。ボーイが席へ案内しようとするのを、待ち合せだからと断って

写真(2)



ロビーのソファに腰を降ろす。

辻村氏の姿は未だ見えない。恋人同志らしいのが近くのテーブルで食事をしている。私にはその若い男女がSとMの組合せのように思えた。辻村氏に見せて貰ったフォートの強烈な映像が、まだ私の脳裡に焼きついていていたかもしれない。私はその男女の痴態を想像していた。男女関係の窮極は所詮動物的なもの。恋愛はその芳香のようなものではないか。芳香は味覚そのものではないし、満足をもたらす力を持つてはいない。するとSやMは何

だろう。一技巧なのか、一変型なのか。

「寒いですなあ」

辻村氏の姿が階段を上ってくる私は立ち上る。彼は一人である。

「魔子は、未だ来ませんか？」

辻村氏は部屋を見廻す。

「遅いなあ。ここへ来るようにいっといたんですがね」

「来ますかねえ？」

「きっと来ますよ。あんたのこと話したら、彼女も乗気でしたからね。山本さんの趣味は話してありますから、一度ぎゅっといわせて

やりなさいよ。あつ、そうそう、私も一緒にやりたいんだけど、急に用ができて直ぐ引返さなけりゃなんのですよ。だから一人でやりなさいよ。それにしても遅いなあ。紹介だけしとこうと思って来たんですがねえ」

彼の落着かない様子に、私も気の毒になった。

「いいですよ。僕一人で待ってみますから。フォトを見せて貰っていますから、凡その見当はつきますよ」

「じゃそうして貰いましょうか。悪いですな

突然東京の人が家へ来るといふんでね。残念だがフォトが出来たら見せて下さいよ」

辻村氏は階段を走るようにして降りて行った。私は強いことをいったものの、果して魔子を見分けられるかどうか、甚だ不安になった。しかし、今更悔いて見ても仕方がない。私は覚悟を決めて階段を上って来る客を待つことにした。

最初に姿を見せたのは若い女性だった。咄嗟に立上って近づこうとすると、彼女の後ろから若い男が階段を二段ずつ大股に上ってくる

写真(3)



のが見えたので、再び腰を降ろす。次は老夫婦と中年の男。時間はどんどん過ぎて行く。

ボーイが時々私の方を見ているのを視界の隅に意識しながら、私はやけに煙草をくゆらした。真赤なブーツを履いた若い女がゆっくりと上って来るのが見えた時、私の胸は早鐘を打った。

凄く美人だし、いかにも若々しい。私は、人違いかもしれないと思いながらも傍に近づいた。

「魔子さんでは？ 山本ですが」

「ええそうよ。辻

村さんは？」

彼女は、何のためらいも見せずに尋ねる。

「彼、急用ができて、つい今帰りましたよ」

「ああそう。まあいいわ」

さばさばした態度である。私は彼女が女優かテレビタレントではない

かと想像した。

二人は直ぐ席を取って食事をした。腹のすいている私は、彼女に遠慮せずにもりもりと食べた。彼女がSと聞いている手前、余りフェミニストぶりを見せることは良くない。

「今日は御苦労だね」

「いいわよ。山本さんのこと、辻村さんから聞いてるわ。でも、今日は四時に帰らなければならぬ用があるから、無理かもしれないわ。またにする？ ゆっくりプレイした方がいいでしょう？」

オヤオヤ早速の先手らしい。

「僕もそう暇がないんでね。折角、ここまで来たんだから、このまま帰ることはできないね。四時までには帰りゃいいんだろう？」

時計はもう二時になろうとしている。善は急がなければならない。正味一時間程しかない。食事の済んだのを見計って私は席を立つと、わざと彼女を無視したような態度で先に歩いて、駐車場に向った。勿論、魔子が後から随いて来るのを意識した上である。助手席に彼女が乗る。この最初の出合いは、どうやら私のペースになったようである。時々私のフェミニストが頭をもたげようとするのを押えてはいたものの。

○ ○
部屋の中は暖かかった。洋室だが、その豪華な雰囲気はモダンな魔子を責めるのに似つかわしかった。

「お風呂に入ったら？」

「後にするわ」

「じゃ脱いで！」

魔子は私の方に背を向けると観念したようにセーターを脱ぎ、スカートをずらした。

「あまりひどいことしないでね。わたし傷つけられたり、ぶたれたりするのはいやなの」
コルセットとブラジャー姿になった魔子は、ちよっともじもじした。女らしい羞らいが、

一瞬、彼女の周辺を支配した。

「全部取るの？」

「勿論だよ」

「でも写真を撮すんでしょ？」

「僕は撮しに来たんだよ。いやかい？」

「わたし写真を撮らしたこと余りないのよ。」

「じゃ顔だけは入れないでね」

どうやら、完全に私のペースに乗ってきたようである。裸になった魔子の体は、すんなりとして美しかった。殊に乳房の膨らみが噛みつきたい程みずみずしい。

私は魔子の腕を掴んで円い柱の前に立たせ

繃帯の目かくしをする。第一発は彼女の美貌を入れて撮りたかったが、顔を撮さないでというたつての頼みなので、それだけは譲歩することにした。両手を揃えて上に両腕にも縄を巻いて柱に固定する。それが写真の(1)である。上半身だけだが、彼女の美しい体の線が出ていと思う。後の写真でもそうだが彼女目かくしをするとき少しきつい感じの顔に見える。彼女がS傾向を持っていることが、その意思の強そうな口からも理解できるようだ。しかし、顔全体としては、それ程きつい感じではなく、寧ろ愛くるしい印象だったことを附記しておこう。

私は縛ったまま魔子のふくよかな乳房の横に唇を押し当ててみた。一瞬、ピクツと肌がふるえる。しかし、魔子は何もいわない。指先でその胸と腹部を押してみる。こりこりとした弾力が抵抗する。

(いい体をしていやがる)

私は心の中で唸っていた。

休まず次の姿勢に移る。柱の間の大の字である。写真(2)を御覧願いたい。口にだんだらの紐を咬ましたのだが、印刷に出るかどうか。もっと濃い色のものにしたら良かったと後で悔いたが致し方ない。勿論、足も左右

に開かせて縛りつけてあるのだが、全身像を發表できないのは性質上止むを得ない。この姿勢のまま、しばらく放置して、私は煙草を吸った。なかなかいい眺めだし、私の優越感も快い満足を示す。これで鞭打ちができれば満点である。余った縄で軽く腰のあたりを打ってみる。

「アウアウアウ」

魔子は紐を咬んだまま何か言おうとする。

それを無視して力一ぱい叩いてみたかったが初対面だから、それは遠慮して口の紐だけを弛めてやる。上に挙げたままの手がひどくだるいという。見れば腕に巻いた縄のあたりから先が失血して青白くなっている。一旦縄を解いて休ませてやることにする。しかし、時計を見ると残された時間は少ない。

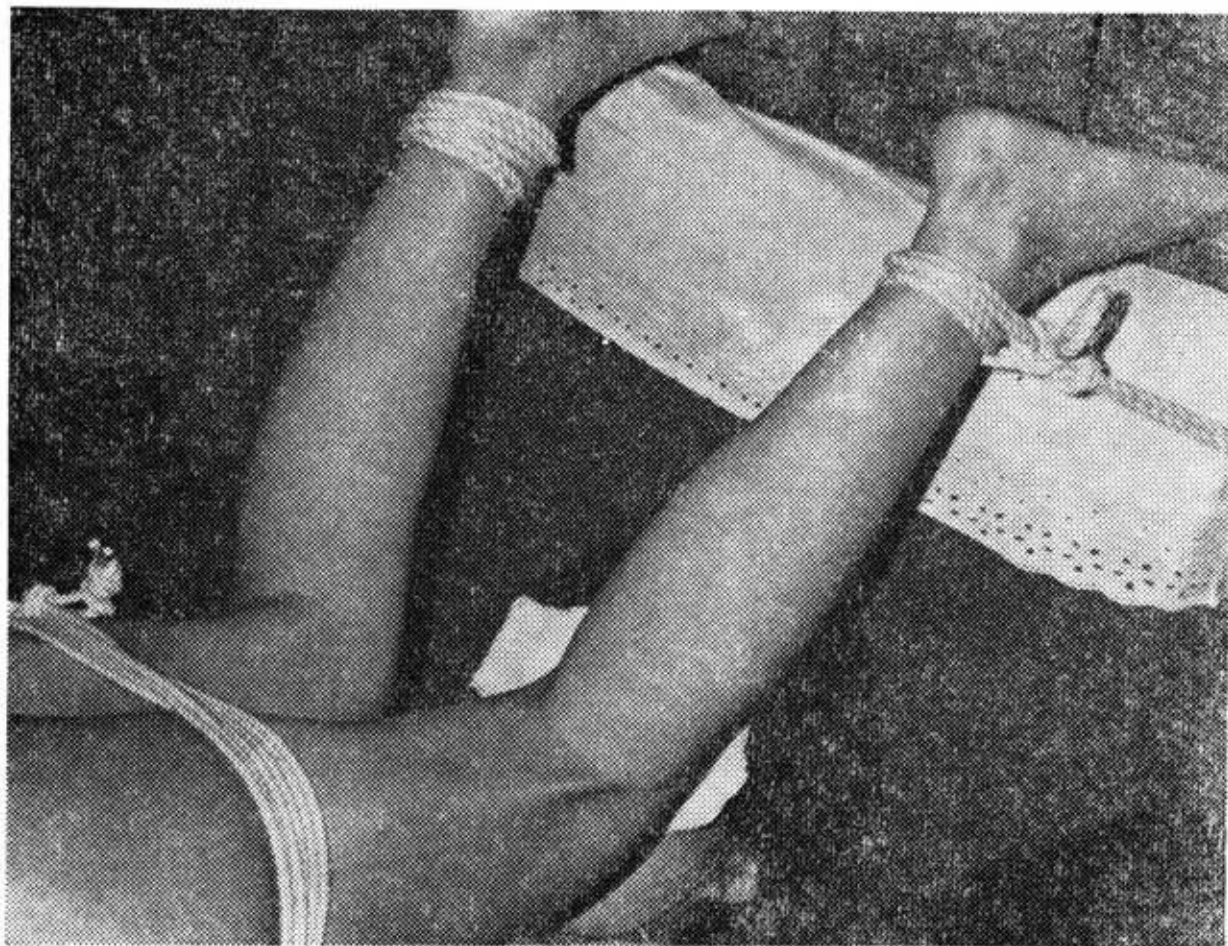
「写真を撮すだけなら、そうきつく縛らなくともいいんじゃない。きつく見せさえすれば、いいんじゃない？」

「そうは行かないな。本当にきつく縛らないと興味半減だよ。まあ写真とプレイと半々のつもりだから」

魔子はもう反論しなくなった。五分足らずの休憩で次に移る。首縄をかけて後に合わせ、手首を吊り上げるようにして縛る。そして

首の前で首縄に通した縄を振り分けて両腋をくぐらせ、乳房の下に廻わす。そのまま椅子に坐らせてから両足を開かせ、椅子の袖に足首を縛る。それが写真(3)である。

写真(4)



足を縛る時少し抵抗があったが、私は強引に開かしてしまった。もうここで来れば遠慮することはない。それに時間がないから急がねばならない。目かくしと口の紐だけを解いてから一旦椅子から立たせ、そのま

ま押し倒して椅子に寝かせる。そして両足首に別々に縄を巻きつけてから体を二つ折れにさせ、足首を椅子の背に固定する。胴と太腿とを一つにして縄を巻くと、女性にとって羞恥の姿が完成した。カメラを構えると、魔子は顔をよじらせて叫んだ。

「顔をかくして／お願い！」

弱い女性に弱いのが私のフェミニストである。先刻目かくしに使った繃帯を顔に載せてやる。それが写真(4)である。カットした部分が多過ぎて写真としては不細工なものになってしまったが、これで想像していただくしかない。この姿勢で私が次に実行する責めは、燭台である。

「蠟燭を使うよ」

「……………」

「ちょっと置くだけだから、いいだろう?」

「でも火をつけたらいやよ」

短いのを二つ、折れ曲った臀部に置いてから、細手のものを私は取り出した。

ストロボの閃光が、その魔子のみじめな裸身を次々とフィルムに刻んで行く。三本の蠟燭に火のついていないのが物足らないが辛抱する。細手の一本を彼女の体で保持させただけでも大きな収獲なのだ。その一本が時々倒れかかるのを私は非情に立て直す。その度に魔子の体がピクピクと動くのが私の掌に伝わってきた。私の目とカメラのフィルムは、美しい魔子のすべてを写し取った。

「こんなの初めてだわ。ひどい人」

縄を解いてやると、魔子は私をにらむように見つめてつぶやいた。

「山本さんにも、してあげようか?」

「余りそんな趣味はないね」

「今度、ゆっくり責めてあげる」

もう時間切れである。私はふと、この美しい少女に責められてみたらと考えてみた。それは、ちょっと興味のあることだった。そしてMの男性なら、この魔子の手で責められることに歓喜するだろうと思った。Mの気持がわかるような気がした。しかし、ミイラ取りがミイラになってはいけない。

入浴を済ませた魔子は、そそくさと服を着た。部屋の中は暑くて彼女の顔は汗ばんでいた。コーラを二本注文する。壘の栓を抜いた魔子は私のコップにも注いでくれる。そこには女王の面影はなく、従順でしとやかな少女がいるだけだった。

「また連絡して下さる？」

「そうだね」

私は魔子に対して、終始姿勢を崩さなかった。SにはSを以って制するという考えが成功したようである。所詮女のSはMと背中合せなのかもしれない。

車に戻ってから私は魔子に若干の紙幣を渡

す。彼女は黙ってそれを受取る。マニキュアされた指が綺麗だった。外は相変わらず寒く、粉雪は大粒の雪に変わって六甲の山並を白くぼかしていた。黙って助手席に坐っている魔子は心なしか元気がなかった。

「疲れた？」

「ううん、ちょっと考えごとをしてたの」

私は魔子をいじらしく思った。Sの女王も女には違いなかった。そしてSという先入感で彼女に接してきただけに、その従順さが余計に彼女の娘らしさを強く私に感じさせたようである。駅まで送った私に、魔子はそつと手を差し伸べていった。

「さようなら。また会ってね」

その手はかぼそく、そして暖かった。

私は雪の烈しくなった二国を東へ、車のアクセルを踏み込んだ。

僅か一時間余りのデートではあったが、魔子との強烈な思い出は、恐らく私の記憶から消えることはないだろう。

(おわり)



煉獄

黒井珍平

「ギリシャ神話」ますます面白くなってきた所へアラビアンナイトも入り込んできて、さていくつかの訳業を拝見していると、これ又『コーラン』の世界が開けてお

り『コーラン』にちりばめられた言葉が、キリスト教の殊に旧約聖書の中でも、特に、「創生記」(有名なアダムとイヴ、オナン、ソドム、ロトなど大変古くて最も新しい数々

の暗示)が必要になり、いや忙しいこと。

我ながら『コーラン』と『ユダヤ教』の密接なつながりを知らなかったこと、いささかあきれ、もう少し若い時に勉強すればよかったとも思い、いまからでも遅くないとも思いつつ、もっともっと歴史を楽しんでゆけば、ギリシャ、エジプト、パピロンコーラン、仏教に、どこかにつながりが見出せるのではないかと、これ又独学のたのしさ。アラビアンナイト一つでも、バートン版千夜一夜物語(角川文庫21巻)は、バートン

の注を読みながら読み進むと実に面白い。

河出書房で今度出したカラー版第一巻は（全七巻）文庫本と内容は殆んど同じで古沢岩美氏のさしえやら何やらがあるちがい。

岩波（27巻）マドリウス版は、何人かの方々の訳業でバートン版と比較しようにも、途中からまるきり話がちがってきています。しかし岩波のマドリウス版は一切注がなく、さりと書かれています。これはこれで面白い。

東洋文庫（平凡社）でアラビアンナイト全十五巻中、二巻出たそうですが、まだ見つけておりません。これはバートンが使用したと同じ底本（マック版）を使った初の日本人によるアラビア原典訳だとのことと期待しています。

以上何故長々と書いたかという、千夜一夜物語を始め、ギリシャ神話、旧約聖書コーラン、マヌの法典（インド）等にちりばめられたSM、エロティシズム、その他さまざまのものが、ここにあり、週刊誌や月刊誌にはかなく消える小説読物とはちがった本物が、そこにあるといったかったからです。新潮文庫のダームギャラント、プ

ラントーム、艶婦伝なども、文庫本であることなどで、余り人の目に立ちませんが、実に面白いものです。（英訳、日本語があつて仏訳はないとのこと）

○

その中御紹介したいと思いますが、私の最もかげながら崇拜している名古屋で出ている「作家」の同人、稲垣足穂先生（恐らくある時がきたら、谷崎、佐藤グループに入る方）の「少年愛の形而上学」（Ⅲ）作家一三九号（昭和35年4月1日発行）一七一頁下段七行、八ある時ロンドンの英国学士院の若手連中のあいだに「東西の書典に曾て見ざる淫法一つだにありや？」が論じられていた席上へ青年南方熊楠が顔を出した。丁度よかった、彼は両脚のあるエンサイクロペディアだから早速たずねてみよう。こうなつて南方は即座に、「女子が蠟師父^{ハリカタ}を以て男子の後庭を犯すことなし」と答えた。いかにも、と一同を感心させてしまった。Vところが、其の後、南方はバートン訳「千夜一夜」中に、久しく別れた女が、一地方の王となり、曾ての男が流浪してやってきたのを弄ぼうとして、自ら男装して言い寄る場面があった。「ふーむ、天

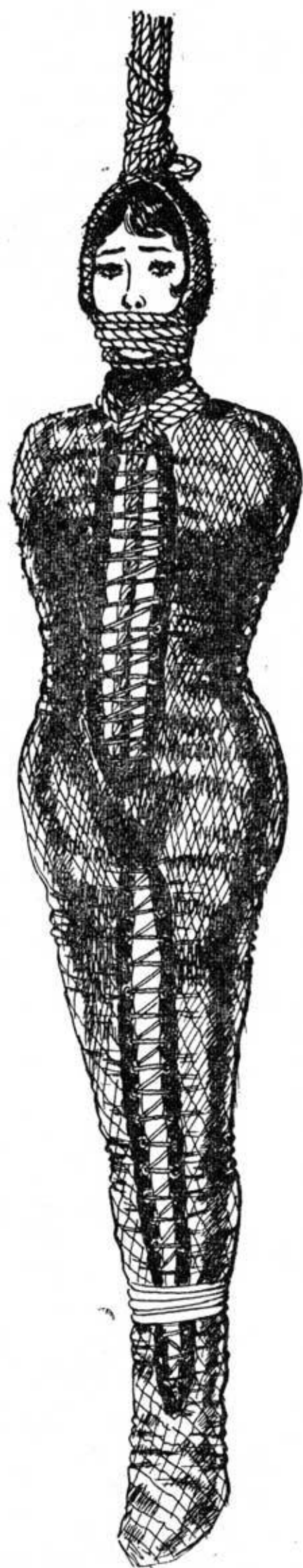
下あらざる所なし」今度は本人が唸ってしまった。まあ一寸、引用させていただきましたが、バートン訳の面白さ、おして知るべし。

私自身は、女性を八かわいらしく、しばるV趣味の人間なのに、稲垣先生のものに、ちがう世界ながら、そのデリケートな神経に魂をゆすぶられる。佐藤春夫氏の高弟として、いやそれ以上の存在。これを「作家」その他を読む以外に、方法はありませんが（全集も或る社では出ている筈）稲垣先生の「少年愛の形而上学」はあく迄、夢の又夢であり、見果てぬ夢の美しさを永遠に追っておられる一貫した姿の美しさです。

稲垣先生のエッセイには、奇くもまたま引用されます。特に古川裕子さんの記事全文引用され（これは本月）一言にして言え、^{（口唇）}「A感覚は（V感覚と共に）P的消耗性の上に君臨している」（第三章、高野六十那智八十）ことであり、人間の体のO（口唇）P、A、Vの四力所の哲学だ。稲垣先生は凡て、このA感覚の美学に終始している。（この項おわり）

小説「秘密パーティ」

津 治 良 一



1

市谷洋三がS大学に在学していた時のことである。彼の友人の一人に河盛信雄という男がいた。語学クラスが市谷と一緒にであったのだが、河盛はそのクラスで一番成績が良かった。成績が良かったから友人に選んだと思われては、市谷は困るだろう。彼は巧利で友人を選ぶような男ではなかったから。それはと

もかくとして、市谷と河盛は親しい間柄となった。

彼らと同じクラスに進藤好子がいた。好子は面長の、ほっそりとした顔立ちであった。秀でた額やよく通った鼻筋が、清楚な感じを見る者に与える。市谷の当時知っていた女性の中でもっとも美しかった。

好子の母はアメリカ人で、父は日本人だった。父はルーテル派の教会の牧師をしていた

牧師の娘ということから、市谷は彼女を聖母マリアのように清らかな人間として、心に描いていたのであった。事実、教室や構内における好子の行動は、それを裏付けするのに充分なものだった。

市谷は何とか好子に近づこうとしたが、それはならなかった。彼よりも先に、河盛が近づき親しくなるのに成功したからである。市谷は、好子に関しては河盛が時々もらす情報

で満足せざるを得なかった。彼は河盛に、好子が好きだということを示すような素振りや言動をほめかしたことはなかった。が、河盛の方はうすうす、市谷が好子のことを好んでいるのを感じとったらしい。時々口もとに笑みを浮かべては、好子のことをあれこれと話した。

「きのう、あの子にキスしたんだ。そしたら彼女ったら顔をあかくしてね、下を向いていたよ。ぼくもテレたけどね」

とか、

「昨晩は二人とも興奮しちゃってね。ことに彼女がそうだったんだ。暗い所だから良かったんだけど、通りでね、突然ぼくの手を取ると胸に押しつけるんだ。驚いたよ。女なんて恋におちると皆同じなんだな。少しがっかりしたよ」

などとオノロケじみたことを言われると、市谷は癪にさわることに、この上なかったが、なんとか我慢した。

市谷は心の中で、清楚な面影をしのばせた好子を懸命に描き、河盛とキスしたり愛欲にまみれたりするような好子は抹殺した。

ある日のこと、河盛は市谷に、
「ぼくの別荘へ来ないかい。面白いことをす

るんだ。好子も来るんだぜ」

「ダンスパーティかい」

「そうとも言えるがね。つまり、ダンスもすることがある。女は何も着ないで踊るんだけどね」

「何も着ないでだって」

「そうだよ。生まれたまんまの姿でね。ね、分るだろう。これは秘密パーティなんだ。警察や世間に知れると、ちよいと具合が悪くなる。そんなようなパーティさ」

市谷は信じられなかった。信じたくもなかった。そういうようなパーティがあるとは、よく聞いていたのであるが、好子がそういうものに出席することは絶対にありえないと思っていたからだ。

「好子さんも出席するのかい」

「ああ、そうだと。信じられないかい。嘘だと思ふなら来てみるがいいさ」

市谷は即座に、行くさ、と返事した。河盛の、別荘は、鎌倉の海のながめられる場所にあった。二階だての鉄筋の建物で、庭は千坪以上もあるだろう。彼の東京の家よりも大きいと思われる。実際、河盛の家は東京の方が別荘で、鎌倉の方が本家というのが正しい。もともと河盛家は鎌倉に住んでいたのではあ

る。ただ、現在は家族の者の都合上、皆東京の家に移り住んでしまったのだ。河盛の父はH製薬の社長であり、東京に住んでいた方が仕事に便利だからであった。

河盛と市谷が、その鎌倉の別荘へ着いたのは、夕刻であった。家は誰もいず、暗く閉ざされている。河盛は戸の鍵をあけると、市谷を中へ導いた。家の中はきちんと整頓され、家具には白い布がかけられている。週一回女中が家を掃除しに来るのだ。誰も留守番をする者がいないのは不用心だと市谷は思った。それを河盛にきくと、彼は、

「誰も泥棒にはいったものがないのでね。それに留守番なんか置いておかれては、我々の楽しみをどこでやろうと言うんだい。くだらないことはきくなよ。楽しむことだけを考えていればいいんだ」

と、冷笑するように答えるだけだった。

来る途中で買い集めたシャンペンなどの酒類や、菓子、ケーキなどを車から取り出して台所へ持って行き、酒は冷蔵庫の中へ、菓子やケーキは台所の棚に置いておくと、二人はサロンと呼ばれる広い部屋へ行き、そのソファに腰をおろし、客を待った。

やがて、表で自動車のとまる音がして、市

谷の見知らぬ男女が二人、中へはいって来ると、河盛はその二人に挨拶し、二人もそれに返事をした。そして、持ってきたものを二人は台所へ運んだ。こんな風にして、続々と客がやって来た。皆、何かしらパーティに必要なものを持ち込んできているのが、市谷には分った。そこで彼が言った。

「完全なワリカンだね」

「そうさ。楽しみも、パーティに必要なものも、各自に分かち与えるのだ」

舞台上でセリフを述べるように、茶化した口調で、河盛は答えた。これからのことを考えると楽しくてたまらないという様子をしている。

進藤好子は一番最後に姿を現わした。淡い空色のドレスを着ている。胸の上のあたりに赤い花のアクセサリーをつけ、あでやかな感じを与える。しかし、全体の印象は清潔そのものであって、教会でお祈りするには相応しいが、このようなパーティに現われるには場違いという感はまぬがれない。

「やあ、別嬪さんの御登場だね」

という、河盛の囁きような言葉を聞くと、彼女は河盛の方へ眼を向け、その隣りにすわっている市谷を見出した。

市谷と好子の視線があった。市谷であることが確かになると、意外といった顔付きで近づいて来て、ニコリともせず

「あなたが来るなんて、思ってもみませんでしたわ」

市谷が彼女に言いたいことを、先に言ってしまった。

「河盛君にさそわれましてね。面白そうだから来てみたんですよ」

言いたいことを抑えて、市谷は、当り前のことを言うはかなかった。

二人の会話を傍で聞いていた河盛は、ニヤニヤした顔をしている。

客は全部で二十人集まっている。男十人、女十人である。男女同数ということは、最後にはどういふことになるかを、はっきりと示している。男の方はサロンで雑談を交わしている。女の方は、二階にあがってガタゴト用意をし、また、台所にも何人かいて、料理の支度をしているらしかった。料理のにおいがプーンとする。

市谷は、最初はかたくなっていたが、しだいにほぐれ、サロンにいる男たちと、あれこれと言葉を交わした。が、こうやって男はのほほんとしているのに、女は働いている。そ

れが気になって、河盛に、

「男は手伝わなくていいのかい」

「バカ言いなさんな。ここは男の天国なんですよ。男は絶対的な権限を持っていて、女をどうしてもいいんだ。男の言うことには、無条件に、女は従わなければならないんだ」

そのように言う河盛の口調は熱っぽかったが、市谷には理解できなかった。

男に従いたがる女なんて、めったにいるものではない。家に囲っておいて逃げ出さないようにしておかなければならない筈だ。男にいじめられたくて、わざわざ男の家に来る女がいるだろうか。しかも、料理の材料をもつて来て料理もするのだ。こんな不可解なことはない。そこで市谷は河盛にきいた。

「じゃあ、あの女たちは、自主的に、自ら進んで、男に従いにここへ来ると言うのかい」

「そうだよ」

「そんなバカな。いじめられたいと思う女がどこにいる」

「それを云うのなら逆だよ。いじめられたくないと思う女がどこにいる、と言うべきだ。女なんて根はマゾヒストさ。一度ムチを受けたことのある女は、二度目からは喜んでムチを受けるね。そうするためには、何でもする

よ。男の氣にしていることをしてね」

「信じられない」

「事実だから仕方ないよ。だから世間の奴らは女をムチから守ろうとして、道徳だの何なのとほざいて、必死になっているのさ。もし全部の女がムチの味を知ったら、世界中の機能がマヒしてしまうからね。そこで、そんなことをするのは我々特権階級だけとなるんだな。だから、我々は選ばれし人、つまりエリートというわけなのさ」

そこへ女の一人が夕食のできたことを知らせに來た。サロンに集まっていた男たちは二階へあがった。二階にも大広間がある。宴会の時などに、客をもてなすのに使ったのであろう。青い畳が敷かれ、二十畳近くありそうである。市谷の当時住んでいた家が全部はいってしまいうような広さだ。これには市谷もクサったようだった。

料理は分厚い、腹がムカムカするほど大きいピフテキ。ほかに野菜サラダの山とトリ肉など、豊富であった。シャンペンを水の代わりにして、これらを片づけて行く。余り食欲の進まぬ市谷に河盛は、ご機嫌な調子で言った。

「よく食べてスタミナを充分につけておけよ」

な。これからは活躍することが多いんだからな。すぐ腹がへるぞ。それに肝心な深夜に、スタミナ欠乏で何もできなかったら、女の手前、みっともないぞ。ハッハッハ」

女たちも良く食べた。これがあの淑やかな女性かと驚くばかりに、ガツガツと食べた。量もまたすごかった。市谷は好子の方を注視した。大学食堂での食べ方とはまったく異なる。人間は表ばかり見てもダメなんだなと、市谷は好子の食べる様子を見て考えた。

腹が一杯になると、少し休みがあった。女はその間に後片づけをする。男の方は寝転がって、とりとめもない話をしていた。後片づけもすみ、腹も軽くなってきた時、河盛は大きなあくびをして言った。

「そろそろ遊び始めようじゃないか」

まず準備体操を、という訳でブルーフィルムが上映された。市谷は初めて見るその種の映画に興味深々だった。三本ほど上映すると今夜の本番が始まった。

2

ゲームの名は『名あて遊び』というものだった。大広間に針金を渡して、そこにカーテンを通すと、大広間は二分されてしまう。女

は、その大広間を区切るカーテンの向う側に行き、男たちからは見えない。

柴田という名の男が、奇妙なフスマのようなものを持ってくる。そのフスマのようなものには、大体人間の胸ぐらゐの高さのところ、コブシぐらゐの大きさの穴が二つあいてある。それを柴田はカーテンの近くへ持って行って立てた。立てられるように細工がほどこされていたのだ。

男たちは酒でホロ酔いになり、さきほどのブルーフィルムで適度の刺激を受け、いい気分になっている。そして、ガヤガヤと話しながら、そのフスマのようなものの側に行きつてすわる。眼をあけられた二つの穴に向ける。彼らは女の用意がすむのを待っていた。

カーテンの蔭に隠れた女たちは無言であるらしく、話し声は聞こえてこない。だが、何か音がする。着物を脱いでいる音らしい。ドレスのジッパーをはずす音や、ブラジャーのホックをはずす時のポツンという音が、カーテンの向う側から聞こえてくる。やがて、

「用意はいいわよ」

という、元氣のいい声がした。

「こっちもいいぜ」

カーテンの蔭から女が一人出てきたらしい

のだが、男からはその女が誰だか分らない。フスマのようなものの真うしろから出てきたから、遮られて見えない。カーテンの動きで出てきたらしいことが分るのだ。女の中の一人在例のものの背後に立つ。

やがて、コブシ大の穴からは、女性の乳房がニューッと出現する。顔も何も見えない。ただ乳房だけが見える。そこから、その乳房の持ち主である女の名前をあてるのだ。

市谷には答えられる筈がなかった。彼は出てくる乳房を唾然としてながめるだけであった。むっちりと盛りあがった乳房、かたく平らな乳房、細く突き出た乳房、などと色々あった。彼の頭は混乱した。

ほかの男たちは違った。真下に陣取って、むさぼるように見る。乳房の大きさや色つやまた乳首の色の具合などを入念に見て取る。全然分らないのだと、眼を皿のようにして、それを近くで見る。それでも分らないと、

「さわってもいいかい」

「ルール違反よ。見るだけよ。ちゃんと一メートルは離れてなきゃダメよ」

と、カーテンのうしろから声がする。

男たちは、それでも、ようやくのことで、全部の名を正確に言うことができた。が、混

乱した市谷には、どれもこれも同じに見えるようになった。そんな彼でも好子のだけは、この次からはすぐ答えることができるであろう。好子のだけは印象的であった。

市谷が彼女に気があるためかもしれないが、彼女の乳房には大変特徴的な点があり、彼女のだけはどの人もすぐ答えることができるだろう。右の乳房の頂点のすぐ下にある、大きな黒いほくろがそれだ。

好子の乳房が突き出された時は、皆は、すぐさま合唱するように、

「好子さんだ」

「好子さんののは、すぐ分ってしまって面白くないや」

「バカ言うな。女神のごとき神々しい乳房をおがめるなんて、我々は幸福だと思わなきゃいかん。ああ、素晴らしい乳房」

男たちがそんなことを言い合っている間に好子は恥ずかしくなったのか、乳房を引っこめてしまった。好子のは、突き出された個所から判断しても、豊かな、柔らかみに満ちた乳房であることは、すぐ分るだろう。それは見る者をムッとさせるほど白く、魅惑的に輝いている。感嘆して市谷は河盛に、

「好子さんは、すごいグラマーだね」

「そう乳房ばかりじゃないよ。体のほかの方もすごいよ。もっとすごいかもしれないね。腰や脚なんかもお見逃しなく。今晚は好子と一緒にすごすのがいいと思う。そうなるように取り計らっておくよ」

「ぼくが、好子さんと……」

「何も驚くことはないさ。女はそのため存在するんだから。彼女は、きっと君にサービスすると思うよ。一緒に寝たくないのかい君は。そんなことはないと思うが」

「ああ、そう願いたいね」

そうは言ったものの、市谷は内心ショックを感じていた。好子の清純な面影を彼自身の行為によって、決定的に破壊するのが恐ろしかった。が、好子がそれほど女であるのならば、もう清純とかなんとかと言うことは打ち切りだ、と市谷は考えた。思い切っていじめぬいて、今まで彼に誤ったイメージを抱かせ続けてきた彼女に復讐してやろう、と思った。

『名あて遊び』は終わった。フスマのようなものは持ち去られた。だが、カーテンはまだあり、女はその蔭に隠れて姿を見せない。

次のゲームのために、男たちは等間隔に円

をつくるようにすわる。今度のゲームも男は見て楽しむだけである。女たちの演ずることを見ているだけでよい。市谷は何をするのか見当もつかなかった。河盛にきいても、見れば分る、という返事を与えられるだけだ。

柴田というさっきの男が、女十人の名前を書いた表を持ってくる。二人ずつ組み合わされている。高校野球の時の試合表のようなものである。とすれば、女たちは競技をするのだらう。市谷はそこまで考えることができたが、何を競技するのかは分らなかった。彼は好奇心にかられていた。

「第一試合、福田富子と高畑美樹」

そう河盛が言うと、カーテンの蔭から、二人の女が出てくる。しかし、やはり、片手を胸にもう一方の手を下にあてて出てくる。が、これは恥ずかしいと見せて男の心を煽るためかもしれない。男を喜ばすことを芯から心得ている女たちであるから。

「手を背中へ持って行け」

富と美樹は手を背へ持って行く。すると男は寄ってたかつて縛りあげてしまふ。高手小手に縛られ、胸までも二巻き三巻きに縄をまわされてしまふ。こうして手の自由をまったく奪われた姿勢で女は戦うのである。そして

相手を倒せばよい。

ルールとしては、してはならぬことは存在しない。相手を倒すためには何をしても良いのである。噛みつこうが、蹴つとばそうが、大いに結構なのである。相手を倒しさえすれば、それでいいのである。

手を使えない故、体のほかの部分を使わなければならぬ。一番重要な武器は脚だと言える。そして、一番有効な手は蹴つとばすことである。これには度胸がいる。足をあげるのだから、男の眼の行くところは決まっている。羞恥心が働くと、体がかじかんでしまつて言うことをきかなくなる。従つて、負けやすい。女性の羞恥心は微妙である。その日その日によって異なる。それ故、この勝負では常勝將軍はいない。誰が勝つか分らない。男たちは、きょうは彼女恥ずかしがっているなと思つて、羞恥に震える女の体を視線で舐めまわすのである。

「西、福田。東、高畑」

河盛の呼び出しに、二人の女は、男たちのつくっている円陣の中へはいる。双方とも若々しく引き締まった体をしている。腕をふせたような乳房の上下には、きつく縄がくい込んでいる。まだ二人とも二十才にはなってい

ないのかと思われる。

円の中へはいった二人は、二、三メートルの間を置いて、向い合つて立つ。仕切りをする。仕切りと言っても手を使えない。脚を開いて、前かがみになるだけのことである。

「見合つて」

という掛け声に、富子と美樹は、脚を一メートルぐらい開く。そして勝負が始まる。二人は互いに体ごとぶつかる。肩と肩、胸と胸とが激突した。それでも双方、悲鳴もあげずひるむこともなく、押し合いをする。

「蹴つとばせ」

という声も耳にはいらぬらしい。富子は首を低くすると、顔を美樹の胸にもぐり込ませて、そこを思い切り噛んだ。美樹は悲鳴をあげ、後へのけぞった。そこを素早く富子は脚をかけ、美樹を倒すことに成功した。

「西、福田の勝ち」

二人はまた向い合い、一礼する。美樹の胸には赤く齒のあとが残っている。二人はカーテンの蔭に隠れた。河盛は、福田富子という名をマジックで消す。強者は一度だけで済むが、弱い者は何度も戦わなければならないのである。そして、最も弱い者が何か罰として演じなければならないのだ。

市谷は好子に注目していた。彼女は第五試合に、つまり第一回戦の最後の試合に出てきた。出てくる時、手で前を隠していたが、大部分の肢体は明らかに市谷の眼に映った。

白くふくよかな体だ。十人の女の中で最も脂肪がのり、むっちりとしている。市谷はまぶしそうに見た。見てはならぬものを見るように、横眼を使って見る。だが、ほかの男たちは、豊かな肢体をジロジロと観察するように見た。どう見ても二十才前後とは思えない。成熟した体である。アメリカ人である母の血をひいていることは、はっきりと分る。

好子は、前を手で隠したまま、河盛のところへ来た。市谷は彼の隣りにすわっている。市谷は、好子のよく伸びた、脂肪ののった脚を見た。まっ白な内腿に、緑色の血管が透き通って見えた。河盛は好子に、

「手を背中へまわせよ。縛らなきゃいけないんだからな」

それでも手を離さない。河盛は立ち上ると好子の腕をつかんで、強引に手を背中へ持つて行く。好子は耳をあかくした。

「今さら恥ずかしがる柄でもないくせに」

と言って、河盛は好子を縛りあげる。ガッチリ縛ったかどうかを調べると、好子を引き

て市谷の前に連れて行く。

「どうだい、さっき言った通り素晴らしいだろう。見てもいいけど、触ればもっといいことが分るね。どうだい、このヒップ」

言いながら、好子の尻をさすっている。市谷は真正面に立っている好子をチラッと見てあわてて眼をそらした。好子は天井を見て、体をガタガタ震わせて、この屈辱にたえてい

る。河盛一人がエツに入っていた。

「さあ、勝負だ、勝負だ」
河盛は強く好子の尻を平手打ちした。パチンという大きな音がする。

好子の相手は、島野歌子という、胸だけが異様に大きな女である。二人は向い合う。仕切りをするのだが、好子は余り開かない。

「もっと大きく開くんのだ」

そう言われて、好子はかたく眼を閉じて、言われたようにする。呼吸が激しくなった。胸の隆起が大きく動く。勝負はあっけなかった。好子はすぐ倒されてしまった。

一回戦で負けた五人と、くじ引きで、勝った者の中から一人を選んで、第二回戦が行なわれた。そこで負けた三人が第三回戦を行なう。リーグ戦形式で、そこで勝ったものは除外され、二人の女が残る。その二人の中に好

子もはいった。彼女は全試合を通じて、動きが鈍かった。市谷を意識していることは疑う余地がなかった。美しい肢体は転っては、淫らな姿を見せるのであった。

3

最も弱かった二人に何をさせるか、男たちは相談している。市谷はそこに首を突っ込んだものの、発言はしなかった。河盛は上機嫌であった。好子の羞恥心を見抜いて、興奮しい気分になったらしい。市谷も黙ってはいない。内心興奮していた。自分が来たから好子が恥ずかしがったとすれば、彼女は自分にいくらかの好意を持っているのではないか、と考えたからである。もしかしたら自分を愛しているのではないか、とさえ飛躍して考えた。想像力はいつも、限りなく前進して飛躍してしまうものだ。

男たちの発言は活発であった。相撲をとらせようとか、レスリングをやらせようとか、二人にもう一試合やらせて負けた方をたっぷり責めようではないか、などと色々の意見が出た。各自、自分の主張をゆずらなかった。「だが、待て。ゆっくり考えるんだな。今日の好子は動きが鈍い。恥ずかしがっているん

だな。こんな時に、相撲やレスリングをやらせても面白くない。ここで考えるべきなんだな。僕としては、二人には同性愛を演じてもらうべきだと思うね。強烈だよ、これは」

河盛のその言葉に、皆は賛成した。男たちの相談はまとまった。二人は同性愛を演ずるようになった。市谷は好奇心に満たされた。どういふ風にするのであろうか。

「相談はまとまったぞ」

河盛がそう言うのと、女たちはカーテンの陰から出てくる。勝った八人は服を着て、男たちの間にすわった。一番あとから、進藤好子と高瀬光子が現われた。光子は好子とは対照的に筋肉質の体をしている。カモシカのように細く、しなやかな肢体である。乳房も小さくかたく突き出ている、きりっと引き締まっている。指で突いても、はじき返えされそうなほどだ。

好子と光子は、そのまま河盛の前に立つ。自由になっている手で前を相変らず隠す好子と、手を背中にまわして脚を開き気味にし、挑発するようなポーズを取っている光子を、河盛は見つめながら言った。

「君たちは同性愛を演ずるんだ、分ったね」
光子は微笑を見せてうなずいた。だが、好

子は青くなり、体をブルブルと震わせて、うつむき加減に、小声で言った。

「でも……」

「でもだって。どうしたと言うんだい。初めてやるんじゃないし。今までだって楽しませてくれたじゃないか。すごい熱演をしてね。それがどうだ。でもだとさ。お前は男の言うことを、きかないと言うのか」

好子は必死な哀願の眼を向ける。河盛はそんな好子を楽しみながら、命令に従うように言った。恐ろしく威圧的な調子であった。

市谷は考えた。もしかすると、河盛が自分をここへ招いたのは、好子の羞恥心を増すためではなかったろうか。市谷は君のことを聖母マリアのように清純だと思っているよ、と河盛が好子に語っていたとすれば、彼女は市谷に対して清純な面を見せて、彼を裏切らないように努力する筈だ。人に良く思われると、なるべくそのイメージを裏切らないように行動することが人にはよくある。そして、もし自分の悪い面が露わにされると、人は死ぬほど恥ずかしい思いをするものだ。好子は市谷に聖母マリアとは程遠い自分の姿を知られた時、苦痛を感じたであろう。河盛のねらったのはそれであった。しかも今度は同性愛

の演技という最も秘密にしておかなければならないことを、人前でして見せなければならぬ。それを市谷の前でなすという苦しみ。たしかに、好子には市谷が負担になったに違いない。頭のいい河盛が、そのことを計算しなかった筈がない。

「じっさい、好子と光子はいいコンビだな。見ていてはれられするよ。僕は大的ファンなんだ。期待を裏切らないでくれ。大いに楽しみにしているんだから」

河盛はそう言って、布団を持ってくるように、とつけ加えた。

「好子の手は縛っておこう。今日は調子が変わだからな。逃げられたりなどされては困るんだ。しっかりやるんだぞ、好子」

好子の傍へ立ってそう言うのと、彼女の尻を平手打ちして、縄で手を背中で縛った。

布団が運ばれてきた。好子は観念したのか眼を閉じて、その上に寝転んだ。演ずる二人を除くすべての者が、その周囲に集まった。男の視線は豊かな好子の全肢体のすみずみまで行き渡る。皆、よだれを流しそうな顔をしている。

同じく光子が好子の傍にすわった。死んだように動かない好子の体をながめる。

「はじめろ」

光子はゆっくりと体を折り曲げると、彼女の顔を好子の顔に近づけた。二人の唇が重なる。初めは軽く、二度目は深くゆっくりと。

「好子、口を開ける。舌を出すんだ。もっと濃厚にやるんだ。気分を出せ」

好子は、どうとでもなれ、と言った風に口を開き舌を出した。光子の舌がそれにからまる。よだれがあふれ、頬を伝って落ちる。

やがて、光子の唇はだんだんと下へ降りて行き、好子の首筋に、肩にと接吻の雨を降らせる。好子は努めて感情を抑えた表情で、それを受ける。まだ目は閉じたままだ。汗が額から湧いてくる。

光子は自分の動作に陶醉しているようであった。ゆっくりと念入りに、まるで神聖な儀式を行っているかのようにやった。

好子の雪のように白い体が、段々と赤味を帯びてくる。好子は鼻翼をふくらませた。呼吸が激しく荒くなってくる。口をうっすらと開き、白くきらめく歯をのぞかせる。ため息とも聞こえる呼吸音が、静寂な部屋によく響いて、耳を刺激する。

見ている者は、うっとりとしていた。初めて見た市谷もそうだった。皆は呪術にかけら

れてしまったようだった。演技が終り、しばらくして、やっともとの正気に返えった。

「素晴らしかった」

河盛は感にたえぬと言った風である。

河盛は喜んだ。感激したように光子を抱くと、激しいキスをした。肩をつかんだ指先に力がこもる。

「あっ、痛いわ、痛いわ」

首を振って抱擁から逃れた光子が言う。

「二人になってからにしてよ。人の前でするなんて淫らよ」

福島という、先程の女の一人が言った。

「じゃあ、同性愛を演ずるのは淫らじゃないって言うのかい。まあ、いいさ。この次はお前さんを責め抜いてやる」

光子は立ち上って、服を着にカーテンの陰に隠れた。河盛は、まだ布団の上に寝転んでいる好子の白い肉体を見た。彼女の大きな眼は訴えるように、河盛を見ている。

「お前は市谷と一緒にだ。市谷がお前をせびと言っているからな。反抗したり文句をつけたりすることは許さない。素直に従うのだ」

皆は充分に楽しんだという顔をしている。いつの間にか、男女のカップルができ上っていた。互に話し合いながら、今晚のこれから

のことを相談している様子である。好子と光子、市谷と河盛には、まだ今晚の相手がいなかった。河盛は光子の傍にすわる。そして彼女の裸体をながめて、言った。

「入神の演技だった。まったく素晴らしい。君は男性的能力があるんじゃないかと疑いたくなるね。でも、女性としての君もすごい。その体を見れば分る。どんなものだからよく知りたいと思うんだ。さっきは男役だったけど女役もやってみないかい。僕が相手をするんだよ、今夜ね」

「もちろん、河盛さんとなら喜んで」

「君は素直だね」

「私はうんと楽しみたいだけよ」

「じゃあ、大いに楽しませてやるさ。僕のテクニクはすごいんだ。君も聞いているね」

「だからこそ、喜んでお供するのよ」

「これで決まった。僕は光子とここに泊まるよ。ほかにここに泊まり込むのはいるかい。言ってくれ。部屋の割り当てをするから」

二組のカップルが申し出た。ほかの者は、じゃあ行くよ、とか、さようなら、とか河盛に言って、下へ降りて行った。やがて自動車の音がした。各自二人ずつの行動に移ったわけである。鎌倉の別荘に残った二組のカップ

ルも大広間を出て、一晚を一緒に過ごす部屋へ行った。大広間には、市谷と河盛、好子と光子の四人しかいない。

「好子、お前は市谷と一緒にだ」

好子は放心したように天井を見ている。市谷は残酷なことをするようで、気が引けた。僕は河盛ほど冷酷になれない、と感じた。そういう自分を恨む気持ちもあったが、もう市谷には好子に復讐してやろうという気はなかった。彼は好子の美しい体を見た。

「光子、先に部屋へ行って待っていてくれ。それから服は脱がないでおいでくれ。脱がす楽しみがなくなるからね」

光子は部屋へ行った。今は三人しかいず、大広間は閑散としてきた。

「好子は服を着る必要はない。手もそのままでもいいだろう。さあ、部屋へ行こう。案内してやるから、ついて来てくれ。それから、市谷君は好子の服を持ってきてくれ」

市谷は好子の服をすべて持った。淡い空色のドレス、絹のストッキング、シューミーズ、ブラジャー、パンティ、それらをすべて持った。彼は物珍らしそうに、女の下着を見た。薄く透けて見えそうで、しかもしなやかで、なめらかな下着をみた。それに触れた時、市

谷はドキツとした。身の溶けるような肌ざわりであった。彼は魅せられたように、それらに見入った。

そっと、ブラジャーを鼻へ持って行く。乳のにおいがしないものかと思ったから。甘酸っぱいにおいがした。次に神聖なものに触れるようにパンティを見た。真白なパンティだった。好子の白い腰をこれが包むことを思うと、市谷はそのパンティになりたいとさえ考えるのだった。それを鼻へもって行き、鼻翼を大きくふくらませて、思い切って、その臭いを吸い込んだ。

「さあ、行こうか」

河盛は言って、立ち上った。好子を立ち上らせると、

「好子、お前が先に行くんだ」

三人は大広間を出た。長い廊下を歩いて行く。月の光がさし込むだけの明るさである。その青白い光の海の中で、好子の豊かな肉体は人魚のようだ。河盛は前を行く好子の腰を見て、ほくそ笑む。

「もっと大きく腰を振れよ」

そう言われると、好子はみじめな自分の姿に気づいたのか、歩くのをやめてしまう。「何をしてるんだ。さっさと歩かないか」

バチーンと強く尻を平手打ちして、好子をせかす。とうとう三人は部屋の前まで来る。河盛は扉を開いた。三人は中へはいった。部屋はせまかった。ベッドが部屋全体の三分の二を占めているぐらいだ。

「せまい方が気分が出るんだ」

河盛はそう言って、ベッドを調べる。まるで自分がこれから使うというような調子である。フワフワしたベッドは大きく弾んだ。市谷は好子の様子を見た。部屋の隅で背中を向けている。

「これで万事いいね。女はいるし、暖かいベッドもある。いずれも上等なのがね。ああ、それからシャワーは、一階の台所の横にあるんだからね、よく憶えといてくれよな。一個所しかないというのは不便だがね、まあ、それも楽しみな点になる。皆がここに泊まるからね、シャワーの所はラッシュでね。仕方がないから共同で使うんだ。これがまた面白い。なあ、好子、そうだろ」

好子は沈黙している。

「まあ、いいさ。今日の好子は変だな。何か家であったのかな。神に懺悔でもしたのかも知れない。今夜はどう扱ってもいいからね。市谷、君の好きなようにやれよ。それから、

この家の中では裸で廊下を歩いても結構。シヤワーの所へは何も着て行く必要なんかないからね」

河盛は部屋を出た。市谷と好子の二人だけしかない。好子はまだ部屋の隅で背中を向けている。市谷は近づいた。そして肩に手をかけると、前を向かせた。好子は目を閉じている。市谷は神々しいその顔を見た。だが、視線は好子の体を下へ行く。

市谷は迷っていた。何もしないでも良かった。だが、好子の体を身近に感じると、しか

もそれが手にはいるのが確かである今、このまま別れてしまうのは、後で後悔の種になるだろうと考えた。何もしないのは、美しい好子に対する侮辱でもあると思った。

市谷は好子の顎に手をかけ顔を上向かす。そして、唇を好子の唇に近づかせ、接吻をした。彼女の眼が大きく開いた。市谷は好子を抱くと、ベッドに持って行き、そこに置く。白い肉体はベッドの上に横たわった。市谷は自分の服を脱ぎ始めた。

翌日の朝、河盛の自動車に乗って、市谷と

好子は東京へ帰った。渋谷で降りしてもらい市谷は家へ帰った。玄関の戸を開くと母が、「大変よ。河盛さんと進藤さんが自動車事故で亡くなられたのよ。今、電話があったの」市谷は最初信じられなかった。が、それが現実だと分ると、昨夜のことがすべて空しいことに思われた。昨夜のことは嘘だ、バカげたことだ、と市谷は思い、河盛の家に行くため玄関を出た。

(完)

縛 緊 の 独 孤

牧 洋 子



早く鍵を閉めなければいけない。後手でさぐりながら、やっこの思いで閉め終り、ほっと致しました。もう誰にも見られない。私人なのだわ、しかも夢にまで描いた縛られた姿ですもの、有頂天でした。

部屋の真中にくずれるように倒れると、思いきり胸を張って、胸が、腕が、手首が絞られるような緊縛感に、身体をくねらせ、悶え喘ぎました。そんな自分の姿に陶醉していました。

「誰か、助けて！」

口を大きく開いて叫ぶ仕草をしました。本当に自分が救いを求めて泣き叫んでいるのだと思うと、身体中がかと熱く燃えあがってくるようでした。

「誰か、誰か、助けて！ あっあっ」

自分の声を聞いて、今にも逞ましい男が助けに来るように錯覚するのです。

どの位、時間が経ったでしょうか。全く時の経つのもわからない位、忘我のひとときでした。ゆるく縛ってあるようで、いくら身体をゆすっても、肌にびったり吸いついた縄目は、ゆるみもしないのです。やがて、手首と

胸に僅かな痛みを感じてきました。そのどちらとも、まだ縄の洗礼をそう度々受けているわけではないので一層でした。

「いけない、もう限界だわ。早く、この縄を解かなければ……」

しかし、あせっても、女一人の力では、どうして、この縄が解けましょう。足に反動をつけて何度も試みた末、やっと起き上った時は、恥しいことに、胸からブラジャーがはずれてずれ落ち、スカートがパタリと足もとに落ちてしまったのです。いつの間にかホックがはずれ、スカートのファスナーが下りてしまったのでしよう。

「そうだ、きっと、あの人だわ」

私は、この時、初めて気がつきました。私を縛りながら、きっと彼がいたずらしたのに違いありません。こんな薄い下着一枚になることも、計算されていたのでしよう。

それなのに、私は恥しさも忘れて緊縛された身をもがきながら、うっとりとしていたのです。何んとかして、この縄を早く解きたいと思いました。そう思いつくと、今までの夢のような境地もさめてしまつて、自由になりたいと思いつめるのでした。

夢から現実に戻った私は、次第に冷静にな

つてくるに従つて、口に渴きを覚えてきました。

水、水、水……。

そう思うと、もう堪らない強さで水がほしいのです。後手に縛られた縄目が、じれったくて仕方ありません。机の上に水差しがあります。私はじりじりとにじりながら、這い寄り、やっと口にくわえて吸うようにして飲んだのですが、いくら咽喉に通さないうちに支えることの出来ない私の身体は、あつという間に畳の上にくるげ、仰向けになった私の顔の上に、倒れた水差しの水がさつとこぼれました。緊張しているせいか、水の冷たさもさ程感じません。

私は胸に喰い込んだ縄目を、じっと眺めているうちに、ふと思いついたのです。

「そうだ、この縄は紙なのだわ」

横になった水差しの残った水を口に含むと一滴も無駄のないように、そっと胸にたらしただけです。

縄はみるみる水を吸い込み、ぷうとふくれ上ってゆきます。

「もうすぐだわ、もうすぐだわ」

心に言い聞かせながら、腕に、胸に力をこめて力いっぱい、りきみました。身体をねじ

つて悶えました。二分、三分、五分……。只、縄を解きたい一心で、ころがってもしました。

プツリ、胸のところで縄が切れ、急に上半身が大きくなったような気がしました。ズルズルと緊縛感が解け、そして、完全に縄は、その拘束力を失ってしまいました。

あとで彼の話によると、紙の縄というのが、そのタネを明かしてしまうと、スリルがないので、ということでした。

今朝、又あの人に電話しました。もうじき訪ねてくる時間なのです。

今日は、どんな縛り方をされるのか楽しみです。この前の話では、もっともっと、解くのが難しい縛りだそうです。考えただけでも胸がわくわく高鳴ります。

私って、何故このように縛られることが好きなのでしょう。『孤独の緊縛』が、幸い彼の手によって、新しく開眼しようとしています。しかし、彼の何か手品のような手のかんだ縛り方には、私はついて行けないような気がしております。どなたか、もっと直接的な緊縛方法を私の身体に用いて下さる方っておられないでしょうか。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

「あきこ」登場

井風呂 秋 於

私達の、話である。

発表すべきか否かについて、幾度躊躇い、迷ったかも知れない。

私達——言い換えるならば、（私達夫婦）

と言わなければならないからである。

夫婦の間で、それがお互いを尊重し合うものだと言うことを、もし前提とするならば、これは永久にペンを執るべきではないだろうし、あえて沈黙を守るのは当然と、最初のうち考えたのも無理ではなかっただろうと思えるのだ。羞恥心からだったとも言える。

でも、今になって、やっとこの書きづらいペンを持ってみる決心をした。

普通の日常。

普通の生活。

ごく平穏な中にも、私達夫婦のように「変化ある一部分」を持っておられる御夫婦が、他にたくさん実在していらっしゃるのを聞いたり読んだりして知ったのが、その理由である。別に、いかにも秘密めいたり、陰気に隠したりする事柄ではなさそうだからである。

事実、私達の現在には「暗さ」はない。

「変化ある一部分」は大切に保たれ、より順調に生活しているのである。

凡そ、夫婦生活には「七年目の浮気」とか言う変な言葉があるらしいが、私達にはどう

やら通用している風はなさそうだ。往年の名作映画「雲流るる果てに」のラストシーンの字幕ではないが、（きわめて健康——）的に波風もなく暮らしている。

妻は、至って平凡な、こと更ここに詳しくその容姿などを書き連ねる必要なかなさそうな、家庭主婦である。

私と結婚したのは、私が、あの草深い兵庫の田舎より不意に大阪のド真中へ、それでもちっぽけながら青年たるに必要な野望と夢を胸いっぱいにくらませて飛び出してきた年の三年後のことであるから、今から丁度七年以前のこととなる。



それからまた三年ばかり、それまでのサラリーマン勤めから思いきって独立し、細やかに商売を始めて——二年目のあの日。さて、この文が手記といえるかどうか、ともかく、あの日——からを想い起こしながら「現在の私達」の模様を、ノンスセンスな文章をお許し願いながら、順序にしたがって書き述べていきたい。

△ △ △

その日。

朝からの晴天で、こぼれ落ちるような陽光が周囲に映えていた。

まだ少し、朝の気配の残っていそうな正午前、いつものように私は得意先廻りを終えて帰ってきた。

私達の家は交通のヤケに烈しい本通りより三十米程度しか離れていないのに、いつも不思議なくらい閑散とした一角にある。

久し振りの暖かさに、あたりの屋根屋根までが大きな伸びをしているようで、うす暗い家のうちへはいるのには微かなためらいを覚えながらドアを開けた。

方角の所為で外の明るい陽ざしはどうやら裏のベランダあたりにしか当たっていないらしい。

私はジャンパーを脱ぎ捨てながら座敷を突っきつてのぞいて見ると、妻は、廻転中の洗濯機を傍にして背

中を見せてじっと立っていた。

それがいかにも忙しい家事戦争の途中のひと休みと言った恰好だったので、何となくおかしさを感じた。随分とのんびり型な妻らしかったからだ。

よいしょと腰を下ろし、ベランダの方へ足を投げ出しながら彼女の方を見直すと何か雑誌らしいのを立ち読みしているのに気がついた。

私の気配を察して、ちらりとこちらを見ることは見たのだが、依然としてその恰好はくずさない。いつものことながら、さすがのんびりしたものだ。

「ああ、好い天気だなあ——」

などと呟きながら、大手をひろげたりして私はぼんやりと坐っていた。

だが、これがいつまでも、身動きひとつしなかったから、ついにあきれてきた。

洗濯機の廻転さえ、とっくに停まっているではないか。

わざと大仰に腕時計を見ながら、もう昼御飯だなとも言ってみたが、それにすらさっぱり反応のない仕末である。

こうなると、ふと、彼女をそんなに熱中させているのは、一体なんだろうかと興味すら

感じてきた。私はそっと立ち上ると後へ廻りひょいと覗きこんでやった。

とたん。

思いもかけないものが眼にとびこんできたから、思わず息をつめてしまった。

明るい太陽のもと、それは強烈に紙面にやきつけられた、白い女体の縛り上げられているフोटだったからである。眼を見張って見たがやはり間違いはなかった。

妻は文字の方をひろっていたらしかった。ゆっくりと振り向いたが、ただにこりとしただけで、すぐに読み続けている。

私は構わず、ぼんと表紙をたたきあげた。雑誌としては、かなり古い号数のものと思えた。

私はこの「熱読者」の横顔をまじまじと見つめながら、この雑誌はどうしたのか——と尋ねた。するとやっぱり身動きもしないで、「詠ちゃんが持って来て忘れて帰ったらしいのよ」

と平気なものである。

詠ちゃんとは妻の弟で、尼崎の料理店に勤める若い板前さんのことだ。そう言えば成程二、三日前に一晩泊りで遊びに来ていた。

さて、私は次の質問が見当たらない。

小指で脳天をかいいたりしていた。

しばらくするうちに、「妻の未知な部分」

の存在がまだあったことに気づいてきた。

のんびり型だが、決して鈍感とは言えない彼女が、白日のもと、しかも亭主を傍にして微動だにせず緊縛写真等を見入って平気でいるのだから、日頃の彼女から察して、これは「未知」としか言い様がない。

新聞の政治面を拾い読みする時のような空々しい視線ではなく、明らかに熱中の色をその表情に刷いてさえいるではないか。健康そうな頬は紅味を帯びて——。

「おもしろいのか？」

仕方なく私は言った。

返事は、勿論ない。

変なもので、ここまで無視されると妙に焦々してきた。

「繰り返しますがね、もう昼なんですよ」

と皮肉たっぷりに言って、私の居ることを告げるより仕様がなかった。

この場合手持ち無沙汰もイヤだから、部屋にかえって何の用意のしてあるはずもない食卓の前へ、どっかりあぐらをかいてやった。他のことなら怒鳴ってもやるのだが、今怒るとどうやら調子はずれの怒り方になってしま

いそうで自信がなかったから、それはあきらめることにした。

——やっと気づいたのか、読み終わったのか知らないが急にバタバタと動き始めたのは、それから十分近くもしてからであった。

私の負けである。

つまらぬ空白の時間を、ゴソゴソと引っ張りだしてきた電気カミソリを、顎に当てることに費やした。

だが、どうしても感情の波の下には置けないある「扉」に接したことを強く意識していた私は、手鏡のなかの口元をじっと見つめながら、

「よし、今夜はあの雑誌を彼女からひたくって見てやろう——」

と内心決めていたのだった。

△ △ △

日中はあれ程晴れていたのに、夕方から急にどんよりと曇りだし、そのかわり、いつものことなら「冷える」と言う言葉が私達の間で数度は交されるものだったのに、その夜はしばらく忘れていた暖かさと言うものを覚えさせてくれる程であった。

寝具へはいる前に例の雑誌をと、あちらこ



ちらと探してみたが、妻のやつ、いったい何処へしまいこんでしまったものやら一向に見当たらない。

隠してしまったのかなと、つい想像するだけで、あの雑誌を見せろとは仲々言いだしにくかった。

私は口唇をとんがらせて、蒲団の中へもぐりこむより仕方なかった。

——きっかけを待つよりしようがないな——そう考えると寝ころんだまま見ているテレビドラマも全然面白くない。

貧乏ゆすりを試してみたり、チャンネルをバチバチ換えてみたり、ありもしない顔のニキビをさがしてみたり、どうも何もする必要のない時は、必要のない事をしてみたりするものだ。

やがて後片付けを終わらしたらしい妻が、手を拭き拭き部屋へはいつて来て、枕元の小さな三面鏡の前へゆったりと坐りこんだ時は、何となく私はほっとしていた。
「さて、どうして、あれを取り出させてやろうかな」

強引にチャンスは作るべきであろうか——それとも待つべきか。

白眼をむいて考えたが、あとで思えば、何も私がガタガタすることはなかったのだった。

やがて当面のテキキの方から何気なく、そういかにも何気なく私へ話し

かけてきたからである。

「ねエ、あたし、今日はなんだか疲れちゃったみたいで、肩が凝って——」

言いながら、ぼんぼんとたたいて見せた。急に肩が凝ったなんて、しかもそんなことを妻が言うのを始めて聞いたものだから、

「へエ——、それにしては、いつもと同じで別に何も御大層なこととしていないはずだぞ」と知らん顔を決めていると

「でも凝っているんだから」

と鏡に向ってまで言っている。

「じゃ、オレに肩をたたけとでも言うのか」と私は眼を剥いてやった。

自慢にもならないが、人様どころか親の肩たたきすらした事がないのだから——。

「たたけとは言っていないわ」

どうやら妻はふんと鼻を鳴らしたらしい。黙っていると、

「たたくかわりに、じゃこうして」

「何だ」

「背中のかこんところ」

ちよっと執拗なので、なに勝手なこと言っでやがるとふり向くと、後手に肩胛骨の内側あたりを押さえていた。

「そこがどうした」

「うん、ここから腰の方へかけて、筋があるの。その筋を指で引っばってほしいの」

調子のいいことを並べて、そのままじっとしているところを見ると、これはどうやら、私の起き出すのを待っているつもりらしかった。私は例の雑誌か見たいってこともあるしこの際あきらめるかと、横着げに上半身を起こした。

——すべてのきっかけは、私の方からではなく、彼女の方からいともやさしく提出されていたのであった。

△ △ △

成程、彼女の言う『筋』があった。

私は指図通りにしてやることにした。

筋を引くと、コリ！と音を感じる。

すると妻は、自分から言いたくせに、

「痛いッ」

と大仰に声をあげた。引いたとき一瞬全身を固くするのがわかって、痛いのは事実らしいが、私は黙ってまた引いてやった。

「ウー」

「大層にするんじゃない」

そのくせ、筋をさぐって匂う指が擦ぐったいと今度は身をよじらせて笑い出した。

苦しい笑いと悲鳴とが、こまぎれに交錯し

て、やにわに私達の部屋は騒々しくなってしまうた。

「いい加減な奴だな」

「だって——」

「こら駄目だ。もっと両腕を後へ反らさなければ筋が出ないよ」

何だか面白くなってきて、私は懸命に妻の背中を押さえつけた。

「効いてるんでしょけど、この痛さったらたまらないわ」

「じゃ、やめるぞ」

「いけないわ！途中でやめたら、かえって肩が凝っちゃうもの」

「勝手なこと言うな。引く筋がわからなきゃどうにもならないじゃないか」

「じゃ——」

「じゃどうするんだ」

「——縛って」

「えっ？」

「縛るのよ」

私はどきりとした。縛る。この言葉がこんなところで急にとびだしてこようとは思ってもしなかったからだ。

そんな私を敏感に覚ったものか、妻はあわてて言った。

「そしたら、いくら痛くっても、擦ぐったくても両腕を前へやることはできないから。だいいち、ぜんぜん逃げられないわ」
（ぜんぜん）と言うところに、アクセントをつけながら、妻はごく自然に両手を後へ廻した。

そうしてこの時、縛ってまで肩の筋を引かせて凝りをとりたのかと言う、白々しい疑問はもうなかった。

『あの時』からの、微妙な感情がずっと尾を引いて、それが今また高くうねりながら、それを彼女はここに具体化しようとしているのではなからうかと、すぐに気がついたからであつた。

肩の凝りに事寄せたと言ってしまうば、身も蓋もないではないか。そんなことはどうでもよいのだ。私にとっては、すべてを度外視して一足跳びに突きつけられたチャンスなのだ。いつしか、

「よし縛ってやる。紐だ」

と現金な気負いを見せていた。

言ってしまったから急に羞かしくなったのか、妻は妙にきちんと坐り直してうつむいている。昼間の、あの紅味がその頬にのぼっていた。



私達の寝間着には縛れるような紐なんかついてはいなかったから、洗濯の干し物用にと買っておいた綿ロープが、押し入れのどこかにあると妻が思いだしたので、先程までの横着気分はどこへやら、勇んで押し入れをゴソゴソと引っかき廻した。

変な表現だが、何か身内から突き上げてくるような熱い『かたまり』に、ワクワクしていたのは事実だった。

やがて手にした二巻きのロープを、妻の目の前でぶらぶらさせた時、それは頂点に達し

た。縛ると言うことへの期待は、そのままあの種の快感へと変った。

「どのようにして縛る？」

尋ねてみたが、これは彼女とて返事の仕様がなかったものであろう、ちらりとロープの方をみたりであった。

（ただ、手首だけを縛って、それでいいのだろうか）

せめて胸のあたりへもロープを廻してみたのは、ここまでできた以上、当然ではなからうか。

駄目駄目。折角

の彼女の意に添うべきで、ただ単に両手首だけを縛るなんてそんな事はいけない——と、その時勝手に私は決めこんでいたから。これは世話がなかったものである。私は、なるべく普通の口調で、「昼間の、あの、教科書を見せてく

れ」

と言った。

ひょっとすると、妻の方もそれを待っていたのかも知れない。すぐに鏡台の奥から雑誌を取り出した。女らしい隠し場所だなと感心しながら、私は待ちかねた手付きでそれを受取った。

あった、あった目的の教科書。

肌に喰いこむ縄目に苦悶の表情が、グラビアをうめつくしていた。

単なる縄が、このように女体へと巻きついたとき、それはまるで生きものの如く眼に映るのは、いったいどうしたことであろう。

しばらくは見惚れていた私は、やっとのことで我に返った。

とてもこのグラビアの通りには縛れるものではなさそうだ。どこから縛り始めて縛り終っているのやら見当もつかない。

教科書は教科書の役目を果たし得なかったのである。

こうなれば、ヤケクソではないのだが、私なりの我流で縛り始めるより他はなかった。「さあ、縛るぞ」

それでも口先は立派に、わざと手荒く妻の両手を後へねじて、ロープの先で二巻き程に

して縛る。さっきの調子の良さは消えてしま
って、妻はますますうつむいて顔を上げ得な
かった。

かくて。

私は、私の妻を、はじめてロープで拘束し
たのであった。

おずおずと。幼稚に。やさしく――

△ △ △

ここに、私達の、新しい夫婦生活の頁は繰
られた。

日常生活との境界を明らかにすることを、
お互いの前提として、それを完全に成果とす
ることを約束し、それでも時折りの微細な亀
裂や喰い違いはそれからの歳月によって埋め
つくすことに努力したのである。

決して隠微ではないと確信する私達二人だ
けの「夢幻意識」は常に高揚をつづけ、いつ
しか私達は私達なりの、完成された合致なる
ものを、その最終頁に書きとめ得ることを信
じていた。もし、その最終頁に到達したなら
ば、その時そこに見事昇華されるべきものを
想像して、現在繰られている頁数も、それま
でへの永い過程中の（小さな努力）としかな
らないであろうことは容易に理解できたので

ある。

また。この冒頭で書いた（きわめて健康）
の一節も、私達が人生を成し遂げたとき、良
くこれらの頁数と平均して保たれていたなら
ば、その時こそ私達の夢は成功したと言える
だろう。とまれ、以降の日々を彩色し続けて
春夏秋冬、たちまちに一年を経て、ここに私
達は、その第二頁を繰ることにした。

今回は、この第二頁の過程にとどめよう。

また、これから書き記すが、この文の
本文のつもりであったのだから。

「あきこ」登場の記

「いよいよ貴方が苛められ役の番よ」

「いいさ。――成程、ここ二年の仕返し
を、これからの一年に撒き散らしてやるッて
事なんだな」

「ふふ、別に、そんな意味じゃないんだけど

――」

「では何故、そんなに嬉しそうな顔をしてる
んだ？」

「ははん、貴方、さては、びくついているん
でしょ。わかったわ」

「ばか。そんな事はないさ」

「じゃなぜ、そんなにからむのよ」

「わかった、判ったよ。つまりおとなしくし
ていろってことなんだ。そうだろう」

「ハハハ、いい度胸なこと」

「つまらん処で笑わなくてもいい。ところで
どのような計画なんだ。言ってくれ」

「そう、そのことだけど、しばらくの間、そ
の準備のためにお休みとして――」

「準備？　なんだ、それは？」

「いいわ、これは貴方自身のための準備だか
ら、説明だけはして置こうかな」

「――」

「あたしね、この前から考えていたんだけど
――もし貴方を縛るとするでしょう。だけど
そのままの貴方をぐるぐる縛るなんてこと、
できないの」

「――どう言うこと？」

「ふふ、ちょっと、むづかしい説明ね。あの
ね、つまり、こう言うことなのよ」

「――」

「あたし達の一していることが、いくらプレー
だとしても、あたしって、自分の主人を縛っ
て苛めたり奴隷にしたりするのはイヤよ。だ
いいち、絵にもなりやしないわ。あたしが
くら気張ってみても、プレーの最中で、あた
し自身の気持が、そのままについて行けない



ようなのよ。まず、男の人を縛るってことは私の性分じゃないのね」

「オイオイ何だか理屈っぽいな。はっきり言えよ」

「黙って聞いてよ。——だから、そのう、考えて見たんだけど」

「よく考えるんだな」

「男の貴方じゃ、駄目なんだけど、それがガラリと変ってあたしと同姓、つまり女ならできるかも知れないってことなのよ」

「女?——バカ。そんな人、他に居るわけが

ないじゃないか」

「いちいち、うるさいわね。だから、だからよ。貴方を、その女の人にするのよ」

「なにを!」

「何言ってるのよ。あたしみたいな女が、この月から立役になるのよ。さっきも言ったように、こんな立役が男の人を縛っても絵にはならないの。あたしの方がたのしくならないってことなの。わかる?」

「だけど、オレを女にするって言ったけど、結局同じことじゃないか」

「貴方、案外、プレー精神がとぼしいのね。あくまでもプレーは、美しくなくちゃ」

「なに言ってるやがる。このオレが女になれて言われても、ハイなりますよって、阿波狸のように」

「なれるわよ」

「なれない」

「でなきゃ、この

立役さん、おりるわ」

「——」

「あたしが、なれると言ってるんだから、そんなにお通夜みたいな顔しなくてもいいわ。ちゃんと仕立て上げちゃうんだから」

「むちゃだな」

「絵なのよ。あたしの考えているのは『絵』なのよ」

「ふん」

「その表情じゃ、まだ納得してないらしいわね」

正直言って、『女装』にはチャンスもなかったし、別段興味もなかった。だから突然に女になれと言われても、それが彼女にとって必要なことであって、その心理的くさい説明をされても私にしては気乗り薄でしかなかった。だが、いつまでも彼女のこの『考え』は一向に変更される気配はなかった。それどころか話し合っているうちに彼女の口調は一段と真剣味を帯びてくる始末である。

私は、自分が女になることに全然自信がなかったが、長時間の説得について折伏させられてしまった。根負けである。

「じゃ好きな様にしろよ」

と言った頃には、『女装』と言う、未だ、

足を踏み入れたこともない世界を、この折りに一度位は経験しておいてもよかろうと、別に負け惜しみではなく心の何処かで考えていたのかも知れなかった。

またも、私達の「第二頁」も妻の提案がきっかけとなって、私の『女装』への扉が開けられたのである。

△ △ △

洋裁の練達な妻は、私の体型に合わせて惜しげもなく幾種類かの布地を截ち、急ピッチでいろんな洋服を作り上げた。

ワンピース、ツーピース共に背明きで襟のくりは小さくして袖丈は手首まで。簡単なデザインなので三日後には、すべて仕上っていた。それから専用の化粧品一式、女性用下着は一走りして調達してしまった。

準備は完全に彼女の手で成されたのであった。新らしい期待へと言うか、愉しみへと言うか彼女は活々としていたのである。

つけ睫を見に行った時、あなたが使うのですかと女店員がジロジロあたしを見たとき、おかしそうに思い出し笑いをする彼女を見るとそれはいかにも楽しそうであった。

私もその雰囲気についつり込まれて、微かな動揺を覚えながら好奇心は頭をもたげてい

った。

——さて準備が成った夜。

夕食後を待ちかねたように私達のプレーは始まった。

まず、これから以後は絶対に荒っぽい男の口調を使ってはならないことを約束させられた。そうして

「今から、あなたの名前は、あきこ。いいわね、あきこよ」

と幾たびか念を押され、この命名式が終ると着ていたものを全部脱がされ、素肌に彼女のガウンを掛けて化粧台の前へ坐れと命令された。

(いよいよ『絵』のデッサンだな)

彼女はおつに澄ました表情で化粧品を取出し、並べ終える。

私は自然に眼を閉じた。

それからのしばらくは、身動きも許されないう。暖かい息吹きを頬のあたりに感じながらやすみなく、柔かく、細い指が顔中を這うのを、それでもいつしか快感に似た気持で受けとめていた。

途中で何度も三面鏡や姿見を覗きこみたい意志表示をしたが、そのたびにいたずらっぽい笑顔にじゃまされて、それは果たせなかった。

た。

人の化粧は始めての所為で、かなりの時間が経過し、やっとのことで化粧が済むと、立ち上ってガウンをとる。

裸となった私に次々と命ぜられたのは、色とりどりの下着類を着用することであった。

花模様を刺繍したパンティ。コルセット。すでにふくらんでいるブラジャー。そしてやわらかいナイロンの靴下が太腿を包んで上る。

「最初の着付だから、こんなにサービスするのよ」

口先だけは恩着せがましく、彼女はこまめに動き廻る。

私はボーとして突っ立っているだけ。どう見てもロボットそのものである。

下着類を全部着け終ったとき、ようやく、『女装』と言う未知だったものに触れた不思議な感覚が私の脳裏をうずめはじめた。

彼女はそんな私にお構いなく、次に乳白色のワンピースをとり上げると、足から通せと言った。襟なしで首にぴっちりつまった服である。私はぎこちなく着た。背中ファスナーを引き上げられた時、何となく不意に「拘束衣」を思いだした。

全身を包みこまれた様である。

早く鏡に我が姿を映してみたかったが、相も変わらず彼女は知らん顔で、やおら部屋の隅にあった丸い紙箱を持ち出してきた。

中からそっと取りだすのを見ると、なんと黒い毛糸のかたまりだから私はおどろいた。

(なんだ、それは——)

「あたしのヘアードレスあるけど、生まれたての女の子には駄目。いずれ、あなた専用のを用意するから、しばらくは、この代用からで我慢してね」

それにしても、洋髪かつらの代用に、手先よく巧みに毛糸かつらを作り上げていた彼女の周到さ。あきれるより感心してしまった。

注意しながら頭にのせると、ネットで乱れを押さえる。

彼女はちょっと退って、私を見上げ見下ろした。そうして大きくうなずくと、

「いいわ。びっくりしちゃった。よくうつるわよ」

と、にこにこ顔でくり返えすのだった。

「もう鏡見ていいわ」

私は待望の『私』を見ることを許された。

思いきって姿見の方へ向い合った。

そこには、私ではなく、「あきこ」が映っ

ていた。

その全身を見たとき、言い様の無い胸の動悸に惑わされ、思わずうつむいてしまっていた。

やがて驚きと羞恥心と奇妙な満足感とが細かく入り交って、いやが上にも「あきこ」誕生を現実として確認させられていたのであった。——もう私は、何も言えなかった。

そして、

「あきこ」

と称ばれて振りかえり、すぐ後に立っていた彼女が手にしたロープを眼の前でゆらゆらさせた時は、私は観念して自分から坐ってしまふより他なかったのである。

緊縛の記

「あきこ、両手を後へ廻すのよ」

背中であわされた。

そのロープが、ふっくらした胸の方へ廻ってきて上部へ二巻き、やや下げて二巻き。後腋から胸の下のロープを通して左右をぐっと後へ引きしぼる。そして肩越しに胸のロープを連結しながら胴をきつく二巻き締めてまた逆戻り、反対の肩から後へかけて手首を通して、それを強く引き上げる。

単純な縛り方ではあったが、やがて傾むけられた姿見に映ったのはまさしく「あきこ」緊縛の絵であった。私は声もなく天井を仰いだ。

「駄目よ、あきこ。まだまだきつく縛るんだから覚悟しなさい！」

新しいロープを持つと、この指になぜこれ程の強い力が秘められているのかと思う位、「あきこ」はみるみる胴から腰へ、腰から足へと、まるで俵のように縛り上げられていった。

いつしか——。私はこんな姿のみならず、その意識までもが「縛られて苦悶する」女に変わり果てていたのであらうか。

か弱く、か細く、——まさしく嬌々として唸りながら身をよじらせていたのだった。

被縛を始めて経験した、いや、させられた「あきこ」は、余りな五体の不自由に成す術も知らず、その時軽く肩先をつつかれたのみで容赦のない横倒しとなっていた。

身動きすればする程、胸を締めつけてくるロープの痛みに、ただ凝っと、肩の喘ぎを増すのみであった。

——そのまま放置されて数分。哀願の想いをこめて、彼女の姿を探し求め

たとき、いつのまにか彼女は隣り部屋の中央に正座し、ひき寄せた茶器でおもむろに、そうしていとこやかに茶をすすりはじめたではないか。わざと意識して作った無表情をもちりませながら実に落付いた所作であった。

時々、絵を観るときのようなその瞳。奥深く内攻したものを秘めてその瞳は俵にされてしまった「あきこ」を見つめる。

がんじがらめにされた「あきこ」。それを茶をのみながら大様にゆったりと觀賞する女——。これら二体の醸しだす雰囲気そのものを彼女は『絵』と表現したのだ。とすれば彼女のそれら所作のすべても、これ「プレー」である。

私は、その「觀賞される視線」に耐えやらず半ば口唇を開いたまま、そっと眼を閉じてしまった。もう彼女の夫ではなく、女性「あきこ」である以上、その監視に耐えやるはずは到底なかったのである。身悶えの構図は、こうしておさまった。

——それから十五分程もして。

背中中で固く交叉された手首から先が感覚を忘れ果てて、やっとロープを解かれた。

だが、何のことはない。

すぐに今度は真紅のワンピースに着換えさ

せられて、また嚴重な後手縛り。その上猿ぐつわまでかまされて——。

あきらめきっている「あきこ」に、許しもなく被縛の責めは続けられるのである。

ロープ尻を取られて、部屋の境まで迫り立てられるとロープを欄間に通して張り、その痛さのあまり爪先立つのを、そのままの姿で固定する。

次に、不安定な姿で、ゆらゆらと苦悶する「あきこ」を、にこやかな微笑で見すてて、押し入れから三脚ストロボ付きのカメラを持ち出して、こちらを向けて据える。

「だめ！」

あわれな被写体は幾度も叱りつけられながら、素早く閃光を浴びせかけられた。

撮影が途中で一旦ストップして、欄間から解かれると、そのままに正面、側面、横坐りから背後、椅子を使って上からと連続撮りである。

先刻の大様さはどこへやら、実に活動的にフィルムは巻かれシャッターは切られた。

打ち、撥ぐり等の責めこそはなかったが、この執拗な緊縛のままの放置は、「あきこ」にとって充分すぎる位の責めとなっていることを、彼女は知っているのであろうか。

姿見を移動させて、
「あきこ。自分の縛られた恰好を、よく見なさい」

と言われたが、それ処ではなかった。

そうして地紋の和服に白い割烹着で「羊」字型縛り。黒のワンピースに海老責め。唐子色のツーピースに「王」字型縛り。極彩色の花模様、背明きブラウスには傍に花瓶を置いての亀甲縛りを撮影。

盛りたくさんの縛りで次々と「あきこ」受難の姿は形成され、カメラに修まっていったのである。

「あきこの表情、とてもいいわ」

「あきこ」に鋭い凝視を続けている彼女が、もしもそこに何らかの一瞬の表情を読みとっていたとするなら、それは彼女が描いていた『絵』が会心の作となり得るはずであったのだが——。

三十六枚撮り二本のフィルムが巻き終った時「あきこ」は無情なロープから解かれた。

午後十一時半。

プレーは終わった。

「今夜はこの程度でかんにんしてあげるわ」
そうして、やがて、「あきこ」は、この部屋から消滅していった。

逢瀬の記

かくて、私達のアルバムに「あきこ」が登場して以来、一年余り。

現在も、月に一度は「あきこ」が私達の部屋にその姿をあらわす。

この、たまさかの来訪を、私達夫婦は快く迎えるのであった。

いつまでもより美しくと、化粧を凝り、若々しく新しいドレスをその度に着せてやり、

婀娜に、強く縛りつづけてやることに努力しているのであった。

「あきこ」が縛られて身悶えをするとき、妻はこれを静かにゆっくりと眺めやりながら、その頬に微笑をやさしく浮かべ、それをいつまでも、おおらかにふりこぼす。

日常生活と、数時間のプレーとの間に幕が下ろされる、その境界は、私達の明かるい笑顔と触れ合う思いやりとで、正しく厳然と

して開閉されているのだ。これから、それを私は、妻は、いつまでもいつまでも望んで止まない。

さて、「あきこ」は、その約束によって、月に一度しか訪問がないのだが、はたしてその他の日にはいったい何処へ行っているのであろうか。

考えてみると、ひょっとして――。

諸兄諸姉の許を訪ねているのではなからうか？ そうして、もしも、訪ねていたとすれば、そんな時の「あきこ」は如何だろうか。よかったら、お教え願いたい。

「あきこ」がその次に私達の所へ来た時、ひよっとしたら、眼もくらむような「夢」を、そっと耳打ちしてくれるかも知れないではないか！

だが――。

春秋経ていつか、この「あきこ」が、とつぜん私達の眼の前から姿を消し去ってしまった時、それはどんな時であろうか。

そうだ。そのときこそ、私達が、この分厚いアルバムの次のページを繰るときだった。

私達は、永遠に、

(きわめて――健康)を念願としながら、この記を終る。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

△告白▽

マソ年代記

姫島痴人



戦争中の抑圧された時代から考えると、戦後の自由解放は、全く百花爛漫と一度に咲き匂うというような感じを受けたものだった。

殊に私のようにマソの傾向の強い者にとっては、男女同権を謳う戦後の風潮は全く目を見はるものがあった。

その頃上映された映画に、題名は忘れたが淡島千景、西条鮎子ともう一人の女優が、それぞれ柔道、ボクシング、フェシングの上手

な娘に扮し、殊に淡島が柔道道場の師範代となつて一人の男を散々に投げとばし投げとばし、「先生、もう勘弁して下さい」と弱音を吐くその男を、尚も引きずり起しては、忽ち又投げ倒す。又哀願する男、薄笑いを浮かべながら男の降伏願いを拒絶して又投げとばす彼女。それは素晴らしい場面だった。

又、『奴隷の街』という人身売買を取扱った映画の中で、激怒した一人の女が、人身売

買の張本人の男に掴かみかかり、不意を喰つたその男を一瞬押し倒して馬乗りになり、ビール瓶をふり上げて殴ろうとする場面はスチール通りであったが、それも余りに瞬間的で短いシーンだった。

その点、原作に較べて全くお粗末ではあったが、何んといつても映画△痴人の愛▽は男性マソにとって見逃がし得ぬ最上級のものであった。ベッドの縁に片足をかけて靴下を脱

どうとする京マチ子の太股に、宇野重吉が接吻するのを、彼女が足蹴にするように突き倒す。尚、追いつがる男を、彼女は相手にしない。そこで彼女が床に四つ這いになって「僕はナオミのお馬になりたいのだ」と哀訴する。

それを聞いた京マチ子が「ふん、馬になるの？面白いわ」とニッと笑って、忽ち彼の背中につき跨る。その描写のカメラが又素晴らしく、最初凄い勢いで彼の背中に馬乗りになるところを、騎手と馬と双方全部入るように写したあと、恰度馬になった男とその背中の上、彼女の豊満なお尻から脚が入る位まで、彼女の下半身が大写しになる。そのあと、再び元通りの画面になって「何んでも、あたしの言うことを聞くか！」ときめつけるセリフの場面となる。

彼女が太股も露わにして、男を馬にして跨る光景は、正に圧巻であった。あれでハイドウハイドウと部屋の中を一廻りでも乗り廻して呉れたら、どんなに素敵であったかと惜しまれるが、それでも私は、この映画の、この場面だけを、恐らく三十回近くも見たであろう。今でも、もう一度この映画を見たいと思うし、原作のまま最後まで男が女性の魅力にひきずり廻され、完全に屈服するストーリー

で立体色彩映画を、もう一度製作して貰えたら、と望んでやまない。

この『痴人の愛』のスクリーンには、肝心のこの馬乗り場面のものがなかったが、その後雑誌『りべらる』のグラビアに載っていたのを見つけ、早速買い求めた。又『オールロマンス』という雑誌の二十七年新年号に、風俗写真川柳として、一頁大のグラビアで八屠蘇機嫌ナオミになって戯れるVという句が載っていた。素晴らしい量感のある美人が、男を馬にならせて跨っている写真が載っており、これも逃がさず買い求めてスクラップ・ブックに貼ってある。私はまた、こういう場合、ただ買うだけでなく書店などの女店員で割に美人のいる処を見つけ、そこで立読みをする。その女性の男性馬乗りの写真の頁を開けて、そこばかり眺めていると、彼女が妙な眼で私を見る。時には侮蔑的な眼で「この男、何んだ」というように嘲笑の眼で私を見る。私はわざと尚もその頁を見つめながら、時折り「私は貴女のお馬になってみたいのだ」と哀願するように彼女の方を見やる。益々彼女は私を蔑視すると私は興奮に耐らず、ひそかに棚へ体をこすりつけるようにしてしまう。

こんなことを私は又、電車の中でもよくや

ったものだ。美しい女性の隣りを選んで坐り用意の雑誌の、そのような写真のある頁をひるげる。車の振動につれて、わざとその頁を彼女の眼の前へつき出すようにする。気のついた彼女はジロジロ私を見る。或る時は本当に興味あり気に私の雑誌をのぞき込む美人さえあるが、大抵はチラリと見ては見ぬ振りをする程度で私を落胆させることが多い。

電車で思い出したが、私はよく美人の隣りに坐った折、彼女が足を組んだりすると私は気分でも悪いような振りで膝に肘をついて俯向きになる。すると上に組んだ方の彼女の足の先きが私の眼の前に突き出され、揺れる度に彼女の足の臭いまで感じるような思いになる。バスなどだと揺れ方がヒドいので、揺れる度に「そらお舐め」と言わんばかりに私の鼻先に美しい足がぶつからんばかりになる。酔った時の終電など、私は疲れきった振りをして電車の床に坐り、このような女性の足を満喫する。

女性の足の魅力のある映画では、仏画「北ホテル」。映画そのものは見なかったが、スクリーンに女の足に接吻する男の写真があり、単行本の巻頭に、それが載せてあった。女の態度が又素晴らしく、傲然としていて舐めたい

のなら舐めなという風に、ニョッキリ脚をつき出しているのだった。現実の世界で女性と接触する機会を持ち得ぬ私は、このように映画や雑誌によって僅かに欲望を満たし、電車の中の女性などに、辛うじてマソヒズムの発散の途を求めたのであった。

同じ頃、私は夕暮時の街を歩いていて、一軒の小さな家の物干場を見るときもなしにふと見ると、秋空に紺色のズロースが風に翻っていた。私は道を歩いていても、いつも家々の物干場の女性の下着類に自ずと眼を向けるのが常だった。が、どういうものか、それまで白や黒のズロースは、どこでもよく見ることが出来たが、紺色のズロースは殆ど見かけたことがなかった。

私はひとり妖しく胸をはずませた。何とかして、あれを手に入れたい。あの家へ行って千円出すから譲って呉れと頼んでみようか。いや、そんなことをしたって怪しまれて断られたり追い返えされたりするだけだ。いっそ盗んでしまおうか……。幸い周囲に余り人目もなさそうだし、その家も閉め切ってあって人気が少ないらしかった。盗みを働くなんて無論最初のことだし、空恐ろしかったが、こうなつては、とても私は自分の欲望を抑え

切ることが出来なかった。

秋の日は暮れ易い。暗くなるのを待って私はその物干場のすぐ脇が空地になっていたので、そこで立小便をするふりをしながら、じっと辺りの様子を窺った。先ず大丈夫のようである。さすがに、それでも全身がふるえる思いである。尚も小便をしている振りを続けながら物干竿の片方の端を持ってソツと下に降りしグツと傾けると、音もなく紺のズロースが手許へ滑り落ちてきた。

生唾で口の中がネトネトになり、今にも興奮の極でへたりそうになるのをこらえ乍ら、素早くズロースをオーバーのポケットに捻じ込むや、さっと身を翻えして走り出した。途端に足許に下してあった竿につまずいて、ガラガラと大きな音がした。

しまった。と夢中で走った。街を行く人々に疑われないように電車でも乗り急ぐような調子で五十米ばかりを走り抜け、耳を澄まして後ろの気配をさぐった。誰も追ってこないようだ。大丈夫だ、助かった。私は漸く落着きを取戻しポケットのズロースをしみじみと握りしめた。そして早速国電の駅の便所へ入りズロースを取り出して見た。

つぎだらけで穴さえあいていた。私は妙に

ガッカリした。昔の英子のズロースは体臭こそ十分だったが破れやつぎはぎなど、一つもなかった。こんなにまで穿き古るしたものの方が却って魅力的なのだという人の方が寧ろ多いのかも知れないが、私は兎も角急に幻滅を覚えてしまった。

私はその場へ捨ててしまった。折角、あんなに危険を冒してまで手に入れたものを、ムザムザ捨ててしまうのは惜しいとは思ったが、どういふものか、もうすっかり魅力を失っていた。然し、私にとって、あの時、物干竿を傾けてズロースを手にした際の興奮の素晴しさは、快美感の極致であった。まことに二度と味えぬ貴重な体験だった。それでも、やはり盗みということは恐ろしくて、その後再び実行する気持にはなれなかった。

私は又、その頃から或る奇妙な行動を始めていた。というのは、夜、人通りの少ない処で女性が通りかかるのを何気ない風で待ち伏せていて、彼女が五、六歩の処へ近づいた時道路に跪いて両手をついて彼女に向いて土下座するのであった。

彼女達は驚いて飛びのいたり、足早やに見向きもせずに逃げてしまったりで、せいぜいチラッと私の方を興味悪るそうに一瞥するだ

けである。もっと傲然として、立ち止まって「何をしているのさ」などと軽蔑と嘲笑の目で見下ろしてほしいのだが……。

又私は、酒を飲んで少々酔っている時など同じように人通りの少ない夜の路上で、通りすがりの女性に「あの、一寸お願いがあるのですけれど、決して御迷惑をおかけしませんから」などと、早口に前置きしながら、彼女の足下に四つ這いになって「貴女のお馬になりたいんです。背中に跨って下さい」と懇願するのである。

然し残念なことに、今迄五回試みて一度も成功したことがない。当り前といえば当り前かも知れず、酔っているから、ついそんなことをして呉れる女性もないことはなからうという気になるのかも知れない。

「失礼ですが御礼も差し上げますから」とつけ加えたこともあるが、やはり駄目だった。女性には普段男性の横暴を本意に思うことも多いだろうから、こんな折りにでも男性への復讐のつもりで私を馬にして呉れてもいいと思うのだが、中々思うようにならない。

終電の頃で而も人に見られもしないような淋しい処で頼むのだが、仲々そんな女性はいないものだろうかーと、不満に思う。それで

も、不成功に終わっても、相手の女性に「何さ、いやらしい！」とか「どうしたのさ、犬ころみたいに」などと罵倒されたこともあり、その時の屈辱的快感だけでも、私は相当満足しているのである。

終戦後、繊維製品がどうやら自由に出廻るようになった頃、最初の中は、どの店頭にも白いズロースしか並べられていなかったが、暫くして、黒、桃色等も出るようになり、稀には紺のズロースも陳列されるようになってきた。私は最近のパンティの型よりも、やはり少しゆったりとしたふくらみを保った昔風のとういか所謂ズロース型が最も好ましい。もっともブルマーのようなダブダブの褌つきのはつまらないが。

私はデパートの婦人下着売場や運動具部、街の洋品店などで紺のズロースを売っている処を見つけると、先ず男の店員がいなくて遠くを確かめる。男の店員は老若を問わず敬遠する。女店員殊に若い女店員ばかりの処を見定めて「一寸その紺のズロースを見せて下さい」と言っ出て出して貰い「これ、丈夫ですか」などと、もっともらしいことを尋ねながら手にとって見る。すると女店員は、男のくせにズロースを買いにくるなんて、変な人

だわという顔付で私を見る。勿論私にはそれが嬉しいのだ。大抵はひやかして、それきりで買わずに帰るのだが、二枚程買って札の抽出しにそっとしまっている。

昔の英子のズロースと違い新品では魅力も余りないのだが、久し振りの紺のズロースを手元に置いてやはり時折り出しては眺めてみたり穿いて鏡に映してみたりする。又、人通りの少ない路上で、さっき書いた土下座やお馬志願と同じように女性の通りかかるのを待ち伏せ、彼女の眼の前で突然ズボンを下してズロース姿を露出する。その珍奇な姿を女性に蔑視して貰うのを期待するのだが、やはり大抵の女性は眼をそむけて足早やに通って行って、遠くから、そっと願ってみるのが関の山である。立ち止まって「あなた、何さ、その恰好は！」ときめつける位の女性を待望しているのだが――。

このような路上行為は、相手の女性にとっては突然のことだし、何んといっても戸外のこと故人通りがないとは言え、私の期待は所詮無理なことなのであろう。その物足りなさから、私は或る冬の夜、一計を案じたのだ。た。「本稿の前篇は一月号に掲載してあります。(続く)」



浣腸実験要員誕生

立川 令子

「研究室要員募集。年令二十才迄の女子。高卒。初任給一万八千円。試用期間経過後三万円支給。身体強健。ナス製薬株式会社」新聞広告を、みるともなくながめていた私は、ただ何となく応募してみる気になった。型通りの履歴書、写真、卒業証明書を添え

て提示したところ、一週間たって面会日が指定された。

面接は簡単だった。特に家庭のことを聞かれたのが印象に残ったが、女ですもの家庭のことが重視されるのも当然と思った。身体検査はとても厳重でした。レントゲン

は勿論、心電図から、血圧、尿の検査までまるで一日人間ドックに入ったようでした。

三日目に採用通知、でも私には何の感興も湧きませんでした。そうか、採用か、入社して、毎日算盤をはじいて、帳面をつけて、夕方になればタイムレコーダーを押して家に帰る。ただそんなありきたりのBGを想像するだけでした。高校を出たばかり、お嫁にゆくまで何年かお勤めして結婚資金のいくらからかでも出来ればそれでよいとの、平凡な考えしかなかったのです。

入社第一日、実は私、製薬会社と漠然と考えただけで、何のお薬を作る会社かちっとも知らなかったのです。今をはやりの総合ビタミン剤か、胃腸薬位にしか考えなかったのです。ビタミン、いろいろなビタミンBやCや或いはPなどが、試験管で合成されて、まるで生きもののようにそれが躍り、化合して新しいお薬ができる。その過程を記録する私、なんて夢をいだいて出社したのでした。

母はBG第一日というので、お赤飯をたいてくれましたつけ。

「立川さん、まず工場を案内しましょう。我が社が何を作っているか、それがどんなに病人を、特に幼児の命を急病の時に救うかを知

っておくのは必要でしょうから」

総務課長さんにみちびかれて私は工場に入りました、ただ一人の新入社、何かさびしかったけれど新卒とちがい、殊に新聞広告ですもの。集団入社はあり得ない筈ですし、とに角選ばれたというプライドが、私にはありませんでした。

工場は清潔そのものでした。人の命にかかわる製薬会社ですもの、当り前といってしまえばそれまでですが、完全に温度湿度が調節され、埃り一つない工場には、白帽と白衣に白マスクをつけた女工さん達が立ち働いていました、でも、その数があまりにも少いのです。

「我が社は完全にオートメーション化されていますからね。要所要所に人員を配置するだけで充分なんですよ。ほら、あそこのタンクがポリプロピレンのタンク、こちらが脂肪酸のタンク、蒸溜は自動的に行われて、むこうのタンクにグリセリンが貯えられます。では向うの工場に行きましょう」

廊下で結ばれた別棟の間には、パイプが蛇のように走っていました。

「あの課長さん、どんなお薬ができますの」「えっ、こりゃ驚いた。あんた我が社の製品

を知らなかったの？ こりゃ困ったね。そこで応募したの？ ウーン驚いたな。澆腸さ、軽便澆腸よ。貴女も使ったこと、あるでしょう。或いは子供の頃、さわったことあるでしょう」

「えッ、あの、カンチョウ——」

「そうさ、何をびっくりしてるの、子供の急の発熱の時、便秘、痔疾、どんな時にもきつと必要なもんですよ。知らなかったとは驚いたな、まあいい、充填、包装工場へ行ってみましょう」

扉を明ければ、今の工場からパイプで導かれた液が、——それはグリセリンなのだそうだ——、透明な水——蒸溜水だ——と混合され、ピンクのポリエチレンの容器、

いわずとした軽便澆腸の容器に、注射器のようなピストン式の機械で、自動的に注入され、次々に自動包装機の方に送り出される。ポリエチの袋に一個ずつ入れられ、二個宛紙箱に入って、製品となる。女工さんが要領よく二ダース宛箱につめて、倉庫に送り出されてゆきます。

みんな私と同じ位の、二十前後の娘さんたち、花はずかしい年頃なのに、こんな恥ずかしい澆腸を作る仕事を、みんな平気な顔をし

てやっているのに、私は本当にびっくりしました、私はもう恥ずかしくて、顔がホテテくるのをどうすることもできませんでした。

「これでおしまい。おや赤い顔してますね。はじめての職場で緊張したのかな。まあ、いいでしょう。さあ、今度は貴女の職場である研究室の方にゆきましょう。研究室長に引き合わせますから」

研究室は本館事務室からも、工場からも、運動場を隔てた構内の一隅にあった。コンクリート二階建、何か倉庫のような暗い感じではあったが、ここが私の職場かという期待が私の胸をはずませました。

一階の重い鉄扉をあけると、右手の扉には研究材料庫、左手は資料室と書かれ階段が二階に通じています。

二階正面が研究室、右に会議室、左がトイレです。まず、研究室に導かれました。一歩入るとムラツと薬品の臭いが鼻につき、思わずクラクラツとするようでした。

「立川さんですね。お待ちしました。人事課から報告があつて、とても健康的な明るい方とのこと。我々研究所の一員として、どんなに素晴らしい方かと心待ちにしてたんですよ。成程いいお嬢さんだ。さあ、どうぞ掛

けて下さい。遠慮はいらんですよ。貴女の職場ですから」

室長というのは、五十がらみの眼鏡と白髪がよく似合う温厚な紳士だった。お医者様、或いは立派な博士とよぶにふさわしい方。牧田博士とおよびする。

研究員は三十そこそこと思われる盛永氏。

浜田光夫を思わせるような青年化学者といったタイプ。今一人、私の新しいお姉様にあたる女性、いかにも若き女性科学者然とした富田さんの三人でした。

室内には、ガラス器具が、私達が学校の理科実験で使った、フラスコ、ビーカー、試験管、ブンゼン灯などは勿論、見たこともない複雑なガラス管、ゴム管、タンクなどが所せまきばかりに置かれ、棚の上にはありとあらゆる色の薬品が、——それは試薬とよばれるのですが——ぎっしりと並んでいました。ただ、部屋の隅に、丁度産婦人科の診察台そっくりの台がおかれているのが、何か気がかりでした。

第一日は、ほんとに挨拶だけですみ、帰りには室長のおごりで、レストランでみんなでお食事をして帰りました。

翌日から、私は毎日が楽しくてたまりませ

んでした。お仕事といつては、研究室のお掃除をしたり、時々かかってくる電話を受けたり、先生方の実験された後の器具の洗滌、片づけといった簡単なことばかり、みんなやさしい方ばかりで、お父様、お兄様、お姉様とよびたい程でした。研究室では、ただいろいろな薬品が調合され、分析され、データがとられるばかりで、別に軽便浣腸があるわけではなし、いつか別世界のここ研究室にいると、私の会社が、あの恥かしい浣腸薬のメーカーであることなど忘れてしまうのでした。

そんな毎日がつづいた或の日、昼の食事の時、室長さんが、

「立川君、君一寸最近顔色が悪いが、疲れてるんじゃないの、はじめてのお勤めで」

「いいえ、別に何ともありませんわ」

とはいったものの、そう言われれば、何か疲れているような気もしてくるのでした。

「ここにいい薬がある。飲んでみ給え、元気がでるぞ。そら、そうだね。毎日二錠位つづけるといいね。三週間分あげるよ」

「どうも有難うございました」

私は躊躇することなく、その時から二錠宛を服用しました。別に元気がでるでもなく、何でもないのです。

二日、三日、おや、逆に私は何か下腹が張るような不快な感がしてきました。気がついてみればそうです。ここ二、三日、お通じがないのです。これはいけないと思って、トイレにいてみるのですが全然出ないのです。五日目、少し頭痛がするので会社お休みしようかと思ったのですが、みんなに心配かけてもいけないと思って出勤しました。

「立川さん、ちよっと」

富田さんによられました。

「はい、なんでしょうか」

「あなた、顔色悪いわ、どうしたの」

「いいえ、別に」

「あなた、まだお勤めになれないから、無理してるんじゃない。私にはかくすことないのよ、困ったことあったら、いってごらんさないね」

「ええ、でも何でもありません」

「ほんと？　じゃいいわ、私、当ててみようかしら、ね、あなた便秘してるんじゃないこと？　お通じある？」

「あ、ええ、あの、いいえ」

「ほらそうでしょう。女同志だもの、恥かしがらなくってもいいのよ。私だってはじめてお勤めした時は緊張するから、どうしても便

秘したもののよ。でも便秘は体によくないわ。一寸こっちへいらっしゃい」

有無を言わさない富田さんに気おされて、私は何となく、研究室の角に連れてゆかれました。

「さ、そこに横になって」

「あの、どうするんでしょうか」

「まあ、いいから言う通りにするのよ」

「あ、どうなさるんです。嫌です、嫌です」

「大きな声するんじゃないの。そら、早くしないと、室長先生方がみえるわよ、それでもいいの。ね、困るでしょう。恥かしいでしょう。ね、いいこだから、私にまかしといて。さ、早く浣腸しましょう。ね」

その時はわけが分らず、夢中でしたが、今にして思えば、あのイルリガートルが前もって用意されていたのでした。

有無を言わずパンティをぬがされると、

お姉様——私は富田さんをこう呼ばずにはおられないのです——は、私を赤ちゃんのように抱きかかえるようにして、嘴管を挿入するのでした。私はあまりの恥かしさに、身を固くしながら、お姉様の胸に顔を埋めずめるのでした。

「ほら、いい子ね。お浣腸しましょうね。も

うすぐよ、もう一寸の我慢よ、我慢してね」
生ぬるい液がチュルチュルと音を立てて直腸に入ってきます。すぐにトイレへ行きたくなりました。

「お姉様、トイレへ行かせて」

「駄目、駄目、よくお薬がきくまで、もう一寸我慢するのよ」

「あ、あ、駄目です。もうとても」

「ああ、よしよし、駄々っ子ちゃんね。もう一寸我慢してね」

お姉様は強く私を抱きしめながら、片手で私の肛門を脱脂綿で強くおさえます。そうではなかったら、忽ち洩してしまったでしょう。お腹がゴロゴロとなっています。もう駄目です。額には油汗がにじんできました。我ながら肛門がピクピクと痙攣するのが分ります。

「もう許して、お願い。ああ」

「そう、じゃ、もういいわ」

トイレへとんでゆく時は夢中でした。少しばかり液がもれて、内股をぬらしたようでしたが、そんなこと、かまって居られませんでした。でも一気に通り出る排泄の快さ、私は排泄感がこんなにも素晴らしいものとは、この時はじめて知りました。

「どう、すんだ。さっぱりしたでしょう。よ

く我慢できたわね。もう大丈夫、さ、室長先生ももう見える頃よ。ね、これ内緒分った。さ、何時ものようにお仕事しましょうね」

二、三日は事なくすぎました。気がついてみるとやっぱりお通じがないのです。どうしてこんなになってしまったのでしょうか。

翌日、又富田さんにつかまってしまいました。まるで私のお腹の中を知っているみたい「又お通じないのね。すぐ分るわ。さ、いらっしゃい、早くみんなが来ない中にね」

みんなが来ない内というのが殺し文句でした。そうだ、室長さん達がお見えにならない間に、何かそうするのが当然だというような錯覚にとらわれて、私はあの検診台みたいなベッドに横になるのでした。

「もう時間がないから、急いで、急いで、そう急救の時には、我が社の軽便を使ってみましょうね。あなたはじめてなんでしょ」

私は相変らず恥かしさのために、横をむいたまま手で顔をおおっていましたので、よくは分りませんでしたけど、富田さんの気色で、軽便浣腸の封を切るのや、嘴管の先に穴をあけているのが分ります。

「さ、いいこと、お尻に力を入れないで、入れるわよ、ね」

冷い液がチュッと、ほんの一瞬間でした。

なんだ、なんでもないや、と思う間もなく、クーツと便意が押しよせます。どうせ我慢するように言われるだけだからと思って、じっと我慢します。一寸遠のくと、又押しよせてきます。思わず肛門に力が入ります。

「よく我慢してるわね。きき分けのいい子。

その調子、その調子、はいもういいわ」

許されて排泄する時の快さ、思わずホッと溜息がでて、身も心もうっとりとしてしまうのでした。

三日目、四日目には、こうしてお姉様によびつけられては浣腸されるのでした。もう自然にお通じがつくことはなく、丁度タイミングよく呼ばれるのです。私も何時かそれを期待するようになっていました。だって我慢するのはとても苦しいけれど、あとでいきばる必要もなく、すっきりしてなんとも言えない程気持ちいいのですもの。

又、毎回浣腸の仕方が違うのも、しまいは面白くなってきました。今日はどんなのだらうって。最初と同じイルリガートルのこともありました。でも液が白かったり、ピンクだったり、透明だったりしました。その時、その時で一寸直腸の刺戟がちがうような気が

しました。

ガラス製の浣腸器が用いられる時も、それも五〇CCのや、時には馬の浣腸器みたいな百CCの太いのもありました。

ゴム球が二つついた二連ゴムエネマシリンジなども教えられました。ゴム球が二つあるので、連続して液が注入されます。

勿論軽便も何度も用いられました。一個の時、二個の時、二〇グラムの、四〇グラムの強力型も。

そして或る日のこと

「今日は一寸きついかも知れないよ」

「いや、こわい、どんなお浣腸なの、お姉様いやよ、きつい。何時もののにして、ね」

でも、駄々をこねてみるだけで、私は富田さんを信頼していましたから、すぐ黙ってされるままになるのでした。

いつものように、ワセリンがぬられて挿入、注入、途端に肛門から直腸下部全体につき差すような灼熱感がパツと広がり、忽ちどうすることも出来ない便意です。

「あッ、もう駄目、出てしまうわ、お姉様、やめて、すごい、あ、あ、とてもとても我慢できない。お願い」

「そうね、そうでしょうね。だから一寸強い

といったでしょう」

「いや、いや、そんなのんきなことを、あ駄目、洩れそうよ、洩れるわ」

「あ、間に合わないわね。じゃ、すぐこれになさい。ハイ」

お尻の下に差込便器がグッと押しこまれるのと、もう我慢の限界に——といってもごく僅か一分位でしょうが——きていた私は、トイレへ走る元気もなく、一気に排泄してしまいました。その時は排泄したさに夢中でしたが、終った途端、生れてはじめて便を採られた恥かしさに、思わず涙がでてきてしまいました。

「ごめんなさい、お姉様。こんな粗相しちゃってどうしましょう。恥ずかしいわ、あの、私、自分で片づけますから」

「いいのよ、いいのよ、強い浣腸した私が悪かったのよ、ごめんなさいね。さ、泣かないで涙ふいてあげるわ」

やさしく富田さんは、私の頭をなでながら自分のハンケチで涙をふいて下さるのでした。もう、私はうっとりして、体を動かす元気ができません。でも早く始末しなくちゃと思って起き上ろうとするのを、やさしく押しとどめて、

「いいのよ、じっと静かに休んでいらっしやい。私にまかしておいて、ね、いいこと」

丁度赤ちゃんのように私の両足をもち上げると、熱いタオルで全部きれいにぬぐって下さるのでした。あんなに強烈な浣腸だったのに終わった後は、かえって今までの浣腸よりすつきりするのが不思議でした。そう言うとき富田さんは、

「そう、よかったわね」

といてニコニコ笑っておられました。

その日の午後は会議でした。室長、盛永さん、富田さん達は別室に入り、新参の私だけは研究室に残っていました。

会議がはじまって間もなく、お茶を入れていった私は何か何時もと違う空気を感じました。

「あ、御苦労さん」

いつもの室長の態度が何かよそよしく私の顔を見ようとしません。一瞬みんな黙り込んだようです。何かあるわ、私の噂かしらそう私は直感しました。

会議室と研究室は壁を隔てています。普通ならば何も聞えません。でもいつもと違って何とか盗み聞きしてやろうと思った私は一生懸命あたりを見廻しました。そうだ回転窓が

壁の上にある。私は、本棚をよじのぼって回転窓に耳を押しあてました。うまい具合にスリ硝子なのです。

「うまくいってらしいね」

「大分なれましたわ、もう大丈夫でしょう」

「楽しんでる様子はあるかね」

「収斂剤はもういいだろう」

「データーは」

「まだはじめてですから、条件が——」

「硫酸マグネシア使って——」

「今日はじめてですが、強すぎたらしく——」

「かわいそうに」

「もうそろそろ」

「肛門鏡は」

「いや、まだ早いだろう」

「ぐずぐずしていたら——」

「採便は」

「今日はじめてですけど、そう度々は——」

「いや、これから必ず採便して、反応を——」

とぎれとぎれにしか聞えないので、はじめは何かとぎれてましたが、あっ、なんと私のことを言ってるに違いないのです。私の浣腸のことをテーマにしてるんです。どうしたらいいんでしょう。あんなにやさしいお姉様がこともあろうに、私達だけの秘密であったこ

とを、みんなにお話ししてまうなんて。

「立川さん」

「あ、お姉様」

夢中になっていた私は、書類か何かとりに入って来た富田さんに全然気がつきませんでした。

「あなた、聞いてたのね」

「ひどい、ひどいわ、お姉様」

「丁度よかったわ、何時かお話しなくちゃ、お話しなくちゃと思ってたけど、貴女、びっくりしちゃ可哀そうだから、今日か、明日かと思って言いそびれたのよ。ね、一寸まってね、今すぐ来るから」

とび出して行った富田さんは、会議室へ行って事情を話したのでしよう。

「さ、今日は二人で帰りましょう。いろんなお話しながら、アンミツおごったげるわ」

こうして私は富田さんから諄々としてとき聞かされるのでした。

私は最初から浣腸実験要員として募集されたこと。幸か不幸か、私が身体検査の結果、一番立派な体、殊に直腸部が、便秘症など全然ないので、ビタミン剤といつわって、収斂剤がのまされたこと。お姉様が巧みに誘導したので、正直いって、私は浣腸がすきになっ

てしまったらしい事。我が社の軽便浣腸はピカ一だけど、同業者もどんどんないものを作り出していること。どうしても新製品を作るには実験が必要なこと。それには私のような素晴らしい体の持主の協力があること。浣腸実験は絶対秘密、社内でも私達だけしか知らないこと。今後、精密データーをとるためにいろんな方法で浣腸するが、我慢し協力してもらいたいこと。などが主な要点でした。

ここまでお姉様にとき伏せられると、私は

もうどうすることもできませんでした。

「ね、いいわね、分ってくれたわね」

「ええ」

「そう、よかった、よかったわ、さ、お約束指切りげんまんよ」

「でも、お姉様、私、浣腸されるの、お姉様だけじゃなくちゃいや、室長さんなんかに見られるの」

「勿論よ、私だけよ、先生方はデーターを検討して新しい浣腸薬を研究されるのよ。だか

らこれからは、朝早く、みんなの来ない時に

なんてことじゃなく、会議室のとなりに浣腸室を作ることになったの。立ち入り禁止の私達だけのお部屋よ。そこで必要な時には、思い切って浣腸実験しましょうね」

こうして、私は名実ともに実験台として誕生しました。さて、どんな実験が行なわれたか、長くなりますので、又次の機会にお知らせ致しましょう。

〈フोट・ストーリー〉

私の『S M 日記』

小竹 一 浩

今回は、昨年後半におこなったプレイの中から特に記憶に残っているものを三つ選んでみました。現実性の裏づけと、拙い文章をカバーする意味から、できるだけフोटの同封

できる体験記を送りたいと思っておりますが余り出来ないフोटや、とても掲載出来そうにないものはさし控えます。

『放尿記』

S M 歴十余年にもなる私が自分でもあきれている屋外放尿プレイの体験の一つである。

空が抜けたような物凄い雷雨に見舞われた八月二十一日のこと。望遠レンズを使って向う側の道を馳ける人々のスナップをねらっていた私は、真向いの家の軒下に飛び込んできた女性を見て、思わずドキリとした。白い薄地のワンピースは、びしょ濡れで、ブラジャーとパンティをくっきり浮き出し、体の線まですで露わにしていた、彼女は明らかにノースリッパなのだ。もっともノーブラ、ノーパンの

女性もふえているというのだから驚く程のことともないかも知れぬ。もう一寸待っていれば止んだのに、彼女は自分の姿態に気づき、じっとしていられぬ羞恥を覚えたのか、又ドシヤ降りの中を馳けて行った。その時ふくらはぎを伝って流れた雨水が妙に残り、私は例の如くプレイへの連想をしていた。

その夜半は、雨もすっかり上がり幾分涼しくなった。もうどんなプレイなのかお察しのことと思うが、普通の緊縛プレイならいざ知

らず、こんなプレイをさせられるのは雪枝しかいない。細引を持って、すでに寝ていた彼女をゆり起す。

「今何時ですか？今日はカンニンして……」
「まだ十二時前さ、すぐ済むから仕度して」
雪枝は無言の諦めを見せ、浴衣地の寝巻を脱ぎ、パンティ一枚で正座し、習慣的に深々と後手に組んで縄目をまっている。
「今日は、手は縛らないんだ。パンティだけいつものあれに穿きかえなさい」

「手を括らないで、どうなさるの？」

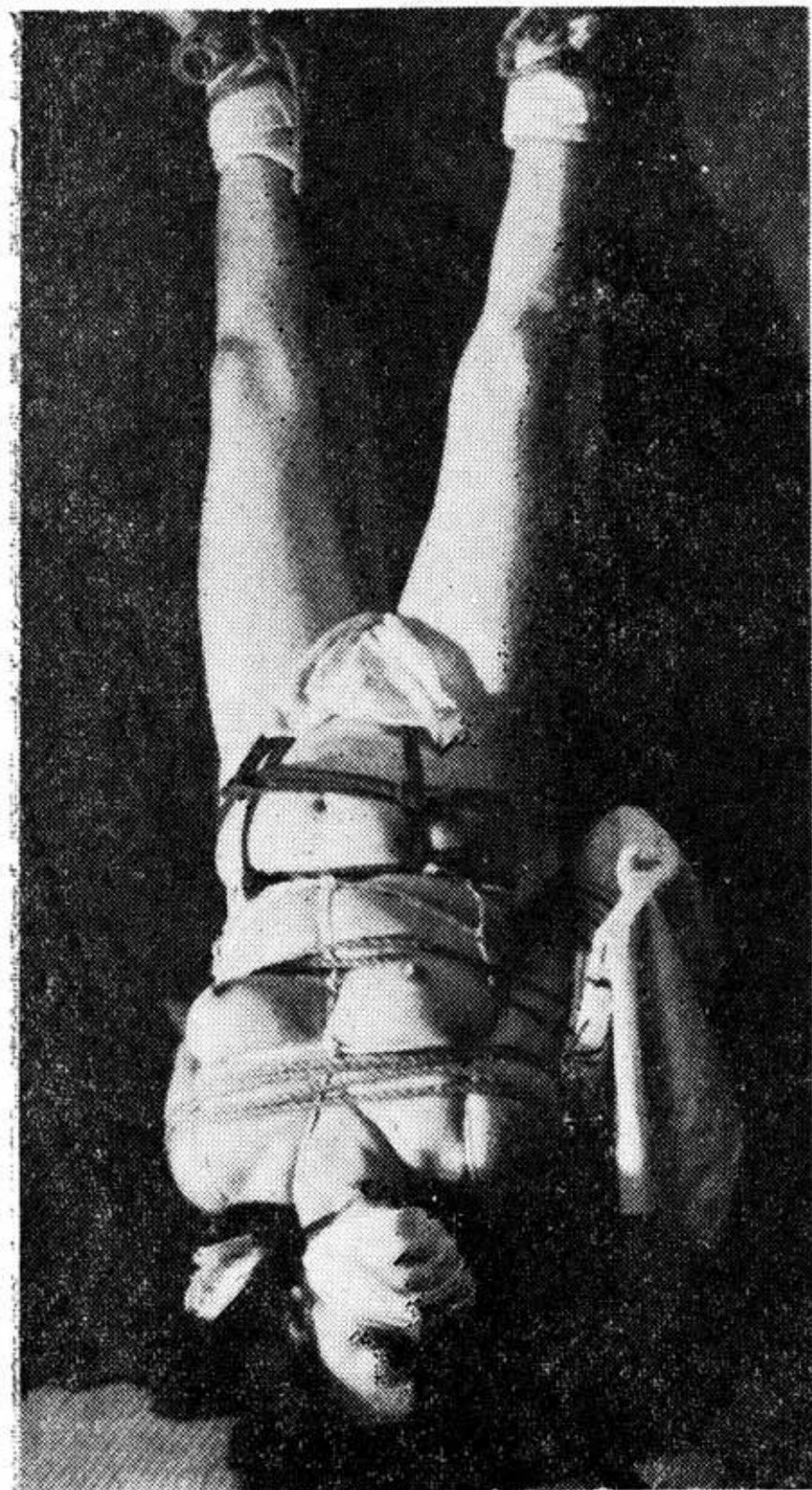
雪枝はプレイ用の汚れたスキャンティを穿き替えながら、私の顔色を伺う。私はそれには答えず、細引きできっちり股間縛りを施したが、いつもと違って、中央部には縦縄を通さなかった。諸兄姉には先刻ご承知と思うが、こうした腿の付け根を縛る（つまりお尻で二筋に分ける）やり方はむずかしい。強く締めすぎたら、とても歩くどころか、さっと立ち上がることもできないし、ゆるすぎると二、三度立ったり座ったりただけで、たろんでしまう。そこで、その二筋の縄に、あつどのように縄をかけ、どこを結ぶかにコツがあるわけだ。

「さあ、これを着てッ」

「レインコートなんか着て、外へ？……」

「今日は少し質問が多すぎるぞ、黙って言う通りにするんだッ」

戸締りをして、外へ出た私達は、丁度通り掛ったタクシーに乗った。雪枝は運転手の視線を気にしながらもコートの裾をまくり縄目つきのパンティをじかにシートにつける。当然太腿まで露出してしまふ。それはいいとしても、汚れてる下穿きが放つ微妙な臭気が、かすか乍ら漂うのには、さすがの私もヒヤヒ



やさせられた。淋しい住宅地で車を降りると前にも来たことのある空地へ入って行った。

（時折気の向く尽、屋外でのスリルを味うため、こんなプレイをするが、万が一を考え、いつも近所では行わず、知らぬ所へ行くことにしている）その空地は万年塀で囲まれ、古材が高く積まれていて、アベックの侵入さえ気をつけていれば、まず人に見られる気づかいはない。

「あのう……この縄解いて下さい。さっきから、お小水が……」

「その尽するんだよ。立った尽だぞ、放尿しながら歩くんだッ」

「そ……そんなひどいこと……ああもう……」

「さあ、こっちへ来て」

片隅に立てられた電柱の光の輪の中へつれて行き、さっとレインコートを剥ぎ取った。

雪枝は両の手で乳房を抱くようにして踞まる。生理の限界に来ているのだろう、裸身が小刻みに震えていた。

「コラッ、立って歩くんだッ」

「ハ、はい」

光の輪を二回まわった時、雪枝は「アッ」と小さく呻くと立ち止ってしまった。私は慌てて彼女を光の方へ向け、股間を覗き込んだ。

楽しい音と共に、スキャンティの股間にスーッと地図がひろがり、グイッと布地を押しぬけて滲み出た液体は、じかに地面へ落ちてしまう。急いで両腿をくっつけさせてから、ゆっくり二、三步あるかせてみた。縄目に邪魔されていた水分は、やっと内腿を伝わり足首へ二筋流れ落ちた。両腿をつけて、立ち竦んだ雪枝のサンダルは、ぐっしより濡れていた。

「拭いて下さい」

「拭くものなんか持っていないよ」

その後、落ちていた荒縄で古材に括りついたりしてひと責めしたが、雪枝の肌は哀れな程泥まみれになっていた。その尽レインコートを着せて、帰途すし屋に寄ったりしたのだが、次回に書くつもりプレイと重複する所があるので、『放尿記』は一応これで止めておく。

『ホース・プレイ』

昼間の暖かさに比べ、夜間はやっぱり十月だなアと上衣をひっぱり出したある夜。

私は某週刊誌で見たプレイを雪枝に試してみた。

「何なさるの？そんな長いホースを部屋にも

ちこんだりなさって？」

「ホース責めをやるんだ」

「いやだわ、もう寒いし、それにいくらビニールを敷いても無理ですわ、お風呂場でないと……」

「馬鹿だな、水をかけるんじゃないんだ。とにかく早く裸になって……」

両脇で締める小さなスキャンティ一枚になった雪枝を立たせ、使いなれたロープで後手に縛る。グルグルと簡単に上半身を括り緊縛感を与えないようにした。今日はビニールホースの効果を試すのが目的だからだ。

ずしりと重い、長いホースなのでロープのようにはしごけないから、とぐろを巻いているホースの中に立たせ、少しずつ引き上げて締めつけていった。注水口を蛇口にはめ、排水口を流しに入れて、蛇口をひねった。別に何んの変化もなく、暫らくして排水口から水が流れ出す。そこで蛇口を全開にすると、多少平たくつぶれていたホースは生き物のようにムクムクとふくらみを取り戻し、硬さを増してきた。

「ウッ、冷たいワ……」

「冷たいだけか？ どうだ締めまり具合は？」

「肩からだんだん下へ締っていく感じは、と

てもすてき、でも胸が苦しワ」

喘いではいたが、わりと平静に答えるので
もっと水圧を上げることにした。蛇口は全開
の俛で、排水口についている散水調節金具を
静かにひねっていくと、放水は次第に細くな
り水勢を強めて激しくタイルを叩く。

ビニールホースは、それにつれていよいよ
その硬度を増し強く雪枝を締めつけていく。

「ウウッ、つ、つめたい……サムイッ」

彼女はブルブルッと身体を震わせて呻く。
もうひと責めしてみようと、唇を割った猿

轡をかませ、一度調節金具をゆるめてホース
に弾力をもたせる。ほっとした雪枝の乳房を
つかみ乳首の真上にホースを走らせる。

蛇口を半開にしてから調節金具をきっちり
締めると排水は止まってしまった。出口を失
ったホースの中の水は急激にふくれ上り、ホ
ースは丸々と太って堅く雪枝を責め上げる。

「ウッ、ウウウ、アウッ」

かまされてる猿轡の奥から悦虐の響きを含
んだ呻き声が洩れてくる。私は急いでカメラ
を手にするとライトやアングルを考える余裕

もなく、たて続けにシャッターを切って行っ
た。その間三十秒位だったろうか。ホースは
叩くとコツコツ音がし、今にもはち切れんば
かりになり、恰も鋼鉄のロープで緊縛したよ
うな堅さで雪枝の裸身を締め上げていた。

雪枝は目を閉じ、眉間にしわを寄せ、苦し
気に呻き続ける。限界と見てホース責めから
解放してやると、雪枝は裸身の俛ぐったりと
布団の上に伸びてしまった。

「オイッ、どうだった？」

雪枝は目を閉じた俛、答えなかった。

「縛られて風呂に入った時と比べてどうだ」

「全然……ちがいます。それに……すごく……
冷たくて……苦しくて……でもいい気持」

そういうと雪枝はうっすらと目を開けた。

『逆吊り』

「今夜は吊りをやるよ」

「……」

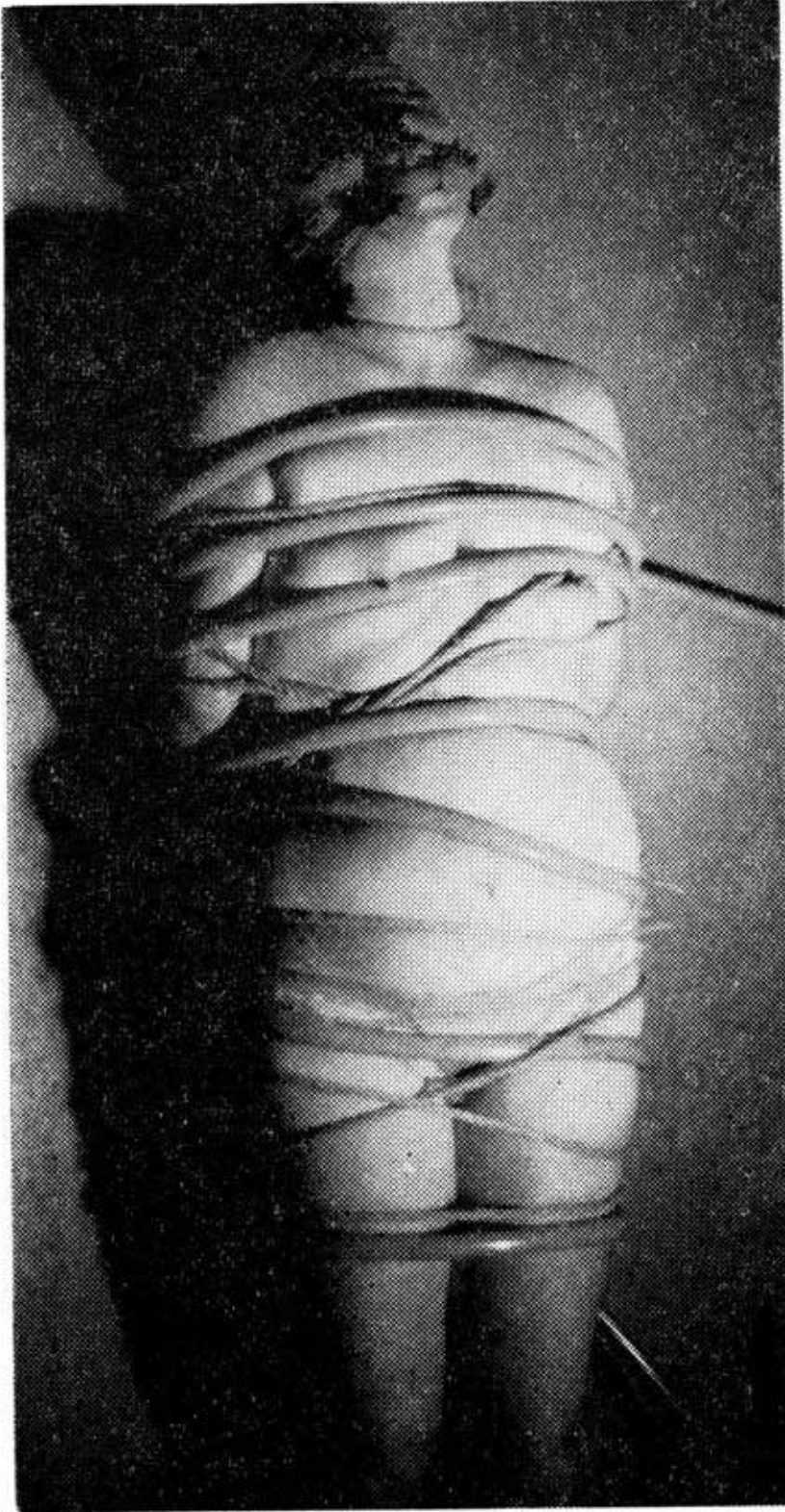
「コラッ、返事は？」

「ハイッ」

「全部脱いで、この紐で股間縛りをして待っ
てなさい」

「はい」

私がカメラやライトの準備をしている傍ら



で雪枝は自分の下腹部を馴れない手付きで、締めていた。

「なんだ、この縛り方はグズグズじゃないかッ。まあいいや、さあ両手を上げて……」

細い綿ロープで、上半身を念入りに緊縛した。あちこちに結び目を作りゆるまないように縛り上げる。このロープは翌日の夜まで解かないからだ。その上から、麻縄ロープで高小手にし、手拭で簡単な猿轡をはめてベッドに転がす。足首にタオルを巻きつけてから別々に麻縄をかける。

「逆さ吊りなの？」

「いやか？」

「いいえ、でも、大丈夫かしら……」

「このまえだって、平気だったろ。さ、やるぞ、この上にうまく横になって——」

椅子に乗った雪枝の足首に縛りつけたロープをもって鴨居に掛け、引き上げられるだけ上げて括りつけた。それだけでも結構逆吊りに近いポーズになった。

「これなら相当長いこと平気だろう？」

全く手拭一枚の猿轡では、いくらきつくしても、顔かくしの役目ぐらいにしかならないものだ。

平静に答えてた雪枝も、頭は完全に逆さに

なっているのだから暫らくすると小さく呻き乍ら眉間に皺を寄せる。一度休ませてやろうかな、とも考えたが、限界を試してみる気になった。

「直ぐ降してやるから、このままぶら下げるぞ、いいね、辛抱出来るな？」

僅かに肯ずく雪枝の顔は、もう大分紅潮して見えた。肩に手をかけて、グッと持ち上げ椅子を押しつける。

「いいなッ、離すぞッ、どうしても耐えられなかったら首を振れッ」

先程伸びるだけ伸びたと思われたロープが再びギギッと軋み、女体は一、二糎も下がってしまった。その為、黒髪は畳に這い、頭も微かに触れてしまう。

カシャ、カシャとアサヒペンタックスのシャッター音が、苦しい雪枝の呻き声に混じってひびく、フト奇クのことを思い、彼女の股間に手拭いを掛けた。

「ううう……ハァー、アウッ」

逆さになってから、もう十分以上は経ったろう。急に雪枝の髪の毛が激しく揺れた。

「どうした？おろして欲しいのか？」

私は慌てて畳に這い雪枝の顔を覗き込み乍ら聞いた。血が下がったのと興奮とで、すっ

かり真紅になった顔が喘ぎつつ反りかえる。もう無理だろうと鴨居の縄に手を掛けようとした私の足首に頬を寄せた雪枝の口から感極まったような絶叫が迸った。

「イヤッ……も……も……といじめてエ——ッ」

私は咄嗟に、右手で両の乳房を激しく平手打ちしてみた。

「ハァー、ハァー、ウッ、ウッ」

雪枝はもう吾を忘れ呻き喘ぎ、失神寸前のように見えた。

おろされて畳に伸びた雪枝の下肢は驚く程冷たくなっていた。いつもゆっくり見惚れている余裕は無いが、逆吊りは確かに最高のプレイポーズと言えよう。それに普段気になることもある腹部も逆吊りにするとぐっとスタイルも良くなり魅惑も増す。

私は過去何度か雪枝を逆吊りしたが、殆んどの場合同封のフォートの如く両足を別々に吊ることにしている。揃えて一本のロープで吊った場合万が一を考えねばなるまい。解けたら、切れたりしたらそれこそ一大事、首の骨があぶない。その点別々に縛っておけば片方に何かあっても大事に至ることはないと思うからだ。尤も夫婦プレイなのだから開股逆吊りの方が……。

縄なわのある

蜜みつ月げつ



△
初しよ
夜や
▽

千 草 忠 夫

一、

猛と淑子の新夫婦が案内された部屋は、そのホテルの広大な敷地の海岸のはずれに、疎林の中に建てられた一戸建ての離れだった。このホテルには、このような離れが幾つかあって、海に面した疎林の中に小さな灯をともしている。そのどれもに新しい人生に出發しようとするカップルの祈りがこめられてい

るようだった。

「なかなか商売繁昌のようだね」

「シーズンだものでございますから」

案内の女中が懐中電灯で足元を照らしながら先に立っている。

「なるほど、新婚旅行には、もってこいの作りだな。ロマンチックでいい」

「みなさま、そうおっしゃいます」

敷石に散った落葉が、三人の足元でかすかな音をたてた。

「でも、無用心じゃないのか」

「離れには新婚さまだけしか御案内いたさないことになっております」

「他人のことにとにかく口を出す新婚さんはいないというわけか……そうであってくれればいいんだがね」

「……」

離れの造りは別に変ったものではなく、バストイレ付きの部屋を林の中に移したようなものだった。ベランダ付きの八畳に六畳の寝室が隣接し、風呂場とトイレのほかに冷蔵庫をそなえた小さな水屋がついているのは三度の食事のほかに、ちょっとした腹ごしらえをするためのものなのだろう。

部屋は電気ストーブで暖めてあり、電気ごたつもしつらえてあった。

「夕食は、いかが致しましょうか」

「一時間もしたら、軽いものを運んでもらおうか」

時間は八時を過ぎていた。披露宴で食うや食わずだった腹が、少し空腹をうったえている。

「かしこまりました。お風呂はいつでもわいておりますから……」

淑子は部屋の隅にすわって、「よろしく」といって去ってゆく女中に会釈をかえした。

猛はベランダに面した障子を開けた。少し低くなった板の間に椅子とテーブルがあり、大きいガラス窓にカーテンが垂れている。カーテンを開けると、すぐ眼の下が海だった。この離れ屋は、海に面した崖の端に建っている

らしかった。暗い沖に漁り火が寒むそうにまたたいているのが見えた。

「お着がえなさいます?」

「それよりも先に風呂に入ろう。きみも疲れよう。いっしょに入るかい?」

「いえ、あたくしは後から……」

「じゃ先に入るか」

洋服を脱ぐと、淑子がどてらを背中からかけてくれる。猛は手拭をさげて風呂場へ降りた。

二人して入るのに狭くもなく、かといって

さむぎむするほど広いこともなかった。透明な湯がタイルにあふれ、かすかに硫黄の臭いがした。全体に清潔で何の奇もない造りだったが、壁の一面を占めている大きな鏡と、片隅にたたんだのであるピンクのスポンジマットレス、それに照明をいろいろ変化させることのできるスイッチなどが、そこを使用する者の工夫にまかされていた。

(これを見たら、淑子はどんな気持ちになるかな……)

猛は水槽の中に取りつけてあるライトを黄や緑に変化させながら、その中に淑子の裸身を浮かべた時のことを想像した。

あがると、淑子は岡持で運び込まれた夕食

をテーブルに並べているところだった。

「なんだ、そんなこと後まわしにして入ってくればよかったのに」

「でも……」

「いいから早くはいりなさい」

「はい……」

淑子が猛の眼をさけるようにして自分のカバンの中から着がえの類を取り出すのを見て猛はふっと思いついたように声をかけた。

「風呂からあがったら、これを素肌に着てくれないか」

「え?」

猛が自分のカバンから取り出したのは、眼もさめるばかりの緋色のものだった。

「今夜のために、特に用意しておいたんだ」

言い方の強引さに、淑子はまだ理解できないままにそれを受け取った。

淑子が風呂場に去ると、猛は冷蔵庫から特級酒を見つけ出し、それを電気酒燗器で暖めた。これから始まるシーンのために銅壺かなにかほしいところだが、そこまで徹底するとは無理というものだった。

一人で静かに銚子をかたむけながら、風呂場から聞えてくるかすかな湯の音を聞いている。湯上がりの湿った素肌に紅絹がまといつ

く感觸を、わが事のように感じていた。

欲望の爆発をどこまでおくらすことができるか——猛は快い酔いを味わうように、自分の欲望の度合いを吟味している。

二、

ほてった頬をタオルでおさえるようにして淑子が風呂から上って来た。宿のどてらではなしに、自分で用意した着物を着ている。裾から猛の与えた赤いものがのぞいていた。

化粧を終えて淑子がテーブルの向かい側につくつくと、猛はさっそく淑子に盃を持たせた。

唇をつけただけで置こうとするのを、無理にほさせ、更に注いだ。

「やはりきみは和服の方がいい。今夜はとくにいい」

猛は無遠慮な視線を湯上がりで輝いている淑子の頬から首すじのあたりにはわせる。淑子は視線のやり場に窮して一層頬を染め、伏し目になって、テーブルのものを口に運んでいる。

猛は淑子にさされるのを待たず独酌で何杯もあけた。酒には強い方だが、眼のあたりがかすんで来はじめている。

「これが初夜というものなんだなあ——何度

やっても悪い気持ちのものじゃなさそうだ」

淑子が何もしゃべらないので、猛の盃は重なり、酔いが目に見えてあらわになった。強いて酔おうとしている風さえ見えるのだ。

「淑子」

だしぬけにあらたまった声で言いだした。

驚いて眼をあげると、猛は妙に思いつめた眼で淑子の方を凝視している。

「お前のその上のやつを脱いでくれないか」

「でも、お食事がまだ……」

「いいから」

「では、お片付けして」

言ったのと猛が立ち上ってテーブルをまわり、淑子の背中からおそいかかったのと同時だった。

「旦那さまの言うことが聞けないというのか——」

酒くさい息が淑子の耳朶に吹き込まれた。

「あなた、乱暴は……」

優しくあらがうのを引き倒して、猛は素早く帯を解きにかかった。襟元が割れると、下は眼もさめるばかりの紅絹が柔かい素肌をおおっている。

猛は無抵抗な淑子の体から上の着物だけを剥ぎ取ってしまうと、そこに突っ伏してしま

った緋色に包まれた肉体を、なかば恍惚の瞳で見降ろしていた。

ピンクの伊達巻でキュッとくびられた胸から腹へかけてのふくらみが、ゆらめくほどの艶めかしさだった。

猛は両手を畳についてうなだれている淑子を背後から抱き起すと、はや全身の力を抜いてもたれかかってくる柔かい肉体を突き放すようにして両腕だけを背中にねじ上げた。

「な、なにをなさるの……?」

「不従順な妻を縛るのさ」

「そんな……」

言い争ううちに、細紐が重ね合わされた手首に巻きつき、弱々しい抵抗はたちまち封じられてしまう。

「いやです……あなた、ゆるして……」

自由を奪われる恐怖に動転して、泣き声を出すのもかまわず、猛はあまった紐を胸にまわして、豊かなふくらみの上下をきつく締めあげる。交叉された両手首を吊り上げるようにして縄止めされてしまうと、淑子は抵抗する力もうせたかのように、グッタリと観念した体を畳の上に伏せてしまった。

その背中に、猛は喘ぎながら言った。

「お前の白い肌には、絹の色が一番よくうつ

る。それをこうやって、縛りあげてみたかったんだ」

肩を掴んで抱き起すと、真っ赤にほてった耳朶から首すじに接吻の雨を降らした。淑子は不自由な体を身悶えた。

婚約時代、求められることもないままに清らかに過して来た唇に、酒くさい接吻の嵐がおそいかかって来たのは、そのすぐ後のことだった。男の手に触れたことのない肉体に、酒くさい男の体は、たとえそれが夫となった男のものであれ、どんなにおぞましい感触であったことか——しかも彼女の肉体は抵抗するすべもないいましめの身なのだ——

淑子はこの暴力に、半ば気絶していた。のけぞった白いのどを猛の激しい唇の愛撫にゆだねたまま、呻きとも悲鳴ともつかぬかばそい声をあげ続けていた。

猛は、ふっと眼ざめたように愛撫の唇を離れた。

(夢中になっちゃ、楽しみが少なくなるぞ)
こんな声を熱しかった頭の片隅で聞いたのだ。

(この女はお前のものだ。急ぐことはない)
猛が手を離すと、淑子の体はくの字なりに畳の上に横たわった。その姿態は完全に男の

手待つ女のそれだった。

猛はテーブルから銚子と盃を取ると、こたつに運んでそこに腰を据えた。盃を口に運びながら、二の腕まであらわになった腕が、交叉された手首を軸にして、いましめを解こうともがいているのを眺めた。

見られる苦痛を充分味あわしてから、猛は縄尻を引いて、畳の上をずるずるとこたつへ引き寄せた。淑子は体の重心を奪われてまろび、上体をくくられた肘で支えようとしてまた倒れた。長襦袢の裾が乱れて、白いふくらはぎが紅の陰に隠れる。

「ゆるして……ゆるしてください……」

真っ赤に上気した頬を猛の腕にあずけるようにして、淑子は顔を伏せる。猛はくずれた襟元に手をかけて、一気に引きはだけた。

緋色の絹に包まれた統のような光沢を持った肌が、まろやかな肩から、むっちりとした胸のふくらみの上にかけてあらわになった。蒼い肉の翳りに緋の色がかすかに映えて、それが息づくたびに妖しい色彩の交響をかなでるかのようだ。

「綺麗だよ、淑子。死んだ母がまるで花嫁衣裳をまとってよみがえったようだ」

肌は蒼白く、これが熱して桜色の吐息をつ

くことがあるだろうかとうたがわれるほどだった。猛の指はいましめに締めあげられている襦袢をすこしずつ押し拡げて、胸のふくらみをあらわにしてゆく。

上と下をきつく締めあげられたあわいから白珠のように、それがまろび出た時、猛は思わず吐息をついていた。真紅に縁どられ、薄紅を頂点にしこらした、たわわなそれは、それ自体羞恥を持った生き物でもあるかのように、猛の熱い視線に触れて、はげしくおのいた。

「ああ……いや……」

羞恥をあらわにされた淑子は絶え入るばかりの呻きをあげて、更に深く顔を猛の腕の中に埋めた。

猛は掌をひろげて、その豊かな実りを下からたっぷりとすくうように持ちあげてみた。温かく柔かく、そして重かった。自己の快楽のためにあったような、倫代の固く引きしまった乳房にくらべて、淑子のそれは、男をなつかしい幼年時代に帰らせ、母の乳の匂いをしたわせる気持ちに連れもどすようだ。

猛はゆっくりと掌に円運動をさせて、そのなつかしい温もりを心ゆくまで味わった。唇を淑子に寄せてゆくと、濡れた唇が陰花植物

の花のように甘い香りを吹きつけるように開いた。

接吻は長かった。猛の両手は緋の長襦袢をほとんど背中にたくしこむまでに愛撫を深めていた。

「いや……ここではないや……」

喘ぐように言って、淑子は体を伏せようとする。全身からゆらめくばかりの艶めかしさが立ちのぼり、冷たい陶器の肌に火がついたようだった。

猛はゆっくりといましめを解き、長襦袢を両腕から脱ぎ取った。伊達巻きを解き放すと後はこれまた眼もさめるばかりの腰のもの一枚だけ。

「は、はずかしい……」

小さな悲鳴をあげて胸を抱こうとするのを今度は手首だけを背中で縛りあげる。

「淑子は今夜、縛られたままで女になるのだよ」

ふかぶかとうなだれたうなじから円い肩先が瞬時に紅をはいたようになった。

「ああ……」

耐えきれいなように激しく頭を振るのを、猛は縄尻を持って引き起す。

寝室への短い道のりの間にさえ、淑子は

幾度かそこにしゃがみこもうとした。背後から猛の掌が、くびられてない乳房の自然なまゐるみを賞味しようとおそいかかるし、最後には腰のものの紐をゆるめられて、それがずり落ちるのを腰をかがめて止めざるをえなくなってしまうからだ。

しかし、それらはみな男の意地悪いたくらみだった。身悶え悲鳴をあげ、白い肌を火のように燃えたたせ、寝室の襖の陰に連れ込まれた時、淑子はすでに一糸もまとってはいなかった。そして、覆うべき所を男の眼にさらし、自由であるべき箇所をいましめられて、淑子は絹夜具の祭壇の上に犠牲の身を投げ出していた――。

三、

眼をさますと障子の外が明るみかかっていた。淑子は猛の裸の胸からそっと体を離し、もつれあった脚をほぐした。布団の外に出ると、明け方の冷気が、素肌にしみた。

猛は淑子に手枕をさせた腕の形のまま静かな寝息をたてている。淑子はその無心な寝顔にいとしげな視線をしばらく投げてから、急に肌寒さに我に返ったように胸を抱いて、あたりを見まわした。

着るものは見当たらずに、床柱の根元に円くとぐろを巻いている細紐が眼に入って、淑子はドギマギした。

猛は、散らす前の手向けにと言いながら、固い蕾の花を床柱の根元に飾ったのだった。二十数年の歳月の間ひそやかに芽ぐんできた薄紅の肉厚の花弁はあでやかに咲き拡がり、甘い蜜をとめどもなくしたたらせて、いたい寄る蜜蜂の触角の下におののいていた。

淑子自身は、自分がどんな体臭を放ち、どんな声をあげたかは、ほとんど記憶していないが、柱の根方に縛りつけられ、脚をあぐらに組まされた羞恥の姿だけは、その眼で見たように、まざまざと記憶している。

逃げるようにそこを出て居間に散らばっている赤い腰のものと、長襦袢を拾うと、それを抱いて風呂に入った。

明け方の光が風呂場にもさし込み、ほの暗いタイルの上を湯がたえず流れるのを、静かに見守っているようだった。

淑子は浴槽の中にのうのうと寝そべって眼をつぶった。何かを考えようとしても、それはすぐすると脱け出してしまい、ぼんやりとなってしまう。しかしそのぼんやりとしている中に、かつて経験したことのない充実感

がある。しかもその充実感、夫によって破られた肉体の奥の一点に、まだ煥のように燃えている所から発して、ますます強く激しくふくらんでゆくようだった。

淑子はふと思いついたように湯を飛ばして浴槽から出ると、そこに白い光を反射さしている鏡の前に立った。誰の眼をはばかりでもない放恣な姿態を、くまなく写して見た。

思わず抱きしめたいくなるほど愛らしい乳房、くびれた腰、広い腹に深い影を作ってくぼんだ臍、その下の淡い鬚りから、むっちり

と閉じ合わされた太腿……

「ちっとも変ってないわ……」
変っていないのを不思議がるような言い方だった。

ねじ曲げられ、縛られ、絞られ、押し開かれ、押しひしがれ、引き裂かれ、そして血を流した肉体とはとても思えない。何の曇りもなく白く輝く肉体がそこにあった。ただわずかに、手首と乳房の上下にうっすらと紅の跡が走り、乳房のふくらみの上にただひとつ、真紅のキスマークが残っているだけ——

淑子は再び浴槽に身を横たえた。キスマークと縛り目の跡を指先でなぞって見た。触れた所から熱いものが全身に拡がってゆくよう

だった。

縛られ思うままにもてあそばれるという羞恥と屈辱の極点から、どうして、あの身も世もない恍惚の淵におぼれるようになるのか、淑子には我が身のことながら理解できなかった。

ただそれがまぎれもない事実であり、それを淑子の肉体は素直に受け入れ、それを心ゆくまで味わった。

「倫代さん、あたし、後悔なんかしていないわ……」

淑子は何かがフツ切れた綺麗な表情を浴槽の辺に仰向けに横たえて、半ば歌うようにつぶやいた。

窓の外で夜は次第に明けてゆき、淑子のおだやかな頬が薄闇の中に白さを増してゆく。淑子はそのままの恰好で、しばらくまどろんだらしい。再び眼を開いた時、窓からさし込む朝日が湯気を白く輝かせていた。

淑子は少しあわてて湯の中で起き上った。夫が起きてくる前に、昨夜のままで散らかっている部屋を、片付けておくつもりだったのだ。それに朝の化粧もしなくてはならない。スリガラスの戸の外に、人の動く気配がした。

「淑子、入っているのか」

「はい……」

あわてて脚を縮めて胸を抱くひまもなく戸が開いて、猛が入って来た。

「早いなあ……グッスリ寝込んでいる所を襲おうとしたら、もぬけのカラさ」

猛は前を隠そうともせずズカズカ入ってくる。淑子は浴槽の隅に身を縮めて、視線をそらした。

二人一緒に入ると丁度くらいの浴槽の大きさである。夫の腕が伸びてくると、淑子は逆らわずに腕を夫の首にまわして抱き取られるままになった。唇が重なる。

「ゆうべは、縄を解いてくれといって大暴れだったっけ」

「……」

「抱きたい、あなたを抱きしめたいの——」
て口走ったりしたよ」

「嫌、おっしゃらないで……」

淑子は腕に一層力をこめて、赤くなった頬を猛の肩にうずめた。

愛撫されながら、その高まりの中で相手を抱けない切なさ、その切なさが不思議なこと

に興奮をおりたてたのだ。
「体を流してもらおうかな」

そう言って広くたくましい背を向ける夫を淑子は、いとむように丹念に洗った。洗い終ると猛はマットレスをタイルに敷いて、仰向けになった。

「前も頼むよ。美しい女性に体をなぶられているのは夢の中にいるみたいに気持ちいい」
淑子は立膝をして傍にしゃがみ、十本の指で丁寧に石けんで洗ってゆく。見ないようにしていても、それはどうしても眼のすみに入ってしまう。

「そこも頼むよ」
猛は眼をつむっている。

臨時増刊号

小説・絵画「花と蛇」 特集

絶賛！注文殺到！

売切れぬ中にお早く

目下発売中！ 乞お申込み

定価一部 五〇〇円

(送料三〇円但し当分の間当社負担)

団鬼六作の力作、長篇小説「花と蛇」千数百枚一挙登載、三三〇頁。四馬孝描く「花と蛇」Vターマ画集『十六葉』口絵収録。今すぐ天星社へお申込み下さい。

淑子の白い指がおずおずとからみついた。猛は時々薄眼を開けて、指の動きや、そこをまぶしげに見つめているうるんだ瞳や、全身から立ちのぼるなまめかしさを、ひそかに楽しんだ。

終ると、猛は羞ずかしがる淑子を半ば強制的に流しはじめた。白くなめらかな肌にたっぷりと石けんをぬりこめ、足の指の間にいたるまで、念入りに清めてゆくその作業は、洗うというより愛撫に近かった。

半分もすすまないうちに、淑子は全身から力を抜き取られたようになってしまった。マットレスの上に横たえられ、くすぐったさに呻き声をあげながら、膝に力が入らない。そのままタオルで足首を交叉するようにくぐられ手首も背中できくり合わされてしまった。

「なにをなさるの……？」

かすみのかかったような眼をあげて、淑子はたずねたが、問いと裏腹に、声はもう期待に濡れている。

猛は脱衣場から細紐を持ってくると大きなコブを作って、それに石けんをぬり込めた。手足のいましめはゆるかったが、縦に通された紐はきつく柔肌に食い込んだ。

「あ、いやです……ヒーッ……」

外聞も忘れて淑子はのけぞり、更に責めをのがれようと、マットレスの上を狂いまわった。負けることが、はじめからわかっている争いだった。だが、あらがわずにはいられない。

淑子の抵抗が激しいと、それにつれて、いましめが追加され、しまいには身動きもならぬくらいがんにがらめにされて、横たえられてしまった。縄をしぼられるごとに、石けんにまみれた四肢が痙攣するように突っ張る。

猛はぐったりと重い妻の頭を膝の上に抱え上げた。上気した頬に睫毛のふるえが影を落しているのを残忍な心で眺めた。

「あ、いや……それだけは……」

淑子は背で身をよじろうとしたが、あごをつかまれて、唇をこじ開けられてしまった。

淑子は閉ざした睫毛を激しくふるわせて、それを受け入れた。軽く……とると、夫のふるえがじかに伝わってくる。

「淑子、ほんとに可愛いよ。もう絶対に離さない……」

せっぱつまったような声で猛が口ばしるのを、淑子は夢の中で聞いた。

(倫代さん、あたし、あなたに勝ったわ)

淑子は更に激しく……ながら、めくるめく恍惚の中に沈んでいった。

(未完)

稿談 性風俗資料入門

特殊雑誌、書誌・書目おぼえ書○文芸

市場と梅原北明○変態資料の人々

斎藤夜居

ある日、城市郎さん（『発禁本』シリーズの著者）と対談中に、私は秘筐のヌード・アルバム数冊をお見せしたが、そこにある数百枚の裸婦写真を眺めながら、

「これは眼の保養になる。こういうのばかり眺めていると、あたり前の話かも知れないが、陰毛が生えているのが正常であり、自然で、むしろケを修正した雑誌や画報のフォトこそ、グロテスクだね」

と、彼氏大分味のあることを云ったが、にんげんの性器の附近には男女ともに陰毛がいっぱい密生しているのが△自然▽で、これが

生れつきはえていなかったりかりに△修正▽

されていたとしたら、その反自然さに、人は堪えられなくなつて、町の浴場に行くこともできなくなるだろう。だが、世の中ではそのように△自然▽の正直さばかりを云って、△正義▽を主張したって、その事が一度印刷物となった場合には、それこそ彼城市郎など蒐集狂の好餌となつてしまふのがオチだ。いちがいに△発禁本▽と云つても、多種多様であつて、社会・思想問題を取扱った学術書と風俗書ではその性質を異にするし、鴟外のキタ・セクスアリスとカストリ作家の性的自叙伝

小説を同列に扱うべきではないであらう。そのことは分り切つた話だが△発禁本▽である

という点に於ては確かに変りはないのである――。所で、にんげんは何故いつも何時の時代にも洋の東西を問わず、△発禁▽の憂き目に遇うような書物・雑誌を印刷したり、時の法律に違反する非合法な思想書や、ブルースクのたぐいやら、映画や写真をつくりたがるのだろうか？小稿において之から述べるのは主として軟派出版物に就いてのみ書くので、社会主義思想や高級文芸作品については述べない。一応△風俗書▽を主体として進めて行

きたい。それを主旨とするのではあるが、過去・現在に亘って出版法無視という人物が居たということはやはり正義につながる問題である。とだけ云って置く。だから△発禁本△の取扱いは余りにも興味本位・趣味本位つまり稀本漁り骨董趣味に流れたコレクターの仕事にしてはいけないことだ。△発禁本△になつてしまった著者と出版者の立場を汲んで、その書が何故どこが時の法律に触れたかを正しく解説するだけの親切心がなければ、それは単なる好奇・獵奇という慰し難い病める心にいや増しに油を注ぐだけの役目きり果さないであろう。

◇ ◇ ◇

にんげんに男女の性がある限り「エロ」はなくならない。新刊書・古書を問わず情事（いろごと）を幾分むき出しに書いた本はいつの間にか売れてしまう。だからエロがいちばん足が早いと——。出版社も著者も儲かればいいんだということだけで書物・雑誌を製造する、と思われ勝ちだが、戦前の伏字〇×時代でも法網を潜った出版で珍書屋が儲け過ぎて笑いが止まらなかった話は余り聞いてないし、戦後のセックス解放の一時期にはベルデの解禁書『完全なる結婚』が数万部も売れ

て話題になったが、それから二十年経った現在ではセックスのテクニクはもう説かれ尽してしまった。公然と吸茎・嘗陰などという口唇性愛の戯術が解説される時代に、今更に「寢室宝典」や「初夜の手引き」を出版したってもう売れない。古い、古いである。「エロ」は変貌する……現今の国際間のアトム、ミサイル冷戦を頂点に、日常生活の周囲には電機製品を筆頭に、カーブームの普遍化、それと反比例する経済力や道路の旧態、白熱化して行く物心両面のジレムマが、メカニクな思想ばかりが家庭生活心理を異常にむしばんでいる。もう容易なことでは、にんげんの△性△はエレクトロしなくなっているのが現状である。若い男女でありながらセックスの老化が目につく。外向性を帯びて来て、誇示することによって自らを鼓舞しようとする、つまり内実のエネルギーを早くから消耗して蓄積や内容充実に欠けている。その方向が自然に、「エロ」をサディズム（S）かマソヒズム（M）かに導かれてしまう。

大体以上のように述べたが「そうだ」と肯定されて自衛策を樹てられる人もあろうし、いまだに森厳なる性の神秘性を夢ではなくて現実の思考の中に温存されている方もあろう

が、そういう時代おくれは、更に、更に旧式な鉄の貞操帯など購入してそのワイフの股鞍にしっかり嵌めておかないと、いつ寝盗られてしまうか分らないぞ、と一言警告したくなるのが現代である。

◇ ◇ ◇

特殊性風俗雑誌の世界にも以上のことは謂える。オーソドックスだとばかり思っている中に旧式になってしまっている。読者の年代層の低下と移動がつかめないうちに、これからどうなるかと云う所で『ゆまにて』廃刊の報を聞いた。『人間探究』『あまとりあ』の過去に急転直下して消え、古典の系列に入ってしまった。然し早急に未来を云うのは危険だけれども、雑誌読者というものは出版社や書き手たちよりも多くよく物を知って居り、その嗅覚は敏感で、同じ手を用いたのでは乗って来ないものと知るべきである。むかしの棋譜のサワリばかり集めたからと云って勝負に勝てるものではない。然らば新手・新戦術かインスピレーションかと云えばそうではない。△性△の問題は古く、常に新しいから、実相に肉迫する以外に、その笑いと涙を正確に把握する真理きり残らぬ世界だから、後代の書誌にその実質が高く評価され、一冊の古

本になっても人々の注意を惹くだけのものを持つ——それが特殊風俗雑誌や性風俗誌資料の生命だと思ふ。

小稿は若し許されれば数回連載して、書物漁りのうちでも特に今迄に興味を持ち続けて来た、特殊文献雑誌や特異な風俗書や性風俗文献資料に就いて、私見の及ぶ限りのものを大正末期から終戦後の時代まで述べ、これからの蒐書家たちの目安にもなれば幸いだと思つている。

◇ ◇ ◇

書物の世界では「書誌」や「書目」は大切な案内人の役目を果すものである。書誌・書目に精通しなければ書物の山脈を踏破するところが不可能であるばかりではなく無駄に努力を消耗することになる。書誌・書目は目的地に到達するためには「地図」と同じような意味と役目を持つ。私たちの多くは実際にはシルクロードを踏査できないけれど、その報告記事や探検記やそこに副えられた地図をたどることによって、限らない人類の夢の世界に入る手がかりが得られる。然しシルクロード探検とは異って、風俗特殊文献の調べについては、人類の歴史の山脈を越える大きな問題ではないから、ただ心の片隅に蟠っている

だけの事柄なので、出発に当って一般からその壮行を祝福してもらったり、基金を財団や新聞社から仰ぐなどということもなく、更には調べた報告記事の発表場所すら与えられない。けれども仕事としてはあたかも遊牧民の移動天幕生活を追跡するに等しく、きのう確かに彼等は生活していたのだが、其処のあたりに人は人影もなく動物のにおいもなく、焚火の跡だとか食物の残りの骨が散らばっているだけで、生活と心証の記録は求められないのである。然かも彼等はその行く先々で勝手な暮し方や遊び方をして、やたらに子孫をふやしているの、何処のだれが本当の父母だか分らない。書誌・書目の研究ということは私立探偵と戸籍係員を兼ね備えた気持にならなくてはできない。調査と記録を絶え間なく繰返すことである。まして、艷本書目とか風俗特殊雑誌の記録ということになると、苦勞ばかり多くて然かも酬いられることが余りにも少ない——ばかりではなく、戦前においては誤解も生じたし、危険な事柄ですらあった。だからと云って、誰れもが恐れて調べなかった訳ではない。幾つかの記録をかぞえることができるし、またその集成に学問としての情熱を傾注して来られた方も幾人かはいたし、

戦後にもその業を継続し、より一そうの完全を期して居られる林美一氏なども居る。

◇ ◇ ◇

中野栄三氏はそうした特殊書誌・書目の数少ない研究者の一人で、その信念を筆者宛私信に次のように述べている。

書物を書くということも、読むということも、人間の欲望であって、生活の中での大きな意義を持つものです。誰でもそうして書物を読んでいる間に、書物そのものの内容的なことがら以外にも、さまざまにとが考えられて来るものが、それが書物への趣味となり、感想となり、蒐集となり、探書となり、さては自分の持っている書物の分類だとか、書目だとか、索引だとか、自分が読んだ書物の智識を整理しなければならなくなったりして、非常に苦勞し、苦痛にさえなる。

然しそうした中にも生活の一部としての楽しみがあり、友がなくとも、孤独感がなくなり、更には読書によってわが人生に一筋の生き方とか、信念といったものが出来てくる。剣に生きる者も、絵に生きる者も書に生きるものも、芸に生きる者も、等しく到達する人生の悟りといったものが、読

書に於ても得られると思うのです。

書物雑誌が取扱う内容も前に並べた範囲に於て語り然も語りつくせないだろうと思います。体裁や形式は無論変わっても、本質的な内容はそんなところだと思います。書目分類にしても、書目集にしても、それだけでも容易なことではなく、あなどり難い仕事となりましょう。 昭41・3・13日

この中野氏の言葉は味うべき点が多い。次に、特殊風俗雑誌・文献における書誌・書目の記録を集録した特集号に就いて記してみたい。

『文芸市場』 壺週年記念 近代筆禍文献号
大正十五年十一月 編輯代表 梅原北明
文芸市場社発行

「文芸市場」 近代筆禍文献号—表紙



内容。発売禁止の問題に就いて(山内房吉) ボルシェヴィズムの新聞紙(村山知義) 発売禁止の思ひ出(昇曙夢)。 鉄の使ひ分(前田河広一郎)。 発売問題を前にして(松村善寿郎)。 以上のほかに「発売禁止の批判」と題して、藤森成吉、赤木健介、壺井繁治、新井格、武野藤介ほか八氏の体験談がある。 特別附録に筆禍文献集があつて、本朝筆禍絶焼録(梅原北明)。 増補・近代文芸筆禍史(斎藤昌三)。 大正筆禍考(長尾桃郎)。 等々の貴重な研究があり、筆禍書研究家・蒐集家にとっては常備書である。

——尚ほかに、井東憲編輯紹介の「獄中憂憤余情」上巻がある。出版条例並新聞条例犯輕禁固人三宅虎太氏の獄中記であつて、明治十五年頃の鍛冶橋監獄署内に於ける獄舎生活の記録が紹介されている。

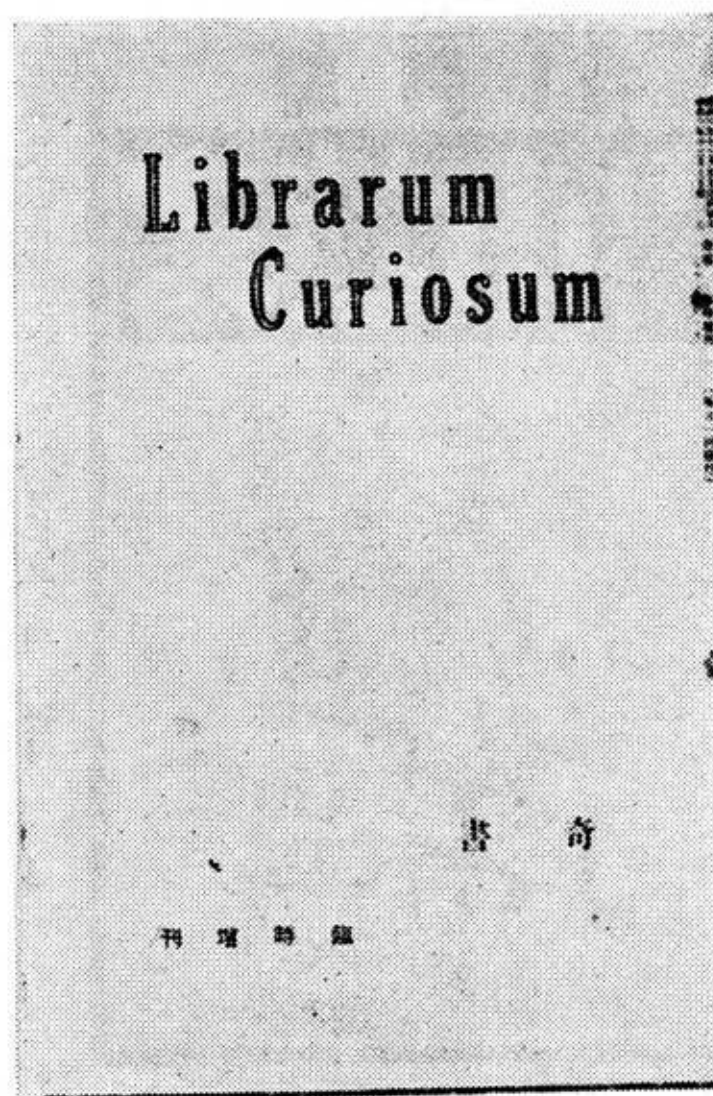
編輯後記のなかで——一週年記念と発売禁止問題に何の関係がある？本誌が筆禍事件で全誌を埋めた理由は、この問題に関しては、われわれ文筆業者が、もっとも慎重に考慮し、之が対策を更に徹底せしめんが為の意企も手伝つてゐたからである。附録の四篇、筆禍文献集こそ、読者の熟読を賜はりたい貴重な文献である。従来刊行されてゐる単行本を見ても、斯うした微に入り細をうがった文献は容易に見当たらない——と云っている。実にその通り。この号に「大正筆禍考」を寄せた、真摯な筆禍文献研究者として知られてゐる長尾桃郎氏は現在でも坐右にこの雑誌を置いて居る。そして、今でも見るたびに学ぶものがあるな、と語ったことがあつた。

最近では古書価もぐんと高くなつて、千円というのを即売展で見掛けた。

『奇書』 臨時増刊 昭和三年十二月 編輯兼發行人 飯田威之助 印刷人 福山文三 發行所 文芸資料研究会。

内容。世界艷書目録並解題(佐藤紅霞)。

「奇書」臨時増刊—表紙



ひ出、フロッシ、蚤の自叙伝、露西亞民譚、戦争勃発（バルカン戦争）、ツル・ラヴ、等々を含む百冊を紹介している。

日本艶本目録は大野卓編となっているが、会本解題に同じく封酔小史こと尾崎久弥の編んだ稿であろう。

大野は文芸資料研究会の福山福太郎の甥で、その製本所の仕事をして居り、この時代に小冊子ではあるが珍本『人間研究』砂山岳紅編

日本艶本目録（大野卓）。歌麿前後・会本解題（封酔小史）。ほかに附録記事として「世界陰毛奇譚」「古医書に見えた性問題」「新横浜暗黒界縦横記」などの読物がある。

佐藤紅霞の目録・解題——艶書百種は、英仏独西伊米の六ヶ国より発行されたものを手当り次第に選んで組上に乗せたまでである。

中には我国幕末時代より明治初年にかけて舶来したものもあり、昭和年間に始めて輸入されたものもある。——と、はしがきしたもので、印度のヴェキナス、ファンニー・ヒルの思

を出した、斯界の猛者たちが一堂に会して、女性に対する感能のいっさいを赤裸々に告白し合った座談記録として知られている書。戦後に芋小屋山房で再刊した。大野卓の仕事はこれ一本だけで、早くから猟奇界を去った。

『談奇党』 好色文学受難録 昭和六年十二月 発行・編輯・印刷 鈴木辰雄 発行所 書局・洛成館。

巻頭に、「談奇作家見立番附」と「発禁書見立番附」がある。珍書屋征伐（耽好同人）最近・軟派出版史（志摩房之助）。エロ出版

捕物綺談（談奇党編集部）。最近・珍書手帖覚書（談奇党編集部）。等々当時の軟派出版界の内幕がよく書いてある。他に、「現代猟奇作家版元人名録」があり、後の珍書愛好者のためには貴重な記録を残してくれた。

註。「軟派出版史」には梅原北明と文芸資料研究会に就いての複雑な裏面の事情がよく書いてある。当年の特殊出版社としては神田神保町の坂本書店と、朝香屋名儀の竹酔書房が知られている。珍書屋というのは東京市内に三十社近くもあったが、大物は前記の坂本書店だけが現在では社名を変えて残っている。梅原北明が世に頭角を現すことが出来たのは、竹酔と手を組んで出版した『全訳・デカメロン』と『ロシア大革命史』が当って相当の成績をあげることができたからで、梅原北明が有名になり後年あれだけの仕事が出来たのは伊藤竹酔が在ったからである。

左翼文芸雑誌だった『文芸市場』^{いちば}は何らイデオロギーの無い北明と竹酔が手を組んで出したもので、創刊は大正十四年十一月で一時休刊して、昭和二年からはエロ・グロ特殊風俗雑誌に変貌した、というより之が本来の姿だった。この『文芸市場』は今



「談奇堂」

好色文学受難録 — 表紙

日では最も入手し難い特殊雑誌の一つに数えられている。所でこの雑誌は赤字続きで、月々の損害が余りにも大きかったので竹酔は手放すことにしたが、北明は廃刊を惜しんで同人組織に改め、金子洋文、村山知義、中野正人、峰岸義一、井東憲その他の一味を集めて之の持続を計った。多額の負債を生じた牛込・五軒町の福山印刷所に於いて、北明・竹酔・福山福太郎の三氏協議の結果、共同事業として——遂に、『文芸

資料研究会』が創立したのである。この会の隆盛期と凋落期、そして分派分裂して終末に至る——一種の人間喜劇の時代でもあり、日蔭の花盛りで、本当の意味での艶業ルネサンス、開花復興は日本敗戦後まで待たなければならぬ。

この雑誌の巻頭の「エロ・グロ発禁書見立番附」に就いては、今日では特別に説明を加える必要はないと思うが、「談奇作家見立番附」は当年の軟派文献界の縮図であり鳥瞰図でもあった。『匂へる園』

第二輯現代・軟派文献大年表

昭和七年八月 編輯・発行
竹内道之助 発行所 日本愛

書家協会（これは風俗資料刊行会であり後の三笠書房）

内容。軟派出版略史。軟派出版所と其書目。軟派全集叢書類書目。軟派及特殊雑誌書目。邦訳軟派書目。軟派風俗関係書目。軟派及特殊参考書目。書誌関係目録。発禁書目掲載参考書目。以上。

これの編者は無記名なので従来不明のままだったが、昭

和四十年十二月になって判明した。中野栄三氏で、私が同氏よりいただいた書簡の一部を左に抄写させていただく。

「雑誌『匂へる園』第二輯の記録は全文小生の稿です。当時竹内道之助氏が発禁を考慮して筆者の名はどこへも出さなかった由話していました。その頃にはこんなものでも集録となると、発禁になる虞が^{おそれ}あったのです。然しこの号は遂に発禁をまぬがれました。（竹内氏のものは比較的発禁書は少くて済んでいました。）この記録は簡単なものでしたけれども、近代ものをこうした形でまとめた参考資料的なものでもあったし形態として、ある種の意義をもつとの考えから執筆したものの。斎藤昌三さんの『筆禍文献大年表』はその後に出了ました」

註。前期特殊文献・雑誌時代の書目記録としては之以上のものはない。詳細に良くも網羅したものと思う。同時代人の記録だけあってよく眼が行き届いて、この種の書物とその事柄を一括記録された労は多大である。私など後れて生れた珍書漁りを趣味とする者には何物にも代えがたいガイド・ブックである。

この雑誌の軟派出版略史には次の記載があ

『現代軟派文獻大年表』——表紙

現代 軟派文獻大年表



風俗資料刊行會刊

末葉から大正年間に掛けては所謂恋愛の自由が高唱され恋愛論、恋愛に関する事実の告白物が流行したが、次で性慾研究書乃至は性慾文学といった恋愛より一歩進んだ一種の傾向を持つやうになり、更に性慾医学書、性慾関係の文献的研究が流行する一方には之とは反対の古典的軟派文学の復刻、古典淫書の翻刻や外国軟派書の翻訳が行はれたし、

最近に於ては軟派実話、獵奇探訪等のジャーナリズムの傾向さへ持つやうに変化して来た」と云っている。大勢を概観する場合この説はまったく正しい。後年の敗戦後に於ける軟派出版物の氾濫までを予見しているようだ。尚、『文芸市場』秋季倍大 九・十月合本昭和二年十月発行 は「世界デカメロン号」と題して、デカメロン文献の趣味的集成を行っている。次に、年代は下るけれど『雑誌』とは云えない趣味誌だが一書を紹介する。

『明治・大正・昭和 文芸筆禍索引』で昭和

十年三月 伊藤竹醉編 発行所 粹古堂『いかもの趣味』四号でこの誌の特集である。巻頭に「近世筆禍番附」があり、あいいうえお順に書名を載せて居る。編輯私記に、「純文芸のみを拾い集めたのでは本の形にならないので、興味中心のもの、趣味もの、などを加えたが極端な性慾ものは避けたから御諒承願います」という内容だから特別の参考価値は少ないが、年代が昭和九年まで伸ばしてあるのがミソか。孔版印刷・五四頁。武部部発行となっている。

「最近性は慾ものが殆ど一掃され其他の筆禍本も非常に僅少になったやうですが、これは云ふまでもなく非常時日本に蹶起した読書界当然の覚醒であって、まことに結構なことです」などと往年の当事者がトボけて書いている。

そう云い乍らこの種の書目など作って喜び悦に入っている故竹醉老人を偲ぶとなつかしい。この人は竹酔書房・粹古堂・国際文献刊行会等々を主宰。生涯を趣味小出版で過し、昭和三十九年に八十一歳で亡くなった。晩年は通信販売の古本屋だった。

尚、この種の特種文獻書誌は実に乏しく文

る。時代と軟派出版に就いて考える場合わかり易く便利な説明なので抄写して見たい。「戦乱の後とか異変のあった後とかには必ず猥本猥画が流行する。又一年の中では十一月から十二月へかけ即ち年末には斯様な出版が非常に多くなると云ふ傾向に就ては斯道の研究家斎藤昌三氏も、云はれてゐるところである。此の意味に於て大正の末から昭和に掛けては所謂軟派出版の流行を来したといふことも亦不思議な現象ではないかも知れない。

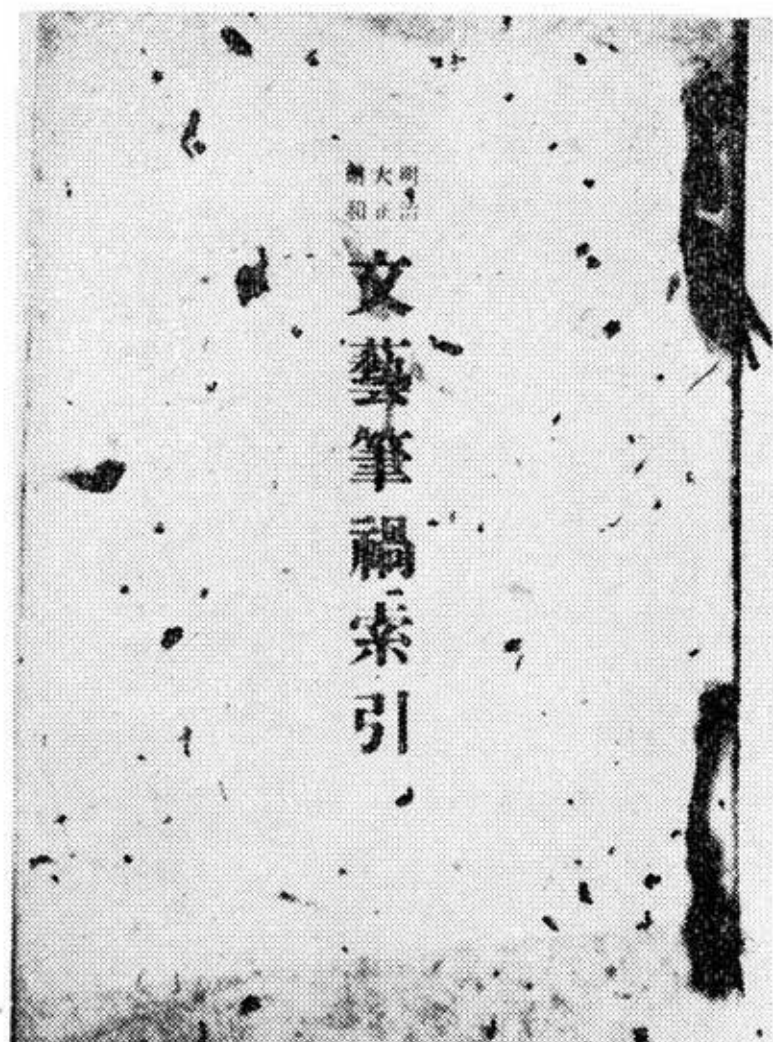
○ 軟派出版物の内容的変遷を見ると、明治の

学史に載った記録では関西大学助教授・谷沢永一氏の『近代日本文学史の構想』（昭和39・晶文社）の中の「文学研究の前提となる性知識の問題」があるだけ。細密な研究対象としたくても、今日では何より文献の入手に困難をきわめている。

◇ ◇ ◇

『文芸市場』と梅原北明

「明治、大正、昭和」文芸筆禍索引―表紙



我国の特殊風俗文献物の世界に梅原北明の残した業績は偉大である。大正末期から昭和初期にかけて最も活躍した無類の出版狂であり、稀代の人物でもあった。この時代の特殊風俗文献史とは実は梅原北明史であるといっても過言でないようだ。

始めに、少雨莊斎藤昌三の「北明論」より要約して見よう。

梅原北明。本名は貞康、烏山朝太郎とも称した。早稲田大学英文科に学んだ後、二流新聞の外交記者となった。文名を知られた

のは新訳『デカメロン』が最初。次に『ロシア大革命史』

大正十四年に、村山知義、今東光、井東憲、金子洋文、佐々木孝丸等当時文壇の新鋭を同人に『文芸市場』を創刊。その年の歳末に神楽坂上の雑沓で同誌の原稿ガラを叩き売して原稿市場と称し、皮肉な新聞種を提供した。当初左翼雑誌だったのが翌大正十五年には風俗雑誌の傾向色彩が濃くなり、昭和二年には藤沢衛彦、酒井潔、伊藤竹酔、

佐藤紅霞、石角春之助など特殊文献派の寄稿が多く、左から右へ転向。その頃から出版に興味を持ち、プランメーカーとしての才能を十分に発揮し、精力に任せて東西の軟派出版に異様な情熱をかたむけ、自身で手を下したものの、同志及び部下に指令して産婆役となったもの、等々多数の軟派出版がある。このため彼及び部下も起訴され、北明は数度の罰金刑と二ヶ月の獄中生活をしたが、昭和三年の夏上告して保釈となり、その秋十一月より雑誌『グロテスク』を創刊し、又々軟派出版に熱中、再び追われる身となり、大阪、長崎、上海、後には満州と転々した。その前期・後期を通じて代表的出版は次の通り、

明治性的珍聞史 梅原北明

ピアズレイ画集

ファンニイ・ヒル 佐々木孝丸

アラビアン・ナイト 酒井 潔

バルカン・クリーゲ 酒井潔・梅原北明

フロッシイ 酒井潔・梅原北明

オデットとマルチイ又青山倭文二

日本性語大辞典 桃源堂主人

薫園秘話 酒井 潔

ダス・フュンフェック大木黎二

ラテイ・ラハスヤ 泉 芳環

変態十二史

全十六冊

○

日本張型考挿絵篇（上海より発送したと伝えられる）

しとりこ 閨房秘語集

世界珍書解題 佐々健自

世界好色文学史 上巻 中巻

らぶ・ひるたあ 酒井 潔

秘戯指南 梅原北明

続・秘戯指南 梅原北明

同性愛の種々相 花房四郎

ナポリの秘密博物館 羽塚隆成

等々で、これらは、その代表的なもののみで、その息のかかった出版は百種以上にのぼり、その外にドイツや上海などより直輸入の性書、画集も相当にあり、読者に取次いなり一部を複製したり配布したりした。

以上の大部分が僅か前後二、三年間の活動とは、誠に営利本位では出来ない努力とスピードであった。

殆ど毎月と云ってもいい程に、禁止や押収を蒙るという始末で、遂に出版界では記録破りの第一人者となった。一方、北明が主宰し、又は中心となり、或は枝体となった雑誌は次の通りである。

文芸市場

変態資料

グロテスク

奇書

カーマシヤストラ

談奇党

変態黄表紙

今日から見れば梅原北明は、モダン・エロティシズムの元祖で、自由奔放な彼の發展ぶりに対し、世人の一部に誤解もあったが彼の放胆は、仕事の面白さと積極性から来たもので、決して営利的な点は無かったし古文献の保存と復活利用にあったことは推察が出来る。

彼が満州に去ったと聞いて、音信杜絶約十年だったが、太平洋戦争末期に小石川音羽辺に、社団法人科学技術振興会にしていると判って訪ねて行った。其処は軍部の翻訳出版として軍事的に重要な仕事らしく、往年の彼とは全く異った世界だった。

昭和二十一年四月五日に、敗戦病シラミチブスに罹って四十七才で急死した。彼の期待した時代となっただけに惜しかった。同年末にその妻も病死した。

増刊『人間探究』第十六号所載

「梅原北明を語る」斎藤昌三。その他諸書に拠る

尚、北明は奇行エピソードの多かった人物で少雨荘の随筆類には色々おもしろおかしく語られているので、特志の方の渉獵をおすすめする。私の聞いた話を一つご紹介しよう。

前記の羽塚隆成の『ナポリの秘密博物館』には非公開の写真版図譜が附録についている。この印刷所は現存し二代目であるが、故人になったその主人の談話によれば、当時不景気の真最中で仕事がなく、危険を承知の上で引受けたのだが、その打合せのためある晚上野寛永寺裏で北明と逢った——その時が初対面だった。用談を終えて、北明と印刷所の主人は並んでくさむらのなかに放尿したが、北明の陰茎には病毒に犯されすでに亀頭が無かったという。「今迄に、あの時くらいビククリしたことはない」と後々までも語り草にした。北明は千切れたような陰茎を月光に照らして見せ、おれはこれまでのことをやった男だ、万が一のことがあっても君には迷惑を掛けるようなことはない、と言って笑った。然し、この図譜は未頒布のうちに押収されてしまったので、図譜付本はいくらも残っていない筈である。

◇ ◇ ◇
『日本艶本大集成』（昭和38・魚住書店）の「大正・昭和の特殊風俗雑誌の記録」にある『文芸市場』に関する記事には、次の如く記録されている。

創刊大正十四年十一月・菊判・文芸市場社
梅原北明編、当初はプロ雑誌だったが、一時休刊し、昭和二年からはエロ・グロ雑誌に転向した。発禁は昭和二年四月号、七月号、八月号、九・十合併号の四冊。

二ノ三号 妖怪研究号 大正十五年七月
二ノ四号 全国同人雑誌関係者一覧

二ノ七号 世界魔窟小説集大正十五年七月
二ノ十一号 近代筆禍文献号大正十五年十月

一月

三ノ六号 更生号 昭和二年六月

三ノ七号 探奇珍文献 昭和二年七月

三ノ八号 暑苦号 昭和二年八月

三ノ九・十号 世界デカメロン号 昭和二年

年十月（同書五五四頁）

このうち二ノ十一号、三ノ九・十号に就いては先きに記したので、二ノ四、二ノ七、三ノ八、により、この雑誌の特色を窺って見よう。

『文芸市場』四月倍大号 創作号・明治異聞

（写真版三拾数枚入）附録・全国同人雑誌関係者一覧表——ミシナ売レタラメツケモンダ五千万円儲ルゾ——表紙にはこれだけの文字が印刷してある。表紙画は村山知義。大正十五年四月一日発行。編輯代表 梅原北明。発行兼印刷人 伊藤敬次郎（竹酔）。定価大勉強参拾八銭也。

巻頭言。文芸市場宣言。芸術に対する迷信はながい間続いてきた。事実には於て芸術は商品の取扱をうけ、算盤によって評価されてるにかかはらず、芸術のみ金銭を超越してゐるやうに過信してゐる人々が未だこの世にゐる。文芸市場はこの愚かな迷信を破って芸術を商品として徹底させるために生れた。これは芸術に対する冒瀆でない。資本主義社会に於ては商品でないものは一切存在する意味がないのだ。（中略）文芸市場ははしりを迎へる。ダダ、表現主義、新感覚派、コント、プロレタリア文学、新人生派いづれも結構である。だが人生に対して無考察な、また生きた社会に没交渉な流行文学を侮蔑する。文芸市場は人生を文化住宅化することに反逆するものだ。

この△宣言△は未熟な青臭い言葉ではあるけれど、結局は今日の芸術の意味につながつ

ているのだから、この見解は正しいとしなくてはなるまい。——次に内容・執筆者に就いて、稿は長短さまざまであるが四十数名がその名をつらねている。プロ雑誌・風俗雑誌の混合であつて既に雑誌の性格は明らかに分裂している。

（小説）宮地嘉六。前田河広一郎。矢橋公麿。佐々木俊郎。金子洋文。松井締子。赤松克麿。梅原北明。井東憲。

（隨筆・感想）藤森成吉。尾瀬敬止。生田春月。佐野袈裟美。萩原恭次郎。武藤直治。布施辰治。宮原晃一郎。渡保次郎。北尾亀男。サトウハチロー。森本巖夫。中野正人。和田信義。神近市子。壺井繁治。水町京子。高橋新吉。神山康司。青山倭文二。中野正人。S生。

（特集・同人雑誌関係者一覧表）

（特集・明治異聞）

高須芳次郎。古賀漢夫。尾山篤二郎。川路柳虹。西川勉。横瀬夜雨。巖谷小波。井東憲。斎藤昌三。河東碧梧桐。沢田撫松。伊藤竹酔。梅原北明。

まことに多彩な顔ぶれであるが、別に驚いてはいけない。この時代の有名人には談話筆記（記者の）署名稿が多いからである。

又、同人雑誌の記録は当時のこの種の事柄はこれ以外にないから貴重である。編集後記にも、この第一回発表に参加したものの百六十四種、関係者千四百四十名……従来の文士録はいわゆる文壇の人々のみ、而かも比較的有名な或いは情実本位のもので、極めて不公平な感じがする。原稿が金になる人ばかりが文壇人ではない。——と書いてある。一種の反骨精神を見るべきである。

他の多くの例があるように「文学」の世界には文学くずれが多い。文学や芸術の成そこないは始末が悪い。元より文学をやる位の間だから、エゴイズムではあるうが正義感が強い。梅原北明もそういう人間の一人だった。

◇ ◇ ◇

『文芸市場』夏季倍大号 世界魔窟小説集 第二巻七号 大正十五年七月 定価七十銭

この号は七月特大号となっており十篇の創作を集めた。菊判ではなく四六判で、一種の単行本形式の雑誌である。筆禍誌となった。発売された時の型式は普通雑誌としてであったが、禁止になった後に残部にカバーを付けて（文芸市場と七月号という文字を除き）、ボール紙のケースに納めて、単行本として頒

布した形跡がある。表紙は峰岸義一画。

内容。唐妓の死 大泉黒石。白象のやうな女 村松梢風。異人臭い髪 長谷川伸。ストライキ中（一幕）前田河広一郎。行灯部屋 井東憲。一九二二年 村山知義。屋根裏の花卉 今野賢三。殖民地の魔窟から 中野正人。不協和音でアレンジされたモザイク 辻潤。鍵穴の芝居見物 梅原北明。黒石が支那の女、梢風は上海の女を、長谷川伸は樺太アイヌと旅役者のローマンス、前田河はアメリカ私娼窟、井東憲は日本の遊女屋、それぞれ特異な情景をテーマにした創作集である。この雑誌が筆禍をこうむった原因は「魔窟小説集」というタイトルと全誌に漂うムードによるものではあるうが、長谷川伸の「異人臭い髪」は短篇好読物であって、こういう場合雑誌が筆禍本になったため、作品全部が討死してしまうのは作家にとって残念なことだったと思う。——余談になるが、以前にカストリ雑誌を調べていた頃、懸賞当選作の掲載雑誌が発売禁止になっていたのがあり、力作長篇だった。筆禍原因は外の犯罪実話によるもので、当選作者の名はそのほかで見ていないので、こういう場合はまったく気の毒だと思ったことがある。——扱て、この

号の筆禍原因はさきに書いた通り紙面全体のおいによるもの。だが他に井東憲の「行灯部屋」に対する比重が大分かかっているように思われる。

行灯部屋というのは遊女に対する制裁で、そこに檻禁されて責められる遊女を描いた小説で、内部の悲惨な描写を書き過ぎ、エロというよりも、当時日本では公娼の存在を認めていた国であるから、その意味でも発表は当局にとって好ましくなかったであろう。勿論大正時代には遊女屋だって行灯は使用していなかったから、そうした名称の物置である。物語の結末は大正大地震でその遊女が脱出して、（自由になって）炎の中を、情夫のいる町へ向って走って行く。

◇ ◇ ◇

『文芸市場』八月暑苦号 昭和二年八月一日 発行 編輯兼発行人 梅原貞康 発売所温古書屋坂本書店 定価五拾銭。

この号の表紙は大分変っているので説明すると、度重る発売禁止の連続で大分ヤケを起したのであろう、雑誌が出来上ってから発禁罰金に至るまでのコースを双六式に図解し、表紙ウラに「神秘をあばく」と題して次のよ

うに説明している。

新聞紙法による雑誌発禁の経路

神秘をあばくと云ふ事は吾れ人ともに変に力こぶの這入るものであります。其処で私達も御多分に洩れず大骨折って一つ神秘を諸君の眼前へ引き出して見ませう。

雑誌が禁止を食ふにはどの位の手数と時間と経費とがかかるか御存じですか？ 電報料丈けだって大抵なものではありません。

とに角雑誌が出来ると、先づ

内務省二冊、警視庁一冊、区地方裁判所二冊、東京通信局二冊、差出局二冊、所轄署高等出版係一冊、都合十冊を納本いたします。

それからの経路が所謂神秘で普通の人には解らぬ事実であります。とっくり下図によって如何にお役所仕事に神秘で面倒臭いか御らん下さい。

伝手だから本省の検閲係の人を御紹介します。(普通出版物)千葉氏(性に関するもの)千葉氏(小説)。磯部氏(社会主義)。内山氏(同人雑誌)。久保氏(外国新聞雑誌)。

発売禁止道中双六(書籍道中初旅の人々に捧ぐ)と題し、本社発送係がふり出して、

罰金受付係で上りとなっている。まったく、こういう雑誌を作ったことは気味の悪いもので、出来上った時は胸の溜飲が下りてさぞかしスーッとしたであろうが、勿論たちまち又々発売禁止である。梅原は当時、「正気の狂人」と当局から言われたと云うが、まったく之では無理もない話である。

中味は、宗教刑罰の惨虐を酒井潔、近世惨虐犯罪史と題して明治新聞よりその種の事柄の記事を沢山選り出したのが北明、和田信義のテキヤ細見、石角春洋の浅草の今昔などというものが主な内容で、もうプロ作家は一人も登場していない。また、この号は同誌の事務を担当していた影の働き手「樋田悦之助追悼号」ともなっている。北明、斎藤昌三、坂本篤、石角春之助、尾高三郎、上森健一郎、酒井潔、伊藤竹醉などが故人を偲んで座談会を開催した記録が載っている。口絵には芳年の物凄い残虐錦絵が二図もあり、すさまじい切腹図が色刷版となっている。他に海外の犯罪研究書よりの写真複製の腹から股間まで引き裂かれた婦人を「腸を喰ふ」と題して載せている。——残虐趣味研究号——である。サディズム画報ともなっている。この号の紙上の特色は、発売に坂本篤と伊藤竹醉が積極的に

参加している点で、この二人は梅原北明とは違って、純粹の出版商人で、甘きにつく蟻のように時代の趨勢がエロ・グロ出版にあつまるところを早くも予感したのである。又、竹醉・篤の二人は大して学は無かったが、猟奇趣味とその種の書物を製造する鋭い感覚を有っていたばかりではなく、何より商売熱心でもあった。こうした本格的な商人が参加したことによって、日本艶笑本ルネサンスが開幕されるのである……。此処でこの時代の社会背景を少しのぞいてみよう。

波乱万丈の明治時代にくらべ、無風状態の大正時代が終ると、昭和二年——近代の波浪は、西から東から複雑な様相を帯びて押し寄せて来た。「金融恐慌は昭和二年(一九二七)三年十五日にはじまり、四月二十日前後には最高潮に達した。この恐慌をまねいた直接の原因は震災手形の処理問題にあった。しかし、根本的な原因は、第一次大戦以来、日本経済の矛盾のつきかさなっていたことにある。第一次大戦中に異常な速度で発展した日本資本主義は、戦後恐慌や関東大震災で大きな打撃を受けた。政府は、そのたびごとに日本銀行に救済貸出をおこなわせて、財界の動揺をふせいできた。そのため戦争景気で水ま

的に膨脹した企業の整理は進展せず、多くの銀行や会社は巨額の負債をかかこんでゆきづまっていた。おりから欧米の資本主義国が、企業の整理集中、生産設備の高度化をすすめて、戦後不況を切りぬけていたのにたいし、日本はこれに立おくれた。そして国際收支の悪化と為替相場の下落になやみつづけ、不況から回復することはできていなかった」(岩波新書『昭和史』34頁)と云う時代。つまり不景気の走りである。又、風俗史的にはエロ・グロ・ナンセンス時代が始まろうとする——次に、もう一つ引用してこの頃を偲んで見よう。

◇ ◇ ◇

今三十歳以上の人なら敗戦の味は十分知っている。しかし不景気の味は五十五歳から上の人でないと御存知あるまい。日本の不景気の初まりは、第一回欧州大戦が終ると間もなく、大正九年一月から始めて昭和十二年まで凡そ十八年続いたが、其中最も深刻だったのは昭和六年前後であったろう。敗戦もつらいが不景気の苦しみは又別の味だ。私は若い時から自分自身が浪人のくせに屢々人から就職の世話を頼まれたが、大正十五年までは皆成功した。昭和二年以来

の就職の世話は不成功に終った。

当時私は市外野方町大字沼袋の住人だったが、昭和四年の夏から西瓜に金五銭の札がはられて路傍にごろごろ並べてあるが買手がなく、昭和六年ともなると高円寺の住宅街には電灯会社から配電をとめられて無灯火の家が珍しくなかった。大学の卒業生はあらゆるコネを求めて就職口を探し、姓名判断といふものが流行り改名した人も寡くなかった。その代り物価が極端に安いから小金を持ってるさへすれば又甚だ楽しかった。昭和六年の秋、例のエログロの梅原北明にすすめられて新宿の帝都座で一緒になつて素人芝居をやった時、四谷見附の屋台店でうまい牛飯をくはすところがあるから食べに行かうといふ話がでた。井に山盛一杯拾銭、サラリーマンが肩を並べて繁昌しているのとやうだ。まづタクシーをつかまへる。昭和三年からタクシー代も大暴落して旧市内は一円均一になり一口に之を円タクと号した。その円タクが今や五十銭。それを更にかけあって四谷見附までだからとて、金三十銭に割引させた。かくて乗りも乗ったり男女合せて六人。市電なら十四銭の往復切符を三枚買へば四十二銭がところ

をタクシーの三十銭で突っぱしった。

生方敏郎執筆編輯発行『古人今人』第一二九号(昭和41年5月)所載、「不景気の味回顧録」より部分抄写。ちなみに生方翁は本年八十五才にて健在。

◇ ◇ ◇

雑誌『文芸市場』がプロ雑誌からエログロ風俗雑誌に転身したことがらに就いては、やはり若い神経にピリピリと感じられた時代の不安があったと私は想像する。エログロ資料の有する時代反逆意識というものは、その根は必ずしも梅原北明ばかりではなく、もっと遠く、江戸時代の艶本艶面作者・出版者の中にもあった筈である。唯遠い世の彼らは理屈を云わずにそれを娛しんでいたし、大衆もそれをよろこんでいた。政府もいくぶん大目に見ていたのである。然し明治以後にあっては西洋思想が流入して、道徳の解釈も異って来たし、臭い物にはフタをしたがったし、法律の力で艶笑出版を根絶しようとしたが、人間から人間の欲求の根源を絶つことなど不可能であることは、常に何時の時代にもこの種の出版物が絶えない事実を見よ、という以外にないだろう。

少雨荘の随筆から見ても「梅原北明」は好

人物であったことが知れる。その資性に、プロ作家としての要素は少なかったことは確かだが、時代の影響は見逃すわけには行かぬ。

北明はそれ迄の日本には無かった新しいジャンルに属する人物で、従ってその解釈には困惑してしまう。あれだけ官憲に捕えられ、高額の前金を払い、獄中で暮した期間もあったのに、釈放されれば罰金祝賀会などというのを催したりして、大分人を食ったやり方だが恨みがましい所がなく、又女々しい気持もなく、その明朗さは何処から来ているのか？

この事柄の解明にはやはり当時の時代の背景をもう少し考えなければならぬ。第一次欧州大戦は大正三年（一九一四）七月に勃発して、大正七年（一九一八）十一月に終戦となったが、大戦中日本は英仏連合軍側に参加して、ドイツの租借地山東省の青島を占領したという程度の戦歴だけで、アメリカ同様最小の軍事負担で最大の利益を得ることができた。勿論、国内は安泰で戦禍に苦しむこともなく、いわば対岸の火事場見物で、かえって戦争成り金が沢山ふえ、経済界は未曾有の好景気に恵まれ、この時から世界有数の帝国主義国となったことは歴史の事実。——然し、大戦が終ると、過去に敗戦体験のなかった島

国帝国日本は、世界的な戦後不況を乗り切るだけの対策を持たなかった。ヨーロッパの社会思想は八戦後Vの暗雲にとざされて、そこには社会革命思想のほか、道徳の廃退にもなう八性Vのみだれが生活風俗の中につよく侵入していたが、封建国家日本の特色の一つでもある強い警察権力があって、海外の戦後思想の流入を強力に防止したというものの、時流の抵抗は不可能で、社会主義運動が活潑になって来たというのがこの時代の特色である。

この頃及び以後に、風聞ではあるが、青年から社会主義・過激思想を防止する意味で、その眼をそらせるために、軟派・桃色出版を幾分か当局が大目に見ていた、などともっともらしく説かれているが、まさか我国の当局にそれ程の粋人がいたとは思われない。が、それは扱って置き、ヨーロッパにおける戦後の思想のうち、八生と性の不安Vが流入し、海外出版物からの影響を見逃すことはできないであろう。特に、アンチ・ミリタリストとして、皮肉な風俗画家ゲオル・グロッスの諷刺漫画集「エクス・ホモ」——この人を見よ——が、よろこばれ理解される社会的下地は日本にも十分にあったのである。梅原北明の

雑誌『文芸市場』が、プロ雑誌より発展して風俗特殊雑誌に変貌する経過もいくらか知られようと云うものである。

◇ ◇ ◇

『変態。資料』の人々

プロ雑誌から風俗特殊雑誌に变身した『文芸市場』は度々重なる発売禁止と罰金、莫大な宣伝費に追われ、月々の損失は可なり大きくなり、遂にその債権債務の問題から、北明、竹酔、福山福太郎の三者協議の結果、共同事業として「文芸資料研究会」が発足したことは先きに記した通り。これの第一回刊行物として発表したのが、今日でも古書即売展に行けば必ず二、三冊は転っている、例の和装本の『変態十二史』である。

当時、この種の出版者は八珍書屋Vとよばれ、その全盛期には東京だけで三十社以上もあった。彼らの常套手段は先ず購読会員のリストを求め、斬新奇抜なうたい文句を並べ立てた内容見本を刷り、会員を募集し、会費を先取りしてから製本に取掛するというのが殆どで、珍書屋の悪どい連中になると、会費だけ先きに取跡白浪とばかりドロンをきめこむ

者も多かった。が、このことは結果的には自ら破滅を招いたことになるのだが、そのことは後日談として——伊藤竹酔は予約出版『世界奇書異聞類聚』の内容見本により多数の会員リストを持っていた。但、この叢書は十冊ほど刊行されたが、内容的には省略が多くて面白くない本であった。——『変態十二史』の刊行ということは、梅原、伊藤、福山印刷所にとっては乗るか反るか事業だったが、幸いに奇書異聞類聚の会員に投じた内容見本と、各地の新聞に掲載した広告により、申込会員四千名を突破したと伝えられている。『変態十二史』は当初一千部限定といていたが三千部を頒布。最後には千二百部位ではあったが、成功した出版であったと見てよい。「梅原北明はもうプロ雑誌のことなど考えなかった。変態十二史の利益を三人で分配するより、この機に乗じて、自分個人の仕事をしよう」と計画したのが、わが軟派雑誌の中で、最も光輝ある歴史を残した『変態。資料』であった。偶々当時プロ雑誌を発行していた頃からの関係で、三円五円とゆすりに来る人間が多かったので、それ迄しばしば出入していた労働組合の斗士・上森健一郎を、営業部員兼雑誌の発行名義人として採用し、雑

誌『変態。資料』（文芸資料編輯部）が誕生した。大正十五年九月、創刊号を発行した。以上引用の部分は『談奇党』所載の志摩房之助稿「最近・軟派出版史」に拠った——。

◇ ◇ ◇

この雑誌の成立事情は以上に述べた通りである。『変態。資料』には、もう『文芸市場』に見るような不透明な煮え切らぬ人文学的Vセンチメンタルな匂いは無い。あくまでも大人に成り切っているし、大胆であるばかりでなく、図々しく開き直っている——そして、小気味良きまでに人間の素肌をあらわに現し、肉体と精神のわだかまりを解放し、其処に新しい人間の解釈を求める素材を投げ出して、読者よご覧あれ考えよ。と云わんばかりのふてぶてしさと、人生の退屈を打開すべきショックを感じさせる編集ぶりを示した。

——この雑誌は終刊（昭和三年六月）までに二十一冊発行したが、今日ではその揃物を見ることは不可能だ。それ程に発禁々々の連続であるばかりでなく、公開雑誌としての性格を無視して出版している。けれども、之を発行した刊者と、それを求めた読者（会員）があったという心理の問題に就いては、この時代この一誌に就いてだけで解決すべき事柄で

はなからう……以下、内容に就いて述べることにする。

『変態。資料』創刊号 大正十五年九月

口絵。グロッセの漫画、芳年画の明治の錦絵新聞、欧州大戦中の俘虜を絞首と銃殺による死刑の場面写真。

主な読物は、日本古典の中に顕れた滑稽文学に就いて（一）生方敏郎。追捕・変態伝説考。藤沢衛彦。江戸軟派の猥め味。尾崎久弥。古代東洋性慾教科書研究。酒井潔。ほかに斎藤昌三の高橋阿伝夜刃譚の新旧版という伏字起し、今東光の蠅の随筆、北明のでかめろん、伏字考とえぶためろんの完訳を称するもの。

生方敏郎は当年のユーモア作家でこの稿は談話筆記だったが、稿料は他誌にくらべて大分よかった、と後年になって私に語ったことがある。

藤沢衛彦、酒井潔、尾崎久弥などは特異な立場における風俗文献研究家として活躍した人々であるが、学究者として斯学の草創期の功労者たちであった。斎藤昌三は趣味の書誌・書物研究家で生涯一貫した人。

この創刊号で私が注目した点は、俘虜処刑場面の四図である。その説明は絞首刑の写真では「欧州大戦で独軍がいかに殺りやくを

恣にしたかを物語るもの。死刑に処す、と重々しい宣告が響くと……（これは杭を立て足許にテーブルを置いただけのインスタント死刑台で、勿論頸には縄が巻いてある。机をけつとせばそれで済む仕掛）まあ、ザットこんな具合、中央は婦人」銃殺の場面では「これも独軍の手慰みの一つ。ボル臭い奴は片っ端から引っ捕えて、手を縛し、足を搦めて、それから……ドスン!!」どちらも、どうもフザケ過ぎた説明で痛切な敗戦体験を持たなかった当時の日本人だったとしても、無反省な単なる残虐趣味的な嗜好の現れではあるが、知られざる戦争の惨苦の実体を示したことは大きな意味があった。

我国の戦前では完訳を望めなかった『戦争と性』M・ヒルシュフェルト編、高山洋吉訳の第四巻には、「第二十章世界戦争における残忍性とサディズム」があつてその理論と実証の記録が沢山載っているが、戦争における殺人慾は仮面を被せられた色情である、といふ更に、「戦争の残忍性と野獣性とは一般に性慾を、そして特にサディズムの色彩をもった性慾を刺激する働きをもっているのである。たとえば、多くの従軍者のサディズム（色情性殺人を頂点とする）は一定のサディス

ト的戦争行動を伴ったばかりでなく、逆に、戦争の体験も人間の中に睡っているサディスト的要素を呼び醒ますことができる」とも云う。そしてある兵隊はその背囊の中にドイツ

兵の頭を持っていた。もう一人は鎖を耳から頭に巻いて提げていた。モロッコ兵の二、三のものはドイツ兵の耳を十六箇も持っていた、など。又、「娘たちは、かの女らをしっかり抱いている母親の腕から力づくで掻き取られた。娘を奪い取るために母親の腕を切り取ったというようなことも珍しくなかった。

着物を引き裂かれ、鉄条網の中へ引き入れられて、娘たちは野天で家族のものの見ている前で凌辱された」という記録もあり、戦争中の強姦とは、征服者に納めるべき租税である。とさえ云われた。更には革命期におけるロシアの国内では、西シベリヤのセミパラチンスク市郊外の刑場では、ボルシェヴィキたちの手足のどれかを切り、二時間後にまた来てそれを繰り返すというようにして、身体を一寸試しに殺してゆき、その楽しみを長引かせようとした。又、ゴリキーの論文に、革命時におけるサディスト的な殺害報告があり、腹を裂き開き、腸の一端を樹に釘づけにし、俘虜のその腸が樹に巻きつくように、そ

の樹の周囲を走らすことが、白軍・赤軍ともにもっとも好んで用いられた処刑法だったと云っている。

又、別な海外の記録から第一次欧州大戦中には、数千種以上の戦死や戦場死刑の場面の写真が密かに頒売されていたことを読んだ記憶がある。（今日のベトナムでもこの種の行為があるが……）そうした印刷物は当然我国にも流入した筈である——それらのうちの幾枚かが、この雑誌『変態・資料』の口絵に複写されたものであった。——この事柄の意味は、つまり戦乱は欧州の天地に展開され、終結するに至ったのだが、世界をつつむ戦後思想の中の日本に生れた『変態・資料』は、巻頭口絵第一図が示すように、これは明らかにハカストリ雑誌Vだったというのが分り易い見解だと私は思っている。然し、これが風俗的特殊雑誌として種々に分裂して、その行方の中には欧州戦後思想という暗雲の影はうすれて、変った雑誌という性格だけが残されたのであった。

◇ ◇ ◇

『変態・資料』 第貳号 大正十五年十月

内容は、生方敏郎の滑稽文学に就いての二回目、その他連載物の二回目と、勢陽望鼓庵

の大津絵節、今村螺炎の隋の煬帝の性慾生活があり、特筆すべき点はこの号より性語彙学専門の佐藤紅霞が『詩歌俗謡に現れたる女陰礼讃に就いて』を提げて紙上に登場したことである。紅霞に就いては「第参号」「臨時特別号」を語る時に記す。此処ではこの号に煬帝の性慾生活を書いた今村螺炎を紹介する。

螺炎は朝鮮民俗研究家として知られていた。『人夢史』（七巻）『李朝実録風俗資料撮要』等著書数冊あり。政法大学法科、警察監獄学校を卒業。京城・平壤・濟州島の警察署長を歴任した変り種で、当年の特殊雑誌には風変りな考証的随筆読物を発表して居る。古稀の年には（昭和15）自祝記念出版『波奈於佐須俚亭』を安倍能成の序文附で自刊した。話題は朝鮮を主としているが、伝説・風俗・情事など百般の雑談集だが、けだし珍書一種にかぞえて宜しきものだと思う。

尚、ここで一言すれば風俗研究家には自傳の人生の達人が多く、文学畠の人にあり勝ちな狷介な点は、考証家には少なかったようである。特にこの時代ではまだ△性▽の文献研究は発表が不自由だったが、各自の工夫をこらして研究を発表した勇氣（茶目っ気もあつたが）には褒むべきものがある。又、今日よ

り想えば大正震災後とはいえまだまだ資料は豊富な時代で、発見の意志さえあれば古本漁りをするには面白い物がまだあったし、震災後の古文獻復興熱は頂点に達した頃だった。この雑誌二号の口絵には単色版ではあるが、例の十二史中の発禁物『変態崇拜史』の色刷口絵になっている浅草歳の市の張型の図がある——つまり齊藤昌三など文献派が相当背後から編集に力瘤を入れていた様子が窺えるというものだ。

◇ ◇ ◇

『変態・資料』 第参号 臨時特別号 大正十五年十一月

『変態・資料』 臨時特別号 昭和二年六月
この二冊はこの雑誌中の逸品である。佐藤紅霞編の世界の『性慾学語彙』上・下二巻が納められている。本邦初訳の業であった。

戦前この雑誌二冊揃は十円まで古書価が騰貴したが、敗戦後に於いては性的出版物のハラン現象の反動で、旧時代出版のこの種の本は内容的に生ぬるいと思つてか、古書価が下落したのは皮肉である。然し、邦訳の世界性慾学語彙集としては今日読んでも仲々おもしろいもので、性語資料の珍品である。「緒言」を見てみよう。

輓近、我邦に於ける性慾学研究の一般的普及と共に、之に関する、専門図書雑誌類の坊間に行はれるもの尠くないが、未だ、初学者の爲めに、邦語を以て解釈した、一個の性慾学辞典のないのは、学界にとって実に遺憾とする処である。

編者は、自己の研究の立場から、斯かる辞典の、是非必要なることを感じて、自身之が編纂を企て、十数年来激務の合間に、材料蒐集を心掛けて居たのであったが、今度畏友、梅原北明氏の依頼を受けて、匆卒匣底を捜り草稿を纏め、茲に本編を刊行することになった。性慾学上の有らゆる術語を網羅し、索引の便を図り、総てアルファベットの順序に抛り配列し、東西の言語、宗教、迷信、文芸、美術、民謡、風俗、習慣、神話、伝説等の各方面より、之が解説を試みたるもので、其の目的とする処は、人類性慾生活の一般的概念と、此学に関する一般の智識とを、与えんと欲するにある。と、大要を述べている。参考引用文献の重要なものとして、モル、フックス、ローゼンバウム、アルベルト・ハーゲン、ヒルシュフェルト、マイゼンハイマー等々泰西の性科学者・性風俗研究家の著作をあげている。こ

の頃この学に対して之だけ造詣が深く、この種の事柄をまとめ得る人がいなかったのだ、佐藤紅霞の出現に軟派界は驚異の眼をみはった。紅霞は特にすぐれた性学者でもなく性啓蒙学者として活躍したということもなかったが、性文献研究者として地味だが貴重な仕事を残した。この上下二冊はのちに『世界性慾学辞典』（昭和四年弘文社）として一本にまとめられたが、発禁。改訂版、及び普及版が出た。又、ドイツの性的人種道德発達研究年鑑「アントロポプヒティア」に欧文で『日本的風俗辞典』を寄稿した。——独創的な学者ではなかったが、異常な精力をもって帰納することに秀でていたから、辞典風の編纂に

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円
略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊富な肉体の女性と共に二人してM男性を、こてんこてんに虐め羞しめ尽す有様を、縄、ローンク、浣腸器などを用いて順を追って刻明に写真化しました。

すぐれた著作を残すことができた、と云われている。『カクテル辞典』などの著述もあり、本業は洋酒輸入商だったとも、横浜の銀行員だったとも云われていた。

昭和十年頃小岩に住んでいた佐藤紅霞をたずねた喜多川周文（地図研究家）は、其処の室内にも廊下にも、独・仏・英の書籍が無数に積んであるので驚いた。フックスの風俗史なども無難作に畳の上に置いてあった。若い彼に親切に考証的事柄を説明してくれたりして、人をあなどるが如き点はまったくなく、後日途上で遇った時も襟巻を外してから、長上の紅霞は若い喜多川に挨拶したというから、非常に礼儀正しい人であったことが知れる。門柱には、本名と八人獣書院Vという書斎号が並べてあったという。

戦災後の紅霞はもう昔日の勢いはなくなつて、特別調達庁・モータープールの翻訳係を細々とやっていた。血気さかなな時分の高橋鉄氏が職場を訪問したら、其処は小使・給仕たちと同居の事務室の片隅で、往年の闘志もなく、つまらなそうな顔をして進駐軍の機械のハンドブックなど翻訳していたという。

SEISHIN REPORT の24号に、

「紅霞・佐藤民雄翁は去る五月二十二日永眠

されました。昭和初頭、ハヴロック・エリスとも交遊され、のちにフリードリッヒ・クラウスと『日本民族の性生活』を共著された業績は偉大なものでした。御健康だった頃は日本性教育副会長として、また、日本生活心理学会客員として斯学会に尽されること多く、今、痛恨大なるものがあり、会員諸賢へ急報する次第であります。」

という最後の消息が伝えられている。

◇ ◇ ◇

『変態・資料』 第四号 大正十五年十二月
目次。増補・艶本目録(三) 尾崎久弥。古代東洋性慾教科書研究(三) 酒井潔。お産婆が書いた日記(二) 尾瀬敬止訳。華岡随賢と其術図 高本文。刀剣に顕はれた春的小道具に就いて 室津鯨太郎。末摘花と柳の葉末放江老人。温泉場の女とその変態性 沢田撫松。俚間春語 今村螺炎。日本狂乱史 井東憲。

口絵。表、芳年筆、明治の禁止錦絵。安達ヶ原の鬼婆の図。裏面、伊藤晴雨が表図の錦絵をまねて其の臨月の妻を天井から吊した責写真。

この号も仲々迫力ある編集で、医学資料とは申せ、江戸時代の名外科医華岡随賢を紹介

して、鎖陰門の婦人の手術の経過を示す原図を載せるなど誠に大胆なことをやっている。尚、口絵裏面の晴雨の責写真の説明に就いては、拙著『伝奇・伊藤晴雨』に述べた。

◇ ◇ ◇

『変態・資料』 第五号 大正十六年一月

(註・大正から昭和に改元)

この号の事務報告の中で——執筆は発行名儀人・上森で、毎号主として会員に関することを書いているが——聖上御不例で、梅原北明は紐育タイムズ東京特置員を兼ねているので、葉山に出張し、上森は無産党政党の問題で組合から出勤を促がされているが、雑誌の事務が忙しくて行かない。また、彼の友人が云うには、社会運動と軟派文献とはどんな必然的相対関係があるのか知らないが、最近の軟派といい山本宣治の性慾学の研究といい奇妙に労働運動の連中はこのことに造詣が深いね。と語ったとある。

◇ ◇ ◇

『変態・資料』 第六号 昭和二年三月

この号の内容は全誌「明治新聞雑誌資料並筆禍文献」に当てている。「変態」ではなく「資料」のみである「明治初期新聞一覽十年史」「漫談明治初期新聞十年史」「新聞記者

筆禍列伝」——箕浦勝人氏の筆禍事件、成島柳北筆禍事件などを含む——。

何故このような号が出現したかに就いては「本号筆禍記念号に題す」梅原北明謹告という巻頭言がある、長文だが次に写す。

本号は小生等の記念すべき特輯号で諸氏には誠に申訳けない次第であると心得て居ります。

昨年九月号以来毎号発禁の厄に遭ひ、その六冊目にあは、や、発行停止のお灸を据えられそうになった今日、吾々の処罰される総決算の日も遂に訪づれていたのです。

十二史中の『変態崇拜史』も、番外の『明治性的珍聞史』も、『ふあんにひる』も——

——ここ一ヶ月中に、陸続と禁止を食ひ、警視庁特別高等検閲課にお百度を踏まされました。当時読売新聞の如きは、これを評して秘密出版扱いにし、更に其記事を持ち前の大袈裟にすべく、去る三月六日より十日まで拙者拘留さる云々の虚報を伝へ、今や第二の怪文書事件でも出現したかの如くに、世間の人々をして得て勝手な想像すらめぐらしめるに至った。が、豈図んや大山鳴動して鼠一匹の例で、事件が単なる出版

法の問題であり、結局責任者たる上森か拙者が罰金か体刑を受ければ其れまでの問題なのであります。

『ふあんにひる』は一寸面倒で、あれは単なる出版物として当局では認めないと云ふのですが、それほど淫本に類似した猥褻本とは吾々に考へられないのです。若し出版法の範囲を越えて体刑に引掛るとすれば、此の猥褻罪とかの構成如何で、一ヶ月か二ヶ月行つて来れば其れまでの問題なのです。いづれそれも氣候が良くなってからでいいんです。

が、それは兎に角、たとへ内務省がどう云はうと警視庁が圧迫しようと、今度からは当方にも陣容を整へて合法的に喧嘩を始める決心で、茲暫らくの間、おひ、やら、かしてやるつもりです。

感情で禁止しろ！感情で鹹にしてやる！何云つてやがるんだい！と云いたくなりまします。

扱て諸兄よ。いくら吾々が彼等と喧嘩を始めたって、諸兄等には迷惑をかけません。対岸の火事見物の気持でいて下さい。その筋から雑誌を掠奪に来ても相手にしないで下さい。

う。
イヤ早、損をするやら呼び出しを食わされるやら、淋病がヒドクなるやら、テンヤワ
ンヤの最中です。

頒価一〇〇〇円(送共)

女性刑罰拷問特集

略号〔美5〕

モデル……美木乃々子……山原清子……

待望のグラビア印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

印刷紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の『日本拷問刑罰集』並に山原清子嬢出演の『入墨女賊拷問刑罰集』の二集をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ、熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、ち早く多数のお申込みを頂き迫力ある『刑罰写真集』として好評を賜りました。その頃よりアート紙に対するグラビヤ印刷の『女性拷問刑罰写真集』の刊行を強く要望されました。ここにアルバム『美しき縛しめ』限定版写真集の一卷として、前記印刷紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミリカメラにて撮影した写真（従って内容も全然違います）を『日本版』『西洋版』と二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子嬢による『日本版』を『美しき縛しめ』（第五集）として刊行いたしました。

△アルバム（写真集）の内容▽

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあつて苦悶する女囚八葉▽（美木乃々子）

○白州の上で非人の颯りものになる女囚八連続四葉▽（美木乃々子）

○牢内にて折檻を受ける女囚——海老縛りと答打ち。八連続四葉▽（美木乃々子）

○美木乃々子嬢の哀れな女囚八連続十二葉▽（美木乃々子）

○海老責めに放置され全身蒼白となつた女囚八二葉▽（美木乃々子）

○荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶える女囚八連続八葉▽（美木乃々子）

○責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する女囚八四葉▽（美木乃々子）

○土壇で縛られた女囚八三葉▽（美木乃々子）

○算盤責めと石抱きの女囚八四葉▽（美木乃々子）

○拷問のささらで打たれる女囚八四葉▽（美木乃々子）

○刺青を晒して木馬責にあう女囚八三葉▽（美木乃々子）

○山原清子嬢の海老縛りでムチ打ちに喘ぐ女囚八四葉▽（山原清子）

○海老責に苦悶する女囚八四葉▽（山原清子）

○竹の棒に苦悶する女囚八三葉▽（山原清子）

○全裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚八六葉▽（山原清子）

○磯台に括られた人墨姐御葉▽（山原清子）

○足首を上にして逆さ吊りにされた女囚八一葉▽（山原清子）

「珍聞史」も『ふあんにひる』も『崇拜史』も、残本の全部を押へられて一部もありません。御不用の方は私に一冊寄贈して下さいませんか。『交婚史』は先日印刷中に掠奪されました。これは裁判にするつもりです。が、このため十二史は一寸遅れます。が、兎に角、色々の意味に於て益々諸兄と友情を厚く出来得る限りの結束を固めて行きたいと願って居ります。

次号より本誌はいつもの如き編輯に変わります。本号は押へられた後の急場拵へに過ぎません。
(昭和二年三月一日)

又、事務報告の欄で上森は親愛なる会員諸氏に一口金壱円以上の御寄附を願いたい、と書いている。

この雑誌は創刊号より購読全会員より白熱的歓迎を浴び続け、事実これまでこの種の出版を知らなかった珍書愛好家の申込みが殺到し、二千名からの会員を擁していたという時だけに大分あれてたらしい。この時のさわぎの直接原因は斎藤昌三の『変態崇拜史』の発売禁止にあった。このことがきっかけとなり、十二史以外の出版物は悉く無納本だったことがバレた。(もっとも納本していたらもっと早く事件を起していた!) これは昭和二年

正月のことで、突如として牛込区赤城元町の文芸資料研究会編輯部は襲われたのである。

警視庁検閲係・吉川司法主任以下同勢七人多数の証拠物件を押収したが、さて誰が検挙すべき中心人物だかわからない。結局誰も検束されず、第一日は発行名儀人・上森健一郎が召喚された……。

私たちは此処で考えて見たいことがある。

それは書物・雑誌の「運命」ということである。それもその時代、あるいは後の世に評価の定まった書物・雑誌に就いてはこの稿と関係のない事柄であるが、この種の梅原北明一派の刊行物とか、後の項目に於て記載するであろう所の種々の「特殊風俗雑誌」のことであるが、当年の発刊の事情や金銭的利益損失のこと、企画発行グループの争いなどと其処に探查の眼を向ければ、人間の、人間同志の甘い、すっぱい味や匂いが残された一冊の古雑誌からでも汲み取ることができる。哄笑も苦痛も、明朗な肉体の讃歌も、汚辱におびえる悲哀も、総てことごとく雑誌の印刷インキの中に滲み込んでいることを読み取らなくてはならない。今日の時代では「雑誌」を発行するということは、一切個人臭を抜き去った事業の性質だけがのこされ、もう梅原北明の

ような無鉄砲な男はいない。

扱て、その頃の北明のことだが出版法に就いては何等特別の知識もなく、編輯・営業の事務は一切上森健一郎と宮本良の二人に任せ、明治初期新聞の記事のうち異聞・珍聞的な事柄の報道に異常な興味を持ち、記事蒐集のために毎日のように上野図書館に通っていたのだという。そして、万一の事件があっても発行名儀人の上森が全責任を持ってくれると思つたし、自分には多くの新聞記者の知己があるから、事件があつたとしても簡単に片附く位に考えていたらしい。のんきなものはあつた。

滑稽だったのは、というより気の毒だったことは、影の働き手であつたことは事実だが、主役でもない福山印刷所の使用人樋田某と伊藤竹酔の二人が、各十日間ずつ留置所に放り込まれてしまったことである。——竹酔はこの時の体験が余程身にこたえたらしく、自身の仕事である国際文献刊行会のみ以後は専念するようになり、宣伝文句ばかり凄くて、内容的にはあまり面白くないが、造本に於いて彼自身の好みを生かした書物を発行し、キワドイところは避けるようになった。後年のことだが、戦後になってからの話だ

が、竹酔は私の書架を見て、高橋鉄の著書が並んでいるので、高橋君の本なんかあんまり蒐めない方がいい、あぶねえ。と云い、むしろ本のこと警察に入れられたが、おっかねえことはやらない方がいい。と云つた。

閑話休題。遂に、この時から北明の文芸市場社と、福山・上森の文芸資料研究会編輯部とが対立してしまう。警視庁の取調べは着々と進み、上森と梅原は毎日任意出頭の形式で身柄不拘束のまま取調べられ、社内の動揺は一方ならず、戦々競々としていた。上森の陳述は、単に梅原に利用された発行者名儀人に過ぎぬと云い、株主の福山は自分は只印刷したに過ぎぬと云つた。——上森の雄弁に征服された金主福山は上森と手を握り、雑誌の刊行を続け——梅原北明は「変態・資料」を投げ出してしまった。が、この時の事件で上森も梅原も仲よく第一回の出版法違反ということで、戸籍に「文身」^{いれずみ}を入れたのであつた。その後、この三者は更に分裂してしまう、分り易く記せば次の通りとなる。

文芸市場社

梅原 北明

文芸資料研究会編輯部

上森健一郎

文芸資料研究会

福山福太郎

△未 完▽

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

略号

△時代物女体切腹図▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の凄艶な切腹美態
- 二、介錯を受ける覚悟の美しき娘
- 三、落城の哀史、切腹する美女
- 四、夫の眼前で切腹する若妻
- 五、愛人の手で介錯を受ける娘

浣腸美媚態

略号

△女体浣腸の極美图▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸場面
- 二、女事務員の浣腸を覗きみる
- 三、女学生に対する浣腸の私刑

浣腸責め図譜

略号

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸する
- 二、いちじく浣腸の恐怖に悶える
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女の痴態
- 四、硝子シリンドラーが乱舞する
- 五、イルリガートルが責道具

羞恥責め絵巻

略号

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、灌水による人工妊婦腹製造
- 二、浴槽の全裸の美女を責める
- 三、三角木馬で美女を責める
- 四、全裸のグラマー柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

浣腸責め図譜

略号

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、美貌の踊子へのイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油による強制下剤
- 三、进出する緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣を応用する
- 五、両足吊りイルリにて浣腸

女性切腹風俗

略号

△時代風俗女体切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、座敷牢の美女切腹を賜わる
- 二、介錯にて果てる切腹の美女
- 三、塗鴉籠の中の姫君切腹す
- 四、男装の美女小姓姿の切腹
- 五、美貌の腰元裸身の切腹

倒錯美緊縛画

略号

△美女のいけにえ▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女体解剖台上に晒らす裸身
- 二、嫉妬に狂う夫と美貌の妻
- 三、美女の鼻料理に興ずる男
- 四、女体を真二つにする股間縛
- 五、山小屋の一夜、処女の受難

「花と蛇」画集

略号

△傑作S小説の絵画化▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、京子に珍芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人へのあくなき汚辱
- 三、操り責めに泣きぬく美津子
- 四、片足挙げ縛りに悶える桂子
- 五、排泄を強要される京子の窮地

女体吊責画集

略号

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、弓吊り女体にローソク責め
- 二、エビ縛りのままの宙吊り
- 三、股間縛りの吊り責め
- 四、美女の舌の先縛り吊り
- 五、股間縛りにて鼻孔吊り

浣腸排泄画集

略号

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸台で美女の浣腸

- 二、浣腸のあとのお楽しみ
- 三、百CCのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで無理に飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女の表情

美貌汚辱鼻責

略号

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女の美しい鼻をいたぶる
- 二、一本一本女の鼻毛を抜く
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた美女の顔
- 五、顔にラーメンを食べさせる

美女の責痴態

略号

△責められる美女波津子▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸責め今展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭園のハダカ責めシーン
- 四、全裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チエン・ブロックの女吊り

美少女羞恥責

略号

△可憐な美少女加奈子▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、蠟燭の火責めにあう美少女
- 二、ヨチヨチ歩きの美少女責め
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り責め
- 四、股間縛りに絶叫する美少女
- 五、鑑賞用美少女の緊縛美体

△女相撲物語▽

△さしえ・雪崎京人提供▽

花の女斗美たち (12)

奮 斗 士 好 太

さあ、いよいよ私たちの晴れの舞台——新人対抗戦です。

部屋に、いささか興奮した顔がそろいました。

何やら手ぶりをまじえておしゃべりしている津野さんとヒロちゃん、相変らず無口な——でも今日は、ちょっと不安そうな顔つきになっている西田さん、むつかしい顔で、考えごとをしているような松田さん：そんな私たちに池田さんや野川さんが、気分をほぐすようなじょうだんを云って笑わします。

「アガるのなんか当然なのよ」

と野川さんは

「アタシなんか、土俵へ上がったとたんに、

ブーツとなって、どっちが審判でどっちが相手のひとだかわかんないの」

「そうそう、あの時はひどかったわ」

と、池田さんがそのあとを受けて

「このひとなんか、審判の方へ向かって仕切ろうとするんだからねえ」

ドツと笑い声が湧いて、野川さんも吹き出しながら

「まさか、いくらなんでもそんなことはなかったけどサ、でもあんただってアタシのとなりでガタガタ震えていたじゃない」

「ムシャぶるいよ」

「どうだか」

「でも、正直なところ、土俵へ上がる前の方

がイヤだわね」

「そう、土俵へ上がってしまえば、思ったより落ちつけるもんだわ」

「でもね、それはやっぱり、ふだんの練習からくる自信なんだと思うわ、練習を熱心にしたひとほど、土俵へ上がっても落ちついてるわね、わたしなんかもそうだけど」

池田さんの言葉にまた笑いが起きます。

でも、私は池田さんの云うとおり、イザという時の落ちつきは、日ごろの練習によってつくられるのだと思うのでした。

池田さんたちは、笑い話でもしているような調子で話しているのですけれど、一たん土俵へ上がったら、もう誰も頼るひとはいない

のです。素っぱだかの自分ひとりだけが、すべてなのです。あとは自分の力を信ずるよりはかはありません。そして、その自分の力を信ずる心をつくり上げるものは、毎日の猛練習だけなのです。

もちろん、目ばたきひとつする間くらいの短い時間に勝負がきまってしまうような、きびしいスポーツですから、力の差だけで全部きまってしまうわけではありませんが、野川さんなんか、大切な勝負の時にでも思い切った相撲がとれるのは、毎日のはげしい練習から自然と生まれてきた自信が、彼女のからだを無意識のうちに動かしているからなのでしょう。

「さあ、そろそろ出発するわよ」

考えている耳に、笠原さんの声がします。ワクワクする胸を押さえて部屋を出ます。

そのうしろから

「あっちへ行ってからマワシを忘れたなんて云わないでちょうだい、誰の？ これ？」

中川さんの声にふりむきますと、マワシを入れたバッグが差し上げられています。

赤い顔をした津野さんが、コソコソとからだをすくめながら戻ってきて、中川さんの手からひったくるようにしてバッグを受けとる

と、直ぐに出口の方へトン走です。

「マア、アキレタ、彼女何しに行くつもりなのかしらねエ」

池田さんの声に

「ひとのフレドシで相撲をとるつもりなのよキット」

野川さんがマゼツ返してゲラゲラ笑い出しました。

「ガンバルのよ」

練習場の戸が開いて、マワシ姿の小林さんや、金子さんが顔を出して、はげましてくれました。

「テルちゃん、これよ、これ」

と、金子さんが、グッと腰を落としてから突き上げる構えをして見せます。

ニコリしてうなづきますと、小林さんも

「テルちゃんの突っ張りがうまく命中したらちょっとこらえられるひとはいいわね」

と云ってくれます。

「ヘビイちゃんがそう云うんだから、あんた自信持っていないわよ」

池田さんがニヤニヤしながら口をはさみま

す。

「ほんとかしら？」

はしません。

二三日前の練習の時に、たった一度だけでしたけれど、小林さんを突き出して勝ったのは、わざと負けてくれたのではなかったのかも知れないと考えて、胸のふくらむ思いでした。こみ上げてくる笑いを抑えて、みんなのあとを追います。

雲の多い日で、絶好の日よりとは云えませんが、でも秋らしい、スガスガしい日でした。

引卒者は笠原さんと中川さんです。

笠原さんにとっては、マネジャーとして最後の仕事になるわけで、これからあとは、二年生のひとたちが、運営して行くことになるのでした。

F高までは、大して遠くない距離なので、乗り物を利用するまでのことはなく、歩いて行くことになりました。

大柄な、おせじにも美人と云えない一団がゾロゾロと歩いて行くのを通行の人たちが、びっくりしたような、あきれたような顔で眺めます。

でも中川さんだけは、この一団にふさわしくないくらい美人なので、もう一度びっくりし直したように見つめられるのでした。

「立ち合いは足の親指に力を入れて」

「突っ張りはおなかから突き出すように」

「肩に力を入れちゃダメ」

今まで注意されてきたことが次から次と浮かんでくるのでしたが、身についたものがひとつもないような不安さがつきまといまいます。

「もっと練習の時間があれば……」

と思ったり、

「いいじゃないの、ここまできたらどうだっていいわ」

などと捨てばちになってみたり、さっぱり気持が落ちつきません。

松田さんや、無口な西田さんはもちろん黙々と視線をおとしながら歩いています。

ふだんはにぎやかな津野さんやヒロちゃんまでが口数が少なくなつて、全く静かな一行でした。

引卒の笠原さんと中川さんだけが、何か話しながら歩いています、聞きとれません。

やがてF高。正門が身構えているうように見えます。

控え室に当てられた教室で、打ち合わせに行つた笠原さんの帰りを待ちます。

窓から眺める景色がさっぱり頭に入りません。

「さあ、みんな、仕たくをして」

打ち合わせから戻ってきた笠原さんが、みんなのおしゃべりを静めるように、大きな声で注意しました。

「いよいよだわ」

そう思うと、からだの奥の方が熱くなつて思はずブルツと身ぶるいが出ました。

裸になつて、おたがいにマワシを締めつこする間にも、胸のドキドキがだんだんに高くなるようです。ガタガタと体がふるえます。

「何よ、ダラシないじゃないのッ」

と自分で自分を叱りつけながら、何とか気持を落ちつかせようとするのですけれど、胸の鼓動はそんなことにおかまひなしにいつそう早くなるのでした。

「早く脱ぎなさいよ、わたしが締めてあげるわ」

とヒロちゃんに云われて

「ウン」

と、うなずきながらマワシを渡します。

何だか指先までがコワばつて、いつものようにスムーズに動かないのです。

マワシを握る手が、半分くらい私のものではなくなつてしまつたような気がします。

「テルちゃん、何やってるのッ」

と、ヒロちゃんに叱られて、あわててマワシを当てます。

ズッシリした選手用のマワシの分厚い、そしてつめたい感触が、熱っぽくなっている肌にしみ込んでくるようです。

「盛装する時のような気持で締めるのよ」

という笠原さんの注意を思い出して、細くして股を通す部分は、とくにいていねいに、みにくいシワができないように、キチンと折つて肌に当てます。

そして、腰へ巻く時には、一回ごとに

「アガリませんように、勝ちますように」

と、お祈りしながら締め込むのでした。

フツとまわりを見ますと、西田さんも津野さんも、みんな上気した顔に目ばかりが何だかギラギラしているようで、顔つきまでが変っているのではした。

ふだんは落ち着き払っている松田さんまでが、その落ち着きを忘れてしまったらしくて手伝っている中川さんとの呼吸がうまく合わず、二度も三度も締め直しをしている有様で中川さんからお小言をいただいているのです。

足もとの感じが、よくわからないみたいな気持。でもヒロちゃんに思い切り引っぱって



キレがえし (河津樹)

もらって、それこそほんとうに指一本入らないくらいギッチリと締め込んだマワシの感触が腰のあたりによみがえってきますと、それにつれて、アガッていた私の気持ちも、少しずつおさまってくるようでした。

「グッと腰を落としておなかに力を込め、軽く力足を踏みます。」

のを感じるのです。た。
「さあッ、落ちついてッ」
青いマワシの良く似合う感じのヒロちゃん
が、ドシンと私の背中を乱ぼうにたたきまし
た。
そんなヒロちゃんの方が赤い熱っぽい顔を
しているのです。

この控え室の空気が熱っぽいので、そう見
えるのでしょし、私だってヒロちゃんと同
じような顔つきをしているにちがいないので
した。

今度は代って、ヒロちゃんのマワシを締め
ます。

裸になって、マ
ワシを手にしたヒ
ロちゃんが、その
ひろげた端のあた
りに軽くキスをし
て前に当てました
両足を開いて、
グッと腰を構えま
す。

股を通しておシ
リに引き上げ、右
腰へまわしながら

見るともなしに目をやりますと、ヒロちゃん
のまるいおシリが、細かくふるえて何だか鳥
肌立っているように見えるのです。

「どうしたの？」

と、ヒロちゃんがふり返って

「何してるの？ ひとのおシリばかり眺め
たりして」

「鳥肌立ってるワ、あんたのおシリ！」

「いいじゃないの、あんたのおシリだって鳥
肌立っていたわよッ」

と、怒ったように云います。

「へエ、そうだったかしら」

私は、からだをねじって自分のおシリのあ
たりを眺めました。よく見えないので、ヒ
ロちゃんの云うように、鳥肌立っているのか
どうかわかりません。

「早く締めてヨッ、あたしがいちばんおそく
なるじゃないのッ」

ヒロちゃんに叱られて、あわてて向き直り
ます。

ヒロちゃんは、ふだんはどっちかと云えば
ゆるふんの方なのですけれど、今日は、いく
らきつく締めても文句は云いません、グイグ
イと締め込む青いマワシがヒロちゃんの白い
肌によく映えるのです。

マワシをつけ終った私たちは、軽くウォーミングのあと、「決戦の場」へのぞみます。

新人対抗戦と云っても、ほんの内輪のものなので、この前の高校体育大会の時のように大ぜいの観衆がいるわけではないし、出場する方も両方合わせて十人しかいないのですがそれでも私たちにとっては、最初の正式な競技会にはちがいないので、入学試験の面接の時みたいな気持なのでした。

うれしいようなこわいような、そして不安と闘志が代わるがわる襲ってきて、ちょっとの間も気持が定まりません。

「困ったわ」

となりでびんぼうゆすりをしていたヒロちゃんもソツと耳うちしました。

「どうしたの？」

と、たずねる私に、ヒロちゃんは、ニヤツとテレくさそうに笑って

「アタシ、トイレに行きたくなっちゃった」

と、そんなことを云うのです。

「何云ってんの」

と、私はあきれて

「もうトイレなんかへ行ってるひまないわ、がまんしなさいよ」

「だってエ、テルちゃんが悪いのよ」

「アラ、何故？」

「だって、テルちゃんなんか、こんなにキツク締めちゃうんだもの……」

「でも、だまってたくせに」

「夢中になってたからよ、いつもはこんなにキツク締めないって知ってるくせに」

「ユルフンはいけないって云われたでしょ」

「程度があるわよ、これじゃ呼吸困難だわ、だいいちからだの自由がきかなくて、とくいのネバリ腰も発揮できないわ」

ヒロちゃんは、ふくれっつらをして口をとがらせます。

どうやら彼女の本当の気持は、このことに文句をつけたかったらしいのでした。

「それとオシッコと、どういう関係があるって云うの？」

せっかくていねいに締め込んであげたのに文句をつけられては私も面白くありません。

「おながが圧迫されてそんな気持になったってわけよ」

ヒロちゃんはいたずらそうに笑ってごまかしましたが、逆にこんどは私の方が何だかオシッコに行きたくなってきたのでした。

「どうしたの？ おかしな顔して？」

ヒロちゃんにのぞきこまれて

「あなたがヘンなこと云うから、あたしの方が行きたくなったじゃないのッ」

と小さい声で怒ります。

「何でもないじゃないの、早く行ってきなさいよ、マワシ解いてあげるから」

と、さっそく結び目に手をかけようとしめます。

「イイワヨッ」

あわてて、その手を払います。

こんなところでマワシを解いてしまったらせっかく緊張した気持がすっかり崩れてしまいます。

ひと巻きひと巻きに願いを込めて締め込んだマワシなのです。

そんなに簡単にとったりはずしたりしたのは、その願いも、全然ムダになってしまします。

「何を話してるの？」

と、松田さんが寄ってきました。

「ウン、何でもない」

あわてて首を振ります。

ヒロちゃんは松田さんに

「あなたえらいわネ、よくそんなに落ちついていられるわネエ」

「わたしが落ちついてるって？」

と松田さんはびっくりしたように
「じょうだんじゃないわ、こんなにドキドキ
よ、ホラ……」

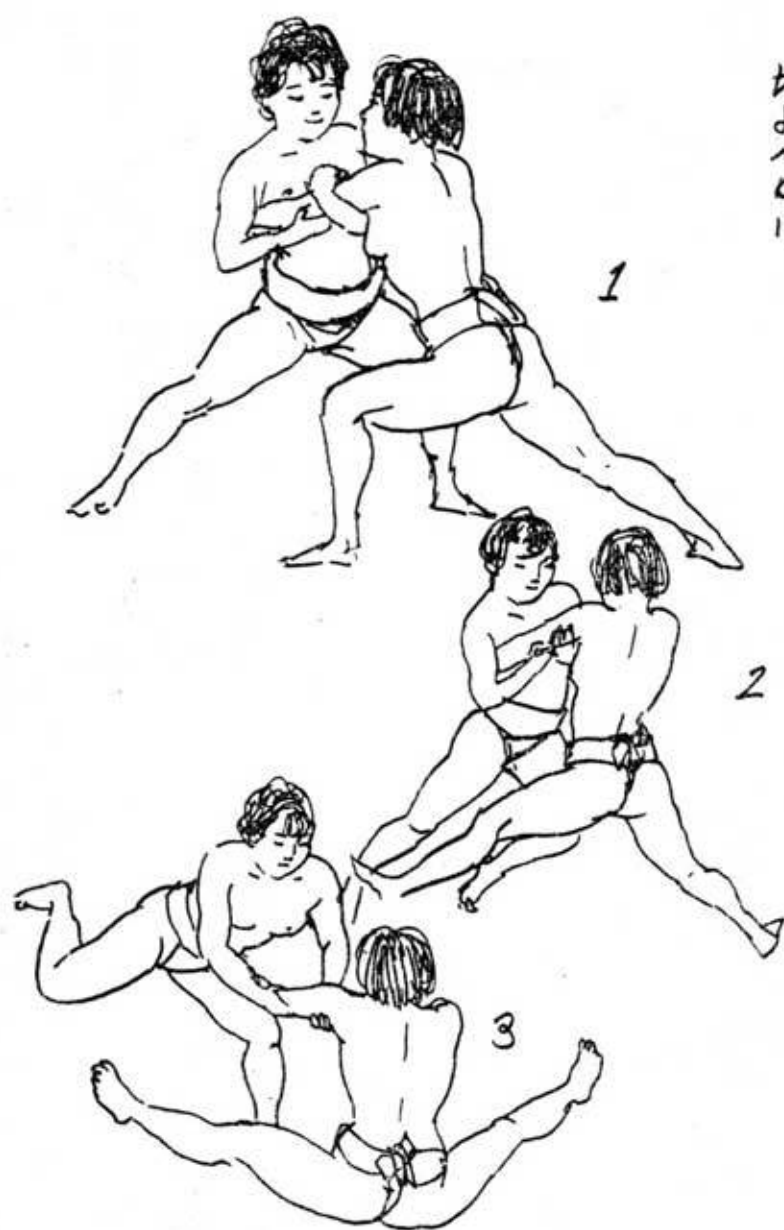
と、いきなり私の手をとると、自分の左の
胸のお乳の下へ持って行きました。

なま温かい肌のぬくもりに、思わず手を引
こうとしましたが、松田さんは、それをしっ
かりと握って心臓の上へ当てるのでした。

「ドキン、ドキン」

と松田さんのコ動が、私のてのひらに伝わ
ってきます。

ちよんけ



松田さんの生命の営みに直接ふれた思いで
何か電流のようなものが、私のからだの中を
一瞬駆けめぐりました。

「でも、やっぱりあなたの方が落ちついてる
わ、あたしなんかこの倍くらい早いわよ」

松田さんの胸から手を引っこめながら私が
そう云いますと、松田さんは、

「そうかしら？　じゃ、こんどはあたしにさ
わらせて……」

と、私の胸をさぐりました。

熱っぽい松田さんのてのひらが当てられ、

その指先が素早
く動いて、私の
お乳をくすぐり
ました。

「ヒヤア、くす
ぐったい」

悲鳴を上げて
飛びのきます。

かわってヒロ
ちゃんが、松田
さんの胸をさぐ
って鼓動の早さ
を試かめます。

そして

「やっぱり、あんたの方がゆっくりだわ」な
どと云っています。もうオシッコのことなど
は、どこかへ飛んでしまったようでした。

その時、向う側からF高側の選手たちが出
てきました。

鮮やかな緑色のマワシが目をはひきます。

「ホラ、いつかの子がいるわ」

「エ？　いつかの子？」

「ホラ、この前汽車の中で……」

ヒロちゃんに云われて気がつきますと、そ
の人も私たちに気がついたらしく、ジッとに
らむようなキツイ目でこちらを見えています。

やがて、土俵をはさんで両軍選手のあいさ
つ、そしてマットに腰を下ろして試合開始を
待ちます。

おシリの下のマットのつめたさに、思わず
ブルツと身ぶるいが出ます。

右どなりに腰をおろしている西田さんの、
両手がかかえたヒザが細かく震え、左どなり
では津野さんが、落ちつかない様子で、しき
りに前ミツのあたりを気にしています。

「花岡高校……水野さん。F高校……××さん」
名前を呼ばれたヒロちゃんがビクツとしま
した。

そして、グツと唇を噛みしめると、気持を

落ちつけるように目をつぶり、大きく胸に息を吸い込みました。

すると、その様子をとなりに腰をおろして見つめていた津野さんが、激励のつもりか、左手を伸ばして「ポン」と軽くヒロちゃんの後ミツの結び目のあたりをたたきました。

ところが、ちょうどその時、立ち上がろうとしたヒロちゃんが腰を浮かしかけたので、津野さんの手は結び目をはずれて、ヒロちゃんの丸いおしりをたたいてしまったのでした
「パチン」

と、思いがけない音がひびいて、ヒロちゃんはびっくりして後を振りむき、津野さんは大あわてでその手を引っこめながら首をすくめ、そしてその様子を見ていた私たちの間からクスクスと笑いが起こりました。

しかし、ヒロちゃんは、こうした思いがけないできごとが、かえって緊張をほぐすきっかけになったらしく、固かった表情も、少しゆるんで、首をすくめている津野さんの様子に、ちょっと笑顔を見せました。

心配そうだった笠原さんと中川さんも、そんなヒロちゃんの様子に、やや安心したのか、うなずき合います。

でも、ヒロちゃんは、直ぐに笑顔が消えて

口をキュッとむすんだキツイ表情になりました。

そして両頬を紅に染め、肩をゆるするようにしながら、一步一步地面を踏み固めるような歩き方で土俵に上がりました。

キリリと締め上げた青いタテミツで、ふたつに割られた丸いおしりの右の方に、津野さんがたたいたあとがうす赤く浮いています。

ヒロちゃんの固くなるのは当然なのです。

この先ばうのヒロちゃんが勝つのと負けるのとは、後に続く私たちの気分が全然ちがってしまふのですから大切な一番なのです。

そんな姿勢でチリを切るヒロちゃんのまるいおしりがブルブルと細かくふるえているのがはつきりわかります。

「落ちついてノ！っかりノ！」

心の中で呼びかけ、勝利を祈ります。

ヒロちゃんの相手の人は長身です。

三年生の池田さんに似た感じで、肩巾が広く、手足がスラリとしています。胸のふくらみも小さく、男みtainな体格です。

立ち上がると、猛烈な突っ張り。ヒロちゃんはたちまち土俵ぎわ近くまでフツ飛ばされました。

しかし、ヒロちゃんもよく立ち直ると敗け

ずに突き返して突っ張り合い。

けれども、腕の長さの差か、ヒロちゃんの旗色は良くありません。

ヒロちゃんがか何とか組みつこうと、頭を下げかけたたん、パツとたたかれました。

つんのめったヒロちゃんは、あぶなく手をつきかけましたが、めくらの人が手さぐりするような形で手を伸ばしたのが運よく相手の人のマワシにふれて、まるでぶら下がるような体勢のまま喰い下がりました。

両マワシを取った絶好の体勢……と云いたいのですが、姿勢が低すぎ、頭がほとんど相手の人のおなかのあたりになっている上に長身を上からかぶされているので動きがとれません。

相手の人も、もぐり込んだヒロちゃんの背中ごしに手を伸ばしますがなかなかマワシに手がかからず、ちょっと攻め手に困った様子で、動きが止まりました。

しかし、こんなムリな体勢を続けていたのではヒロちゃんの方が先に疲れてしまいます相手の人の乳房の谷間あたりに、うしろ頭をつけてもぐっているヒロちゃんの真赤な顔が苦しそうです。

引きつけた相手の人の前マワシがズリ伸びて、ヒロちゃんの額のあたりにまでくっつきそうになっています。

前ブクロがすっかりゆるんで、見ているこちらの方がハラハラさせられます。

荒い呼吸をする、おなが、大きく波をうつたびに、ゆるんだ前ブクロと肌の間にスキ間のできるのが見えるのです。

ヒロちゃんも、せっかくひいた前マワシがそんなにゆるんでしまったのでは力が入らず寄りたくても寄せません。

背中ごしに伸ばしていた相手の人の指先がやっとヒロちゃんのマワシに届きました。

一本…二本…とさぐるようにして指をかけるとグイと引きつめます。

「ヨシッ、それで良いわッ」

「つぶしちゃえ、つぶしちゃえ！」

らんぼうな声援がF高側から飛びます。

ヒロちゃんが、そんな声に反発するようにジリッと寄りました。

すると、相手の人は何を考えたのかいきなりヒロちゃんのとてミツに手を伸ばすと、それを握ってグイッと引き上げました。

あやうく持ち上げられそうになったヒロちゃんは、けんめいに腰を落してこらえます。

たてミツがキュウツと喰い込んで、みるみるおシリに埋まります。

「反則、反則！」

審判があわてて勝負を止めると、たてミツを握った相手の人の手をはなさせ、何か注意を与えました。

そして戦闘再開、ヒロちゃんは、ゆるんでズリ上がった相手の前マワシから右手をはなすと、その手を伸ばして今度は横マワシを深く引きました。

そして力をふりしほるように攻勢に出ました、ジリジリと押された相手の人が、ややムキになって押し返すところを右足を引きながらの下手ひねり、ガックリとヒザが崩れて相手の人がぐやしそうに唇を噛みました。

顔をしかめながら土俵を下りてくるヒロちゃんに笠原さんが駆け寄ってねぎらいます。

真赤な顔をしたヒロちゃんのまるい肩が、豊かなお乳のふくらみが、そしておなかまでが大波のように揺れています。

そして、笠原さんに流れる汗をぬぐって貰いながらも、痛そうにたてミツのあたりを直していました。

でも、まずは幸い先の良い一勝です。敵地？に乗り込んできて、やや弱気になっ

ていた私たちは、この一勝でにわかに活気づき、F高側には緊張の色が流れました。

「……津野さん、…××さん」

さあ、二番目の開始です。

ヒロちゃんの一勝に元気づいた津野さんは張り切った足どりで土俵へ上がりました。

対する相手の人は、F高新人軍随一の肥満型です。

身長はふたり同じくらいですけど、からだはふたまわりくらいもちがう感じですよ。

おそらく七〇キロ近くもあるのでしょうか、津野さんとは一〇キロ以上の差です。

でも、同じ肥満型でも、小林さんのような張りきった感じではなくて、何かダブダブしているようなのです。

緑色のマワシの上へせり出しているおなかのあたりの肉づきなども、たるんでいるようでひと足ごとにブルン、ブルンと揺れるのです。

前ぶくろのあたりが、両モモの肉の間に、すっかり埋まり込んでいます。

その前モモも、小林さんのようにタクマシイ感じではなく、ムチムチと肥っているだけでチツとも力強さがないのです。

それでも、こんなに体格がちがっていると

やはりそれなりの圧迫感があります。

でも、津野さんはちっともひるみません。

ふだん大きい小林さんなんかと申し合いをしているせいかも知れませんが、真正面から相手を見つめながら堂々とチリを切ります。

そのキビキビした態度がとても気持ちよくて相手のひとのスローモーションなのがことさらに対象的でした。

「こんなひとだったら津野さんには軽い相手だわ」

私は、そう思って安心しました。

パツと飛び込んで行って、前ミツを取って食い下がり、相手を思う存分に引っぱりまわして最後には寄り切るか、投げて倒すか、とにかく津野さんの得意な戦法が見られるのではないかと考えたからでした。

鈍重な牛を狙う機敏なヒョウのような津野さんの動きなのでした。

津野さん自身のうしろ姿にも自信があふれ見ている私たちもみんなが、その勝ちを疑ってはいませんでした。

立ち上がると：パツと津野さんが飛び込みました。

しかし、相手のひとは、そのふとった体に似合わない早い動きで左へかわりながら津野

さんの右手をかかえて「とったり」の大わざ、しかし津野さんの突っ込みの早さに体勢をかわし切れず、津野さんのよろめくといったしよにダダダツと後退して行きました。

津野さんは、抱えられた右手を、相手のひとに突きつけるようにしながら、その後退して行くのを追いかけますが、足の方について行けません。

からだをいっぱい伸ばして、まるで泳ぐような型になりながら、もうひと息というところで、とうとう腹ばいのまま土俵に落ちました。

津野さんの突っ込みをかわし切れなかった相手のひとも、とったりに出た津野さんの手を自分の手もとへ引っ張り込んだようになっこうになって、腰がくだけ、ヨロヨロと肥ったからだを後退させながら立ち直ろうとしますが、津野さんが、その手を突きつけるようにしたために、そんな余裕もなく、津野さんの右手を両手で握ったまま、土俵ぎわまでさがって行きますと、そこでドシンと尻もちをついてしまったのでした。

「ワーン」

と、土俵下で見ていた両方の選手たちが歓声をあげました。

津野さんのからだは土俵へ落ちるのが先か相手の人のふとったからだは土俵の外へ飛び出して行くのが早かったか：とにかくきわどい勝負でした。

審判の手は相手方を指し、抗議は出ません津野さんも案外あっさりした顔で土俵を下りてきました。

早い勝負だったので、ヒロちゃんとは逆に息は切らしていませんが、形の良いお乳から前陣のあたりまでおなか一面に砂がついていきます。

「ああ残念、あんなデブちゃんが飛ぶとは思わなかったわア」

となりへ腰を下ろしながら小さな声で、それでもチョッピリくやしそうに云っています。

これで一対一。

勝負はふり出しに戻ってまたやり直し。

いよいよ私の番です。

「：石山さん。：××さん」

覚悟はしていても、名前を呼ばれると、やはりドキンとします。

静まっていた胸がまたドキドキと大きく波を打ち始めます。

「シッカリね」

となりの西田さんが、腰を上げかけた私のマワシの結び目を「ボン」とたたいて、はげましてくれます。

土俵へ進みながら、チラッと横目でうかがいますと、笠原さんと中川さんの心配そうな顔が目に入りました。

「そんなに心配そうに見えるのかしら？」

と、一層ドキドキが高まります。

私の相手は、いつか汽車の中で見た例のひとです。

日やけた艶のよい肌に、緑のマワシをキ

リリと締めて、悪びれない態度で立ち上がります。

そして深呼吸をするように、おなかをへこませて、両手で前マワシをグイと押し下げキリッと口を結んだキツイ表情で土俵へ進んでくるのでした。

汽車の中で見た時には、ガッチリした体格だと思ったのですが、大型ぞろいのF高のひとたちの間では、むしろ小柄な方に入るのでした。

けれども、キビキビした動作が、運動神経

の優れたことをうかがわせます。

こういう型の人がいちばんニガ手な私は、呼ばれて土俵へ上がる前から

「イヤだな」

と、押さえても押さえてもすぐそのあとから、ムクムクと頭をもたげてくる不安をどうしようもなかったのです。

向かい合って一礼、静かになった周囲に、私の心臓のコ動だけがひとつひとつハッキリとひびいているような気持でした。

(未完)

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K1	全裸刺青自慢緊縛(山原)
K2	恍惚たる責の境地(山原)
K3	苦悶の表情海老責(大塚)
K4	海老責にあえぐ女(大塚)
K5	全裸のぐるぐる巻(玉田)

K6	豊満な臀部を晒す(刑部)
K7	厳しき縛りに酔う(山原)
K8	荒縄で仕置される(美木)
K9	土壇に観念した女(美木)
K10	ムチ打たれる女囚(美木)
K11	縛り人形を眺める(山原)
K12	開孔器で鼻を弄ぶ(山原)
K13	足首と首を連繫す(大塚)
K14	後手の複雑な縛り(玉田)
K15	裸縛りに恥らう女(山原)
K16	夫にされる鼻責め(増田)
K17	緊縛にあう若妻姿(増田)
K18	猿轡で鼻を虐める(増田)

K19	開股縛にあう女囚(美木)
K20	罪状を訊かれる女(美木)
K21	股間縛りの全裸像(山原)
K22	荷造り縛りで晒す(玉田)
K23	革拘束衣で括らる(大塚)
K24	庭木に立縛りなる(木村)
K25	柱に晒される裸身(玉田)
K26	セーラー服しぼり(大塚)
K27	高手小手首縄緊縛(山原)
K28	黒縄豊満刺青縛り(山原)
K29	踏みにじられた女(山原)
K30	古墳にて吊り準備(木村)
K31	拷問にあう裸女賊(山原)
K32	ロープブラジャー(山原)
K33	嚴重な後手縛猿轡(刑部)
K34	エビ縛りにあう女(木村)

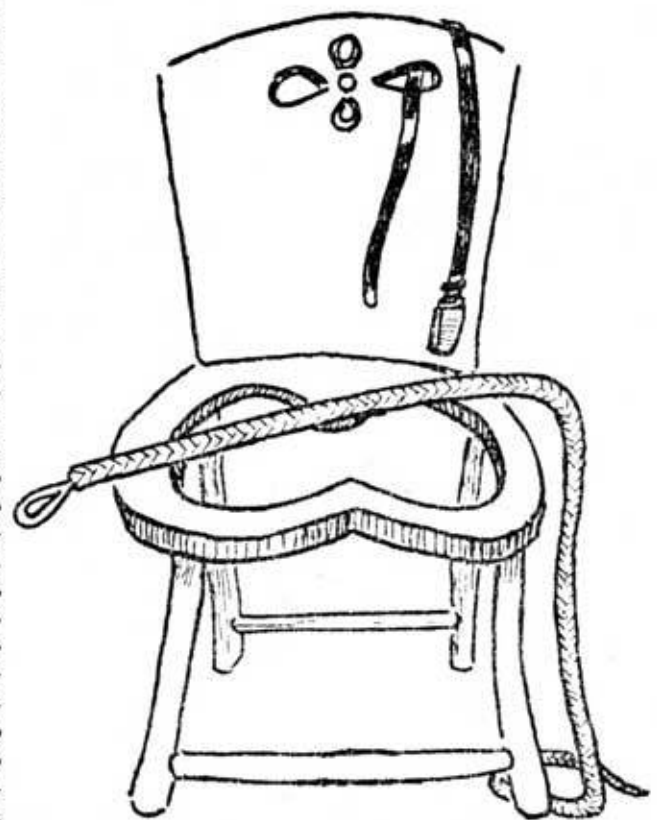
K35	イルリのある風景(大塚)
K36	麗しき裸身を晒す(大塚)
K37	亀甲縛り正面裸像(刑部)
K38	豊満乳房縛り上げ(山原)
K39	全裸を投げだして(山原)
K40	縛しめに哭く乙女(木村)
K41	エビ責め放置十分(木村)
K42	豊かな全裸を緊縛(玉田)
K43	観念アグラ縛り図(玉田)
K44	笑顔を縛る強烈さ(刑部)
K45	猿轡の下にあえぐ(刑部)
K46	縛りに典子の素顔(刑部)
K47	伸びやかな裸縛り(刑部)
K48	エビ縛り刺青姐御(山原)
K49	立木より逆さ吊り(木村)
K50	裸身の緊縛と羞恥(玉田)

連載サディズム小説

心傷^{こころ}たむ^い遍^{へん}歴^{れき}

△第二十八章 女囚ミシュリーヌ (八)▽

西条 操



「夫婦約束したのかい？」

「どんな顔して逢ったの？、詳しくお云い。」

「あたしゃ、おミシュちゃん可愛いさ、ヤケるったら」

「クリスチーナやエドウィージュは眼を光らせてミシュリーヌを責め」

「大変だったよねえ。災難だわ、ほんとに」

「と、シモーヌが慰さめ、そして、翌朝おそく、ジョアンヌ女史はマジョーリを呼びつけて眉をあげた。」

「新聞読んだろ？ 報告書に書いてないじゃないの。どうして？」

朝刊には、昨日のロジェ・サンシール公判廷での哀切場面が報道されていたのだ。

「でも、裁判長は黙っていたわ。ですから、取り上げるほどのことじゃないと思いまして——」

「ふむ。ともかく、四五三号を連れておいでよ。取調べて見なきゃ。保安課から云って来ないうちに対策を考えとくのよ」

「ジョアンヌ看守長女史は、去年の暮のダブル事故以来、無理もないが神経質気味だ。」

「ミシュリーヌは女史の前におそるおそる立ちすくみ、デスクを回った女史の手が、いきなりビンタを飛ばした。」

「おや！ お前、赤札かい。いつから？ ふむ、じゃ、昨日ここへ戻るまではそうじゃなかったわけね。さ、ありのまま、詳しく云うんだ」

「ミシュリーヌはわななき、法廷でのことを頬染めて述べた。駅での一幕は、黙ってなさいとマジョーリに云いふくめられている。」

「ふむ。ま、大したことじゃなかったらしいね。だけど、反則は反則だよ。心根に免じて赦してやりたいとこだけどねえ。ここは刑務所なんだから。そうだね、お前、赤札だね。」

今日の労役は何だい？」

「荷札の針金通しですわ」

と、マジョーリが呆れる。呑気なものだ。

「そうかい、そうかい。じゃ、手錠かけて貰ってやるのね。そうやって反省するの。それから、面会は二ヶ月、文通は三ヶ月の停止」

マジョーリの罰はいともあっさり決められた。平常の神妙さと赤札のお陰で軽い。

「すみませんでした」

ミシュリーヌはマジョーリに詫び、両手をさし出して、重い旧式手錠をかけて貰ったのだった。孤独のミシュリーヌにとっては、面会や文通の停止は苦痛ではないし、迷惑かけたマジョーリの手で嵌められた手錠も冷たくはなかった。

早春を告げる雛菊の花が獄庭にも可憐に咲き、寒冷地獄の監舎に震え続けた女囚たちも僅かに体をゆるめるようになった。

日がな一日、叱り声が飛び、ビンタが降って、ときには革ロープが炸裂し、そして、ベルディーヌあたりとマジョーリなんか、三日に一度は見解の差について議論し合った。

女囚たちは、なにかと云えば忽ち腕をねじあげられ、キャスリーヌやフィリスあたりはしょっ中、手錠を掴んで見幕を示す。

「これからは気が楽ね。だって、しもやけやあかぎれの手にカマせるのは気が重いもの」

と、キャスリーヌが憫れみのポーズをし

「そうよ。さすがの三〇八号だって、冷たくてイヤだそうよ。捕縄にしてくれて——」

と、フィリスが相槌を打った。三〇八号とは、例のマゾ傾向女囚のことだ。

「こら、メス豚ども。暖かくなっただよ、もう少し脚をひろげな。もう、風だって冷たくはないだろ」

身検のときにベルディーヌがきめつけ、女囚ルーシーが軽度の拘禁性ノイローゼでふさぎ込み、スチームに対する苦情が聞えなくなり、そして、三月が過ぎた。

「さあて、ぼちぼちと足りなくなるよ」

ベルディーヌが「ベルト」の員数を数えて呟き、夕食後の一刻、手癖の悪い連中を選んで手入れを命じた。

「御愛用のお道具だよ。精魂こめて磨くんだね。お前たち御常連には、前以って締めといて貰おうかしら」

六名の女囚は世にも情けない面持ちで「ベルト」の革や金具をこすり、眺める女囚たちも顔をしかめた。寒い間は、女囚たちもそれぞれではないし、よほど眼に余ることさえ

なければ、支配者側も使用を控え目にしている「ベルト」だ。その「ベルト」も、そしてまた懲戒房も、暖かくなるにつれて、容赦なく使用されることだろう。

四月からは、女囚たちの毛布は減らされ、そして、両腕を毛布に入れることを禁じられる。女囚たちは溜息を吐くのだった。なにしろ、男子禁制の「女の館」に閉じこめられ、僅かに発散させる術すらも奪われて春を迎えるのだ。春ともなれば女体も疼く。女囚たちは呻き声をさえあげて毛布を噛むのだった。

そんな女囚たちの寝姿を、鉄格子の外からベルディーヌが嘲ける。

「悶々たる顔が並んでるね、ホホホ」

四月早々の夜間当直に、ベルディーヌはいつになく張り切って巡視に精を出した。

「まなじり決して天井睨んでるじゃない？いくら思い詰めたって、オス猫一匹降って来るもんかね。いくらエプリルフルでもさ」

娑婆に残した男の面影を天井に描いてもいたのだろうか、からかわれた女囚が毛布の上で両こぶしを握り締めた。

「けど、ほんと、いい時候になったねえ。おてんとさまは公平なこと。懲役女たちにも春が来るんだもの」

ベルディーヌは愉快げにマットを踏んで、監房から監房を覗いて回わる。監房の外側一呎をあけて、ずっと敷き延べられた幅二呎のこのマットは、新課長コリンヌの発案によるもので、監視用ミラー装置とともに、女囚たちの悩みの種だ。このマットの上を歩かれると、巡視の靴音が全く聞えないのだから敵わない。しかし、いまのベルディーヌは大声をあげて覗いて回った。監視が目的ではなくて、からかうのが面白いのだ。貧相な男をやっとこさ捉まえ、その亭主一人だけを守らざるを得ないベルディーヌとして見れば、大なり小なり男性遍歴の味を知る女囚たちに対して、反感と憎悪を胸に秘めている。ロマンスらしいことなど、これっぽっちも経験したことの無い彼女にして見れば、女性として、それも無理からぬことかも知れない。

「いい月夜だよ、今夜は。ナイトクラブは賑やかだろうし、恋人たちは腕を組んで、公園や森を散歩してるわよ。ちょっと早いけど、待ち切れない連中は寝室でさア、熱っぽく微笑み合ってドレス脱いでるね。いや、脱がせて貰ってるわね。私も昨夜はそうさ」

あばずれたたちが獣のように唸り、双腕を絞って毛布を蹴立てる。

「フフフ。でもさ、お前たちはオトナにおネンネするの。清らかーにね。煩惱を断ち切って贖罪一途。結構なことじゃない？　こら、両手をちゃんと出すんだよッ。おめめつぶって神さまに祈るの。そしたら眠れるさ」

あばずれたたちは無念の形相で鉄格子を睨んだ。三六〇号が楯ついた。

「担当さま。静かに見張って下さらない？　ポリウムをお絞りになって——」

ベルディーヌにそんな口を利くのも道理でこの女囚は二十五年の刑、それも二十五才の若さなのだから、虚無的になるのも無理はない。ベルディーヌは睨みつけただけだった。

そのベルディーヌの太い脚がよろめいた。監房の鉄格子扉の前には、マットにそれぞれ一呎ほどの切れ目があって、その切れ目につまずいたのだ。女囚たちはマットを踏むことを厳禁され、監房の出入りには、その切れ目を通ることになっている。またいでさえ反則で、身分不相応の振舞の廉で懲罰を喰う。

「あらま、ホホホ」

ベルディーヌは靴を穿き直して笑った。

「なにしろねえ、昨夜のウチのひとと来たらスゴク張り切っちゃって——。お陰で、まだ腰がフラフラなのよ。でも、嬉しいわ」

ベルディーヌはヌケヌケといい、九監房のあばずれたたちが髪を掻きむしった。三六八号の赤毛は切なさ泣き出し、三七二号の大女が太く吠える。八監房のマーサが毛布を蹴りのけて身をよじった。札付きの女囚たちだ。

「おや、三六三号ッ。なんてお行儀だい。お前、私の云ってることが分かるのかい？」

「ああ、切ない。堪まらないわ。気が狂いそう——」

メリケン女性のマーサはのたうち回った。

「こら、メリケン言葉を使うんじゃないッ。都合の悪いときには言葉が分なくなる癖に。ここへ来な」

マーサは斜め手錠を背負わされ、泣きながら、鉄格子の内側で正座を命じられた。

第十一監房では、ミシュリーヌは既に夢うつつだった。エドウィージュが起きてそっと寄り、そのミシュリーヌの腕を毛布から出してやった。そして、やさしく頬を撫でる。

「駄目よ、おミシュちゃん。気をつけてね」

「ありがと。そうね、そうだったわね、今日からはもう——」

ミシュリーヌは眼をこすって礼を云い、再びまつげを閉じた。

「どうだい？　二八六号」

ベルディーンはクリスチーンをからかう。
「ボカボカと、春宵価千金ね。勿体なくて泣けて来るだろ。お前の仲間は稼ぎまくってることだろよ」

クリスチーンとエドウィージュは、世にも恨めしげにベルディーンを見やった。

ミシュリーヌは夜半、騒ぎに眼覚めた。ベルディーンが夜勤のときには、女囚たちもそのつもりで警戒しているのだが、昨日までの癖で、つい両手を毛布に入れてしまふ。そんな女囚が二人、容赦なく摘発されたのだ。

このくらいの反則なら、大抵は翌朝の対抗ピント程度でケリがつくのだが、今夜のベルディーンは凄く張切っている。

「お、おゆるし下さいまし——」

「つい、手が入っただけなんです。なんにもしてはおりません。ほ、ほんとなんです」

哀願ものかわ、二人は引き摺り出され、本錠の音に殆んどが眼を覚ました。

「うるさい。毛布の下で手が動いたよッ」

ベルディーンはマリーに手伝わせて、二人の女囚の腰部に「ベルト」を締めあげた。

「手を突込ませるの？」

と、マリーが眠そうだ。比較のおっとりした育ちのマリーは迷惑気味にしている。

「そうとも。おや、あんた、ゆるいわよ」

槍玉にあがった二人は股手錠にされ、監房の前を横歩きに、同囚たちへの曝らし者にされた。久し振りに見せつけられる股手錠姿のみじめさに、女囚たちは眺めて顔しかめる。ミシュリーヌとミルドレーヌも、思い出してわなないた。

股手錠の二人は監房に戻され、挙げた両膝に毛布を支えて仰臥した。

「赦してやりましょうよ、ベルディーン」

「馬鹿おいしい、マリー。コリンヌ課長が特に注意したじゃないの。風紀の維持は嚴重にしろって。いくら切ながったって大丈夫よ。清く身を持して死ぬこたないんだってば——」

ベルディーンは張り切って教え、マリーは肩をすくめ、そして、さらに一名が股手錠の憂き目に逢い、マリーは夜っぴて呻吟した。

翌朝、ミシュリーヌは反則した。善意からの反則だったが、ベルディーンにかかってはお眼こぼしはない。

ミシュリーヌたちは、朝の点呼直後、正座の膝の前に両手を床につかえ、身じろぎも許されずにうなだれていた。刑務課長がコリンヌに代ってから、両手を背に組むのをやめ、床につかえて点呼を受けることになっている

のだ。今日一日の服罪の誓いも、各房ごとに一人が代表して呼ぶことになっている。今週の代表はミルドレーヌだ。ベルディーンあたりに睨まれている彼女は、そのベルディーンに見下ろされてシャチホコ張り、セリフをトチって言い直し、唸鳴りつけられてふるえあがった。

そのミルドレーヌが鼻を吸り、ミシュリーヌも鼻を鳴らす。味気ない一日が初まるのだと思うと、諦め切ってはいても、さすがに悲しい。支配者側に言わせれば、朝の正座は誓いを新たにさせるためで、服罪の決意を胸に刻みつけろというのだ。

思えば、嚴寒の床での正座は辛かった。コンクリート床の冷氣が両手両足に喰い込んで、そのまま凍りついてしまうようだった。

その一冬を漸く越して春を迎えたいま、両手両足に当るコンクリートは非情に固いままとはいえ、鉄格子の中でのみじめな姿とはいえ、女囚たちはホッとする思いで鉄格子の外を窺がうのだった。

ミルドレーヌが耐えかねた風情で腰をよじった。彼女は昨日から下痢気味なのだ。マリーが用便紙を配って回る。ミシュリーヌは両手で押し載き、膝において、再び手を床につ



「ヌは看守長女史あたりにも何故か睨まれている。」

「——あの、もう少し頂けません？ せめて一枚でも。今日だけでいいんですの。おねがい——。」

「お腹の工合が——」
ミルドレーヌが哀願し、そんな自分のみじめさに胸を詰まらせた。

「そうね。下痢、まだ止まらない？」

と、マリー婦人看

守が用便紙の束を手に、鉄格子の外から見下ろしてためらう。

「でも、駄目ね。そうひどくはないでしょ。」

なんなら、一番先におし。みんなもそうしておやり」

マリーはベルディヌを憚かっている。ミルドレーヌは唇を噛んで涙ぐんだ。

用便許可の号令をベルディヌが呶鳴り、女囚たちは一人ずつ立って便器へ急ぐ。ミル

ドレーヌは待ち兼ねて真先に立ち、よろよると用便紙を握り締めた。下痢気味のときの辛さは、ミシュリーヌにも経験がある。激しければその扱いをして貰えるからむしろ楽なのだが、軽度の症状が最も難儀だ。労役中、大声で用便許可を願いあげる情けなさといったら、もう——。マジョーリを筆頭とする愛情派が居ればいいが、意地の悪い制服にかかると、散々に焦らされた末、用便紙の一枚すらも勿体をつけて、いろいろと御託宣があったから漸く恵んで頂けるという段取りだ。

さて、ミシュリーヌはそのとき、自分の用便紙のうちの二枚をミルドレーヌに渡してしまったのだった。そして、手早く渡したつもりだったが、眼の早いキャスリーヌに見付けられてしまったのだった。コリンヌ課長御自慢の設備、監視ミラーのお蔭だ。

この監視ミラーという代物は直経一呎ほどの凸面鏡で、各監房ごとにアームを突き出して取り付けてある。当直デスクに坐ったままで全監房の内部を監視できるという仕掛けで、デスクには双眼鏡まであるという念の入れ方だ。もちろん、監房内からもデスクが映って見えるわけだから、女囚たちはミラーを見てはいけない。ミラーを眺めていたと認められ

かえた。糸屑一本も自由には出来ぬ女囚の身にとって、用便紙の一枚がどんなに貴重なものか、それは、囚われの身になって初めて、骨身に沁みて思い知らされる。さればこそコリンヌ新課長は、宣言した差別待遇の一方法として、用便紙の枚数に差をつけるよう命じていた。ミシュリーヌとシモーヌとルーシーは四枚、他の三名は二枚だ。クリスチーヌやエドウィージュはともかくとして、ミルドレ

れば、逃走予備に取ると脅かされている。また、よしんばミラーを盗み見てデスクの眼を確かめたとしても、それだけで安心は出来ない。マットの上を忍んで来る不意打ちがあるからだ。

善意に満ちたミシュリーヌの反則を見て、キャスリーヌ婦人看守はデスクから飛んで来た。キャスリーヌとしてはミシュリーヌそのものは憎くない。むしろ、神妙で殊勝な女囚だと思っている。しかし、確証はないが、イヴェットあたりが底い過ぎるようだ。マジョーリは別格で仕方がないとしても、後輩のイヴェットが気に食わない。あの四五三号を撲りでもしたときのイヴェットの眼と来たら、まるで自分の子供を苛められた母親みたいに光るのだ。

立派な反則だわ、ようし——。イヴェットの甘チャン、まだ来てないのね——。

キャスリーヌは眼を光らせて突進し、第一監房の前に立った。ベルディーヌも来る。

「どうしたんだい？ キャスリーヌ。レーダーに何が映ったの？ え？ ほう、ふーん」

「こらッ」と、キャスリーヌが呟鳴った。

「三八五号ッ、ここへおいで。バカッ、そのままで来るのよ」

ふるえ上ったミルドレーヌは、半ばにして腰を離し、そのままの恰好で鉄格子に寄って来た。ずらせた下穿きが膝をせいて、獄衣の裾をからげたままの姿だ。

ミシュリーヌとミルドレーヌは、手から用便紙を取りあげられた。

「この二匹、まだ洗脳が足りないんだね」

ベルディーヌがせせら笑い、ミルドレーヌが四ツ這って身を揉む。

「——せめて、せめて、一枚だけは——。このままじゃ、あんまりです——あんまりでございます——」

「うるさい。お黙りッ」

鉄格子を握り締める指が蹴られ、浮かせたままの白い双丘がむき出しにふるえた。

「こら、スカートをそろしてチャンと坐るんだ。なにがあんまりだって？ バカタレ」

ミシュリーヌは唇を噛んで観念していた。

恵んで頂いた官給品を勝手にやり取りするのが反則だとは重々知っているが、このくらいのことなら、マジョーリならずとも見逃がしてくれるのが相場だ。しかし、今日は相手が悪かった。どんなお仕置を喰うことか——。

「あの——担当さま。私がいけなかったのです。無理に押しつけたもんですから、はい。」

すみません。もうしわけございません」

「あら、ちがいます。私の方から手を出してせがみましたの。ですから——」

二人は哀しく底い合い、ベルディーヌが「黙んな。寝言をおいいでないよ。いいカッコしたってダメさ」

と床を踏んだ。

「あの、どっちからともなかったんでございますのよ。大目に見てやって下さいましな」

シモーヌがおずおずと口をはさみ「そうですね。ミシュリーヌだってミルドレーヌを気の毒に思って、つい……」

と、ルーシーまでが必死だ。

「お黙りッ、半気違い。ミシュなんとかにミルドなんとかっての、誰のこと？」

同囚を名前で呼んでしまったルーシーは縮み上った。少し快くなった拘禁性ノイローゼも、またぞろぶり返すことだろう。

「こら、ボヤボヤしてないで早いとこ済まさんかい。使わない紙なら返しな」

クリスチーヌが便器へ素っ飛んで行った。「そこで——。こら、四五三号ッ」

ミシュリーヌとミルドレーヌはわなないて返事した。さなきだに恐ろしいベルディーヌが、ひとときワドスの利いた声なのだ。口惜し

いが縮み上ってしまふ。

「お前たち、ここをどこだと思ってんだい。団体旅行の木賃宿とでも思ってんだろ。いいかい？ お前たちが気ままにできる物は何一つとしてないんだよ。何度云って聞かせたら分かるんだ？ オタンチンのメスブタ」

「もうしわけございません」

二人の女囚は床に額をすりつける。「いいかい。たとえ、お前たちの体から出るものだって勝手な真似は出来ないんだ。それを、こともあろうに、大切な用便紙を二枚もやり取りするなんて！ 刑務所におち込んで頂いて、まだコソ泥の癖が直らないのッ」

二人の女囚は胸を熱くして、みじめな罵倒を頭上に受けた。

「たった二枚の紙ぐらい、なんて思ってんだろ。その根性が憎いよ。恵んで頂く紙一枚にだって、世間さまのお慈悲がこもってんだ。それを我が物顔で、やったり貰ったり——。ほんとにバチ当りたら。ね、キャスリーヌ。どうしたらその道理を教えてやれるかしらねえ。こら、三八五号。腰をモゾモゾさせるんじゃないッ」

キャスリーヌは何か手真似をし、ベルディーヌと笑い合った。

ミシュリーヌとミルドレーヌ、シモーヌとルーシーは向き合って立たされ、対抗ビンタに涙を流し合った。口をはさんだだけの二人はともかく張本人のミシュリーヌたち二人はこのくらしいことで赦して頂ける筈もない。

「女へボ医者のおかげで、ミシュちゃん大迷惑ねえ、辛抱するんだよ」

近頃とみに好意を寄せるエドウィージュがそう云って慰さめてくれたが、キャスリーヌたちの意地悪い笑顔を思い出すと、どんなお仕置を受けるのかとミシュリーヌは震えた。

ついに用便なしのミシュリーヌは、例によって手荒いベルディーヌの「体操」に、油汗を流して喘いだ。そして、その「体操」が終った頃、イヴェットは監舎に滑べり込んだ。

イヴェットは更衣監視を受持ち、ミシュリーヌが腿高々とあげてやって来た。「火」の字の姿勢で眼前に立ち、生まれたままの体の表裏を晒らす。忽ちイヴェットの胸は波立って、乳色の肩を引き寄せたいと思った。背の鞭痕は薄れたといえ未だ十文字に残り、その痛々しさをそっと撫でてあげたかった。小柄な体を抱き締めて差しあげたい——。こみあげるものをイヴェットは呑み込み、ミシュリーヌの眸がひしと縋りついた。何かあったの

だわ——イヴェットは直観し、そこへクリスチーヌが割り込んで来て、ミシュリーヌは諦めて去った。

朝食の直前、ミシュリーヌとミルドレーヌは広間中央に引き出された。

「みんな、よくお聞き。この二人は用便紙をやり取りしたんだよ。チョロまかしたの」

食卓のあばずれたちは眼を輝やかせ、イヴェットは悲しく眸を伏せる。彼女には、ミシュリーヌたちが受ける罰が分っていた。

「世間さまお慈悲の紙を粗末にする者には、用便紙なんか使わせてやるわけにや行かないんだよ。この二人は、今日と明日の二日間、用便紙の有難味を教えてやります。脱ぎな。このバチ当りのおおそれたブタども」

全裸で台上に仰臥し、そして、二人の女囚は悲鳴をあげ、恥じらって腿を合わせた。キャスリーヌが面白そうに当てがおうとするものは「おシメ」だった。

獄衣の古下着で作ったおシメ——それが何枚も重ねて念入りに当てがわれ、おののく内腿がピシヤリと打たれ、ミルドレーヌは顔を掩い、さらに念入りに包まれる。順番を待つミシュリーヌは全身を染め、包丁を受ける鯉のように台上に横たわり、近寄るベルディー

ヌを指の間に見て観念した。両膝がわなないて開き、ベルディーヌが面白がって素腰を持ち上げ、キャスリーヌがおシメを当てがう。

二人の女囚の腰部には、おシメの上からゴム引きブルマーが穿かされた。付け根をピッチリ締められ、V字形にゴムベルトをかけられ、台上に立たされる。不恰好なゴム引きブルマー——それがおシメの束を包んでふくらみ、前から後ろへと潜るゴムベルトに押えられてこんもりと、見るも滑稽な姿。眺めるあばずれたちが吹き出し、台上の二人は肩ふるわせて恥ずかしがった。もっとも、嘲笑は主としてミルドレーヌに浴びせられる。

こんなにして二日間も——。ミシュリーヌは労役衣をかぶりながらホロリと泣いた。

「クッション、いい気持だろ。え？」

隣房の三八三号が食卓でからかい、ミシュリーヌは唇を噛んで腰をよじり、エドウィージュが三八三号を睨みつけた。三八三号は器量自慢の女囚だ。

ベルディーヌとキャスリーヌは澄まして帰り支度を初めた。

「あの二人、頼んだわよ」

「なーんにもしないでもいいの。おシメは私たちが明日替えてやるわ」

彼女たちはフィリスあたりに片眼をつぶって見せて、フィリスが胸を叩いて引き受け、イヴェットは口惜しく唇を噛むのだった。意地の悪いことに、マジョーリは今日は非番だ。イヴェットは、自分の非力さ加減に舌を噛みたいとさえ思った。ミシュリーヌ奥さまが眼の前であんな恥かしめを受けているというのに、口出し一つ出来ないのが悲しかった。

ミシュリーヌは、ついに、正午近くの労役場の椅子に坐ったまま、全身をおののかせて脚を硬張らせた。我慢したとて所詮無駄なこと、どうせ、おそかれはやかれのことは思いつつ、辛抱を重ねた彼女だったが、とうとう、成るように任せてしまったのだ。

ミシュリーヌは忍び泣きし、刺繍の手を止めて涙を拭いた。気配に気付いたクリスチーヌがニヤリとし、大袈裟に鼻を寄せて見せ、さなきだに頬染めるミシュリーヌの胸を掻きむしる。フィリスが靴音を鳴らせて、金髪を掴みゆすぶって忍び笑いだした。

「遠慮は要らないのよ。心ゆくまでおやり。でも、便利じゃない？無駄な時間が省けて仕事がかどるわねえ、ホホホ」

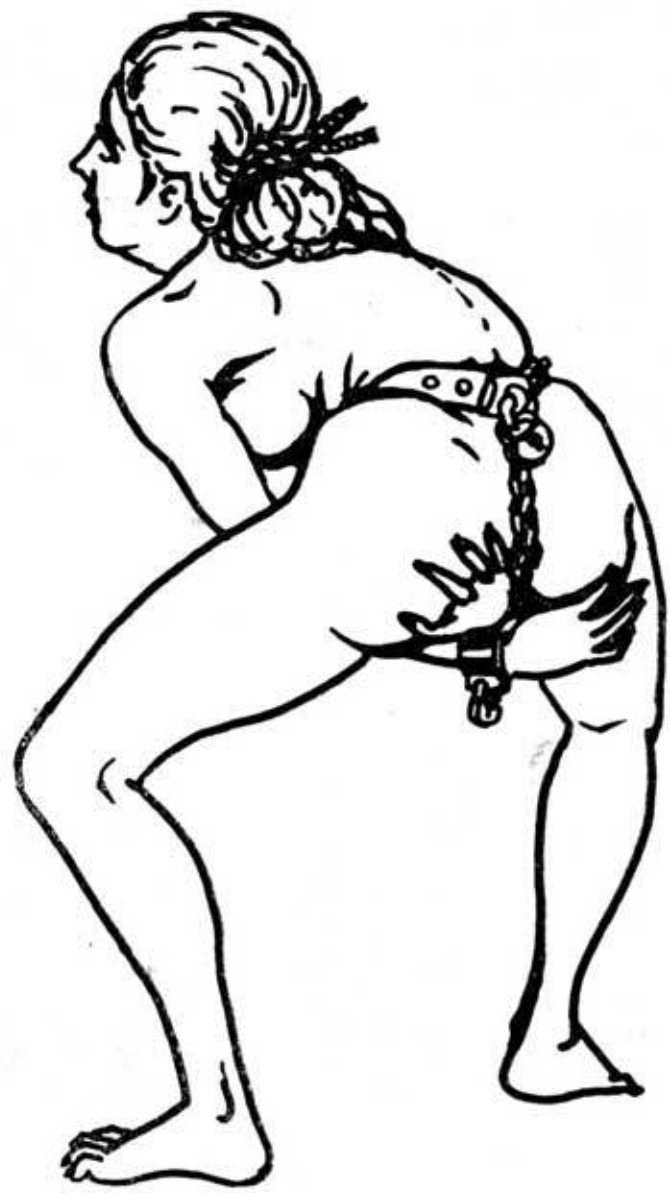
聞いて、イヴェットは怒りにふるえ、深い悲哀を噛みしめるのだった。こんな仕打ち

非道もいい所で、私刑に類することだ。その屈辱を甘受しているミシュリーヌ奥さまの胸の裡を想い、その非道に立ち向えぬ自分の不甲斐なさに涙し、その残酷を黙認している世の中の仕組みと不公平さに、腹が煮えるイヴェットだった。

ベルディーヌたちはああ云って去ったが、フォンティーヌは流石なもので、夕方の身検のときには「おシメ」を除かせ、シャワーで体を洗わせた。しかし、イヴェットの願いも空しく、フィリスたちの手で、再び元通りにされてしまった。二人の女囚は泣く泣く、おシメを洗って干し、そんな二人を、心ないあばずれたちはハヤし立てる。別に悪気があって嘲けるのではないのだが、退屈凌ぎと憂さ晴らしには適当な光景なのだった。ことに、ミシュリーヌはピカーの可愛い子ちゃんだ。

夜の点呼が終り、その日最後の用便のための紙片が投げ与えられた。ミシュリーヌとミルドレーヌは正座の両手を床につかえ、自分を飛ばして投げられる用便紙を、横眼で哀しく見やるのだった。

あばずれの一人が肉の疼きに耐えかね、夜半、本錠の音が監舎に鳴って、「ベルト」と手錠が一组、剥かれた女囚の腰部へ、戒具棚



から姿を消した。ゴム引きブルマーは、脱ごうと思えば自分で脱げる。しかし、ミシュリーヌたち二人は便器への誘惑を哀しく押え、明日のみじめさを想って涙ぐんだ。

朝が来て、イヴェットは真先に出勤した。ゴム引きブルマー姿で体操するミシュリーヌを見て胸を詰まらせ、姿を見せたマジョーリに訴えて見た。しかし、マジョーリも溜息を吐いて頭を振るばかりだ。慣例として認められていたヤキ入れなのだから、同僚の顔をつぶすことは出来ない。それに、流石のマジョーリも「おしめ」のみじめさはよく分ってい

ないのだ。夜尿症の女囚には当然の処置だし、そりゃまあ、いい気持ではないだろうが、そんなにひどい仕打ちだとは考えていない。

しかし、看護婦の経験を持つイヴェットには、そのみじめさが理解できた。その処置を受ける患者たちがどんなに恥かしがっていたことか。しかも、患者とはちがって、ミシュリーヌたちは取替えて貰えないのだ。イヴェットは、颯爽と現われたベルディーヌを恨めしげに睨んだのだった。

ベルディーヌは、広間に干されたおシメを見て口をとがらせた。

「駄目じゃないか、フィリス。ブルマーの紐に封印しとくんだったねえ」

「あら、だって——。フォンティーヌよ」

ベルディーヌは肩をすくめ、朝食を待つ女囚たちの眼前の台の上に、ミシュリーヌたちを

追いあげて仰臥させた。食卓の方へ脚を向けさせ、荒々しくブルマーをむしり取る。ミシュリーヌを先ず剥いて、ベルディーヌは舌打ちした。昨夕シャワーを浴びたし、昨夜は一晚中我慢したし、ミシュリーヌは綺麗なものだ。ミルドレーヌが悲鳴をあげ、ひっぱずしたベルディーヌがニヤリとし、大袈裟にソッポ向いて鼻をつまむ。ミルドレーヌは下痢気味だし、昨日一日を濡れたままで冷えたのだから、夜半、どうしようもなかったのだ。

「ね、替えてやったら？」

とマジョーリがさりげなく云ったが、ベルディーヌは鼻で黙殺した。

「こら、二匹とも、もっと脚をひろげな。ふん、シャワーのときにヤラかしたね、四三三号。でなきゃ——。フィリス、何故禁止しなかったのさ。お仕置の効き目なしだよ」

「あら」と、フィリスがふくれる。

「そりゃ無理だよ。どうやって見分けるのよ？」

「湯気が立つよ、湯気が。ベテランの癖に仕様がねえ。こら、三八五号。なんてみっともないザマだい？ 医者のはしくれたんだろ。自分のお腹具合ぐらい何とか出来ないの？ そりゃまあ、出るところが違うから専

門外かも知れないけど」

ミルドレーヌは固く顔を掩い、ひろげて立てた両膝をわななかせた。眺めるあばずれたちがクスクス笑い、食事の前にそんなものひろげちゃ困るじゃないの、と嘲ける。教養ある女囚ミルドレーヌには、同囚たちの風当りも強い。

「ふーん」と、ベルディーンが感じ入った。

「二人とも何とかまあ恰好がついて来てたようだけどサ、昨日一日で、ひときわ生い茂ったじゃないか。水とコヤシがタツプリと、ほどよく蒸されりゃ、草は延びるもんだねえ」

あばずれたちは吹き出して腹を抱え、イヴェットは思わず駆け寄って、笑いころげる数名の頬に、続けざまにビンタを鳴らせてしまった。その見幕に気を吞まれて、あばずれどもはシユンと鼻白み、マジョーリは微笑んでベルディーンは眼を光らせる。しかし、笑うのは禁制なのだから、さしものベルディーンだってイヴェットに文句は云えない。

ミシユリーヌたち二人は全身を硬張らせ、固く顔を掩ったまま、再びおシメとブルマーを穿かされ、ゴムベルトを締められた。ミルドレーヌが啜りあげて腰をよじる。そのままで当てがわれたおシメがゴムベルトに押さえ

られるのだから、そのみじめな感触は堪まらないことだろう。

「こら、残すんじゃないよッ」

ベルディーンが意地悪く責めて、ミシユリーヌたち二人は皿を舐めさせられ、水の一滴までも啜らされた。

運の悪いことに、今日は舎外労役の日だ。

クリスチーンと並んで腰鎖を待ちながら、ミシユリーヌは両脚をよじった。昨日一日は何とかそれは我慢したミシユリーヌだったが、冷やしたせいか、そのもう一方の口がそろそろ迫って来たのだ。それに、彼女には便秘の気味は平常から全くない。

ミシユリーヌの腰に鎖が巻かれて締めつけられた。ダブダブのウエストがくびられると腰部のふくらみが不恰好に強調される。ミシユリーヌは胸を抱いたまま、後ろ腰に鳴る錠の音を聞き、マジョーリが囁やいた。

「ちよっぴりゆるくしといたわ。今日一日だけだから辛抱しなさい。我慢するのよ、ね」

ミシユリーヌはふり向き、涙を溜めて訴える。彼女の双眸は口より雄弁だ。マジョーリは吐息を洩らした。

「お願いして見る？ そこにいらっしゃるわよ。でも、しつこくしないでね」

ベルディーンはミルドレーヌの腰をくびりあげて、お尻をポンと叩いたところだ。ミシユリーヌは矢庭に跪まずき、両手を合わせて身をもだえた。

「ベルディーンさま。おねがいでございますッ。紙は要りません、せめて——。お、お慈悲ですから——。悪うございました」

「ふん」と、ベルディーンが嘲ける。

「赤ちゃんは、どうなのさ。お前だって、赤ん坊の頃があっただらう？ 赤ん坊に我慢できることが、女一匹、どうして辛抱できないんだい」

ミルドレーヌもひれ伏して哀願を初めた。

「うるさいッ。なにイ？ 革鞭の方がまだって？ お前たちの指図は受けないよッ。有難くお仕置を受ける気はないんだねッ。なら何日でもそうして暮らさせてやるよ」

ベルディーンは、マジョーリやイヴェットや、それにフォンティーヌ補佐なんかの顔をちらちら見ながら、威丈高だった。女囚に哀願されて我を折っては、名にし負うピカルデイ女のこけんにかかわる。それに、愛情派をのさばらせるなんて、いやしくも刑務所の名がすたるといふものだ。

新しい課長の強硬方針が分からないの？

おシメくらい何さ。恥かしい思いさせるのが此奴たちの身のためよ。何年か先、思い出して行ないを慎しむってわけ。要するに社会防衛のためなのさ——。

「はいつくばってないで立ちなッ」

ミシュリーヌたちは涙を押え、鎖を鳴らしてよろめき立った。

うららかな春の陽光の下、女囚たちは鍬を振るい、鋤を曳く。ミシュリーヌは呻いて腰をよじり、ときどき立ち止まって息を詰め、額の油汗を押し拭いた。大声で許可を乞うた女囚たちが、畠の隅でしゃがみこむ。

クリスチーヌも大声で叫び、キャスリーヌがあっさりと許可した。鎖仲間が歩けばミシュリーヌも同伴するしかない。クリスチーヌは所定の穴にしゃがみこみ、裾をからげながら、ミシュリーヌに片目をつぶって見せた。

「悪いわね」

ミシュリーヌは泣きたい思いで眼をそらせるのだった。キャスリーヌがやって来て、これ見よがしに用便紙を与える。

どうなってもいいわ、もう——。

ミシュリーヌは両腕をわななかせ、自暴自棄の衝動に駆られるのだった。

「どうお？ 四五三号。思い切ってやって見

る？」

キャスリーヌ婦人看守が見すかすように嘲けた。

「保安課行きを承知ならおやりよ、ホホホ」獄衣の裾にかかったミシュリーヌの手があのき、固く握り締められた。

「ね、ひと思いにおやりよ、ミシュちゃん」再び鎖を鳴らしつつ、クリスチーヌがシタリ顔で云う。

「その調子じゃ、どうせ我慢し通せる風情じゃないわね。思い切った方が楽よ」

ミシュリーヌは、ついに、ひる前の畠で立ちすくみ、手足を硬直させて低く呻いた。

ニヤリとしたベルディーヌが背後に寄り、あらかた終ったと見るや、革ロープの一撃を背に飛ばした。

「そのヘッピリ腰はなにサ。キリキリ働くんだ。怠けるとダブル懲罰だよッ」

女囚ミシュリーヌは一声呻いて身をよじった。一、二歩踏み出して、忽ち泣き声を洩らす。覚悟はしていたものの、その気持の悪さは喚きたくなるほどだった。

ミシュリーヌは、頬をしとど濡らして監舎へ戻って来た。ミルドレーヌも泣きながら、いとも妙チキリンな腰つきだ。

ベンチに腰をおろすときには悲壮な心地だった。ミシュリーヌは、いったんおろした尻を身じろぎもせず、唇を噛みしめて屈辱に耐えたのだった。ともかく、いまのミシュリーヌとミルドレーヌがどんな状態であるかは、並み居る全員がハッキリ知っているのだ。股手錠をぶら下げている四名よりもみじめな状態なのだった。

例によってベルディーヌが責め、一雫あまさず腹へ入れさせ、そして、ニヤリと笑う。

「四五三号と三八五号ッ。立て」

二人は立って腰をよじった。すぐさま、坐れと命じられる。掛ければ立て、立てば腰掛けろの繰返しだ。二人はベソを掻き、意地悪さに涙ぐみ、あばずれどもがクスクス笑う。

「ガバガバ音が聞えちゃう。ゴムブルマー」「そうかい。あたしにや、ピチャピチャって聞えるけどねえ」

「ちよっとちよっとお、なんだか臭くない？こぼれたんじゃないかしら」

みじめな二人は思わず手を腰のあたりにやってまさぐり押え、その頬にビンタが降る。

「よし。こんどは正座しな。ベンチの上にだよッ。そうそう。降りて立つッ。シャキシャキやるんだ。潤滑剤はタップリつけてあるん

だろ。笛に合わせて続けな」

二人は泣声を洩らし、腰の鎖が絶えずベンチに音を立てた。イヴェットは頬を紅潮させ涙ぐんで眼をそむけた。フォンティーヌも手をあげて制止にかかったが、三監舎の鬼ベルディーヌはヘッチャラで笛を吹くのだった。

ミシュリーヌとミルドレーヌは広間へ引き摺り出された。クリスチーヌとルーシーも繋がって来る。二組の腰連鎖たちは広間のまわりを走らされた。ふくらんだお尻の腰つきがおかしいとて、あばずれたちが腹を抱えた。「喜劇よ、イヴェット。深刻に考えることはないわ」と、マジョーリが囁いてくれたが、革ロープを振り回して追いついてるベルディーヌの憎々しさに、イヴェットの腹は煮える。「ようし、とまれ。こら、裾をからげな」

ミシュリーヌたち二人は、ブルマーの上のゴムバンドを念入りに締め直され、両腿をもだえてしゃくり上げ、お尻を叩かれて飛びあがり、漸くのことと慰さみ物から解放された。

こんどはマーサの組が引摺り出された。マーサには両足に脚鎖、その鎖仲間には片脚鎖が装着される。これはフォンティーヌ諒解の懲罰で、畠の小石を蹴飛ばしたマーサは当然

としても、連帯責任とやらの鎖仲間は可哀想なものだ。顔しかめて戻るマーサの両脚の間で、重々しく揺れる二条の鎖がガラガラとからみ合った。腰鎖の前側から垂れる鎖が二条黒々と光り、それぞれ両足首の鉄環に結ばれている。これではもう、石を蹴り飛ばした途端、重い鎖に足をとられバランスを失ない、よろめいてひっくり返ってしまうだろう。

「こんだ、三七二号と三七三号。こっちへ来るんだ。お前たち、どう見たって男だね」

この二人は、あばずれぞろいの九監房のなかでも、特に骨太で荒っぽい。三七二号なんか、鬼のベルディーヌでも一目おくほどの体格で、身検のときにミシュリーヌを見る眼のギラつき加減は拔群だ。二人は鍬の使い方が荒っぽかったのだ。うららかな春の陽に精気が溢れ、振るう鍬に発散させたのだろう。

「手をお出しッ」

キャスリーヌが命じ、戒具棚をひっかき回した。並んだ二人は両手を前でそろえ、広間中央で立って待った。手を出せと命じられた以上、そろえた両手をおろすことは許されないうが、こうして手錠を待つ気持はみじめなものだ。悠々とやって来たキャスリーヌは、さらに悠然と手錠を取り直し、その旧式手錠の

鉄蓋を開いた。

「お待ち遠だったわね。おとなに待ってたこと。なにしろ、特大サイズのを探してたもんだからねえ」

キャスリーヌは小馬鹿にした口ぶりで女囚たちの顔を見上げ、重い手錠を小娘看守の手から甘受する太い手首が口惜しげだった。

「きついわ。きつうございます。担当さま」

と、遅ましい女囚二人は口々に哀願し、ガチャガチャと両手を引張って見せ、男まさりの顔を歪めた。

「云うことは相場どおりね。そのくらいでちよいどいいの。鍬が折れちまうもんね。さ、戻って——。不服ヅラしていると脚鎖だよッ」大柄な二人は、両手を突き出して戻って行った。

午後の労役が畠で初められるや、婦人看守たちは革ロープをポケットに納めた。忌々しくも痛い革ロープの鞭が一斉に消えて、女囚たちはいぶかったが、その不審もやがて解けた。保安課のスカートとジョアンヌ女史に案内されて、娑婆の人々の一団がやって来たのだった。ちょうど、ミシュリーヌが喘いで小腰を屈め、どうにでもなれとばかりに生ま温かくほとばしらせ、ゴム引きブルマーの水密

性を両腿の付け根に不安がって、腰と脚を硬張らせたときであった。

「バカだね、あんたは——」

と、クリスチーヌが横眼で云う。

「すこしずつヤラかしゃいいものを、筒一杯に貯めといての挙句なんだろ？　いくら木綿布の厚手をボツテリ当てがっといたって吸い切れるもんかね」

制服の気配が背後に近寄り、ミシュリーヌは泣きたい思いで脚を動かす。合わせた両腿を離すと漏れそうだし、鍬を振りあげるとオシメが絞られてしまいそうだ。

ああ、いまお尻を撲られても　ら、こぼれてしまうわ、かんにん——。

神の助けか、制服はそのまま遠去かった。鍬に寄りかかっていた怠慢に対し、指一本あげなかったのも道理で、その制服はイヴェットだった。

「なにをオタオタしてんのよお。あたしまで巻き添えにしないで。こぼれたっていいじゃない？　少しぐらい」

あたりを盗み見てクリスチーヌが呟いた。

「おんや？　ちょっと、ちょっとお、おミシユちゃん。ごらんよ、いと気高き人々の御入来よ。ちきしょう、忌々しいったら」

ミシュリーヌはちらと盗み見て、忽ち深々と面を伏せた。

「あの格式張ったババアがいるとこ見ると、例の、ホラさ、ナントカ審査委員会のお歴々だね。でも、ずい分と新顔がマジってる」

クリスチーヌのいうとおり、それは行刑審査委員会のお歴々だった。女性五人と男性二人の七名がメンバーで、この四月から一部メンバーが替ったのを機会に、おそろいで視察という仕儀なのだった。新顔は、男一名に御婦人二人、生まれて初めての刑務所見物にキョロキョロしている。

「ちえッ、二人とも、おジイちゃん」

クリスチーヌが肩をすくめ、鍬をあげた。

「あたしゃもう、どうせ満期まで見込なしさね。でも、おミシユちゃんは気をおつけ。ヘマやって番号おぼえられでもしたらコトだからね。いままいしいけど、長いものには巻かれろサ。しっかりおしよ、お尻モゾモゾさせないで。恰好だけでいいから精を出すのよ。そら、鬼ババアがこっち見てる」

クリスチーヌは鍬に当たり散らかし、再仮釈放見込薄の悲哀を土に激しく打ち込んだ。囚われの身には夢の中でしかまともえぬ粧おい——その人々が島の中央道をやって来て、

ミシュリーヌは顎を胸に埋めた。クリスチーヌが平気で腰鎖をジャラつかせ、ミシュリーヌは泣きたい思いで腰を屈める。できることなら、ずっと向うへ離れたかった。しかし、命じられた持場は中央道のそばなのだ。

ミシュリーヌの願いも空しく、娑婆の男女は、彼女の背後十歩足らずで立ち話を初めてしまった。

「なんだか胸が一杯になるわ、可哀想で」

と、象牙色のコートも軽やかなレディが呟き、半月形も長々と描いた眉をひそめる。

「可哀想？　私だって最初はそう思ったわ、ブリジット。でもね、筋違いの感傷よ」

「そうですとも」

と、シュバリエ老夫人が新米委員に云う。

彼女の眸は、そういいながらも、女囚の群を一人々々鋭く見回していた。

三監舎の四五三号——。シュバリエ夫人はその番号を銘記しているのだった。

「マダム・オッセンのおっしゃるとおりよ。そりゃ、この姿だけ見れば哀れだわ。でも、

眼前のことだけで判断しちゃ駄目。月日の流れにおいて実相を把握しなきゃね。衝動や感情だけで動くなんて、少くとも私たちレベルの人間がすることじゃなくてよ」

「そうよねえ。このひとたちのために、もっともって辛らい思ひさせられた人たちがいるんですもの」

と、もう一人の新委員がうなずいて賛意を示し、小粋なハイヒールを脱いで土を振りこぼす。初老の男二人の眼が、シームレス靴下の脚をさりげなく観賞した。

「でも、ずい分と原始的な畠仕事なのね」

「そう。こんなお仕事させるのが一番いいのよ、この女たちには。息を引き取るときに、あまりにも素朴に暮したと後悔する人間はいないのよ、フロレンス」

シュバリエ夫人は、ときどき哲学的なことを口走る。そんな彼女の老いの眸がキラリと光った。つい眼の前に、求める四五三号の姿があったのだ。

「できるだけ自給自足させてますのよ」

と、保安課スカートが口をはさむ。

「さっきお召し上りになったパンも野菜も、この畠で作ったものですわ」

洩れ聞いたクリスチーヌが

「ふん。まさか、黒パンかじったわけじゃあるまいね」と、いまいましげに呟いた。

シュバリエ夫人の眸は、ミシュリーヌの囚衣の番号布に吸い着いていた。

やっぱり居たのね、鎖つけられて——。夫人はじっと見詰め、波立つ胸を味わった。

あの女が、わが愛息エミールの愛を受け入れてさえいたら、おそらくは彼も若く散ることなく、この老い身も幸に浸っていることだろう。そして、あの女もこんな非運に逢うことなく、わが孫を抱いて春の日に微笑んでいることだろう。その孫は、多分二人目、いや三人目か——。

シュバリエ夫人の想いは遠くそのかみに立ち戻り、老いの双眸に涙が滲んだ。ふと、老い先短かい胸がこみあげ、微かに痛む。

あの女は、私のエミールが愛した女——あの子が命をかけて愛した唯一人の女性——。想い遂げずに散ったエミールが、ドーヴァー海峡の空、焰曳く機上で、なおもあの女を呪ったであろうか。

いいえ、あの子は悲しみこそすれ、我が腕を逃げたあの女を恨んだりしたことなんか、これっぽっちもなかったのよ。そのことは、母である私がよく知ってるわ。おお、エミール。お前の胸の裡は、この母さんには痛いほど分かるの。あのミシュリーヌのこと、お前は許して逝ったのよね。なら、この母さんだって——。

「ね、ブリ要ジット。するに、眼には眼を、歯には歯を、よ。簡単なことだわ」

シュバリエ夫人の耳に、マダム・オッセンの声が聞えた。

「私、この頃になってそう思うようになったの。慈悲と感傷とは別物なのよ、同情と憐憫とがちがうようにね。私たち人間は、正しいとされてることをきびしく行なえばいいの。あとは神さまのお仕事。眼には眼を、よ」

こみあげる温かいものに浸ってあやうく溶けかかった憎しみの念が、シュバリエ夫人の胸の裡で踏み止まった。

こっちをお向き、ミシュリーヌ。この私をごらん。行刑審査委員会の委員長になったのよ。這いつくばって、泣いて頼んだら？——老いの眸に、冷たい光が再び燃える。あのミシュリーヌへの憎しみと恨み——それ一途に頑張って、宿願の委員長のポストをかち得た夫人だった。天国でエミールに何と云われようとも、この胸を晴らさでおくものか。

ミシュリーヌ、こっちお向きしたら。いいザマなこと。情けないのね、泣いてるわ。うんとうんと苦しむがいい。お前は、私のエミールを殺したんだよ。一生涯、そうして鎖つけといてやりたいわ。泣いたって駄目よ。私

の聲が分からないの？ 聞えないの？ 名を呼んでやろうかしら。さぞ驚ろくことだろうねえ——。

老夫人は舌なめずりしたい心地だった。面と向って恥かshめてやれば、おのが姿を恥じて身悶えることだろう。あんなことを仕出かした女だけど、まだ少しは恥を知っている様子だし——。

いいえ、やっぱりまずいわ。第一、この私にしてからが、どんなことを口走るか、自分でも分からないもの。そしたら、折角の委員長もフイだわ。だけど、あの女の方から私に気付いたら、そのときには——。

シュバリエ夫人は残酷な期待を胸に秘め、女囚ミシュリーヌの浅間しい苦役姿を見詰めた。しかし、屈辱の想いに胸熱くしたミシュリーヌは深々と首を垂れ、横顔すらも見せまいと、ただひたすらに腰を屈めるのだった。シュバリエ夫人は諦らめ、やがては必ずめぐり来る日——仮釈放審査の面接日を胸に描きつつ、春の午後の労役場を見渡した。

幾度となく刑務所を訪れて来た彼女には、もはや、初めて見たときの想いはない。この女たちは当然の報いを受けているのだ。人間の性は善なり、という言葉などは、とうの昔

に捨て去った彼女であった。

女囚たちは、ひとしおきびしくなった監視を浴びて、切々と腰鎖を鳴らす。

仮釈放嘆願書を提出して審査を待つ者、その嘆願資格すらまだない者、審査を受けて却下された者、そして、そんなことは遠い先のことと観念している長期刑の者——人の世の男女を盗み見る女囚たちの眸は、それぞれの想いと哀しみをこめて切なく光った。

遠くの方で、マジョーリ婦人看守が三二三号囚を見守りつつ、そばに立っている。無実を叫び続けて九年の女囚だ。

「マジョーリさま、おねがい——」

三二三号は、声ふるわせて手を合わせた。

「あのかたたちは審査委員の方々でしょ？ きっとそうですわ」

そら来た、とマジョーリは頬引き締める。

「話させて下さいまし。きつと分って頂けます。お、おねがいでございます」

小柄な女囚は鋤をほうり出し、土にしがみついて哀願した。

「駄目よ、おばさん」

と、鎖仲間の若い女スリが腰鎖を引張る。

「天使さまだって、出来ることと出来ないことがあるわよ。法律って難儀なもんさ。そり

やね、おばさんの可哀想なことは、よく分ってんのよ。だけど、無駄だわ。立ってよ」
細い腰に鎖がくびれこみ、三二三号はなお見上げて手を合わせた。

「なんなら、縛って連れて行って下さいましな。きつく縛って下さいまし。一言だけ——

おねがいますッ。お、おねがい——」

マジョーリは見下ろして溜息をついた。

「ね、いつも云ってるでしょ？ 一応は罪を認めるのよ。そして、仮釈放を嘆願するの。

いい？ あのひとつに頼むのはそれからのことよ。ここを出てから思いのたけを存分におやり。要は、ここを一日でも早く出ることなのよ。分って頂戴な。さ、鋤を拾って」

「——そ、そんなこと——。罪を認めるなんて。そんなこと書いたら、もう金輪際駄目ですわ。検事さんや裁判官に、罪を認めてるじ

やないかと云われて——。再審して頂いて無実を晴らしたいんですよ、私——。ああ」

「バカだねえ、おばちゃん。いくら云っても分からないんだから。マジョーリさまならこそ、ハッキリと教えて下さるのよ、石頭」

女スリが焦れている、マジョーリも吐息を洩らす。この三二三号は、検察当局への恐怖と、裁判に対する不信感を根強く植付けられ

ていて、強迫観念が牢固として抜け難く、マジョーリや同囚たちがいくら口を酸っぱくして教えてやっても、身を処する要領がピンと来ないのだ。無実を主張する限りは、いくら服役成績が模範的でも、仮釈放は絶対に許されないのに――。

マジョーリは黙って扶け起してやり、肩を叩いて鋤を持たせてやった。

「あの女囚、ちょっと妙ね」

と、フロレンスがミシュリーヌを指さす。

「腰のあたりがふくれてるじゃない？」

「ポンポン大きいチャンかしら？ でもないわね」と、ブリジットも優雅に小首傾けた。

「ああ、あれは夜尿症があるんですのよ」

ジョアンヌ女史がさりげなく答える。

「ですから、ああしとかなくちゃ――」

「まあ!! つまり、おシメカバーがふくらんでるわけね」と、ブリジットは感に堪えた。

「でも、おかしいじゃない？ 夜尿症って、

夜だけでしょ？ いまは昼間で起きてるわ」

現在発売中／限定版グラビア写真集／在庫案内

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 女体緊縛グラフ集「豊満と清楚」 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「限二」 |
| 緊縛美女八十態「美しき縛しめ 第四集 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」 |
| 凄惨「女性刑罰拷問持集」日本版 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美5」 |
| 山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」 |
| 二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美8」 |
| 「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美9」 |
| 緊縛写真集「責められる美女百態」 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美10」 |
| M写真集「女王様に飼育される日々」 | 一部 一〇五〇円 (送共) 略号「M特」 |
| 緊縛美態代表作品一二〇葉写真集 | 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美11」 |

◎一般書店にては一切販売いたしておりませんから、直接発行所へお申込み下さい。

「いえね、昼間だって、夢うつってことがありますもの。そんなケジメついてるようなら、こんなとこへ……。さ、参りましょう」

保安課スカートが軽くいなして促がし、シユバリエ夫人は苦笑しつつも満悦し、ミシュリーヌは涙をこぼしたのだった。

「早いとこ消えやがれ。忌々しいったら。ねええ、おミシュちゃん。泣くのはおよしよ」

クリスチーヌが唇を曲げ、背後へ土を蹴った。途端、保安課スカートが眼を光らせ、飛んで来て、答でふくらはぎを打ち据えた。フリリス婦人看守も素っ飛んで来て、掴み出した手錠を両足首に叩き込む。足首にも使うべしの、鎖の長くて環も大きい方の手錠だ。フリリスは手錠捌きが御自慢なのだが、いささか手際が悪かった。彼女は昨夜当直だったのだが、二日続きの休暇目当てに、引続いて勤務している。あつというまにカマセ損なったのは、保安課スカートの前だったせいもあるが、疲れて眠いためだろう。

クリスチーヌは悲鳴をあげ、両膝落してガチャつかせ、苦痛に呻いた。

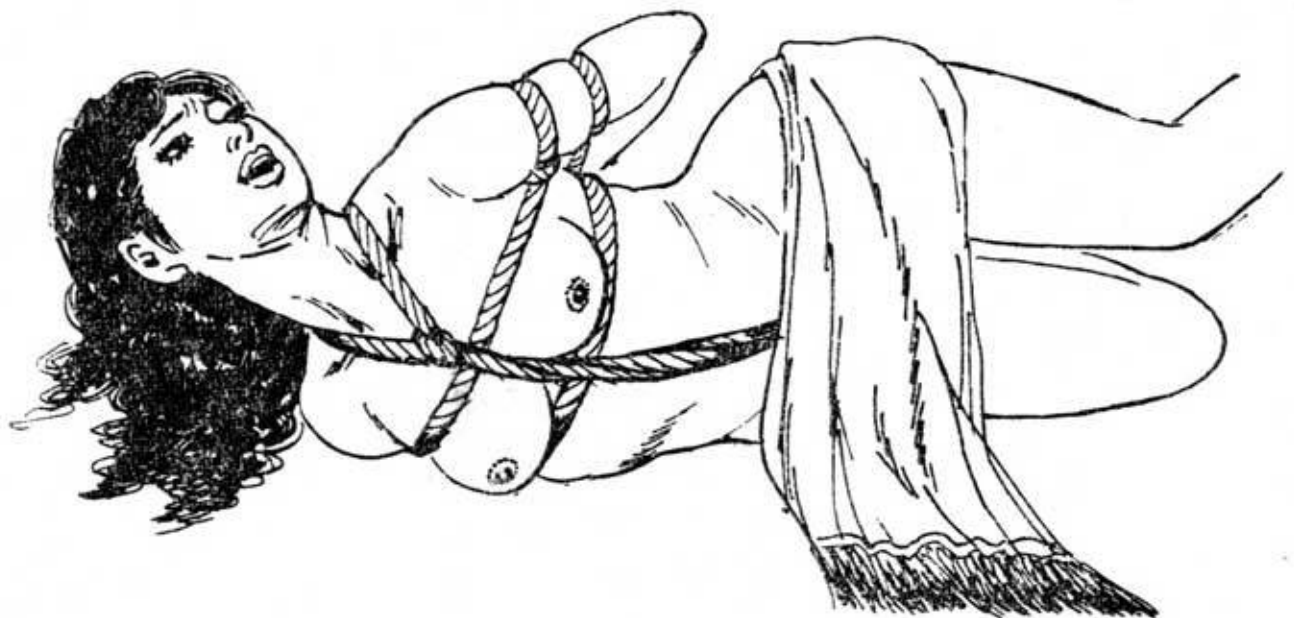
「あッ、か、かんにん。ゆるして――」

(未完)

妖 霊 城

(最 終 回)

黒 淵 賀 集 子



十九、昭和四十年五月二日

日曜日

朝九時の事

「賀集子。よくねむったね。だけど何か悪い夢を見たのじゃないか。寝言で泣いてたよ」

嬰一に起こされました。私は客殿の寝具に寝ています。

「ねむったって？」

とんでもない。昨夜は、

いや、手は縛られていません。

だけど、起きようとしたら、からだ中の節がひどく痛みました。消えかけているが、手首には縞模様のあとも残っています。やはり昨夜の恐しいことは本当だったようです。

二十、朝十時の事

おそい朝食です。

その席で和尚さんがラジオをつけました。ちようど計ったように天気予報が始まりました。どうやら天気は西の方から急速に悪くなってくるようです。

「きのう赤萩町で新聞を買いましたが、天気図で見ると颱風みたいな低気圧が近づいているようです。今の季節には珍らしい。帰りの道や、るすにしている家も心配になりました」

嬰一が新聞をひろげながら言いました。とたんに和尚さんは嬉しそうな顔をしました。

「天霧峠からこちらは道が悪くて大雨の後には車が通れなくなることがよくあります」

「まだ見たいものは、たくさんあるけれど、

賀集子、どうだ。この次の機会に廻して帰った方がよくはないかね」

嬰一は何を考えているのでしょうか。

二十一、午前十一時の事

「どうしても、お話ししておきたいことがありますの」

仁視さんひとみが嬰一と私を個室に招きました。

床の中央にソロモンの星を描いた、魔法のコレクションがある気味の悪いあの部屋です。

「浩月山の上から、このお寺を監視している連中のことではありませんか」

嬰一は椅子にかけながら言いました。その

椅子は六角の星形の中央にあります。

「そうです、やはりお気づきでしたのね」

「このお寺の何かを、ほしがっているみたいですが」

「ええ」

「その何かが、わかりかけて来たのですが」

「そこから先を言っただけじゃありません」

「少しは頼りになるつもりです。それでも」

「誤解なさっていられるようですわ。あの人は悪者ではありません」

「妙だと思いました。その気になれば」

「老人と娘だけの所へ押し入ることだって出来るでしょう。私が毎日一人で夜道を帰こと

も知っているはずだから誘拐しようと思えばわけない道理です」

「青垣という家の玄関に蛇が自分の尻尾を口でくわえている紋章がありました。グノシス派の印ですね。バラ十字会と対立する古代の流派でしょう」

「そこまで御存知なら私達とあの人達の間だけのこととしておいて下さいませ」

「わかりました」

二十二、正午の事

昼食の前に、二人だけになったとき、私は嬰一に尋ねました。

「ソロモンの星が床に描いてあったでしょ。

あのまん中に坐って、妙な気分にならなかった？」

「何度もねむくなった」

「どうして平気だったの？」

「きのう赤萩町の薬屋で覚醒剤を買っておいんだ。ねむらされそうな予感がしたから」

二十三、午後二時の事

昼食をいただいてから私達は山門を出ました。和尚さんと仁視さんは私達の自動車が見えなくなるまで見送って下さいました。或は私達が立ち去るのを見守っていたのかもしれない。

「とうとう追い出されたわね」

私はハンドルを握りながら言いました。

「そうじゃない。善意だよ。我々を危険に近寄せないためだ」

「どんな危険？ グノシス派とバラ十字会の魔法合戦でも始まるの？」

「もっと現実的なものの争奪だと思うが」

「天籟寺の宝物？」

「そんな簡単なものじゃない。物慾や名誉慾とは違う我々には理解できない何か」

「はっきり教えて、それなあに」

「わかりかけて来たんだが」

嬰一は考えこんでいます。

「へや・ゲネラル・クロ」

「……」

「なぜ急に帰ることにしたの？」

「誰が帰ると言った」

天霧峠が見えてきました。

「ここで下りる。赤萩町へ歩いて行くよ」

「私は？」

「来る気があるなら暗くなってからおいで。町の南に伊勢屋という旅館を予約してある」

「夕方まで行っただけじゃいけないの」

「自動車を見られたくないからな。南へ一時間行くと唐崎市がある。そこで髪形と服装を

変えておいで」

二十四、夕方の事

赤萩町は牛市で有名な町です。毎月七日の日に市が立ちます。それで六日、十六日、二十六日はどの旅館も満員になるそうです。

赤萩町をよく知っている嬰一はきのうの間に五日までの宿泊を予約していました。伊勢屋もばくろう宿の一つで私達より他に客はないようで私達の車も牛舎でねむっています。

「つかれただろう。今夜はプレイを休もう」

私は青垣という家のことと箱責めにあった話をくわしくしました。

「幽霊の正体がわかりかけてきた。写真のロジエ軍医について思い当る所があるから大阪の新聞社に問い合わせたら返事が来た。

フランスの有名な学者のロジエ博士と同じ人物だよ医学、心理学、生物学それに歴史。今の学問では分類できないような部門の大家だ。古代や中世の魔法を研究して現代に通用する薬品を発見しようとしていたそうさ。キリスト教が嫌いで悪魔博士と呼ばれていた」

「和尚さんはロジエという人と並んでいる写真をかくしたわね。仁視さんは誰かに食べさせるお肉を買ってた。天籟寺にあった魔法の本は四十年前のコレクションで……」

「その想像は当たっているかもしれない。だが

幽霊の正体がロジエ博士だとしても、それをそっとしておくのがみんなの為かも知れん。

ロジエ博士は狂人扱いで誰からも相手にされず、今度の戦争ではフランス人でありながらナチスに協力して何か薬物の研究を行い、戦後は行方不明だそうさ」

「よくそれだけわかったわね」

「偶然だよ。新聞社に就職した同期生が始めての仕事に調べたけれど結局記事にならなかったと言っていたからおぼえていた。それにもう一つ重要なことがわかった。天籟寺の住職は元軍医少佐とは名ばかりで、実は陸軍の命令で或る薬品、多分毒ガスの研究のために戦時中ドイツに派遣されていたそうさ」

二十五、昭和四十年五月三日

祝日、月曜日、朝の事

「おとといの晩はひどい目にあったんだね」

「もう元気よ。でも又天籟寺に近寄るの？」

こんな、やさしそうな話をしながら嬰一は私を床柱の前に立たせ、両手を柱のうしろに廻して縛りました。

「賀集子は青垣という家を見張ってくれないか。当分別行動だ。プレイができないね」

手拭いが私の眼を包みました。

「あなたは？」

「天籟寺を観察する。必ず何か起るぞ」

「危い事はしないでよ。あら何するつもり」

目かくしされているので、よくわかりませんが、嬰一は私のプリーツスカートをぬがせて、かわりにかたい感じのズボンをはかせているようです。

「賀集子の服装を、もっと変えるんだ」

「すっかり変えたつもりなのに」

朝から妙なまねして大丈夫かしら。

この旅館は大きい割に人がいません。主人夫婦とお婆さんが一人だけ。それも嬰一が四日分の宿泊料を払ってしまったので来ようとしません。どうやら六と七の日だけ、臨時のお手伝いさんが近くの農家から大勢見えるようです。

「これなら今までの賀集子に見えまい」

私の手を一度ほどき、セーターをぬがして他の服を着せました。

「あら、きのうセットしたばかりなのよ」

嬰一は私の両手を固く縛りなおすと、唐崎市で千円かけたパーマをすっかりこわしてしましました。

「見てごらん。よく似合うよ」

姿見を前にして目かくしが外されました。

「ひどいわ。こんな姿で町を歩かすの」

作業衣に男物のズボン。髪は工員風の帽子の中に巻き上げられています。

「可愛い男の子だ」

「少女歌劇じゃないわよ」

「旅館には山林を買いに来たと言っている。

見られても疑ったりしないだろう。ここから裏に出て山に入ると山林伝いに青垣家に近寄れる。双眼鏡を持って行けば相当な観察ができるだろう。頼むよ」

二十六、昼から午後にかけての事

嬰一は人夫みたいな服装で、手拭いの頬かぶりをして出て行きました。嬰一には悪いけれど、ダブルの背広よりよく似合います。

私達の荷物は全部自動車に納め、いつでもとび出せるようにしてあります。

私は男みtainなスタイルで西の山に入りました。最初思ったほどいやな服装ではありません。何だかスリルが感じられて面白い。

いなかの旅館は、ご飯をたくさん出すから私達のようなパン食の好きな者は半分以上余します。握って缶詰を添えれば昼の分まで足りす。

なま暖い風が吹いていました。重い雲が空を掩っています。嵐の前みたいです。

私は青垣家の裏手に近寄りました。山林の続きが竹やぶになっていたので五十メートルぐらいまで接近できます。

いなか風の土塀の中に洋館や土蔵が見えました。その向うに霊曜山と浩月山が重っています。弦月城に上る道が林の切れ目に光っています。双眼鏡のレンズをすごい早さで人影が横切りました。嬰一だったようです。

反対側の道から女の人が下りて来ます。焦点を合わせて見ると和服姿の仁視さんです。今日はお休みのはずなのに。

天籟寺から下りる道と弦月城に上る道は交っていません。嬰一は仁視さんに気づくでしょうか。

青垣家の庭に誰かが現れました。よく見ると高校生の娘です。中庭をゆっくり横切って土蔵の中に消えました。家の中にも幾人か見えます。

一度見えなくなった仁視さんが突然現れました。何と青垣家の玄関前でした。男と女が一人ずつ現れて中へ招き入れました。それっきり仁視さんは出て来ません。二時から三時そして四時。どうなっているのでしょうか。

私は待ちきれなくなって竹やぶから進み出ました。そのとたん、私の肩が何者かに軽く

おさえられました。驚いて振り向くと目の前に西洋人の青年と若い女の人が立っています。叫ぶより早く大きな手が私の口をふさぎました。

「奥さん、これ以上見られては困るのです。すみませんが中に入っていただけませんか」態度に似合わずいいいな日本語でした。

二十七、午後四時から五時までの事

「又、お会いしましたね」

四月二十八日の日暮れ時に天霧峠で助けた中年の婦人です。今日は平凡なスーツを着ていました。そして驚いた事に、少しもくせない日本語を話しました。あの時は六カ国語使っても通じなかったのに。

「私は日本語を合わせて九カ国語話せます。わけがあって何も話せない事にしてあります。が。もっとも、あの時は、ついたり乱して母国語を使ってしまったけれど」

母国語？ いったいどの人なのかしら。「少しばかり自信があったし、相手が老人と娘だけだと侮って思わぬ恥をかきました。そこを、あなた方に救われたわけです。おそくなりしましたが改めてお礼を申します」

「で、これがお礼ですか」
せいっぱいの皮肉でした。

立派な応接間。ウインザー風の椅子。私は男のような服装で、その椅子に坐り、両手を背板のうしろに廻しています。重ねられた手首は革紐のようなもので固く縛られ、両足首もそろえて椅子の脚に縛られています。

「あなた自身を危険に近寄せない為には、こうしなければならぬのです。すべては今夜決るでしょう。それがすんだら、すぐお帰し致します。充分な謝礼もさしあげます。あなたの御主人にも」

「え」

「浩月山に上っておいででしょう。今お迎えに行っていますよ」

この家の住人は、母親らしい中年婦人と高校生ぐらいな娘。夫婦のように見える青年と若い女の人。全部で四人だと思います。

その中で人妻らしい若い女の人がさっきから見えます。浩月山に上ったのでしょうか。

「天籟寺に忍び込んだり、私を不自由な目にあわせたり、どんな悪い事をしようとしているのですか」

縛られてしまったら、かえって落ち着きました。しかし相手が余り低姿勢なので幾らか気味が悪いぐらいでした。

「私達は泥棒ではありません。天籟寺のお二

人はいいい方達です。危害を加える気はありません。あのお寺にかくれているもう一人に用があるのです」

「ロジエ博士でしょ」

「よく御存知ですね」

テーブルの脚は蛇。帽子掛けは蛇の頭。女の人のベルトも蛇。蛇ばかり。やはりグノシス派の魔法使いかしら。

「なぜロジエ博士を連れて行きたいの」

「裁判にかける為です」

「何ですって。あなた方は誰なのですか」

「イスラエル人です。私は強制収容所の生き残り。夫婦という事にしてある若い二人は共に収容所で生まれました。私の娘、本当は他人ですが、この四人全部ロジエ博士を連れもどすだけの為に特別な訓練を受けました。みんな肉親の誰かを亡くした者ばかりです。ロジエ博士が発明した薬品の人体実験で」

私は縛られたまま、呆然と女の人を見上げているばかりです。

二十八、午後六時頃の事

縛られはしたが、扱い方はいいねいです。一度解かれ、立派な食事が出されました。高校生の娘がつきそっています。

突きとばして逃げようか、と思ったけれど

やめました。相手は私よりずっと強そうで、この家には男もいるし、犬もいるようです。食事が終わると又縛られました。「母親」が指図して『娘』の方が革紐で私を縛りあげました。十才も年下の娘に縛られるなんて、とてもくやしけれど仕方がありません。でも縛られた順序はよくおぼえておきました。見たこともない複雑な縛り方で、日本の菱縄に似た方法ですが、結び目がどこにあるかは何とかわかりました。網に包まれたみたいで少しもゆるまないのに、腕がしびれるような厳しさの感じられないふしぎな縄目でした。

「今夜一晩だけがまんしていただきます」

私は眼かくしをされ、脇を支えられて長い廊下を引き立てられました。

眼が見えなくなると自然に注意が耳に集ります。雨の音が聞こえました。風も出て来たようです。嬰一はどうしているでしょう。

「階段です。気をつけて」

十二段下って、二十五段上って、風の音が少ししか聞こえない静かな所。土蔵かしら。

私は柱につながれました。縄尻は少し長くしてくれました。その代り足をそろえて縛られました。そして立ち去る足音。戸のしまる気配。錠の響き。

とうとう閉じ込められました。

でも指先は動きます。とけないかしら。

「賀集子お姉様でしょう」

突然呼びかけられました。聞きおぼえのあの声です。

「仁視さん？」

「そうです。やっぱりお帰りにならなかったのですね」

私は声の方からだを寄せました。

「私、縛られて、目かくしされてるのよ。あなたはどうなの？」

「いっしょですわ。縄脱けができると思われているものですから、とても念入りに縛られてしまっ、ゆるみそうにもありません」

「縛られるとわかってるのになぜ来たの？」

「もう一度だけ話し合って、わかってもらいたかったのです。ロジエ博士はユダヤ人虐殺の責任者ではない。あの悪魔的な薬を発明したのは、たしかにロジエ博士だが、ドイツ軍がそれを利用しようとした時には博士自身が中毒して脳を犯され、完全に狂っていたのだと……」

「それがどうして今夜急にこうなったの？」

「あの人達もあせているのです。ロジエ博士の中毒は進行してあと幾月も保ちません。」

生きている間に裁判にかけたいと考えているのでしよう。恐しい執念です」

「その薬というのは？」

「戦場で兵士を勇敢にする薬。とロジエ博士は信じていました。違っていただけ」

「お酒で恐怖心を麻痺させるのではないの？」

「一時的な憎悪、残酷性、兇暴性を増す薬。」

リセンジック酸に近い何か。ところができ上ったものは似ているが全然別なもの。サディストを作る薬だったのです」

「サディストを作るのですって？」

「そう。猫がねずみをすぐ殺さないで、遊んでから食べるあれです。動物本能の一種ですね。サディズムの本質はまだわかっていないけれど。性ホルモンの均衡が破れた時に起る異状心理でしょう。ロジエ博士の薬はたしかに敵を憎む心を起させたけれど、多くのユダヤ人を不具にした後、一層恐ろしい事がわかったのです。この薬を服用すると妄想にとりつかれ、異性に対して兇暴になるのです」

「すると幽霊の正体もロジエ博士だったのですか？」

「そうです。祖父がロジエ博士を連れ帰った時はまだ軽症の方でした。時々は正気で私に魔法の話をして下さったり、手相や催眠術

を教えて下さいました。私も猪峠で亡びた赤萩氏の物語をしました。ロジエ博士は感銘を受けたようでしたが、その内に自分が赤萩一族であるような妄想にとりつかれました」

「よろいを着て歩いたのはその為ですね」

「猪峠で女の人を縛ったのが最初の発作で、女を責めると直るのです。祖父に頼まれて、発作が起る度に私が縛られてお相手をしていました。おとといの晩は私が間に合わなくてとんだ事になりました。祖父は何とか解毒の方法を見つけようとしたけれど無駄でした」

「どうして、あの人達にねらわれるようになったのですか？」

「祖父の前歴を調べたら誰でも怪しみます。あの人達は、ずいぶん時間をかけて調べたようです。応援の人数も来て、首領らしい女の人忍びこみました。祖父がつかまえておいたら、丁度発作を起したロジエ博士がひどい目にあわせた上に逃がしてしまいました。それでもあの人達は暴力を使わず、ていねいに引き渡しを求めて来ました。けれどロジエ博士は頭の狂った廃人なのです。あと僅かな余命を静かに終らせてあげる事が、どうしてできないのでしょうか。裁判にかけるなんて。きつと今頃……」

「逃げましょう。私の縄、なんとか、とけそうよ」

二十九、午後七時頃の事

雨が激しくなってきました。土蔵の中にまで風の音が聞こえます。

今の季節には珍らしく雷まで鳴りだしました。大荒れのようなです。

自動車が出て行く音がしました。誰か一人だけ残っています。

何か一人で言っています。私にはわからない言葉です。きっとヘブライ語でしょう。

高校生の娘のようです。

私は爪の先で結び目をさがしていました。

うしろ手の縄を解くには小指を働かさなければなりません。

私の長く伸ばし、先をとがらせた小指の爪が、ようやく結び目を探り当てました。

爪を突っ込んで、引っ搔いて、廻して、どうやら少し、ゆるんで来たようです。

どの位たったかしら。

遂に手首が別々に動き始めました。

「解けてきたようよ」

「無理をしないで下さい。縄がとけてもまだ先があります。高校生の娘は子供みただけれど私達二人掛っても勝てない位に強いので

す。それに犬もいます」

急に足音が追寄りました。私は驚いて手を休めました。

「毛布をどうぞ」

きれいな、可愛らしい声でした。

「有難う」

仁視さんは素直に受けました。毛布をからだに巻いてもらっているような音がします。

次は私の番。

「怒ってるのよ。ほっといてちょうだい」

私は手首をかくす為に横になりました。

やはり子供です。驚いたのか、私の上に毛布をかぶせただけで立ち上りました。

だけど、一度去りかけて又もどりました。

縄尻がゆるんでいるのを見つけたようです。

柔かく、しかし強い力で私のからだを起しました。私の手首をつかみました。縛り直す

うとしています。今度縛られたら、もうお了いです。私は暴れました。でも腕力が全然違います。その上に足も肩も胸も縛られたまま

です。忽ちおさえつけられました。

もうだめ。

このとたん。私の背にのっていた娘が跳び上りました。何か叫んだようでした。続いてものすごい音。何が起ったのでしょうか。

私はいそいで手首の縄を抜きました。胸から肩へ。手が自由になると、すぐ目かくしを外しました。

土蔵の床いっぱい大きなものが転げ廻っています。それが組み合っている二人の人間であると悟るには少しの時が必要でした。その位激しい争いで、その位早い動きでした。

一人は高校生らしい娘でした。そして、もう一人は、どこから現れたのか嬰一でした。

嬰一の強さと早さ。それはいつも見ています。信頼できるはずのものでした。相手は女

で、それも未成年です。私は助かったと思いました。でも見ていると嬰一が危いのです。

何度も投げ倒されました。組み敷かれては、はね返しました。そして又、下になります。

私はいそいで自分の足の縄を解きました。相手の背に組みつきました。けれど一振り

で突きはなされ、仁視さんの上に倒れました。

「早く、解いて」

仁視さんにせき立てられて解きにかかりました。そして、やっと間に合いました。仁視さんと私と二人がかりで強い娘を後から引き起しました。

疲れを知らない嬰一の持久力が、ようやく盛り返して来たようです。正確な突きが眼の

間に当りました。仁視さんが後から首を締め上げました。

結局、最後に極めたのは仁視さんだったようです。でも、あれだけの乱斗をしたのに、和服の裾は少しも乱れていませんでした。

仁視さんと私を縛ってあった革紐類を、嬰一が集めて来て娘を縛りました。これは美事な手際でした。菱縄に股間縛り。逆エビに締めあげた上、ハンカチ二枚でサルグツワを噛ませ、柱に幾重にも繋ぎました。これなら絶対に逃げられないでしょう。

娘は美しい顔を醜く歪めて気絶していました。

「あなた、どうして来たの」

「あとで話す。それよりも、仁視さん。天籟寺へいそがなくていいんですか」

仁視さんは迷っているようでしたが、やがて首をたてに振りました。

「賀集子。旅館へ走れ。自動車だ」

私達は嵐の中に走り出しました。

三十、午後九時頃の事

電光が闇の道を照らしました。

ものすごい雨が車の窓を洗っています。自動車はおどり上りながら雨の幕を突き破って行きます。天霧峠は、もうすぐです。

「浩月山に上る途中で別の道に仁視さんを見た。仁視さんが、あの家に入った。それから賀集子が連れこまれた。すぐ行きたかったが相手が多いから少し様子を見ていた。すると突然襲われた」

嬰一は、ひとり言のように語ります。

「武器は小石だった。木に当たると枝が折れるような早さで投げて来た。道具は使わず、手で投げたようだ。やっぱり魔法使いかな。とにかく夢中で逃げた。だが逃げながらふと思った。からだに当たらないのだ。これは、おどかしているだけだ、と」

私は聞きながら急な上り坂にアクセルをふみ続けました。

「足をふみ外して五メートルほど下へ転げ落ちた。受身の心得があるから無事だったが、倒れたまねをして、じっと寝ていた。すると静かに近寄った相手が小さな声で言った。けがはありませんか、と。その声は女だった」

天霧峠を越えました。山の峯伝いのような道は吹きさらしです。嵐は吹き荒れ、その中を、しぶきを上げて自動車が突っ走ります。五十キロから六十キロ。重量四十キロの私はハンドルから振りはなされそうです。そのような私を落着かせるように、嬰一は静かに

話し続けます。

「充分引き寄せて突然組み伏せた。腕力ではこちらが強かった。押し倒して、たしかに一巻きだけは縛った。だが逃げられた。崖の下に消えた。落ちたのか飛び下りたのか、それはわからない」

自動車が一台しか通れない泥道の直線コースに入りました。雷光の中に錦繡山が浮き上ってすぐ消えました。

「青垣家から自動車が出て行った。二人乗っている。天霧峠の方へ向った。警察に知らせようかと思ったが止めた。さて青垣家には犬がいる。どうしたものかと考えていたら牝のノラ犬が通った。ビスケットで釣って大切に抱いて行き、玄関から投げこんだ。強そうな犬は三四とも去勢してなかった」

「警察に知らせるのを、よく思い止まって下さいました」

仁視さんが、ため息をついて言いました。

「知らせるひまもなかったが、警官が来たらいいので縄をとき、加害者も被害者も知らぬ顔。あとで続きを始める。狂人扱いされるのはこちらだけ、という結果になるでしょう」

天籟寺の石段まで、あと三百メートル。

あ 危い。急ブレーキ。

自動車は悲鳴をあげて止りました。

ライトを消した自動車がこちらを向き、林から頭を半分出して止っています。誰も乗っていません。もう少しで衝突するところでした。先に出た自動車に違いありません。

私達の自動車は、せまい道巾一ぱいに横向きになり、道をふさいでいます。

「間に合いました。お礼を申します。あなた方は、ここからお帰り下さいませ」

仁視さんが滝のような雨の中へ走り出しました。とたんに目もくらむ電光。たたきつけるような雷鳴。私は耳をおさえました。

嬰一が何も言わずに、あとを追いました。私だけが残っているわけには行きません。エンジンにキーをかけて続きます。

次の電光で仁視さんと嬰一が見えました。驚いた事に、百メートル十二秒の嬰一が仁視さんにぐんぐん引きはなされています。和服姿が石段を飛ぶように上って行きます。

私は泥の中に転びました。靴も飛んでしまいました。服は一分間で泳いだみたいになれました。それでも起き上って走りました。

天籟寺の百段は急流のような洪水です。何度も滑りました。その頭上を電光が突き抜けてきました。

三十一、午後十時頃の事

「君達の言い分もわからぬではない。だがロジエ博士は脳を犯されて廃人同様。あと二た月には保たぬ命じゃ。なぜ畳の上で往生させてあげられぬか」

静かな本堂に和尚さんの声がひびきます。どこから風が入るのか石油ランプの灯が揺れています。暗い方から見ている私達三人に誰も気づいていません。

和尚さんはじっと坐っています。その前に立っている黒い服は中年婦人と青年です。二人とも無言です。

私は始めて幽霊の正体を見ました。あれが人間でしょうか。

真白な顔。それは普通の白さではありません。からだ中の色素を失った透明のような白さです。血管だけが浮き出た眼は真っ赤に見えます。髪も白一色。それでいて手や足は太くて丈夫そうなのです。

真っ赤な眼は空を見つめています。

「どうしてもロジエ博士を連れて行きたいなら仕方がない。わしを殺して行くがよい」

和尚さんが短刀を抜いて自分の首に当てました。相手の二人が動揺しました。

だが、この時、ロジエ博士がふらふらと歩

き出しました。二人が左右から和尚さんに組みつきました。とたんに仁視さんと嬰一が本堂に飛びこんで行きました。

あとはどうなったか、よくわかりません。ものすごい乱斗でした。もう二人、黒い人影が現れたように思います。浩月山の崖から落ちた女が、青垣家の土蔵に縛られている娘を助けてかけつけたのでしょうか。

本尊の薬師如来が倒れました。誰かが壇の床に頭から突っこみます。いろんな物が飛んで来ます。その内に雨戸が倒れ、強い風が吹きこんで来ました。

誰かが私に衝突しました。起き上った眼の前に火柱が立ちました。火の向うによるろと歩いて行くロジエ博士が見えました。

「ロジエ博士」

和尚さんの悲しそうな声が聞こえました。

もう一人、ロジエ博士の後を追って石倉の方へ走って行く姿が見えます。次の瞬間、本堂は一面火の海になっていました。

本堂の屋根に落雷したのか。

石油ランプを倒したのか。

誰かが、わざと火をつけたのか。

恐しい火の早さでした。火の中にやっと嬰一が見えました。誰かと組み合っています。

「賀集子。逃げろ」

相手が走りだしました。山門の方へ逃げて行きます。石段の所で嬰一が足につかみ掛りました。すごい声が石段の下に消えて行きました。

私の髪が空に向って逆立ちます。同時に高い松の上から火柱が吹き上げました。爆発のような雷鳴があたりを揺るがせました。

火の中に倒れている人が見えました。嬰一でした。私は彼を抱き起こし、引きずるようにして三百メートル逃げました。

天籟寺は一とかたまりの火となって燃えくずれるところでした。嵐に吹かれた火は山内

いっぱい渦巻いています。

風のうなり。浴びせかける雨。

小さい私は吹き飛ばされそうです。

どうやって嬰一を自動車に運び入れ、どう運転して走ったか、よくおぼえていません。

なんとか天霧峠を抜けた頃、赤萩町の消防自動車サイレンを鳴らして坂を上って来たように思います。

三十二、昭和四十年五月五日、祝日

水曜日、朝の事

「あなた。新聞よ。書いてあるわ」

「天籟寺の焼けあとから死体が出たか」

「出なかったらしいわよ」

【山原清子、鈴木晃子】SMコンビ・フォト……………

女性対女性の真迫的緊縛演技写真

分譲！

猿轡をされるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円 略号(さる)

強烈に縛りあげられた鈴木晃子の鼻をつまみ口を開けたところへ布片を押し込み、豆絞りの猿ぐつわを無理強いに噛ませてしまふまでの連続組写真である。

縛りあげられるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円 略号(さあ)

屈伏させられるまで

大手札印画紙焼付 二十枚一組 三〇〇〇円 略号(さや)

抵抗する晃子の両手をうしろへ捻じあげて縄をからませ、きりきりと身動きでなくなるまで縛りあげる過程の動きのあるポーズを連続で組写真としました。

「そうだろう。石倉から猪峠には多分昔の抜穴があると思うな」

「すると、あの火事は」

「わざと放火して追跡を防いだんだ」

「相手側も山門へ向って走ったわね」

「抜穴の口へ先廻りしようとしたんだろう」

「警察に、とどけなくていいの？」

「誰が本気にするものか」

「あの人達イスラエルの秘密警察かしら」

「とんでもない。イスラエルの秘密警察は、

すごいんだよ。アドルフ・アイヒマンを誘拐した手際を見てごらん。我々のような素人に

じゃまされて失敗するような秘密警察が有ってたまるか」

「それじゃ何者？」

「グノシス派の魔法結社かも知れないよ。ロ

ジェ博士の知識がほしかったのだろう」

三十三、昭和四十年七月二十五日

日曜日、正午頃の事

嬰一と私は、もう一度だけ錦繡山を訪ねました。

天籟寺は荒れ果てて住む人もありません。

あの事件に関係した人達は、その後、誰一人として現れないのです。

(終)

国際秘密結社「ISSSL」(後編)

河津安春

十一

「タイグレスー〇七」のミス・アリンダ

読み終えた私は、深い感慨に沈んだ。日付けを見れば、ミス・ナンダの報告以来、既に六カ月を経過している。彼女が希望したように「ISSSL」の援助は実現したのであるうか。「青竜九三」との戦いは、未だ続いているのであるうか。マレイ娘達の『タイグレスー〇七』は、血腥い斗いに負けず、果して健在しているのであるうか。私は美しいスルタナの血をひくと言うミス・アリンダに無性に逢いたくなった。

遠い旅の空では、人間はひどくロマンチック

クになるものである。日本に居ては、物好きと笑われ、向う見ずと嘲けられそうな冒険ではあるが、私はアリンダと言う娘に逢おうと決心した。冒険とは思うが、私の心の底には人の好いマレイ人への安心感があった。日本人には好意を有しているし、無暗に人を殺したり傷つけたりする民族では無い。

私は大急ぎで地図を拡げた。パシルパンジャンは東海岸のグノンパダンの山裾にある。コタバル迄マレイ航空で一時間半、コタバルから目的地迄、車で三時間、日帰りは到底無理である。私は帰国の航空機の座席をキャンセルして一日遅らせたのだから、これは物好

きと笑われても仕方が無い。

翌朝、小型の双発機は、涯しも無い密林の上に、鳥のような影を落して飛び続け、コタバルに着いたのは正午前であった。取りあえず、ホテル・プリンスに室を予約すると、勿々に昼食を済ませた。田舎街だからタクシーもそう多くはない。最初に呼び止めた車は、パシルパンジャンと聞くや中国人らしい運転手は首を振って走り去った。次ぎの車は、マレイ人らしい逞ましい青年だったが、暫らく私の顔を見詰めたままドアを開こうとはしなかった。

「何処から来た、トアン？」

「ジッポンだよ」

「何の用事だ、トアン？」

「或る人に逢うためだ」

言葉を交しているうちに、私はパシルパンジャンが予想以上に陰悪な空気に包まれている事を感じさせられた。結局、その車に乗り込んだのだが、南下する海沿いの国道を外れて、西のパダン山に向う頃から、酷い悪路になった。目的地に着いたのは、予定より遥かに遅れて夕方五時頃であった。村の入口で車を止め、私の帰りを待つように頼むと、私は期待に胸を躍らせながら足を進めた。都会に近い村落とは異り、家々は皆、広い前庭を持ち、周囲は椰子の木で囲まれていた。どうした事か人影は更に無く、静まり返った雰囲気がか何か無気味であった。マレイの村に付き物の子供の姿さえ見えないのである。その癖私は無数の目が針のように私に向けられているのを、本能的に感じるのだった。

山に近いこの村は、早くも夕暮の影に包まれて、空気は冷たかった。私は他国の人影を寄せつけない固い防壁を痛い程感じさせられて、後悔の思いがこみ上げて来た。ロマンチックな夢に誘われて、はるばる東海岸の辺鄙なこの山村に迄やって来た自分の物好きを笑

いたくなった。私はこれ迄見て来たマレイ部落と同じものを予想して居たのだ。見知らぬ異国人にも陽気に話しかけてくる男達、恥ずかしげな笑顔を見せる娘達、ワイワイと後を追ってくる子供達。だがこのパシルパンジャンの村は全く異っていた。

村の中央に問題の茶店を見つけた私は、救われた思いで中に入った。一隅に二人のマレイ娘が空っぽの緑宝の瓶を前に置いているだけで、客の姿は無い。私はビールを命じると表の通りを窺ったが、矢張り通行する人影は見えなかった。土産の苦いタイガー印ビールを口にしながら、私は二人のマレイ娘の鋭い視線を感じて居た。意を決して振り向くと、娘達はスッと立ち上って出て行こうとする。今この娘達を逃しては、アリンダに逢う手掛りはもう得られないだろう。私は勇をこして娘に話しかけた。

「私は日本人だが『タイグレスー〇七』のミス・アリンダに逢わせて貰えないだろうか」娘達はゾッとするように冷い瞳で私を観察するのだった。

「テイダ（ノウ）」

素気なく答えると、見向きもせず彼女達は出て行ってしまった。取りつく島もない娘達

の態度に、私は絶望を感じた。とても、ミス・アリンダには逢えそうも無い。そうは思いながらも、私は未練たらしく尚、半時間程坐って居た。夕暗は次第に深くなり、家々に灯りがつき始めたが、新たな客の姿も無く、遂に私は諦めざるを得なかった。そう簡単に逢えると思った私が甘かったのだ。勘定を払うと、私はがっかりして表に出た。とうとう逢えなかったミス・アリンダ。私は不本意な気持ちを振り払うように大きく深呼吸をすると、既に足許も定かでは無い暗い道を戻り始めた。

「ナンテイ、トアン（お待ち）」

いきなり鋭い声と共に、私の両腕は左右から捕らえられた。振り放そうとしたが、娘と判る声の主の力は意外に強かった。背後から黒い布が私の目を覆う。私は口を開いて抗議をしようとしたが、固い肘が私の脇腹に喰い込んで言葉を封じるのだった。索きずられるように歩きながら、私は苦い悔恨を味わっていた。何と馬鹿げた事を思いついたものだろう。このままスングエイケダラに投げ込まれて鰐の餌食にされても、何の証拠も残らないであろう。何処に連れて行くのか知らないが、私の説明を理解してくれるだろうか。『青竜

九三』の廻し者とても邪惟されると、飛んでも無い事になるのでは無からうか。娘達は一言も喋舌らない。只、緊張した荒い息づかいが聞こえるのみである。どれ程歩いたのであろうか。私は小さな階段を昇って、一室に連れこまれたようである。静かに黒い布がとられたが、明るい灯りの下でしばらくは何も見えない。

「妾しに逢いたいと言うのは、貴方ですか」
若々しいが凛とした女の声に、私は慌ててその方を向いた。目が灯りに慣れるにつれて美女の姿が、はっきりと網膜に映じて来た。これがミス・アリンダだろうか。背丈高く、肌がマレイ娘としては白過ぎる以外は、ミス・ナンダの報告書に描かれているように、典型的なマレイ娘だった。只、眼差しが鋭く、大きな引き締められた口は意志の強固を語っていた。

「そうです。ミス・アリンダ」
ホッとして私は笑いかけたが、アリンダの表情は何の動きも見せなかった。

「日本人だと聞きましたが、何かそれを証明するものをお持ちですか？」
急いで内ポケットから取り出した旅券を、アリンダは丹念に調べ、写真と私をゆっくり

と見較べるのだった。

「テレマカシ（有難う）」

パスポートを返えすアリンダの顔に、漸く微笑の影が見えるように思われた。

「御承知かと思いますが、近頃よくギャング団のスパイが入り込んで来ますので、大変失礼を致しました。お坐り下さい」

敷物の上に胡座をかけた私は、見違える程優しい笑顔を見せているアリンダを眺めて、ホッとすると共に、何から話してよいのやら途惑うのだった。

突然訪問した非礼を詫びると、私はミス・ナンダのリポートを不図した事から手に入れたこと、ケドラ女性王国の血をひくと言うミス・アリンダに、どうしても逢いたくなかった事、その為、帰国を延期した事など、一生懸命に話したのだが、アリンダの顔には時々恥じらいの色が現われ、娘らしい風情を見せるのだった。

「ミス・ナンダは本当にお気の毒で御座いました。彼女は妾し達の為に真剣に援助を与えて下さったのです。九フィートの棒を使うインドの棒術、これは広い川原での斗いに素晴らしい威力を発揮しました。それに彼女のタクチック（兵法）は非常に優れていて、『青

竜九三』が他のギャング団と組んで乗り込んで来ました時には、ミス・ナンダの巧妙な作戦で彼等を南部の沼沢地に追いこむ事に、見事に成功しました。お蔭で妾し達は大勝利を収めたのですが、ミス・ナンダは或る夜、背後から短剣で刺され、酷い重傷を受けられました。卑怯な『青竜』の所業です」

アリンダの目に涙が浮かんた。

「妾し達は神に誓いました。ミス・ナンダの敵は、妾し達の手できつと討ちますと。これ迄に忍びこんで来たスパイは五人。皆スングエイケドラに追いこんでやりました。罎達を喜ばせる為です」

アリンダの顔に始めて、秘密結社のリーダーに相応しい冷酷な表情が現われた。

「失礼ですが△ISSSLVからの援助は得られましたか？」

この問いは素気なくはねつけられた。

「貴方には関係の無い問題です」

然し色々話している中に、アリンダは次第に打ち解けて、人の好いマレイ娘特有の明るい笑い声を立て始めた。△ISSSLVからは驚く程多額の援助がある事、近くミス・ナンダの後任者が到着する事が言外に知らされた。『青竜九三』は尚も他の組織と手を組ま

んとしていること、然しタイグレスのメンバーも急速に増加して非常に強化されつつある事等、私には興味つきなかった。

いつか夜は更けて居た。アリンダの好意を謝して暇を告げんとした時、思いも寄らぬ言葉で引き留められたのである。

「御気の毒ですがトアン、貴方をこのままお帰しする訳には参りません」

ギョツとした私の顔から、スーッと血の気が引くのが感じられた。まさか……

「然しもう夜も更けましたし、私はこれ以上帰国を延期する訳には行かないのです」

アリンダは悪戯っぽい笑顔を見せたが、言葉は私の反対を許さない強い響きがあった。

「ホホホ……、そんなにお手間はとらせませんわ。これは妾し達の厳重な規則になっています。言う通りにして頂きますわ。ルピア！支度はいいの？」

驚いた事に、ルピアと呼ばれた娘が持ち出して来たのはカメラだった。三脚、フラッシュ迄揃って居た。

「トアン、カメラの方を向いて横になって下さい」

私は温和しくカメラの方を向いて、固い床の上に横になった。サラサラと衣ずれの音が

して、アリンダが私の背後に立ったようである。ジャスミンの香りが、ほのかに漂ってくる。何事が始まるのか、私は不安を感じてアリンダを仰ぎ見ようとした時、丁度彼女の白い臍が私の顔の上に下ろされて来た。アッと叫んで思わず顔を反向けようとしたが、冷い臍は、つと私の横顔を踏まえて動かさなかった屈辱と反抗の念で全身の血が逆流するようであった。女の足で顔を踏まれるなど、本では読んだが実の所、生れて始めての経験であった。横目で見上げると、アリンダは微笑みながら私を見下していたが、何か輝やきわたる程美しく見えたのである。奇妙な戦慄が私を襲った。衝動的に私は身をもがいたが、それは奇怪な陶醉を隠そうとする私の偽装であったかも知れない。アリンダの足にグッと力が入り、私の顔は硬い板の木目に押しつけられ私の口から苦痛の呻きが洩れた。

「トアン、温和しくして下さいね。でないと飛んでもない事になりますよ」

凄味を帯びたその言葉に、私はだらし無く縮み上った。

「ルピア、用意はいいね？」

次の瞬間、アリンダは厭と言う程力をこめて、私の顔を踏み蹂った。予想もしなかった

残酷な仕打ちに、私はワースと苦悶の声をあげた。フラッシュがその瞬間、閃いた。

アリンダが足を退いても、しばらくは私は起き上れなかった。床に擦りつけられた頬はヒリヒリと痛んだ。仏頂面でのろのろと起き上る私に、アリンダは弾けるように笑い出したのである。

「御免なさい、トアン。妾し達の本拠に入りこんだ男は皆、この写真をここに残すか、スンゲイケダラに骨を残すか、二つに一つの途しかないのです。この写真は訪問者名簿と一緒にに本部に送らなければなりません。トアン貴方が「青竜九三」は勿論の事、妾し達の敵に加担するような行動を取られた場合には、妾しの足の下で大きな口を開いて苦しんでいる恥ずかしい貴方の写真が、最も効果的な方法で公表される事をよく承知しておいて下さい」

私はネガに残されたであろう醜惡な私の顔を想像して、額に汗が滲むのを感じた。マレイのこんな場所で、こんな経験をしようとは予想もしない事であった。

辞去する時、私はアリンダに尋ねた。

「貴方はスルタナの血をひいて居られるとの事ですが、パダンの山奥にはケダラ女性王国

は今も健在している訳ですね」

「妾し達は山を下りましたが、未だ多くの人々が残っています。サロマ様は白い坊主との間に一人の女兒をもうけられました。その血は今も引き継がれています」

私は暮れ果てた夜空に、マレイ第二の高峯と言われるパダンの巨大な影を仰ぎ、今も尚女王を頂いて忠誠を守っているケドラ人民の後裔の上に、幸多からんことを心より祈らずには居られなかった。

十二

東洋史教授 茶谷博士

日本に帰った私は歴史にも記載されていないケドラ女性王国について、何とかして専門家の意見を質し、その実否を確かめたいと思った。幸い友人の紹介で、K大学の歴史学教授茶谷博士を、その研究室に訪ねる事が出来た。博士は五十代の半ばであろうか、頭髪は既に半白であったが、顔は艶々と青年のように若々しかった。私が短刀直入にケドラ女性王国の真偽を質すと、どうした事か、博士の目は警戒するように、じっと私を見据えたのである。

「貴方は一体どこで、そんな名を聞かれたのですか？」

私がクアランプールの印度人古書店で、

ケドラ女性王国に関する資料を入手した事を告げると、博士は何か深く考えるかの如く私の顔を眺めに。疑惑の色は未だ拭い切れないようであった。

「そうでしたか。ケドラ女性王国に関しては貴方も推察されるように、正式な記録は焼却されたか、破棄されたのでしょうか。その存在を証明するものは何一つ残っていません。ケドラ州第八代のサルタンの死後、どう言う訳か後継者が選定されず、三人の大臣の合議に依って政治が行われた事になっています。そして六年の後、何の理由も記載されず隣国に合併されているのです。」

これは私個人の意見ですが、ケドラ女性王国は実在したものと考えています。しかもその後裔は今も尚、グノンパダンの奥に別天地を形成していると信じて居ます」

私は嬉しかった。ミス・アリンダの言葉は本当だったのだ。私はその女性王国の女王の血を引く美しいマレイ娘と話合ったのだ。私の頬に微笑が浮ぶのを見ると、博士は笑い出した。

「世界中の学者も気付かない、そんな古い記録を見付けだすとは、貴方も余程、古書漁り

がお好きですね」

「いえいえ、これはまったくの偶然だったのです。それよりも博士こそ、古書漁りがお仕事と結びつくのですから、私などから見れば羨ましいと思います」

「仕事となれば、そう一概にも言えません。然し私は恵まれた方で、世界各国の図書館を歴訪して、その秘密文庫まで閲覧する機会を得ました。その点非常に幸運であったと思っています」

「秘密文庫と言いますと、あのエロチックな……」

「ええ、そうです。大英図書館では『秘宝の部屋』と呼ばれていますね」

「秘宝は一般市民には公開しないとは皮肉ですね」

「全く。もっとも巴里の図書館では秘宝とは反対に『地獄の部屋』と呼んでるのですよ。色々、変わった名称がつけられています。米国のイェイアナ大学の図書館では『狂気の部屋』。米国軍医図書館では『桃色のケース』とか『桜んぼの戸棚』。ハーバード大学では『地獄の穴』、米国会図書館は文字通り『デルタ』、紐育図書館は『檻』、それぞれ受け取り方が想像されて面白いですよ。所で、

この種の蔵書が一番多いのは何処か御存知ですか？」

「さあ、ロンドンかパリ、いやニューヨークですかね」

「いいえ、意外な事にカトリックの本山、バチカン宮殿の図書館で、蔵書二万五千、版画十万枚と称しています」

私は驚嘆すると共に、自由にそのような図書が閲覧出来る博士が羨ましかった。

「大学教授には、その様な特典が与えられるのですね」

「いいえ、とんでも無い。吹けば飛ぶような我々学究に、そう簡単に門戸は開放してくれませんよ。私の場合は幸いにして紹介者が非常に有力だった訳です」

「日本政府の何か……？」

「いや、アメリカのある団体なんです。△ISSSLVと言いましてね。この紹介状は非常に有効でした」

私は一瞬、ポカンとして博士を見つめた。

「一寸待って下さい、博士。今、何と言われたのですか。確か△ISSSLVと仰言ったように聞こえましたが」

博士の顔に動揺の色が流れた。

「ええ、それが何か……」

失言を悔いるような博士の態度にもかまわず、私は破裂したように喋舌り出した。アルビオン誌の事、トーマス・ライトの対談記事の事、ミス・エレオノーラ・パーカーの話の中に△ISSSLVの名が口にされた事、ミス・ナンダ・ラジャシニの報告書の事、タイグレス一〇七とそのリーダー、ミス・アリンドラの事、わざわざミス・アリンドラに逢いに行き目的は果したが、彼女に顔を踏みつけられて写真をとられた事等々々。

呆ッ気にとられたように聞いていた博士は最後のミス・アリンドラに顔を踏みつけられた所で、愉快そうに笑い出した。

「そうでしたか。それじゃ貴方も、△ISSSLVの実験会員と言う訳ですね。その写真は本部から全世界の支部にコピーが送られる筈ですよ。貴方のパスポートのようなものですね」

「博士！ 今、私もと仰言いましたが、もしや博士も……」

笑いながら博士は頷いた。

「どこで博士は写真を？」

「私の場合は紹介状を貰う為に、バハマでした」

妖精のようなエレオノーラの白い姿が私の

脳裡をよぎった。

「そ、それでは博士、貴方の顔を踏みつけたのは……」

「そうです。ミス・エレオノーラ・パーカーでした」

宝石を鏤ばめた銀色の靴で、博士の顔を踏み蹂躪しているプラチナブロンドの美女を思い浮かべると、私の胸の鼓動は激しく高鳴るようであった。アリンドラも美しい女性だったがあの残酷で傲慢なミス・エレオノーラに踏みつけられた博士は、私より遥かに幸せであろう。（御免なさい、ミス・アリンドラ）

博士が△ISSSLVと何か特殊な関係にある事が想像された私は、夢中になって種々質問を続けたが、事△ISSSLVに関する限り、博士の口は牡蛎のように固かった。すっかり落胆した私を気の毒に思ったのか、博士は思いがけぬニュースを知らせてくれた。「アルビオンのトーマス氏のことは御存知ですね。あの夫妻が数日中に羽田へ着く予定です」

「へえ、アルビオン誌の特派員と言う訳ですか？」

「いや、トーマスさんは、アルビオン社を止めましたよ。今度の来日の目的は、アイリン

夫人が、『レディズ・ジャーナル』の為に、日本女性の社会的地位向上に就いて調査する事になっているのです。トーマスさんは、夫人の秘書兼助手と言う所でしようね」

私は呆然とした。あれ程頑強に男性のプライドを固守していたトーマス氏が、どうして妻のアイリン夫人の助手に甘んじるようになったのであろう。対談の中のミス・エレオノラの言葉が浮かんでくる。

……トーマスさん、御用心なさいましね。

貴方が妾し達の組織の最初の血祭りにあげられないように。だって貴方の固守される男性のプライドとやら言うものは、妾し達が先ず何をおいても打破しなければならぬ目的の一つですからね。……

「博士。まさかトーマス氏がバハマの訓練所で洗脳されたのではないでしょう」

「所がそうなんです。トーマスさんは変な行き掛りから四週間余り、そこで訓練を受けました。いや、受けさせられたと言うべきでしょう。アイリン夫人が密かにミス・パーカーに依頼したのです。結果は今お話しした通り彼は完全に生れ変わったのです」

博士は一冊の小冊子を取り出した。「ここに彼の訓練の記録があります。秘密で

すが、貴方は既に実験用会員だから御覧に入れても宜しいでしょう」

私はこの記録によって、バハマの訓練所、いや、彼女達の言に依れば奴隷養成所の内部の、ごく一少部分を始めて知る事が出来たのであるが、特に許可を得て皆さんにお伝えしたいと思う。

十三

トーマス・ライトの訓練記録

記録はアイリン夫人より、ミス・エレオノラに宛てた手紙から始まっていた。

一九六五年九月二十一日。

親意なるエレオノラ

覚えていられるでしょうか、妾しの良人トーマス・ライトを。数年前、*「アルビオン」*

誌の記者として、貴女と対談した男です。あれ以後も、彼のジャーナリストとしての仕事は、世間的に全く認められず、悶々としています。近頃では妻である妾しに対する劣等感が益々募って行くようで、まるで聞き分けのない子供のように、妾しに反抗し喧嘩を吹きかけようとしています。

彼のその気持ちは判らないではありませんが、度々重なりますと少し煩く感じます。もうこの辺で、ジャーナリストとしての彼の能

力の限界を悟らせ、妾しと彼との間の正当な位置を教えてやって、無用な苦悶から解放してやってもいいのでは無いかと思います。

妾しの現在の収入は、週給一二〇〇弗で、別に助手手当三〇〇弗を支給されていますのに、トーマスは三流雑誌の記者として僅か一八〇弗の週給に過ぎません。それで妾しにたてつくより、妾しの助手となって三〇〇弗を支給され、完全に妾しの支配下に入って安住する方が、彼の為に遥かに幸福だろうと思うのです。

彼に適した訓練コースを一度御研究願えませんか。

貴女の御協力を心より感謝しつつ、

貴女の アイリン ライト

その返事

一九六五年九月二十六日。

親愛なるアイリン

お手紙拝見しました。

お話のトーマスさんの事はよく覚えています。気が弱い癖に、女に対しては傲慢な態度を装い、能力も無い癖に、女を軽蔑しようとする典型的な俗物の印象を受けました。

一度テストをしないと、正確な所要訓練日数は申し上げられませんが、妾しの見た所で

は、精々、三―四週間もあれば充分ではないかと思ひます。貴女の仰言る通り、彼に貴女の眞の姿を教え、貴女を支配しようとする大それた努力から解放してやるのは、本当の慈悲と言うものでしょう。

一度彼を連れてバハマにいらっしやいませんか。早い程、彼の為にも幸福と言うものです。

貴女の エレオノーラ・パーカー

その返事

一九六五年十月二日

親愛なるエレオノーラ

早速御親切な御返事を頂いて有難う。

どうしてバハマに連れて行こうかと思案していましたら、機会は先方から近付いて来ました。昨夜の事です。

トーマス「アイリン。俺は一度バハマに行こうと思うんだ。お前も知ってるだろう、あのアムール化粧品会社の新入社員養成所を」

妾し「ああ、あの男性奴隷養成所のこと」

トーマス「奴隷だって？ ひどい事を言うなよ。新入社員を訓練するのさ」

妾し「アラ、だって妾し達女性仲間では皆そう呼んでるわ。凄いいき目ですって。ほらデスクのイサベラね。若いボーイフレンドが

とても生意気になったので、一カ月バハマに送ったのですって。そしたら貴方、どうでしょう。効果適面、この頃ではイサベラの靴の底にだってキスをするし、もし尻っ尾があったら喜んで振るだろうって笑ってたわ」

トーマス「ひどい女だ。きっと何か非人道的な訓練をやっているに違いないんだ。俺はそいつを暴露してやりたいんだ。世の男達に気をつけろと警告してやりたいんだ。ショッキングな記事になると思うがどうだろう」

妾し「素晴らしいヒットになるでしょうよ。

でもエレオノーラに言わせると、特別な訓練なんて、何一つしないと言ってたわ。只、男性の心の奥深くに、社会的慣習で抑圧されている女性崇拜の念を、極く自然に引き出してやるだけですって」

トーマス「くそっ、生意気な女社長め。俺はやってやる。あの傲慢な仮面を、きっと引きはがしてやる」

気を悪くしないでね、エレオノーラ。彼の言葉を正直にそのまま書きましたの。こう言う訳で、この週末に良人と一緒に伺いしますから宜ろしくね。

トーマスには、妾しは一泊して帰ると言っておりませんが、あの秘密の観察窓から彼の訓

練状況を是非見たいと思っていますの。詳しい事はお目にかかってから。

貴方の アイリンライト

十三

トーマス・ライトの告白

次にトーマスの告白が綴られているが、彼の名の上には、赤インキで「実験男子八七二号」と書かれて居た。

……アムール社から差し廻されたミス・パーカーの自家用機でバハマに向う途中も、俺は今度の暴露記事の計画に、武者振るいするような興奮を抑える事が出来なかった。男性奴隷養成所などと、仮令冗談にもせよ女仲間と言ひ触らせるとは、男性の名誉にかけても看過する事は出来ないではないか。今に見るがいい。俺のペンで徹底的に叩いてやる。

(アイリン夫人註、今迄に見た事も無い程のトーマスのハッスル振りだった。可哀そうなトーマス。何がバハマで貴方を待っているかを知れば、どんな顔をするだろう。何も知らないトーマス。妾しがISSSLの会員だとは夢にも知らないのだ。張り切っているトーマスが、少し可哀そうに思われた)

バハマの空は澄み切ったコバルトブルーだった。さんと降り注ぐ明るい太陽は、飛行場のよく手入れされた芝生の濃い緑と、思

わず心の和むような美しいコントラストを見せていた。その汚れの無い自然の中に、俺達を出迎えてくれた五人の女性、ビキニ姿の上に腰迄のビーチコートをはおった単純な姿が何と活々と美しく見えた事だろう。小麦色に日焦けた脚は、俺の目を釘づけにする程綺麗な曲線を見せているのだ。アイリンの自慢のテイラードスーツが却って野暮ったく見える程、ここでは自然が美しいのだ。

エレオノーラに紹介されて、彼女等の一人一人と握手をしたが、魅惑的な笑顔に似げない強い握力で、ギリシアの昔のアマゾンを思い出させるだった。

対談の時とは異なり、エレオノーラは非常に愛想がよく親切であった。訓練所視察の俺の希望にも、快ろよく承諾の意を示した。

「トーマスさん。御希望が御座いましたら、何でも御遠慮無く仰言って下さい。出来る限りの協力を致したいと思えますわ。どんなルポが出来上るか本当に楽しみにしています」

何だかエレオノーラに対する是れ迄の反感を好意に置き換えたくなる程、彼女の態度はフランクで親切だった。アイリンがバハマを離れる迄の二日間、エレオノーラは殆んど俺達夫婦に付きっきりでサーヴィスをしてくれ

たのである。

「トーマス。送ってくれなくとも結構よ。貴方は早くお仕事にかかりなさいな。成功をお祈りするわ」

アイリンは優しい言葉を残して紐育に帰って行った。俺は只一人、美女の群の中に残されて、何やら始めの意気込みも萎えしむ思だった。

「トーマスさん。残念ですが今日はどうしても手離せぬ仕事がありますので、お相手が出来ませんわ。代りにポーラをお付けしますから、何処なりと御自由に御覧下さいね」

「有難う、ミス・エレオノーラ。まる二日もお手をとって全く恐縮でした」

ポーラは飛行場に出迎えてくれた五人の中の一人で、身長は一米八〇位だろうか、俺と殆んど同じ位である。ブルウネットの南欧系の美女で、黒い瞳が強力なマグネットのように、俺の心を引きつけた。ビキニにビーチコート、それにサンダルと言う姿は、ここでの制服のようであった。

「トーマスさん。では手近かな一二一号室から御案内致しますわ」

スポーツで鍛えたらしいポーラの強靱なバネのような肢体に随って行く俺の姿は、視察

者と言うより恋の囚人と言った方がよさそうだった。

一二一号室は本部の地下室への階段を下りた最初の部屋であった。二十坪程の窓も無い板床の部屋で、異様なのは腰板が全部鏡になっている事だった。部屋には不似合な豪華な椅子が一つ、ポツンと置かれ、その椅子の脚から四米余りの細い革のベルトが延びており先きには犬の首輪がついている。首環の置かれた床の辺りに、一本の白線が描かれているだけで、他には何も無かった。

「これが訓練室ですか？ 何も無いじゃありませんか。こんな所で一体、何の訓練が出来ると言うのです？」

もう少し変わった施設を期待して居た俺の声は、苛立たしく聞こえたのだろう。ポーラの頬の微笑がスッと消えるのが見えた。

（アイリン夫人註・トーマスの声に、妾はは急いで低い椅子を壁に近付けました。腰板の鏡の背後から向うは筒抜けに見えるのです）

トーマスの軽蔑したような言葉に、一瞬、ポーラの顔は引き締まりましたが、トーマスの方を振り向いた時には、魅するような笑顔でした。エレオノーラの話では、ポーラは全米大学陸上の五種競技のチャンピオンだった

それで、長身の肢体には一片の無駄な筋肉も無く、まるで有能な機械のように均斉がとれて居ました。

「この部屋では、トーマスさん。男性に不必要な自尊心を消去するのです。一度お試しになりませんか」

「御免蒙りますよ、ポーラ」

慌てて二三歩、ポーラから離れようとするトーマスの腕を、ポーラはしっかりと捕らえました。

「宜しいじゃありませんか、トーマスさん。貴方はこの暴露記事を書く為にいらっしまったのでしょうか？ それなら御自分で体験をなさった方が、迫力があって面白いのじゃありません？」

トーマスの顔が少し蒼ざめるのが判りました。彼の腕を捕えているポーラの鋼のような強靱な力、押しつけるような語調、本能的な不安と恐怖が彼を襲ったのでしよう。跳ね上るような勢いでポーラの腕を振り払うと、トーマスは扉に突進しました。

「ホホホ……。どうなさいましたの、トーマスさん。そこは自動扉で開きませんのよ」

ポーラは少しも急ぐ風もなく、ゆっくりと然かも計算された最短距離を歩んでトーマス

に近付きました。彼の口が大きく開いて、ワツと動物のように叫ぶと反対側に逃げましたが、ポーラは振り返ると、又しっかりとした足取りで迫りました。見ていると、まるで罠にかかった兎を捕えるようでした。この追っかけっこの遊びは、十分余りも続いたでしようか。必死の激しい運動に、トーマスの呼吸は苦しげに乱れていましたが、ポーラの方は憎らしい程平静で、微笑さえ浮かんでいるのです。

「糞ッ、俺をどうしようと言うのだ。扉を開ける！ 開けないと……」

トーマスは歯をむいて、ポーラを突き退けようとしたが、こんな事に慣れているポーラは、その手を取ると苦も無く逆にねじ上げました。苦痛と恐怖に顔を歪めるトーマスには頓着せず、白線の所まで引きずって行く、首環を取り上げてその首にはめようとして、然しトーマスはもう夢中で首を振り、力一杯もがきますので仲々旨く行きません。一寸舌打ちをしたポーラは、軽く足払いをかけてトーマスを床に捻じ伏せると、その背に膝を乗せてグイと押しましたが、急所を押さえているのかトーマスは叫び声をあげるだけで、身体はピクリとも動きません。ピチッと

鋭い音がして首環が取りつけられると、ポーラは赤子でも扱うように彼の衣服を剥ぎとり悠然と立ち上りました。

「無駄な事はわかりきっていますが、トーマスさん、御遠慮は要りませんから、気のすむ迄、思いっきりお暴れになっても構いませんのよ」

ポーラはビーチコートを投げ棄てると、王座のように豪華な椅子に腰を下し、高々と脚を組みました。黒い瞳はじっとトーマスを冷く見つめています。手には椅子の背から引抜いた長い皮鞭が握られていました。美女に捻じ伏せられ、無理矢理、首環を取りつけられたトーマスは、跳ね起きるや、目を怒らせてポーラに向って突進しましたが、彼女の鞭が一瞬早く、トーマスの脚に捲きつきました。反動でトーマスは宙に一回転して床に叩きつけられ、暫らくは起き上れないようでした。「さあ、トーマスさん。温和して白線まで退りますか。それ共、鞭の味をもう少しお望みですか」

（ポーラの声は静かで優しくかったが、倒れたまま動こうともしないトーマスに、鞭は風を切って振り下されました。二度三度、次の鞭は鋭い音を立てて、トーマスは飛び起きまし

た。齒がみをしながらポーラを睨みつけましたが、鞭が再び振り上げられると見るや、首を垂れて、よろよろと白線迄退るのです。強情なブルドッグの仏頂面を見るようで、妾しは思わず声をあげて笑い出しました」

俺はこの女の鞭に脅かされて、白線まで退った自分に腹を立てた。隙があればこの女を叩きのめしてやろう。俺は裸かに剥かれて首環をつけられた屈辱感と、鞭打たれた憤怒に身体がブルブル震えるのだった。

「本当を言いますとね、トーマスさん。ミス・エレオノーラに始めっから、こうするように命じられていましたの。ええ、ここで貴方の男性の誇りとか言うものを、徹底的に除去するようになってね。ですから妾しは忠実にその命令を守らなければなりません。お判りですわね。妾しのこの訓練が三日で終るか、或いは一週間を過ぎても未だ終らないか、それは皆、これからの貴方次第と言う事になりますわ。幾ら永くなくても、妾しの方は少しも構いませんのよ。」

先ず始めに申し上げて置かなければならぬのは、トーマスさん。この部屋に這入ったからには、外の世界の慣習はすっぱりと忘れて下さいと言う事です。ここには今迄、貴方

を束縛していた一切の社会的な規範も法律も存在しないのです。あるのは貴方に下される妾しの命令と、貴方を罰する妾しの鞭だけなのです。宜しゅう御座いますね。

では、手と膝をついて、白線の上に四つ這いになって下さい」

俺は膨れっ面をして、不貞腐れたように突っ立ったままだった。四つ這いだとか？フン、犬じゃあるまいし。これがあの女社長の手なんだな。そう簡単に俺を奴隷に出来ると思ってくれるなよ。俺は全身に力をこめて反抗の身構えをしたが、ポーラと言う女は、実に巧い鞭の使い手だった。別に力を入れる気配も無く、軽い手首の屈曲の具合だけで、鞭は俺の皮膚を切り裂き、或いは肉を叩き潰すように強弱自在に襲ってくるのだった。俺は堪えた。齒を喰い縛って堪えた。俺のこの苦痛に引き換え、ポーラの方はまるでスポーツでも楽しむように、笑みを浮かべながら鞭を振っているのだった。

「さて、いつ迄頑張れるでしょうかね、トーマスさん。貴方がどれ位、堪え忍ぼうと、どんなに叫び声をあげようと、妾しは平気ですわ。鞭を振るう回数が、少し増えるだけですものね。もう少し効き目を強くして見ましょ

うか」

次の鞭は俺の腹に捲きついて、俺の口からは押さえ切れぬ苦痛の呻きが洩れた。鞭は俺の皮膚の柔い部分のみを覘って来た。息を止め、口を開き苦痛を少しでも柔らげんとする俺の努力を木ッ葉微塵に叩き潰す程、苦痛は大きくなった。もう立って居る事も出来なくなり、遂に俺はその場に手をついた。

部屋の腰板の鏡は何の為に取付けられているのか、今始めて俺は了解した。どちらを向いても、首環をはめられ、犬のように四つ這いになっている惨めな俺の姿があった。その犬は鞭打たれて油汗を流し、口から舌を垂れて激しい息使いに胸を浪打たせていた。鏡は調教される男に、厭でも犬に等しい己が姿を見せつけ、遂には男がこの美しい女の前では一匹の犬に過ぎないのだと自覚せしめる為のものなのだ。

ピシッ、鞭は俺の身体すれすれに床を打った。ピクッとして俺は、ポーラの冷然たる顔を見上げた。

「これから妾しが命令します。それに貴方が服従しようがしまいが、一切貴方の自由ですわ。でもあんまり強情を張ると、鞭の痕が半年も消えない程強くなるかも知れません。こ

れだけは御注意しておきます」

世間話でもするように平然とここまで言う
と、ポーラはきつと声を高くした。

「カム！（おいで）」

俺は迷った。鞭が直ちに俺の背を襲ってき
たが、こんな若い女に、おいでと言われて四
つ足で走り出す気には、どうしてもなれな
かったのだ。鞭は次第に強くなって来た。痛
みも堪え難い程激しくなった。今はこれ迄と、
二三步前に進む俺の手に鞭が捲きつき、グイ
と引かれると堪らず、俺は無様に横倒しにな
った。ポーラの平静な声が聞こえてくる。

「さあ、もう一度白線に戻って」

十度、二十度、何度も何度も転倒するうち
に、漸く俺にも判って来た。ポーラは只、来
ることだけを命じているのではない。その命
令は迷いも躊躇いも無く、直ちに実行されな
ければならないのだ、俺は身心の疲労を強く
感じた。反抗する気力も次第に薄れて行くよ
うであった。

「カム！」

その声に応じて、思いがけなく四つ足で走
り出している自分自身に俺は驚ろいていた。
だが慣れない四つ足の事とて、ポーラの足許
で又、転倒したが、彼女は軽く笑っただけで

怒りの色は見せなかった。

「まあまあですわ、トーマスさん。さあ、白
線まで退って」

この単調極まりない訓練を、幾度繰り返
えすと言うのだろう。小娘の癖に深かぶかと
椅子にふんぞり返えったポーラは、口の先き
で命令を下し、犬のように俺を鞭打つだけで
いいのだが、大の男の俺は、どうだと言うの
だ。たった一言の命令で、汗を流して四つ足
で走り、遅いと言っては鞭で打たれ、又白線
迄退って女の命令を待つ。何故俺がこんな馬
鹿げた真似をしなければならぬのだ。何故
こんな小娘の命令で、惨めな四つ這いの恰好
で走り出さなければならぬのだ。身体中の
節々がミシミシと音を立てる程疲れ切ってい
るこの俺が……。カッと血が頭に上ってくる
ようだった。

「カム！」

涼しい顔で易々として命じるポーラを、俺
は睨みつけた。大の男一匹を、そうそう顎で
追い使えると思うのか。さあ、俺を走らせて
見るがいい。俺は満身に憎悪を見せて、精一
杯の反抗を試みた。ポーラは、だが眉毛一筋
動かさなかった。軽く手の鞭が上がる。俺は
手足を突っぱり後方へ避けようとした。パチ

ッとかでスイッチの音が聞こえたかと思
うと、首環につけられたベルトが猛烈な力で
引っ張られた。踏んばろうが、もがこうが、
ベルトを引く力は少しも弱まらず、気がつい
た時は、俺の首環はポーラの椅子の脚に固着
して、俺の顔は床をなめんばかりに押しつけ
られたまま、身動きも出来なくなっていた。

「ホホホ……。吃驚りなさったでしょう。妾
の命に背き、鞭を避けようなどと不心得な
気持ちを抱くと、モーターのスイッチがはい
ってベルトを捲きとるように成っています
の。反抗の罪は重く罰せられますのよ」

立ち上ったポーラの鞭は痛烈だった。俺の
目の前が暗くなり、獣のように俺は呻いた。
「さあ、もう一度白線にお退りになって」

ポーラの言葉は優しいが、その手の鞭は瞬
時の躊躇も逡巡も許さなかった。傷付いた俺
の背中、軽い一打ちにも飛び上る程痛むの
だった。俺は走った。繰り返えし繰り返えし
走った。まるで脳味噌の無い犬のように夢中
で走り続けた「カム！」と声が耳に入るや、
俺の思考とは関わり無く、手足は反射的に走
り出すのだった。

「未だ動きが少し鈍いようですが、最初の日
にしては上出来ですわ。トーマスさん」

俺はポーラの足許に四つ這いのまま、阿呆のように彼女の賞詞を聞いていた。ポーラは赤いサンダルを振り落とすと、ピンクのベデキユアをした足を俺の顔に突きつけた。

「キッス！」

思いも寄らぬ命令に、俺はポカンと彼女を見上げた。キッスしろだって？ この足に？ だが鞭が激しく俺の背に鳴って、俺の迷いは一瞬の内に叩き出されてしまった。無器用に、のろのろと唇を差し寄せたが、俺の口はポーラの足で押し退けられた。

「不可せんわ、トーマスさん。さあ、白線にもう一度戻って」

再び訓練が始められた。今度は俺も躊躇しなかった。キッスと命じられるや、飛びつくように、ピンクの爪先きに唇を押し当てた。するとどうだろう。魅するようなコロンの香りが、まるで奇跡のように俺の口中に広がって行くではないか。激しい訓練に身も心も疲れ果てた今の俺には、ポーラの足の甘い香りは、死者をも甦らせる天上の霊薬とも思われるのだった。俺は大きく息を吐き出すと、鼻孔を一杯に膨らませて、もう一度芳香を胸一杯に吸いこもうとした時、ポーラの足は邪慳に俺を蹴り退けた。

「形はまあ、それで宜ろしいでしょう。でも何かが欠けていますわ。判りますか？ トーマスさん。貴方は今、妾の足にキッスをしながら、心を酔わせるような喜びを感じましたわね。それなのに貴方は、どうして、その恩恵に感謝の意を示そうとなさらないのです。いえ、それ所か貴方は更にそれを貪ろうとさえしました」

ポーラは傲慢とも見える無頓着さで、再び足を俺の前に差し延ばした。

「与えられた恩恵には、素直に感謝の意をもって応えるべきですわ。そうではありませんか？ トーマスさん。キッス！」

俺はもう、彼女の意のままに動くブードルも同じだった。恭々しく可愛い足を捧げ持つと、感謝と尊敬の思いをこめて口吻けた。綺麗な爪先きから又、芳香が口中に満ちて、俺を夢の世界に誘いこむようだった。だが、その陶酔は、ポーラの強い一と蹴りで無残に破られた。

「トーマスさん。妾が貴方にキッスと命じたのは貴方を喜ばせる為でも無ければ、貴方を酔わせるつもりでもありません。妾が要求したいのは、妾の足にキッスを命じられると言う事自身を無上の恩恵と感ずるようにな

って欲しいのです。ですから妾の足にコロンの香りが無くても、いえ、たとえ泥に汚れていても、貴方は口吻けを命じられる事に深い恩恵を感じなければ、不可なのです。判りますわね」

ポーラの言葉の一つ一つが、今は俺の疲れ果てた心に素直にしみこんで行くのだった。そうだ、ポーラの如何なる命令もすべて、俺にとっては恩寵となるのだ。それからの訓練は、最早俺には苦痛では無くなった。カム！と命じられると俺は嬉々として四つ這いで走った。彼女の足許で期待に震るえながら、キッスの命が下るのを待った。だから何度目かのキッスの後で、リック！（おなめ）と新しい命令が下された時も、俺は少しの躊躇もしなかった。いな、喜びに胸を躍らせながら彼女の白い臍に舌を押し当てた。

（アイリン夫人註・トーマスが嬉しそうにポーラの臍をなめているのを見ると、妾は不思議な興奮が身内に沸き上るのを覚えた。もし今、妾がポーラの代りにあの椅子に座って、リックと命じてやったら、トーマスはどんな顔をするだろう。妾は臍に蠢くトーマスの舌の感触を想像して見震いをした。いいよ、トーマス。待っておいで。その内にゆっ

くりと妾しの臍を味わせてあげようね」

一体、幾日、この訓練は続けられたのだらう。昼も夜も判らぬ此の地下の一室で、俺は只、走り、口付け、なめる単調な運動を、無限と思われる程繰り返した。ポーラの命令に、間髪を入れず従い、忠実にそれを実行する。それ以外、俺の頭には何一つ無いようであった。既にコロンの香りも無くなったポーラの足指を痴呆のようにほうばっている俺を見下してポーラは笑いながら言うのだった。

「よく出来ましたわ、トーマスさん。これまでの男達と比較しても、貴方は非常に良い成績と言えますわ。きっと貴方には優れた素質があるでしょうね。この部屋での訓練は、これで終わります。お目出度うと申し上げますわ。トーマスさん。では次の訓練が貴方をお待ちしていますから、しばらくお別れ致しましょう」

ポーラは首環からベルトを外すと、俺を部屋の隅に連れて行った。彼女がボタンを押すと、俺の目の前に、高さ一米足らずの通路が現われた。

「この廊下を、どこ迄もお進みなさい。行き止まりになる迄ね。では又お目にかかりましょう。この三日間の訓練は、妾しにも大変楽

しいもので御座いましたわ」

俺は只、ポーラに鄭重なキスをすると、四つ這いのまま暗い通路に身をいれた。

十四

トーマス・ライトの告白(続)

俺は暗い通路を這って行った。突然、目の前に壁が下って通路を閉じたかと思うと、右側にスツと通路が開かれる。右に左に何度か曲折すると、天井のひどく低い部屋に入りこんだ。高さは精々四〇糎位であろう。もう四つ這いでいる事は出来なくなって、俺は腹を床につけ、蜥蜴のように身体をくねらせて進まなければならなかった。通路はもはや開かなかった。天井から差しこむ薄明の中で、俺は辛うじて寝返えりを打つと、疲労の為、眠ったようであった。

突如、目蓋に強い灯りを感じて俺は目を開いた。目眩むような白光に、始めは何も見えなかったが、次第に目が馴れるにつれて、俺は自分の置かれた位置を理解するのに苦しんだ。天井は総ガラスであったが、やがてそれは上の部屋の床である事が判った。俺はガラスの床を持つ部屋の床下に、爬虫類のように長く延びているのだ。部屋に配置された家具類を真下から見上げる異様な倒錯感と、その

家具類が皆、透明なプラスチックで造られ、華美な色彩を透映しているため、何かこの世ならぬ別の世界のように思われた。突如、視野の中に、ビキニ姿の女性が出現した。こうして真下から見上げる女性の身体は、太く逞ましい二本の円柱、その上の巨大なヒップ、まるでフェアリーテイルの女巨人のように見えた。

女は傍若無人な態度でドンと椅子に腰を下すと、足を一と振りして赤いサンダルを跳ね上げた。俺は慌てて不自由な身体で、その下に這い寄った。飛行場で紹介された赤毛のミス・アグネスに違いなかった。俺がガラスの床の下で、蜥蜴のように這い廻っているのは承知の筈のアグネスだが、少しも気にする様子も無く、両腕を首の後ろに組むと、伸び伸びと上体を横たえ、足でリズムを取りながら何か小声で歌っているようだった。俺の顔の上、十糎と離れぬ所で、白い臍は生き物のように動いているのだ。屈伸する度に、臍が色々と変化する表情を示すのを、俺は夢中で見上げた。

ポーラのリック！と命じる厳しい声が今にも聞こえるようで、俺は思わず首を伸ばしたが舌は冷いガラスに触れただけである。落胆

すると共に、ポーラの足の甘いコロンの香りが、懐しく思い出されて来た。アグネス！貴方の足は、どんな香りに覆われているのだろう。キッス！と命じて下さい。リック！と言いつけて下さい。俺は叶えられぬ欲情に身をもがくのだった。

赤毛の女巨人は一と跳ねると身を起こして歩き出した。俺は不自由な身体をくねらせて必死にその後を追った。次の部屋はラバトリイだった。バスタブもスツールも、驚いた事に透明なプラスチックだった。アグネスは既にシャワーを浴びていた。だが彼女の豊かな裸身は、床を流れる湯と立ちこめた湯気で雲に浮かぶ天使のように朧ろであった。しっかりと踏み開いていた彼女の蹠に、俺は狂気のように唇をつけたが、ガラスの床は熱いシャワーの湯で、人肌のように温かだった。俺の咽喉はカラカラに渴いていた。この床を流れる水を、たとえ一口でも啜ることが出来たら……。アグネスの若々しい裸身を伝って落ちるこの湯は、どんなに悩ましい香りを放つのだろう。

アグネスはバスタオルを纏うと、居間の椅子に窮屈そうに身を曲げて座り、足の爪のベデキュアーを始めた。髪の色と同じ赤色であ

る。少し不機嫌そうに舌打ちをするのは、きつと赤い爪紅が旨くつかないのであろう。ああ、アグネス。俺にその仕事をさせてくれ。いいえ、アグネス女王様。どうぞ私奴にその仕事をお命じ下さい。燃えるような赤毛の女王様にふさわしく、哀れな私奴の赤い血を一しずく、真珠のように艶やかなお爪の上に捧げます事をお許し下さい。私奴には、それが何よりの喜びで御座います。いつか俺は女神に祈りを捧げる如く、聞える由も無い赤毛の女王に、空しく哀願の言葉を呟き続けていた。アグネスは軽ろやかなレースのドレスを着けると、急ぎ足に室を出て行った。きつとディナーの時間なのであろう。部屋は再び暗黒に戻ったが、俺の睨からは、巨大な彼女の下半身と、屈伸する白い蹠の残映がいつ迄も消えなかった。

この透明な床の下で、誰れ憚る事もなく、白い裸身を誇示する赤毛の女神を渴望しながら、幾日を過ごしたのであろうか。冷いガラスの床は、俺の悶々たる欲情を静める所か、逆に火を点けて燃え上らせるようだった。彼女がバスをとる時、彼女がスツールに腰を下す時、彼女が化粧台の前に座る時、床の下の蜥蜴は、転げ廻って切ない願いを押さえよう

と苦しんでいた、その口から長い舌を、犬のように垂らせて……。

近かじかと、女神の美しい裸身を目にしながら、一指だに触れる事の適わぬ苦しさは、ポーラの皮膚を裂く厳しい鞭よりも、更に苛酷な試練であった。俺はひたすらに美しい女身を讃美し、憧憬し、渴望し、そして叶えられぬ欲望にいいよ身を焦がすのであった。思えば、このガラスのケースに入れられて以来、俺は一片の食物、一滴の水も口にしていなかったのであった。俺はポーラの足の魅するようなコンロの香りを偲びながら、透明なパイプを流れる淡黄色の液体すら、今は尊い神酒のように思われて身悶えた。

餓鬼道の苦しみの中に、ふっと妻のアイリンの姿が目浮かぶようになって来た。今の俺には、アイリンは優しい手を差し延べる救世主とも思えて、思わずアイリン！と小声で呟やくのだった。

(アイリン夫人註・妾しの名を呼ぶトーマスの声に、観察窓から覗いた妾しの目に映ったのは、獣のように呻き声をあげて悶える浅間しいトーマスの姿でした。もはやそれは良人では無く、一匹の獣でした。本能と欲情を露き出しにした一匹の犬の姿でした。そうよ、

「そうよ、トーマス。もっともっと、苦しむがいいわ。泣きながら悶えるがいいわ。そして思い知るのよ。貴方のような男には、女性と言う者が到底手の届かぬ高い位置にある事を、そして貴方はその前に拝跪して、只、彼女の恩恵を祈る以外に、どうしようも無い事を身にしみて悟るのよ。貴方のその祈りが妾しの心に通じたら、そのうちに貴方の願いを叶えてあげますわ。その時には、貴方は妾しに隷属する事に無限の喜びを覚え、妾しに仕える事に最高の幸せを感じるでしょう。妾しに対する愚かな対抗心を忘れ、跪いて貴方のこれからの人生を妾しに委ねる事を誓うならば、貴方に相応しい平和と幸福が訪れるでしょう。それ迄はもっと苦しむがいいわ。交尾期の雄犬のように吠えるがいいわ」

飢えと渇きと充たされぬ欲情に俺は疲労し切っていた。目も霞んでくるようであった。お助け下さい、女王様。助けておくれ、アイリン。俺は当てもなく祈りを捧げるのみであった。その時、目の前が暗くなった。見上げるとアグネスが床に膝をついて俺を見下していた。赤い髪が額に垂れ下り、白い歯を見せて笑っている姿は、赤いデモンだった。

突然、温い湯がケースの中に流れて来た。そ

れが何の湯であるか、そんな事は俺にはどうでもよかった。口を開いて腹一杯飲みこむとアグネスの指図によって、汚れた俺の身体を洗った。湯が退くと、どこからとも無く温風が吹きこんで忽ち俺の身体から湿気を取り去った。頭上の灯りが消えて暗黒に包まれたかと思うと、行くてに通路が開くのが見えた。俺はノロノロと這い出した。

十五

トーマス・ライトの告白(続)

どれ程進んだであろうか。通路が行き止まりになると、天井にポツカリと丸い穴が開いた。俺は顔を突き出したが、穴は小さく、それ以上は動けなかった。目の前にカーペットがあるのを見ると、俺は救われたと思った。ここは人間の住む部屋らしいからである。

「いらっしやい、トーマスさん」

笑みを含んだ明るい女の声だった。金色のサンダルをはいた足が、俺の顔の前に止まった。首を自由に動かせない俺には、女の顔どころか、形のよい胫の一部が辛うじて目に入るだけである。

「一寸、お待ちになってね」

女は可愛い髻のある膝をつくと、俺の額に冷い金属の環を固定し、両耳にも何かが挿入

されると、何も聞こえなくなった。宇宙を遊泳する飛行士も同様、何の音も無い静寂に包まれた。白い女の膝の間から、暖かく悩ましい女の香りが漂い、俺は気が遠くなるようだった。

「さあ、いいわ。出ていらっしやい、トーマスさん」

女の少しハスキーな声は、俺の耳腔内にワーンと鳴り響いて俺を飛び上らせた。床の穴はいっつか大きく開いていて、俺はよろよろと這い上ると周囲を見廻した。カーペット、寝台、化粧机、調度は揃っていた。これは女の部屋だ。訓練室では無い人間の住む部屋だ。俺はホッと安堵の吐息を洩らすと、始めて女を見上げた。

女の顔は笑っていた。二十七八だろうか。妻のアイリンと同じ年頃である。若いポーラやアグネスと異って、脂肉ののった肢体は熟し切った女の美しさに満ち溢れているようだった。

「こっちへいらっしやい、トーマスさん」

女は背を向けて歩き出した。立ち上ろうとした俺は、烈しい眩暈に襲われてその場に膝をついた。長い間の四つ足生活が、俺の感覚を狂わせているのだ。這う方が安全だなと考

えると、俺は恥じも外聞も無く四つ這いになると、女の豊かなヒップの後を追った。

そこは女の居間のようなだった。肘掛椅子に坐った女は、四つ這いで急いでくる俺を見て笑い出した。

「ホホホ……。お坐りなさい。トーマスさん」

俺は周囲を見たが、椅子らしいものは何も無い。女の指は床を示していた。女の足許に腰を据えた俺は手のやり場がなく、前に両手をついたが、まるっきり犬の姿勢だ。でも、その時には、俺は何も気がつかなかった。それが一番楽な姿勢だったのだ。女は俺の鼻先きで足を組んだ。悩ましい香りが鼻につき、艶やかな、肉付きのよい白い足が俺の目の前にあった。ガラスのケースの中での欲情が、音を立てて沸き上ってくるようだった。ああ、ポーラの足の甘い香……。俺の首は無意識のうちに延ばされ、唇はコロンの香りを求めている。

「トーマスさん！」

警告する女の声は、俺の鼓膜も破れんばかりに鳴り響き、ワーンと言う反響に俺は思わず耳を押さえた。

「よくお聞きなさいね、トーマスさん。今、貴方の耳には、鋭敏な超マイクロレシーバー

が装着されて居ます。サイクルが妾しのマイクだけに合せてあるので、妾しの声以外の音は、何も貴方には聞えない筈です。

つまり貴方は、妾しの命令以外は何んにも聞えないのです。そう、聞く必要が無いとも言えましょう。貴方は只、妾しの命令を聞けば、直ちにそれに従って実行に移せばいいのです。お判りですね。貴方の世界は、妾しの命令に従って行動する、それだけです。念の為に申し上げて置きますが、もし貴方が妾しの機嫌を損じて大きな声でも出させると、トーマスさん。貴方の身体は木の葉のように吹っ飛びますのよ、運よく鼓膜の方は大丈夫だったにしてもね。それと後学の為、一寸この音を聞いておいて下さいね」

女の指がどこかに触れたかと思うと、グワーンと神経を逆か撫するような不快な不協和音が、耳一杯に鳴り続き、俺は烈しい嘔吐感に床を転げて苦しんだ。だが女の目は冷然と、そんな俺を眺めているだけだった。

「人に依って差異はありますが、大体十五分で殆んど錯乱状態に陥る筈です。判りましたわね。成可く、こんな懲罰を課さずに済むよう、貴方が柔順で忠実である事を祈りたいと思いますわ」

俺の目の中に恐怖の色が浮かぶのを見て、女はニッコリと笑った。

「妾しの名は、マダム・ゾエ。でも、貴方の返事は、マダムだけで結構ですわ。では、キッス！」

気ままな態度で突き出された足に、俺は夢中でキッスをした。ポーラとは異なり、ローズの香りが鼻につき、甘いハニイの味が舌に残った。俺は狂気のように舌を出して味わった。何度と無く舌を動かせた。

「さあ、もう宜いでしょう」

マダム・ゾエは俺の口を押し退けて立ち上った。

「ここでの訓練は、トーマスさん。女主人に仕えるには、如何に多くの仕事があるか、女主人の命令は如何に実行さるべきであるか、女主人を満足させ、喜ばせる為には何をなすべきか、これら総てを、貴方に身を以て体験させるのが目的なのです」

マダムの声が一変して厳しくなった。

「さあ、おいで、トーマス。家の中でのお前の仕事、道具類の置き場所を教えてやるから」

がらりと変ったマダムの口調に、俺は途惑った思いで、オズオズと尻を上げた。

「先ず第一に、妾しが何か言ったら、お前は必ずイエス、マダムと返事をするのだよ。忘れずによく覚えてお置き」

「イエス、マダム」

俺は未だ四つ這いのまま、大股に歩くマダムの後を、フウフウ言いながら、走って行った。俺の仕事は結局、マダム・ゾエの下男であり、下女であり、小間使いであり、時にはそれ以下のものであったり、又時には、何でもあった。

朝七時、マダムのベッドに紅茶を運ぶことから俺の仕事は始まる。

「湯が少しぬるいよ、トーマス」

「ソリイ、マダム」

「それに葉が多過ぎる」

「ヴェリソリイ、マダム」

「スリッパ！」

「イエス、マダム」

「バスの支度だよ」

「イエス、マダム」

「少し熱いじゃないの」

「ソリイ、マダム」

「タオル」

「イエス、マダム」

「パウダーだよ」

「イエス、マダム」

「ベデキュア！」

「イエス、マダム」

「いつ迄かかっているの。デレデレしていると承知しないよ」

不愉快なブザーの不協和音。

「アッ、アッ、お許し下さい、マダム。どうぞ、お許し下さい」

「サンダル！」

「イエス、マダム」

「土が残ってるじゃないの」

「ソリイ、マダム」

「お前の朝食は、妾しの残り物で済ませてお置き」

「サンキュウ、マダム」

「足にキッスしてもいいよ」

「サンキュウ、マダム」

まあ、一人の女に仕えるのに、何と仕事の多い事だろう。俺は一日中、独楽鼠のように汗を流して走り廻った。それでも何度と無くマダムの機嫌を損じて、耳を押さえて床を転げ廻らなくてはならなかった。

然し繁雑な女主人の御用も、次第に会得して行った。俺は四六時中、女主人の命令を耳をすませて待っていた。俺の目は女主人の表

情の一寸した動きにも、その意図を悟るようになった。マダムの命令は俺にとっては全世界であり、マダムの意図は、神の意志であったのだ。

俺の奉仕を賞でたマダムが、俺の首を愛撫し、口吻けを許す時、俺は酬われた喜びに感激の涙を流すのだった。

ある朝、例のように、寝室に紅茶を運んだ時、マダムは俺を見て微笑んだ。

「トーマスさん。とてもよく出来ましたわ。理想的な召し使いだったと申し上げても宜いでしょう。お別れするのが残念な程です。

貴方は先天的に召し使いとして生れついでいらっしゃるのかも知れませんわ。でも、直ぐに支度をなすって下さいね。ミス・エレオノーラが居間でお待ちになっていますわ」

「有り難う、マダム・ゾエ」俺は跪くと、ベッドから垂れ下っているマダムの滑らかな足に最後の口吻けをすると部屋を出た。

ポーラ。アグネス。マダム・ゾエ。みんな素晴らしい訓練者だった。俺は久し振りに自分の衣服を着ながら、彼女達の姿を思い浮かべた。女に訓練されるのが、こんなに素張りらしい事だとは思っても寄らなかった。出来る事なら、もっともっと他の訓練も受けて見たい

ものだ……。

ミス・エレオノーラは白い絹の部屋着を着て、背の高いウインザア椅子に腰を下していた。フランス窓から差し込む朝の光に、プラチナブロンドの髪は、神の円先のように輝いていた。

俺の顔を見ると、彼女は機嫌のよい笑い声をあげた。

「ホホホ……。如何でした、トーマスさん？」

素晴らしい体験をなさって、きつと立派なルポが拝見出来る事と思っていますのよ」

俺は言葉も無く彼女を見詰めた。何と言う美しさ。今の今迄、女神のように仕えて来た三人の女性も、エレオノーラに較べれば、太陽の前の星のように輝やきを失うように思われた。俺は思わずエレオノーラの前に膝をついた。

「素敵でした。とても素敵な訓練でした。男性の誇りなどと、痴言を並べた自分を、今は恥ずかしく思っています。ミス・エレオノーラ。もし許しを得られるならば、私の感謝の思いをお目にかける為に、貴方の靴の爪先きに、口吻けさせて頂きたいと思えます」

エレオノーラは俺の顔を微笑をもって眺めながら、組んでいた脚を床に下した。俺は手

を差し延べたが、彼女は足をあげようとはしなかった。止むを得ず俺は首を下げて唇を近づけたが、床の上の銀色の上靴にキスする為には、俺は平れ伏して、顎を床に着けなければならなかった。

「トーマスさん。それで貴方は幸福？」

「幸せです。死ぬ迄でも、こうしたいと思えます」

俺は再び口吻けしようとしたが、エレオノーラはうるさそうに押しつけた。

「残念ですが、妾しは忙しくて、貴方をそう何度も幸せにして差し上げる暇がありません。飛行機の用意が出来ていますから、直ぐにお帰りなさい。アイリンに宜しくね」

こう言い棄てると、未だ床に平れ伏している俺を残して、エレオノーラは、さっさと次の部屋に姿を消した。

十六

トーマス・ライトの告白(続)

四週間ぶりにフラットに帰ると、エレオノーラから連絡があったのか、アイリンが嬉しそうに俺を出迎えた。

「お帰りなさい、トーマス。如何でしたのバハマは。お気に入ったのか、随分御ゆっくりでしたのね」

俺はアイリンの顔が、まともに見られなかった。もし俺の経験を知ったら、アイリンは何と言うだろう。

「なあに、大いした事は無かったよ」

苦しそうな俺の答えに、アイリンの頬が動いたように見えたが、俺の錯覚だったかも知れない。その夜、久し張りでの二人っきりの夕食のあと、居間に退こうとする俺をアイリンは引き止めた。

「ねえ、トーマス。妾し近い内に、日本へ行かなければならないの。日本女性の社会的地位向上に就いての調査なんですけれどね。それが十カ月か一年位の長期滞在になりそうなのよ」

「いいじゃないか。お目出度う。前から君が希望していた問題だろう？」

「有難とう。それでねえ、トーマス。妾し、実は貴方に一緒に行って欲しいと思うんだけど、どうかしら」

「俺と一緒に？ だってアイリン、俺にはアルビヨンの仕事があるじゃないか」

「判っているわ。だからその仕事を止めて頂きたいの。トーマス、よく聞いて頂戴。妾しの週給は千二百ドルでしょう。それが日本に滞在中は同額の調査費が支給されるの。旅費

・滞在費の別によ。それに必要なら、週三百ドルの助手手当を出してもいいって言うのよねえ、トーマス。週給百八〇ドルのアルビジョンなんか止めて貰えないかしら。貴方にはお小使いとして週五百ドルあげますから、一緒に緒に行つて仕事を手伝つて欲しいの」

「俺が君の助手になるのかい？ 良人が妻のアツシスタントになつて、妻から俸給をもらうのかい？ 厭だよ、俺は」

アイリンの目が刺すように俺を見詰めた。途端に俺の脳裡をフラッシュバックのようにポーラ、アグネス、マダム・ゾエ、エレオノラの目が通り過ぎた。アイリンの目も、彼女等と同じように威圧的な輝やきがあった。俺は厭な予感を覚えた。

「どうでも厭だと仰言るの、トーマス。(アイリンは唇を曲げて笑つた) ホホホ…。もし妾しが、貴方に犬のように首環をはめ、鞭を持って命令したら、貴方は一緒に下さる？ それ共、マイクロレシーバーを貴方の耳に取り付けて命令したら？」

アイリンは一語一語、力を入れてこう言う、と、じつと俺の表情を窺つた。俺の顔からスツと血の気がひくのが判つた。どうして知っているのだらう。俺のあの惨めな有りさまを

俺は足下の大地が崩れ落ちる思いだった。

「アイリン！ お前は、どうして……」

その声は哀れに震るえていた。

「だって見ていたのですもの。貴方は知らないでしょうけれど、隣りの観察室で、始めからずーっと見ていたの。貴方がポーラに鞭打たれて四つ這いで走り廻り、嬉しそうに彼女の臍をなめていたのも、アグネスのバスルームの床下で犬のように転げ廻つて泣いていたのも、マダム・ゾエの奴隷として奉仕していたのも、みんな見ていましたわ。もう白状してもいいでしょう。これは皆、妾しがエレオノラに頼んだ事なのよ」

俺は言葉も無くうなだれた。

「如何？ 行つて下さるわね」

アイリンは勝利者の喜びを、もはや隠そうとはしなかった。その声には押さえてはいるが、笑いの響きがあった。俺は弱々しくうなずいた。

「宜かつたわ。それで決まつたと。エレオノラも喜んでくれるでしょう。本当を言うとね、トーマス。もし貴方がどうしても厭だと強情を張るようだったら、もう一度バハマへ送り返す積りだったのよ。そして今度はポーラやアグネスに任さずに、妾し自身が鞭を

持つて、貴方を調教しようと思つていたの」

見栄も誇りも無残に剥奪された俺は、身を縮めてアイリンの顔を呆然と見上げるだけであつた。

「じゃ、明日直ぐにアルビジョンに辞表を出すのよ。いいわね」

俺は痴呆のように頷いたが、その様を見てアイリンは何を思いついたか、大声で笑い出した。

「ホホホ…。トーマス。只、頷くだけでは駄目でしょう。マダム・ゾエに返事の仕方を教えて貰つて居たと思うけど」

「イエス、マダム」

咽喉から無理に押し出された俺の声は、老人のように皺枯れていた。ポーラの笑いは愉快そうだった。

「ホホホ…。そうよ。それでいいのよ。妾しの助手になる以上、妾しの命令には絶対服従よ。形だけでは駄目よ。バハマで訓練を受けていた時の気持ちを忘れないでね」

「イエス、マダム」

アイリンは満足したように大きく伸びをすると、思い出したように言った。

「そうだ。訓練をよく覚えてるかどうか、一寸、試して見なくちゃ」

アイリンはゆったりと足を組むと、しばらく俺の顔を面白そうに見ていたが、決然として命を下した。

「カム！」

何もかも失ってしまった俺は、声に応じて走り出すと妻の足許に跪いた。

「少し鈍いようね。でもまあ、いいわ。追いつきと訓練するから。キッス！」

俺はスリッパをつっかけてブラブラ動かせているアイリンの足を押し頂くと、爪先で唇を押しつけた。アイリンの好きな「四七一」の冷い香りが、俺の鼻孔に充満した。

「まあまあね。リックの方はベッドの上で、ゆっくりと試して見るわ。そうそう、トーマス。明日はペットの店へ行つて、鞭を一本買って来るのよ。鞭の撰択は貴方に任せるわ。打たれるのは貴方の方だから、好きなのを買ってらっしゃい」

俺を打つ鞭を俺に買ってこいと言うのだ。女王に鞭を捧げて、どうぞ打つて下さいと哀願する奴隷ではないか。絶望のためか、俺の身体は烈しく震るえていたが、俺の心の片隅に、これでいいのだ。これからの俺の一生を有能で美しい妻の足下に捧げて、俺にふさわしい幸福と平和が得られるのだと囁く声が聞

こえるように思われた。

アイリン夫人後記

トーマスの訓練は、期間が短かった所為か、妾しの命令に全面的に服従するのを逡巡する気配が感じられます。訓練の不足と言うよりも、或いは住み慣れたこのフラットの雰囲気、彼の過去を呼び起して抑制作用となっているのかも知れません。日本へ行き環境が変れば、この点は判然とするでしょう。

トーマスの買って来た鞭は、短いブルドッグ調教用に使うものでした。包装のまま、顔をそむけて妾しに手渡そうとするトーマスを妾しは包みを開かせ、妾しの足下に跪いて捧げさせましたが、トーマスの顔は可哀想な程歪んでいました。

鞭は時々使用しますが、トーマスの不従順を罰すると言うよりも、気紛れな妾しの遊びの気持ちの方が多いようです。その意味では訓練は成功であったとも言えるかも知れません。

最近、英国の医師学会が非常に興味ある臨床実験を発表致しましたが、妾しはこれを近いうちに、トーマスに実施しようと思っています。

それは近所の人妻に恋をした良人を妻の依頼で治療したのですが、この方法は非常に利

用範囲が広いのではないかと思います。

その良人は暗黒の部屋の中に椅子に固定されます。前方のスクリーンに恋する人妻の姿が映写されますと、電流が断続的に、その身体に流れ、耳に挿入されたりシーバーには、テープレコーダーに依つて「こんな女に恋しては不可ない。こんな女に恋をしては、お前には永遠に平和も安息も無いであろう」と囁かれます。代つて妻の姿が、スクリーンに現われますと、優しいムードミュージックに乗つて、「お前の妻を愛するのだ。お前の幸福の為に」と囁かれます。

一日二回、二時間ずつ、この治療を施した所、一週間の後には、その良人はあれ程熱烈に恋をしていた近所の人妻を見向きもしなくなつたと言うのです。まるでサーカスの猛獣を馴らせるような方法ですが、効果は一〇〇%と言われています。

妾しはこの方法を利用して、トーマスの性向を妾しの好みに合わせようと思うのです。例えば妾しの身体の、どこを口吻けすればよいかを教えると共に、彼自身の喜びもその口吻け以外からは得られないようにするのです。余り個人的な好みを強調し過ぎると非難を受けそうですが、妾しは是非実験して見た

いと思っています。結果は後日、又報告させていただきます。

刮目してその日を待ちたいと思っている。

終章

読み終えた私がトーマスに強い羨望の念を抱いたのは、私のMの性向の所為だろう。頑固なトーマスを忽ちにしてM化してしまう、恐るべき施設を有する「ISSSL」の活動の手が、一日も早く日本に延びる事を願っては、S派の諸賢に叱られそうであるが、私は

茶谷博士とは、その後、半年余りもお逢いしていない。何でもアイリン夫人と共に、東南アジアの各国を訪問してられる由であるが、きっとパシルパンジャンのミス・アリンダも訪問計画にあると思うと、私の胸は浪立つようである。

博士からは断片的にはあるが、ビルマの

北辺シャン洲に、最大の阿片産出額を誇るある王の死去後、王女が鞭と麻薬を以て人民を統治している話、日本のある新興宗教の一人娘が瀬戸内海のある小島を購入して、女性支配の桃源境を建設しようと計画している話等聞かされている。博士の許可が得られれば、又、筆を新たにして読者の皆さんに報告する機会が得られる事と、私は実は楽しみにして、その日を待つて居る。

△大尾▽

両手吊りにもがく女

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号「むさ」

後手吊りのもたえ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号「むれ」

強烈縛りにうめく女

大手札五枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号「むそ」

顔を凌辱される女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号「むよ」

後手柱宙浮き縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号「むか」

大の字縛り逆さ吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
増田みゆき 略号「むの」

エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やこ」

股間首縄縦縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やひ」

後手首足首連結縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やせ」

淫らなる開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やす」

縄目に悶える裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やく」

強烈羞恥責あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「えめ」

驚つかみに責める乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号「えう」

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号「えの」

女を縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「えわ」

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号「えな」

強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号「えぬ」

手吊り股間縛り責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号「えお」

美しきポリウムを縛る

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひか」

両手吊りにあえぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひお」

後手垂直厳重しぼり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひけ」

一糸まとわぬ裸身緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ひく」

豊胸をくびる強い縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ひき」

鼻責め縛りに苦悶する

大手札七枚一組 八〇〇円
木村 洋子 略号「むる」

S M カメラ・ハント

……／＼水野 弘・香代夫妻の巻▽……

「燃ゆる想いにあけぬるを」

辻 村 隆

「燃ゆる想いにあけぬるを」

新宮明夫が先であったか、水野弘がさきであったかは、ちょっと失念したが、彼が愛妻香代夫人の生首を引っ掛けて、奇クサロンへ登場した時には、思いも掛けぬ異彩に私はショックを受けたのをまざまざと覚えている。

数カ月を経ずして、彼との文通は始まり、香代夫人との夫婦プレイのフォトがこよなく私の眼を愉しませてくれたのである。私はいつか機会があれば、香代夫人を心ゆくまで縛り、水野弘夫妻とのプレイの醍醐味をしみじみ味わって見たいと念願していた。

その絶好の機会が、何の前触れもなく突然

降って湧いたように持ち上ったのだから、世の中は面白いものだ。

水野弘は人も知る、生首・処刑の礼讃者であった。それが、徐々に夫婦プレイへと移行し単に生首や処刑のみに固執することなく、広汎な夫婦プレイのフォトを撮り出したことは、新宮明夫の場合の、夫婦の在り方と非常によく似ていた。生首といい、処刑ものといっても所詮はSMプレイの変型的なものに過ぎないことを、新宮明夫も水野弘も、身をもって体験した夫婦プレイでそれを実証している。彼の便りで、近々御邪魔出来るかも知れ

ないという内容から、私は期待は抱いてはいないものの、こう単兵急に実現出来るとは、予測だにしていなかった。

水野夫妻の来訪を早める契機となったのはこれ偏に京都の徳永氏の積極的な尽力のためのものであった。私のカメラ・ハントにも過去数回T氏として登場していた人である。

徳永氏も夫婦プレイの方では人後に落ちない、熱心な推進者であったが、彼の猛烈な懇請で、岐阜の水野弘を徳永昭三に紹介してからは、彼等同志忽ち十年の知己の如く親密の度をまし、遂には春秋二回許り、遥々岐阜の



山奥まで水野氏を訪問し、夫人を相手に強引にプレイに持込み、一泊して夜もすがら、SM談義、夫婦プレイについて語り明して来たという急激派であるから、憶劫がりの私など到底太刀打の出来る相手ではなかった。

私も水野弘も、いつかはゆっくりと折を見て、彼我のどちらかへ行つて、香代夫人を相手にプレイしたいという気はあったが、便りでは猛然とハッスルしているくせに、そのチャンスもなく、お互いに仕事に追われての掛声許りで、いつかいつかが、もう既に二近年くも続いていたのであった。

徳永昭三は、そうした私達に業を煮やしたのか、双方の暇な折など考えていては、いつになるやも知れずと、持前の強引きでコトを運んでしまった。その行為の底には、私達だけのことでなく、彼自身も私達と一緒にプレイしようとする想念を胸に秘めての彼らしいやり方であることは勿論であったが。

兎も角彼は、さっさと名古屋からの新幹線の切符を二枚手に入れ、日時まで指定して、速達で水野弘に否応なしに送ったのである。いかにも彼らしいやり方で新幹線の切符までつきつけられては、流石の水野弘も参ったに違いない。徳永昭三の好意も無駄には出来なかった。突然のこと、すっかり途迷って出渡る香代夫人を何とか口説き落とし、夫婦揃っての小旅行は、六年振りという水野家にとっ

ては珍事とは相成ったのである。

水野弘の子供達も既に大きかったし、留守中の心配は先ずないが、まさかプレイが目的の旅とも言えない。久方振りの京都・大阪見物だと糊塗して出発。散々出発前ダダをこねた香代夫人も、コトがここまで運ぶと、急に女性らしい慾が出て、京都のここかしこ、奈良の方へも、あわよくばデパート巡りもと、いそいそし出してスケジュールが盛沢山になり始める。夫との二人っきりの旅行なんて、香代夫人にとっても、思いも掛けなかった。心の弾む、嬉しい珍事であったのだ。唯、一沫心に去来するのは、未知の私とのプレイの一事ではなかったであろうか。

とあれ、徳永昭三は、すべて万端コトを運んでから、私に爾後連絡して来たのである。「……と、まあ、こんなわけで、どうやらうまく水野氏をかつぎ出すのに成功したのですよ。これから京都駅まで二人を迎えに行くんですがね、多分おひる過ぎに、そちらへ到着しますから、何分よろしく頼みますよ。勿論私も案内がてら一緒に行きますから……」

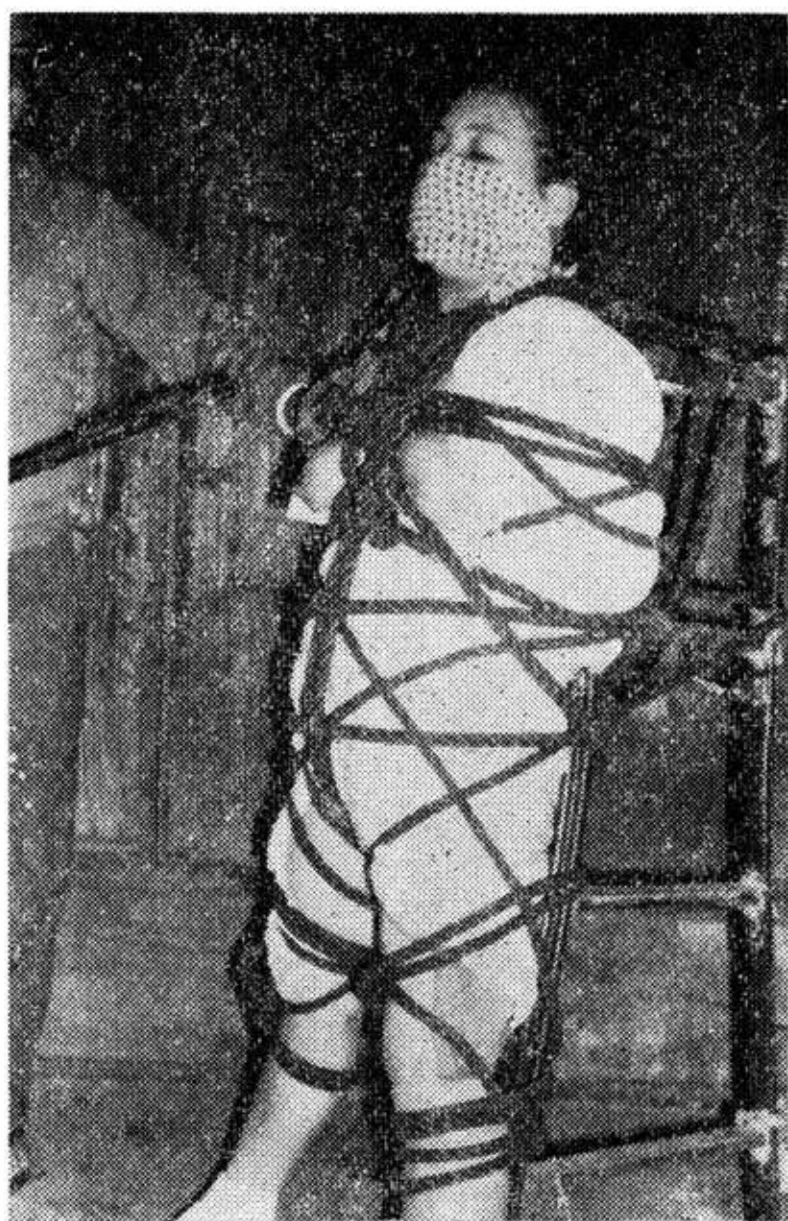
要するに彼は、私達と一緒に多人数のプレイをしたいのが目的なのだ。私は、彼の矢継早やの経過報告に、唯、あれよあれよという

許り、啞然とするとは、こういうことか。

「そのうちにという便りはあったが、まさかそれが今日とはネあんまり急なので、何も考えてはいないよ。それに、突然なものだから、仕事もあるし、時間も空けてはいなかったし、こりや弱ったな」

「弱ったなんて辻村さんらしくもないね。千載一遇のチャンスなんでしょ。仕事なんか明日に廻しちまいなさいよ。辻村さんの仕事は別に一日や二日遅れたってどうってこともないでしょ。岐阜からわざわざ呼びよせたのだし、ここはひとつ私の顔も立てて、時間つくって下さいよ。私だって、すべてはあと廻しにして、張り切っているんだから……」

「ああ、分りましたよ。徳永さんにかかっちゃ全く叶わない。ところで香代夫人ネ、プレイの方はすっかり承知なんですネ」
「勿論ですとも、何も言わなかったって、以心伝心、水野弘が、夜毎日毎お噂して、口説いておいでくれましたよ。じゃあ」



さあ、忽ち身边が忙しくなってきた。家内にその旨を告げると、寝耳に水で大慌て。早速昼食の準備のため、妻はマーケットに走り、私は私で、離れの居間や、応接間のほこりをはたいて片付けを始める。どうやら水野夫妻の宿泊予定はあるじ知らずの我が家であるらしい。ほんの半時間前まで脳裡の全部を占めていた仕事への想念は、忽然として霧散霧消し、入れ違いに、夫婦プレイへの執念が加速度的に、ヒタヒタと私の頭脳に浸透し始めた。十一月十四日の今日は月曜日。長女は

会社へ出勤し、三人の子供達は、それぞれ高校、中学校へ登校していて夕方までは帰ってこない。幸い今日は午後から訪れる人の予定もない。昨日の日曜日は朝からうすら寒くうっとうしく、十三日という日の縁起をかつぐわけでもないが、大事件の突発の連続であった。日航機の事故で五十人即死、近鉄特急が国分駅で追突惨事、有馬奥の坊の火事、奈良岡谷病院全焼して二人死亡など、わるいニュース許りが終日テレビや新聞紙面を賑わしていた。それが今日は嘘

のように平穩で、昨夜までの冷え込みが信じられぬくらいに柔らいで、加えて天気もよかった。この程度の気温なら、室外のプレイも充分可能であろう。午後四時頃までは誰も邪魔の入る心配はない。ゆっくりと時間をかけて、裏の庭園や、離れの居間の前庭でプレイ出来そうである。

どうせ香代夫人もぬがずば納まるまい。とすれば秋もかなり深まっている昨日今日、風呂も沸かしておかずばなるまいであろう。私は滅多にやったことのない風呂わかしに

とり掛った。ひるまえから風呂を焚くなんてことはプレイ以外滅多にないことだった。

気分が一段落して、水野夫妻待ちの待機姿勢に入ると、私はこの度の徳永昭三のいささか強引とも思えるプレイへの誘導が、反って私に忙中閑の、貴重なひとときをつくってくれたのだと、感謝の念に変わっていった。

プレイと謂い、カメラ・ハントと言っても所詮は、閑居して不善を為すに似た産物である。毎日毎日を、仕事や雑用に追われていては、今日こそはと思いつつも、目先の急務に負けちゃって、あたらしい機会を逸してしまうことがしばしばである。箕田編集長より誘いの電話のあった、大島照代さんの場合にしる、つい仕事で逡巡しているうちに、積極的な山本章氏に、あっさり薦に油揚式にさらわれてしまった例もある。

プレイの時間は、多忙の中からでも、自身がつくり出さないと、誰もわざわざ人のためにつくってくれはしない。今回の徳永氏の例など、極く稀なケースであって、これとても徳永昭三自身の積極的な要望が実ったといっても過言ではない。しかし、暇をみつけてやるつもりであっても、慌ただしく日々の生業に追われていては、そうそう暇のあるも

のではなかった。私のカメラ・ハントにしてもそうである。私の職業が、自由業に近いせいもあって、いざとなれば、体の融通がきいても、やはりそこには、かなりの努力を払う必要があった。

「あらッ、お風呂わかしちゃるの、珍らしいことなさるのネ。忙がしくても、好きな道は別と見えて……。余り張切ると糖尿病に悪いですわよ」

妻がひやかし気味に笑って言った。さもあらん、確かに私はそわそわし、うきうきし、いきいきしていたのだからー。

フォトではとくにおなじみの、水野香代夫人が、もう数時間を経ずして、私の眼前に姿を現わすのだ。予期せぬ期待と想念に、これが、イキイキ、ソワソワ、ウキウキせずにはおられようか。『果報は寝て待て』いや『棚からボタ餅』かこれは。辻村隆よ、落つけ落つけ、『あわてる乞食は貰いが少ない』というではないか。

×

×

水野弘との初対面の挨拶は不要であった。一年許り前、公用で来阪した彼を迎えて、徳永氏の案内で京都へ走り、一夜木屋町界限をハシゴして呑み歩いて、放歌痛飲したことが

あるからであった。

香代夫人の第一印象は豊醇な熟れた果実の旨味をホーフツとさせた。色白のふっくらとした容姿は、フォトから受取る感じとは全然異なった、なまの若々しい女体を、渋い大島紬の和装のなかに豊かに包含しているかに思われた。徳永昭三がまるで仲介人気取りで香代夫人と私を引合せた。水野弘は照れて笑っている。彼女の赤裸々なフォトには、徳永氏より遥かに早く接している私であるが、夫人とじかに接している点では徳永氏は二度の実績者である。主客転倒して、水野弘を紹介した徳永昭三に、香代夫人を紹介されて、一寸奇妙な気持である。

プレイフォトをとるために夫婦揃って私宅を訪問されたのだから、今更香代夫人に云々する必要もなく、暗黙裡にやることはきまつてある。私の妻が昼食を運んで来て、香代さんに挨拶する。妻も目的を知っている。女同志どうも面映ゆいのかヘンなアイサツ。

妻「始めまして、主人からいつもお噂をお伺いしています。どうぞ御ゆっくり」

夫人「ハイ、御厄介かけます。いろいろ御迷惑でしょうが、よろしく願います」

どちらも相手の顔を見ないで、視線を外ら



して言っている。そのくせ、妻はチャンと観察していたらしい。

一寸台所へ立つと、待ち兼ねていた様に「シャシンで見てたより、ずっと若いわね。」

あの奥さん、いくつかしら」

女はどうも年令が気になると見える。

「確かお前と同じ筈だったが、そういえばフオトよりは若いネ」

「意外でしたわ。私よりも若く見える？」

「水野弘は、お前がすごく若く見えるって言ってたけど」

妻はごきげんになった。どうも厄介！。

「どんなものを、お撮りになるの？」

「まあネ。まあ、イロイロアラナー」

「あほらし、眼尻が下ってるわ」

私はすっかり、妻にからかわれて応接間に戻った。

話したいことは、いろいろあったが、すべてはあと廻し。午後一時を少し廻っているから食事のあとのくつろぎもそこそこに、私達は立上る。徳永昭三は大きい眼を尚更にギョロリと向いて、やたらにタバコをすばすば吹かせ、スーッ、スーッとせわしなく息を吸込んでいる。昂奮したときのこれが彼のクセであった。フオトの腕は正直言って、私より水野弘の方が一枚上であった。徳永氏、私と彼の二台のカメラ。占めて四台でとることもあるまい。気が向けば、時折撮ることにして一応、カメラにフ

イルムの装填はしたが、フオトの方は水野弘に一任することにして、私と徳永氏は専ら介添役に廻ることにした。

玄関をしめるのもおかしいので、表の間に妻を見張りがてら、訪れる人の応待に置いて私達四人はぞろぞろと裏へゆく。離れ座敷と中庭に囲まれた井戸の前の漆喰の土間は、陽射しを浴びて明るい。隣家との低い板塀は、数年前の台風で倒壊したのを機会に、ブロック塀の高いのに改造してあるので、外部からは、この土間は全然覗けない。私達は安心して、いよいよプレイの作業にとり掛った。

「香代、着物をぬいで、長襦袢だけになりなさい」

水野弘は淡々たる口調で妻に命じた。香代夫人の顔に、さっと羞恥と緊張が流れ、素直にうなずくと、静かに帯を解き出した。

×

×

カメラはすべて水野弘に一任し、私と徳永氏の二人掛りで、香代夫人を緊縛するのだから、仕事は早い。あらかじめの構成とてもなく、その場限りの思いつくままだが、水野弘も徳永昭三も私の思いつきに口を挟まない。辻村隆のやることなら、結構面白からうといった任せきった顔付である。

鉄製の脚立を据えて、それに犂々と香代夫人を縛りつけてゆく。こらえもなく、水野弘は、既にその過程をパチリパチリとカメラに納めていた。香代夫人は、それが宿命であるかのように、観念して眼をつぶり、私と徳永昭三のなすが俤に身を任せていた。

縄はわが家での最大の太いロープで、一本が十米近くもある。それを二本使って余すことなく香代夫人の体を締め上げてゆく。何しろ陸運会社のトラックで荷物運搬の際使うシロモノだから、少々油臭く、直径三センチ近くもあるロープで使い古してしなやかになっている。運送会社の馴染の運転手に無理をいって、彼の小遣稼ぎに、千円やって、そっと廻してもらった奴である。

脚立に添わせて、両足を開き、大の男二人がぐいぐい締め上げるが、餅肌の香代夫人の肉体は、縄への抵抗もなく、ふんわりとロープを受けとめている。股へ三重に廻して脚立の足のせにかけて引き絞ると、流石に彼女は軽い呻きを洩らした。胸が露わに乱れて、ポツカリと豊かな乳房が、大腕を伏せたように盛り上っている。二の腕には太いロープがぎりぎり深く喰い込んで、みじろぎも出来ない強烈な緊縛であった。

水野弘の眼はランランと光りをまし、心なしか血走ってさえた。時折り大きく息を弾ませて、愛する妻の無惨に縛られた立姿を、前後左右から、いつ果てるともなく撮りまくっていた。豆絞りの手拭の猿轡の下で、香代夫人の吐く息はやや苦しげだった。私が夢にまで見た香代夫人の、緊縛の露わなポーズがまぎれもなく、今私の眼前にあった。豊満な天平美人を想起させる色白の肌が、ロープに圧迫されて長襦袢の中で、あでやかにひそめいている。私も徳永昭三も、しばしは我を忘れて香代夫人のこの極限のポーズに見惚れていた。

「そろそろ解きましようか？」

頃合を見計らって、私は水野弘に声をかけた。

「ええ、そうですね。いや、どうも、惜しいな。ここまで縛ったのに――。しかし辻村さんは流石に縄捌きが早くてうまい。どうだい香代、もう少し辛抱出来るかい？」

うっすら細眼をあけた香代夫人は、コクリと大きくうなずいた。私は彼女の従順さと、被虐にたえうる肉体に眼を瞠る思いだった。

「それじゃ辻村さん、その脚立をそっとうしろに倒していただいけませんか？」

水野弘はそういつてカメラを構え直した。

私は脚立のうしろに廻って鉄脚をしっかりと握り、そろそろとうしろへ倒してゆく。香代夫人の体は、ひしひしと脚立に固定されているのか、ずり下りもせずに、その俤、両足が地面から浮き上った。縄のどこかの個所が宙に浮き上った肌に突きささるのか、それとも後手の、縛った太い縄がきしむのか、彼女は猿轡の下唇から、微かな悲鳴を洩らした。

ボリュウムのある体が、無茶苦茶に縛ったロープの、ここかしこで支えになって、香代夫人の重量を支えているのだ。

飽くなき水野弘の、カメラへの執念は、このポーズを前後左右から追っていた。その時間は長く、いつ果てるとも知れず続くように思われた。私の腕がそろそろ草臥れてくる。

いや、それ以上に香代夫人の体は苦悶しているに違いなかった。

「ああ、どうぞ戻して下さい」

彼はやっとカメラを眼から離れた。この辺りで解くのかと思ったらさにあらず、

「どうですか辻村さん、少し責めてみませんか――」

と仰有る。私は水野夫妻のプレイの強烈さをまざまざと思い知らされた。言われる俤に

竹の棒をとり上げて、太いロープが犇々と胸を巻いているその合間に、無理矢理こじ入れていった。竹棒でロープをぐいとこじると、香代夫人はククツとものをならして、眉間にしわをよせた。私のあいている左手は、彼女の盛り上った乳房を鷺掴みにして、ぐいとひねり上げていた。私の視野の外れで、徳永昭三が、火のつかぬ煙草をくわえた俤、私の一挙一動を、またたきもせず凝視している。

縄を解くと、香代夫人はぐったりとして、よろよろと前にのめりそうになった。無理もない、血脈も止る緊縛を十数分近くも耐えに耐えていたのだから。

「痛かったかい？」

水野弘はかけよって、人眼も憚からず、抱きしめるようにして、妻の腕を撫でさすっていた。妻は夫の手を甘く受けて、一つの大役を果たしたかのように、そっと身を凭せかけていた。夫婦愛の美しい光景であった。私も、或いは徳永昭三でも、自分の妻を、こうしてかなり長時間縛って人眼に曝した場合、



おそらく辺り構わず、そうせずにはおられなかったであろう。夫婦プレイの同好者のみが理解出来る心情であった。

「いや、凄かったなあ。よかった。本当によかったよ。実によかった」

徳永昭三は、胸のつかえを吐き出すようにしきりに「よかった」を連発した。

「うん、本当によかったですね」

水野弘も応じていた。何がよかったのか？言うまでもない。プレイする者のみが会得する、縛りのよさなのであった。

「さあ、辻村さん、一服したら次に掛りまし

よう。次は何をやります？」「奥さん大丈夫ですかね？」

「私なら大丈夫ですわ」

香代夫人がにっこり笑って応えた。妖しく瞳は被虐の陶醉によったかのように光っている。徳永昭三は益々「よかった」を連呼するだろう。私は腹をきめ、次の構図を咄嗟に頭に描いた。

太いロープは扱い難くて、

少しゴテゴテした感じがする私は愛用の白い縄の一番太くて長いのを持ち出して来た。

「それじゃ奥さん、脚立の上に乗っちゃって下さい。いや、その前に先ず縛っておこう」

私は神妙に構える香代夫人の前に立ち、だかり、首から縄を左右に分けて、かなり本縛りの態勢に入った。二の腕をしめ上げ、後手を重ねて縛った。ボリュームのある夫人の後手を合やすことは、彼女にとってかなりの努力が要るらしかった。私は容赦なく縛り合せて、脚立へ押し上げるようにした。徳永氏が夫人の体を抱えて助勢してくれる。

脚立に腰を据えさせて、縛り残りの縄を脚立の裏を通して後手の縄に結びつける。夫人は両足を脚立の踏台にかけて、かろうじて重心を保っていたが、上半身は微かにゆらゆらと揺れていた。左足首に縄を結び、高々と吊り上げると、彼女の体は右足で危なっかしく体を支えていた。その右足を私は手で持ち上げ、脚立の上で、左右の足が大きく水平に開ききる。ぐらりと香代夫人の upper body が崩れて、うしろにのけぞりそうになった。徳永氏がか

けよって、慌ててうしろから支えた。水野弘はプレイの一部仕終をカメラに忠実に納めていた。既にキャンノン一眼レフの三六枚撮りの一本はとくに消費して今や二本目にかかっているが、これとでも残り少ないのではなからうか。脚立上の開股となると長くもやっておられない。私は水野弘の合図と共にこのポーズを戻した。

「私ばかりに考えさせないで、水野さんや徳永さんはどう？」

「いやいや、とてもじゃない。辻村さんのプレイで、私は来た甲斐があると思いますよ」

水野弘はいやに謙遜して言った。

「私は一度、奥さんを吊って見たいね。これだけ、大の男が揃っているんだから、奥さん

がかなり重くても吊れるでしょう。どう辻村さん？」

徳永氏の提案だった。私もそれはやりたいと思っていた。何しろ、水野弘より体重の重い香代夫人である。夫婦二人きりの彼等のプレイでは、水野弘がどんなに気ばっても、夫人を吊ることは誠に至難な業であった。彼の数多いフोटの中で、たった数枚、鴨居から逆吊りしたのがあったが、それが水野弘にとって吊りの唯一のものであった。

「私もこの機会に、是非吊って見たいんですよ。なあ、香代いいだろう？」

「でも重いですよ、私。疲れますよ皆さん」夫人の応えは、私達へのいたわりで、吊りを拒否してはいなかった。むしろ吊られて見たい気配すら感じとられた。

「香代をぬがせましょうか。吊りは裸の方がいいでしょう？」

水野弘は声をひそめて私に囁やいた。夫に遠慮していた私であるから、彼の提案は勿論大賛成である。

「少し寒くありませんかね」

「大丈夫ですよ。今日の気温なら。しかし、女房一人裸だと、どうも可哀想だから、あな達も出来れば脱いで、つき合っ

すネ」

「よろしいとも、私達もいさぎよく脱ぎましょう。どう徳永さん？」

「ああ、勿論構いませんとも。奥さん一人をぬがして私達が着ているのは申訳ない」

彼も欣然と応ずる。私達二人は離れ座敷で服をぬぎすてる。やはり十一月中旬の風は肌に冷めたい。素肌に浴衣を纏って出てくる。

香代夫人は潔ぎよく、長襦袢と赤い伊達巻をとり払った。

滑車がないので、このボリュームある柔肌を引曳り上げることは一寸シンドイ。

私達は香代夫人の体になるべく痛みの感じないよう、晒や木綿布の長巾のもので、彼女を縛った。脚立はこんな場合便利である。

二人が双方から彼女の体を支えるようにして、一段ずつ昇ってもらう。脚立の最上段に立つと、太いロープをかけた梁に、香代夫人の頭が、スレスレにすれた。折角結い上げた許りの髪を、梁の埃でよごすのも気の毒と、一段下って、太いロープを後手の結び目につなぐ。私がしっかりとロープを引きしめている。徳永氏は徐々に脚立を外す。凄い力が剝那私の両腕にかかって来た。今、私の引張るこのロープの向うに、香代夫人の豊かな肉

が、大きく宙に揺れているのだ。水野弘はもう夢中だった。彼はシャツの汚れるのも心になく、地面に這い、転がって、下からシャツターをきり、脚立にかけのぼって、上から妻の宙吊りのポーズをねらった。

私のロープを握る掌はしびれてくる。思いきってロープを体に巻き、ぐいと両脚をふんばってこらえる。私のこの必死の態勢もものかわ、徳永昭三は、香代夫人の腰の辺りを強く押した。裸体が空間にゆらめき、夫人はむなしく空中で足を数度ばたつかせた。重い体を支える晒布は、胸から腋にかけて深々と肉に喰いこんで、苦痛を口にせぬ彼女の苦悶をまざまざと物語っていた。

「まだですか？」

「もう少し——」

この短かい会話が私と水野弘との間に数度かわされ、彼は容易に妻を許そうとはしなかった。既に彼女の腕の辺りから手首にかけて肌の色は変わりつつあった。私の両手も又この重いお荷物を引上げているのに、かなりの苦痛と腰の痛みを覚えつつあった。

水野弘はやおらカメラを地上におくと、つかつかと近づいて来て、最愛の妻の臀部を平手で、パシリと小気味よい程の音をたてて叩

きのめした。三つ、四つ、うっすら手型のついた真白いたおやかな臀部に、彼は永久にこのシーンの記憶を刻みこむかのように、頬を染めて、妻の呻きを聞き乍ら、その烙印を喰い入るように見つめていた。

× ×

時計は三時近くを指していた。子供達の帰宅まではもう残すところ一時間許りしかなかった。貴重な時間の消費に、始めて水野弘は自分の考えを提案した。

「辻村さん自身、余り興味ないかも知れませんが、最後に、引廻して処刑と斬首をとりたいです。協力していただけませんか」

「ああ、いいですとも。水野弘の長年の念願ですものネ」

「本当は、地面に深々と首穴を掘ってやりたいし、さかさはりつけや棒杭を打って、曝し者もやりたかったのですが、急なので準備も出来ず、とても無理でしょう。あの広々とした裏庭を引廻しにした上、斬首の刑で我慢します。そこを適当にやって下さい」

「八ミリでもあれば、よかったですネ。役者は揃っているんだから」



「そう思ったのですが、二兎を追う者は何んとやらで、やはりカメラの方にしました。時間もありませんから早速、じゃあ」

天気はよかったが、裏庭は流石に空気が冷めたかった。私も徳永氏も裸になる。禪一本

しめたかったが、今言つてすぐおいそれとはなし、布を探すのも大層なのでハダカ道中である。殆んどの花は枯れて、唯、菊のみが片隅に一かたまりに咲いている。将来ここを花畑としたい私の構想で、ひとつは野外プレイの場をも兼ねて、すっかりトタン板塀でかこってしまった。数十米先の三階建の新築の窓から覗いておれば、この庭園の光景は丸見えであろうが、今の私達には、そんな杞憂すら問題にならなかった。私と徳永氏は香代夫人を荒縄で縛り上げ、縄尻を握って、庭園に通ずる戸を押した。広々とした五十坪許りの庭園をぐるりと一巡すると、徳永氏が心得て黒々した土壌の上に古むしろと、竹編みの籠をおく。仕置場をここにきめて、私達は改めて香代夫人を太縄で犇々と後手に縛り直した。舞台用の大刀を持ち出して来て、私が引導を渡し、斬首するのである。芝居がかつていても、積年の水野氏の趣味を心得ている夫人はいとも神妙にうなだれて、今まさに処刑に服さんとする女囚の感を、そこはかとなくただよわせていた。

所詮はプレイである。刀を振りかぶり、えいと首を打つシーンが、水野氏の懇請で数回いろいろの角度から行なう。ここでポトリと

首が落ちたらそれこそ大変である。斬られてうずくまる香代夫人の体を足蹴にして、私はあおむいた彼女の体を、チクチク刀でつく。

一転して、私と徳永氏は非人と変貌する。水野弘に言われる俚に、私達二人は女囚にいどみかかる。香取環主演の『赤いしごき』にも、これとよく似たシーンのあったことを、私は鳥肌の立った、晩秋の空の下で嘯みしめていた。

ともすれば夫の手前、私達は尻込みし勝ちになる。

「もっと強烈に、虐めてやって下さい。私に遠慮しないで……」

叱咤するように彼は叫び、ひたいに汗すら浮べて、私達の女囚を罵るシーンをとりまくっているのだ。今や私と徳永氏は完全に助演者であり、香代夫人はヒロインであった。

どこまでも凹みそうな餅肌に爪を立て、私は挑みかかった。夫はそれを歓こんでいるのだ。新築の三階の窓から覗く人あれば、私達のこの光景を何と思うだろう。そんな冷静な判断をもつのは恐らくこの四人のグループのうちで私一人かも知れない。徳永氏は益々眼をギョロつかせて息遣いも激しく、水野弘のズボンにも白いカッターにも、黒土がこびり

つき、ヒロインは微かな鼻息を忍ばせて、荒々しい狂撫を甘受して、陶酔にひたりつつあった。

白昼夢——。そう、それは正に白昼夢に近い一コマであったかも知れない。

「辻村さん、有難うございました。お蔭で充分堪能しました。もしお差支えなければ、明日、もう一度この場所、はりつけと、この樹へ吊して、吊し斬りをとりたいたのですが、構いませんか」

「いいですとも、私もやって見たい。ただし奥さんさえよければネ」

「どう、いいだろう」

彼は妻へ問うた。

「……」

夫人は笑って応えない。それはしかし許容を示した笑顔であった。香代夫人はすっかり被虐に耽溺しているかのようであった。

「私も泊っていいかな」

疎外されたように思ったか、徳永氏が私の返事をまった。

「相棒がいないと、お芝居が捗らない。願ったり叶ったりだよ」

そろそろ時間だった。何も知らない子供は勢いよくこの場へ走って来て、驚いて卒倒す

るかも知れない。ここらが汐時だ。

「少し寒くなつて来ましたよ。風邪を引いてもつまらんから、この辺りで止めましょう」

一行はそろそろと離れの居間に戻る。庭園での激情から醒めると、一気に寒さが身にしみ渡ってきた。香代夫人はその足で風呂場へ直行する。

妻に伝えて、寒さしのぎにウイスキーを持ってこさせ、私達はグラスに一、二杯それぞれにあふれるように呑み乾していた。

「今から奈良へ遊びにゆくが無理かしら」

古都を知らぬ香代夫人は、数分前までのプレイのしこりをケロリと洗い流して湯上りのホテった顔で、男共の思いもかけぬことを呟やいた。

「秋の陽はつるべ落しだから、少し無理でしょうネ」

「でも折角ここまで来たのだから、一度法隆寺でも拝見したいんですけど……」

「じゃあ、すぐ支度して出掛けますか、暮れなずむ、秋の暮色の古寺の風景も悪くないでしょう」

私はそう言った。香代夫人の希望もいれてあげたい気持ちしきりだったのである。二時間以上のプレイの数々の間、彼女はついぞ愚痴

もこぼさず、易々として協力し、自からも愉しんでいた。

「すまんですなあ、辻村さん。じゃあ家内のために一走りしてくれますか」

車で一行が家を出ようとした入れ違いに、長男と三女が同時に帰って来た。見知らぬ水野夫妻に、一寸怪訝な面持で、それでもニコリと頭を下げると消えていった。

斑鳩の里まで一気に走り法隆寺を駆足で表より眺め、郡山市の片桐をぬけて、薬師寺、唐招提寺を廻る頃、茜色の西空は暗くつまれていた。遥かに高円山、三笠山が望見出来古都の秋は静かに暮れなずんでいた。

× × ×

夕食時のビールが廻ってか、私の口も軽く香代夫人の唇も綻ろんでいた。

子供の寝静まったあと、再び室内でプレイすることになっていたが、それまではどうにもならない。座談めいた雰囲気の中で、プレイに関係あるものを抄録しておこう。

「岐阜は全然知らないんです。どんなところですか？」と私。

「さあ、どういっていいか。岐阜の市内からだと、国道一五六号線を走って、関市、美濃市をぬけ、私の土地辺りでは郡上街道という

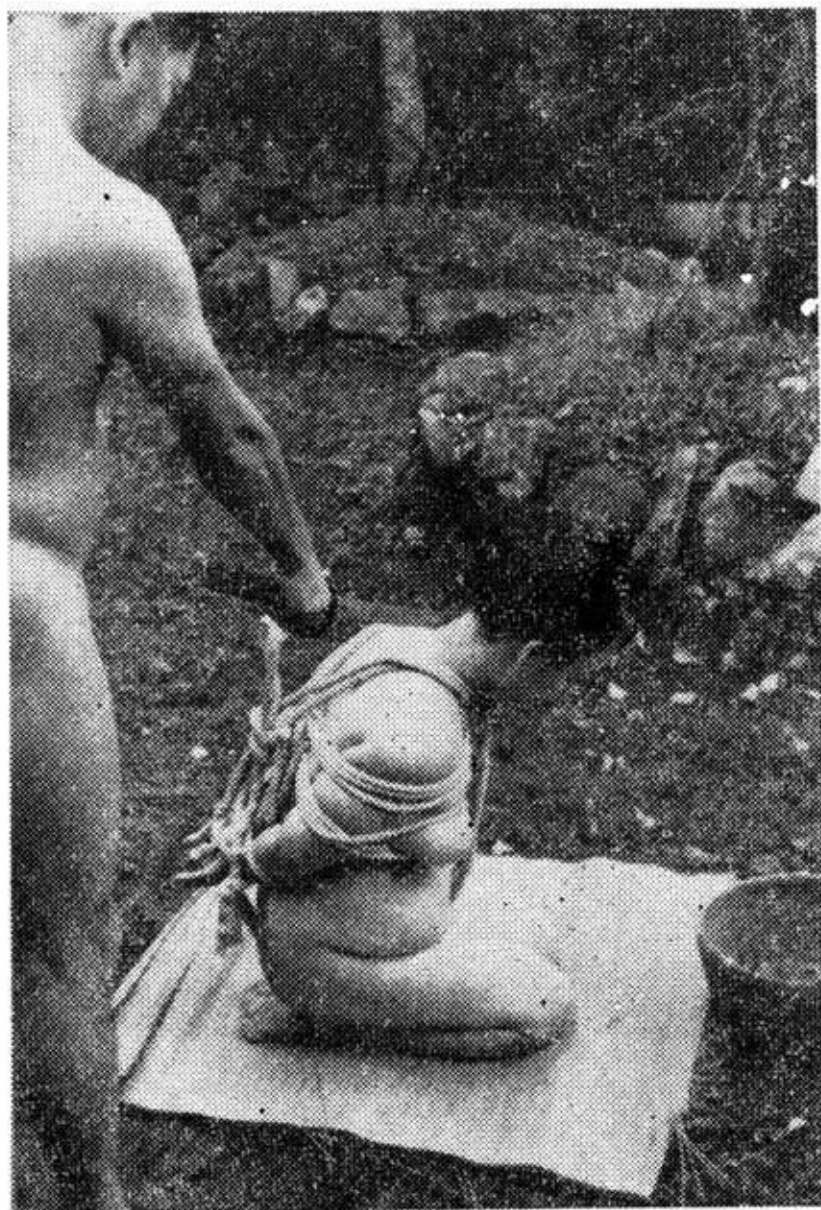
のですが、この辺で美並村と聞いてもらえば分ります。汽車なら刈安で下車して、一時間ぐらい歩きます。兎も角草深い田舎ですよ。車でもし来られるなら、美濃市までは完全舗装で、それから少し悪くなりますが……」

「一度日本ラインから、犬山公園、明治村へドライブしたいと思っていますが、近いですか？」

「そうですね、名鉄の各務原線に沿って、岐阜の市内へ出て、それから一時間半ぐらいでしょうか。山間部だけに、暖かくなったら野外プレイは、いくらでも可能です。半日以上ひとっ子一人も通らぬところもありますからね。冬は雪がかなり深いので、雪責めをしたいと思いますが、寒いので、とても無理でしょう」

「水野さんは野外のプレイを余り撮りませんね」

「二度許り撮ってみました、通らぬといっても、いつどこからヒョッコリ現われるかも知れないと思うと、矢張り落付かなくて、つい縛り方も急いでの簡単なものになってしまします。何しろ古い土地柄で、かなり遠くの人まで、殆んど顔馴染ですから、一度見つかっちゃうと、もう村中の評判になること請合



ですからネ。連れ立って外出することも余りないですよ。私は辻村さんの裏の、あんな庭園が羨やましくて仕方ない。あそこなら処刑もののどんなものでも可能ですからね。首だけ出しての生理めや、はりつけ、逆吊り、どんなことだって出来るでしょうに——」

「あの時申し上げなかったけれど、塀越しの三階建ての新築あったでしょう。あの窓からなら、残念乍ら庭園内は丸見えなんです。ヒョットしたら覗いていやしなかったかと、実は気がじゃなかった」

「だから、何かそわそわして慌てていたのですか」

「こんなシーン見られちゃ、私のジェキル博士の面目丸つぶれですからね。でもあの三階建を蔽い隠そうとしたら、それこそバカ高い塀がいるでしょう。仕方ないんです」

「私も全裸の野外の責めを一度撮りましたが勿論夏で、妻はワンピース一枚きたきりの時です。ワンピースをパッと脱いじやうと、下はすぐハダカなんです。しかしやはり冒険ですネ、家の近くじゃ。自然安全な家の中のプレイになり勝ちです。まあ来ていただいたら分りますが、松茸のよく上るところですから、今頃なら松茸料理でも作らせますよ」

「腹をきめたらそう遠くもないんですからね。車で妻も乗せていって、夫婦の

ダブルプレイも面白いでしょう」

「その時は、私も女房を連れて行くから、三組の夫婦のプレイなんて、これは圧巻だよ」

徳永昭三が横から、本気な顔付で口をはさんだ。彼ならやりかねない。うっかり口を滑らせて、又やいのやいのせかされるかもしれない。

「奥さんとは、今でもよくプレイされるんですか？」

「何かの拍子にパッと燃え上がる時もあります。が、何しろ女房相手に一人でコソコソやっているものですから、あらかた私の考えている限りの縛りは撮りつくした感じです。私自身Sだと自認していたのですが、思いもかけずM的な面もあるんですネ。女房に縛ってもらって、いろいろ虐められたりすると、反ってハッスルするんですネ。それが夫婦プレイというのかも知れませんが……」

「夫婦プレイの場合、夫は必ずしもSで、妻はMであるとは限らないと思うのです。妻がS的な立場にあって、夫を責めて見るっていうのも夫婦プレイでしょうネ。普段の生活では、妻は夫に対して大体服従的なものですから、偶に相許した夫婦同志、プレイの場合ぐらい馴合いの上で夫を虐めて見たい気も起る

のじゃないかと思ひます。勿論、お互いを信じ合つてこそ出来ることですが」

「夫婦の場合、そんな傾向が多いのと違ひますか？」

「私の知っている夫婦プレイでは、徳永さんもそうでしょうか？ それに新宮明夫、増田喜代司。ハントにしない友人のKというのも、Sも大体皆SM交歓プレイです。そんな信頼しあつた夫婦に限つて皆仲がスゴクいい」

「辻村さんは、どうなんですか？」

「私？ 私はやはりSの場合が多いな。以前数度妻に要求したが、ちつとも縛っちゃくれない。自分の方を縛つてくれていつてー」

「辻村さんの奥さんは従順なんですよ。やはりM的と思ひれますか？」

「でもなさそうです。私が頼めばいやと言わないで何でも協力してくれますが、自分からは好まないですネ。ところで水野さんの美並村って、岐阜のどの辺りですか？」

「大体岐阜県中部の南寄りです。義濃市という三万人そこそこの市なんです。ここは美濃紙で有名なところ。そうそうこの美濃市に二十年來の古い友達で愉快な奴がいますネ。枕絵描きの名人なんです」

「ああ、例のあの方の絵、そいつは見たいで

すな」

「特産の美濃紙を使って、克明な枕絵をうまく描くんですが、最初は浮世絵のそんなものの模写ばかりしていましたが、すっかり腕をあげて、彼独特の面白いものを描くようになってきましたネ。単なる美しいだけのものから脱皮して、近頃は耽美的なものを描いてばかりいますよ。出すところへ出せば、かなりいい値がつきそうですよ」

「枕絵じゃなく、SM的な嗜虐趣味の絵など頼んで見たら如何です」

「ええ、あるんですよ十枚許り。でも発表出来ない、ドギツイシロモロです。奴の言うには、シャシンは所詮限度があるが、絵は絵空事といつて、どんなことでも空想を交えて描けるから愉しいなんていつてました」

「例えば、どんな絵があるの？」

徳永氏が傍らから口を出す。

「私が訪問した時、見せてもらえなかった」

「あの時は、プレイの方に気持ちが走つていて絵を思い出すどころじゃなかった。悪かったですネ。私が今でも、傑作と思うのは、半紙四枚ぐらいの大判の美濃紙に、極彩で描いた地獄絵図ですネ。ズタズタにされて責めさいなまれている女は、なんと私の家内の似顔な

んです。牛頭馬頭共がよつてたかつて責めているんですが、それがスゴイ。皮をむかれた赤裸の女が化物共に逆さに両脚を持たれて半分引き裂かれ、グラグラ煮え立つ釜の中で、他の女がゆでられている。見遙かすバックの樹林には、十数人の女が、片手吊りや片足吊り、又首吊りでブラ下っている。引き裂かれている女の顔が女房なんです。夢に見ますよね、これは」

「その絵描きさん、枕絵かかしとくの惜しいネ。結構S型だよ」

「ところで新宮さんとは、その後どう？」

と徳永氏口を挟む。

「手紙のやりとりは続いています、何しろ、新宮と岐阜の山奥では、流石に一寸無理ですネ。でも、いつも一度会つてプレイしたい気はあるんですよ」

「生首フォトも、新宮氏とあなた、それに剣持逸人氏とで後続つづかず立消えましたネ」

「その代り、近頃夫婦プレイがふえて来ました。私も転向して、夫婦プレイものを、いつか投稿して見るつもりです。奇クも諸種の制約があるのか、幾分マンネリですネ。誰かパツと目新しい嶄新な方向を開いてくれる人があれば、いいのですが……」

「私のカメラ・ハントも最近は類型化しています。以前にくらべて、プレイの描写が段々と少なくなり、如何にしてその女性をハントしたかに重点をおいている恰好です。二十年近く奇巧に書き、数多くの女性を縛ってくる、正直いって縛ることに少し飽いて来た。」

ハントすると縛らねば悪い様にして一応縛っています、そのうち縛らない、精神的なSMのハントも書いてみるつもりです。女性は皆が皆、被虐者の立場じゃないんです。アーヌスの好きな女性、クリスタールに興味ある人、又マコのようにS的女王タイプ。いろいろありますからね。単なる女性のポートレイトのみを掲載して、こんな広範囲な女性を描いてゆけば、もっともハントの範囲は広くなるのですが。縛った女性のみをのせるのがハントではない、と、まあそんな気持ちになっ

てきているのです」
「辻村さんの仰有ることはよく分りますよ。しかし読む方の側からいえば、何でもないポートレイトよりも、矢張り緊縛の、新しい女性のフォトを好みますね。少くとも私は——」

「次々とあればそう願いたいけど、そうそうざらには転がっていませんからね。箕田編集

長から、次号を催促されると、ぞっとする」

「女房のみを後生大事に、営々孜々と撮り続けている私なんかにくらべたら、まるで遠い世界の物語みたいですが。せめて元気な間に一人や二人、思い切ったプレイの出来る女性をとって見たいのは、私ならずともプレイするものの果敢ない願望でしょう。妻も分ってくれる筈です、私の気持が……。女房とプレイしますとネ、そのあと、私の体中のフシブシがずきずき痛むのです。そのことを言うとな女房に怒られますがネ——」

水野弘は、フト意味ありげな笑みをニヤリと浮べた。その時は何気なく聞き流していたが、彼の笑いの意味をその夜悟って、私は微笑を禁じ得なかったのであるが……。

話はいろいろと四方八方にとんで続いた。

徳永昭三のお喋りには、ここで割愛したが、彼も私以上によく喋っている。プレイ談義を書きかけると、紙数がいくらあっても足りない。プレイから一転して、お互いの夫婦の生活のあり方となってくると、中年男の図々しきで、話も露骨になり、落ちるところまで落ちてしまう。高橋鉄氏にでも聞いて戴ければ、データーになりそうなこと許りである。契めるままに彼等も夫人ものみ、又私もい

つしか酒量を過していた。

その時であった。予期せぬ電話のベルが、けたたましく断続して鳴り響いたのは。

市外電話の呼び出しのベルである。

「えッ？ 誰。水野さんを呼んでくれって？ あなたは？ ハイ、かわります」

草深い田舎で、水野氏宅には電話はなかった。それは数軒先の酒屋からであった。水野弘が不審の面持で電話に出、ついで夫人が代った。聞くうちに香代夫人の顔から、柔らかな笑いが消え、緊張した気配が窺がわれ出した。受話器を伏せ、彼女は夫に困惑の表情で告げた。

「どうしましょう、一番下の娘が急性盲腸炎で入院したんですって。すぐ帰ってくれって言うが、今からではどうにもならないし……」
「何てことなんだろうネ。滅多に揃って出ることもなんかありやしないのに、そんな時に限って、こんなこと起るなんて。どちらにしても、もう帰れやしないよ。充分頼んでおいてくれよ」

「子供等も心細いでしょうにね」

呟やくように言って、香代夫人は再び受話器をとる。その善後策というか、処置はテキパキとして、夫より落ちついてた。

私達の酔いは一ぺんにさめ、白々しい困惑の空気が流れた。誰しも何と喋りかけていいかわからず、私の妻も他人ごとながら洩れきいて、ウロウロしている。その激んだ空気を破ったのは香代夫人であった。

「まあ、ここでジタバタしても始まりませんわ。アッペの発見が早くて、お医者さんにかつぎ込んだのだから、心配することもありませんわ。オペラさえ早ければすぐ治るわ」

草深い田舎の主婦の口から、アッペ（盲腸炎）だの、オペラ（手術）だのという、医者用語が飛び出し、母親たる香代夫人が最も落付いていることに、私は改めて彼女を見直さねばならなかった。

「驚いたネどうも。突発事故で……。それにしても、奥さんプレの経験あるんじゃない？」

「ええ、昔、主人と結婚する前、二年許り白衣の天使で従軍したことあるんです」

「そいつはどうも。どこか緊急の場合違うと思った」

「それにこれは『おはなはん』の免許ももっているんですよ」

水野弘が言う。

「えッ、何？」

「助産婦なんですよ」

「いよいよビックリ」

「まあ、今更バタバタしても始まりません。ゆっくりしますよ」

憂い顔だった水野弘も、妻の泰然たる様子に眉をといた。

私は時間稼ぎにコレクションを開陳した。

子供の寝るのを待つ時間は実に長かった。やっと静かになり、私達は音を殺して、応接間から離れ座敷に移動した。家内が床を三つ並べて敷いてある。水野夫妻と徳永昭三の分であった。夜の電話が心に重く沈んで、私は深更のプレイにさして気乗薄であった。出来れば、この昏、水野夫妻をそっと寝かせておいてあげたかった。その私の気持を察してか、香代夫人はわざと快活な口調で、

「さあ、いよいよプレイの時間ですわ。ドンと来いって……あらッ、こんなこといってはいけなかったかしら」

× × ×

水野弘は定位置でカメラを三脚にとりつけ長尺リリースで操作して、プレイの仲間に加わって来た。香代夫人ひとりを手とり足とりで、三人掛りで縛ると、忽ち数分足らずで強烈な緊縛が完成した。三人の男がよってたかって責めるポーズが、ストロボの閃光の間に

間に、鮮烈な印象を部屋に撒きちらして消える。胸から足首まで、ぎっしりと縛り上げられた香代夫人は、豊満な肢態をもみくちゃにされて、喘ぎ、呻き、悶え、男臭い体臭の中で無惨に弄あそばれていた。しかし私は彼女の苦悶の様相の中に漂よう、被虐の悦楽を判つきり感知した。今の夫人の脳裡には、子供の急病のことも、日頃の母としての心遣いも夫とのことも、生活のなりわいも、すべては忘却の彼方に押しやられ、あるものは、牝の本能だけであった。赤裸々な被虐の愉悦にのたうつオンナが、生々しく、たぎりたつ激情のしとねでのたうち廻っていたのである。

男は三匹の牡と化して、餓狼のように、貪らんにオンナをむさぼり、そこには夫である筈の水野弘もなく、等しく平等の権利を得た男のサカリを過ぎた野獣共が獲物を求めて、われ勝ちにガツガツと御馳走にありつこうとしているようであった。絶え間なく間隙を縫って閃光は走っていた。男共のけたたましい動きが、憶面もなくカメラに納まっていることは間違いない事実であったのだ。

荒れるに任せて、香代夫人の縄はいっしかずれて、体に藻のようにまとわりつき、いつしか誰が除いたのか、邪魔もの扱いに、それ

らの縄は、彼女の肌から外れていった。自由になった香代夫人の指が、私の二の腕を俄破と掴む。掴まれたその強烈さに、私は愕然となった。スゴイ指の力だった。爪も立てないのに、二の腕に喰い込んだ指は、魔女のようにぐいぐいと、皮肉に喰い込んでくる。指は離れ、傍らの徳永昭三の肩にかかった。途端に彼は眉をしかめた。三匹の野獣共はところきらず、香代夫人の指の洗礼をうけて、し

がみつかれた。それを離そうとし、彼女は誰れかれの見境いなしに妖しい指を立て続けた。いた。

水野弘の自動巻きのカメラが廻らなくなった。それをシオに、甘い乱れた悦楽のプレイは終わった。香代夫人の血の気の引いた、ほつれ髪のはほにかかる白い能面の顔は、いいようもない強烈なショックを私に与えた。これは耽溺の果ての、凝固したオンナの素顔であ

△華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版写真集

グラビア印刷

美しき縛しめ

第四集

一〇〇〇円(送共)
略号 △美4▽

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

◎縛られた美女ばかりのフオート八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)
ブロック石抱き責め (木村洋子)
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)

革拘束具による組写真 (大塚啓子)
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)
セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)
野外に於ける晒責写真 (玉田・木村)
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
両足吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真 八十葉▽

ろうか——。(私なら体が持たないぞ) プレイのあの激しさに、私はみはる思いで、改めて香代夫人の徐々に柔和をとりもどした白いスベスベした優顔に魅入っていたのである。私は真底疲れきっていたらしい。ゲッソリして、その場にヘタヘタと坐り込んでいた。乱れを直した夫人が、にじりよって私の背にそっと両手を置いた。私は先程来の指の魔力を思い出してビクリと肩をすくめる。

「凝ってる様ですわ。さあ、横におなりなさい。私が体中をもんであげますわ」

躊躇する私を、半ば命令するように、そこへうつぶせに伏せさせて、香代夫人はやおら私の上に馬乗りになると、実に巧みな手技で体中をもみほぐし出した。

「妻はマッサージ師の免許あるんですよ。どう、上手いものでしょう」

ますます分らなくなってくる。この一主婦の正体は一体何なのだろう。

看護婦・助産婦・鍼灸師……未だ出てくるのではなからうか。

快よい疲れがドッと出て、私は不覚にも夢魔についウトウトと誘い込まれていた。

ハダカの香代夫人が、私の体に馬乗りになり、恐ろしい圧力で私を押えつけ、身動きの

出来ぬようにして、体中の関節を、あの彼女の魔力を秘めた指先で、片っ端しからはずしてゆき、私を骨抜きにして、体中から精気を絞り取っていた。脂汗のような精気が、白い巨塔に吸い込まれて行く。私はガイコツの様になって、バラバラの手足を、動かしもならず、蒼黒く褪せて、香代夫人の雄大なおしりの下で、とぎれとぎれに喘いでいた。束の間の悪夢から、フト正気に還ると、彼女の指が飽きもせず、私の腰の辺りを撫でさすっていた。

「いい気持そうに眼をつむっていましたネ」
水野弘は手持無沙汰そうに、私の寝そべった姿を見ていた。厚く札を述べて、私はノロノロ立上る。

呑み残しのウイスキーとグラスをもってくと、再び深夜の酒宴をつづけるつもりで、グラスに液体をそそぎに廻った。

水野弘の声は澄み切って洪かった。口吟む「ベッサメムーチョ」の調べが、山奥育ちとも思えぬ都会人のセンスを彼の肌感じさせた。負けじと徳永昭三は「巴里祭」をやや名調子で吹いてきかせた。私の「奥さまお手をどうぞ」と続くと、大正に生れた同年代の親しみが、静まり返った夜のしじまを破って、

あの歌、この歌と果てしなく続いていった。「こんなに唄うなんて、とても機嫌いいのですわ」

夫の唄いはおける赤い顔に眼をやって、香代夫人は、しみじみと愉しげに呟やいた。

× × ×

眠ったのは、午前三時半であった。深い眠りの私の耳許で声がある。酔いの残った脳裡の底で、それが水野弘の声として、私は懶うげに眼を開いた。

「お休みのところ恐縮です。どうも子供のことが気になり出したんです。一番の電車で帰りたいと思うんですが——」

そうだったのか。起き上ると、徳永氏も支度をととのえ、夜更けて雑魚寝した私の布団のみを残して、綺麗にたたみ上げられてあった。時計を見ると午前五時半。二時間少し睡ったらしいが無論寝不足だった。彼等はロクロク寝ていなかった様子であった。

こんな時間に、列車の時刻表も見ず出発しても、うまく連絡しているかどうかと想ったが、夫妻の子を想う親心を思う時、無理からぬ気持だと察しられた。プレイの果ての、その快樂のさめたあとに、恐らく汐騒のようにヒタヒタと不安が押しよせて来たのではなか

ろうか。

暁の光が東の空を薄明く染めだした。朝食もとらず身支度もそこそこに、夫婦は追い立てられるように、私の家を辞去しようとしている。徳永昭三は仕方ないといった。やや不機嫌な顔付で、咳込み乍ら朝の煙草をふかしていた。私も大急ぎで服装をととのえ、車を出して一同を乗せた。

あわただしいキヌギヌの別れ。プレイの名残りの、香代夫人の乱れ髪が、私の琴線を妖しく撫でた。

今日のプレイはすべて御破算となった。それも致し方あるまい。

前触れもなく、唐突にプレイは始まり、朝もやと共に風のように去ってゆく水野夫妻。燃ゆる想いに明け暮れた、十八時間の滞在が私に一生の思い出を植えつけていった。

駅まで送って車を降りる時、私は香代夫人と握手した。万感をこの指先にこめて。

水野弘は見ていた。夫は快く笑っている。彼は手を振ると、夫人の肩を抱くようにして、朝もやの立ち籠めたプラットホームの方へ、振り返り、振り返り消えていった。

× × × × ×

アルバム／美しき縛しめ／第九集

女性刑罰拷問特集／「西洋篇」 略号／美9

革具に拘束される女 一部 一〇〇〇円 (T共)

むんむんする革の臭気にもせかえった革の緊縛女体集
「革具に拘束された美女の媚態七十二葉の豪華版」

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号美5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグ
ラビア印刷写真集を、ここに完成
いたしました。真白で豊かな肉づ
きの女体が、黒光りのする革具、
或は褐色の牛革具によって厳重に
縛しめられたさまを七十二枚の大
小の鮮明なるフォトによって、と
っくりとごらんに入れます。

内容

○T型に磔られた女正面像（くさ
り、尾錠付革具使用）／三葉
○皮張椅子に拘束された女（手枷
革具くさり付、首、胸、胴、脚、
脛、足首固定革具使用）／二葉
○革製猿ぐつわを噛まされ全身ガ
ンジガラメに緊縛された女性（全
身縄緊縛、革箱口具使用）／二葉
○皮張椅子に固定仰臥させられた
女体のアップ／三葉
○黒覆面（革製）並に黒革褲（チ
ヤック付）着用、両前手錠及び黒
革褲単独着用の女／四葉

○黒革猿ぐつわ、首絞め股間括り
両手、膝、足首拘束／五葉
○電気椅子に固定された女死刑囚
／四葉
○口腔強制検査／三葉
○女死刑囚の生体実験／一葉
○黒革覆面貞操帯着用にて前手錠
立姿の女／一葉
○並に同じ姿にて
の各種ポーズをとる女／五葉
○革製猿ぐつわ、首輪、股間並に
膝固定立柱括り前手錠／二葉
○全身革具に固定される女の正面
背面、仰臥姿勢各種／十二葉
○貞操帯着用にて黒革製長椅子に
仰臥固定される女の肢体／四葉
○牛革製箱口具、股絞め、股間固
定絞全身拘束に呻く女／五葉
○首革枷、両手枷、両足枷を鎖で
繋がれた女の全身裸像／一葉
○牛革具に拘束された女性の正面
背面、側面、各種姿勢／七葉
○首輪、両手枷、両足枷に鎖をつ
けられて引回される女／三葉
○貞操帯を着けた女／二葉
モデル—美木乃々子—大塚 啓子

限定版グラビア印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円（送共） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真集

内容

○絹川女王様の足台になって奉仕
しているマゾ男（扉一頁一葉）
○山原女王様に縛られ人間馬にさ
れてムチ打たれる男（四葉）
○大塚女王様に後手高小手に縛
られ浣腸を施される男（四葉）
○山原女王様の足の指に挟んだお
菓子を食べせられる男（四葉）
○大塚女王様の使用されたチリ紙
を足の指に挟んで与えられ、それ
をムシヤムシヤ食べる男（六葉）
○山原女王様を背中にお乗せして
乗り潰され喘いでいる男（四葉）
○大塚女王様の激しいムチ打ちに
歓喜の身をふるわせる男（四葉）
○山原女王様の手によって次第に
後手に縛られてゆく男（八葉）
○絹川女王様のハイヒールで手錠
の手首を踏まれる男（三葉）
○山原女王様の按摩をしながら足
の指をしゃぶる男（三葉）
○縛られて身動き出来ぬ身を山原
女王様の手で鼻責め（一葉）
○サジスチン宮井美佐子の乗馬ス
タイルとムチ打ちポーズ（八葉）
○山原女王様と鈴木晃子女王様に
縛られムチ打たれる男（三葉）
○鈴木晃子女王様の馬にされ裸の
尻をムチ打たれる男（一葉）
○絹川女王様のハイヒールで顔面
を蹴弄されている男（三葉）
○絹川女王様からローソク責めに
されている男（二葉）
○大塚女王様の足の踵で鼻責めに
あう男（一葉）
○お化粧をする絹川女王様のスツ
ールになって奉仕する男（一葉）
○山原女王様の激しいムチ打ちに
のびてしまった男（一葉）
○絹川女王様の真白い足の裏で顔
面をびったり踏まれた男（一葉）
○絹川女王様のはいたスリッパの
先をくわえる犬男（一葉）
○絹川女王様の脱いだばかりのパ
ンティをかぶせられた男（一葉）
○絹川女王様に麻縄で後手高小手
手に縛り上げられる男（一葉）
○大塚女王様の足の指を舐めさせ
られている男（二葉）
○絹川女王様の足の指をおいしそ
うに舐めている犬男（一葉）
○山原女王様の足の指を無理矢理
舐めさせられている犬男（一葉）
○後手に縛りあげられ大塚女王様
に浣腸させられている男（二葉）

浣腸隨想

狭き門

秋根登志雄

一、羞恥の姿態

私が彼女と、そんな関係になったのは、極めて平凡なお客とホステスという有りふれたきっかけからです。囲うの世話するのと云った間柄ではなく、ただ何となくお互に求め合えばホテルに行ったり彼女のアパートを訪ねたりして一夜を楽しむだけのことでした。

中年を過ぎて幾つかの女性遍歴の末、辿りついた宿命の一駒です。

この告白は、ただこれからお話するその方面に全く白紙であった彼女が、長い日時をかけた忍耐強い試みで次第に私の特殊な趣味傾

向に順応していった過程の記録です。

彼女と知り合った頃は、上背のあるのと渋い和服が似合うので三十才位に見えました。当時一応名の通った銀座のバーでは、中堅どころの感じてしたが、つき合って行くうちに案外若くて、二十五才を出たばかりということが判りました。

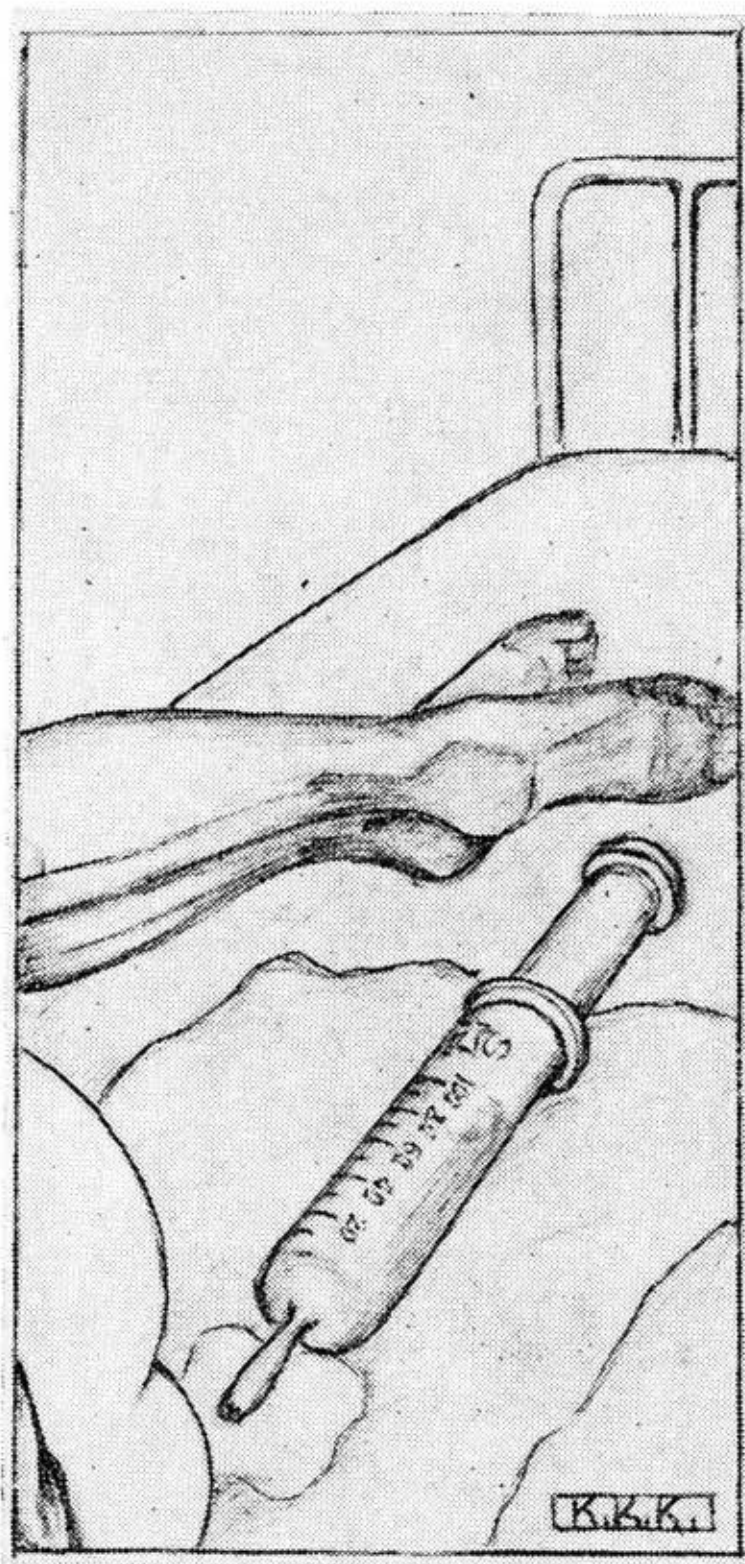
郷里の学校を出てから洋裁の勉強のために上京し、アルバイトで喫茶店に勤めているうちに、年をとり、バーで働く様になった様です。別に詳しく詮索しませんでした。余り目立たない上に内気な方でしたから珍しく男出入りはなかった様子でした。何の特徴もな

い平凡な十人並の器量でしたが、ただ東北生れ独特の大柄で豊富な肉体と抜ける様なきめの細い真白い肌の持主でした。

当時、私は毎夜別に何の目的もなく酒を飲み歩いていましたが、酔った転みで彼女とそんな関係になってから、どちらからともなく誘い合って、週に一、二度は会う様になりました。

最初はそれ程に思わなかった私も、彼女の素直な性格と今迄の経験で味えなかったボリユームのある餅肌の肉体には、年甲斐もなく次第にひかれて行きました。

彼女の方も私によって目醒めた女盛りの生



理的欲求が、無言のうちに私を求める様になり、平凡でささやかな交渉が半年余り続きました。その頃から私は昔の海外での荒んだ生活の体験から、正常な行為だけでは何となく満足出来ず、次第に刺戟を求め変化のある体位を要求する様になり、年のせいもあって同時に視覚による刺戟がないと目的を達し得ない様になって来ました。最初は人一倍羞恥心の強い内気な彼女は異様な姿勢と肉体の内部を覗き見られる様な体位を要求されると、泣かんばかりに頑強に拒絶し続けましたが、次第に私の根気強い哀願やら強要に負け観念し

て三度に一度は私の好む形をとる様になりました。

最初は、その時は電灯をつけることも嫌った彼女が私の好み通りに明々とした電灯の下や白昼でさえ恥かしさに耐えて私の要求通りの姿勢で体の隅々まで見せてくれる様になるには相当の日数を重ねてからのことでした。

それでも大抵の体位は観念してなすままになりましたが、ただ獣じみた姿勢をとらせ彼女の最も魅力のある部分、豊満な二つの丘を後方から微妙な角度で眺められることには、異常な羞恥を感じるらしく、身をよじって抗

いましたが、そうした風情は一層私の気持をそそり、会う度に毎回一度は、このポーズを強制する様になりました。

こうして滑らかなゆで卵をむいた様な綺麗な二つの球形を眺めていると、通常のセックスの対象の場所以外の、もう一つの可憐な個所に何か嗜虐的行為を加え度い衝動にかられてきます。

そこで矢張り何とか納得させて浣腸を試みることを決心しましたが、普通の姿勢では見えない部分を、細かく観察されるだけでも、消え入る様な羞恥心に悶える彼女が、さらに浣腸器で薬液を注入されることなど到底応じる筈はありませんでした。

果して遠廻しに美容によいからと浣腸の話を持ちかけますと、全然経験もないくせに想像しただけで、異常な恥かしい行為との先入感から頑強に断り続けました。しかし私は断念することなく根気よく、そのチャンスを待ちました。

二、浣腸へのいざない

丁度その頃、彼女の綺麗な肌にも時々小さな吹き出物が出来て便秘気味なことを訴えました。好機到来、次の日は何んとしても浣腸

してやろうと心に決め、途中で成人用のいちじく浣腸を二個求めピンで穴を開けて、そつと寝台の下に隠しておきました。

その日は「君の便秘を簡単に治してあげるよ」と云うが早いか、稍々乱暴とは思いましたが、いきなり彼女を寝台の上に俯向けに押えつけ手早く下着を引き下げ、続けざまに用意したいちじく浣腸を二個、注入して仕舞いました。二つ目の終り頃、彼女は苦しそうに「もう出そうよ」と悲鳴をあげましたが、そのままの姿勢で脱脂綿で強く抑えてやりました。やがて五分と我慢出来ず小走りに手洗に立っていきました。しかし効果は充分あったらしく、帰って来るとベッドの上でしばらく目をつぶって初めて浣腸の後の気分を味っているようでした。

その後も会う度毎に、同じことを試みましたが、矢張り浣腸が異常な恥かしい行為との先入観が抜けないうえ、毎回納得させてポーズをとらすのには手間がかかりました。

彼女が何時迄も浣腸されるのを嫌うのは、極端な羞恥心と恐怖心から嘴管が鳥渡触れただけで反射的に拒むので余計に嘴管を挿入される時、強く軋んで疼痛を感じることがわかりました。

そこで少しでも彼女の苦痛を和げ浣腸に慣れさせる様に浣腸器の使用前にハイボールを混ぜるマドラーの先端の球にヘアークリームをたっぷりつけて直腸内に二三度出し入れし狭い部分を充分潤してから浣腸を施すことにしましたので、その後は嘴管の挿入にも苦痛を訴えず異常な筋肉の収縮も少くなり可成り楽に浣腸が行えるようになりました。

こうした試みを重ね、やっと慣れてくると今度は小さなセルロイドの容器で少量の注入を繰り返すのでは、どうしても物足りなくなりに遂にガラス製の浣腸器を購入しました。手に取って見た大きさから彼女に見せたら、どんなに恐怖を感じさせるかと心配になったので、その日は液を一杯吸い上げたままそつと毛布の下に隠しておきました。そして何時もの様に寝台の上で私の好きな四つ這いのポーズをとらせ彼女にはいちじく浣腸使用と見せかけて隠しておいた大型の浣腸器をとり出し一気にピストンを押し全量を注入しました。

彼女は何時もと違う大量の液の注入で強烈な刺激を受けたようでしたが、その後はこの無気味な器具の使用を渡々乍ら承知しました。その頃から彼女もやっと浣腸にも慣れたらしく、不安気な彼女の表情の中にも、強い刺激

を期待するような様子が見えるようになりました。

人の慾というものは限りないもので、彼女が観念して私のこの特殊な慾望を充すために恥しさを耐え私の望む通り浣腸に応じてくれる様になると、今度は更に今迄の方法より、もっと奥深く彼女の肉体の探究がしたくなり、医療器具店でネラトン氏管の一〇号とクレンメを買入れ、それを浣腸器の先端にとりつけ、彼女の体内の奥深く液を注入することを試みました。

会う毎に繰返えし浣腸をされ、もう習慣になっっている筈なのに、私が彼女に浣腸してやろうと器具を用意しはじめると、いくら拒んでも後で必ず浣腸されるのを覚悟しているのに、決って「昨日充分あったから、今日はしないでよ」とか「今日はお腹の具合が悪いから勘忍して」とか一応は何とか口実を設けて逃げ様とします。

これは多分器具の先端が体内に入る瞬間の強い刺激と鈍痛を伴う異物感から浣腸器を見ただけで反射的に怖れと胸騒ぎを感じることと結局は必ず応ずることになるのに、女性本能として、何時迄たっても無くならない羞恥心から生ずる心理的抵抗によるものと思いま

す。一旦注入が始まると後は観念して温和しくなり、むしろ今はもうすっかり目覚めた浣腸の爽快感に満足している様で、特に放出の時と、その後に来る恍惚感に充分に堪能している様です。

彼女は決して浣腸が嫌いなのではなく、口には出しませんが、私の手でそれを施されることに仄かな期待を持っていることは明らかで、彼女のつましやかな性格からでしょうか、何時までたっても浣腸される度に態度や表情に出して恥しがる彼女の風情は、私にとって新鮮な魅力です。浣腸は医術の一種とは云え、経験のない女性なら聞いただけで顔の赤らむ様なあられもない屈辱的な姿勢をとられ、無慈悲で惨酷な施術を強行される時、この浣腸を受ける気持は、女性の心理の中に潜在するマゾヒズムと、施術者であり観察者である男性の誰もの気持の中にもある美しい弱いものを辱しめ責めさいなみ度いサジズムを同時に強烈に刺戟する二人だけの秘密であり愉悦であることは否定出来ません。

しかし誰かの文にもあった様に、浣腸は排泄につながる不潔な行為ではなく、羞恥と興奮の雰囲気の中で他人の知らない神秘的な部分を見たり見られたりする抑圧された本能の

満足だろうと思います。愛するものの体の中に滞留する一切の汚れたものを、女性特有の強い羞恥心を超越した直接的方法で総てを洗い流し体の最深部まで清浄にし、女性の肉体の内外を浄化し更に後に続く生理的恍惚感と満足感を与える至高の愛情の現れにまで昇華して考え度いと思います。

三、浣腸の試練

ガラス製の浣腸器とネラトン氏管を連結した方法も何度も行っている間に一回注入する毎に、挿し込まれたままの管をクレンメで挟み浣腸器を外し液を吸い上げては又管に繋ぐ煩わしさが、折角のムードを壊すので、遂に彼女に話しただけでも恐がって拒み続けてきたイルリガートルを使用して大量浣腸を試みることを決心しました。

その日は又照れ臭い思いをして本郷の医療器具店に行き前の一〇号より幾分太目のものをと思い「十五号のネラトン氏管を下さい」と云いますと「これはJIS規格の中で一番太いものですよ」と念を押されて差し出したのは、小指位の太さで三〇センチ以上もあり手にとって曲げて見るとゴムの弾力も一〇号に較べると可成強いのです。彼女に使用の場

面を想像すると矢も楯もたまず、これに決めその外にイルリガートルと黒いゴム管を買って包んで貰うと随分大きな荷物になりました。

その足で車を拾って彼女のアパートに着いたのは電話で約束した時間より三〇分程早く彼女は不在でした。屹度美容院に行っていたのでしょう。部屋に入ると彼女のいないのを幸い、早速準備にかかりました。湯の沸くのもどかく石鹼を溶かすと、約五〇〇CCをイルリガートルに入れたものの、この大がかりの仕掛を見たとき彼女がどんなに恐がるかと思うと心配になって来ました。そこでイルリガートルを寝台に近い窓のカーテンレールに、ベッドの上から一米位の高さに吊り下げ、その上をカーテンを引いて隠しカーテンの間から管を出す様にしました。又こんな太いカーテンが、どの位彼女の体内に這入るかとの好奇心からボールペンで先端から五センチ刻みに小さく数字を記入しました。

やっと装置が終った頃、セットしたばかりの髪を気にしながら彼女が部屋に帰って来ました。

「随分待った？」と云って、ふと石鹼を溶いたビーカーを見付け、私が何を期待している

かを感じると、一瞬、鳥渡恥かしそうな表情を浮かべました。でも待たせて済まなかったと思ったのでしょう、すぐに帯を解くと長襦袢だけになって、何時もの様に寝台に上ると、両手と両膝について俯伏せになりました。しかし何時ものこの姿勢では顧るとカーテンの装置を見付けられる惧れがあるのと、初めて大量の浣腸をされるのですから、少しでも体を楽にしてやろうと思ひ、窓の方を背にして横臥させ両膝を深く折り曲げさせました。

又洩して着物やベッドを汚さない様に長襦袢の裾を腰の上まで捲り上げ、お尻の下にビニール布を敷き乍ら「今日はゆっくり時間をかけて浣腸するから」と云い聞かせると素直に承知して、お尻を上向け加減に身を振じると目を閉じて枕に顔を埋めました。

彼女が気付かないのを確かめると、そっとカーテンの蔭からゴム管を引き出し太いネラトン氏管の表面に丹念にポマードを塗り付けました。準備が終ったところで、彼女の背中の



方の足許に腰かけると片手が上の方の豊満なふくらみを押し上げ、カテーテルの先端から四分の一位のところを持ち徐々に挿入にかかるところにしました。

先端を突き挿す時の始めの五センチ位まで押し入れる時は一〇号の管とは比較にならない強い手応えがありました。が、軋み乍らも一〇センチ位まで這入ると後はズルズルと一気に二五センチ位まで殆んどネラトン氏管の大部分が没入して仕舞いました。

彼女は前半の強く軋んだ時は痛みを耐えて

いるらしく枕の端を強く握りしめておりましたので、「痛くない？」と聞くと、頭を軽く横に振って私の施術を受け入れ様と懸命に努力しているのがいじらしく思えました。後半の割合滑かに一気に深く挿入された時は不意に強いショックを受けたらしく「アッア」と絞る様な呻き声を出しました。二五センチ位のところで何かつかえる様な感じがしましたので彼女の表情を窺うと眉を寄せて痛みを訴える様に見えましたから挿入は、ここで止めました。

ここでクレンメをネラトン氏管と黒いゴムの導管を繋ぐ透明な継手の上に移すと白色に濁った石鹼液が勢よく流入し始めました。

彼女は勿論、もうとくに普段と違う器具で浣腸を施されていることに気付いていたでしょうが、今更もがいても許して貰えないと観念したのでしょう、肩が大きな息づかいを続け乍ら刻々と強まる直腸内の圧力に一生懸命耐えているようでした。

イルリガートルの液面が、二〇〇CCの目盛を越え三〇〇CCに近づく頃、「もう駄目よ、止めて！」と泣き声を出すようになりました。あまり苦しうなのでクレンメを動かし液の流下を一旦止め、今度は姿勢を変えて腹部に負圧が出来る様に俯伏せし、両膝を立て、お尻だけを高く上げ再びクレンメを外しますと、落差が小さくなった為流れは遅くなりましたが、三分余りで残りの二〇〇CCも全部注入し終わりました。

今迄の彼女の苦しみ方から見て、管を抜けば直ぐ手洗に立つことが判っていたので、惨酷とは思いましたが、管を挿した際の姿勢を続けさせ、すこし離れて眺めたりして、更に五分位我慢させました。

捲り上げられた緋色の長襦袢の裾と輝くような真白な太股。赤茶けたネラトン氏管の末端。それに繋る黒く光った長い管。最後に何時の間にかカーテンがずれて姿を現わした空になった巨大なイルリガートル。

息詰まる様な妖艶な構図と強い色彩のコントラストは、心ゆくまで私の視覚を堪能させてくれました。

もう忍耐の限度に達したのでしょう。普段淑やかな彼女が顔に脂汗を浮べ息の詰まる様

な切ない声で「もう出そう。駄目！堪忍して」と悲鳴をあげると、お尻を左右に振りゴム管を烈しく揺すって身悶えし始めました。そこですっかり揺れるお尻を抑えと、なおも意地悪くわざとゆっくり時間をかけて管を抜き、脱脂綿を当て様とする私の手を払い除けるようにして、彼女は裾を乱して小走りに手洗に立って行って仕舞いました。しばらくして帰って来た時は、頬を紅潮させ空ろな眼差しで寝台に近づくとはったり俯伏せになり一〇分ばかり、じっとしていました。

この日から、彼女の心境は大变って来た様です。その度毎に自分のあらもない姿態を想い、羞恥心に悶え乍らも浣腸の醍醐味と恍惚感の虜になっていった様です。

ただ大柄な体に似合わず、五〇〇CC以上は耐えられないらしく、拷問にでもかける積りで縛り上げて身動き出来ない様にして強制的に大量を浣腸してやり度い衝動にかられる時もあります。一度無断で八〇〇CC余りをイルリガートルを高く吊って一気に注入した時は注入の途中でも随分苦しうでしたが、終わった後手洗に行くのに間に合わず途中で洩して、その場にうずくまって泣き出して仕舞いました。それ以来、無理をせず少しずつ増

量して慣らしてゆくことにしました。

又浣腸液を注入された後、彼女が我慢出来る時間は、せいぜい五分余りで、それ以上は彼女の苦しうな表情を見ると強制出来ませんでした。

四、浣腸の魅惑

思えば随分長い年月でした。人一倍潔癖で恥しがり屋の彼女に、浣腸行為を強いてから現在の私の特殊な性癖や欲望をよく理解し強い羞恥に耐えて私の望み通りになるまでに慣らして行くのは、並大抵の忍耐ではありませんでした。矢張り彼女の優しい心根からの奉仕と精神的、肉体的の成長によるものでしょう。

初老の域に近い私の、あの方はあまりスタミナがなく、専ら視覚を楽しんでいる事をよく知っている彼女は、浣腸される時もマンネリに陥り私に飽気を感じさせない様に、ある時はゆるやかにウェーブした長い髪を背中の中程まで垂し、ベルギー裏の豪華なレースのついた黒いシュミーズに網目の黒いストッキングをはいたり、又ある時は自慢の美しい襟足を見せて、黒い髪を高々と水々しいアップに結い上げ素肌の上に鹿の子絞りの真紅の長

襦袢を着たりして彼女の最大の取柄である豊満な真白い肌を強調する様努力している様でした。

藍の部分の多い浴衣に、反対色の伊達巻きを細くくびれた胴にきりっと締めた姿も、例のポーズで白いお尻を露出させると仲々魅力のある姿態でした。時には全裸の上に透きとおる様な莖色のネグリジェの裾を捲くってポーズをとったり、偶には素肌の腰に緋縮緬の湯文字だけで俯伏せになり、私の手でそれを捲り上げられ浣腸されるのを待つ様な挑発的な姿態で私を喜ばせることもありました。

かつて彼女に浣腸させることを納得させる口実に使った美容的效果が本当に現れたのでしょうか、こちらに向けられた二つの大きな球面が近頃益々白さと輝きを増して来た様に思えます。身嗜みのいい彼女は何時も私が浣腸の支度をしている間に蒸しタオルとコールドクリームで綺麗にし、オーデコロンをスプレーで吹くことも忘れませんでした。

彼女に浣腸を施す時にとらせる姿勢については、施術の対象部分が普段露出されてないところだけに可能な範囲で随分研究して見ました。側臥で脚を折り曲げたり仰臥で両膝を立てる普通病院で行われるオーソドックスな

体位は勿論、施術者からその部分がよく観察出来、器具の挿入と液の注入が容易であり、且つ私の視覚を刺戟する新鮮なポーズを次々と試みてみました。俯伏せで両脚を蛙の様に大きく開いて、そのままクッションや枕でお尻だけを高くしたり、或は仰臥で両脚を高く挙げさせたり、又は両手でベッド又は壁に上半身を支え立った俥で突き出したお尻に後方から試みたり椅子に浅くかけさせ高く挙げた両足を強く抱かせ前方から施すなど可成り極端なポーズで実験しました。

変った姿勢をとらせる度に彼女は強い恥らしいの表情を見せますが、結局観念して最後は私の試みに協力して目的を達する様になりました。その都度興味の赴くまま、あらゆるポーズを強制し一通り試みて見ますと、中には随分無理な姿勢もあり、彼女が体内に尿管を入れられる時、筋肉の収縮から疼痛を訴えたり腹部を圧迫する為充分液の注入が出来ない様な方法は、その場限りの座興に止め平素行う時の体位は段々限定されて来ました。

浣腸器の選定もガラス製は最大の一〇〇C Cまで入手し色々使ってみますと、ガラス製は内筒のひと押しで飽気なく全部注入して仕舞いますが、イルリガートルですと、長いネ

ラトン氏管の挿入抽出の際の入口の摩擦と深部の触感の手応えを充分楽しめすし、長時間かけてゆっくり観察出来るので自然これを使うことが多くなりました。

彼女も亦同じ量の液を浣腸されるのなら、ガラス製で小刻みに何回も繰返えし痛い思いをして固い尿管を抜き差しされピストンの強い圧力で注入されるよりイルリガートルの方なら一度奥深くカテーテルを挿込まれるのさえ我慢すれば、後は自然流下でゆっくり全量が注入されると液が奥の方に溜るので、我慢する間も苦痛が軽いので、この方を好むらしく最初はあんなに怖がっていた巨大なイルリガートルを目の前に吊り下げても、ただ「あんまり沢山入れないでね」と云うだけで自分で寝台の上に上り何時も浣腸される時のポーズで後は私の手で浣腸をはじめられるのを、じっと待つ様になりました。

浣腸のポーズも矢張り腹部に負圧の生じる膝と肘で体を支える四つ這いの形か俯伏せで膝を立て、お尻だけを高く上げたポーズが一番楽に行える様で何時とはなくこの姿勢で施すことが多くなりました。最初はこの恰好をさせられることを彼女は何か動物的な浅間しい形を強いられる屈辱的な姿態と思いこみ、

最も恥しがり毛嫌いしていましたので、初期に彼女はこの方法で浣腸される時は、両手で顔を隠すか枕に顔を埋めて耳まで真赤にして懸命に消え入る様な恥かしさに耐えている様でした。段々慣れるとこの姿勢はネラトン氏管を奥深く挿入される時の苦痛も少く特に腹腔内に出来る負圧のために比較的楽に大量の液が注入されることと心理的には長時間かけて細かく観察され乍ら浣腸を施される間、横から覗かれない限り表情の変化を見られないで済む事等から、今では進んでこの姿勢をとる様になりました。

女性写真モデル募集

本誌の内容充実のため

奮て御応募下さい

○本誌では、更に内容の充実を計るため、広く写真撮影に応ずることの出来る女性のモデルを募集いたします。

○本誌愛読の女性の方でしたら、年令、遠近は問いません。誌上発表の可否については十分御希望を考慮いたします。又、助手介添え或はプレイのみの出演御希望の方も一応御照会して下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令、略歴記載の上、編集部宛お申込み下されば、報酬そ

今では会う度毎に繰返えすことながら、じっと眼を閉じて女性として最も恥かしい姿態に耐え乍ら施される惨酷な行為が始められるのを今か今かと待っている可憐な彼女を見ていますと、いとおしさが一層募ってきます。長い期間でしたが、よくもこんなに私の変わった欲望に応えて、順応してくれたものと心から感激しております。

口には出しませんが、お互いに望むものと与えるものを暗黙のうちに理解し合っているので、何時も二人とも無言のうちに、こうした行為を続けておりますが、特に彼女は浣腸

の他詳細につき、お返事いたします。

○出演並に参加報酬については、十分期待に添うよう考慮いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人とS的傾向を持ち、サジスチンとして活躍頂ける女性を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報願います。

△奇ク編集部▽

という言葉の口にするのも恥かしいらしく今迄一度もそれについて細い話をしたことはありません。ただ長時間かかって浣腸を施される無言の行の間に、「アーツ」と云う切なさそうな小さな呻き声をあげるのと液の注入が始まって腹圧が高くなると、苦しそうに喘ぐ「ハアハア」と云う声は何か可哀そうな気になることがあります。排泄の後横になって心地よげに肩で大きく息をしている様子は、浣腸の後の醍醐味に恍惚としている時の様です。

彼女は段々馴らされるに従って、浣腸される際の刺戟と快感を体験し次第に、この恍惚感に秘かに酔い痴れる様になってきただけでなく心理的にも女性として羞恥の極限とも云える姿態を強制され排泄につながる苛酷な施術を強行されることが女性の潜在的マゾヒズムを痛烈に刺戟する結果となり、今では彼女がすっかり浣腸の妖しい魅力の虜になっていることは明白です。今となつては彼女は私にとって何物にも換えられない宝物になりました。

もう行き着くところまで行った感じで満足す可きでしたが、飽くことのない私の好奇心は彼女に浣腸された後の排泄行為を私の見て

いる前で行わせようと話を持ちかけました。

潔癖の強い彼女は、自分の不潔な排泄物を人に見せるなど思いもよらぬと頑強に拒絶するので、これだけは断念しました。しかし、その後考えた挙句、やっと彼女を説得した方法は、まずガラス製の浣腸器でたっぷりスリン浣腸を施しトイレで排泄させ直腸内が綺麗になったところで、今度は石鹼水を五〇〇CC余りイルリガートルで浣腸し、この排出の時だけを部屋で行わすことです。

これも誰にも見せたことのない排泄の場面を見られると云うことで、仲々承知しませんでした。が、ここまでくれば同じことだし、出るものは綺麗なものだけだからと執拗に説得し遂に実行することになりました。ところが最初に試みた時は始めのスリン浣腸が充分利かなかった為か、後の石鹼水に濃い色がつき、僅かですが固形物が液に混って出て仕舞いましたので、彼女は耳まで火の様に恥しがり、それから後はスリン浣腸を二度繰返えし確めてからでなければ決して見せない様になりました。

その後はスリンで繰返えし腸内を掃除した上で多量の石鹼水を浣腸すると、そのままの四つ這いの姿勢で両膝を大きく広げさせべ

ッドを汚さない様にその間にビニール布を敷き、その上の丁度よい位置に深目の大型洗面器を置いて何時でも排泄出来るようにし、その俟出来るだけ我慢させ少し離れた後から観察することになりました。

用意は出来ているのに、排泄行為の始まるのを、まともに後から、見られていると思うと、身がすぐむ思いで緊張しているらしく何時にない長い時間耐えていました。やがて限度にきたのでしよう、お尻を小刻みに震わせ身を振り始めました。

彼女の顔は紅潮し恍惚とした眼付で見られているのも忘れ長時間かかって排泄を続けました。

はっと我に還った彼女は急に恥しさがこみ上げてきたらしく慌てて裾を下げると両手で顔を抑えてしばらく横になっていました。

時には私の仕事の都合で彼女のアパートを訪ねるのが遅くなり、彼女がもう店に出る仕度をして仕舞っている場合もありましたが、そんな時でも私がそれを欲するときには時間と着崩れを気にしながらも、そのままの姿で浣腸に応じてくれました。

洋装の日はハイヒールをはいて立ったままベッドの上に肘をつき上半身を低く曲げ、イ

ルリガートルは高目に吊るとパンティーをはいたまま下にずらして行いました。

和服の時はきつく締めた帯が強く腹部を圧迫する為、イルリガートルの浣腸は無理です。から矢張り寝台に手をつかせ何枚もの着ているものを帯の上に捲り上げ下着を引き下げると、お尻を出来るだけ後につき出させ一〇〇CCの浣腸器で二回続けて注入するのがやっとでした。

無理で窮屈な姿勢でしたが嘴管を挿入し易い様に一生懸命に努力してポーズしているのがよくわかりました。

短い時間でしたが衣ずれの音と香水の香りの中で上気した美しい柔肌の間に喰い込んだ青白く光る太い冷たいガラス管、そして真白い足袋が目にしみる様でした。

手洗を済すと肩を並べて夕暮の銀座に向いました。並んで歩くと男の平均より高い私と殆んど同背丈の彼女はバーの女性には珍らしくよく似合う地味な黒っぽい和服で、うつ向き加減に白い襟足を見せて先程の行為を恥しがる様に伏目勝ちに歩いて行きます。

私だけが知っている数分前の彼女のあの姿態と、あの行為を想い出し乍ら彼女の店の方々に足を向けました。

四馬孝異色画集

女体浣腸責め図絵

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号二〇〇〇円

一、美しい服の少女に浣腸責め
二、美しい服の少女に浣腸責め
三、美しい服の少女に浣腸責め
四、美しい服の少女に浣腸責め
五、美しい服の少女に浣腸責め
六、美しい服の少女に浣腸責め
七、美しい服の少女に浣腸責め
八、美しい服の少女に浣腸責め

女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号一〇〇〇円

一、保健室で女学生に浣腸
二、保健室で女学生に浣腸
三、保健室で女学生に浣腸
四、保健室で女学生に浣腸

女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号一〇〇〇円

一、お友達に浣腸
二、お友達に浣腸
三、お友達に浣腸
四、お友達に浣腸

美処女羞恥責悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号一〇〇〇円

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号一〇〇〇円

一、豊麗な花を敷く
二、豊麗な花を敷く
三、豊麗な花を敷く
四、豊麗な花を敷く
五、豊麗な花を敷く
六、豊麗な花を敷く
七、豊麗な花を敷く
八、豊麗な花を敷く

妊婦の媚態

大中判印画紙極鮮明焼付
三枚一組 略号八〇〇円

女学生の浣腸一態

大中判印画紙極鮮明焼付
二枚一組 略号六〇〇円

一、花恥しきセーラー服の少女
二、花恥しきセーラー服の少女
三、花恥しきセーラー服の少女
四、花恥しきセーラー服の少女

凄絶、妊婦の切腹

大中判印画紙極鮮明焼付
四枚一組 略号一〇〇〇円

大中判印画紙極鮮明焼付
六枚一組 略号一五〇〇円

一、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
二、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
三、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
四、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
五、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
六、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
七、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
八、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）

女体浣腸嗜虐場面

大中判印画紙極鮮明焼付
六枚一組 略号一五〇〇円

一、女体浣腸（空気の悪魔）
二、女体浣腸（空気の悪魔）
三、女体浣腸（空気の悪魔）
四、女体浣腸（空気の悪魔）
五、女体浣腸（空気の悪魔）
六、女体浣腸（空気の悪魔）
七、女体浣腸（空気の悪魔）
八、女体浣腸（空気の悪魔）

大中判印画紙極鮮明焼付
九枚一組 略号二〇〇〇円

サド侯爵悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付
九枚一組 略号二〇〇〇円

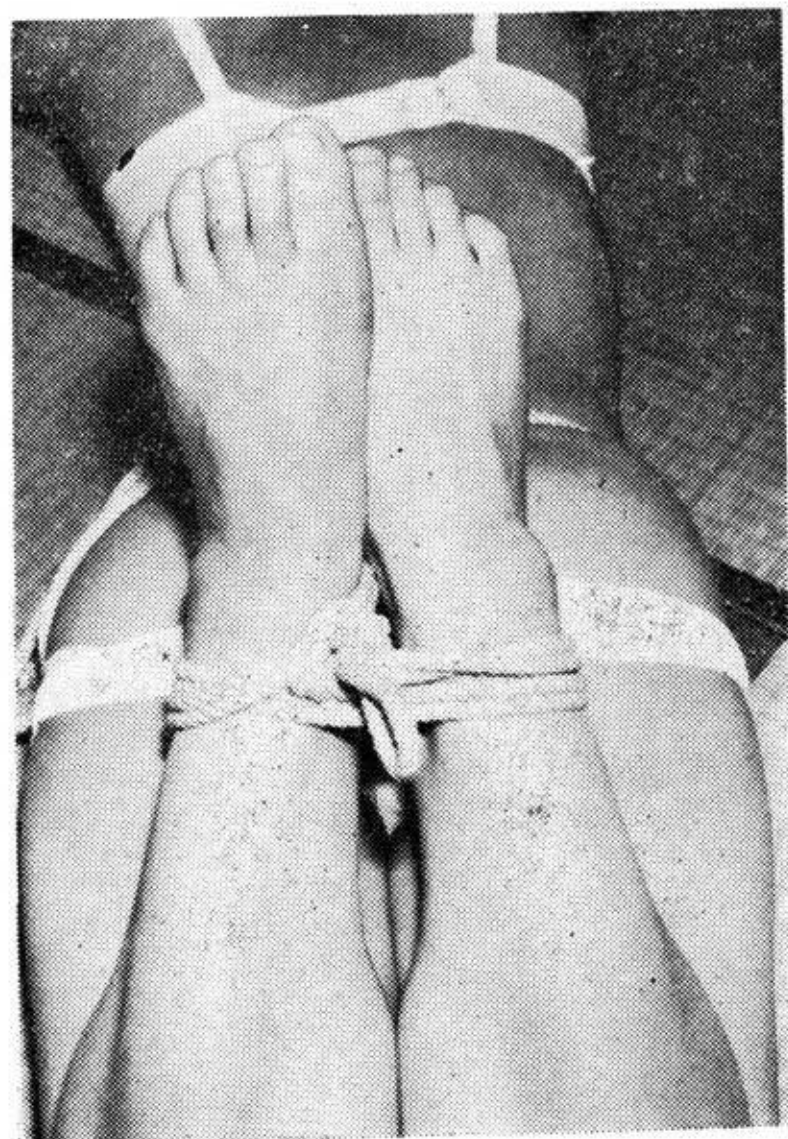
一、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
二、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
三、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
四、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
五、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
六、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
七、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
八、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）
九、女体食卓（大テーブルの中央に開いて）

告白

美しき

足を求めて

比左良 守



男性にとって女性は美人であつた方が好ましい。女性の美しさは色々な部分で表現されるのであるが、また見る男性側も自分の好みにあつた部分の美しさを求めるものだ。私はその美しさを肉体面では足に求め、精神面では従順さに求める。いくら美人でも勝気で自我の強い女性は好まない。又、顔は美人でも足が好みの型でないとだめである。私にとって女性の美しさは素足が第一条件である。この点では毎号『僕の責め方』を書いている宝

塚二三夫氏と似ていると思う。

何故に女性の素足が好きになつたか、どのようなにして好みの型ができたかは、現在でもわからないが、すでに六才頃より女性の素足についての記憶がある。その頃、近所にいた同じ年位の女兒に「靴をぬいでごらん」とか「靴下をぬいてごらん」とか言つて彼女の足を眺めたものだ。

また或る時は、別の女兒の家へ遊びに行つて、こたつへ私は西から、彼女は東から入り

お互いに寝ころんでいた。その時、無意識に相手の両足を引き寄せてゆび先から足の裏まで撫でまわして遊んだ。これが女性の足にさつた最初である。この頃はまだ美しい足という意識がなかつたので、その兒の足の型はおぼえていない。ほんの遊びであつたが楽しかった記憶は残っている。

十才頃になると、好みに合う足と、そうでない足を区別するようになった。好みの足というのは、自分で見て、これは美しいと感ず

る足である。女性の足も自然が作った芸術品であるから、具体的にどんな型と筆舌には表わせないが、ただ見て美しいと感ずれば、それが好きな足である。

小学生の頃、可愛らしい美人の女兒が転入学してきた。その子は常に靴下で足を包んでいて見せてくれない。あれで美しい足をしていれば申し分ないがと、期待して見せてくれる日を楽しみにしていた。ある時、その児がバケツにつまづき、靴下がびしょぬれになった。自分でぬぎだしたので、初めて見せてくれる時がきたと胸をわくわくさせて近よった。こんな時に私の好みの足でなかったら、うんざりするものだが、彼女は期待通り美しい足であったので、一安心したことを覚えてる。

これも小学生の頃的一幕である。窓にもたれていた女の児を数人で外に出してやろうと言いだした。皆でかかえあげて窓の外へ逆さになるように、ぶらさげてしまった。都合良く素足であったので、体は窓の外で見えないが、両足は目の前で見る事ができた。この足の表情が日常床の上で見るよりも一層美しく見えた。

立っている時の足は、ある一面しか見せない

いが、空間にあげた足は全面を色々な角度から見せてくれる。特に足の裏の表情を十分見せてくれる事がうれしい。素足の美しさは空間で見えるに限る。だから今でも吊した足が大好きだ。しかし、足が下にぶらさがるような吊り方は好まない。体の部分より足が上にあるような吊り方が好きだ。その方が足を美しく見せてくれるからだ。

成人してからは専ら型の良い足を求めて努力したが、そう美しい足の持主というものは沢山あるものではない。五パーセント位の平均しか当らない。今まで約八十人位の女性の足に手を触れてきたが、その中にも種々様々であった。もちろん足の良否もあるが、どうまんな人、理くつっぽい人、ふざけ半分の人、は好まない。又、足を撫でまわしたり擦ったり吊したりする時に、いやな顔をしたり、大声を出したり、暴られたりしても台なしだ。この点、従順さは特に必要である。拷問や暴力ではないのだから、落着いて十分楽しませてくれる人でないと意味がない。こう考えると八十数人の女性の中でも特に気に入ったのは、わずかしかなかった。

T子。小柄な体で美人ではないが、素朴な顔つきで足も小型で可愛らしかった。

腰かけている私のそばへきた時、後向きにさせて足首を握って片足を後へあげた。それから、おもむろに足袋のぼたんをはずした。何も言わずに、じっとしている。足袋をぬがせた足を私の両ひざではさみ、足の裏が上に向いてひざの上へ出るようにした。先ず踵から足の裏、指先へと撫でまわした。何も言わずにじっとしている。足指も一本ずつ分けるように撫で最後に足の裏を擦った。擦るたびに指先をピクピク動かすだけで非常に従順である。これならいけると思い反対の足も同じように楽しんだ。足の裏の軟かい所を撫でる感じが良かった。終ったあと自分で足袋をはき何気ない顔で出ていった。

二回目の時は「足を出して」と言うと、自ら足袋をぬいで、ひざの上にのせてくれた。如何にも私に擦らせてくれるようにしてくれた。この位従順なのはあまりなかった。以後は会う毎に心易そうに声をかけてくる。又擦ぐられる事を期待するように。やがては逆吊りにして、もっと美しい足を見ようと思っていたが、遠距離へ移った為、出来なかったのが残念である。この位の従順さなら逆吊りで楽しめる事は確かである。

K子。至極美人で足も申し分ない良玉であ

る。最初は何気なくさそい入れて、T子と同じようにして撫でまわした。見ているだけでも楽しい足である。次の時は抱きかかえて机と椅子の間へ逆さにして頭から入れ、机下でおおむけのまま、足だけ上にあげた格好にした。私は腰かけたまま、その両足をひざにはさんで撫でまわした。あとを擦ってやった。可愛い声で、「くすぐったい」と言っていたが、だんだんなれたのだろう、遂にはおとなしくだまってがまんしていた。近所なので何度もしそい入れるのを遠慮したので数回しかできなかったのが残念。こんなに顔と足がそろって美しかったのは少ない。

W子。これは初めから擦っても平気な顔である。「くすぐったくないの」と尋ねるとうなずく。わけを聞くと小さい時から祖父にくすぐられてきたそう。足の裏だけでなく、どこを擦られても平気だという。八十人程の中、殆んどは私が手がけてならしているが、これは例外だ。あまり平気だという顔をされても、何か物足りない。

M子。朝鮮人であるが、並以上の美人で足も良好。一見外国人とは見えない。ある時、足の裏を見せてすわっていた。それが豊かな肉づきで美しかった。思わず手をのばして足

の裏の方から握った。ふしぎにじっとしている。これなら少しはいけると思い、そろそろ指先の方まで撫でまわした。今度は片手で足首を持って引きよせて、もう一方の手で擦り始めた。何気ない顔で、じつとがまんしていた。二回目の時は、少し強く擦ったら笑顔で「くすぐったいわ」と言い出したが「じつとしとけ」と命じたまま擦り続けた。でも足の爪先をピクピクさせるだけで、がまんしていた。良玉であったがプレイの機会が少なかった。

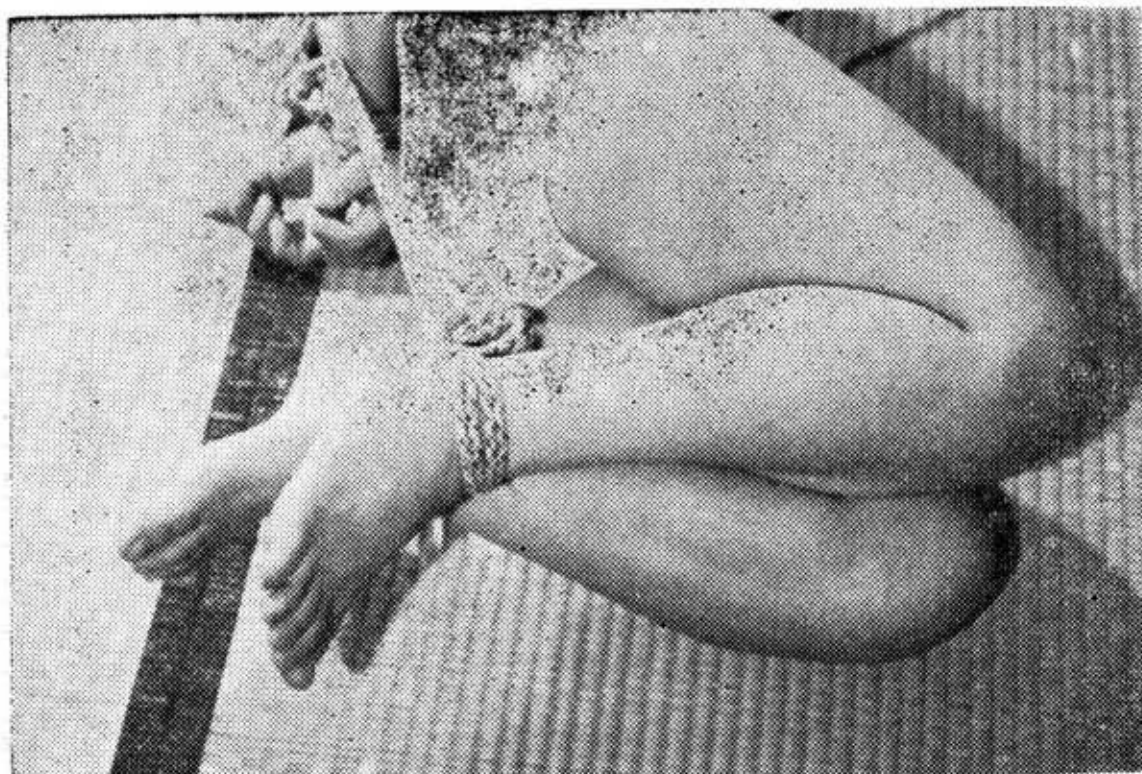
Y子。性温厚で世間でいわれる美人ではないが素朴な顔つきで、私にはもってこいのタイプである。足は特に肉づき形とも良く足指のそろい方が非常に良い。これも最初はすわっている足から始めた。常に靴下をはいて足を見せてくれなかったが、薄い靴下の上から良い足である事は見ぬいていた。序の口として、靴下の上からくすぐった。初め二回程は「いやいや」というていたが、何気ない顔で続けていくうち抵抗もなくなった。

三回目から靴下をぬがして直接さわった。予想以上に良い足であった。以後は何も言わず、私のなすがまになっっている。最初から「いやだ」という人はあまりなかったので、

これはむずかしいと思っていたが、案外簡単に従順になった。半年程かけて気長にならしていった。

この足には欠点がない。全体が良い。裏から見た感じは最高である。又従順さも満点になった。冬こたつの中では必ず私の方へ足をのばして入る。一寸足をつつくと、ずつとぐっと奥へのばしてくる。それから靴下をぬがせてさわり始める。美しい足をふとんの中でさわったのでは物足りない。もっと引きよせて、こちらの外へ足が出るようにして眺めながら擦ったものだ。実に放なすのが惜しいような足だった。だから、どうしても長時間になるのだが、じつと解放されるまでがまんしていた。

こんな従順な美しい足の持ち主は逆吊りにしたら、もっと素晴らしいだろうと訓練段階に入ることにした。先ずおおむきにねころがせて両足首を持ってぶらさげた。こわかったらしく手でももをかかえて起きあがるような姿勢で持ちあがった。これでは面白くないので、おろして「手をはなしてごらん」と言ったら素直に手をはなした。その瞬間にさっと足首を持ちあげ背中の中まで床からはなした。ここまでやれば自力で頭をあげる事は困難で



ある。更に力を入れて頭が浮くまであげた。大方の人は床に手について、這いまわる恰好をするのだが、彼女は手をスカートにやっていった。こわさをなれさすため、軽く横振りをやった。別段こわがる様子はなかった。足首を手で持っていては重くて楽しくない。やは

り吊ひもで吊っておかないと、さわる事も擦ぐる事もできない。そろそろ春になったら本格的に逆吊りにしようと計画していた矢先、遠方へ転居することになった。彼女だけはいまだに便りをよこしているが、至極残念だった。

F子。初めて逆吊りにまでした人。数カ月間擦り撫でてきた事は同じ。初めの際は柱に吊りひもを掛ける装置を準備した。「今日は逆さに吊るよ」と言ったら、あっさり承知した。おおむけにころがせて足をあげさせ、丈夫な布ひもで輪を作り両足首の後からかけ、前から足の間を通して後へ出し、結ばなくてもすむようにした。その輪の端をぐいぐいと持ちあげ所定の場所へかけた。残念ながら肩は浮いているが頭が床についている。けれども吊り上げた足を見ると、平常の足よりは、ずっと美しく楽しかった。次回からは背丈を考え頭がつかないようにした。しかし、だんだん長時間にしていくと足首が痛いといって逆吊りをきらうようになった。

M子。逆吊りに一番強かった。最初はやはり柱に吊ったのだが、誰でも逆さになると最初はこわいらしい。自身の不安定さもあるからだろう。本人も承知して吊り下げたまでは

よかったが、手を離したらあばれだした。F子の場合は足首を引きあげ、いわゆる吊り上げだが、M子は手と足を縛って抱きかかえて足の吊り紐を、ひっかけて足を上に残して上体を下へさげながら逆さする、いわゆる吊り下げでやった。吊り上げより吊り下げの方が皆不安定さを感じて、こわいようである。だから経験者は抱きかかえている時に頭を自分で下にそらしてしまう。一回目は失敗の巻。今度はあばれないように吊り下げた途端に、前に立ちふさがって柱におさえつけるようにした。じっと落着くまで、そうやっていた。

落着いたらおろしてやった。三回目からは従順にぶらさがっているようになった。柱へ吊ると横と前面しか見えない。足は踵の方から見ると又楽しい。そこで空間に吊る事を考え両側へ台を組立て、その間に棒をかけわたし、それに吊る事を計画した。実際にやって見てやはり楽しかった。見ようと思う方向にぐるぐる回転させ、上から下から思う方から眺められ、又思う存分に擦ぐる事も出来る。

M子は吊った時に上に向けた足の裏が水平である。大方の人は足に力を入れる関係で吊り紐と鋭角になっている。又足ゆびが不自然に曲がっているものだ。力をぬいた自然のまま

の足の方が見てずっと楽しい。あまり楽しいので時間が自然と長くなる。初めのうちは三分位でおしみながらおろしたもののだが、回数を重ねる毎に長くなった。でも本人は私がおろす迄平然と吊られている。

ある時、どの位耐久力があるかためそうと思ひ「今日はお前が言う迄吊っとくよ」と言ひ逆吊りした。しきりに撫でたり擦ぐったり振子のように振ったり長時間楽しんだ。時計を見ると十八分経過している。なかなか、おろしてくれと言わない。私の方が氣を使ひて「十八分たったよ。まだいいのかい」と尋ねると「ほんなら二十分吊ったらおきる」と言ひ。まるで私が主体ではなくM子自身が楽しんでるようだ。長時間吊った後は足首をすぐ解くとしびれの為、痛いので徐々にゆるめる必要がある。逆吊りにおいては、M子は最高だった。回数といい、時間といい、美しさ、従順さといい、匹敵するものがない。

「今度はいつ吊ろうか」と尋ねると、自分で日時を決めて、その日は必ずやって来たものだ。

屋外では神社を祭った神聖な山で数回逆吊りにした事がある。都合の良い枝を探すと、目発的にその下へ行ひ、背文を合わせてい

る。それから自分で靴をぬぎ素足になって、足首をそろえて待っている。人氣のない山でやるのも楽しいが、下が地面では不便な事が多々ある。

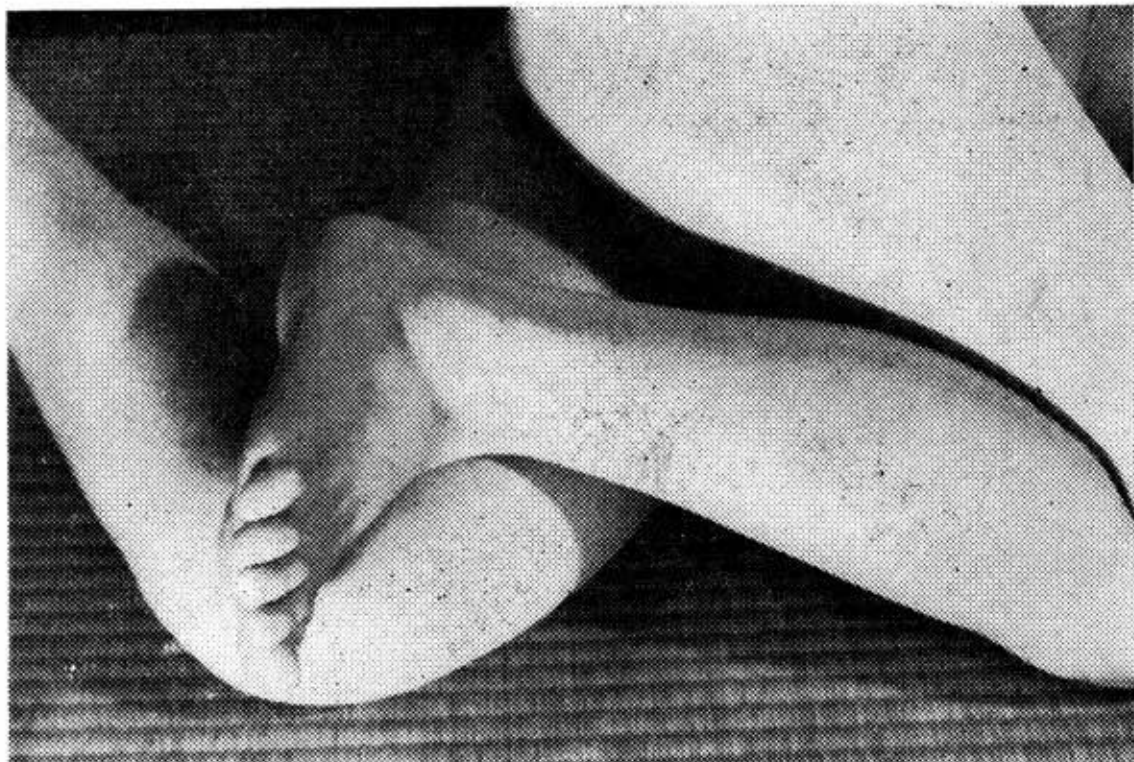
S子。小柄で可愛いタイプで足まで可愛らしくきれいな人だった。これは速成でやった。先ず足の裏を擦ぐってなれたら、すぐに空間に逆吊りにしてみた。小柄だから簡単に吊れる。初めから従順で少しはずかしそうにする位でスムーズにいった。速成で成功するのはまれだ。けれども回数はまだ少ない。

以上が特に楽しかった人達であり、又好きなタイプでもあった。好きな足はやはり逆吊りにして見たい。上に向いた素足は美しく見えるからだ。だから縛りはどうでもよい。吊るための足首と手だけしか縛らない。手はする必要がないが、本人が後手に縛っておく方がだるくないと言ひ。又変な格好されるよりは後手の方が美しく見えるからだ。ひざや腰を縛って逆吊りした写真を時々見るが、たいてい脚が曲ったりして見にくい。だから足首をしぼるのが好きだ。開脚の逆吊りは何か上品さがないので好まない。足首には全体重がかかるので痛さを軟らげるために、手拭を吊りひもに結んで足に首巻くようにしている。

新年号に、逆吊りの上体だけの写真があったが、足の方が見えないので私には価値がなかった。

宝塚二三夫氏の『僕の責め方』は好きだ。素足の美しさが、良く出てゐる。しかし一月号の写真は素足でなかったのが残念。私だったら素足にしてひざ立ちにして足を後にあげさせて縛って固定させて写しただらう。拷問刑罰史の映画では猪吊りにした場面と駿河責めの場面が氣に入つた。何れも吊り方は正しいが、足の様子がよく見えるように吊つてあつた。猪吊りは数人の人に試めしたが、皆逆吊りの方が良いという。理由は手が痛い、首がだるいと言ひ。足首の痛さはがまんできるそうだ。又逆吊りにされて擦ぐられると何とも言えない気分になるそうだ。

妻にするのも足の美しい女性をと念願していたが、思うに任せなかつた。候補者の中、二人程まあまあというのがいたが、そのうちの一人にした。足首、踵、足のりんかくや足の裏は合格であるが、足ゆびの形が不良である。この位でがまんする事にした。鏡台の前に爪先立ちですわっている時などは、足ゆびが見えないので非常に美しく見える。新婚当時は寢床の中から化粧している時の足の裏を



よく眺めたものだ。当時は常に足袋をはいていたので、やんわりしたみずみずしい足の裏だった。見るだけでは気がおさまらず数日後から擦ぐる事にした。最初はあばれたり声を出したりして、落着いてやらせてくれない。遂にはふとんの中へ頭からつつこんでうつぶ

せにし、その上に私が乗りかかって、足を抱きかかえて動かさないようにして擦ぐった。勝気的女でも何回もやっておれば、だんだん慣れていくものだ。今では自発的にもぐって足を出す事もある。又足の裏をくすぐられると気持ちが良いと言いだした。逆吊りもまだ百回にはたりないがやっている。すぐ頭が痛くなるたちなのであまり面白くない。でも時には自分から吊ってくれと言う事もある。やはり従順な時は美人でない妻も美しく見えるが、そうでない時は骨折り損だ。家では簡単に吊る為に色々考えたあげく、階段の所を利用する事にした。階下で足首を縛り、それがかぎ棒の下かぎにかけ、二階にその上かぎをかけておいて、今度は二階に登って上からそのかぎ棒を引きあげて、らんかんにかけることにした。吊ひもやかぎ棒は、常に固定した長さにして、頭と足の高さが最適の位置になるようにしてある。最高十五分吊ったのが数回で、あとは通例十分程度で参ってしまう。調子の良い時は、ゆっくりと眺めたり擦らしてくれる。こんな時は足の裏も水平で足ゆびも曲がっていない。勝気な女であるが、逆吊りで足の力もぬけて、じっとぶらさがっている時は、美人でない妻でも可愛らしく思える

から不思議だ。裸体で吊った事もあるが別段さえない。洋服よりも和服の方が、美しく見えるから好きだ。正月の夜などは晴着のまま帯だけとかせて逆吊りにすると格別美しく見えたものだ。白足袋をぬがす事は忘れない。そうしないと足の美しさがかくれる。着物のすそをひぎの辺りでまいておき、その上へふくらはぎから足の裏迄をのぞかせている風景は、和服ならではの味わえない美しさだ。又二階より、上に向いた足の裏を見おろすのも楽しい。足ゆびの悪さも裏から見れば目立たないので都合がよい。一番美しい妻は晴着で逆吊りにした姿である。新年には毎年吊り初めを自発的に要求していたが、子供ができてからはしなくなった。

ふくらはぎは日常見なれている関係か、何とも思わなかったが、和服の逆吊りでは妙に美しく見えた。特にふくらはぎから下の方を見る為に、数回二階から逆さに吊りおろした事がある。すねから上は階下へかくれるようにし、ふくらはぎから足の裏までを二階にのぞくようにして、二階へねころんで眺めた。

これからも引続いて、若くて美しい足を求めてゆきたい。そして擦ぐったり、逆吊りにして人生を楽しく過したいと思う。

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

連載小説

花

はな

と

蛇

ひへ

・ ・ ・ ・ ・ 続編（第二十九回） ・ ・ ・ ・ ・ 団

鬼六

鈴
と
縄

「ずいぶんと溜っていたものね」

銀子と悦子は、花瓶の中をのぞき込みながら、クスクス笑い合い、どっこいしょ、と、

小夜子の肢の間に、それを置いた。

小夜子は打ちひしがれたように首を垂れ、かたく眼を閉じ合せている。

もう自分は人間ではないのだ、もっと、汚れるだけ汚れ、落ちるだけ落ちていけばいいといった、屈辱の極致から一種の倒錯心理が

生まれ出し、小夜子は、一切の人間感情を投げ捨てたように身じろぎもせず、八の字に割り開けられた肉体を堂々とさらしている。

「おねえ様とキッスしながら、シャーとやるなんて、いい気なもんね」

銀子と悦子は、煙草の火をつけ合いながら笑いつづけている。

朱美は、何かに陶醉しきったよう、小夜子の前へ廻ったり、後へ廻ったりし、小夜子の熱い耳たぶや頬、縄に上下を締め上げられてゐる白桃のような乳房、スベスベした背中、ふつくらと盛り上った柔かい尻にまで、接吻

の雨を降らしつづけている。再び前に廻った朱美は、今度は、堂々とばかりに大きく開かされている小夜子の二つの柔かい内腿あたりに唇を押し当てていたが、やがて、ジーパンのポケットから、透き通るように薄い絹のハンケチを取り出して、優しく、丹念に……をしてやるのであった。

小夜子は、うっとくすぐったそうに眉を寄せ、美しい顔をしかめて、うしろへねじ曲げる。

小夜子は、うっとくすぐったそうに眉を寄せ、美しい顔をしかめて、うしろへねじ曲げる。

執拗な位に……とって、ようやく立ち上つた朱美は、陶然とした面持で、小夜子の赤ら

んだ美しい容貌を眺めるのであった。

「ね、小夜子、何の苦勞もなく、象牙の箱の中で育ったようなあんたにや、これからの調教はさぞ辛い事だと思うけど、それが、あんたの運命なのよ。もう逃げられっこないわ。だから、もう昔の事はすっかり忘れて、立派なスターになって頂戴ね」

朱美が、そんな事をいって、小夜子の可愛い臍を指でつついた時、地下の階段を誰かが降りて来る足音がする。

それは、鬼源であった。

「どうかね」

鬼源は、牢舎の格子から、ちよいと中をのぞきこんで、ニヤリと口元を歪め、戸を開けて入って来た。

小夜子は、鬼源の出歯をむき出した醜惡な顔をふと見て、ぞっとしたように一層、深く首を垂れるのだったが、悦子が、そんな小夜子を面白そうに横眼で眺めつつ、鬼源にいった。

「大分、このお嬢さん、この空気に馴れてきたようなのよ、鬼源さん。これから、心を入れ変えて、鬼源さんの調教を受けます、と今、誓ったところなの。一つ、しっかり、教育してあげて下さいな」

唇を噛みしめている小夜子の閉じた眼から熱い涙が、一筋二筋、白い頬を伝わって流れ落ちる。

「そうかい。じゃ、早速、今夜からでも調教に入るとするか」

鬼源は、小夜子の前へ来て、

「成程、タチシヨンのお稽古をつけてもらったのかい」

と、花瓶の中をちらっと見ていい、小腰をかがめて、

「へへえ、このお嬢さん、思ったよりいいなにをしているじゃねえか。それに、上——ときてやがる。こいつは仕込み甲斐がありそうだけ」

鬼源は、そんな事をいいながら、今や、腰をよじる自由もなく、……至るまでさらけ出している小夜子のそれを眼を細めて凝視するのであった。

「いいか、お嬢さん。おめえは他の別嬪さん達より大分、調教がおくれているんだ。少しピッチを上げて、皆んなに追いつかにならねえ。女になったばかりで、ちと可哀そうだが、今夜から調教開始だ。いいな」

鬼源は、そういつて立ち上ると小夜子の顎に手をかけて、そらせている美しい顔を自分

の方へ向けさせる。そして、涙にキラキラ光る小夜子の黒眼をのぞきこむようにしながら「おめえが、どこの御令嬢か、俺にやそんなこと、何の関係もねえ。パン助くずれを仕込むような方法で、徹底的な調教をするつもりだ。おめえも、それだけの覚悟をしてくれねえと困るぜ」

小夜子は、鬼源に、肩を揺すられて、空虚な瞳をぼんやり前に向ける。その虚脱したような小夜子の表情には、もう、どうとでも好きなようにするがいいわ、といった諦めが現われていた。

「ね、もし、コンビを組ませるなら、やっぱり静子夫人が面白いじゃないの」

静子夫人は小夜子の踊りの師匠であり、捕われの美女の中では、ベテラン級であるから、小夜子を巧く、優しくリードすると思うわよ、とズベ公達はいうのである。

「俺もそう考えてたんだ。静子夫人に小夜子の調教をさせ、シヨ—出演の時は京子と小夜子をコンビにする。これが面白いと思うぜ」

まず、文夫と美津子の青春コンビが、黒と白の実演を展開したあと、この二人の姉である小夜子と京子が、若いカップルに負けず劣らずの白と白との大接戦を演じるというのは



筋の立った面白さだと鬼源はいう。

文夫の姉と美津子の姉の対決というのが気に入って、ズベ公達は手をたたいて喜んだ。

「わかったわね、小夜子。貴女は、これから静子夫人にお稽古をつけて貰い、ショー出演の時は、美津子の姉の京子嬢とコンビを組むわけよ。しっかりやってね」

悦子が、小夜子の近くへ寄り、小夜子の耳もとに、そんな事を吹きこんでいる。

小夜子は、意志を喪失した人間のよう軽く瞑目したまま、身じろぎもしなかった。

でしょ。それに、このお嬢さんも早速、出演させる気なの」

と銀子が聞く。

「当り前よ。だが、プレイの方は二、三日、調教をつまなきや無理だからな。今夜は、ほんの顔見せだけだ。まあ、浣腸責めぐらいでとところかな」

といて、鬼源は、牢舎から外へ出、

「だから、ケツの方の掃除でもよくしといてやんな」

と笑いながら、階段を上って行く。

■さてと鬼源は、腕時計に眼をやつて、

「小夜子の調教は午後二時頃から始めるからな。それまで、休ませておきな」

といい、牢舎から出て行こうとする。

「ちょっと、鬼源さん、今夜から、ショーが始まるん

「成程ね。浣腸なら、別に調教を受けなくて出来るものね」

悦子は、クスクス笑って、小夜子の白い尻を指ではじくのだった。

「それじゃ、小夜子、二時になったら、お迎えに来るわ。それまで、ここでおとなしくしているのよ」

朱美は、そういつて、悦子の方に眼くばせし、小夜子の足首にかけられている皮紐を解きにかかる。

ようやく、両肢の自由を得た小夜子は、腿と腿とをびったりと閉じ合わせて、小さく、消え入るように首を垂れるのだが、悦子は、ニヤニヤしながら、紙袋の中より、ピンクと白のんだら模様になった長い絹紐を取り出した。どういうわけか、その絹紐の中段に、親指大の鈴と小指大の鈴が取り付けられていて、それは、紐を滑り軸として、自由に上下へ動かし得るようになっていた。

「どう、ずいぶんと色っぽい紐でしょう。ピンクのしごきと、白いしごきを裂いて、ねじり合わせて作ったものなのよ。小夜子のためにね」

悦子は、そういつて、鈴つきの紐を小夜子の眼の前へ近づけ、チリチリと鈴を鳴らして

みせる。

「この鈴が、何故ついているのか、わかる？
フフフ」

悦子は、ぼんやりと、それに眼を向けた小夜子の横顔を楽しそうに見て、

「これはね、小夜子に対する股間縛り用の紐なのよ。そういえばわかるでしょ。朱美姐さん達と一晩寝ずに考えた発明品なの」

銀子も朱美も笑い出す。

「それじゃ、今、ぴったりと、これを緊めてあげるから、感想を聞かせてね」

三人のズベ公は、小夜子の周囲を取囲むようにして、まず、小夜子の……上下に二巻きばかり、紐を巻きつかせ、余った紐をたぐりながら、肢と肢の間へ差し入れようとする。

小夜子は、はっと我に返ったように、力を入れて、腿と腿とを密着させ、それを頑強にこばむのだった。

「な、なにをするのですっ」

小夜子は、今にも号泣しそうな、ひきつった表情で、紐を……ませようとする三人のズベ公を見下している。

肢の間へ通そうとする絹紐に、鈴が取りつけられている意味も、小夜子は、おぼろげながらわかったが、あまりにも、悪どいズベ公

達のいたぶりに、ぴったり閉じ合わせた腿のあたりがブルブル震え出すのであった。

「今更、羞しがるなんて、おかしいじゃないの。さ、お嬢さん、少し、……」

「嫌、嫌」

小夜子は、すすり上げながら、首を左右に振り、

「もう、もうこれ以上、いじめないで。後生です」

と、むつかしい顔して、上を見上げている朱美に向かって、哀願するのだった。

「何いってんのよ。こんなもの羞しがっていたら、これからの鬼源さんの調教なんて、受けられないじゃないの」

朱美がそういうと、悦子がつついて、

「あたい達はね。それでも、あんたを一人前のスターに仕上げようとして、努力してるつもりなんだよ。いつまでも、メソメソすんのは、大嫌いさ。こっちゃんが短い方なんだからね」

と、これ以上、手数をかけると、只じゃおかないわよ、という語気で、柔かいカミの毛をぐいとひっぱるのだった。

「わ、わかったわ」

小夜子は、幾筋もの涙を流しつつ、キリキ

り、心に決意したように、そして、ズベ公達に対する一種の挑戦として、縄紐のかけやすいよう、かすかに……くのだった。

「そうそう、そういう風に素直にならなきゃ駄目よ」

ズベ公三人は、身を乗り出し、忽ち、……に縄紐を通した。

「変だわ。少し、大き過ぎたかしら」

悦子は、鈴を……こもうとして小首をかしげる。

「そんな事ないわよ。それ位のものが、……こめなくて、どうすんのよ」

銀子は笑いながら、悦子に手をかしたが、「駄目ね、このお嬢さんが固くなり過ぎてんのよ」

仕様がなないな、と朱美は立ち上り、真珠のように美しい歯をキリキリ噛みしめ、この屈辱を必死にこらえている小夜子をニヤニヤ眺めながら、背後に廻る。

縄に上下をかたく緊めあげられている小夜子のふくらした白い二つの隆起に、朱美の両手が覆いかぶさる。

「あ、ああー」

小夜子は、朱美の手がゆっくりと……と、うっと顔をうしろへ切なげにのけぞら

せ、象牙色の艶やかな首筋を、はつきりと浮き立たせるのだった。

むっちりした、美しい二つの白桃は、朱美の手で、……ぐされるように、ゆったりと上下へ揺れたり、急に激しく揺すぶられたりする。

小夜子が、口を半開きにし、熱い吐息を吐き出すのを見た朱美は、小夜子の熱い頬に自分の頬を押し当てつつ、銀子の方を見下し、

「ねえ、ちょっと、……やってよ」

「あいよ」

銀子と悦子は、二人がかりで、ゆるやかに……始めた。

「ほんとに、このお嬢さんたら、顔に似合わない、お早熟^{ませ}さんなのね。すごいわよ」

「フン、さっきは、あれ程、嫌がったのに、何よ。今度は自分の方から、大きく……出したりしてさ」

銀子と悦子のそうした笑い声が耳に入ったのだろう。小夜子は、上気した顔を左右へ振りながら、思わず、両肢を閉ざし出すのである。

「それ位でいいだろう。縄をかけてみてよ」
朱美に声をかけられて、銀子と悦子は、あいよ、と再び、だんだら紐を取上げた。そし

て、二人のズベ公は顔を見合わせて、含み笑いしながら、小夜子をじらさせてやろうという悪計を立てたのである。

わざと上の方へ押し立ててみたり、周囲を這い廻すようにして、鈴の音をチリチリ鳴らさせるのだ。

「おかしいわ」

「変だわね」

銀子と悦子は、吹き出しそうになるのをこらえながら、肌に鈴をすりつけている。

哀れにも、小夜子は、敵の術中にはまってしまったのである。じれったいような、やり切れないような、……きに耐え切れなくなったのか、もどかしげに腰を揺すり始め、彼女達の仕事に協力を示すように、再び、肢を……出す。

「う、う、ん、嫌、嫌」

小夜子は、うしろから、ぴったりと寄り添うようにして、胸のふくらみを巧妙な……で……ている朱美の方へ、後頭部を押し当てるようにしながら、「ねえー」と訴えるような甘い声を出した。

「どうしたの、小夜子」

朱美も、含み笑いしながら、小夜子の紅潮した頬に自分の頬を当てて、銀子達の方を見

下す。

「銀子姐さん、そんなに、じらしちゃ可哀そうよ。しっかり、縄をかけてやってよ」

「だって、なかなかうまい具合にいかないんだよ」

小夜子は、たまりかねたように、激しく首を左右に振り出して、

「ち、ちがうわ」

ズベ公達は、キャッキョウ笑いこける。

「じゃ、どこなのよ、小夜子。銀子姐さんに教えてあげればいいじゃないの」

朱美は、小夜子の熱い耳たぶに口を寄せ、小さな声で、ささやくのだった。

小夜子は、甘美な、絹糸のようにか細いすすり泣きをしながら、魂も消えるような小さい声で、

「——も、少し、下の方——」

そして、小夜子は、死ぬよりも辛い羞しさに気が顛倒してしまったよう朱美の頬へ、狂ったように頬をすり合わせる。

「わかったよ」

銀子と悦子は、ようやく、……んで、うしろの方へ廻ると、力一杯、紐を引き絞る。

「あ、ああー」

小夜子は、再び、大きく首をのけぞらせ、

齒ぎしりをする。

「駄目よ。まだ少し、……てるじゃない。見えなくなるまで、引っ張ってよ」

銀子は、それを——しながら、悦子に声をかける。

朱美も手伝って、悦子と一緒に力一杯、引き絞り、銀子は……当てて押し、遂に、姿を……尽してしまうと、揃って、顔を上にあげ小夜子の表情を観察するのだった。

小夜子は、上の空のような力のない瞳を薄く開けて、ぼんやりと前方を眺めている。

冷ややかなうちにも、如何にも大家の令嬢らしい柔かい気品のあった小夜子の容貌に、これまでに見られなかった女らしい色っぽさがにじみ出て来た感じがする。

「次は、お尻の方ね」

三人のズベ公は、……ぐってたぐりあげた絹紐に、小さな鈴の位置を配置し直し、艶やかな、丸い……割り始めたが、小夜子は、生殺与奪の権利を一切、ズベ公に任せってしまったよう何の抵抗もしなかった。

ようやく、腰へ縄止めをし、小夜子を完全な……縛りに仕上げた三人のズベ公は、自分達の仕事の出来を点検するかのよう、小夜子の周囲をぐるぐる廻り、その前や後を腰を

かがめて、観察するのだった。

「どう、お嬢さん、あたい達が考えた鈴縄の味は？ フッフ、満更でもないでしょう」

悦子は、そんな事をいいながら、ジーパンのポケットより、小さなブラッシを取り出すと、……を深く……せている柔かい髪の毛に、スッスツとブラッシングし始め、完全に紐まで、覆い隠させてしまう。

「ね、悦子、鏡を持って来てよ」

朱美にいわれて、あいよ、と悦子は、ブラッシを朱美に渡し、牢舎の外へ出て行った。

悦子に代って、朱美が小夜子の前に腰をかめ、左右から、それをかき寄せるようにして、優しくブラッシを使い始める。

小夜子は、線の美しい繊細な鼻を上向き加減にし、うっとりとして眼を閉ざしたまま、身じろぎもせず、朱美の使うブラッシを甘受しているのだった。

悦子の運んで来たのは、下に車輪のついてある大きな立鏡であった。牢舎の入口でそれを横倒しにし、銀子と朱美も手伝って、中へ運び入れると、股間縛りにされた姿を一本の鎖につながれて中央に立つ小夜子の前へ、どっこいしょ、と配置するのである。

眼の前へ、等身大の立鏡が置かれた事に気

づいた小夜子は、さすがに動揺して、朱に染まった美しい顔をねじ曲げるようにして、それを見たが、朱美が、小夜子の横へ寄り添うように立ち、小夜子の顎に手をかける。

「自分の美しい身体を観賞させてあげようというのじゃないの。さ、見るのよ」

朱美は、指先に力を入れて、小夜子の顔を正面にすえつけようとする。

小夜子は、自分のそんなみじめな姿を見る勇氣はなく、顔を前へ向けても、頑^{かたく}なに、眼を閉じ合わすのだった。

「見るんだよ。あたい達のいう事にゃ絶対服従するんだ。何時までもお嬢さんぶっていと承知しないからね」

悦子と銀子も、小夜子の横に立ち、ミルク色の小夜子の肩をつねりあげてどなりだす。

小夜子は、もう、これ等のズベ公に抗う氣力もなく、そっと瞳を開けて、鐘の中に写る自分のおぞましい姿に、視線を向けるのだった。

小夜子の、そうした物悲しげな瞳をズベ公達は楽しそうに見つめている。

鏡に見入っている小夜子の美しい瞼の線から、屈辱のにがい涙があふれ出した。

何という浅ましい姿であろう。泣き濡れた

顔といい、麻縄に締めあげられた乳房といいただ悲しいばかりであった。……あたりから、垂直に下降して、喰い入るばかりに……を締め上げている、だんだら模様の細い紐を見た時、小夜子は耐えられない気持になってハッと視線をそらせてしまったが、

「勝手に眼をそらしちゃ駄目よ」

銀子と悦子が、再び、小夜子の顎に手をかけて、正面へ戻してしまふ。

「フッフ、だけど、お嬢さん、あれだけの鈴を、全く見事に……なんだものね。そら、影も形も見えないわよ」

悦子は、鏡の中の、そ……を手で示して、くすくす笑い出す。

小夜子は、かたく口を噤んだまま、涙に光る美しい黒眼を、ぼんやり鏡の中に向けているのだった。

「ね、黙っていちゃわからないわよ。鈴をお腹に入れた感想を聞かせてよ。ねえったら」

悦子は、腰を低めて、その部分を手で軽くたたきながらいうのだった。

「そんなに、いじめちゃ可哀そうよ」

と、朱美が、悦子を制し、

「ねえ、小夜子、あたい達が、貴女にこんなことをするっていうのは、貴方が憎いからじ

やないのよ。鬼源さんに、これから毎日受ける調教を苦痛に感じさせないよう、貴女の身体を鍛えてあげているのだからね。恨みに思っちゃ駄目よ」

と、小夜子の頬に伝わる涙をハンケチでふきとりながら、朱美は、妙に優しく、甘ったるい声を出すのであった。

「わかるわね、小夜子」

朱美は、小夜子の辛うじて号泣を耐えているような美しい顔をのぞきこんでいい、も一度、念を押すように、今度は、少し、語気を強めて、

「黙っていちゃ、わからないわよ。わかったのね」

小夜子は、一抹の憂いを帯びた美しい瞳に弱々しい羞恥の感情をねっとり浮かべ、

「——わ、わかりましたわ」

と、小さく、ささやくような声を出したのである。

もう小夜子にあるものは、失われた感情だけであり、これらのズベ公に抗らおうとする意志も気力も、完全に喪失してしまったのである。

「そう。それで、安心したわ。よくいってくれたわね、小夜子」

朱美は、煙草をとって、口にし、火をつけると、

「どう、一服しない」

と、口の煙草を指でとって、小夜子の口元へ持っていく。

小夜子は気弱な視線を朱美の顔へ向けながら、小さく首を振った。

「あら、煙草は吸えないというの。隠さなくてもいいじゃない。貴女のハンドバッグの中には、外国の高級煙草が入っていたわよ」

小夜子は、銀座のナイトクラブへ、友達と遊びに行った時など、時間つなぎに、時たま一本か二本、煙草を口にする事があった。

「さ、遠慮しなくてもいいわよ。ま、一服するがいいわ」

朱美は、顔をそらせようとする小夜子の首を抱えるようにして、煙草を無理やり啜えさせてしまふ。

「フッフ、股間縛りにされた美しいお嬢さんが煙草をお吸いになってるわ」

悦子がニヤニヤして、煙草を啜えている小夜子を眺めていたが、

「このお嬢さんが、ここで煙草を吸えるようになるのは何時頃だろうね。銀子姐さん」

と、それを指さしながら笑いかけるのだっ

た。

「さあね。鬼源さんの調教と、お嬢さんの努力次第さ」

銀子は腕時計を見て、

「鬼源さんの調教が始まるまで、まだ一時間はあるわ。じゃ、あたい達、一旦、引揚げようか、朱美」

「駄目よ。小夜子をここへ一人で一時間も捨てておくのは可哀そうじゃないの」

朱美は、小夜子の口から、ようやく、煙草を抜き取り、鼻と口から、かすかに煙を吐き出しつつ、美しい眉を曇らせている小夜子に「駄目よ、小夜子、私達がよしというまで鏡から眼をそらさないで」

小夜子は、柔順に、再び、気弱な眼差しを鏡に向ける。

朱美は、いたずらっぽい微笑を口元に浮かべつつ、

「ね、小夜子、あと一時間すれば、貴女、いよいよ調教室入りね。そして、鬼源さんの初の調教を受けるわけだけど、何しろ、貴女にとっちゃ始めての稽古だけに、私達としてもちょっと不安なのよ。わかる？」

一体、何を考え、何をいわんとしているのか、小夜子は、何か魂胆ありげにネチネチと

迫ってくる朱美が総毛立つほど恐しかった。

どうとも好きなようにするがいいわ、と半ば、捨鉢になり、自分の身体も命までも、これらの悪女達の手中にゆだねてしまった小夜子であったが、ともすれば、自分の神経が狂い出すのではないかと思う程、ズベ公達のいたぶりは骨身にこたえるのである。

朱美が、何か意味ありげに、そうした事を

小夜子の耳元で、ネチネチ語り続けている間でも、銀子と悦子は、幾度となく身をかがめ深く沈んだ……でたしかめるようにしながら、クスクス笑い合っている。小夜子が視線

を向けている鏡は、はっきりとそれを写し出して、小夜子は、舌でも噛み切りたいような狂おしい思いになるのだった。だが、一方、今の小夜子には、当然、起るべき加害者に対する怒り、呪い、というものが、激しく全身

にこみ上らず、ただ、涙を流すのみで、金持の令嬢にあり勝ちな気性の強さというものを完全に喪失してしまっているのは、やはり、

……通された一本の鈴繩の故であろう。小夜子の……喰い入る縄と鈴は、小夜子の内部に持っている女を表面に引き出し、小夜子自身に女の弱さというものを、はっきりと知覚させたのである。

それで、のっそり立ち上った悦子が、朱美の言葉を引継ぐようにして

「でもさ、この小夜子嬢にとって、今日の調教が辛いて事はないわよ、朱美姐さん。お師匠様にあたるあの美しい静子夫人と切りお尻が振り合えるのじゃないの。本当は、早く調教室へ入りたくて、うずうずしているのよ。ね、そうでしょ。お嬢さん」

と、いいながら、小夜子の頬を指でつついても、小夜子は、ただ、熱い涙を流すだけで鏡の中の哀れな自分の姿を、ぼんやりと見つめているだけであった。

「だからさ。あたい達としても、小夜子にお尻の振り方ぐらい教えておいた方がいいと思うのよ。静子夫人に負けるのは癪じゃない。あたいは小夜子側のコーチとして、応援するわ」

そんな事を朱美がいい出したので、成程、コーチとは愉快ね、と銀子も朱美も吹き出した。

「いいわね、小夜子。これから一時間、尻振りダンスのお稽古よ。この鏡に写る自分の姿を静子夫人だと思って、ぐいぐい——を突き出すのよ」

銀子は、そう言って、笑いこけた。

「じゃ、鏡をもっと、小夜子の前に近づけてよ」

朱美がいったので、悦子は、オーケーと、ガラガラ鏡を引っぱり出し、小夜子が足を上げれば、とどきそうな位置に配置させる。

そして、三人のズベ公は、何か意味ありげに小夜子の下半身に、ふと眼をやり、ニヤリと口元を歪めた。だんだら紐と、鈴の効果が威力を発揮するのはこれからで、それを小夜子は、どのように感じ取り、狼狽するか、それが何よりも大きな興味であったのだ。

「さ、小夜子、始めてごらん。最初は、ゆっくりと前へ押し出し、ゆっくり後へひく。これを何回もくり返すのよ」

朱美は、耐え切れなくなったように、遂に鏡から顔をそらせ、肩を震わして号泣し始めた小夜子の艶やかな首筋を優しく撫でさすりながら、

「さ、元気を出して。そんなにメソメソしちゃ駄目じゃないの。あと一時間後には、貴女は本格的な調教を受けなきゃならないのよ」
こっちは、あんたのためを思って、こんな事をしてやるんだぜ、と悦子は腹立たしげにぴしゃりと小夜子の尻をぶつ。

小夜子は、涙を振り払うようにして、遂に

決心したのか、悲痛な表情になって、前の鏡に顔を向けた。

「いいかい。足は動かさず、これを前に突き出すんだよ。最初は少し手伝ってあげるよ」と、銀子と悦子は、小夜子の左右へぴたりと身体をつけ、小夜子の尻と太腿に手をかけるようにして、ぐいと前へ押し出す。

「一、二、一、二」

太腿を固定さし、……前へ突き上げるようにさせるのだが、

「あっ、嫌、嫌」

突然、小夜子は、顔も首筋も燃えるように赤くして、その行為を止めようとするのだ。そうはさせじとばかり、銀子と悦子は、小夜子を揺り動かせながら、

「どうしたのよ、小夜子」

「待、待って」

「今更、何いってんのよ、おかしなお嬢さんね」

銀子と悦子は顔を見合せ、北叟笑む。

「——だって、だって、鈴、鈴が——ああ、許して」

前へ押し出され、うしろへ戻される度に、小夜子………に通された一本の紐は、上下へ伸縮し始めている。小夜子が狼狽するのは当

然だが、もともとそれが狙いであっただけに朱美は、とぼけたような顔つきでいう。

「馬鹿ねえ、小夜子。それを鍛えるために、今、トレーニングしてるのじゃないの。何時か社長もいつてたけれど、貴女の今まで身につけたピアノとか声楽とか、そんな教養は、ここじゃ何の役にも立たないのよ。ここで一番、大事なものは、貴女の——。フッフ、それを商売ものとして通用させるべく徹底的に磨きあげるのが鬼源さんの仕事というわけよ。わかったわね、小夜子」

美しいウェーブのかかった黒髪を左右に振ったり、泣きじゃくったりしていた小夜子であったが、「一、二、一、二、」と、ズベ公二人に前後に………かされているうち、得体の知れない魔風に煽られ、巻きこまれ出したよう、自分の方から、ふと積極的になり始めたようだ。

もうこれ以外、救われる道がない。といったような捨鉢な気持と同時に、ズベ公達に仕掛けられた小細工に、口惜しくも、哀しいばかりに女の本能をかき立てられ、次第に……立ち始めたのである。

それを敏感に感知した銀子と悦子は、小夜子の身体より手を離し、

「あとは一人でやるのよ。そうそう、その調子」

そして、ジーンパンから細い皮バンドを抜きとって、少しでも、小夜子の腰の運動がひるむとピシリとムチ打つのだった。

「もっと、大きくお尻を振るのよ。押し出す時には、うんと胸を張って。そうそう、なかなか、うまくなったわよ、小夜子」

朱美は、手をたたいて笑い出す。

小夜子は、自ら、自分を傷つけるように、二人の悪女の見守る中で、狂おしく身体を揺すり続けるのであった。小夜子の美しい肉体を……た一本の絹紐も、激しい活動につれて、締めつけ、すりつけ、その度、小夜子の甘美なすすり泣きは、一段と激しいものになる。

後手にきびしく縛りあげた女に、自分を自分で楽しませる方法がある。これは、ズベ公達にとっても、一つの面白い発見であった。

朱美も、小夜子のそうした状態を眺めているうち、何かにとり憑かれた不思議な気分になって、そっと腰を落し、小夜子……に好奇の眼を光らせるのであった。そして、そのあまりにも激しい小夜子の感受性に眼を見はったのである。強制されて演じたとはいえ、

その甘い……は、異常なばかりであり、これだけの若さで、しかも、金持の美人令嬢が、

このように敏感な感能力を持つというのは何か信じ難いような気持にもなる。小夜子の優美な、か細い泣声と共に、小さく一端を……かせたり、また、奥……いこまれていたりする金色の鈴を見ても、これだけの粘りのある吸引力を持つ娘なれば、たしかに、静子夫人につぐスターになるに違いない、そんな風に朱美は感じた。と同時に、

「ひょっとすると、男達の喜ぶ、き……」

まさか、昨日、女になったばかりの、しかも深窓育ちの令嬢が——と思うものの素質があるという風にも感じとれる。

「いいわよ。小夜子、それ位で」

朱美の声に、小夜子は、ようやく動きを停止した。同時に小夜子は、強要されたとはいえ、今まで自分が演じた魂も凍るばかりに羞しい行為——それに対する情けなさや嘲けりとで、さっと顔を横に伏せ、声をあげて泣きじゃくるのである。

朱美は、銀子と悦子の耳元に何か小声でささやいている。

「まさか、この御令嬢が。フッフ」

銀子と悦子の視線は、小夜子のそれに向け

られる。

「もし、そうだとすると、大した掘出し物だわね」

悦子はそういいながら、紙袋の中から、も一つの鈴を取り出した。

「これは静子夫人用にしようと思って用意していたんだけど、じゃ、この大きい方を使って、も一度テストしてみようか」

「そうね」

銀子と悦子は、号泣しつづけている小夜子の左右へ寄り、素早い動作で、腰紐をほどき始める。朱美が想像した通り、それは、すぐには……出来なかった。

「まあ、嫌ね、このお嬢さんったら」

悦子と銀子は、呆れたように顔を見合わせながら、紐をたぐって、ようやく……出させると、

「今度は、もう少し、大きいのと交換よ」

使用済のものをほり出し、夫人用のものを紐にとりつけ出すのである。

激しくむせび泣きながら、ふと、それに気づいた小夜子は、反射的に顔を横へそむけ、わっとばかりに肩を慄わせて泣き始める。

「ま、まだ——まだそんなことしなきゃならないの。ああ、一そ、一そ、殺して！」

小夜子は、全身を慄わせてわめき出すのだった。

幾度となく、自分の意志を裏切った悲しい女の生理を、これらのズベ公達に目撃されねばならぬ口惜しさが、……の縄を一旦、解かれた途端、突風のように小夜子の胸を襲ったのである。

そんなことは意に介さず、紐に取りつけた鈴をチリチリ鳴らした悦子は、

「何いってんの。そら、今度は、こんなに大きいよ。内心は、ぞくぞくする程、喜こんでいるんでしょ」

「嫌っ、嫌です！」

先程までの観念し切った柔順さとはまるで逆に、再び、鈴紐を前に見せられて小夜子は逆上したように泣き悶えるのであった。一旦の休止で、今まで喪失していた自意識が、ふと、蘇ったのだろう。

突然、小夜子の頬へぴしゃりと平手打ちがとんだ。

朱美が険しい顔つきで何時の間にか小夜子の前に立っている。

「あんまりつけ上ると、いくら私だって容赦はしないわよ！」

威圧の意味で、更にもう一発、小夜子の顔

をぶった朱美は、

「はっきりいったげるわ。小夜子はね、ひよっとすると男達を有頂天にする——をしているかも知れないのよ。だから、私達が念入りにテストして、鬼源さんに報告しようと思っているのさ。もし、本当にそうだったら、色々面白い調教の方法があるからね」

勿論、小夜子には、朱美のという言葉の意味がわかる筈はないが、朱美に激しい平手打ちを受けた途端、一切の反抗心が小夜子の魂からはじけ飛んでしまったのだ。

美しい横顔を見せて、小さくすすり泣く小夜子を見て、朱美は、今度は妙に優しい口調になり、

「引っ張たいたりして悪かったわ。でも、何度もうようだけど、これだけはよく覚えておいてね。貴女は、もう村瀬宝石商会の御令嬢じゃないのよ。今夜にでも、お客の前で、裸踊りや果物切りなんかをするかも知れない森田組の商品なのよ。私達は鬼源さんの助手で、貴女の調教師の一人よ。わかったわね」

「わ、わかりました」
小夜子は、自分に諦めと覚悟をいい聞かせる気で、可憐なぐらいに柔順にうなずいたのである。

「じゃ、さっきのように縄をかけるわよ。いいわね」

朱美が、意地悪く念を押すようにいうと、小夜子は、消え入るように、小さくうなずいて、燃えたつように熱くなった美しい顔をそっと正面に向け、観念しきったように瞼を閉じ合わせるのであった。

朱美の眼くばせを受けた銀子と悦子は、まるで芸者の着せかえを手伝うような調子で、小夜子の左右に上体をかがめ、帯でも巻いてやるように……上下へ紐を巻きつけ、今度は二本にしつらえて、ねじり上げた紐を垂直に前へ垂らす。チリチリと音をたてた鈴が、その……ふと触れると、小夜子は、羞恥に歪んだ顔を、はっきり、横に向けながら、ズベ公達の仕事に協力を示すよう軽く肢を開くのがあった。

「少し大きいかもしれないけど、気にしちゃ駄目よ、小夜子」

さ、もう少し、開いて、と朱美は、充分、小夜子の肢……かせてから、その……、それを掌で、そっと当てがって、
「さて、これからがテストよ。自分の力で、……上げてごらん」

小夜子は、はっとしたように一層、顔を赤

らめて、モジモジいざるように腰をひく。

「駄目よ、羞しがっていちゃ。お尻を揺すって、努力してみるのよ」

小夜子の尻の双丘に、悦子と銀子の手がかかり、ゆるやかに動かし始める。朱美が、それを押しつける。

「ああ、駄目、出来ないわっ」

小夜子は、額に脂汗を流し、狂おしげに首を振ったが、

「がんばるのよ、小夜子、そら、もっと……」

を振って」

遂に小夜子は、そこに命をかけたよう乳房の谷間にも、ねっとり脂汗を浮かべて、必死に取組み出す。

大家の御令嬢が人間ポンプになるべく大奮闘している。そのおかしさに、悦子は、何か口に出そうとしたが、朱美と銀子のそれを見つめる眼つきの真剣さに驚いて、

「そら、もう少しよ、小夜子」

と、再び、悦子も双丘に手をかけながら、

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

この八緊縛女体アルバムは、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚

にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。この一冊にて四人の美女の裸身のすみずみまでが、八縛りVというアクションによって、ファンの皆様方の目の前に極めて鮮明な印刷によって展開されています。どうか一冊を机上にお飾り下さい。

声をかけるのだった。

遂に小夜子は、持ち上げそして、ズベ公達に声をかけられながら、激しく全身を躍動させて、奥へ奥へと……げ始めたのである。

激烈な痛みと激烈な快さが瞬間にして同時に小夜子の体内を突き走り、小夜子は傷ついた獣のようにうめき、歯を噛み鳴らした。

「よくやったわ、小夜子」

勿論、そんな大きなものを全部……めるわけはないが、それは、ぴったりと小夜子に密着している。小夜子の口は大きく開いて、その半分を……んでしまったのだ。

朱美は、小夜子の運動を休止させると、

「さ、おっこちないように早く縄をかけて」と悦子に声をかける。

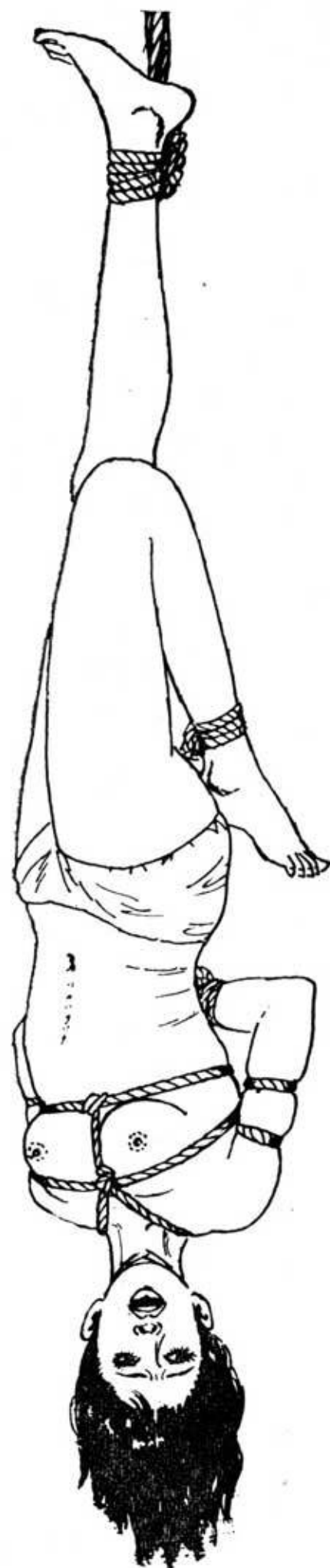
悦子は、小夜子のうしろへ廻り、キリキリと紐をたぐりあげた。

「早速、このことを、鬼源さんに報告しなさいやあ」

銀子と朱美は、額にこまかい汗の粒を浮かべ、肩で息づく小夜子を頼もしげに眺めるのだった。

（未完）

× × × ×



痴

ち

人

じん

の

糧

かて

山本一章

雪国への旅 (1)

底冷えのする寒さだ。人影も殆んどなく、黒い空から音もなく落ちてくる白い雪が、街灯をぼかして寂しい光景を作っている。時折り疾走する車のライトの中に入った雪が灰色にくすんで見える。固い歩道が凍った靴をコンコンと鳴らす。

「ううっ、寒いなあ」

肩をすくめる大山を見上げながらアケミは微笑した。

「お前、寒くない？」

「寒いわ」

アケミは大山のオーバーのポケットの中で彼の手を握る。男の手にも少し力が入る。寄りそった二人の影に雪が烈しく舞う。

「熱いものでも飲もうか？ まだ少し時間があるから」

「ええ」

二人は小さな喫茶店に入る。激しいリズムと、むっとする熱気が二人を包む。狭くてうす暗い店の中は、若いアベックで一ぱいだ。た。やっと片隅に空席を見つけた大山がアケ

ミを招く。

「よう混んでるね。何にする？」

「レモンティを貰うわ」

大山と向い合って坐ったアケミは、自分達も他の客と同じアベックなのに快い満足感を持った。大山もそれを意識したのか笑いがらつぶやいた。

「恋人とデートしているみたいだね」

「……………」

「僕の方が少し年をとり過ぎたかな」

「そうでもないわ。でも大山さんの……………」

アケミは言葉を詰まらせた。彼の自分に対する気持を聞いてみたかったのだが、彼の手がウエイトレスに合図したのに腰を折られてしまったのだった。

「体の調子はどう？」

注文を済ませた大山は、彼女の感傷を無視して尋ねる。

「大丈夫よ。でも、大山さん、わたしのこと好き？」

アケミは話題を引戻そうとする。

「好きだよ」

彼の返事は、そっけないものだった。

「大山さんが本当に、わたしを愛してくれるのなら……………」

「何だい？」

「どんなことでも辛抱するわ。死んだって構わない」

「馬鹿だなあ」

大山とアケミの二人はこれから夜行列車で北陸へ向うのだった。鄭の紹介で知り合った男からの是非にとの招待で、大山は三人の中からアケミを選んで雪国に同行することにした。相手の素姓をよく知らなかったが、鄭の語しでは相当なマニアで資産家だということだった。それに大山は鄭を通じて少くない金を受取っていたし、礼金の約束も彼に魅力があった。

女を連れての訪問の旅は、何かうらぶれた役者のどき廻りのような感じがしないでもなかったが、金の前には、そんな感傷も非力だった。相手の趣味も性癖も全く分らないだけに、そして条件がよすぎるだけに、大山は最初三人の内、誰を選ぶかに迷った。そして結局は少々の苛酷さにも耐えられるアケミを選んだのである。今度の場合、大山はアケミに一切を打明けて話をした。

「ちょっと不安だけど、大山さんが一緒ならいいわ」

アケミはあっさりと承諾してくれた。

一切の処遇、演出は当方に一任して貰いたいという相手からの申出は、大山自身にも不安な感じを与えたが、まさか命までも取るようなことはないだろうと気にしないことにした。送られて来た列車の指定席券がこれから二人を誘導することになっていた。どこで降りるのか、それからどうなるのかは全く見当がつかなかったが、指定された通り動けば良いということは一面気が楽でもあった。

喫茶店での一刻、アケミは幸福感に酔っていた。自分の体が大山の役に立っているというところ、これから二人で未知の旅ができるということ、そして旅先で演じられる責めに対する期待——それらが彼女の心を浮き立たせて、先程の言葉を喋らせたのだった。大山はじっと自分を見つめているアケミの瞳に視線を入れる。

「馬鹿だなあ」

もう一度彼はつぶやく。しかし彼の心は、アケミの感傷に引摺られて、何か優しい言葉をかけてやりたくて、うずうずしているのであった。

「わたし、本気なの」

アケミが視線を外さずに低い声でささやいた。

「好きだよ」

小さな声だったが、それが大山には精一ぱいの言葉だった。これからどんな歓待を受けるのか——恐らくは、その女体に加えられるものは甘美なものではない筈だ。それに一時的にせよ金で売った女へ愛情の告白ができる程、大山は厚顔ではなかった。

「悪い男だと思っただろう？」

大山はテーブルの下でアケミの手を握り締める。

「いいのよ、そんなこと気にしなくて。わたし最初から覚悟して大山さんとかへ押しかけたんだもの。でも捨てないでね。捨てられたら死んじゃうから」

アケミの顔が笑う。それにつられて大山も顔をほころばせた。

「わたしって女、マゾの女ね」

大山はその言葉にはっとして周りを見廻わす。しかし誰も聞いていなかったのに、ほっとして時計を見た。

「そんなこと、大きな声で云うもんじゃないよ」

もう汽車の出る時間までに三十分程しかなかった。二人は雪の中を駆け急いだ。

定刻に汽車は動き出した。アケミを最上段

の寝台へ上げた大山は中段に横になった。下段は空いたままだった。二等寝台は狭苦しかったが、体を横にできるだけが取柄だった。大山はアケミに声を掛けてみた。

「そこは揺れるだろう？」

「ええ、でもいいわ」

「眠れそうかい？、ビュッフェへ行って、ビールでも飲むか？」

「そうね」

アケミはこのまま眠るのが何だか惜しいような気がしていた。折角大山と二人きりになったのだから、彼に甘えていたかった。ビュッフェは少し混んでいた。

「見てごらん。雪がひどいよ」

大山が窓の外を指さす。斜めに無数の灰色の影が散って行く。アケミは、そっと彼の手に手を重ねた。

「北陸の方は、雪がひどいんでしょうね」

「この調子じゃ、米原あたりから先は大分積っているだろうな」

大山がアケミのコップにビールを注ぐ。

「ああ、少しにして頂戴！」

「ぐっと飲んでぐっすり眠った方がいいよ」
大山は一気にコップを空ける。アケミはシチューにフォークを突き立てた。

「このまま大山さんとずっと旅行したいわ」
「そうだね。いつか連れて行くよ」

アケミがコップのビールを少し飲むのを見ながら、大山は彼女をいじらしく思った。

二本のビールを殆んど一人で飲んだ大山は寝台へ戻ると五分も経たない間に眠ってしまった。

米原に着いたのは、夢うつで知っていたが、それから先は覚えていない。彼が目覚めましたのは金沢だった。小用を足した大山はアケミの様子を見ようと思っただけで最上段を覗いてみた。しかしアケミの姿は見えず乱れた毛布だけが手に触れた。便所にも行ったのかなあと一瞬思っただけで一旦寝台に横になってみたものの一向に戻ってくる気はない。大山はちよっと不安になって最上段へ上ってみた。

枕許に彼女のオーバーが畳まれたままである。彼は洗面室へ行ってみた。しかしトイレは全部空である。彼は少し慌てた。もう一度寝台へ戻って上段に上ってみた。アケミのオーバーを手にする。すると一枚の紙片が、その間から落ちた。

（お預りします。品場は必ずお返ししますから心配御無用。このオーバーのポケットに帰りのキップが入っていますから、

それを御利用下さい。他言不用。返却予定は三日後。 K生

鉛筆で書かれたその筆跡は達筆だったが、大山は一瞬ぼかんとしていた。美事な演出だと感心する余裕もなかった。

富山で降りた大山は直ぐ長距離電話で鄭を呼び出した。不気嫌そうな鄭の声にかまわず大山は事情を語って相手の住所を聞き出そうとした。

「さあね、僕も知らんよ。神戸で時々会うだけだから、まあ三日程待ってみるしかないだろう。あの男のことだから、約束は守ると思うよ」

電話を切った大山は、がっくり、傍のベンチに腰を落した。もう待つしかなかった。

○

アケミが小用を催してトイレに行ったのは汽車が福井を出てからだった。空いていた筈の下段に中年の女がいて、彼女の直ぐ後を随いて来た。

「大山さんこの方でしょう？」

トイレから出て来たアケミに、その中年の女が話しかけた。

「ええ、そうですけど……」

「丁度良かったわ。わたし、あなたに少しお

願いがあるの」

「あなた、一体どなたですの？」

「誰だっていいでしょう。わたしのお話しを先に聞いて頂戴」

その女の話は、とり止めのない身の上話で、きりがなかった。アケミはいらいらしてきた。

「もういいでしょう。寒いから寝台へ戻りますわ」

「もう少し聞いてよ」

その時、列車は小さな駅に停車した。

「さあ降りるのよ」

「どうして？」

「早くしないと突くわよ」

女の手に、キラッとナイフの冷たい色が光る。ホームには眠そうな顔をした駅員と、若い男が立っているだけだった。列車を降りると物凄い寒さがアケミを震え上らせた。

アケミの後には中年の女がピタリとくっ付いたままである。駅員はちらっと二人の姿を見たものの別段気にもしないで消えて行く列車の尾灯を見送っていた。若い男が二人の方に近づいて来るのを見て、アケミはその人に助けて貰おうと中年の女から体をかわして走り寄った。

「助けて！ あのひと変なの」

「どうした？ 僕は、この人を迎えに来たんだよ」

万事休すである。その男は中年の女と目くばせをすると云った。

「いい娘だな。これなら、いかすよ。さあ、こんなところにいたら凍えてしまう。行った、行った」

両側から狭まれるようにしてアケミは歩くしか仕方なかった。改札を出る時、駅員に声を掛けようと思ったが、寒さと怖ろしさで声が出なかった。駅前に停められてあったライトバンの後部シートにアケミは女と一緒に乗せられる。外は一面の雪で無気味に静まり返っている。自動車はタイヤに巻かれたチエーンをガチガチ鳴らしながら走り出した。

「手を後に廻わして！」

「許して！ もう帰して下さい！」

パーン！ と、いきなり女の手がアケミの頬を打った。

「さあ、云うことを聞くのよ」

手首が後手に縛り合わされる。そして手拭が目の上に巻かれた。

「わたしを、どうしようっていうの？」

アケミは泣き声で尋ねた。

「売るのよ。少しいろんなことを仕込んでからね。あんたのような娘を欲しいと云う男が沢山いるのでね」

「あとう、鄭さんの紹介の方じゃないの？」
アケミはその中年の女が大山の名を知っていたのに気づいて尋ねてみた。これも演出かもしれないと思ったからである。

「そうよ。でも大山さんには何も知らしてないから気がついたら驚くわよ。でも後の祭りだわ。あんたがどこにいるかわかりっこないんだから。鄭さんも知らない。だから、あんたの体は私達の思うままよ」

「でも最後は帰して下さるんでしょう？」
「まだわからないのね。あんたは売られるのよ。だからもう二度と大山さんとは無関係」

「ええっ！」
「さあ口を開けて！自殺でもされちゃ困るからね」

もう一本の手拭がアケミの口を割る。自動車は走り続ける。どこをどう走っているのか目かくしをされているアケミには全く見当がつかなかった。尤も目かくしがなくても、わかる筈がなかったが。二十分程走った車が停る。

「さあ着いたから降りるのよ。お待ちかねの

先生がいるからね」

後から突つかれながらアケミは歩く。玄関から階段を上る。ドアの開けられる音がして中へ押し込まれる。むっと暖い。

「やあ来たね。僕も今帰ったとこだよ。大山君に置き手紙をしないとあげたよ。もう帰らないってね」

男の声は丁寧だったが、アケミには悲しく聞こえた。消毒液の臭いと男の言葉から医者のように思えた。

「さあ、お疲れだろうが早速体を見せて貰うとするか。そこに立たすのがいい」

後手が一旦解かれると、前手縛りに直される。中年の女と運転していた若い男の二人がかりなので、少し抵抗してみたが、無駄だった。手首の縄が引き上げられる。腕が持ち上げられ体が伸びる。手首の痛さに爪先立ったところで縄が固定された。

「服はいらないよ」

主人の声にワンピースに手がかかる。シュッ、シュッと、布を鋭利な刃物で切る音がする。アケミは自分の服が無残に切り裂かれているのを知って体を固くした。バサッと音を立てて足許に服が落ちる。次いでシューミーズが。

「動いたら体に傷がつくわよ。じっとして」
女の手にある剃刃のようなものが、薄い下着をもシュシュッと切り落してしまった。

「うーん、なかなかいいじゃないか。それこっちを向かして！」

生まれたままの体がぐるっと廻わされる。

「ハーレをラジレン！」

女の手慣れた剃刃が、アケミの体から陰影を完全に取り去ってしまう。若い男が片足を持ち上げてそれを手伝う。

「綺麗な体をしてますね、先生」

「これだけ綺麗なのは少ないね、それに体の線もいいじゃないか。これでマゾの気があるって云うんだから貴重だよ。売るのが惜しいね」

彼がウィnkをしながら云ったのをアケミは知る由もない。

「そのバンドで叩いてみるよ。加減することはないからね」

ビーン！強い打撃が臀部に破裂する。

「ウウウッ！」

ビシャッ！ ビシャッ！

鞭打ちが執拗に尻をねらう。弓なりに体をそり返らせる。

「もっと早く叩いてみて！」

打撃の間隔が短くなる。

「ウッ、ウッ、アウッ！」

惨めな裸身が弓なりになったまま、手首と爪先とを軸にしてぐるっと一回転する。

「よし、今日は疲れてるだろうからこれで休ませてやるとするか。そこへ入れてやれ」

手首の縄が解かれるとアケミは床の上に坐ってしまった。目かくしが取られる。廻転椅子に腰を降ろした肥った男が目に入る。やはり想像したような医者タイプの男で、もう五十は越しているようだった。

「口は解かずにな」

噛まされていた手拭が解かれ、代りに革紐が再び口を割った。部屋隅に犬小屋を少し大きくしたようなものが置かれてある。その鉄の柵になった前部が開かれ、アケミは中へ裸のまま押し込まれた。中は棺桶のように細長い。体を横にしておれば余裕があるが、坐ることのできない高さである。

「さあ、手を前に出して！」

女が命令する。アケミの両手首に冷い金属性の手錠がガチガチとはめられた。警察で使うあれである。鉄棒のはまった前部の扉が閉められ錠がおろされる。

「もういいから休みなさい。僕も少し眠って

おくよ」

医者のような主人が二人に声を掛けると、二人は黙礼して部屋から出て行った。男は檻の傍のベッドに体を横たえる。

「名前は？」

「アウアウ、アコム……」

「アクメ？　いかす名じゃないか」

男はゲラゲラと笑った。

「まあ自分そこで暮らして貰うことにするか。明日は雪の中でテストするつもりだから、ゆっくり休んで置いた方がいいよ」

電気が消されて部屋の中は真暗になった。

スチームが入っているのか裸でいても、そう寒い感じはなかった。

○

雪も止んで太陽が白い絨毯にまぶしく反射していた。雪国の晴天は余りにも清冽で神秘的だ。山間に建ったこの屋敷の裏に広がる丘陵の木々も、綿のような衣を枝々に載せたまま静止している。時々煙のように碎けて落ちる雪が沈黙を破って木々を震わすが、それも直ぐ自然の休止に戻ってしまう。

その丘陵の反対斜面に、一基の十字架が、これも自然の一部のように木々に囲まれて突立っている。しかし、そこには生きた女体が

高々と架けられているのである。左右上方に腕を伸ばし、のけぞるように胸をそらせたその犠牲者の体を、まぶしい日光から遮るものは何もなかった。揃えた足は地上から一メートル程も浮き上り、手首、足首、胸、腹部にしっかりと巻きつけられた荒縄が、その体重を十字架に引寄せている。

踵の下に打ち込まれた太い釘が、僅かにその体重の何分の一かを支えてはいるのだったが、それは外から見分けることができない。そして白い布の目かくしと黒い革紐の猿轡が女の顔面を無残に歪めている。広げられた女性の胸が、ゆっくりと呼吸を繰返してはいるが、それだけが奪われた自由の中での哀れな抵抗のように思えるのである。鷲の鋭い爪に押えられた兎のハカない足掻のように。

白い雪の背景は、その裸身を淡褐色に浮き立たせていた。しかし天然の陰影を失った滑らかな女体は、蠟人形のように美しく均整がとれ、そして無残であった。

それが檻の中で一夜を明かしたアケミの姿であった。三人がかりで十字架上に磔つけられた時、アケミはふと大山のことを思い出していた。せめて彼がいてくれたら——。磔つけられたアケミの裸身を革鞭で打ち据えて三

人の加虐者は去って行った。

風がなく日光が直接アケミの体を照らしているせいか、寒さは耐え切れない程ではなかった。しかし縛られた手足が痺れと共に冷えて行くのは、どうしようもなかった。陽に照らされた肌が乾いてピリピリと痛む。上に伸ばした腕が凄くだるい。

せめて大山がいてくれたら——アケミはそれを繰返して思った。彼がいたとしても、この残酷な処刑から逃がれることができなかったかもしれない。しかし彼が傍にいて自分を見てくれる、傍にいないでも自分のこの惨めな苦しみを知っていてくれる——そのことだけでアケミは、どんな苦しみにも耐え忍ぶことができるように思えるのだった。その大山も今はどうしているのか知ることもない。彼もまたアケミの所在を知ってはいないのだ。アケミは悲しかった。そして張りつめた意志がともすれば崩れかかるのを持ちこたえるだけの力すら湧いてこないような気がした。

アケミのマゾ性はマゾのためのマゾではないのかもしれない。それは切ない大山への愛情の変形なのであろうか。肉体の苦悶の中で感じる彼のためへの犠牲者的快感が彼女のマ

ゾの本性なのであろうか。

「ほほう、凄じやないか」

男の声が下で聞える。

「雪の中で素っ裸にするとは思いつたな。」

それにいい恰好に、磔つけたもんだな。大丈夫かい？」

「まあ風がないから、大丈夫だろう。この女は、ひどいマゾだっていうからな。快感が続く限り人間の体っていうもんは案外頑丈なもんだよ。マゾ気のない女なら、一分もこんな恰好にしたら気を失ってしまうがね」

医者らしい男が答えながら、十字架の前に踏み台を置いてその上に載る。冷い手がアケミの左の乳房を少し持ち上げて心臓の鼓動を計る。それからその手が肌を撫で降ろして——

「正常だな。それにエキサイトもしてるようだ」

シャキッ！ シャキッ！ カメラのシャッター音が聞える。

「雪が白過ぎて駄目かな。ハレーションを起しそうだけど、これだけのもの

のは、そうそう撮れないからな」

「どうや、写真を写したら叩いてみないか。その鞭で」

「本当に構わんのか。ショックやなあ」

ビューン、ビューンと革鞭が空を切る。

「こいつは痛いで」

「さあやれ！」

ビシッ！ 鞭は揃えた太腿に当たって大きな音を立てた。

「下手だなあ。そんなやり方じゃ音ばかりで、そう痛くはないよ。ほれ貸してみろよ」

ピシッ！ ピシッ！ 鞭の尖端が乳房で鋭い音を立てる。磔つけられた女体がぐぐっとそり気味になって震える。その苦悶の表情はセクシーなものを連想させる。

「ううん、こいつはショックやなあ。参ったなあ」

男の言葉にならない嘆声が出れる。

ピシッ！ ピシッ！ ピシッ！

鞭は女体の痙攣するような悶えを無視して胸から腹部へと音を移動する。

「ううっ！ あうっ！ ううー」

女の紐を噛んだ口から洩れる悲鳴は、益々男の欲望をつのらせるような響きを持っていた。

「もう許してやれよ。参ったなあ。ショックや」

「おい見てみる。相当こたえたらしいよ。そ

れがいい証拠や」

揃えた足から柱を伝って液体がすーっと糸を引く。

「へえっ。洩らしたんか？」

糸は徐々に太くなり、柱を伝って雪の中に消える。白い蒸気がゆらゆらと立ち上る。

「こいつはひどい。参ったよ。さすが、君らしいな。それにしても、よくこの女を見つけたな」

「まあね。どうや、買う気はないか？」

「買うって？」

「ああ、何もかもだよ。買物だと思うがな」

「それ本当か？」

男達の会話が途切れて笑い声が、それに代った。

「冷たいな」

揃えたアケミの足先を握った男が驚いたように云った。事実彼女の手足は失血と冷気で感覚がなくなっているのだった。

「よーし、降ろしてやるか」

踏み台に上った男が先ず手首の縄を解く。胸と腹部の縄が弛められると、アケミの上体は前にのめる。それを肩で受け止めた男は、合図してもう一人の男に足の縄を解かせる。「濡れてほどき難いなあ」

液体を吸った縄は棒のように固く足首に食いついているのだった。女の腹部を肩に載せて担ぎ上げた男は、その太腿を腕で抱えて踏み台を降りる。気を失ったように女の体は二つ折れになって動かない。だらんと垂れた腕が男の背で揺れる。

「気絶してるんと違うか？」

「大丈夫や。ほれ、息をしてるやろう」

アケミの胸は喘いでいた。

「おい、その縄で後手に縛ってくれよ」

「まだ何かするんか。ちょっと殺生やなあ」

男はそう云いながらも藁縄で後手にアケミの手首を縛り合わせた。雪は五十センチは積っていただろう。アケミを担いでいた男が、突然その真白な絨氈の中へ、荷物を投げ出した。

「うううっ」

素ッ裸の体が半ば雪の中に埋もれて、海老のように悶えた。

「早よう写真を撮っとけよ。この中じや長持ちせんからな」

慌しくシャッターが切られる。くねらせているアケミの体に白い雪が崩れ落ちる。

「ふふふう。うううっ」

自由になる足で雪を蹴って体が転がる。ま

だこれだけの気力が残っていたかと思われる程の悶え方だった。

「無茶苦茶やなあ。病気になるぞ」

「さあ帰ろう」

今度は二人がかりで雪にまみれたアケミを担ぎ上げると、二人は雪の中を走り出した。

○

雪の中にほうり出された時、アケミは失いかけていた意識を取り戻した。その冷たさは痛さになって彼女の裸身を刺戟したからであった。しかし雪の中から引張り上げられた時、彼女は完全に気を失ってしまった。

(ひどい。ひどいわ。ひどいわ)

遠くなっていく意識の中で彼女は、その言葉だけを呪文のように繰返していた。

頭がずきずきと痛んだ。しかし、もう体から寒さは消えていた。

「あああ」

アケミは思わず声を出して体を起した。何時間経ったのかわからない。体にも顔にも何の拘束もなかったが、裸のままであることに変りがなかった。最初連れて来られた部屋の中だった。暖い。

「気がついたようだね。だいぶ、参っただろう？ ちょっと悪かったな」

医者のような肥った男が廻転椅子に腰掛け
たまま話しかける。

「ここはどこですの？ もう帰して！」

「ああ帰してやるよ。今直ぐというわけには
いかないがね」

男が体温計を差出す。アケミは素直にそれ
を腋に挟んだ。

「頭が痛い？」

「少し」

熱のないのを確めた男は、アンプルの液体
を注射器に吸い上げる。

「俯伏せに寝て」

柔らかい尻の肉をつまみ上げた男が、そこ
に注射器を突き立てる。

「病氣されちゃ大山さんに済まんからな」

アケミはその言葉に緊張していた気持が柔
らぐのを感じた。(これも大山さんが承知の
上の演出だったんだわ)

「僕は残忍な男でね。根は優しく出来てい
るんだけどね。まあとって食おうと云わないか
ら辛抱するんだな。と云っても、あんたの出
方一つでは、どうなるかわからんがねえ」

男はむき出しの臀部をポンと叩くと椅子に
戻った。

「さあ、ここへ来て」

アケミは男の前に立つ。手首に手錠がはめ
られる。男の指が机の脇のボタンを押す。

「先生、お呼びですか？」

白衣を着けた女が現われる。昨夜アケミを
列車から誘拐した中年の女だった。

「出掛けるから、この娘を見てやってくれ。

晩には帰ってくるから、ゆっくり休ましてや
るんだよ」

その女は黙って頷ずいたが、その目の中に
激しい嫉妬の焰が秘められているのをアケミ
は女の本能で覚った。医者と看護婦——二人
の間に肉体関係があるように思えた。しかし
男が去ってから、その女は別段アケミをい
びるようなことはしなかった。アケミは彼女
の手から病人のように食事を摂らされ、もし
て檻の中へ押し入れられた。

「よく休んで置くのね。あの人ったら、しつ
こいからね。でもあんた本当にマゾなの？」

「……………」

「それにしても随分辛抱強いわね。わたしに
は、とても真似ができないわ」

アケミはその看護婦がああ男の手で縛られ
た経験を持っているらしいのを覚った。アケ
ミが檻の中で眠っている間、彼女は傍の椅子
に腰を掛けたまま雑誌を読んでいた。何時間

眠ったかわからない。注射の中に催眠薬が入
っていたのか、夢も見ない深い眠りだった。

「さあ、目が覚めたら、お風呂へ入るときま
しょうね。あの先生、自分は不潔な癖に、女
の不潔をととても嫌うんだから」

檻から出されたアケミに、真紅のナイトガ
ウンが掛けられた。どうもその看護婦のもの
のようであった。浴室は一階にあって、そこ
で手錠が外された。

「ここ病院ですの？」

「病院という程、大げさなものじゃないけど
ね。今は暇なのよ」

看護婦も一緒に入浴した。アケミには蘇生
する思いだった。

「あの先生、奥さんやお子達は？」

「別居してるのよ。先生の遊びに理解がない
のね」

「遊びって？」

「わかってるでしょう」

その中年の看護婦は裸になると、二十代の
若々しい体をしていた。アケミにはその体が
先生の遊びの対象になっていることが理解で
きるような気がした。少し肥え気味のぼっち
やりとした肉づきは、男の慾望をそそるに違
いなかった。しかし、その白い肌の所々に淡

褐色の内出血の跡があるのを見つけたアケミは、思わず顔をほころばせていた。

入浴を済ませたアケミは再び裸のまま手錠をかけられて二階へ戻された。

男が帰って来たのは、夜も遅くであった。

彼は少し酒を飲んでいるようだった。運転手の若い男も少し遅れて二階へ上ってくる。

「どうや、二対二で丁度いいやないか。今夜は盛大にやってみるか」

「先生、本気ですか？」

「ああ正気だよ。君に勇氣はないか？」

「……………」

「まあいい。早速かろう。お待ちかねだろうからな」

檻から出されたアケミは、三人がかりで縄を掛けられる。四肢を一つにした獣縛りである。床の上にそのまま置かれたアケミは体を縮めていた。口に紐が噛まされる。手首が足首の所へ寄せられているため、膝は開いて曲げていなければならない。女には無抵抗な縛り方である。

「さあ君も裸になって！」

「先生、いやだわ。この娘一人でいいじゃないの」

「良くはないね。どうしてもいやかい？」

「……………」

「さあ、あっさりして！」

中年の女は彼の気性を知っているのか、それ以上逆おうとはせずに白衣を脱いだ。

「これだけは堪忍して！ 若宮さんもいるんだから」

「駄目や。全部脱いで！」

彼女もアケミと同じように獣縛りにされ、紐を口に噛まされる。四肢を束ねた女体が二つ床の上に並ぶ。

「若宮君、その棒を持ってきてくれ」

二メートル余りの太い棒を若い男が部屋の隅から担いで来る。医者は金属性の脚立を二つ広げて並べる。太い棒にアケミの四肢を縛った縄尻がしっかりと巻きつけられる。

「二人一ぺんには無理やから、先に上げてしまおう」

二人の男が棒を左右から持ち上げて二つの脚立の一番上段に橋渡しに載せる。アケミの体が猪吊りになって二つの脚立の空間にぶら下ると、床上一メートル位のところでゆっくりと回転する。若宮と呼ばれた若い男が、もう一人の犠牲者を抱きかかえ、医者が上の棒に縄尻をしっかりと縛りつける。猪吊りになった二つの女体が脚立の間に並ぶ。相当な重

量なのか金属性の脚立が、キキッと厭なきしみ方をした。

「先ず尻打ちと行くか」

医者の平手がアケミの尻をねらう。

パチッ！ パチッ！

アケミの体がくるっと一回転する。次いでその平手は隣りの看護婦の尻にとぶ。

「うううっ！ あううっ！」

中年の女の口から激しく悲鳴が洩れる。

「君もやれよ。遠慮せんでいい」

二人の男の手は、二人の女の無抵抗な臀部をしきりに打ち据えた。並んだ四つの丘が赤く色づく。

「こっちの手の方が痛いな」

二人の男が笑う。

「さあ、どっちにする？」

「いいんですか？」

「構わんから、好きな方を選ぶんだ」

夜は深く、妖しい空気が、この一室を支配し始めた。アケミは黙ったまま、この異様な二人の行動を見つめていた。最初彼女には何の感興も湧かなかったが、隣りにぶら下っている中年女の嬌声とも悲鳴ともわからない呻きを耳にしている内に、アケミ自身も妙な気持になって行くのだった。大山さんに済まな

その声かなし

△切腹研究夜話▽

中 康 弘 通

い——そのかすかな罪の意識も、この熱っぱい雰囲気の中では無力だった。

やがて男達は二人を猪吊りに放置したままベッドの上に倒れるように横たわる。

「君、女って奴は癪な動物だな。それとも男が馬鹿な畜生なんかな？」

「両方でしょうな。結構あれで女の方が満足してるんでしょう」

「癪だと思うよ、いつものことだが。よし

爆発させてやる」

「爆発って？」

「クリスチェ」

医者は起き上ってガラスケースを開ける。

「二〇〇〇CC位にしとくか」

二本の黒い管が二つの女体に別々に繋がれる。若宮と呼ばれた男も、それを興味深そうに手伝う。同時の注入である。

「先生、ここでいいんですか？」

「いいよ、始末は二人にさせるからな」

ビニールのテーブルクロスのようなものが、脚立の間に広げられる。アケミは今までにこんなに多量注入を経験したことはなかった。突き上げるような圧迫感が腹部を襲う。

二人の傍から男達が離れる。やがて激しい撓音がアケミの側から起った。次いで看護婦の側に——。妖しい夜は、それでも静かに更けて行った。
(この項つづく)

一

鳥将死時 其鳴也悲

人将死時 其言也善

(鳥ノ将ニ死セントスル時 其ノ鳴クヤ悲シ
人ノ将ニ死セントスル時 其ノ言ヤ善シ)

是は、鳥の絶鳴の悲叫に喩えて、人の辞世の言葉に嘘や偽わりのないことを述べた辞句である。

今を去る二十余年の昔、祖国が敗戦の淵に沈もうとしたとき、その非運を見るに忍びずと、みずから刃に伏した烈女たちの辞世の言

葉たるや、まさに「その声かなし」としか形容出来ない、悲愁きわまるものであった。

また、当時外地にあって、貞操の危機にさらされ、あるいは暴徒に強いられて、敢えて護身の刃をわれとわが腹に加えねばならなかった女たちの遺した言葉に至っては、形容を



二

昭和十八年の四月、華中湖南省

某村に駐屯のある中隊に、特志看護婦の名目で慰安婦が配属されて来た。その中で、色こそ浅ぐろいが一ときわ目鼻立ちの整った秋子は、K中隊長と親しんでいた。

五月はじめ、中隊は夕食後、敵襲を受けた。事前の作戦予定どおり、一旦部隊本部へ引きあげた、中隊には、秋子の姿が見えなかった。たまたま入浴中で逃げおくれたのである。

翌々日の夜、その村を奪回掃討したとき、土塀のかげで一兵士が秋子を発見した。

「よく生きていたなあ」

いたわりの言葉をかけた兵士に、彼女は

「私、生きていられない」

と呟やき、蹲まったまま

「Kさんだけ呼んで来て、お願い」

必死に頼むのである。やむなく中隊長を案内して来た兵士の目前で、Kは

「秋子、よくおめおめと生きておれたな」

と決めつけ、冷たく

「死ね」

命令であった。秋子は

「貴方の軍刀、貸して」

と懇願したが、Kは兵士の銃剣を抜くと

「お前にはこれで十分だ」

彼女の膝の前に投げた。

しばらく銃剣をみつめていた秋子は、手拭いでその刃を巻いて右膝の横へおき、脱いだ上衣の上へ腰をおろすと、シャツを乳房の上までたくしあげ、ズボンの紐をゆるめて左足を引き、中腰になって右膝を立てた。

いよいよ左手で銃剣の鐔を、右手で手拭いの上から刃を持って左下腹にあてがい、ホツと一息ついた彼女は、肌から切先を五寸ほど離すと、弱々しく、

「さようなら」

別れを告げるなり満身の力をこめて、臍下一寸の左腹部へ突き立てた。

かくして、切れ味の悪さに苦しみながらも秋子は、真一文字に割腹して果てるのであるが、慰安婦とは言え、せめて大和撫子らしく割腹して果てたいと、日本刀を乞う願いも果たせず、尋常に別れを告げ、切れの鈍い銃剣を力の限り、引き廻して果てて行く彼女の姿

絶する悲愴さである。

その一端を採録して、長く後世に伝えたいと思う筆者の意を汲まれる方は、再読三読して、その心事をご諒察下さるであらう。資料はすべて、諸氏が本誌に発表されたもの、あるいは、直接筆者の手もとに寄せられたものからである。

は、悲愴を極めたものと云えよう。(本誌31年7月号、佐茂半治氏、「或る従軍婦人の死」)

三

二十年八月六日午前八時十五分、広島市上空で起爆させられた原子爆弾は、一瞬間光と共に全市を廃墟とした。同夜、呉から帰広して山崎あき子は二日間にわたり家族の安否を尋ね歩いたが不明であった。

被災者が広島湾の金輪島および島の島へ移送されたとき、同じ境遇で行き逢った志田英子(仮名)と同行、翌九日未明、島の島行きのダルマ船に乗った。しかし、船上で被災者の状況を見て、

「これではとてもうちの人たちだって、無事の筈はないワ……」

何度もくり返し言ううち、船が棧橋を離れると、船の前部船倉に入ってしまった。英子が急いであとを追うと、あき子は少し開いた防空服の上腹部を抱えるようにして、呻いている。

「山崎さん、あき子さん」

英子が呼ぶと、わずかに頸を捻って上を向き、何か叫んでいる。梯子をおりて近づく英

子の眼に、とび散っている血汐が映った。

よく見ると、鳩尾から右脇腹へ、日本剃刃に手拭いを巻いて、斜め下がりに二三寸かき切っている。もう是では助かるまい、そう思いつつ英子が刃ものを奪おうとしても、あき子は転がり廻って取らせない。

「どうしたの、どうしたの？」

美少女の思いがけない姿に驚いた英子が、何度も聞くと、はじめて

「死ねない、殺して……私ひとり生きていても何ンにもならない」

口走りながら、小柄なあき子は、その場にあるロープの束によりかかると、釦を引きむしるように服をかき上げた。真夏のこととて臍の辺りまで腹を露わすと、右脇腹の日本剃刃を両手でグイと捻って刃を左に廻し、右手で押し込むように、左手で引きながらジリジリと上腹部をかき切った。享年十九才。

数えで十九と言えはまだ少女である。当時のこととて、何か呉で勤めを持っていたであろう彼女は、無残な被災者を見て家族の運命を察したに違いない。

屠腹なかばで十九才の少女の

「私ひとり生きていても何ンにもならない」という叫びは、悲痛とも哀傷とも言いよう

のない深さで筆者の胸を打つのである。

四

昭和二十年八月十日と言えば、もはや満洲では王道楽土の夢もろく潰え去り、迫りくる連合軍の脅威に、満蒙開拓団の人々たちが営々きき上げた団に心を残して、待避の途を辿る決意に悲愴の討議が持たれていたところである。

ある開拓団に、つる子、令子の姉妹があった。姉は二十二才、妹は二十才、現地応召の兄を送り出し、女二人が団に在ったが、十日夕、近隣のN子さんが共に待避しようと、約束どおり、姉妹を訪ねたところ、呻き声がする。

明りとりから覗くと、つる子が裸の背中を見せて俯伏しに苦しんでいる。とび込んで抱き起してみると、農衣の双肌おしひらき、愛用の鎌でしたたかに腹をかき切っている。

「つるさんッ」

と呼ぶ声に、顔を挙げたつる子は、「ああ、N子さん、令子と声を合わせて突立てて、十字に切るつもりが、死におくれて、くやしい。手を添えて十字に切らして……」きれぎれに切なく訴える。板戸をあけてみ

ると隣室では、令子が早や絶命したあとである。N子ももう覚悟をきめて

「手を貸してあげますわ、立派に切腹なさいね」

と応えると、つる子はやつのことで鎌を持ち直し、N子さんの介添えで十文字に切り上げ、望みどおりの悲愴な最期を遂げた。

あとでN子さんが令子を見に行くと、立派に十文字の割腹を遂げ、咽喉に止めを刺して死んでいたという。

それにしても、二十やそこの娘たちが、

挿絵画家を募る

○本誌発表の作品にふさわしい幻想的で優雅な異色画を求めます。

○用紙は必ず白い画用紙に墨汁又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですがなるべく二倍乃至三倍位が適当です。

○優秀作品は本誌の最近号に発表の上、読者の反響の如何によつては、本誌専属挿絵画家として毎月執筆願います。

○従来、S画（主として女体緊縛）或はM画、女体切腹などについて多くの方々に御応募頂きましたが、残念ながら特に傑出した作品には接しませんでした。どうか奮て力作をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御送稿は第一種便にてお願いします。

覚悟の上とは言え、逃避を試みることもなく

声を合わせて、我とわが腹かき切って行く姿

は、鬼神も哭すべきものと言えよう。その声

は、永く大陸の黄塵を貫ぬいて舒していそう

に思われるし、また、「死におくれてくやし

い、手を添えて……」という、つる子の言葉

は、会津戦争のとき死に切れずにいた西郷家

の一女が、土州藩士中島信行に介錯を乞うた

悲叫に似通うものではなかったろうか。

五

八月十五日夜、満洲のある病院宿舎を三人

の看護婦たちが脱出した。よし子（十八才）

のお子（二十才）まき子（二十才）の三人で

ある。彼女たちは、上半身だけは、素肌の上

衣、腰は下着に紺のスカートという軽装で、

一口の短刀と毛布を携え、山中に入って

行った。

よし子が切腹の作法を知っていたので、彼

女たちは腹切刀の作り方、握り方から、一文

字あるいは十文字の切腹と、介錯の順序を申

し合わせていたのである。

まず最年少のよし子が、申合せどおり毛布の上に坐り、東方に合掌してのち上衣をぬ

いだ。

「先へ失礼します。私、十字に切りますから

お願いしますと言ってから介錯して下さい」

言い終るや、二、三寸、巻き残した刃を構

え、眼を閉じて低くエイと声をかけ、呻きつ

つ一文字に引廻し、次いで鳩尾に刺したがさ

すがに引きおろせず、「お、お願い」と介錯

を乞うた。のお子はよし子を介錯したのち、

まき子に、

「よろしくお願いします」

と挨拶して上半身を露わし、一寸ばかり巻

き残した短刀で、腹を十文字に切ったのち、

刀を前におき、左手で傷を押え、

「しびれるように痛い、さほど苦しくはあ

りません、よし子さんは深すぎて苦しかった

のでしょう、お気の毒でした」

喘えぎながら言い遺して、まき子の涙なが

らの介錯を受けた。

最後に残ったまき子も、同じく腹を切り咽

喉を突いたが、介錯人がなかったため、失神

したまま発見され、幸い一命をとりとめた。

それにしても、十八や二十と言えば、少女

期を脱したばかりの身で、よくも十文字の割

腹を遂げたものと、その思いつめた心情を察

するとき、付加すべき言葉を知らないのでは

ある。

（未完）

△ 告 白 △

初^は縛^{しば}られの記^き中^{なか}河^{がわ}恵^{けい}子^こ

今年は殊に雪が多いようでした。暮の二十
六日からスキーに北陸へ発ちました。もっと
もお正月の帰省をかねてのことですが、孫娘
の私を「恵子、恵子」といって可愛がってく
れる祖父母のもとで、田舎のおいしいお餅を
お腹いっぱい食べて、従姉妹たちと雪の中で
思いきり遊びたいと思っていたのです。

大阪の叔母も、「お正月には遊びにおいで
恵ちゃんの晴衣姿を見たいから」と言ってく
れていたのですが、いつも車を飛ばしてゆく
私ですから、訪問着姿では運転も出来ません
もの、「はい、はい」とよい返事だけしてお

きました。車といえば、今度の帰省は、どう
せ雪の中を走るのだからと、ルーフにはスキ
ーを積み、トランクには、タイヤチェーン、
スコップ、むしろ、ロープなどの重装備で特
に父のグロリアをかりて出発しました。

現在、両親は大津市に居住しておりますが
もともと故郷は小松市で、祖父母をはじめ親
戚の多くは、そちらに住んで居ります。熱烈
な恋愛の末、家を飛び出した叔母と私の父と
が、今のところ故郷を離れているのです。

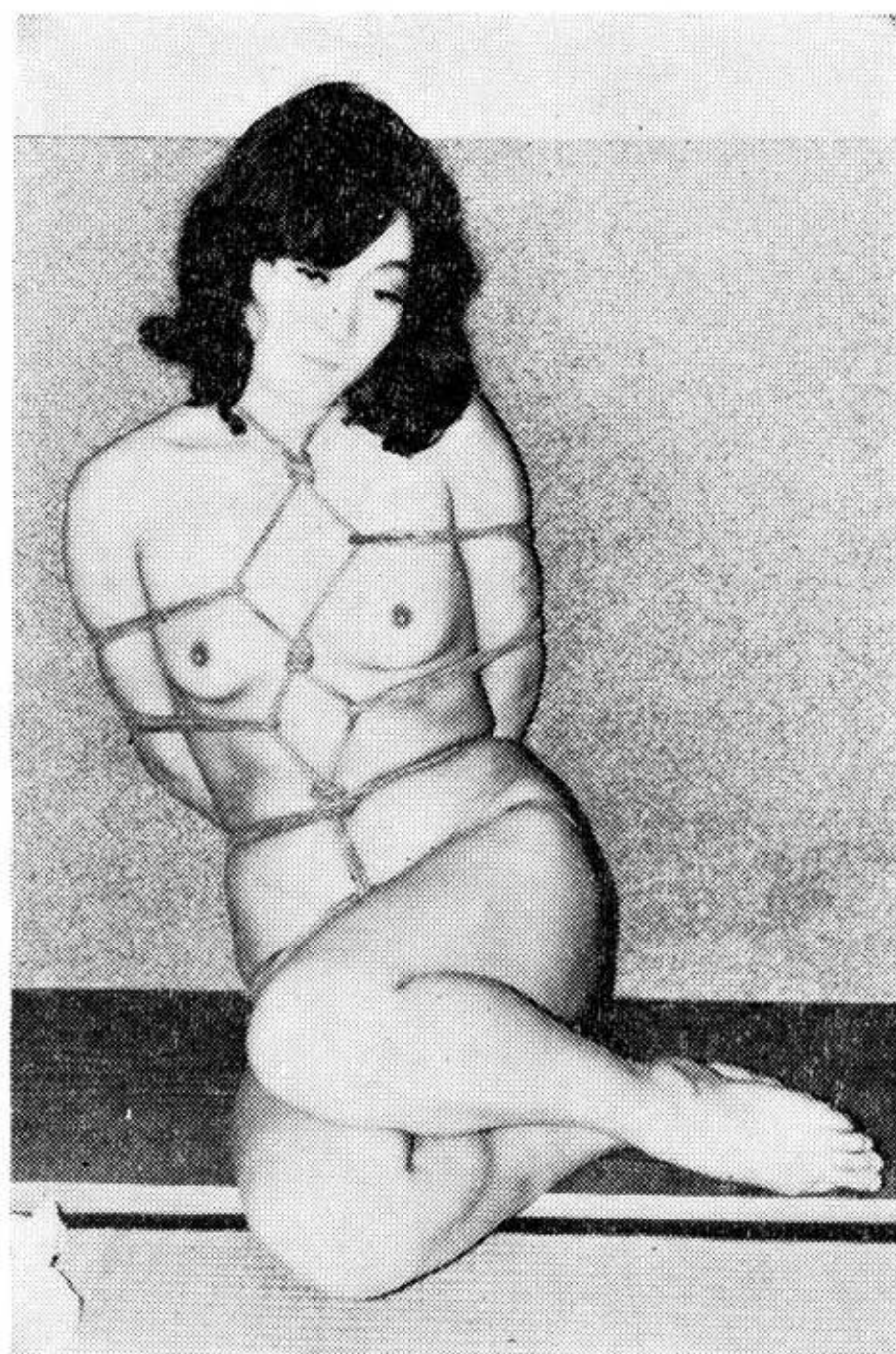
学校があるので、六日に両親のもとへ帰っ
てきましたが、雪又雪の北陸路から暖かい琵琶

湖南岸へ帰って参りますと、やはり何かほ
っとした気持でした。しかし、それも束の間
私のところも京都市内も雪景色が見られるよ
うになり、一しきり暖かいところが恋しくな
るのでした。それで私は大津インターチェン
ジから車を名神高速道路へ入れると、タイヤ
チェーン装備とか五十キロ速度制限とか言わ
れる降雪地帯への走行はやめにして、一路西
へと走らせるのです。

京都市内の屋根並は、白い綿帽子をかぶっ
ているのに、高槻、茨木あたりまでくると、
遠い山脈には白いものがマバラに見えるだけ

で街には雪のひとかけらもありません。大阪市内の雑踏を眼下に見下ろして、やがて車は西宮へと到着します。私はこの西宮インターチェンジから眺める風景が大好きです。

用もないのに、時々ここまで車を走らせてきて、早春の明るい陽に輝く六甲山を眺めにくるのです。眼下に眺める街並みも山の中腹に段々に立ち並ぶ家々も、原色的な明るさで私の眼に迫ってきます。雪に埋れた暗くて重



るのかもしれない。

第二阪神国道を西に向って、このダイナミックな西宮インターチェンジのランプウェイを目の前にすると、私はいつも言い知れぬ感激に、まるで外国へでも来たような思いで胸がふくらむのです。高速道路の白く巨大な脚の間から六甲の青い山肌を見ると、忽ちにして目前にひらける異国的情緒たっぷりの風景が私を魅了します。

苦しい北陸路、そして、何となくスリ鉢の底のような感じの大阪や京都ばかりをいつも見て暮している私にこの底抜けの明るさが憧れの的にな

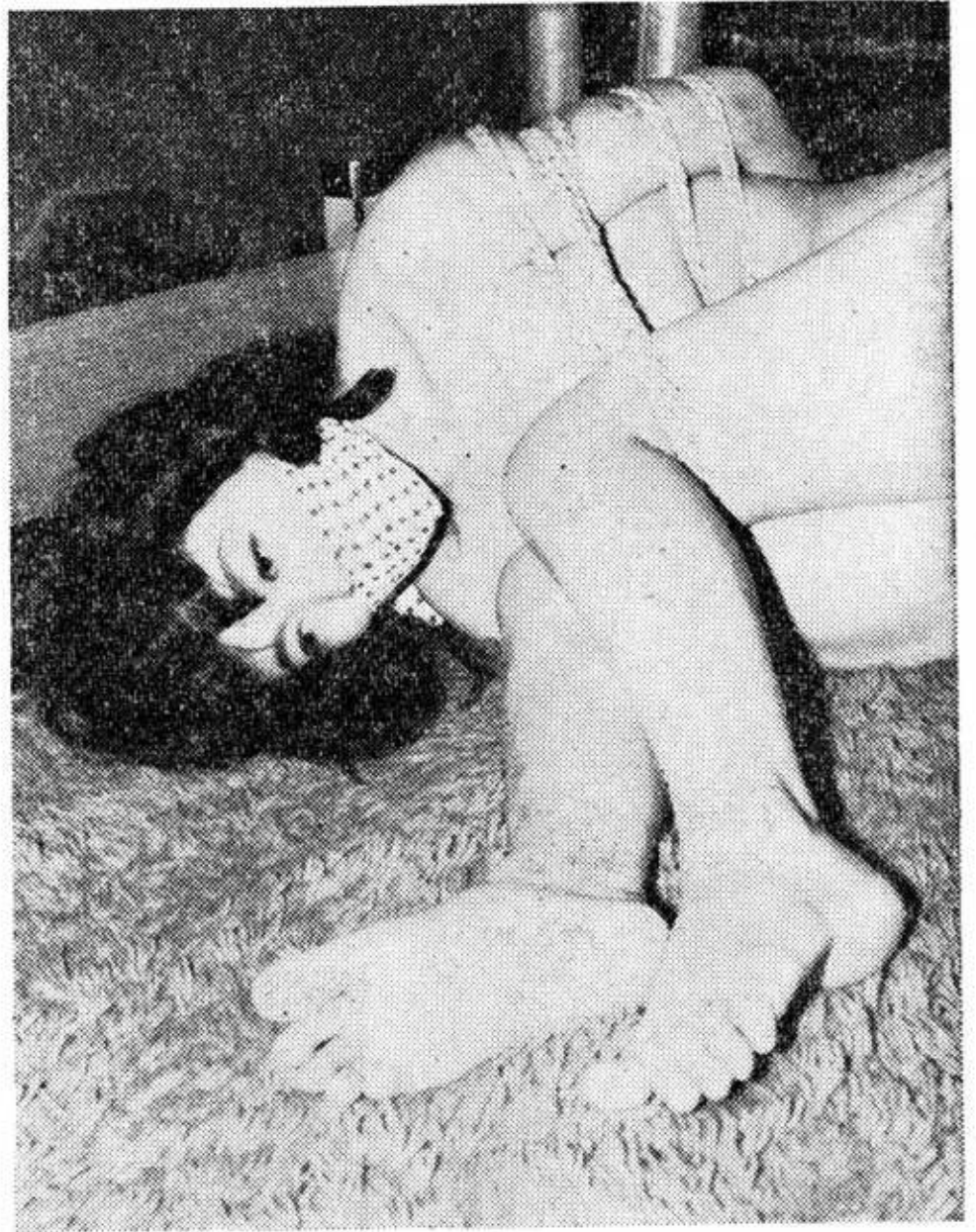
ここから引き返して帰途につくこともありますが、時には第二阪神国道を飛ばして神戸まで足を伸ばすこともあります。山国に育った私は、海や港に郷愁を感じるのかも知れません。一月というのに、このあたりは雪どころか、よもぎやはこべの青い葉が、さんさんと輝く陽を浴びて、早春の香りを漂わせています。私は海の見える丘に車をとめて、春の草を摘んだこともあります。

新しもの好きの私は、用もないのに一部開通したばかりの神戸の高速道路を走って須磨公園まで足を伸ばしたことがあります。風がきつくて淡路島が手にとるように、よく見える日でした。冬の日の午後四時といえば、もう暮れるに間近かの時間ですが、さすがにこのあたりまで来ると、スモッグもなく、空はからりと晴れ渡っています。私は海の空気を胸いっぱい吸い込んで、水族館の裏へ置いた車に近寄りました。

その時、突然黒い影がすうっと私の背後に迫ってきました。ドキッとして私がふりむくと、それは黒い詰襟服を着た若い男でした。

「あの、姫路へ行くのは、こちらですか」

その男は、私の顔をのぞき込むようにして尋ねました。見ると、同じような服装の男が



あと二人、私の車のかげから現れました。私は、さっきの驚きで胸がドキドキしていましたので、早口で答えてやりました。

「左へ真直ぐ行けば、行けますわ」

本当はもう少し手前の神戸市内で神明道路へ入った方が、有料道路になりますが早く行けるのです。しかし、目の前の薄ぎたない服装の三人の若い男を前にして、長話をしていたくない私でした。冷ややかに一瞥したまま

て逃げようとする、車のかげから更に同じような二人の男が現われ、私は軽々と抱えあげられてしまいます。

傍に置いてあったライトバンの荷台に放り込まれた私は、いつの間にか、後手に縛られ猿ぐつわさえ噛まされています。胸に幾巻も掛った縄が乳房を圧迫して、息苦しくさえあります。外部からは見えないように、シートのようなものが、私の上から掛けられ、車は

座席に戻った私はあわててドアのロックをするとエンジン掛けました。

この時、白日夢のように、例の私の空想が翼をひろげました。道をきくふりをした若い男が、車に近寄った私に前から迫ってきて、叫ぼうとする私の口は脂ぎった手で押さえられます。身をひい

発進してゆきました。

私の檻禁された部屋は、眼下に神戸市街を眼の上にやれば、神戸港の見える高台にある邸宅の一室でした。香港の富豪に売りつける日本娘として、調教されるため、私は三人の男によって拐われたのです。そんな身の上の自分に、何かしら甘い期待の感情をいだいていた私でした。三人の男が、どのように縛られて身動きの出来ない私に、暴虐の手をふるうか、そんなことを考えてみました。

それは僅かの時間でした。私はハッと現実に戻ってアクセルを踏みました。車の軽い振動は私を明るく近代的な娘に戻して、今までの空想の中の奴隷志願の日本娘は、姿を消してしまいました。私って、二重人格なののでしょうか。空想癖があって、放浪癖のある私と明るくてお転婆な私の二人が、この一つの身体に同居しているのかも知れません。

公園の道路の傍に一台の黒のクラウンが駐車していました。道幅が狭いので私は徐行して近づきました。さっきの三人の男が道路地図を手にして、何か話し合っています。ピカピカの私のコルチナに比較して、自分たちの車が余りにもポンコツに近いのを恥じてか、はにかんだような眼差しを、すれ違う私にち

らっと投げかけたようです。

軽い爆音、後髪を引かれるような出足。さっきの空想は、私の頭からふっとび、左側の視界にひらけてきたエキゾチックな街並みに思いを馳せるのでした。あのポータタワーも何か私の空想と現実の間に混って一つの役割りを果せそうです。一人で車を運転していると密室の中での孤独を味わうことが出来ます。しかし、私は空想の中では、いつも多勢の人と一緒にあります。そして、車外に展開する風景や人物が、私を主人公とした舞台の背景であり、登場人物なのです。

一月になって、私は今年初の縛りを体験しました。学校がなかったら、もっと北陸路にいたかも知れませんが、やはり気になって、まだお正月の気分の抜けきらない中に、大津へ帰ってまいりました。大阪の叔母へは、まだ新年の挨拶もしていないので、初荷という旗を立てたトラックの行き交う大阪へ来ました。叔母の亡くなられた御主人は、材木商だったとかで、今のお家も四つ橋を少し西へ行ったところにあります。叔父が恋女房のために特に材料を吟味して建てたという数寄屋造りで、日本趣味の叔母にぴったりの落着いた雑踏の大阪市内にも、こんな静かな邸宅があ

るのかと思われるようなところです。

お小使いを貰うときぐらいしか訪ねて行かない私を、子供のない叔母は私を後継ぎにしたいらしく、目の中へ入れても痛くないように可愛がってくれます。四十を少し過ぎたばかりの叔母は、色白で本当に若く見え、私とは姉妹といっても通るくらいです。でも、こんなに沢山の遺産があると、再婚する気にもなれないのでしょうか。一人で気楽に暮している方がのんきだと何時も言っています。女の私が見てさえ、水々しい美しさで色気たっぷりの叔母なのですが、不思議と男の出入りが目につきません。あの若さで、あの器量、それにお金が使いきれないほどあるのですから、世の中の男が放っておくわけがないと思うのですが、どうなのでしょう。

その日、叔母の家から編集部へ電話して、帰ってきたことを報告をしました。糸の切れた風みたいだと笑われましたが、考えてみれば、ここ三月ぐらいの間に、二回しか逢っていないんですもの、そんなに言われても仕方ありません。今年になって初めて縛られてもいいわ、といったら、すぐ日と場所をきめて下さいました。いつ私の放浪癖の虫が頭をもたげてくるかもわからないから、余り先のこ

とだったら、又、おいと遠くへ行ってしまうかもしれないけれど、今度は三日先だというので、まあまあ、その心配もないでしょう。本当は、今すぐにでも、と思ったのだけど、余り気まま娘と思われるもと、言葉を濁しておいたのだけど、この私の気持は、電話では通じなかったのかも知れません。

神戸、大阪、京都、名古屋の間だったら、どこへでも行きますと言っておいたのだけど今度のお正月旅行で、タイヤチェーンの着脱には手こずりましたので、やはり京都から西の方が、と言いましたら、それでは、京都で落ち合いますよう、と返事してくれました。

ほんの最近建ったばかりの南禅寺近くの豪華なホテルの特別室で、洋室が三間続きになっていて、内廊下を通過して、トイレと浴室があります。五点セットの応接セットが小さく見えるくらい広い控えの間には、一面にカーペットが敷かれてあって、寝室へ行くまで、もう一つ部屋があります。寝室というのが、又広くて円形ベッドが、まるで外国のお姫様のお部屋のように花で飾りたててあります。ベッドの真上にシャンデリアが下っているほど、天井は高いのですが、暖房がよくきいているので、むしろ暑いぐらいです。これだった

ら、裸になっても寒くないでしょう。

今日はツケ睫毛をしてお化粧を濃い目にしてお下さい、と言われ、一風呂浴びてお化粧をすまして来てみると、二十畳敷きぐらいの洋間の椅子やテーブルが片づけられ、電気のコードが一面に這っています。五つのライトがついているので、真昼のように明るく、むっとする熱気がはらんでいます。

途端に私の例の空想が、むくむくと頭をもたげてきたのです。私は湯上りのまま、ホテル備えつけのピンク色のパジャマをつけています。肌のすきとおるような布地をたっぷり使って前開きになっていますが、仕立てはやはりパジャマなのです。

私はやにわに荒々しく後手に捻じあげられトゲトゲとした麻縄が肌にまといつきます。か細い手首が折れそうに曲げられて首に吊り上げられ、胸には、二巻き三巻き、麻縄がむごたらしく、締めつけてゆきます。

もう、どんなにもがいても、両手、両腕はビクともしません。私の手は完全に動きを制しられてしまったのです。

押し倒されて、思わず挙げる悲鳴。この叫び声や救いを求める声が真に迫って、高く挙げれば挙げるほど、私の感激は高まるのです。

から、若し事情が許せば、私はプレーのときでも、思いきり悲鳴を挙げてみたいのです。

泣き、叫び、もがき、それが激しければ激しいほど、私は嬉しいのです。だから、責手の方も、私が悲鳴を挙げながら感極まってしまふまで、これでもか、これでもかと、飽くことなく責めてほしいのです。

呆然と佇んで空想に耽っていた私は、ふと現実に戻されました。準備が出来ましたら、こちらへ来て下さい。という言葉に、空想からさめたのです。静子夫人のようにして、いじめて欲しいナ、と虫のよいことを考えながら縄を手にした彼の前に立ちました。

それは、私の空想とは大分かけはなれた雰囲気でした。彼は何の強制することもなく、当然のように縄を差し出し、私は逃げることもなく、ましてや悲鳴を挙げることもなくまるで約束事のように、両手首を背後で交叉し、縛り易いように手首を浮かせるようにして背を向けるのでした。

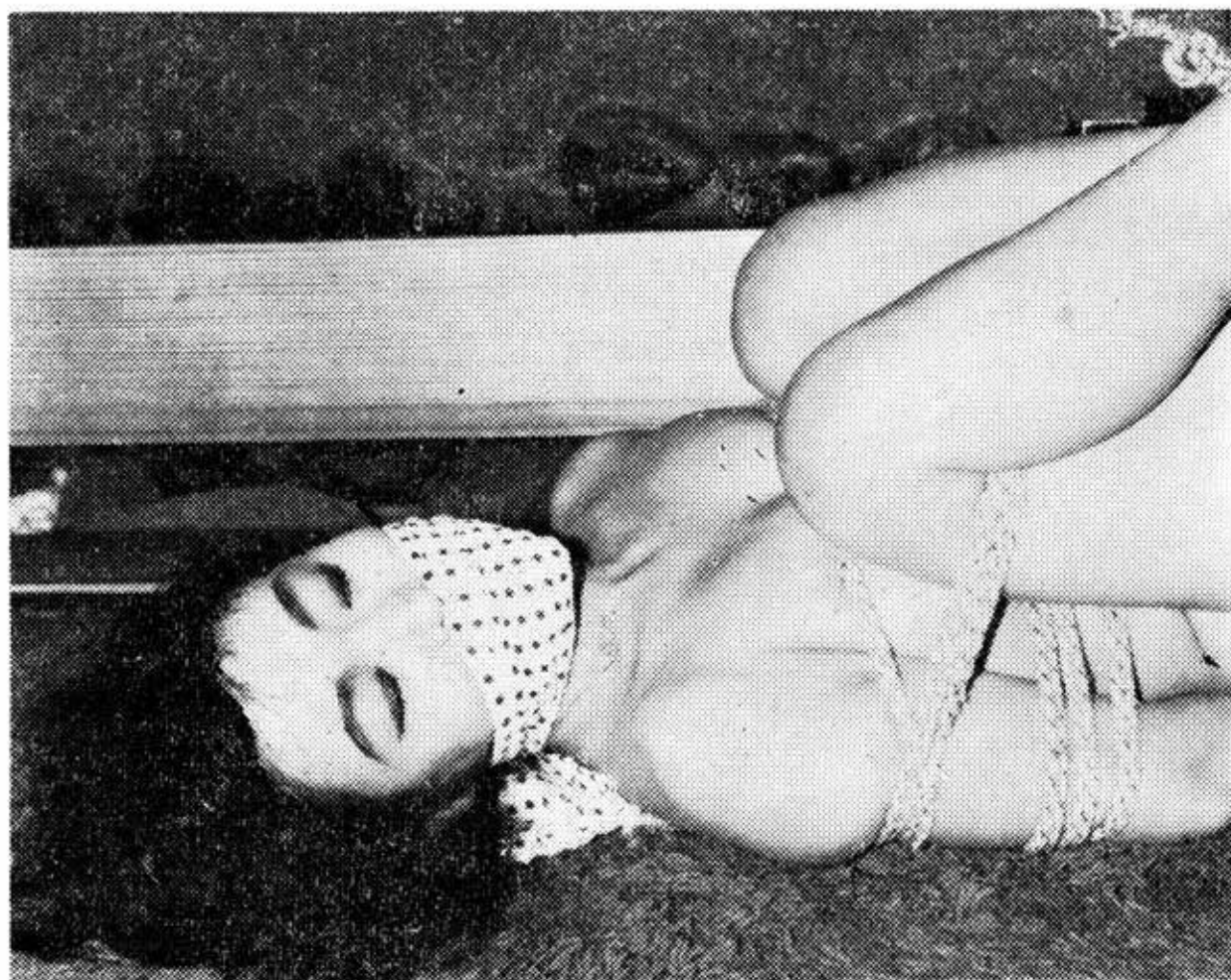
さすがにパジャマを剥ぎとられたときは、一瞬、身体中の肌という肌が赤らむ思いで、腋の下がじっとりと汗ばんでくるようです。私はその心の狼狽を押し静めるための努力で例の空想の起るスキはありませんでした。

後手首を縛った縄が胸にぐるぐると巻きつき、二の腕のすき間に掛けて締めつけると、背後へ戻り、背中から首のところで二つに分けられ、胸、胴の縄と連結して、下へおりてゆきます。それは、あつという間の手馴れた縛り方で、気がついたときには完全に縛り上げられているといった有様でした。

時が経つにつれて、縄が、二の腕、胸、後手首に、じわじわと喰い込んでくるといったすきのない縛り方で、身体中が締めつけられるようでした。殊に始めての股間縛りが何かしら奇妙な感じでした。空想の中の私は、もっともっと、ひどく、みじめな縛り方でいじめられているのですから、こんなことくらい大したことはないのです。それでも、やはり実際に縛られてみると奇妙なのです。このところの心理や気持は、ペンですばりと書きあらわせないもどかしさを感じます。

それから、立たされ、歩かされ、坐らせられ、そのたびにシャッターが切られました。

カーペットの上に転されたとき、縄が肌に喰い込んで思わず呻めました。勿論声を立てるわけではありませんが、心の中では大声で悲鳴を挙げていました。自由な両肢を大字に開けられて、柱に縛られたらいいのにな



あ、と考えていましたが、ライトをつけ放したままの彼は、カメラを持って隣りの部屋へ行ってしまいました。その間、二分か三分ぐらいでしょうか。縛られたまま、ころがされ

ている私にとって、それは非常に長い時間のようには思えました。むきだしのお尻を部屋の中央の広い空間に向けたまま、横になっているのが、非常に不安なのです。今にも黒い魔

手が私のお尻の方から迫ってくるのではないかと、ふと、そう考えるだけで、恐怖で身体中がぞくぞくとするのです。

カメラの目が狙っている。そう思うと、その目が川田やチンピラや、ズベ公の目になるのです。カメラの目は一つです。しかし、私には、その背後に幾十幾百の目があるように思えて、身体中が、かっかっとするのです。暖房とライトの光りで、裸でいても汗ばむくらいですし、殊にライトの焦点に照らされた肌は真夏の太陽にさらされているようです。

だが、私の期待とは裏腹に、すぐ縄が解かれました。カメラの調子がよくないので、この方でやりますと、小型のスペヤーカメラにフラッシュをつけたの

を持ってきました。ここで休憩なんかしないで、もっと凄いのを撮ってほしいと思ったのですが、彼は私に、遠慮しているのでしょうか、タオルで顔の汗を何度も拭いて片隅へ寄せたソファにどかりと腰をおろしたままです。コーラでも飲みませんか、誘いましたが、私は折角の感激が中断されたことには不満でした。

もっと海老責めでも開股縛りでも、どんどんやってくれたらいいのに、そんな気持の私でしたが、私の気も知らないで、彼は至って落着いたものです。ここへ来て、もう一時間以上も経っているでしょう。それなのに、私の身体に何にもしないのは、この私に、魅力がないとでもいうのでしょうか。もっともつと、むさぼるように、次から次へと、私をいじめ、縛りあげて、むちゃくちゃにしてほしい。そんなとき、きつと、私の空想の虫は、感極まって、泣き喚めき、カメラのよい被写体になるのだがなあ、と考えました。

三脚にすえた大型のカメラから、手に持った小型カメラに変わってからは、廊下へ出て浴室の扉のところへ行って立ったり、ソファに腰掛けたり、円形ベッドの上にころがされたりしました。円形ベッドの真中にエビのよう

に身体を曲げて寝させられた私の縛られたポーズを、サイドテーブルの上から俯瞰撮影しています。ベッドをぐるぐる回すと、彼はいながらにして、私の身体にあらゆる角度から狙いをつけることが出来るのです。

沢山の弥次馬たちの嘲笑する中で私は全裸の姿をさらされているような錯覚に陥りました。やわらかいクッションの蓐が素肌にきわめて快いのです。私はうっとり夢現の境をさまよっていました。このようなスプリングのよく効いたベッドの上だったら、余程極端なポーズをとらされても、下が柔かいのですから辛抱できることでしょう。もうこれ以上曲げることが出来ないというくらいの二つ折りのエビ縛りにされて、むきだしのお尻にムチ打たれたりしたら、どんなだろうかと考えたりました。

私の身体をアップで撮るため、カメラが肌に近づいてきますと、私は胸がドキドキとするとするくらい、高鳴りを覚えるのです。殊に私があからさまにさらけだしてしまいたい所に、カメラのレンズが向けられる、向けられていると思っただけで、もう身体中がとろけてしまいそうで、そんなことが続くと、やがて身体の中心部を鉄の棒が突き抜けてゆくよ

うな感動にしばれてしまうのです。

空想することの大好きな私、それが現実の行動で空想の羽ばたく翼の手助けをしてくれたら、私は実に突拍子もないことを考えだしてしまうのです。女の身体の内容物さえ、さらけだしてしまった△花と蛇▽の主人公たちの羞しさを、味ってみたいと真に願う私なのです。でも、もし縛ってしまった私を手荒に取扱うようなことが現実にあったとしたら、やはり私は嫌なのです。無茶苦茶にいじめられ羞しめられたいと思いつつも、やはり優しく大事にしてほしいと思うのは、自分ながら虫のよい願いだとは思いますが。

円形ベッドがぐるぐると廻りながら、私の縛られた全裸の姿態が、まるでウィンドウに飾られた商品でもあるかのように、周囲の見物人の沢山の目で眺められているといった甘い空想が私の全身を暖かく包むのです。

やはりカメラのシャッター音が背後でするとき感動が一番大きいのです。折り曲げられて突き出したお尻に、カメラが狙いをつけている、と、そう思っただけで、私は身体中がジーンとしてくるのです。気配だけで実体がわからないだけに、私の心の中では一体どんなところに焦点を合っているのだろうか

と変に胸さわぎするのが、また返って快く感ずるのです。

こんなお部屋で、一人でゆっくり暮してみたいなアと思うくらい、素晴らしくデラックスで広いこの洋間も十分活用されないまま、撮影は終わりました。私の胸は燃え上りかけ、そして不完全燃焼のまま、縄が解かれたときを以て鎮火してしまいました。

車の番号をお互いに確かめ合って待合せ場所をきめておいたのですが、場所に少しずれがあったため、予定の二時より三十分ばかり会うのが遅れてしまいましたので、撮影を終って駐車場へ来たときは、もうあたり一面、薄墨色の暮色が漂っていました。オーバーとおして刺すような寒気が胸もとに襲ってくると、ついさっきまでの出来事が、まるで遠い夢の国でのことのように思えるのでした。

並んで駐車場を出た二台の車は、蹴上げで西と東に別れました。手を振って黙礼を交すと、私は逢坂山さして坂道を登りはじめました。あと、十五分ばかりで私は家へ帰れるのです。いつもの私だったら、もう一っ走りするところですが、今日は何んだか、ぐったりと疲れたような気だるさで、早く家へ帰って休みたい気持でした。



臨^{りん}月^{げつ}腹^{はら}を裂^さく

(一) プロローグ

(二) 処刑台のみゆき夫人

(三) 紂王の残虐

(四) 武烈天皇の淫虐

(五) 戦国武将の妊婦腹裂き

高野原美

(一) プロローグ

妊婦の丸味を帯びて大きく膨んだ腹は、男性にとって神秘そのものであり、その白いお腹の内部で成長をとげつつある女体内部をあらばいてみたいと言う飽くなき欲望に馳り立てられる。

普通には、神聖な妊婦の巨大な小山のお腹の前にひれ伏し、その引き伸されて薄くなり妊娠線も鮮かな腹部の丸味にそって、温かく固い手の感触を楽しみながら、男の種子を宿して生殖と言う偉大な生理現象のために肩で息づいている女体を愛し憐れむものである。それが、サジスチックな男性の欲望の前に

は、余りにも動物的な肉感を漂わせているがために、神秘性とあいまって、その美しい肉体を朱に染める結果となる。

子供を内包する神秘的な臓器を「子宮」と呼んでいる。子供を保護し成長させる神聖な宮殿であると言う意味であろう。神聖な聖域は絶対的な権力を握った、王や権力者にとっては、それをどうしても犯し、自分の眼の前に無惨な姿を曝け出ささねばおかれぬものとなる。神秘のヴェールを脱がすことは、即ち妊婦の腹裂きとなって現われる。

昔から幾多のうら若き女性が、一糸もまともな妊娠腹全裸の姿にされて、その小山のような妊娠腹を曝け出され、衆人環視の中で腹を断ち裂かれて来たことであろう。今にも張り裂けんばかりに膨大した腹部に非情の刀を突き立てられ、苦痛に身悶えし、全身を朱に染めて、このサジスチックな探究心旺盛な権力者のために犠牲となって死んでいた妊婦の哀れな史実は多く残されている。これこそ、女性のみがもつ宿命的な悲劇と言わねばならないだろう。

(二) 処刑台のみゆき夫人

私は、この余りにも痛ましい妊婦腹生体解

剖が愛されてならない。

女性切腹以上に悲劇的であり、しかも動物的であり全身を妖しい感動が貫くのである。

切腹には、覚悟を決めて自らの手で下腹部を切り裂くと言う雄々しさがあり、動的な悲愴美がある。それに反して妊婦腹を断ち裂くと言うことは、全裸で台上に緊縛された女性が自分の意志に反して他人の手で切り開かれると言う生贄的な性質があり、そこには受身の女性本来の静的な悲愴美がある。

増田みゆき夫人の若々しい女体の妊娠全裸フオートを眼の前にして空想を馳せる。増田氏に飼育された我等のアイドル、みゆき夫人は城内の奥まった静かな庭に設けられた解剖台上に全裸の姿を横臥えている。その腹部は固く張り切って小山のような丸味ある突出を天に向けて膨隆し、脂肪ののった小柄な裸身は縄目に緊縛されて身動きもできず、眼隠しされて、今から襲いくる悲劇を演じるのを待ち受けている。

周囲には、再び見ることも出来まいと思える双胎臨月腹の腹裂きを話の種子に是非とも見ておきたいと期待して集まった侍たちが、目を輝かせて偉大な腹部に感嘆し、鋭い目ざしを投げかけている。その中に美しく着飾っ

た大奥の女の姿が三、四名混じっている。

女とても同じ気持であろう。むしろ彼女たちはみゆき夫人の悲劇を見ることによって、その悲劇を自分の身とおきかえマゾ的気分に分れようとしているのかも知れない。分娩を、もう数日後にひかえて母となる喜びに耽っていたみゆき夫人が思いがけず、その見事な膨満腹を領主に見られてしまったが為に、無理矢理城内に連れてこられ訳も判らぬまま裸に剥がれて石の台上に縛りつけられてしまったのである。みゆき夫人は驚き悲しみ身の不運を歎いた。

夫のこと、お腹の中の胎動を感じる子供のことを考えると、淋しく悲しく、この無惨な処刑が怖しく生きたいと言う思いで胸が張り裂けんばかりである。こんなムゴイコトは止めて欲しい、この身に何の科も罪もないものをと縛りつけられながらも、身悶えし、わめき叫んだ。しかし、領主の命令は絶対的であった。

歎きも悲しみも、全て時間が解決してくれた。仰向に縛られた身体も身悶えしてわめき叫んだため、突然のショックも加わり精神力は麻痺し、腹部が胎児のために息苦しいほど圧迫され、肩が大きく息をし窒息しそうにな

った。全身に疲労感が襲い、あきらめに似た気持ちのみゆき夫人を落着かせた。

こうなった以上、どうにもならない。私はサジスチックな男たちの前で最高の演技を演じ、男の心を悲愴美と満足感で酔わせてやろうと、むしろマゾ的な心が全身を貫いて快く走った。私の、男達が驚きの眼を見はる偉大な臨月腹。それを眼の前にして、これらの男達は如何に驚き怖れていることだろう。羨望と好奇心の入り混ざった複雑な心理は一刻も早く、私のお腹を切り裂いて腹の中の神秘的な姿をあげたいと言う心と、何時までもこのまま見ていたいと言う貴重なるものを失うことへの惜別の情とで、焦り震えていることであろう。私は今の男達の心理を、悉く知り尽したい。みゆき夫人は、今や完全に臨月腹の裸身がかもしたずマゾ的雰囲気は快く楽しんでいるのだった。

どんなにあがいても、私の生命は助からない。

マゾに徹した女として、運命の急変により男たちを偉大な臨月腹で圧倒し、畏怖の念をもたせ、羨望の溜息をつかせるだけでも満足すべきだろう。私が苦痛に悶え呻き苦しむ、この小山の腹が揺れ動き、血を吹き真二つに

裂かれる感動的なシーンを、とくと見るがよい。

私の妊娠した裸身が、これらの男達をどれ程強烈に気も狂わんばかりに亢奮させ、感動させることか。それこそが、私の最大の復讐であり慰めとなるものであろう。

みゆき夫人にとって、ここまで決心するのは非常に永い時間のように思われた。これは当然のことであろう。死の否定から肯定へ、そう簡単に心を変え決心できるものではないから……。

みゆき夫人は、腹の圧迫される重圧感で大きく肩で息をしながら、覚悟を決めて刀が臨月腹の張り切った腹壁を鋭く刺し貫く苦痛が襲いくるのを待った。それが、どれほど痛く苦しいものであるか、むしろ期待にも似た気持ちで。

西の方に沈みかける、柔い太陽の光を浴びて、双胎臨月腹は、空に突き立たんばかりに白く丸い小山の姿を見せてあえいでいた。弾力を失なって固く盛り上った腹は下腹部に青い静脈と赤い妊娠線を鮮かに見せて臨月腹の膨らみの偉大さを物語っていた。

眼隠しされた眼には何も見えない。しかしとぎすまされた全身の感覚は周りの観衆の驚

きと期待、鋭く突き刺る視線を感じていた。

突然ザワメキが止んで、上腹部に殺気が感じられ、身の引締るのを覚える。いよいよ生贄としての幕が切って落されるのだと感じた時、丸く膨れた小山の裾野―鳩尾に灼きゴテを当てられた様な鋭い痛みを感じた……。

(三) 紂王の残虐

史実に残る「妊婦の腹裂き」の元祖は、古代中国の殷の紂王が挙げられる。この王は、残忍をもって世に知られた人で、政治はほったらかして、専ら人民より取り立てた税金で広い立派な宮殿を建築し、宝石をちりばめた華麗な後宮で、姐^{だつき}已を寵愛し全国より集めて来た数多くの美女をはべらせ、日夜、女と酒に明け暮れる生活を送っていた。

紂王は、自分の絶対的な権力を充分に発揮し、女などは単に自分の享楽のための対象として生まれて来たものであり、自分の楽しみ快楽のためには女の生命等は何ら考えず、気の向くままに殺し、女が不足すると全国から狩り集めさせて白い肉体をもて遊ぶ有様であった。

紂王のサジズムは、全く徹底したものであり、その上、女を人間扱いしてなかったのだ

から、後宮に集められた美女たちは何時残酷な刑で紂王を楽しませるために死なねばならないか判らなかつた。

記録によると、酒宴の席上で後宮の女達に裸踊りを命じ、これを拒んだ女は庭に深い穴を堀らせて、そこに毒蛇や、サソリを投げ込み、その中に嫌がり泣き叫ぶ女を全裸にして突き落とし、穴の底で悲鳴を上げ悶え苦しむ白い裸身を見ては喜び、何ら顔色も変えることなく、女の肉体が動かなくなつて穴の底で倒れ伏すまで眺め続けたという。

また、刑場の中央に銅の柱を立てて一面に油を塗らせ、その柱に全裸にした女を這い上らせて下から火をつける。柱の女は熱いものだから、落ちない様に必死に柱にしがみつが、油が塗ってあるのでズルズル滑る。必死になって火から逃れようとして柱にしがみついている内に、次第に柱は焼けて来て、女の裸身の乳房や腹部等が焼けてくる。たまらなくなつて手を離れた女は、火の中に転げ落ちて生きながらの火あぶりの状態となり、熱さのために転げ廻つて死んで行く、その様子が面白いと言つては余興にやらせたと云うのだから、後宮の女達は生きた空もなかつただろう。

後宮の女達は、国内ばかりか、戦争があれば幾らでも勝利品として、手に入れることができるので、まるで消耗品のように取り扱われ、次々と紂王の享樂のために白い裸身を犠牲にして殺されて行った。

この紂王が、征伏した国の姫君を後宮に連れて来て意に従わせようとした時のことであつた。ところが香妃はどうしても紂王の意に従おうとはしない。その上、遂には

「私には、すでに故郷にいた時、良人がありその人の子をお腹に宿しているのです」

と言って紂王の申し出を拒んでしまった。

香妃の美貌に心を寄せていた紂王は、絶対権力者として女などは道具ぐらいにしか考えず、全ての女が自分の意のままになると思っていたのに徹底的に反抗されて

「よし、よく判った。それでは、その方の申す言葉が本当か嘘か、その身体に聞いて見よう」

と言ひ、直ちに家来に命じて香妃を一糸まとわぬ裸にさせると、広間に大きな台を用意させ、その上に仰向きに縛りつけさせた。広間には後宮の女達が多勢詰めていたが、どうなるものかと、香妃の方を見て息をこらしていた。香妃自身も、しまった大変なことにな

ってしまったと思つたが、今更どうにもならず、羞恥と怖しさの中で暴虐な紂王に愛されるより、潔く死んだ方がましだと覚悟を決めた。

可愛さ余つて憎さ百倍とでもの状態の紂王は、自ら刀を取ると美しい肌をした香妃の傍に歩み寄り、まるで魚の腹でも切るように無難作に鳩尾に刀を突っ立てると、その白い柔かいお腹の膨らみを正中線に沿って徐々に切り開いて行った。血を見た紂王は絶世の美人とうたわれ、本来なら自分の閨房で愛で慈しんだであろう香妃の白磁の肌を朱に染めて、切り裂く喜びに満足しながら、美しい裸身の苦痛の身悶えと悲鳴を楽しみながら真二つに切り裂いた。香妃はその美しい裸身を朱にそめ、ぽっかりと大きい切り口を開いて生体解剖の責苦に悶え苦しみ息絶えた。

紂王は完全に切り裂くと、その腹をまさぐり子宮をとり出すと、余りの地獄の責苦に顔色を失って震えている女達の前につきつけ、その恐怖の表情を見て喜び、酒を用意させると姐已を相手に血に染んだ香妃の死骸の前で酒を楽しんだ。

哀れな香妃の無惨な死骸は、全裸の醜い姿のままに野外に捨てられた。

(四) 武烈天皇の淫虐

わが国では、日本書記に記されている武烈天皇が、紂王に負けず劣らずの生活をしていたようである。

酒池肉林の享樂的な生活を楽しんでおられた天皇が、全国から人妻と娘を問わず、絶世の美人を集めさせ、その中から特に美しい十二名を選んで、夜は愛し、朝になると残酷な方法で淫虐のかぎりをつくし次々に殺したという。

これは有名な「千一夜物語」のシャリヤル王の話とよく似ている。この方は、妻と奴隸との不義を発見し、妃をはじめ姦夫姦婦全てを捕えて処刑し、それ以後、一夜の妻に処女を迎えては翌朝にこれを斬首した。昔の女がいかにか非人間的に扱われたかを物語るものである。

その他、宮中の女を集めて裸にし、板の上に座らせ、その前で馬を交尾させ、その後、女たちを検査して春情を催した印のある者は死刑に処し、そうでない者は下男達に与えて目の前で犯させた。また狩に行った時、獲物がなないので、代りに裸の女を木に上らせて弓で射て満足する等の行為がなされている。

こんな天皇であつたので、後宮の女が天皇の眼をぬすんで姦通していたが、そのため妊娠したと言うことを聞き、大いに憤ると直ちに女を引き連れてこさせた。その女を裸にさせると、自らの手に刀を取り、丸く固く膨れ上った妊婦の腹を切り裂き、その生血をしぼったという。

(五) 戦国武将の妊婦腹裂き

武田信玄の父信虎は天文十年二十一才の信玄のために甲斐を追われてしまった。

この真相はいまだに、明かにされていないが、信虎の領内における悪政と妊婦の腹裂きが原因であるとも言われている。

信虎は勇猛な武将で次々と隣城を攻略し、武田隆昌のもとを築いた人であつたが、それだけに人を人と思わぬ態度があり、淫虐の行為が多かつた。

ある時、妊婦の膨れた腹を見たいので城下の妊婦を探し出して連れてくるよう家臣に命じた。領主の命であり家臣は城下を廻り、嫌がる妊婦を無理矢理連れて来て、信虎にさしだした。目を細くして着物の上から、妊婦の大きな腹の膨らみを眼で追っていた信虎は、着物を剥ぎ全裸の姿を見せるよう命じた。

眼前に妊婦の大きなお腹を見て、信虎は大きなゴツゴツした手でその妊娠腹の感触を楽しんでいたが、突然、このお腹を切り開いて胎児を見たい欲望に馳られた。信虎は、妊婦に「何カ月か」と問うた。女は、「七カ月です」と答える。七カ月か……とつぶやくと家臣に命じて女を仰向けに寝かせ、手足を押さえさせると自らの刀で、妊婦の腹を切り裂いた。

思いもかけぬ悲劇に、手足を押さえていた家臣も妊婦も驚いた。手足を押さえつけられた時、不吉な感じが全身を貫いたが、まさか妊婦の生体解剖が行われるとは思ひもよらず、不安な面持で信虎を見凝めていたのである。

ところが急に刀を抜かれ有無を言わず、鳩尾に刀を突き立てられ腹を断ち割られた妊婦は、悲鳴をあげ身悶えし苦痛にのたうちながら花と散って行った。

妊婦の腹を裂いて、まだ生温い腹中に手をつっこみ胎児をとり出すと

「七カ月のやや子じゃ」と。

それ以後、家臣たちは信虎の命ずるままに城下にでは妊婦を捕えて信虎に献じ、信虎は腹を切り裂いては胎児の性別、月数を見て

極めて快心の笑みを浮べる有様であり、家臣たちは、その妊婦の悲惨な腹裂きに恐れおののき、主君の残酷な趣味に武田家の将来をうれうのであつた。

豊臣秀吉の養子関白秀次の妊婦腹裂きは、余りにも有名な事実である。今日まで多くの歴史書や小説の題材となり、書かれているので、奇クの読者では知らぬ人はいだらう。

秀頼生誕後の秀次の生活は、将来への希望が絶たれ自暴自棄になり、荒れる一方であつた。殺生関白と仇名されるほど無益に人を殺し、吹き出る血を見て喜んだと言うのであるから徹底したサディストである。それ程であるから、秀次の聚楽第の中には、秀次の樂しみのために処刑用の刑場が設けられ、そこに等身大の俎板（即ち妊婦の腹裂き用の台）が置かれてあつた。

何時の頃からか秀次は、妊婦に対して極端な嫌悪の情を抱くようになっていた。それは恐らく淀君が秀頼を産んだがために、自分の身が危くなり父秀吉に何時殺されるかも知れないと言う不安が頭の中で渦巻き、反動的にそのような心境におちいったのではなからうかと思われる。

第内に妊婦を引き込んで愛妾たちに強制

的に見物させながら、妊婦の腹を断ち割っていた。その内に、愛妾たちも同じ女の大きく膨れた妊娠腹を切り開くのに、興味を持ち始め、秀次に催促する者まで出てくる始末であり、そのため次々と妊婦が連れ込まれては特製の処刑台を血汐で染めて死んで行った。

これが京の街の噂となって大阪にいる秀吉に伝えられたが、そんな馬鹿なことがあるかとまだ一笑に付されていた頃のことである。

秀次の侍妾の一人が、秀次の種を宿して大きなお腹をしていた。

突然、秀次は、この女を呼びつけて連れて来させた。秀次の召し出しと言うので、早速伺候した女に対して

「お前の腹の中にいる子は、俺の子供に間違いないか」

と聞いた。

秀次の妊婦腹裂きのサジスチックな好みがあることを充分に知っており、自分も見せられたことのある女は、まさかとは思いつつも、不安の表情を隠すすべもなく蒼白な面持でカスカにうなずいた。

「そうか、それではおれが、この眼で、その腹の中の子供を確かめてやろう」

「ああ、お許しを。確かに関白様の子供に間

違いありません」

と必死に哀願したが、血に飢えた狼のようになった秀次には通じる筈がなかった。秀頼が生れた今となっては、自分の子供は男であれ女であれ、もう用のない子供である。明日の吾が身でさえも、どうなるか判らぬ毎日である。

秀次は、この現世において誰れも行えぬような行為、神も仏も恐れぬ地獄の世界での行為がやりたいのであった。天下一の権力者としての関白と言う座は、何時失われるかも知れない。誰れからも文句を言われず、勝手気儘な行動を取れる、この自由が欲しかったのである。

これは秀吉に対する抵抗かも知れない。とにかく秀吉でも出来ぬことをやりたいのであった。

秀次はその妊婦を刑場に、連れて行かせると、家臣に命じて帯をとかせ、簡単に着物を脱がし全裸の身体を俎上に仰向けに横臥させた。

「どうぞお許しを、関白様の子供に間違いはありません」

と縛りつけられた白い裸身をくねらせ身悶えしながら、必死に哀願した。

俎上で、愛妾の美しい裸身は、白い腹をポツテリと膨ませて盛り上っていた、正中線には黒い筋が走り、下腹部には静脈が透けて見える。黒ずんだ乳房は、丸く艶やかに張り青い静脈が網目をつくっている。

今、まさに秀次の佩力で断ち切れようとしている柔肌は、秀次が嘗て愛でた滑かな肌である。寵臣の木村常陸介や愛妾たちも、ともどもに

「余りにも、むごいことを」

と押しとどめたが、秀次は自分の最高の楽しみを邪魔するなとばかりにはねのけると「皆の者、よく見ているのだぞ」

小姓から愛用の佩刀を受けとると、ギラリと抜きはなった。刃が白く光った。逆手に刀を持つと息を呑み怖し気に凝集している眼の前で、ぷっくりと膨れた白い腹に刀を突き立てた。

「ギャッ、ウーン」

怖しい悲鳴が女の口から洩れた。

秀次の刀は白い腹に赤い筋を残して、その刀の斬れ味を楽しむように徐々に切り口を開けて行った。女の腹は、大きく波打ち苦痛に荒れ狂っている。血の筋が、白い腹を二筋、三筋流れたかと思うと、腹全体に血汐が拡が

り、脂肪がはじけて姿を見せ、見るも無惨に切り口を開いた。秀次の刀は朱に染まり下腹まで、何の淀みもなく切り進んだ。女は苦痛に身悶え、声にならぬ苦悶の呻きを洩らし、眼は釣り上り悲痛な表情である。

すっかり腹を切り裂くと、女の腹中に手を入れ胎児を取り出した。

「これが、俺のやや子か、哀れな奴じゃ」

その顔には、一筋涙がキラメイていた。北の庄七五万石の大守、家康の二男結城秀康の子忠直も、自分の寵妃一国と言う女のために多くの妊婦の腹を裂いている。忠直は、一国と言う女を愛していた。ところが一国と言う女は、笑いを忘れたように笑わぬ女であり、そのため忠直は必死になって笑わそうと努めていた。

限定版グラビア写真集 △美しき縛しめ▽ 第八集

山原清子 大塚啓子
鈴木晃子

女斗緊縛競艶写真特集

一部一〇〇〇円
略号(美8)

「女性対女性」の激しい女斗場面と女斗美の躍動！ 女性が女性を縛る緊縛プレイの見事なフォト化

長い間の皆様マニアの御要望に応えて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずはぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させております。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の中に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のものとなるのです。この新しい企画はまことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身を清子に噛ます連続写真。馬乗りになって清子をしめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子白を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。

ある時、忠直は城中の侍女を愛したが、それが一国の憤りをかい、そのために胸中では残念に思い未練が残っていたが遠ざけてしまった。その女が、近侍の一人と通じて妊娠したと言うことを聞き、まだ未練が残っていた忠直は、激しく憤り、女を引き出させると一国の前で裸にさせ、手足を押えつけさせ仰向きに寝かせた。

忠直は、わが寵愛を受けながら、他の男と通じて、その上妊娠までした不屈きな女、自らその腹の子を成敗せんと、自らの刀で腹を裂いた。女が悲鳴をあげ、苦しみ悶えるのを見ていた一国は、如何にも嬉しそうに甲高く笑った。

以来、一国は事あるごとに忠直に妊婦の腹を裂くことを求めた。ただ一国を楽しませるためだけに、多くの妊婦が城内に引き連れられて、哀れにも、その大きなお腹を裂かれ無惨にも死んで行った。

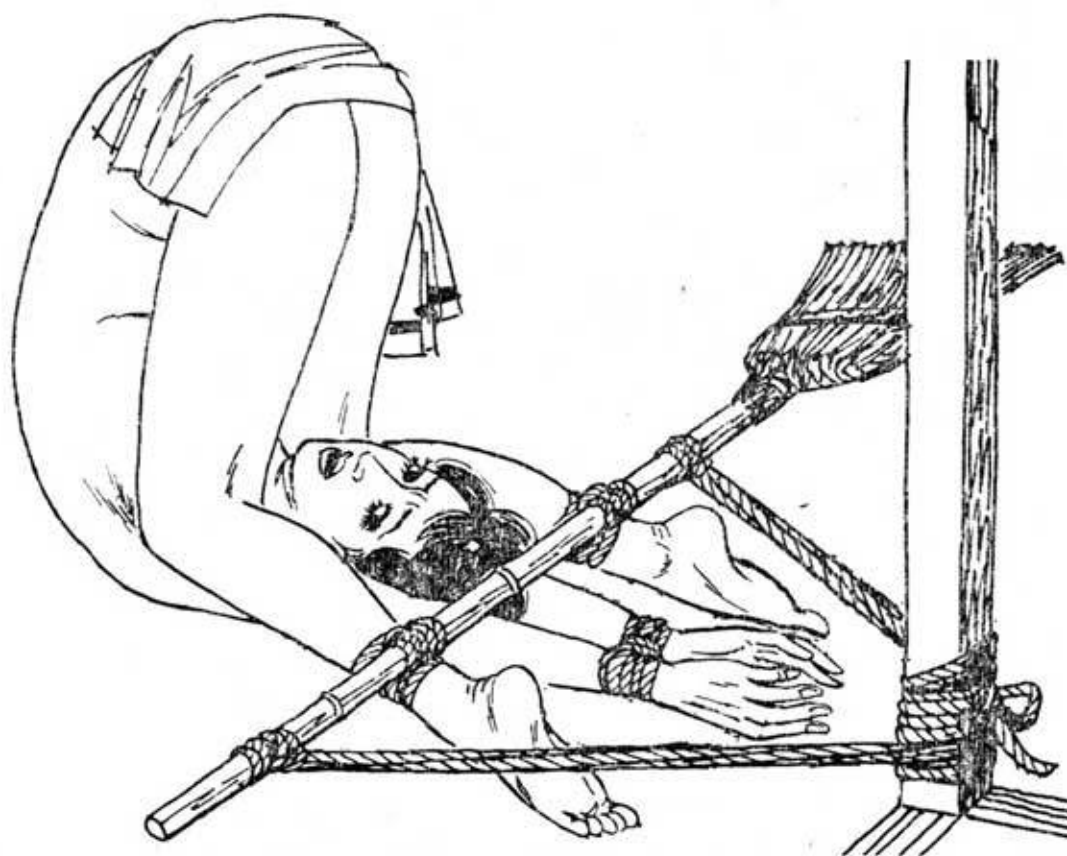
妊婦の腹が朱に染まり、呻き悶えて死んだ夜は、そのサジスチックな状景がいたく刺激となり、一国を情熱的にし激しく燃えさせたという。

古来、武将の中で、妊婦に偏執した者も少なくなかったのである。

サジスチック・ストーリー

秘^ひ　め　事^{ごと}

町　　陽　　一



風が少し冷たく感じられるプラットフォーム、子供を抱いた幸福そうな夫婦、頬を寄せて囁く姿にもほのぼのとしたものが感じられる。そんな姿を少し離れた所から見ながら、浩子は何だか一寸うらやましく思っ手首を

撫ぜた。白く細いその両手首に赤い筋が二筋三筋、くつきりと見える。その跡を隠すように浩子は袖を引っ張った。赤い筋がうとましく、それでいて身内から何か喜びのようなのが湧き上ってくるようだった。

笑美子とは数年ぶりの出会いだった。昼休みも間近い頃、浩子は自分への電話の声に席を立った。

「はい、森井です」

「ヒロコ？」

「え？ どなたです」

「ヒロでしょう。エミよ」

「え？」

「水木笑美子よ」

「あら、エミ！」

声が大き過ぎて、浩子は思わず口を押えて首を縮めた。

「やっと判ったようね」

「久し振りじゃない、どうしてるの」

「ひどいな、ヒロ、勤め先も教えないで」

「あれ、教えなかった？」

「教えてないよ」

「じゃ、どうして知ったの」

「裏口からよ。うふふ、ねえ今日会えない」

「いつ？」

「昼休みにでも、どう」

「いいわよ、何処で」

「そっちに行くわ」

「判る？」

「当り前、何でも調べてるんだから」

「わあ、こわい」

笑美子が訪れたのは十二時半をまわってからだ。社会人になってから会ったのは、これが初めてだ。学生時代と違って、さすがに二人は洗練された感じになっていたが、特に笑美子は垢抜けしていた。

「あらあ、エミ、きれいになったわねえ」

「貴女もよ、ヒロ」

二人は肩を並べてエレベーターに向った。

浩子の勤めるオフィスは、大阪の中心部に建つビルの六階にあった。昼休みも半ばを過ぎているせいか、エレベーターの中も二人だけだった。扉が閉じると、すぐに笑美子は浩子の白いうなじに唇を寄せた。なつかしい仕草だ。浩子はその気短かなのに驚きながらも、そっと笑美子に身を寄せた。笑美子は、浩子の両手を後にまわして背で一つにして手首を握った。

「駄目、こんな所で」

「ねえ、今夜、泊りにこない」

「旦那さん、いらっしゃるでしょう」

「気にしないで良いのよ。ねえ」

「そうねえ」

浩子は一寸考え込む風をした。その癖心中はもう決っているのだ。

「デートなら、断っちまいなさいよ」

「デートだなんて……」

「じゃ、良いでしょう」

「何処で待ち合わせる」

「私の店へ来て」

「店？」

「洋服店をしてるの、南で開いてるのよ。終ったら来て」

「そうね、南だったら、五時半には行けると思うわ」

「待ってるわよ」

エレベーターが止り、浩子の両手は自由になった。

南の繁華街を一寸入った所、小さいが明るい感じの店、表戸はもう閉じられていた。

「エミ」

浩子は薄暗い店内に入って、まばたきをした。

「ああ、ヒロ待ってたわよ」

片隅から笑美子が立ち上った。

「良いお店じゃない」

「そうかしら、小綺麗な感じにはしたかったけど、まだまだだわ」

「良いわ、とっても、私も、こんなお店出してみたかったわ」

「すればいいじゃない？」

「駄目よ、技術も資金もなくては」

「そんなこと」

笑美子は話しながらも帰り支度を急いだ。支度が整う迄浩子は、店のあちこちを見わしっていた。小さな所に迄気が配られているのはさすがに若い女性の好みが出ていた。

笑美子は何処からか縄を取り出した。

「あらあら、縛られるの」

「そうよ、嬉しいでしょう。久し振りだし」

「嬉しいのは、エミの方じゃないの、でも良いわ。縛られる」

「さあ、ヒロ、ぬいで」

「ここで？ 家に行くんじゃないの」

「行くけど、ここからよ」

「嫌だわ」

「車で行くし、判らないようにするわよ」

笑美子の口調には、浩子に抵抗を起こさせないような力を持っていた。浩子は催眠術にかかったように、ブラウスのボタンに手をかけた。

いつの頃からこうなったのだろうか。二人にも、はっきりした起源は云えないに違いない。肌をふれ合った二人は、いつしか、縛りに興味を覚えるようになり、浩子が受身の立

場にまわったのよ、極く自然なことだったのかもしれない。笑美子の買ってくる風俗雑誌に息をのみ、肌を噛む縄目にあえいだのも、今でも楽しい思い出になっていたのだ。

少しためらいを見せながら肌をさらした浩子を、笑美子は綿ロープで後手に犂々と縛り上げて行った。色白で小柄な浩子。胸のふくらみは豊かで、薄紅の蕾が美しい。両手首を背で縛り上げ、乳房の上下を締め上げた縄は浩子の体を縦に下りた。

「嫌！ 初めから、そんなの」

浩子は肉付きの良い太ももに力を入れた。久し振りに受ける縄目の味。上半身を縛られただけで、浩子はその刺激にあえいでいた。豊かな乳房が縄目に逆らって大きく動く。一度にこれ以上の刺激を受ければ、体が破裂してしまいそうだった。

「じゃ、今はこれで良いわ、さあ行って」

笑美子は縄尻をとって引き立てた。

「嫌！ 外へなんて」

裏口に迄いざなわれた時、浩子は全身に抵抗を見せた。

「馬鹿ね、ガレージよ。誰も見ないわ」

ガレージには、よく手入れの行き届いたワゴンが一台、その後には大きな木箱がのせら

れていた。

「さあ入って」

笑美子は、その木箱のふたを開けた。

「こんな中へ入るの」

「そうよ。裸をさらしたくはないでしょう。

この中なら判らないもの」

浩子は裸身に縄をかけられた時でも、上から服を着せられて席に座らされるのだと思っていたのだ。

「さあ早く」

素肌に、かんなのかかっている感じがざらの木肌が痛い。

「一時間ばかり、がまんするのよ」

ふたが閉じられる。車が動き出してからもしばらくは、浩子は少しでも楽な姿勢になろうと努力した。後手の手首が痛くてねがえる乳首にとげがささる。それをさけると太ももが責められる。脚を縛られていないのがもったの幸いだった。やっと少しは楽な姿勢になった頃、丁度、目の前に節穴があって、外が見られた。左側の窓を通して、外が見える通り過ぎる車の運転手が、この車の後に、裸の女が縛しめられているのを知ったら、どれ程驚くだろうと、浩子は一寸スリルを感じた車は桜橋の交叉点を通り過ぎた。浩子はふと

この前の深夜に聞いた放送を思い出した。木曜日だったかしら、それとも金曜かな、あのアナウンサーは『コレクター』の曲をかける時、とても云いにくそうに説明していたけどそれにあの時間、他にも「ショック」だとか「甘い暴力」なんかの曲もかかったけど、どれもSMに関係があるわ。あの人も、この趣味があるのじゃないかしら、次の日に電話してみようと思ったのだけど。貴方はKKって雑誌知ってますかって、そして、もし良かったら私を縛って下さいって。だけど止めた、男の人に縛られるのは何だか怖いようなものでも電話ぐらいしても良かったかな、思い切って一度会いに行ってみようかな。

浩子は不自然な姿勢にも少し慣れて、のんびりと考えを遊ばせていた。外の景色も十三大橋を通過して、大阪福知山線に入ると、浩子はまだ見当がつかなくなった。後手の手首からは先は感覚がなくなり、もうつらいとも感じられなくなった。唯、車がゆれる度に肌をさす刺が痛い。前に一度彼女は荒縄で縛られたことがあったが、その時の刺激も、これに似たようなものだった。

車は舗装道路を外れたらしい。急にゆれ方が激しくなった。箱の中の体が、上下左右に

放り投げられ、楽な姿勢を取るなど、とても出来ない状態になってしまった。浩子は唇を噛みしめて声を出すまいとした。これは拷問だわと思いつけていた。責めに興味を覚えてから、浩子は拷問という言葉が気に入っていた、勿論、江戸時代の本当の拷問等、字面上でしか知らないのだが、この言葉が、いかにも自分を痛めつけるような気がしていた。

マゾヒズムとは一種のナルシズムである。自分の痛めつけられた肌を、縄目に変形した曲線を、自分でいとおしむのであろう。浩子も一度だけ、笑美子に撮ってもらった写真を今でも大切に持ち、折にふれては出して眺めていた。時によると、自分でも不思議な位、自分の被縛姿がいとおしくなってくることがあった。浩子の素肌を散々責め苛んでから車は、ようやく止った。

「ヒロ」

笑美子は、運転席から後を向いて声をかけた。

「うむ」

疲れと興奮とで浩子は、夢見心地で返事をした。

「大丈夫？」

「大丈夫よ」

「しばらく、こうして待っててね」

「何処？」

「家のガレージよ」

「どれ位？」

「十分位かな」

「良いわ、早く来てね」

「痛くない」

「このままで良いわ」

浩子はすっかり被虐の気持に浸っていた。懐かしい気持だった。学校を卒業してから、急に会わなくなった二人。それでもしばらくは、新しい社会の空気に夢中になっていた浩子だが、時には夜になると、何か物足りない気持になることもあった。だが笑美子とは連絡もとれなかった。思い余って自分の身体に縄を巻きつけてみることもあったが、それ位で気をまぎらせられるはずもなかった。

「お待ち遠さま」

急に視界が開けた。不自由な体を笑美子に助けられてガレージの外に出ると、素肌に夜気がひやりと浸みた、笑美子に縄尻を取られて浩子は室内に入った。導かれて地下室へ。素足に裸のコンクリートが冷たかった。

「なつかしいわ」

浩子は縛しめられた自分の白い肌を、みつ

めながら階段を下りた。

「何が？」

「苛められるのが」

「あれ以来、何もしてないの？」

「出来るはずないわ。今日はうんと拷問してね。傷がついても良いわ、めっちゃめっちゃにして。二、三日寝込む位」

「良いわ、思い切り苛めて上げる。この部屋に入ったら、敵同志よ」

これは二人のルールだった。範囲を決めておいて、その中では敵として行動するのだ。殆どの場合、浩子が捕虜か奴隷の役だったが時としては、初めから対等の立場で組み合う時もあった。そして五度に一度位に浩子が勝ち、縛り上げられた笑美子に責めを加えることもあった。

「良いわよ」

「一寸待って」

扉の前で笑美子は服をぬいだ。下は燃えるように赤い水着だった。

「始めるわよ。猿轡は？」

「要らない。今日は思い切り悲鳴を上げてみたいの」

「そうね。ここなら外へは洩れないから」

笑美子は勢良く扉を開け、溢れ出した光の

中へ浩子を突きとばした。両手の自由を奪われた浩子は木の床に転がった。白い体が光を一杯に反射した。不自由な体をやっと起こし視線を上げた時、浩子は悲鳴を上げた。浩子の丁度目の前の壁に、若い男が半裸のまま磔られていた。長身で中肉の男だが、口には皮製の猿轡が噛まされている。浩子が入ってくるのを知って観念しているのか目は閉じたまままだ。ぜい肉のない体は均整がとれていてむしろ美しかった。

「私の主人よ」

笑美子は黒の長靴姿で手袋をはめながら云った。

「私の奴隷と云った方が良くかもしれないわね。すっかり飼育してあるんだから、みてごらん、体で喜びを表わしているでしょう」

「嫌、エミ、ほどいて、ひどいわ」

「何云ってるの、今日は徹底的に苛めて欲しいって、さっき云ったばかりじゃないの」

「他の人の前では嫌よ」

「これは人じゃないのよ。動物よ。私のペットよ。ジュンて云うペットよ」

「ああ、よして」

浩子は身をもんだ。無理もないことだ。笑美子と二人の時は体のすべてをさらした浩子

だが、異性の前に肌を見せた事は勿論、異性の肌のすべてを見た事もなかった。浩子是不自由な体をもがいて男の目から体の前面を出るだけ隠そうとした。丸めた白い背中が美しく輝いた。男の前に見せた背中で小さな両手がしっかりと握りしめられ、血の気を失なった白い指先が細かった。

「今日は私の気のすむ迄責めるのだからね。」

ヒロ、覚悟しなさいよ。お楽しみの方は後にとっておいて、先にこのペットを痛めつけてあげるわね」

笑美子は嫌がる浩子の縄尻を取って無理に立たせると、部屋の隅にむき出しになっているコンクリートの柱に立ち縛りにした。素肌に荒いコンクリートが冷く痛い。型の良い両脚も揃えて縛られた。

「ねえ、許して、今日は嫌、もう解いて。かんにんして」

浩子はうわ言のように云い続けたが、笑美子は馬耳東風と聞き流した。浩子を縛り終った笑美子は男の縄を解いた。

「さあ、ジュン、お座り」

男は云われるままに正座した。目は伏せたままだ。太ももの筋肉がたくましい。

「手を後にまわして」

男の手は後で縛り合わされ、二の腕から胸へかけても縄はからみついた。

「あのお嬢さんに挨拶するのよ」

男の口から枷は外された。立ち上ろうとした男の肩に鞭が鳴り、男は膝をついた。

「誰が立っても良いと云った。這って行くんだよ」

「嫌、来ないで、駄目」

浩子の悲鳴にもかかわらず男は笑美子の鞭に追われて浩子の足元に達した。正座し直す腰をかがめて、形の良い小さな浩子の足に唇をつけた。

「いやー、止めて」

浩子はもだえた。柔い皮肉に深い窪みを作って縄が喰い込む。薄紅の乳首が空を向いてふるえる。まるで足先から頭迄電流が通り抜けるようだ。

「もうよし、いつ迄口をつけてるの」

ふたたび男の背に鞭が鳴った。

「そうだ、一人ずつ責めるより、二人一緒の方が良いわねえ。どう、ジュン」

男は強くうなずいた。

笑美子は男を壁際に連れて行き胸の縄を解いて手首だけにし、太ももと足首を短い縄でつないだ。完全に座ることは出来るが、立つ

方は中腰迄にしかねないわけだ。笑美子は手首の縄尻を壁から突き出した棒にかけて下ろすと、もう一度手首の所で軽く止めた。

「ねえ、もう許して。エミ、嫌だわ。あっ」

浩子の頬が鳴った。白い肌が赤く染まる。

「いつ迄も何云ってるの。いくら云ったって駄目よ。ぐずぐず云っているとひどいわよ」

浩子は黒目勝ちの目を大きくした。今迄にはなかった笑美子の見幕だ。その鋭さに押されて浩子は口を閉じた。男の前に肌のすべてをさらして立たされた時も軽く抵抗を見せたきりだ。これ以上反抗すると何をされるか判らないと浩子は恐怖の念すら抱いていた。

浩子は男の目の前に立たされ両脚は揃えて縛られた。適当に肉のついた美しい脚線だ。後手首の縄は解かれ、手首だけを頭上で縛られ、男の後手の縄につながれた。二人をつなぐ縄は一杯に張られている為に男は足の縄一杯に中腰になったまま、女は殆ど爪先立ちになったままだ。男の顔が丁度浩子の腰の辺りに来ているが、彼女にはどうすることも出来ない。体を引き伸ばす痛みを、こらえるだけだ。二の腕の内側の柔い肌が美しく、腋の下の薄い蔭が白い肌に映えてみえた。

風俗雑誌等で女体の曲線や肌の美しさをた

たえ、二の腕や太ももの丸さを讚美し、腰の張りに目を瞠る文章にはよくお目にかかる。

だが、腋の下の美しさをたたえた文章にあまり出会わないのはどうしたことだろう。何故水着のモデルやスターが腕を上げてポーズをつけるのだろうと考えたことがあるか。腋の下は着衣の時は勿論、裸でいてさえ、ふつうのポーズでは他人の目にふれることもない神経の過敏な所や腋毛等からすぐにセックスと結びつけて考える者が多い。だが、性とは切り離して考えた場合、本当に美しい腋の下には中々お目に掛かれないものだ。特に情事の時にでなくてもなければ、異性に腋をさらす女性も少ないだろう。従って夏のシーズンは大いなるチャンスである。私はかつて、二人だけ美しい女性に出会ったことがあった。

一人は電車の中で吊皮にぶら下っている女性だった。生憎斜め前なので、充分に觀賞することが出来ない。席を強引に移したくなかった位だ。もう一人は、自ら縄をかけた人で肌が白く美しい人だった。文字通り薄紅の乳首に目を瞠ったものだ。

美しい腋の下、性欲の対象外として見た場合、腋毛が多過ぎてはいけない。多情を暗示するようで欲望が先走りしてしまう。あるな

ら薄く柔かいこと。その肉付きは肌理細かく、ふっくらとした丸みを帯びていること、勿論、肌にゆるみがあってはいけない。ゴムまりの如く、若い桃の如く、弾力と、柔かみと、それに淡い影。滅多に見つからないだけに、美しい腋の下は貴重なものだ。又、これは写真では充分知ることが出来ない。矢張り実際にこの目で見なければならぬ。

両手を挙げて吊られた浩子の腋の下は、美しかった。淡い影が白い肌に神秘的な陰影を作っていた。体が引き伸ばされている為、二の腕の内側と太もものに緊張した線が現われていた。

「いい、二人とも大いに悲鳴を挙げなさい」
笑美子の言葉が終らないうちに空を切る鋭い音がして男の背中に鞭がふり下ろされた。

「むっ」

男のうめきと共に、浩子の手首の縄が引かれた。

「あっ」

手首に縄が喰い込み、体は爪先立ちになる一人を責めれば自動的に、もう一人も責められる。鞭の痛みに一方がのけぞれば、一方は縄目の痛みに悲鳴を上げる。笑美子は一打一打を丁寧に降り下ろした。男の背に鞭跡が平

行して赤く走って行く。丸めた背中に、中腰になった腰に、笑美子は真剣な表情で鞭をふるった。浩子は手首に喰い入る縄目に息を荒げた。

「次はヒロ」

笑美子の声は上ずっていた。その声も浩子には遠く聞こえた。笑美子は場所を変えようとむき出しの浩子の背を見詰めた。数年前に比べると一段と美しくなったようだ。学生時代の肌はどちらかと云えば、むしろ艶のない乾いた感じだが、成人してから肌の肌理も細くなり、脂が薄くのり豊かな色艶を見せていた。色はあく迄も白く、美しい曲線を見せる背中。両腕が吊られている為、腕のつけ根が豊かに盛り上っている。引締った細腰に続く豊かなふくらみ、さらに体を支える形の良い脚。笑美子は男が女体を見るような目付きで浩子の背を見詰めた。

「いくわよ」

声は乾いていた。空を切る鋭い音。一打目は肩の盛り上りで炸裂した。

「ヒーッ」

浩子の体は大きくゆれた。男の手首がぐっと上に引かれる。

腕の付根の盛り上りは、痛みは与えても骨

を痛めることはない。昔の拷問でも、ここを狙って打ちすえたものだ。

白い浩子の背に赤い鞭跡は、むしろ美しい。赤い筋は見せているが、腫れ上がるようなことはない。縞目に彩られた浩子の背に笑美子は熱っぽい視線を注いだ。

久し振りに受ける責めに、浩子はともすると正気を失ない勝ちになるのを押さえつけていた。以前にはもっと激しい責めを受けたこともある。鞭打ち位は当り前のこと。昔の拷問の本を見て逆海老吊りや、箕盤責め、さらに海老責めや逆吊り等もしてみた。若さが耐えたと言うべきであろうか。縄目の跡は残っても、彼女の美しさは奪われることがなかった。そんな激しい責めに喜びを感じていた浩子だが、今日の責めは今迄にない程苦しかった。あながち久し振りだからという言葉だけでは片付けられるものではなかった。苦痛の一番の理由は目の前に居る男性であった。それが笑美子の夫であるにせよ、浩子にとっては初めて肌を見せる異性であることに違いはなかった。だが、今ではもう半ば以上あきらめた気持ちになっていた。笑美子は一度悪魔になると……プレイで責め手の立場にある時、笑美子はこう表現した……浩子の言葉には絶

対耳を傾けないので習性だった。始めたが最後、彼女は中途半端では止めないものである。浩子を縛り、打ち、吊すことによって浩子への愛情を表現したのだ。

浩子の背中が赤い縞で彩られ、体中が汗でしっとりとなめれた頃、笑美子も荒い息をついて汗を拭いた。赤い水着が肌に隙間なく喰い入っていた。

鞭を手離した笑美子は、何かを手にすると浩子の後に近付いた。

「あっ？ いや、駄目よ、やめて」

体内に注ぎ込まれる冷たい液体をいぶかしかった浩子だが、その正体を知るや、愕然とした。これは初めての経験だ。一瞬後に起る出来事を想像して浩子は総毛だった。だが両手を上から吊られた不自由な姿勢では抗しようもない。小さな容器に入った液体が体内に注ぎ込まれると笑美子は浩子の縄を解いて改めて後手に縛り直した。縄の他端が自由になると男は床に転がった。

「いや、エミ、助けて、もう駄目」

後手の縄が二の腕をくぶり、乳房に喰い入る間にも浩子の体内では変化が起っていた。今迄に浩子が受けた責めは、痛みを与えるものばかりだったので、これは一寸勝手が違っ

た。肌を打つ痛みも吊られる苦しさもない。外部から見ただけでは何の変化もないのだが、当人にとっては耐えがたい苦しみだ。体内の苦しみだけではない。異性の前に、いや、他人の前にみじめな姿態をさらす羞恥が最大の苦痛だ。浩子の顔からはみるみる血の気が引いて行った。

「もう良いでしょう。さあ、楽にしてあげるわよ」

小説等によると他人の目の前で排泄させられるシーンが出てくるが、浩子も一瞬、それが脳裏に浮かび、気が遠くなるようだった。だが笑美子は浩子を部屋の外へ連れ出した。入ってくる時、気付かなかったが、階段を下りた所に小さな戸がある。開けると中は清潔な洋式トイレになっている。笑美子は美しい囚人を腰掛けさせると後手の縄尻を水道パイプにつないだ。

「ゆっくりすると良いわ。その間にジュンを苛めてくるからね」

浩子の目の前で戸は閉められた。小さな部屋に閉じ込められた浩子は、一度に体内の緊張がほぐれて行った。白い台に腰掛ける白い裸女、美しい取り合わせだった。鞭跡の痛みもいっしょか消えていた。ほっと一息ついた浩

子は視線を落とした。豊かな胸のふくらみの上下に縄が深く喰い入っている。一人で縄を巻きつけただけでは、味わえない緊縛感だった。乳房のふくらみが強調され、その頂に薄紅の乳首が上を向いている。

縛られたことのない女性、又はそういったことを嫌悪する女性に問う。貴女は被縛の女性の姿が、どれ程美しいかを知っているだろうか。女性は美しくなればならない、可憐でなければならぬ。被縛の女性の姿には、そのすべてがある。

「美を破壊する所に新しく美が生まれる」

誰かが、こんなことを云っていたのを憶えている。女性の体の美しさは曲線にある。その曲線が縄目で歪められ、破壊されると新しい美が生まれる。苦痛に表情を歪めると別の可愛い顔が出て来る。その姿が、表情が、男にとってたまらない程美しく、いじらしいのだ。男は相手を征服したい本能を持っている。愛するものを独占したい気持を持っている。すべからず女は男に征服されなければならない。女は男の奴隷とならなければならない。だが、この部屋のジュンと呼ばれる男は、どうであろうか……。

二人は柱を背に座った姿で縛られていた。

浩子に続いて男も体内の洗礼を受けた後、縄目を受けたままでシャワーで清められた。シャワー室に二人きりになった時、笑美子は浩子のぬれた胸の蕾をそっと口に含んだ。それだけで、浩子は今迄の責めに対する恨みがましい気持はすっかり消えてしまったのだ。

「私は初めは随分驚きました」

二人だけ残された後、浩子も固くしていた体を、ようやく崩し始めた時、男は初めて口を開いた。その声で浩子は再び体を固くしたが、男の視線が自分に向いていないことを知ると安心した。

「結婚する前は、サドとかマゾとかいうのは言葉の上だけでしか知らなかったのです。それが、いきなり縛らせてくれたでしょう。一瞬アレが気が狂ったのじゃないかと思いましたね。だけど、その時の目の輝き、その後の燃え方等から、段々と私も理解出来るようになったのです」

男は態勢を変えた。男の腰の辺りが再びすっかり露わに浩子の目の前にさらされた。

「今では、すっかり理解者になったつもりです。アレは……いや、アレのことについては貴女の方がくわしい。貴女の事は色々伺っていましたが。とてもきれいな体の人だって、いつ

も夢中になってはめていましたよ」

「まあ」

浩子は頬を染めた。

「私の友人にジャーナリストが居るんですが彼は、私には直接云わないで、親しい女性にだけ話したのです。その女性の口から私が知るようになったのです。彼はサディストなのです。私は以前は、サディストって唯、異性を苛め、苦しめるだけで喜ぶものだと思っていたのですが、そうじゃないんですね。今では私もそう思っています。サディストはフェミニストだって。相手に愛情を持っているから苛めるのだ。云うならば愛情表現の一手段なのです。彼がそうなのです。だけど、多少とも名前を知られている仕事なので、あまり大きな声で云うことが出来ない。従って、相手が見つからない。彼はそれで随分悩んでいるのですよ。その女性も一度縛られたそうですが、とてもやさしく扱ってくれたと云っていました。もともと女性にはやさしい男なんです。出来ることなら彼にふさわしい相手を見つけ出してやりたい。今日貴女の姿を見て本当にそう思いましたよ」

男の視線は相変らず浩子には向けられていない。

「その人は？」

「会ってやってくれますか」

男は顔を向けた。浩子は今更のように自分の裸身を恥じた。だが男の視線には浩子が案じたようなみだらなものはなかった。

「分りません。まだ男の人に縛られたことがないんですもの」

浩子のせりふは殆ど口の中だったが、男にはよく聞こえた。

「初めからそんなことを云わなくても良い。電話をするだけでも、いや、その話をするんならKKって雑誌知ってますかと云うだけで充分です」

「出来るかしら、恐いみたい」

「彼の名は伊豆って云うんですよ」

浩子は口の中で驚きの言葉を洩らした。浩子が箱詰めになされて、この家につれて来られる時、町中で思い出したのが、この伊豆の名前だった。深夜の放送を聞いて、翌日電話しようと思ったこと、その考えを今、この男がそのまま口にしてしているのだ。

○

ここで筆者は、ふたたび世の女性に話しかけたい。今度はM女性に、いや、多少なりとも興味のある女性に頼みたい。S男性の多く

がパートナーに困っているのを御存じだろうか。かく云う筆者もそうだが、女性は名乗りがたがらない。この世界では女性の出現が大いに待たれていると云うのに。何も、大勢の人の前に肌をさらす必要はない。信頼出来る特定の人だけに良いのだ。セックスについて随分進んだ考え方を持っている人がふえていくというのに、この事に関しては消極的なのは何とした事だろうか。SMが変態であるという観念からか。これは大いに考えられることだ。しかし同性愛が世に認められて来ているようなのに、どうしてSMが変態だ、異常だときめつけられなければならないのだろうか。

私はプレイの場に於てセックスは必ずしも必要ではないと思う。自然の状態では、そこ迄行くのが当然かもしれないが、それにこだわる必要はないだろう。唯、それを強調することはないのである。だから私は辻村隆氏の（個人名を出してすみません）カメラハントの文章にひっきりかきを感じる。楽しいプレイの様はよく判る。だが、セックスの事迄言及するのは私の趣味に合わない。ひがみかもしれない。私には相手がないのに氏には次々とあらわれる。だが、それは氏が顔を

売っているからに外ならない。私は名を売っていないのだから。だが、余りセックスにこだわれば、エロと変る所がなくなるではないか。SMにはSMとしての行き方があり、その行き着いた所を具体的に述べる必要はないと思う。

辻村氏には何の恨みもないのに、失礼なことを書いてしまったが、お許し願いたい。もっとSMが世に認められてからなら殆ど抵抗は感じなくなると思うが。

M女性がS男性を見出す方法はいくらもある。話の途中でその方面の話に興味を示すとか、浩子の今のケースのように、それらしい人に電話するとか、積極的であれば、いくらでもある。男性が女性化していると云われる今、むしろ女性の方から積極的に探してもらわねばいけないのかもしれない。相手に妻子があっても婚約者があっても、この世界だけでの仲間となれば良い。それでこそ現代の交友ではなからうか。セックスが楽しみであるように、SMプレイも楽しみであってしめるべきだ。もっと男も女も積極的に相手を求め楽しもう。

○
「伊豆の名前は、聞かれたようですね」

「ええ、一度電話しようかと思ったのです」
「ほう、どうして」

浩子はその時の気持を話した。もう二人が縛しめの身だ等とは考えもしなかった。

「ううむ、矢張り何かと呼ぶんですね」

「それにKKのモデルさんの名前が出てくるんですよ。一宮さんや、大塚さん。それにモデル応募の小野田さんなんか」

「それだけ判っているのに、どうして踏み切れなかったんですか」

「矢張り恐かったんでしょうね。男性というものが判らなかつたし」

「無理ないかもしれませんね」

「エミは毎日するんですか」

「いや、一週に一回位かな。平均して」

「今日みたいに？」

「どんな時もありますよ。この頃では何だか私も喜びを感じるようになってね」

二人の会話はいつの間に入って来たのか、笑美子の声で中断された。黒い皮の極端に短いショーツ、上半身は赤いこれも皮のブラジャーだけ。引き締った体が美しい。美しい人が残忍な行動をすれば、そのアンバランスな所に別の形の美が生まれる。女性の場合、責め手が美しければ美しい程、その行為は正當

化されるのかもしれない。

「仲良くなった所で一緒にしたげるわ」

男と浩子は、床に手足を伸ばして横たえられた。

「前向きだと私がやけるからね」

笑美子は自身に断わるようにつぶやくと、二人を背中合せにして足首から縛り始めた。長い縄によるぐるぐる巻きは、見た目には、そして初めの中こそは、非常な緊縛感があるが、しばらくすると、ゆるみが出来始める。

一本の縄であるだけに、一カ所のゆるみは全部のゆるみに及んで行く。だから笑美子是要所所に結び目を作って行った。足首で、膝下で、細腰で、胸で、そして両手は揃えて頭上に伸ばされ、腕の付け根、肘の上、手首、二人の体は一本の太い棒のような姿にされてしまった。

労働量から云うと、加虐者の方が激しいだろう。要所所要所を持ち上げ締め上げるのに笑美子は汗ばんでいた。

「出来上りね、では」

笑美子は浩子の体に手をかけた。二人の体は半回転して、浩子は男の背に乗った。

「うわーっ、いたっ、くく、むうう」

男は悲鳴を噛みしめてうめいた。浩子の腰

が男の力で押し上げられた。不自由な身で、それは必死の努力だったろう。

「あまり美しいお嬢さんに見とれていたからバツよ」

「エ、エミコ、止めてくれ、痛い」

「そうね、怪我されてもつまらないからね」

二人の体は逆にかえされた。

「いーっ、痛い。助けて、エミ、やめて、苦しい」

浩子の胸のふくらみは、床に強く押しつけられた。処女の敏感な乳首はさわられただけでも感じるものだが、今は二人の体重が押し潰している。腰と違って手足の自由を奪われた身では胸を上げることなど思いもよらぬ。

浩子は自分の胸の豊かさを憎みさえした。頬に当る床を、いつしか涙がぬらしていた。

「楽しいでしょう、おやおや、汗をかいて、すっかり汚れちゃったわね」

笑美子は、二人を元の横倒しに直しながら云った。

「きれいにしないと嫌よ」

言葉と共に二人の上に生温い水がふり注いだ。ホースから出る水流を調節して強く細い流れを浩子の乳首に当てたかと思うと、ゆるめて二人を満ちなくぬらして行った。生温い

水は素肌に気持良かったが、やがて二人は現実に愕然としなければならなかった。水分を吸った縄が徐々に縮み始めたのだ。縄目がいいよ深く肌に喰い込み始め、乳房が歪み、太ももにも深い窪みを作った。この縄目の責めは担当に激しかったとみえ、縄を解かれて自由になった後も、二人はうつ伏して身動き一つしなかった。

ぬれた若い体が美しい。

笑美子は、そんな男を柱に縛りつけると浩子をバスタオルでふきながら、抱くようにして男の前のソファに導いた。笑美子の指が浩子の体を這い始めた時、浩子は男の存在に気付いた。

「いやよ、やめてエミ、見てるじゃないの」

「良いじゃないの、あれは、人間じゃないのよ。ペットだから気にしないで」

だが男の視線を意識しながらも浩子はいつしか二人だけの世界に落ち込んで行った。

この一晚、浩子は今迄の空白状態を完全に埋めつくすだけの刺激を受けた。だが、本当の意味での責めはこの後だった。我に返った浩子が恥しさに消え入りたような気持になっっている時、笑美子は男を柱から解き、代りに浩子を立ち姿で縛りつけた。浩子は魂が抜

けたように無抵抗で縄を受けた。一晚の不眠の責めも浩子の美しさに何らの変化も与えもしなかった。何時間責めを受けたことだろうか。外の光がさし込まない地下室では計り知ることが出来なかった。だが体に残る疲労感から推察しても決して短い時間ではないはずだ。そして浩子に対する最後の責めが今始まるうとしていた。

縄を解かれた男は、ペットから笑美子の夫に変わった。それはまるでSMの立場を変えたようだった。笑美子は男を迎えて自分から崩折れた。

今迄二人に鞭をふるった女とは思えない変りようだった。笑美子は女である。しかも女らしい女である。そこには夫と妻としての愛情だけがあつた。だが、浩子にとっては、それは地獄絵であった。目の前にくり拡げられる極彩色の責め、浩子は目を閉じた。しかし耳は閉じられぬ、目を閉じれば余計に大きな化物となって襲いかかってくる、浩子は声を挙げた。自分の声で笑美子の声を消そうとするように。

○

子供を抱いてプラットフォームに立つ夫婦を、浩子は少し離れた所からうらやましそう

に見ていた。手首の赤い跡を撫ぜながら自分
はあんな夫婦にはなれないかもしれないと思
った。だが、それを必ずしも不服には感じな

かった。明日は、いや、今日にでも伊豆さん
に電話をしてみようと思った。冷たい風が浩
子のふくよかな頬を撫でて行った。

それは既に春の気配を感じさせる程、ここ
ろよく肌に感ずるのだった。

(完)

☆特殊趣向の最新撮影フォト分譲品☆

ゴム衣とゴム猿轡

大手札三枚一組 略号△なと▽
木村 洋子

ゴム衣緊縛悶悦姿

大手札五枚一組 略号△なへ▽
木村 洋子

黒ゴム衣後手縛り

大手札三枚一組 略号△なほ▽
木村 洋子

首枷手枷に泣く女

大手札三枚一組 略号△みき▽
美木乃々子

六尺禪のはじらい

大手札五枚一組 略号△ふけ▽
横屋 峯子

双臂に喰い込む禪

大手札五枚一組 略号△ふく▽
横屋 峯子

前袋をさらす羞恥

大手札五枚一組 略号△ふか▽
横屋 峯子

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 略号△めあ▽
木村 洋子

足舐めをたのしむ

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子

足舐めを強要する

大手札四枚一組 略号△めく▽
木村 洋子

足舐め訓練の牝犬

大手札四枚一組 略号△めめ▽
木村 洋子

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 略号△めえ▽
木村 洋子

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 略号△あひ▽
一宮百合子

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 略号△あは▽
一宮百合子

足を縛られる快味

大手札三枚一組 略号△あふ▽
一宮百合子

生ゴムの猿くつわ

大手札四枚一組 略号△むこ▽
木村 洋子

白晒フンドシ着用

大手札四枚一組 略号△やに▽
一宮百合子

相撲マワシ着用

大手札四枚一組 略号△やは▽
一宮百合子

自刃血まみれ屍体

大手札十枚一組 略号△えめ▽
東浦ひかる

血まみれ女斗場面

大手札十二枚一組 略号△えみ▽
山原、東浦

浣腸とオシメ装着

大手札四枚一組 略号△ひそ▽
大塚 啓子

股間縛り恍惚表情集

大手札五枚一組 略号△るね▽
一宮百合子

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 略号△るえ▽
一宮百合子

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 略号△るそ▽
一宮百合子

逆エビ責め強烈縛り

大手札四枚一組 略号△るれ▽
一宮百合子

変型後手縛り麗美裸身

大手札七枚一組 略号△るた▽
一宮百合子

柔肌に喰い込む股間縛り

大手札五枚一組 六〇〇円

一宮百合子

股間縛り苦悶表情集

大手札五枚一組 略号△るり▽
一宮百合子

緊縛による悦虐表情集

大手札三枚一組 略号△るこ▽
一宮百合子

開股強烈股間縛り

大手札三枚一組 略号△るぬ▽
一宮百合子

緊縛感放心表情集

大手札五枚一組 略号△るわ▽
一宮百合子

マゾ夫人の悦虐表情

大手札三枚一組 略号△せや▽
関谷富佐子

後手吊り足挙げ縛り

大手札五枚一組 略号△うら▽
東浦ひかる

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 略号△うり▽
東浦ひかる

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 略号△うる▽
東浦ひかる

生理帯着用の責め

大手札五枚一組 略号△はん▽
東浦ひかる

草 然 徒 の 夜

ぐさ づれ つれ よる

〔奇譚雑談〕

中 宮 栄



【忙中閑なし】

三月号には『奇譚雑談』が載らなかった―
―載らないのではなく、投稿が締切日まで
間に合いそうにもなかったので送らなかった

のである。この事は私にとっては不面目の至
りであるが「何でエ、こんなつまらねえ事ば
かり書きやがって」と不快感すら抱いてい
た読者にとっては気が晴れた思いがして快哉

を叫んだかもしれない事だとも考える。

奇ク誌にはこういう読み物があってもいい
と考えて書き始めたからには意地でも毎月掲
載を果すべきであったが、年末年始の全く繁
雑な用事におおられて、只でさえ遅筆が更に
筆運びを鈍らせる事となった。忙中閑ありと
うそぶく訳にはいかなかったのである。

原稿を送付しない限り掲載はあり得ないの
だし、当然「贈呈・奇ク」など郵送されて来
る筈がない……と思っていた所へ三月号が届
いた。新宿へ出て今日あたり書店で奇クを買
い求めようと考えていた矢先の事である。

開いてみて目次の中にレギュラーだと自認
していた自分の名が見当らないのは正直に云
って矢張り淋しい……作家を志す人からよく
聞く話だが、編集子に依って埋め草のように
自作が扱われていたとしても活字になって現
われる事が無上に嬉しい、という気持が私に
もあったのである。

読者通信で、麒麟児久氏の御友情を得られ
た事も嬉しかった。「……内容にしても共鳴
するものが多く……」と私を感激させて下さ
った一節が励ましのようにも受け取れて、今
夜も雑文のペンをとっている。

【T茶房にて】

ペットとして誌友各位に紹介した邦子嬢は甚だ時間觀念に欠け、いつも待合せては一時間前後を無聊といらだちの交錯の中で過ごさなくてはならない。「今度遅れたら」「リンチ」「だぞ」と脅かしたのが効いたのか、一緒に日劇でショウでも観ようと云ったのが気に入ったのか、その日は誠にめずらしく定刻喜々として現われた。つい先達てまでは小さなテーブルを挟んでつくねんと相対する間柄であつたのが、過日の撮影で彼女のクレバスを見究めてからは、まるでできてしまった間柄同志のように平然と並びに腰かけて来る。

一階は外から見通しのT茶房では同伴喫茶の店内でのように、もたれかかったり腕まわしは出来ないが、それすらやってのけようとする程に大胆になって来た。恐らく「ホットボックス」といわれる彼女のプライベート・パーツを脚部V字の高吊りであばいた事が、コイタスを経た連繋のような錯覚、乃至は同価値的な心理影響を与えたのかもしれない、ベネトレート後の女人豹変を思わせる位の変わりようである——顔見知りの多いそこでは全く「困っちゃうナァ……」なのであるが、私も泰然と構えていた。

テーブルの上には例によってスナップ用の

カメラと、彼女に見せてやろうと思つて持つて来た二月号のKK誌がカバーをつけて置いてあつたが、それに目をつけるなり取り上げて、パラパラと頁を繰り始めた。自分の事が書かれたり写真が載つたかも知れないという初めての事柄に就いて彼女なりの関心がたかまっていたのであろうか。興味が先へ先へと駆立てるらしく却つて初回には見落してしまひ「あーら、いやだァ」と肘鉄を私に突当てながら歓声をあげたのは、二度目に丹念に見返えして行つた時である。彼女の感想としては、フフフとくすぐったげに笑つた事ではなささうであつた。

「君はきついきついと、大袈裟に悲鳴をあげたが、こうやって見ると案外平凡だろう。手なんか遊んでいるようだし……」

「あんな事云つてゐる。痺れて来る程、きつく縛ったくせに」

「君の体は肉がしまっているから、縄目の喰い込みが出来ないのかもしれないが、これじゃあ、どう見たって中途半端な緊縛だ。手加減しすぎてゐるようで真迫感に乏しい……これと見比べてご覧」

対比させるために私が見せたのは小竹氏の

『なめし皮』の二葉の提供フォト。彼女はさすがに厳しさの違いがのみ込めたらしかったが、同時に強い対抗意識が湧いたようで、その微妙な表情の変化にすかさず言葉を継ぐと次回のプレイではかなり容赦のないポーズでもいいという口約束を引き出せた。

ワンピースのファスナーに手をかけたただけでも小刻みに震えていた頃とくらべて、それは彼女の進歩であり、対抗意識を見せた事もいわば「飼育」が成功しているという判断にもなるのではないだろうか。

× × ×

その日は、ことによつたら……と、あらかじめ連絡をとつていた八王子に住むO氏が来るかも知れないという期待もあつた。O氏は△こんな物いかがVの私の記事を見て、いち早く問合せをして来られた人である。O氏程のプレイ・マニアを私は今まで見た事はない——夫婦プレイの実践者で徹底した小道具蒐集家。ありとあらゆる物品が、夫人の体へ試みられて記録フォトを残している。刺青の肉襦袢は、新しい刺戟をうむだろうと大層喜んで持ち帰られたが、その時、小脇に抱えて運んで来た氏のアルバムは、まさしく驚天動地の衝撃的な嗜虐フォトで飾られていた。

金物店の店主（社長）であるせいか、商売で扱う品物がいろいろ工夫され、多少の手直しを加えて責め具となり、ベビーサークルを檻に見立てた囲いのある部屋で、社長夫人でもあるO夫人が熱演している光景が記録されているのだが、氏の直々の補足説明によると、決して夫人に演技させているのではなく、「全て実際」なのだそうである。

夫人は生殺の権を剥奪された女奴隷のように檻に閉じ込められ、または引出されて責め続けられる——縄より鎖が好んで使われ、南京錠を幾つも使ったガンジガラメの『駿河問い』ヨガの行者ではあるまいに花用の針山をブラ・パットのようになてがわれてラワンの棚板で締め上げられた胸。金網で簀簾のようにされたものなど、どれを見ても夫人の表情には恍惚など窺われない。苦悶であり、恐怖からの絶叫である口の開き具合、苦痛に耐える脂汗の光る肌、呻吟の顔であった。その時はただただ恐れ入ってアルバムを閉じたのであったが、私には、過激な扱いを受ける夫人に惹かれる気持が芽生えた。

O氏とは一カ月半以上会っていない。私がペット嬢と待っている訳は、O氏も夫人同伴で来るという連絡だったからなのである。互

いに紹介し合い、場合によったら相互プレイの実現となるかもしれないのだ。但しペット嬢には目的も、協力も頼んではなかった。彼女が「この女と」というカメラ・ルポを熱心に読んでいた。逆さ吊りの写真の箇所では、いずれはこんなものも撮らしてくれと云うんでしようと言わんばかりに、私の顔を覗いて鼻先でからかうような笑いを見せた。

山本氏の手になるその挿入写真から、再びO氏のアルバムの作品を思い出した。よくぞカラーでプリントが出来たものだと内心感心させられたもの——緑色ペンキで塗られた金属製の脚立にO夫人が倒立して開股緊縛されているシーンである。シリーズ物にして纏められてある連続物の記録のうちでも、それは驚異であった。クリスマスで使ったキャンドル用の色染めの西洋ローソクで人間燭台にされた夫人は、燃え方といい、たれた泣蟬の量からいい、既に撮影されるまで長い時間放置されていたように見受けられたのである。埋めつくした赤い泣蟬は腹部から胸部へと滴り落ちて凍てついた氷柱のように固まり、充血した肩のあたりの肌の色と、吊り上げられた脚の膝あたりとは大分違っていた。十二枚の六六版密着プリントではさだかでないに

ても、外傷による出血を一時的におさえるために、血行を停めるようにする場合の限度といわれる時間を、はるかに超えているようにさえ思えた。

O夫人は典型的なマゾか、そうまでしても夫の愛情を引留めておきたいと希う弱い女性なのか……私には夫人の気持が解せない。私がいくらS好みだからといって、その嗜虐光景はペット嬢を使って再現してみる事は不可能である。真似られたものではない。私は急にO氏との交際の是非を考えておかなければいけないという気持になった。

× × ×

突然マイクでの呼び出しがあり、席を離れてレジの所まで行くと、O氏が夫人を同伴して立っていた。先導し席に戻ってから挨拶を交わし、互いのプレイ・パートナーを紹介し合ったのだが、O氏の視線は徹頭徹尾、邦子をとらえて放さない。鋭く覗き込んでいる目に若い娘を驚かすかのような異常な輝きを感じられ紹介されたからには直ぐにでも意のままになるかのように錯覚している気配すら感じられて、その場は不気味な雰囲気となった。自分がそうであるから、私もそうだろうとでも考えてか、夫人をよく見てやってくれと暗黙の



うちに云っているかのように腰のあたりを掌で押して私に近づける。

和装コートの下に何か仕掛けでも施してあるのか、それとも帯のタイコを捻っているだけなのか、俯向き加減だった夫人が伸びるように姿勢を正して来て目だけ深く伏せた。壁際に押し込められたように着席してからというものの、不思議な事に夫人は一言も話をしない。店への注文もすべて夫まかせ——傍目からは夫唱婦隨の典型のように仲睦じげな夫婦にも見えるのだが、話す相手の口許ばかりを

見るといふ癖のように思えた態度といい無口といい、尋常ではないことがO氏の続いての紹介で永解した。夫人は先天的聾啞という身体障害があったのである。

私の隣りから邦子嬢が化粧室へ立った隙にオーバーの内ポケットから「これが最近作です」と云いながら取出した数葉のフोट。その中でも夫人は声にならぬ救いを叫び、許しを乞う言葉をつぶやいているように口唇が開き、歪んでいた。倉庫か、閉店後の店の中なのか、雑然と商品や段ボール箱のある場所で

猪吊りの上にO氏の占有欲の象徴を菓子をつまむ平板金打抜きでこじ拡げられたりペリカンの嘴のようなヘアドライヤーの熱風を吹きつけられているカット等々、どう見ても「愛情ある行為」とは見受けられないのである。

『責め』とか『SMプレイ』とかの文字を誌上で捨うと、異性をいたぶる事にしても何かしらエロスのフォル・シュピールの感じとして映るのだが『拷問』となると、ぐっと重々しく、罪ある者への処罰を意味するように受け取られるのは、私だけの感覚なのであるか——O氏が『プレイ』だという事も、私には『拷問』のように響く。夫人に課す屈曲のポーズ、プレイの様々は過酷であり凄惨であり妄想のままに強いるO氏独自の耽溺であるそれは不具者に対する嫌悪から生れるところの衝動的な憎悪の具現と発散された凌辱の陶醉であるように思われた。

口をきかぬ妻への征服欲、遺恨感、自己誇示の安堵と、女として想う時の肉体への讚美とが混合された感情、更には不具者を扶養しているという優越感がO氏の暴君的サジステイックなエネルギー源なのである。夫人の側では「妻」であるという位置づけを死守せんがための盲目的な肉体奉仕であり順応であって、エンジョイしている風には思えなかった。とてもじゃないが私のセンス、今の次元では付合いきれない。不具者を嫌悪するとか偏見からでなく、O氏の希む交換プレイへ私のペットを利用するのは好ましくない。私は

努めてその話が持ち出されないようにした。同時に私の脳裏から羨望を消滅させる事にもなって、私の態度は賞讃と感嘆の技巧的追従となり、胸中では哀憐がとって変った。

折から新春興行として日比谷映画で封切中の洋画『続・黄金の七人』を観に行くのだと席を立ったO氏の目的が、ロッサナ・ポデスタ着用の黒のオールレザータイツに強い関心がある事も判って強いて引留めようともせず別れる事にしたのだが、きっと金にあかせてその模造を作り、やがては夫人に囚衣として応用されるのではないかと考えてみた。四馬孝氏好みの責め方が、今頃現実に行われているかもしれないのである。

促されて立った夫人のコートの袖口からのぞいていた手首のブレスレットが光ったのを見たが、それは蜷づけられていて絶対外されぬ鑑札の役目をしているのだろう——外出時に事故があった場合の身許を知らせる配慮からの物ではあるまい。明らかに夫人を隷属的境界に置いて悦虐している氏のマニア振りがうかがえた。夫人はそれを袖の中にかくそうとし、O氏は高笑いを残した。深々と頭を下げた夫人の憂い多き淋しげな顔を、M化を強いられている被飼育者の身上だからと感ずる

のは私の勝手な推量だったかも知れないが、O夫妻の取合せといい陰湿さは好感とはならず後味の悪さとして残った。

「いやーね」と隣りでペット嬢がつぶやいたが、その声には実感の籠った響きがあった。エロスの微笑から見放されたひとときであり、その日の残された時間も、ついに口の中の渋さは消えずに残ってしまったのである。

【提供フォト、あれこれ】

私をも含めて、奇クにフォトを提供する人は「私のパートナーは、こんな写真も撮らしてくれ」という自慢と紹介に終っているようだ。増田喜代司氏のように、自己のプライバシーを返上したかのように夫人を大ぴらに衆目に晒せる人は別として諸氏のものは『Mプレイ』とか『夫婦プレイ』といっても結局のところ夫人をモデルにした単なる緊縛写真の展示に過ぎないのではないかと思う。

ヌードフォトではつまらないから、縄という小道具を用いた、見た目の変化をつけた写真という事になり、全く心理描写がない。しかし、そこが難しいところかもしれない。審美の観賞のレベル、感覚的差異、いろいろな個性がある。亦、同一画面に男と女が写ってポーズしていたら、風紀上好ましくならざるも

のとしてチェックされるような物となる危険もあるかもしれない。判定の規準もまちまちであろうし、私が希望するようにファッションなのかモードなのかを、その提供者に求める事は難しいかも知れないが、少くとも、その場の雰囲気だけでも、もり込んだものをと願いたい。

新宮明夫氏の特異の分野は私の好みではないが、新宮夫妻のフォトには価値づけるものが存在している。私も卒先してペアでプレイのプロセスを記録し発表して行きたいと思っているので、今後実証的なプレイ・フォトが輩出して来るように望みたい。勿論これは『SMフォト』と謳った作品についてであり、項目別に細分してしまえという主義の意を汲んで下さって、紹介発表の際に『ポートレート』か『ムードフォト』か『ルポルタージュ』か『キャンディッド』か——作意を明確にしておかれたら、視覚言語としての『写真』利用が発揮されると考えるのだが……如何なものか。

チヨロ・スナのフォトを得意がって発表していたのでは意味がない。探究、追究、究明の試みであり結果が価値であり、文献的意義である。その場合商業写真ではないのだから

必ずしも鮮明、露骨な描破は要求しなくていい。写真処理の巧緻、稚拙は問題にされず、如何に歓喜を他人に伝えるかが必須である。

【ヘアピン・ページ】

キング・サイズとか国際版型とか云って、そこにも舶来模倣の精神がのぞく大型化した婦人・女性雑誌の数々。その中によく勿体ぶった『シークレット・ページ』にされた特集記事が載る。

迎春特大号と称されて発売の一月九日号の「女性自身」には（何と大形な事か）／＼男性の性をあばく10の知恵／＼という差込みが。婦

人生活一月号には「女性のための『マスターズ報告』ダイジェスト」がお目見得である。

こうした無断裁の頁が女性諸雑誌の購読欲をそそる手法として用い出されてから日は浅いが、急速に活用され特色づけられて来た。この事は、女性のセックスに寄せる関心が昂ったせいだとも楽しむということの新しい知恵の開発が、つまるところセックスにしか残されていないと見る傾向が顕著になった風潮の反映とも受けとられる。しかしこれらの教養・啓蒙記事が可及的すみやかに浸透をみせて女性が向上するとも風俗にエポックを

劃する事になるとも思えない。

女が気安く入手して他愛なく読めるY本的要素の恋愛生理の教科書なのである。ヘアピンで開くという好奇心を満たして歓心を買うだけのサービスは、一方ではマリッジ・カウンセラー連中のPRとなつて副収入の途をあけているに過ぎないが、そうケナス事ばかり云わず知恵を用いれば、これらの記事は男性側にとっても興味ある読物であり咀しゃく如何んによつて、女性牽制用にも開発用にも制用出来る。堅いサラリーマン向週刊誌ばかり読まず、時には女性雑誌を買って御覧になることも奨励しておきたい。

例えば前記の「正体あばき」をしているヘアピン読物の中で「なぜ男性はさまざまな体位を要求するのか」という項目があるが、『衆道秘伝』からの引用で高橋鉄氏が解説しているのを学んで「なぜ男性はさまざまな女性緊縛フォトに熱中し撮りたがるのか」と質疑形態を変えてみた場合に、パートナー探しや口説きの手引になりそうである。女性向きの心理分析による男の欲望の解明を、逆手に応用してみるのも楽しさう。

◎本誌増頁に際し◎

懸賞 原稿募集

▽内容△

一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい作品を期待します。

一、S並にMは勿論のこと、フュテッショ各種、女性切腹、男性切腹、女斗美、女相撲、男女性禪美、生首狂崇、妊婦嗜好、変装、見世物奇態珍聞、文献紹介、同性愛、等はじめ、その他特異風俗に関する件全般に亘り、広範囲に大いに新分野の開拓による力作の御寄稿をお待ちしております。

一、本誌に從來余り取り上げていない分野のもの、特に大歓迎いたします。

一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験による告白や手記も結構です。更に、論説、意見、エッセイ

▽規定△

感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、最もお得意とするものをお選び下さい。

一、作品はすべて未発表の自作作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は特別に制限いたしません。一回の掲載量は五十枚前後として下さい。

一、締切日は毎月十五日。入選の分は次号誌上に掲載発表いたします。

一、入選作品に対しては一篇につき二千元以上十万円迄の賞金を進呈いたします。

一、御投稿の原稿に特別の事情なき限り返戻のお求めには応じかねます。

一、宛先は阿倍野局私書箱第14号天星社。懸賞と第一頁に添記願います。

■

■

■

■



○ 私がキクを最初に読んだのは三十二年の春です。早いものです。願ってみるとキクの歩んだ道と私の歩んだ道とは平行している様です。その頃の分厚い内容も今のキクにくらべると問題にならないものがあります。毎月本屋さんか貴社にて求めました。白い表紙の本になってからがっかりして半年程休んだことがありました。この十年間の愛読者として言わして頂く

なら、最近のキクの切腹記事はまことに低調です。私は切腹マニアです。何もかくすことはありません。最初十年前にみた本のグラビアにお腰一枚の女性が、今まさに切腹しようとしている写真が私の本能をゆり動かししました。それより以前、私の少年期の頃のことです。家人の留守中の事、私はタンスの中から赤いお腰一枚を取り出して（私の姉は村一番の美人でした）みている中に知らず知らずの中、腰に巻きつけていました。私は女装ではなく只赤いお腰とか湯文字、すそよけにひかれるのでした。誰もいない部屋の中でお腰をつけてその姿を鏡にうつしていました。昔から家に伝わる短刀のあつことに気づき、取り出してみますと、よく光っています。お腰にすりつぶしてありました。お腰についている白いサラシの部分に短刀に巻きつけて下腹にグサリと突立てる仕草をしてみました。刃先がチクリと肌に当る感触はマニアならではわからないと思います。夢中になっていくとき、突然サラリとふすまが開いて姉が入ってきました。二人共アッと云ったのを覚えています。腰に巻いたお腰を取

と、姉の方がぴしゃりとふすまを閉めて、「早くしまいなさい」と云いました。あわててズボンをはき終ったとき、姉が入ってきました。姉はやさしく「誰にも言わないから心配しなさんな」と言いながら自分でお腰を取上げろがっている短刀を鞘におさめて「誰にも言わないから言ってごらん、どうして私のお腰なんかつけて切腹していたの」と、尋ねられて困ったことがありました。姉が二十四才、私が十八才の事、まだキクのキの字も知らなかった頃の事です。それから半年位して姉は嫁に行きました。その後よく私はタンスから短刀を持ち出すとよく女を買いに町に出ました。「馬鹿ネ、あんた。切腹なんかしたら死んでしまうよ」と何度か女に叱られながら、六人目位だったか、「いいわ、坊や、切腹したげるからね」と私の目の前で立膝をして赤いお腰一枚の姿で色々な切腹のポーズをとってくれました。半年程その明美と呼ぶ女に通いました。今から考えると、その女も切腹マニアでなかったかと思えます。最近エロダクシヨンの映画「金色の肌」で三原葉子が着物の前を思いきり開いて赤いお腰もと下腹を真一

文字に切る切腹シーンが約五分間あります。監督は小森白。ばつたりと前のめりに倒れて、「切腹、くるるしい」とせりふ迄入れてスクリーン一杯に写っている。絹川さんに長襦袢赤い腰巻をつけさせて、お腰の上からぶすつとやる直前のものを、カラーで撮って下さい。（福井県大野郡・富武抄）

○ 藤村美香様。貴女のお手紙を拝見し、早速ペンを取りました。私が奇クを読み初めて今年で三年目です。二度程読者通信に投稿致しました。しかし実は実りませんでした。貴女のお手紙の内容では貴女は孤独な方の様に思われます。私も中学生の頃級友に、「貴方は孤独だな」と云われた事があります。デカルトではないけれども我思うに、私は、自分は「現代にないマッチしない古い人間」と考えております。（少し大袈裟かな？）今まで一度も、バーやキャバレーダンスホールは行った事はなく、忘年会、新年会で飲む程度、それもその場で終り、二次、三次は行った事がありません。たまに月に一、二度映画を観る程度です。職場の友は私を前に置いてこう云います。「ヤツは酒も飲まないし、

遊びもしない、金が溜ってこまるだろ、どうするんだ？」と。その場は適当に返事をします。勿論、必要でないお金は預金をしていきます。そうして私の目的を達成する為に使っています。それは、結婚するまでに、全国を旅行する事です。昨年は十月一日〜七日まで、安芸の宮島、姫路城、天の橋立と観光旅行をしました。松島は前々年見たので、日本三景は一応終りました。その際カメラ、望遠レンズ、三脚等を買いました。今年には九州へ行こうと思っています。写真代だけで四千円程かかりました。カラーが多かったせいも有ります。白黒の方は自分で致しますので大してかからなかったです。趣味はSを初め、旅行、写真、木工、工作、模型工作等です。自分でステレオを組立てました。勿論製品メーカーは色々です。夜など一人でレコードを聞くのもいいものです。LPも十枚程たまりました。ステレオの上には模型の船が有ります。まあまあ出来です。貴女にお見せ出来ないのが残念です。もう一つ残念な事は、私のSに対するM女性私の身辺にいない事です。責めの内容を考えても実現が出来ません。北海道には

M的女性はいないものかといつも考えております。私が誠実で紳士的な人間であるかどうかは貴女の判断にお任せして、貴女が私を認めて下さるならば、貴女とぜひお会いしたいと思えます。くわしくは貴女の御返事をいただいてから又連絡致しますので、よろしくお願い致します。お元気でさようなら。(札幌市・海後普三)

奇ク十年余の読者ですが、初めてこの欄にペンを執る気持ちになりました。と申しますのは、戦後十二年、泰平がつづくと同時に私の事業も安定しいつかは癒えると思っていました。恥しい病癖がますます募ってまいったからです。小生四十二才、小さな町工場を経営している者ですが、病癖と申すのは他でもなく、美しい女主人に仕えたいというはげしい気持です。といても小生のばあい、単にM：と片付けられない特殊性があるのです。それは相手の女性が、高貴な雅びやかな、そして冷たい容貌の方でない困るのです。もしその方の御出生が、旧貴族か旧華族の血をひいていられたら申し分ありません。思えば戦争末期、学生時代軍需工場に動員されたとき、さる宮様のお姫様と邂逅し、その護衛を上部から命令されたことがありました。当時六尺二寸、甘貫、柔道四段、剣道三段の小生は欣んでこのボディガードをつとめました。お姫さまは疎開されていたわけですが、大変我侘な方でした。終戦となるまでわずか一年

余のことでしたが、ここからお仕えた感動は今でも忘れませんが食糧事情の窮迫したころでしたがお姫さまの食膳は山海の珍味が盛られ、ときどき残飯を賜ったことでもあります。実はその強烈な記憶のため、未だに人並な幸福が掴めないのです。どなたか本誌の読

☆最新撮影総天然色カラー・プリント写真分譲品☆

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てき▽

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てか▽

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てく▽

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てこ▽

後手高小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てま▽

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号△てみ▽

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号△てめ▽

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号△ても▽

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号△てん▽

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号△てる▽

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号△うお▽

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦 啓子 略号△うて▽

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△うこ▽

者のなかで、こうした奉仕の対象となられる高貴なお方はございませんでしょか。お手紙の交換だけでも結構ですが、万一、日曜などご身辺の掃除や食事の世話、洗濯などさせていただければ光栄です。もっとも小生のばあい、縛られたり鞭うたれたりするのは、そういうご趣味のお方なら仕方がありませんが余り好まない方です。ということとは相手の方から軽蔑され、黙殺されることに無上の欣びを覚えるからです。なおこれは大変畏れおおいことで、ペンにするのとはばかることですが、小生の今もっているひとつの夢をかきます。それは小生が停年に達したら是非、某宮さまの雑役夫に雇っていただくことです。こういうばあい身分調査をされますが、幸い小生はずっと昔から皇室崇拝主義者で、今でも宮城と東京御所には絶対足を向けて寝ませんし、両陛下と両殿下のご真影は事務所に奉置し、毎週月曜の朝工員全体にご挨拶させています。はなしが横道に逸れましたが広い世間にはこうした小生の渴仰の対象となられるBGの方や若奥さまもいらっしゃるかと存じます。ことに丸ノ内あたりにお勤めの高級BGの方は

お部屋の掃除や、洗濯に日曜の貴重な朝を浪費されると存じますがそれを小生にさせていただけませんか。もちろん無料ですから世のますらお派出夫と異なりますし、ご尊敬できる方でしたら生涯、お仕え致します。(埼玉県蕨市・蛭川周造)

初めてお便りします。僕は市内の某付属病院に勤める二十九才の医師のはしくれです。僕のSMへの興味は、京都での学生時代に遡ります。生来の孤独癖から自己嫌悪に陥り、閉鎖的性格が強くなり、そうしたコンプレックスに悩み苦んだ一時期がありました。そんな頃、本屋の店先で偶然手にしたマニア雑誌に関心を持ち若い女性の責めの図を勝手に空想して自ら慰めておりました。こうして僕のSMに対する関心度は高くなってきましたが、唯、医師の末席をけがしている人間であるという社会的意識の故に、自制してきたのに過ぎず、そうした私の性向は現在に至るまで変わりません。私と人間、従って性欲旺盛な動物ですから、時には医師という足かせを取りはずして、本来の裸のままの人間に返りたく感ずるときもありま

す。全てを忘れてSMについて語り合い、又プレイを楽しむ事が出来たら、どんなに素晴らしい事でしょう。女性の中でもMの性向の方々、僕とお逢い下さいませんか。僕自身プレイの経験は少くマニアとしての考え方も又未熟です。女性である貴女方は唯女性であるという社会的足かせの故にM(又はSの)の感情を具象化出来ず悩んでいらっしゃるのではないでしょう。か。女子学生の貴女、OLの貴女、その他諸々のお仕事にある貴女とSMについて語り合い、プレイに育て上げてゆきたいと願うものです。私も一応社会的地位にある身ですから、絶対にプライバシーの守れる方でないといひます。勿論貴女の秘密は固く守ります。貴女のお便りをお待ちしております。(名古屋・ドクターH)

○ 団鬼六先生のシナリオ「縄と乳房」はシナリオ「花と蛇」と違ったよさがありました。感謝いたします。映画を見るにも、とても参考になり、多くの人がこのシナリオを読んで益々映画を見たくなくでしょう。シナリオ、毎月でなくとも、たまには載せて下さい。

木村洋子強烈緊縛写真

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△きむ▽

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△きま▽

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△きみ▽

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△きめ▽

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△きも▽

団先生のシナリオ大歓迎。緊縛映画「燃える剣」「激痛」「女高生ジャングル」「怪竜大決戦」洋画「脱走特急」実演・東京カジバシ座「拷問」上演中、読者の方が又書いてくれることでしよう。暇なときに書いて送りましょう。(神奈川・春風春太郎)

○ 私は大のKKの愛読者です。ですから私達の希望もかなえてやって下さい。それは女と女の組敷きの写真特集号です。これは必ず当ると思います。人間は常に新しいものへ憧れます。いつまでも同じ写真ばかりではあきられてしまいます。たまには変わった事もいいと思います。又、鼻責めの写真、女が女に組み敷かれる迄の順序を追ったプレイ写真。年増の女が若い女に馬のりにされるとか、瘦せた

美人が肥えた女に組み敷かれる所又、二人の女に組み敷かれる女。一人が鼻をつまんで一人が馬乗りになっている所。又は十一月号にのっていた読者欄に、外人の女との組み敷き場面（これはちょっと無理ですね）又、外人の女と日本の女の縛りのプレイ、外人の女が縛り上げられ、鼻をつままれていく所又はその反対。とに角組み敷かれる、鼻を責める特集号を一日も早く作成してほしい。爆発的人気間違いのないと思います。ぜひ

☆一宮百合子△総天然色▽緊縛写真☆

可愛い小悪魔一宮百合子情ピチピチとした若々しい肢体に厳しく掛かる縄目と悶える表のそのまにあらわすカラプリントによる美しいフォト。

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るむ▽

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るの▽

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るお▽

真紅の腰巻姿緊縛

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま▽

羞らしいの正面縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るけ▽

若肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るふ▽

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや▽

お願いします。

（豊橋市・川上与吾）

○ 二月号に掲載されました須磨御夫妻には誠に感動しました。私達夫婦と全く同じにて、自分の事のように感じました。私もキク十年以上の愛読者にて、結婚以来六年になります。妻も二年程前から積極的にになり出し、今では私の方がたじの体です。キク誌上に出る程勇気もなく夫婦二人にて週に一回程の割にて、プレイを致しており夫婦仲も益々良好で、一般に言われている倦怠期などは知りません。三月号の鈴木美津子様、お便り下さい。所はキクの方へ出しております。又御迷惑は絶対に心配ありません。キクの方も今後共どんな夫婦プレイ・ハントをお願いいたします。全国の夫婦プレイ愛好者の皆様の御健闘を祈ります。

（神戸・田中真佐夫）

○ 増田みゆき様には無事御安産の由心からお祝い申し上げます。それにしても千載一遇のチャンスを与えられて御同慶の至りに存じます。中河恵子嬢、大島照代さんと美しいモデルさんが次々と現われ

○ 応接にいとまなしという有様ですね。今後共御健闘の程祈り上げます。今年は一層充実した本誌を大いに期待してペンをおきます。

（京都・洛北生）

○ 三月号での黒田寿様の「酷連処刑大会」（女斗篇）は全くすばらしいものでした。美女の血汐の香が誌面からも漂ってくるよう、しばし美女血斗の血みどろ模様を空想して酔っていました。それに添えられていた前川様の絵も見事で美女の生首串刺しの図は、生首絵の中でも、とくにすばらしいものでした。私は私なりに、眼前に展開される美女の血みどろ模様と、ふんどし一丁の裸女のそれにして空想に浸っていたわけで、前川様にお願いたしたことは、もう一度氏の麗筆によって、ふんどし一丁の裸女の生首、無惨絵模様を描いていただきたいものです。黒田様の今度の作品を見て、小生のふんどし裸女血斗模様も色あせて光を失ってしまうようです。没になったのも当然と思います。しかし黒田様の通信によれば一年後に採用ということもある由、ほのかな希望をつないでおります。仕事のため一月から東京住いです。仙

て下さい。刺戟は最高です。又グリセリンを45度Cにあため、50%液を浣腸してみして下さい。冷たい時より、お通じがよくつきます。注入する時も冷たい液より気持がよいようです。(二)グリセリンより強い浣腸液は私の経験から武田のトナン浣腸液でしょう。五〇〇ccで二百円ぐらいです。これも30cc浣腸器で倍にうすめたものを20cc浣腸いたします。でも、あなたの体質では30ccは浣腸できるでしょう。刺戟はあります。強いです。笠井さん、お試しになっては如何ですか。又それで駄目でしたら、高圧浣腸をかけてみて下さい。アメリカンドラッグに行きますと、ゴムの素晴らしいイルリガートル浣腸器がありますから、これは女性用のものにも、又直腸にも使用出来る便利なものです。その先に肛門用カテーテルをつけ、二米ぐらいの高さから浣腸します。液は石鹼水でいいです。(三)マニアの会については、私はお答えしたくてもそのような会があるのは存じません。奇クを通じてよいお友達を見つけるとよいと思いますが、いかが? 私は川崎に勤めておりますが、私自身あなたにお聞きしたいところがあります。よろしく。(東京

・新井克美

麟麒児久氏へ、三月号のお便りたしかに拝見、ほくとしては、過大に貴兄をほめたのではなく、本当にそう信じ期待しているのです。ただ、そのことで貴兄が創作的にあせていることは、スミマセン貴兄が常日頃、信条としていられる発言は、近頃の本誌上の編集面に大分、反映しているとはくは見る。もう一步という所で、助けてくれ”とは、大衆席の野武士然たる貴兄らしからぬこと。SM—大衆性。これこそ、貴兄の持味です。エロっぱさ、大いに結構。どだいエロのきらいな人間は話にならぬボクネンジンだ。創作するその姿勢に八こわさVができれば本物です。これからの貴兄は、きっと大衆ファンを満足させるに足る作品が書ける。あせるな、じっくりと腰を落着けて——。きっとよいものができるよ。いつまでも、期待し、見守っています。ガンバレ、祈る。(夜乃探郎)

「花と蛇」は前半を読みましたので又その続きを見ることが出来、おどろき又喜ぶ次第です。後半ますます素晴らしくなりつつある様です。十月号はまだか、まだか、と勝手にお願いしたので、やはりダメかと半ばあきらめていた所でしたので、そのうれしさは又格別でした。つきましては、又無理なお願いばかりするのですが、花と蛇のすばらしさを読むにつけ、今迄の分の全部い、や半分だけでも読みたくて、矢もたてもたまりません。「花と蛇」の一ファンとしてお願いします。(在北米・K・KAWANISI)

はじめにお便り差し上げます。私は中学校を出てから、家が貧しいためすぐ大阪へ出て紡績工場へ勤めておりましたが、友達とけんかしてからそこを止め、今、飲み屋の手伝いをしております。紡績で働いていたときは寮にいましたが、今は住込みです。一度飲食店の主人が私にお金をごま化したと罪をおぼせましたので止めました。あとで計算違いとわかってあやまったのですが、もう私はそこにいる気がしませんので止めました。今のところ、お手当ては、月にほんのお小使い程度なので、お客さんからのチップをあてにするのですが、場末の一パイ飲み屋なので、余り貰いも多くありません。御誌は、一年ほど前、近くの古本屋で見つけて、それから毎月見るようになりました。ずっと以前の方も、とびとびにその本屋であるときに見つけて見ました。今の自分の気持ちにぴったりのことが書いてある本だということがかわたりうれしく思いました。紡績を止める頃から、私の心の中にそんな気持ちめばえてきたのだと思います。寮にいた頃、友達にいいめられたり、寮を出て、みすばらしい

うどん屋を探してやとってもらい主人やおかみさんに追い使われ、だんだんと内政していったのだと思います。今はお酒を飲む人が相手て陽気ですが、店が開くまでの時間を天王寺公園のベンチなどで一人で腰かけていると、この私を本にのっているようにいじめてくれないかな、などと思ったりします。でも、私は少しも魅力的ではないので、きっと誰も相手にはしてくれないでしょう。お客さんの中には、悪ふざけをしたり、からかったり、冗談をいったりする人もありますが、私のことを本当に心にかけてくれる人はありません。それでこの頃、本にのっている女の人が沢山ありますので、私も仲間入りさせてほしいと思います。先にも申し上げましたように、私は決して男の人にとって魅力はないと思います。器量もよくないしお化粧も下手です。洋服も靴もいものは持っていない。只、縛られたり責められたりすることだけは、誰にも負けず出来ると思います。話をすることも下手です。できっと失望されると思いますがもし私のような者でも使いものになるようでしたら、ひとつよろしく願います。幸い、私はいつ

でも好きなときに休めますし、午前中でしたら毎日自由に出られます。色よいお返事をおまちします
(大阪府・神崎文子)

私はよく冥想にふける。と云うと、いかにもロマンティックに聞えるが他人が私の脳ミソをノゾイたら「H」と顔をしかめるような代物である。そんな享樂的な冥想に出て来る主人公は無論美女。ピチピチした学生、OL或は艶々した人妻や結婚準備の為に全身をくまなく美容師の前にさらしているお嬢さん。彼女達はその機に應じて私の頭の中に登場し舞台も変わるある若妻は一寸したカゼで隣家の奥様に紹介された女医にかかり、その奥様の眼前で服をぬぎ、胸もあらわに診察を受け、女医の巧みな「手さばき」に燃え、悶え、パソティを脱がされて終いには浣腸される。次には、いつも会社で美人でしょ「なんて顔をしているOLが引き出され、同僚にシバラレ、いたぶられ、そして、お前も普通の女だと笑われる。しかし文才のない私の事だ、物語も単純でモデルは大抵KKから取る。特に「花と蛇」などは絶好のエモノだけれどいつまでも、頭の中の世界で

増田みゆき双胎臨月蛙腹

大手札印画紙極鮮明焼付

〔双胎臨月蛙腹鑑賞〕 五〇〇円 略号△りけ▽

増田みゆき 〔明瞭な臨月の妊娠線〕 五〇〇円 略号△りき▽

増田みゆき 〔全裸の臨月腹鑑賞〕 五〇〇円 略号△りす▽

増田みゆき 〔双胎臨月腹の威容〕 五〇〇円 略号△りて▽

増田みゆき 〔垂れた太鼓腹の陳列〕 五〇〇円 略号△りな▽

増田みゆき 〔臨月蛙腹のアップ〕 五〇〇円 略号△りに▽

増田みゆき 〔便々たる臨月蛙腹〕 五〇〇円 略号△りに▽

増田みゆき 〔蛙腹に腹帯をする〕 五〇〇円 略号△りに▽

増田みゆき 〔誇示する双生児腹〕 五〇〇円 略号△りま▽

増田みゆき 〔仰臥する臨月の蛙腹〕 五〇〇円 略号△りね▽

増田みゆき 〔臨月腹の股間しぼり〕 五〇〇円 略号△りぬ▽

増田みゆき 〔亀甲縛りの妊孕美〕 五〇〇円 略号△りた▽

増田みゆき 〔臨月後手縛り引き回し〕 五〇〇円 略号△りし▽

増田みゆき 〔臨月の乳房縛りで弄る〕 五〇〇円 略号△りさ▽

増田みゆき 〔乳房緊縛の臨月腹〕 五〇〇円 略号△りち▽

増田みゆき 〔浣腸される臨月妊婦〕 四〇〇円 略号△りひ▽

増田みゆき 〔双胎の臨月剥玉子腹〕 五〇〇円 略号△りふ▽

増田みゆき 〔臨月妊婦豆絞りの猿ぐつわ〕 五〇〇円 略号△りの▽

増田みゆき 〔臨月腹に革具装着〕 五〇〇円 略号△りむ▽

はつまらない。一度でも良いから自分で体験したい。近辺の女性の方でこのつたない物語の如く恥ずかしめられたく思う方はいらっし

やいませんか。私は当地の会社員身長は一七五センチ、体重六〇キロ、独身の二十七才。(川崎市・山崎フサオ)

○ 新しい年を迎えたかと思つたのも束の間、早や一カ月が過ぎようとしていますが、奇ク誌が益々躍進されるのは、心強い限りです。

殊に緊縛の女体を中心に、若鮎の如き美しい女性を次々と登場させ全身刺青の山原清子を、昨年末には双胎妊婦裸像の又と得がたいフオート、ピチピチとした若さをふりまく中河恵子嬢。マゾに徹して真摯なポーズを開陳する大島照代夫人と、これ以上望めないという傑作を提示され、この上ない喜びであります。殊に今回、御送付頂きました増田みゆきさんの妊婦フオートは貴重な資料として、毎日のように手にして鑑賞させて頂いたたいしております。増田さんのカラー妊婦フオートの鮮明な双胎腹の威大さには、つくづく感じいりました。こんなすばらしいフオートは又とあるでしょうか。目の前に見る双胎腹、手にとって眺めている以上の迫力が私の胸をわくわくさせています。これは文献的に見ても、作品の出来ばえから見ても最高の傑作といつてよいでしょう。増田夫人に心から感謝いたします。(大阪・高井田直)

○ 福田久文様。いつも御懇切なお言葉を頂き恐縮で御座います。何分にも生れて始めてペンを取り、大胆にも小説らしい形のものに取り組んで見たものの、意乏しく筆字になりましても、いつも冷汗三斗の思いを致しております。大先輩である大兄の激励は、そんな私には千万の援軍以上の喜びで御座います。ここ数カ月、大兄の名に接せず不安を感じていましたが、三月号で依然として情感溢れる御作を拝見、感嘆致しますと共に安堵の胸を撫でました。立ち入った事を申して失礼かとも存じますが環境に御不満の様子、人間万事塞翁が馬、日日是好日と達観されま

す事を心より祈ります。山波圭介様。「宴の館」興味深く拝読しました。確しか「メール」のナチス慰安所の翻案と推察致しますが、大兄の麗筆で又、異った雰囲気が出て感服致しました。不振のM派の為、今後の御健筆を期待致します。夜乃探郎様。M派への御加入有難う御座います。いえいえ、決して孔雀の羽根を着けた鳥などとは思いません。貴兄のデリケートでウィットに富んだカラーフルな筆致は、断じて粗暴なSものでは

御座いませぬ。信じて下さい。神よ、この迷える小羊を導き給え。優しきマリあの顔ばせと、メジチ家の淫虐の血を伝える美女の手に彼を投げ与え給え。Sの虚妄の世目醒めさせ給え。全能なる神は讃うべきかな。ハレルヤ！芳野眉美様。「水中花」いよいよ佳境に入り毎月が待ち遠しい思いです。いつも感じる事です、氏の麗筆にかかると、どうしてMの世界がこんなに優雅な装いを見せるのでしょうか。私にはまるで奇跡のようによろしく思われます。三原寛様。奇ク誌でM派殆んど全滅と思わる時にも、大兄だけが悠然と健筆を振るっていただける事は私には何よりの救いでした。力強い男性的な描写は、体験派の強味と見るのは失礼でしょうか。お願いしたい事は只一つ、是非共、長篇の傑作を拝見したい事です。団鬼六様。鬼六談義は私達には全く未知の世界の話で、いつも興味深く拝読しています。中でも二月号の「三文羞恥論」は私に深い感銘を与えました。第一は街の娼婦が無理矢理に浣腸を施されて「イケ好カネエ奴。オラ、頭ニキチャッタ」と喚く話。私は笑ひ出すと共に、何やら塩っぱいものがこみ上げて顔が硬わばるのを覚えてきました。憧れの都会へ出て来たものの、運命の女神は彼女の上に微笑まず、遂に娼婦に身を落したのであろう彼女が浣腸などと彼女には想像を絶する奇怪な暴力に屈しながら喚き続けるその声は、苛酷な運命に対する精一杯の反抗とも聞えて、私の胸を締めつけるのです。眼帯をかけた小柄なこの娼婦の上に幸せの日は訪れん事を祈らずにはいられません。近頃珍らしく感動を受けた挿話でした。第二はピンク女優(こんな言葉を使つて済みません。ピンクの女王様)の中に、本当のサディスティンが居て、美少年を苛めたり、男を責める映画への出演を希望する話。サディスティンは私達の夢の中にしか居ないのだと諦めかけている私に、一道の光明と希望を与えてくれました。願わくば、団氏の麗筆を以て彼女達の体験を語らせて下さい。人生に希望を得たM派の徒はどんなに喜ぶ事でしょう。それにつけてもピンク女優が男を責める映画を作っても商売にならないとは悲しい話でした。でも本当でしょうか。一度M派の監督に徹底的に女性を美化し讃美する映画を作つて頂けないも

◎代理部分譲品総目録◎ 予約受付

分譲品満載の豪華な目録を只今の上、御予約下されば、完成次第作成中です。切手五十円同封直ちにお送りします。

のでしょうか。スクリーンを横行闊歩する美女を讚美しない男は、この世に居ないと思います。それからお願いが一つ。女優さんは出来る限り美しく撮影してあげて下さい。五社の女優さんは、ファンの夢を破らぬよう美しい上にも美しく見せるよう細心の注意が払われるそうですが、ピンク女優の皆さんはそれとは逆に、無難作なカメラ操作で実物以下に再現されているのではないのでしょうか。同じベッドシーンでも、私共とは別の世界のような美女なればこそ、一つのイメージとして見過ごせませんが、私共の周囲に身近いような女がスクリーンに再現されて、猛烈なベッドシーンを展開すれば、これはもう別の世界では無く、生々しいリアリティを以て迫ってくるのでは無いでしょうか。映倫のお偉い方も案外この実感に神経を尖らせているのではありませんかどうも素人の私が生意気な事を申しましたが、これはピンク映画を見ながらいつも感じている所で御

座います。妄言お許し下さい。最後にM派の皆様。特に読者の中に多数居られるであろう未だペンを取られないM派の皆さん、どうか勇敢に貴方のイメージを発表して下さい。編集子もMの徒のイメージの多様性に驚いていられますが、複雑にして微妙なM派の夢が本誌を独占する程発表されれば、どんなに楽しい事でしょう。最後に小説現代で円地文子女史との対談の中の河盛好蔵氏の言葉をM派の皆様は捧げます。小説というものは、美しい悪女が大の男をコテンコテンにやつつけるから面白いので、女が下らぬ男達に苦しめられる話程、つまらないものは無い」(神戸・河津安春)

りませんし、三年前までは、MSという言葉はもちろん、意味は知りませんでした。しかし子供の時から女性の足と縛りには興味をもっていたようです。この手紙を出すのも何回も書いてはいざ出す時になると、不安とはずかしい気持ちでしたが、先だってやめてしまいました。しかし、いつもやめた後で後悔していました。それで今回は思い切って出すことにしました。僕は身体に自信がありません。自分の好みといってもよくわかりません。が女性の足や縛られる事に興味があるように思います。(大阪・和海生)

の世の最も至高な行為ではなからうか、それは最も美しく、最も官能的であり「つまみ」と「ばつ」に於ける人間性の本質的世界であると思ふようになります。僕は思ひわづらった若き頃を偲び、貴女とどうしてもお逢いたくありません。僕は三十八才、名古屋在住の会社員で二児の父親でもあります。若き貴女と真面目に誠実に交際致したく、来る一月十九日正午から小牧インター出口付近にてネズミ色のパブリカ、アンテナに白い目印をつけ(眼鏡をかけています)ていますから「佐藤さんですか」と言葉をかけて下さい。どうか心からお逢い出来ることを祈ります。「名古屋・佐藤繁」

中河恵子様、貴女の読者通信を拝見しました。そして過ぎし青春の日々を懐しく想い起してしまいました。貴女は二十才……。僕もその頃初めて自分の体内にSの血が流れていることを意識した年頃でした。そしてドストエフスキの「罪と罰」トルストイの「復活」ダンテの「神曲」等を愛読した年頃でもありました。若き精神はわが身にひそむ背徳の血におびえ苦しんだものでした。以来、長ずるに及びSMプレイこそ、こ

奇く愛読者の皆さん今日は。私は十年來の奇クファンS派の男性です。読者通信をかかさず読んで居ますがM女性の投稿に対してS男性の方々の呼び掛けがさかんですが、私の想像する処、おそらくプレイはおろかお会いになつて御話もなかなか出来ない事と存じます。S派男性諸君に取っては、誠に残念な事で、毎日悶々の日をお越しの事と思います。勿論M女性に取っても無理からぬ事で投稿はさ

れたものの見ず知らずの男性をなかなか信用出来ないのは当然の事で、なかなかプレイに至るまでには困難かと存じます。私も一度M女性に呼び掛けましたが失敗に終わりました。M女性の方々、私たちS派の男性はすぐプレイをしたいとは申しません。お会いして色々お話だけでもしたいのです。私たちS男性は皆なサラリーマンに商業に、農、工業に従事する善良なる人々と信じます。全部がそうとは申しませんが、只女性を縛るという事は少し犯罪的な臭いがせぬものでもありませんが、あくまでこれはプレイで、私たちの楽しい趣味のお芝居なのです。そこで愚案とは存じますが、奇ク編集部の方々にお願いがあるのですが、奇クの名前の通り奇譚クラブを作って戴けませんか。会員制にして入会金を取られ、時々奇クモデルか、奇クファンのM女性のプレイ会や座談会等を開いて戴ければ、私たちファンのこれに過ぎる幸福はご座居ません。なお入会金等は勝手なお願いですが我々ファンの為、なるべく安くして戴いて参千円ぐらい。プレイ会等を開かれる時は、その時に応じてきめて戴ければと思います。クラブを作っ

戴ければS男性同志の交流も出来又M女性ともお友達になれるのではないでしようか。私は奇ク小説で『花と蛇』が好きです。いいですねえ！しかし現実には、あの様な事は不可能です。しかしお芝居なら実現出来ます。私はよく商売で奈良―生駒の裏山を車で走り廻りますが、『花と蛇』の小説にピッタリの売地『小さいが家付き』を見つけました。私にはとても手におえない売値ですが、少し経済力のある方ならお買いになれます。竹やぶに囲まれた静かな清流のそばにあり、三方山に囲まれ他に人家はなく深閑とした美しい所です。大阪から四十分もあれば行けます。この様な所でS男性及びM女性の方々と『花と蛇』そっくりなプレイが出来ればどんなに楽しい事だろうと夢見て居ます。奇クモデルの方では、東浦ひかる様、絹川文代様、梨花悠紀子様のご三方がとくに好きです。一度でいいからお会いしたい。DPEも自分で出来ますので、写真を引き伸して、ご三方の縄に悶えるお姿を全力をふるい描いて見たいと思います。夢でしようが。S男性、M趣味の女性の方々短い人生を有意義に自分の趣味を生かし楽しく

楽しく過ごそうではありませんか何も恥かしい事はないと思います。人間多かれ少なかれ色々な趣味を持って居ります。人様に迷惑を掛ける事なく私たち同志で私たちの人生を謳歌しようじゅありませんか。申し遅れましたが、私は三十六才、毎日自宅にて一人で絵を書く仕事に従事して居ます。妻も私の趣味には理解を持って居てくれます。S男性及びM女性の方々、友達になって下さい。(大阪・川野竹雄)

新しい歳が明け、何もかもが新しい気分になった様な気がするのでした。そこで私は思いきって通信をしたためることにしました。私は小さいときから、女性の衣類に憧れたものです。と言いますのも、女ばかり三人の姉を持ち、末子として私一人が男だったからかも知れません。お祭りなんかで晴着を姉達に着ると私も駄々をこねて同じように着せてもらったものです。その頃から赤い色に異常な程とりつかれ、あちこちの物干に乾されている腰巻の赤と白の巧みに調和のとれた布を見るとぞくぞくと身体の血が騒いだものです。それでも中学、高校と学生時代は腰巻がほしくても買うのが恥しく、そうやって物干の腰巻を眺め、雑誌の中から赤い色彩の腰巻を見るのが精一杯でした。それもやっとサラリーマンになって自由になると、思いきって真赤な腰巻を二、三枚買いました。そして少し宛買い増しピンク、空色、ローズ色、緋ぢりめんの腰巻と、実に八十枚以上になりました。ネル地の真赤な腰巻あり、ピンクのネル地、緋ぢりめん、モス、ナイロンと柄物も沢山揃い又それと並行して長襦袢も燃える様な緋色のが三十枚程とピンク、柄物と五十枚程になりました。それを毎晩組み合せてはピッタリ身につけて、ふとんにもぐり込み、陶酔の境地にしたるのでした。ふとんの中でお尻や足や手に触れる女の下着の感触はたまりません。やがて、それだけでは物足りなくなつて、身につけたまま外出するスリルを味わうようになったのです。それも男物の衣服の下に、ズボンの中にまくり込んで外出したものです。が、どうもズボンの中にまくり込むとふくくて第一、歩きにくく、ぶかっこうです。それで専ら着物をつけへこ帯をして表面は男物の着物なのですが、その下は燃えるような

次号(五月号)は、三月二十五日に発売します。

長襦袢に真赤な腰巻を巻いていたのです。私の失敗談が一つあります。銭湯の男湯に行った時、しまったと思った時はもう遅く、例の女の下着を着ていたのです。それでもぬぐ時は巧みにかくし、それに客も少なくてよかったのですが湯から上って着る時に失敗しました。長襦袢と男物の着物を重ねて着て、赤いお腰を巧みに巻いている時、湯から上ってきた他の客が私のそばを通りすがりに肩と肩が当り、あっといふ間もなく男物の着物がずり落ちました。私もその客も目を見はりました。私のその時のかっこうだったら、実の女の人しぐさと変りなく、白地に裾とたもとを真赤にぼかし染めにした赤い花模様の長襦袢を着て、緋ぢりめんの大きな腰巻を両手で持ったのです。瞬間、私は真赤になり他の客も私を眺めてびっくりしていました。(新潟・弓みきお)

○ 貴社益々御隆盛の事お喜び申し上げます。小生従前より奇巧の愛読者ですが、今迄は古本屋より購入

して居りました。今回左の如き動機を記念して予約購入にしたいと存じますので、一月号より発送方御願ひ致します。動機と申しますのは、夫婦プレイの約束が実現しつつあるからです。元来小生SMプレイに強い関心があり、緊縛プレイ、答責め、尺八責め等実行した事も数回ありますが、常に妻以外の女性ばかりで、何とか妻の教育を致し度いものと考えて居りましたが、あいにく嫌悪の情以外何の反応も無く残念に思つて居りました。ところが昨年十一月のことですが、たまたま妻の知人の未亡人と通りで会つたのが縁で、その日に旅館で浮気した後三度計り会つた事が妻にばれてしまいました。くやしがる妻を見て、チャンスを利用したらと考え、お前の小便をウイスキーにまぜて彼女にのましたら気がすむだろうと云つたらはつきりとした反応がありました。これだと感じた小生は、自分の小便をグラスに1/3程いれ、ウイスキーの中に目の前で入れたのです。そして、お前も用意しろと申した処、始めは何だかだと恥しがって

居りましたが「ハチミツを加えたりしてかきまわして味を良くすれば決してわからないから、喜んで飲むのを見て腹の中で笑つてやればいいじゃないか」と云うと、決心してもって参りました。その夜は平常とちがつて熱くなり酒の味付けに二人の液も入れようと申しますと、それにも応じたのです。翌朝全裸写真(緊縛まで行きませんが)をとる時も協力し、恥かしがり顔こそかくす様にしましたが、写真もとらせました。後日、特製の酒を彼女にのました日は、大変なはしゃぎ様で誰彼と名を上げて飲ましてやるんだと氣負つて、その時の状況を報告しました。その後は、今迄良い顔をしなかつたことも心よく応じますし、今後は大いに期待可能な線が生じたのです。小生としましては逐次教育しあらゆるプレイ(縛り浣腸ばかりでなく乱交プレイ迄)に適応出来る様に仕上げ度いと存じますが良きアドバイスあれば、お教え給り度いと思ひます。(早く達成出来る様)今後経過報告等申し上げると共に写真等も同時に発送(現在現像のみで焼付けが出来て居りません)したいと存じます。(原稿として採用頂ければ幸いです)以

上乱筆で読みづらい点もあると思いますが、おゆるし下さい。末筆ながら貴誌の発展を心からお祈り致します。(浦和市・中野主弥)

○ 最近奇クサロン、読者通信にも肥満女性の記事が載らないがどうしたものでしょうか。かろうじて一月号に仙台の佐用千代子さんの記事があっただけです。街で見かける肥満女性は完全な他人でただ遠目で見るのみだが、こうして貴誌で拝読する女性は何故か近親感を持つことが出来ます。しかし如何にせん、仙台では……。写真では肥満女性は全然登場せず挿画は時々チャイ役でも出るから、その方でも期待して見ておられます。私はすっかりピンク映画の松井康子女史のファンになり最新作「みだれ髪」を見ましたが彼女が出るとシネスコ画面が70ミリ映画になる程のボリュームで特に入浴シーンはカラーで全裸全身を見られ肥満女性愛好家には十二分に満喫できる映画です。二月号のサロン楽我記で久し振りに登場の水野氏ご夫妻の記事。近々のカメラ・ハントに出る由、鶴首しておられます。願わくば写真を以前の切腹写真のように分譲して下さい幸いです。何故

なれば貴誌に登場するモデル諸嬢
数多い中でも水野夫人の一番の最
大のファンである私ですから…
(滋賀・赤畑修造)

毎月貴誌を興味深く読ませて戴
いております。小生は健全なMS
プレイならば許されて良いのでは
ないかと思つて居ります。しかし
乍ら現実問題としては障害があり
ます。特に女性に於ては羞恥心等
の為の中々実現困難です。この為貴
誌等を活用して未知の間がらに於
て金銭、人間関係に関係なくプレ
イのみを行ない後に何も残さねば
良いと思ひます。私はS女性との

格闘のプレイを望んでおります。
危険のない畳の上で腕力に自信あ
る女性と組合ひ相互にわざを掛け
合います。そしてすきを見て男の
足を払いひざを付いた所を仰向け
に倒し押え付け素早く馬乗りにな
り組敷きます。プロレス、柔道等
ではフオールで勝負は付きますが
格闘のプレイではこれからです。
下になった男性はなんとかがれ
様と必死で足をばたばたさせます
が胸の上にながしり馬乗りにな
がり押え付けている女性をはね返
す事は出来ません。そして「男のく
せに組敷かれてる気持はどう」
とかからかい乍らぎゅうぎゅう責め

付けます。S女性にとって男の上
に馬乗りになたがって征服してい
る気持は最高だと思ひます。こん
なプレイを御望みのS女性の方連
絡方法等を発表して下さい、小生
どこへでも組敷かれに参ります。
(東京・青木雄三郎)

初めてお便り差し上げます。御
誌は昨年夏から読むようになりま
したが、先日「女性モデル募集」
の文字が私の目に飛び込んでまい
りました。その時から、もし私が
モデルになられたら、という一種
のあこがれから私の胸はいっぱい
になってしまふのです。しかし、

私などとてもなれる筈がないと、
いつもその考えを打ち消しており
ました。私はテニスをやっている
せいか、足のつけ根からは色黒で
胴体が白く余り見よくありません。
身長一五三センチ体重四七キ
ロバストは余り公表したくないの
ですが、どちらかというと小さい
方です。いかがでしょうか、私を採
用していただけますでしょうか。
私を検査して下さい。でも結構で
す。私を見てすぐ断られると思ひ
ますが、それでも仕方ございませ
んから、お返事だけでも下さるよ
う、お待ち申しております。
(静岡県三島市・峰崎ゆき子)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通

り在庫しておりますが、39年に発
行のものについては在庫の僅少な
ものもありますから、お早い目に
御注文願ひます。

○従来、雑誌の送料は当社にて負
担しておりましたが、今後は三カ
月以上予約注文文以外（既刊号は
含まず）は一部につき送料二〇円
の御負担を願ひます。多数一括し
てお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和38年12月号	(送共二七〇円)
昭和39年3月号	(送共二七〇円)
昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)

昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)
昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)

昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金五千円分以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

☆編集後記☆

○原稿締切日が過ぎ印刷所へ今月の原稿はこれ迄と返事してから、中宮栄氏の「夜の徒然草」が到着した。全部を掲載する誌面はないが、せめて半分でもと、読者通信欄を削減して応急挿入することにした。

○山本一章氏のカメラ・ルポは嘗て本誌にも紹介された魔子を始めてフォト化された。辻村氏のカメラ・ハントと共にSファン待望の好読物として珍重されることと思う。

○斎藤夜居氏の「稿談性風俗資料入門」は重量感のある文献物として味読されたい。

○中河恵子さんが先月号に引続いて「初縛られの記」を寄せられた。ペンの方は益々調子づいて快調とのことなので、その麗姿と共に

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでも自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのまとめで下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

誌上を賑わしてくれよう。

○河津安春氏の「国際秘密結社ISSSL」はオーソドックスなM人士には必ずやその琴線に触れるものがあると信ずる。黒淵賀集子夫人の「妖霊城」は今月を以て完結。繁忙な中の時間をさいての労作に感謝したい。

○今月号では立川令子さんの「浣腸実験要員誕生」と秋根登志雄氏の「浣腸随想狭き門」の二つの浣腸読物を掲載した。これからは時を見てこの種の稿も発表したいと考える。

○足フエチとして比左良守氏の「美しき足を求めて」を久方ぶりに載せた。千草忠夫氏の「縄のある蜜月」△初夜▽は愈々佳境に入ってきた感である。「痴人の糧」「花と蛇」「心傷たむ遍歴」などの連載、シリーズ物も、こへ来て更に充実したことは嬉しい。

☆本誌御購読の採☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

四月号 〔第二十一巻第四号〕
〔通刊第二二六号〕

昭和四十二年三月二十日 印刷
昭和四十二年四月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三十二年四月二〇日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りません。誠に勝手ですが、お願ひ申し上げます。